

11
522

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始



11-522

8x7

石井泰次郎著

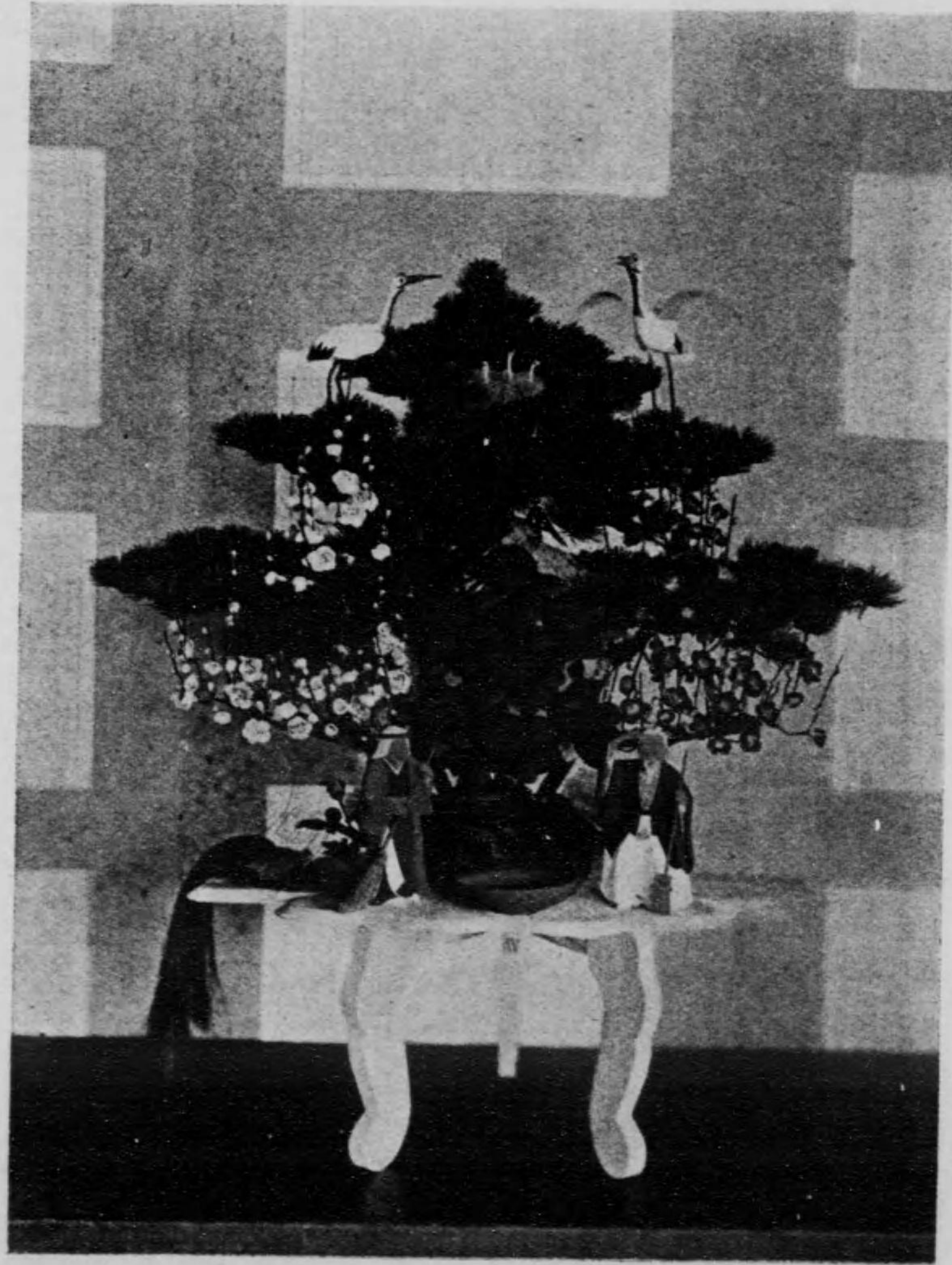


小笠原流折紙の結び方

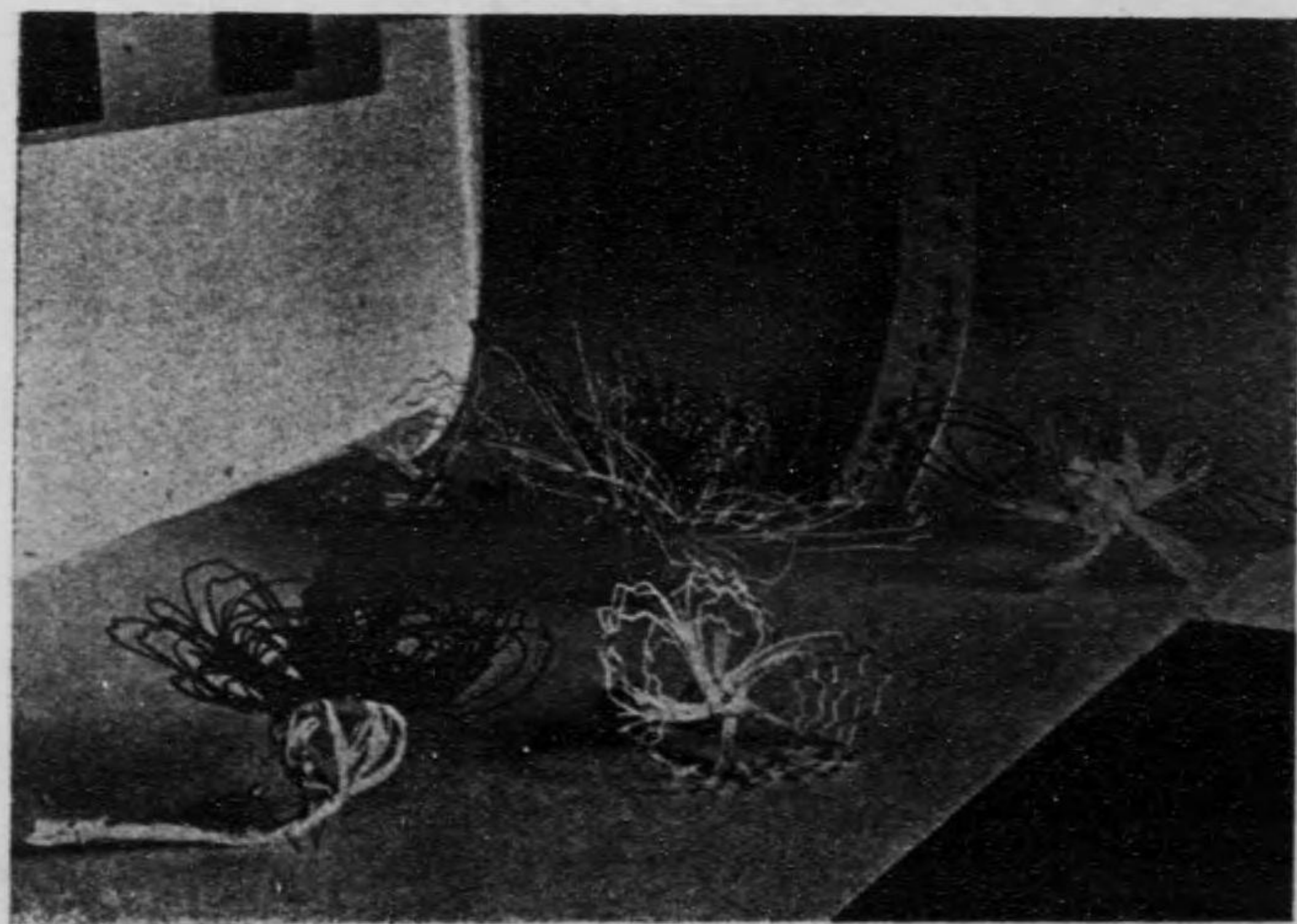
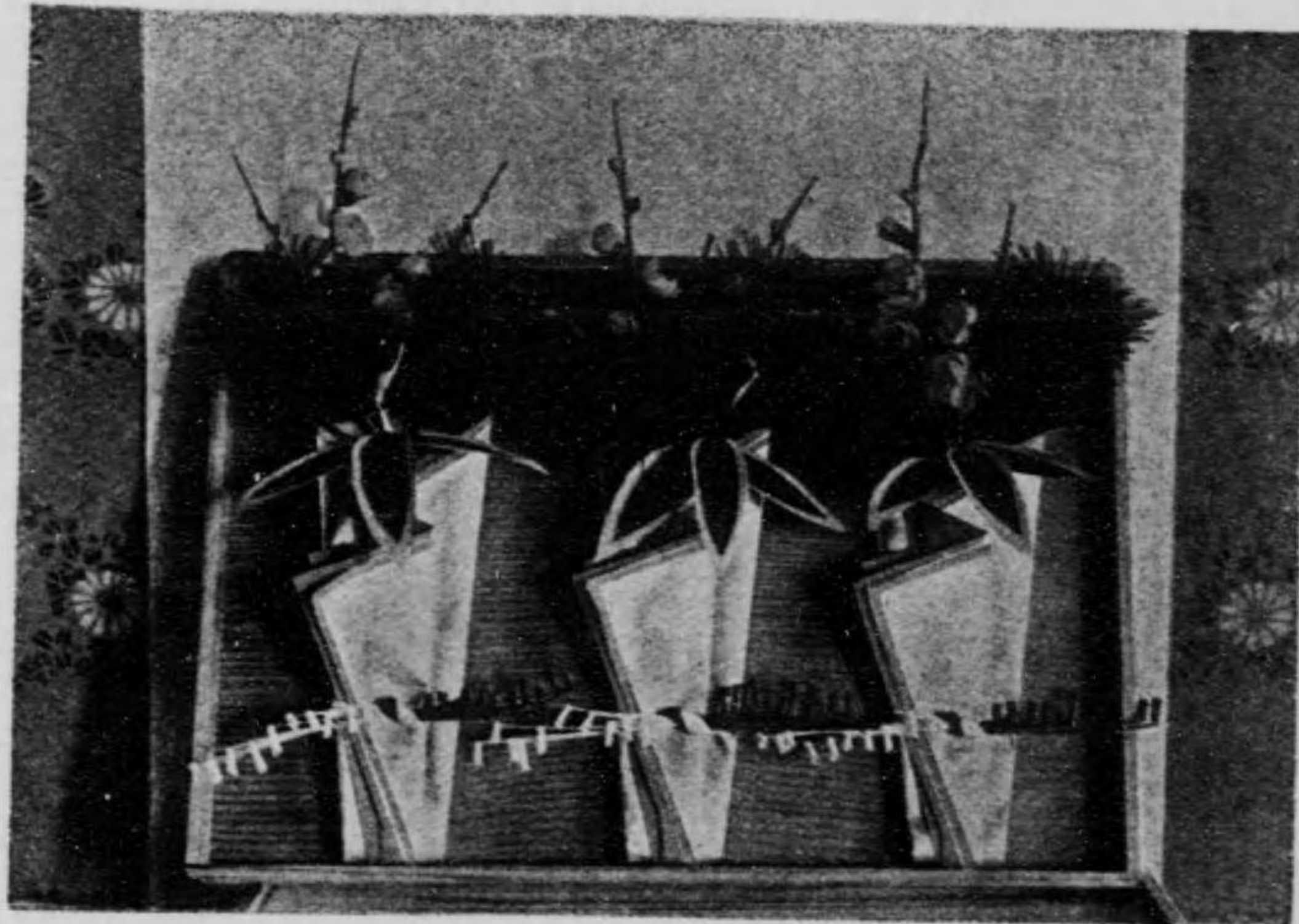
大正
10 11.30
内交

東京 和風會出版部刊

臺嶋の用し直色式禮婚



使勅御下殿子太皇(下陸兩)日之儀婚御下殿宮陽賀
進調謹郎次泰井石 飾つび折御之應饗御



丹壯 子撫 橋 月五 内之月々二十結引水作新者著

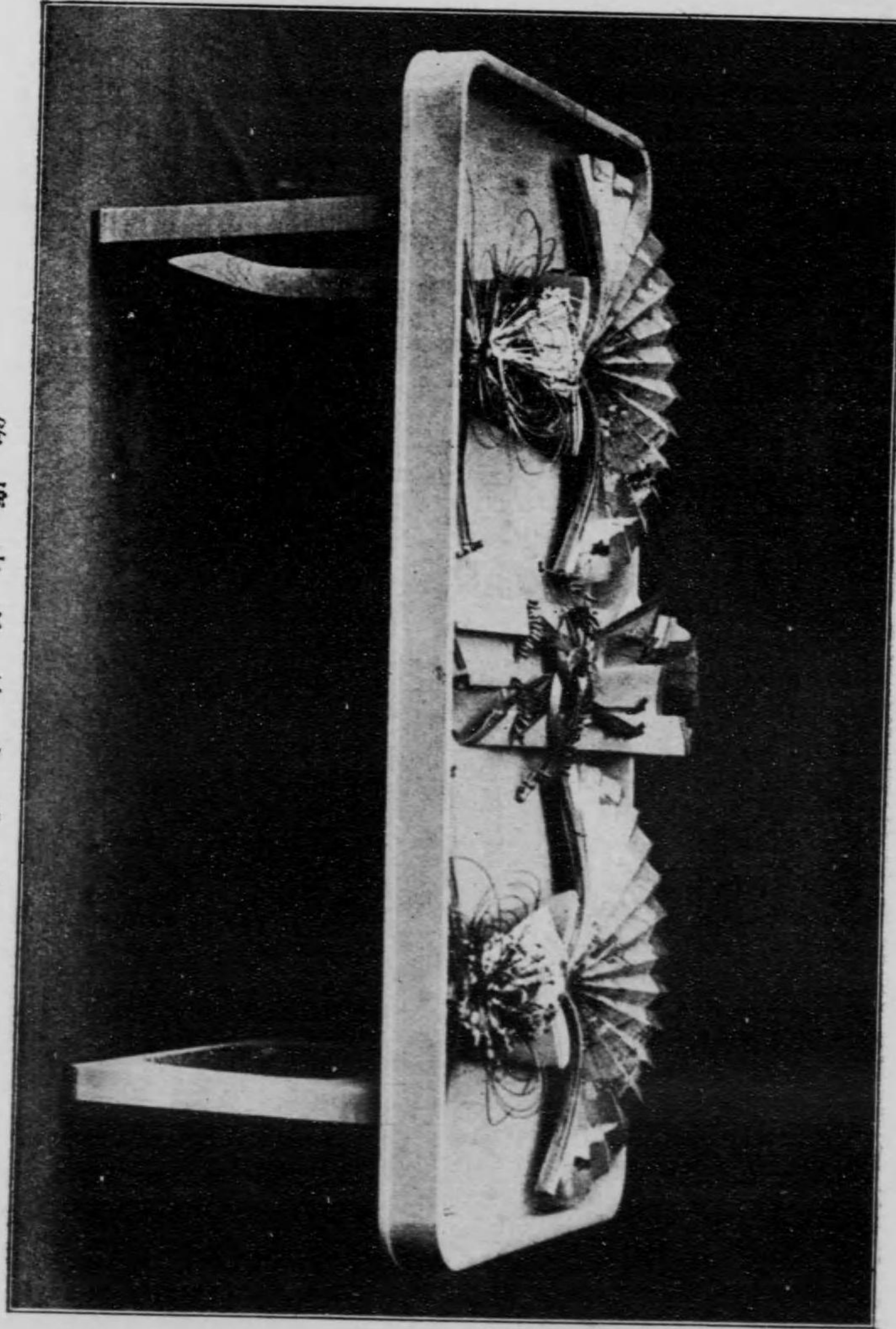


著者最近の小照



折紙水引結製作場の一部





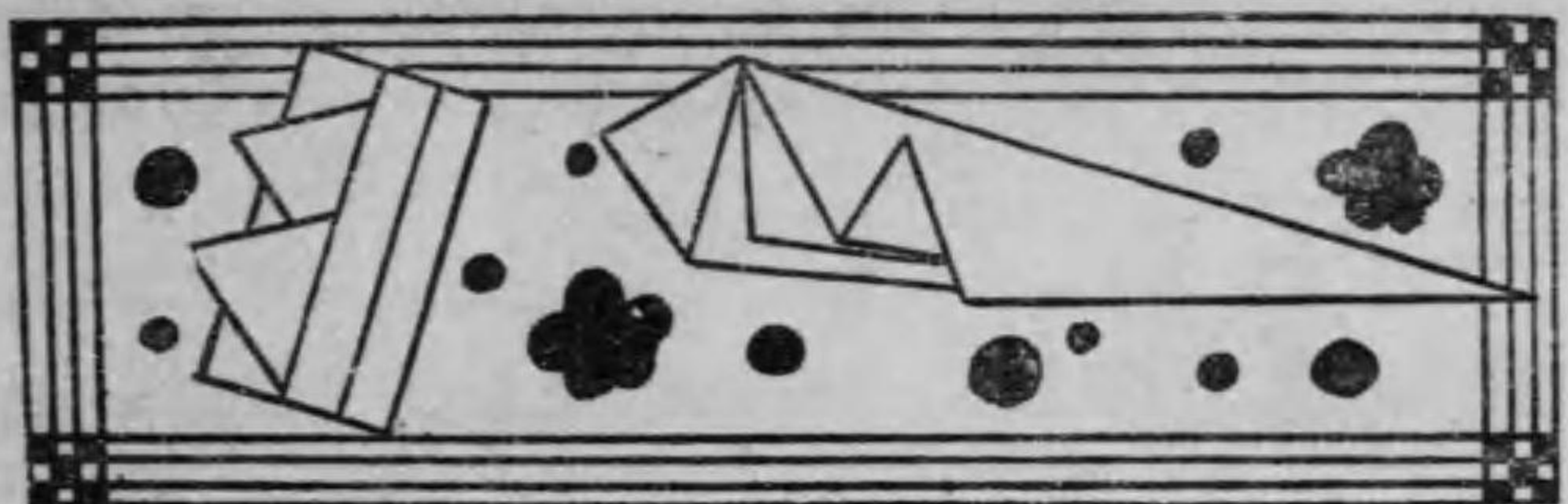
飾廣末納結式禮婚





自序

綾にしきにつゝみ、絹布にてつゝみたるを「平つゝみ」といふを。近代風俗にはじま
れる『風呂敷包』といふ、最も賤しげなる習慣の、世にひろまりて。正しく貴とげな
るひらつゝみの本名を知らぬ様になりゆきぬ。色々の紙に物を裹む作法は。平裹の作
法と同じく。古代より傳はりこしものなり。其傳はれる物の様をまなびて、近古近世
にわたりて、數々の包方は出来にけり。而して其學び作れる者の心々に。或は平裹紙
裹の古義を失なはぬものを折いで。或は同じ古儀を本としながら今様になづみたる物
を折いだせるなどあり。然れども明治大正のあひだに『風呂敷包』めける折方を其所
彼所より作りいだせるごとき。全く平裹紙裹の古義を知らぬ者のいたづらごとは。以
前にはなかりし様なり。また其紙包折形を販賣品としたる三百餘年前の城殿(京都)よ
り。近く寛延頃の武藤久松軒(京都)文政頃の仙鶴堂一徳(江戸)の輩の製作にかゝる折
形にても。祝儀用はさらなり。雅遊の手すすみの物も面白くめづらしく折なしたりし



なり。今こゝに著す折形は、近世の物の中に於いて能く古今の實用にかなへる『小笠原流折形』を本とし。其現代に用なきをはぶき。又用ありて足らざる物を加へ。初めて使用上の分類を試みたるものなり。但し此書掲載のほか、なほ諸祝儀用折形あれど水引結の花々しき花結の色々と共に數多くして、一所にはのせがたければ、別にとてやみぬ。讀見る人々其心して折形も水引結も、其品の少なきを笑ふことなかれ。

折かたのなかにつゝめる。まごころを

めでたまひてよ。千よろづのかみ

大正十年五月三日

(賀陽宮殿下（九條家姫君）御婚儀の御祝膳に『折敷高坏三本』『京雜三献』『衝重二本肴物』と申上る宮中式御料理の御饗膳を奉仕したる日の夜校正を了りぬ)

宮中式 禮式。料理講師 石井泰次郎

凡例

- 一 實地應用の折形こしらへ様を、著者が『大日本禮節學會』にて教授せる仕様の『宮中式折形。四條流料理用折形。伊勢流折形。小笠原流折形』内、最初に教授の小笠原流折形を分類筆記したる書籍の一なり。
- 一 折形拵へ様にも奥傳あり、此書は其仕様の入學より奥傳までを合せて記載したり。殊に其傳授の正統なるを以て他に其真似を許さざるなり。
- 一 實物折形は、實物結方と並びに教授するものなり。實物結形秘傳は。裝飾風流水引結と續きて習ふべきの學科なり、是等の秘傳書は別に著述すればとて此書に載せず。

著者 識





折形の『傳書』と『草稿』と『雜傳』

○中古近世禁中御用龜足紙立の圖○近世幕府五節供用折形の圖○同銚子飾形紙○御膳所龜足の形○朝鮮信使客館用銚子飾裁形の板○元祿年間折形○文化以來明治迄折形の形紙と雛形○文政天保小笠原流瓶子銚子折形○松岡氏傳折形の書○同折形目錄○同折形聞書○伊勢家包の記○四條流龜足紙立の圖○同流折形の圖以上家傳書
 ○龜足紙立集○銚子蝶の種類○古畫包物の圖○包物雛形雜記○新製包物雛形○伸匏包の記○小笠原流折形雛形明細圖以上著者草稿
 △吉良流折方之書△同雛形△女訓書類所載小笠原流折形圖△蝶形付樣圖式△雅遊教草△千羽鶴折形△翁草所載手遊折形△手遊折形以上世圖所傳

奧傳 小笠原流折形と水引の結び方 目次

本書を著はすに就て.....一

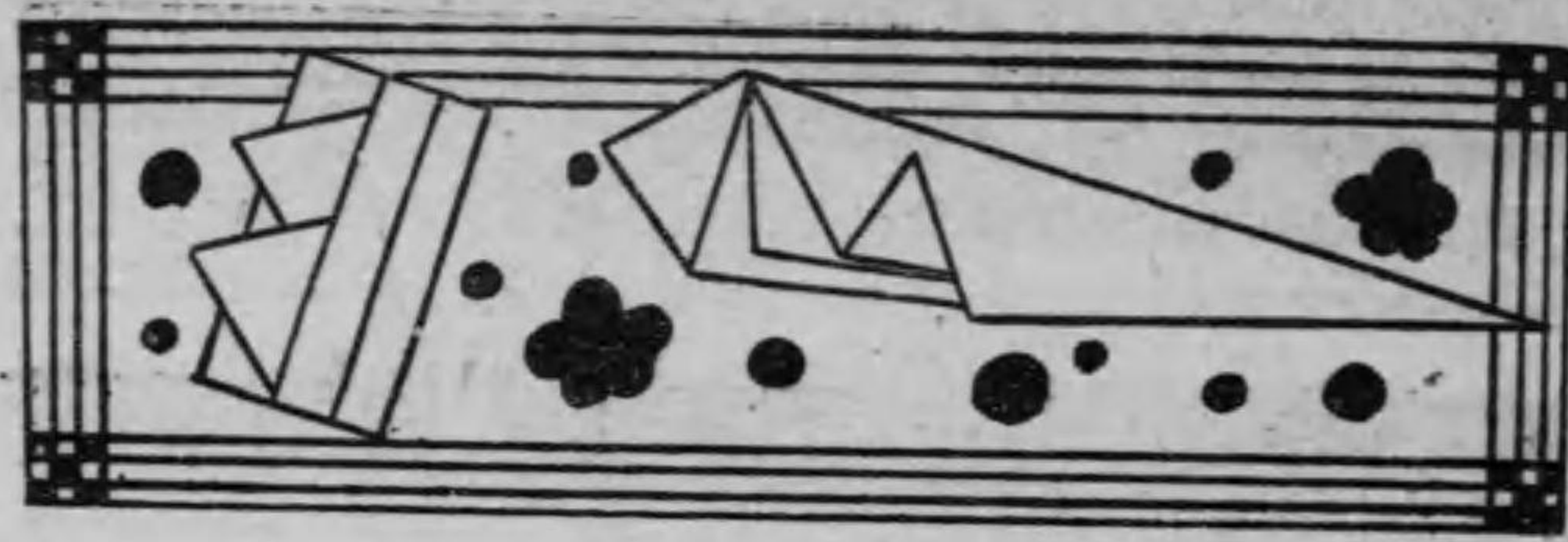
第一卷『折順』上中下

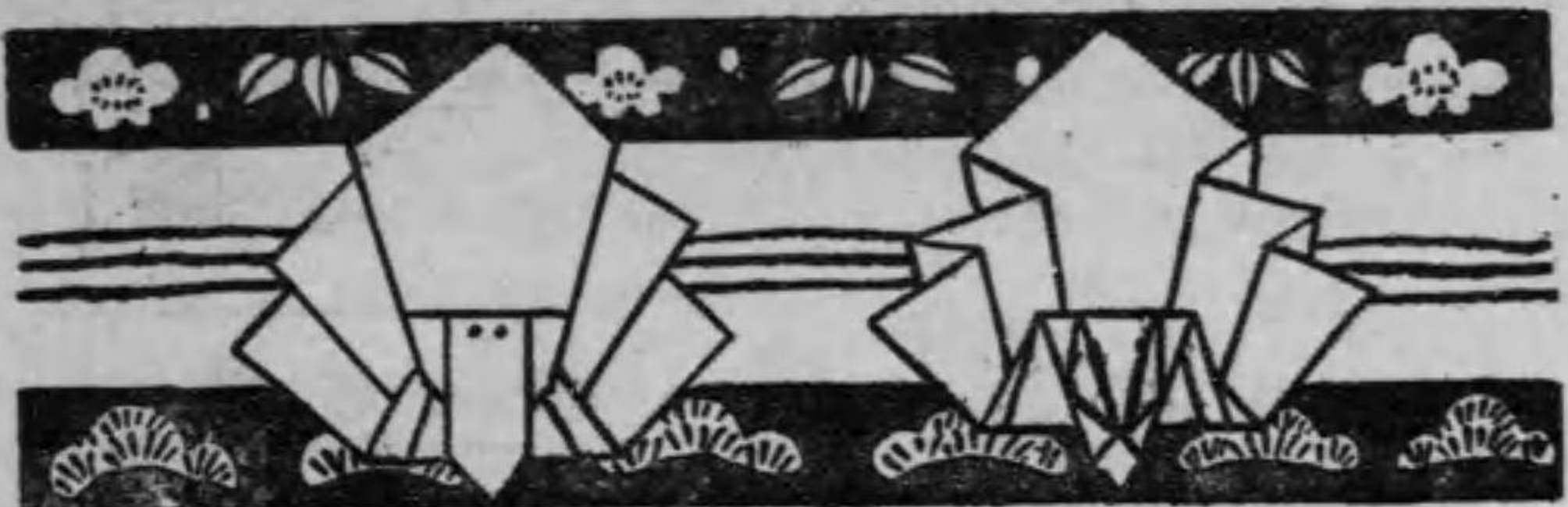
折形原料の寸法紙の圖解.....三
 實物折形の型紙折樣圖解.....一二
 實物かさね紙折上の圖解.....二〇

第二卷「文書」類折形圖解 十四種.....三一

硯包 筆墨包 料紙包 卷紙包 文筒包 懷紙願書包 色
 紙包甲 同乙 同丙 短冊包甲 同乙 同丙 水引包
 錐小刀包

目次





目次

二

第三卷「衣服」類折形圖解 二十種……………五八

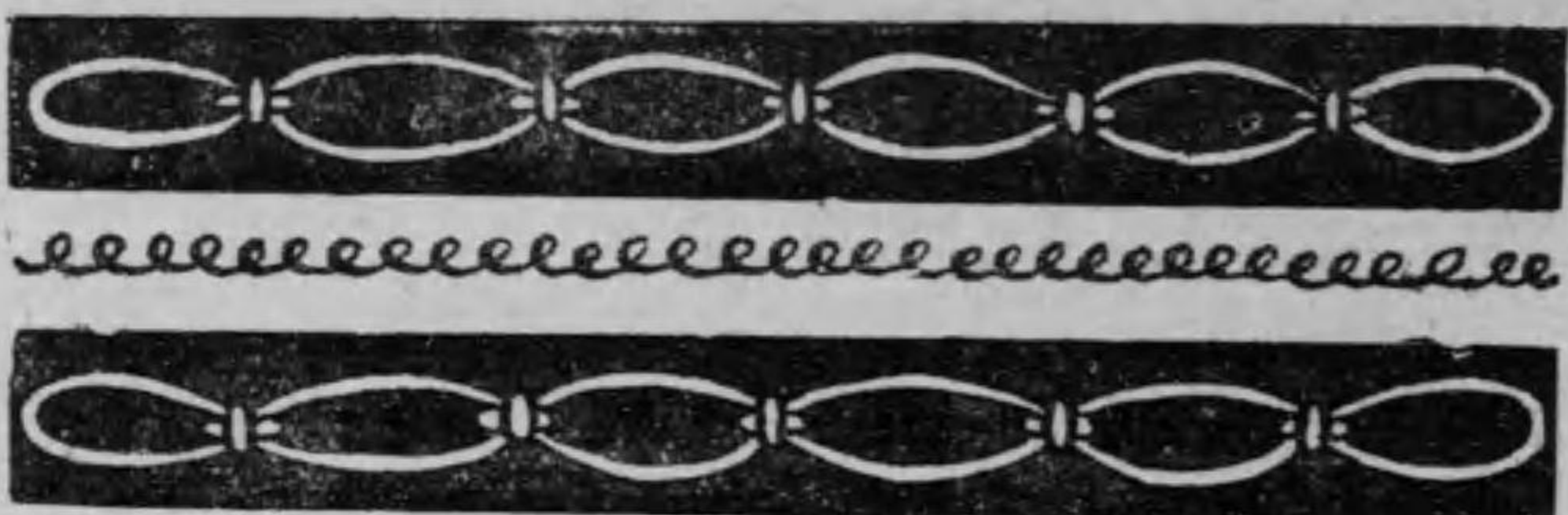
- 錦綾絹布包 甲 同乙 同丙 同卷物包 甲 同乙 綿包 染
- 小袖包 帶包(甲) 同(乙) 同(丙) 同(丁) 同(戊) 革類織
- 物切類包 括緒紐類包 被衣頭巾綿帽子包 手袋包 足袋上草
- 履包 鼻紙包 紙入包 楊枝指煙草入包

第四卷「歳事」用類折形圖解 八種……………九二

- かやかちぐり包 くしがき包 羽子板羽子包(甲) 同(乙) 紙び
- いな包 桃花包 蓬蒿蒲包 菊花包

第五卷「花粧」類用折形圖解 三十二種……………一〇八

- かみ包 おしろい包 水おしろい。煉おしろい包 紙おしろい
- 包 花粧水包 おしろい刷毛包(甲) 同(乙) 美顔用具包(甲乙)
- 口紅包 紅筆包 洗粉石鹼包 香油香水包 櫛包(甲) 同(乙)



- 拂紙大、小 髮文字包(甲) 同(乙) 水入包 元結包 組紐、絹
- 紐包 齒黒渡金包 滝子包 かねぶで包 くしはさみ包 髮
- そり包 毛ぬき包 薫物包 匂袋包(甲) 同(乙) 花粧品包(甲)
- 同(乙)

第六卷「粉、薬味」類折形圖解 十二種……………一六二

- 大豆粉包 小豆粉包 ごましほ包(甲) 同(乙) 砂糖包 粉山
- 椒包 胡椒粉包 蕃椒粉包
- △俗用きなこ並ごましほ包(甲) 同(乙) 同(丙) 同(丁)

第七卷「音楽」類折形圖解 四種……………一九五

- 歌舞音曲本包 舞扇包 琴柱琴系爪包 三味線撥駒絲包

第八卷「香茶花」類折形圖解 八種……………二〇二

- 香包(甲) 同(乙) 同(丙) 茶杓茶匙包 服紗茶巾手巾包

三



目次

木の花包(甲) 同(乙) 草の花包

四

第九卷 「雑用」類折形圖解 十四種……………二一八

萬葉包(長きもの) 同(短きもの) 通用貨幣包(甲) 同(乙) 同(丙) 扇

子包 箸包 酒盞包 手遊包(甲) 同(乙)

神前御供米包 丸薬、散薬、煉薬包 昆布包 掛字、掛繪包 は

さみ包

第十卷 「伸あはび包」折形圖解 九種……………二四五

長鮑つゝみ ○眞の形最上 △同上 上 △同上 上 ○行の形中上

△同(中) △同(中) ○草の形下上 △同(中) △同(下) △同(下) ○古

傳のし鮑の圖説

第十一卷 「婚禮式」折形圖解 十二種……………二六二

○結納伸鮑包 ○鯨尺包 ○樽飾女蝶男蝶(二) ○末廣包 ○長

伸鮑包 ○銚子女蝶男蝶(二) ○瓶子女蝶男蝶(二) ○同口包花形

○三方用蝶紙立

以上 折形圖解 總計壹百參拾參種

「附録」水引結びの秘傳

○もろわな結、むすびやう圖解……………二九六

○こまむすび、むすびやう圖解 △むすびどめ△むすびきり……………三〇四

○水引巻き様 △老の浪△水玉△水走り 圖解……………三〇八

○あはび結の說明……………三一〇

○はうじゆ結、むすびやう說明、圖解 △水引巻上げ用具の圖……………三一〇

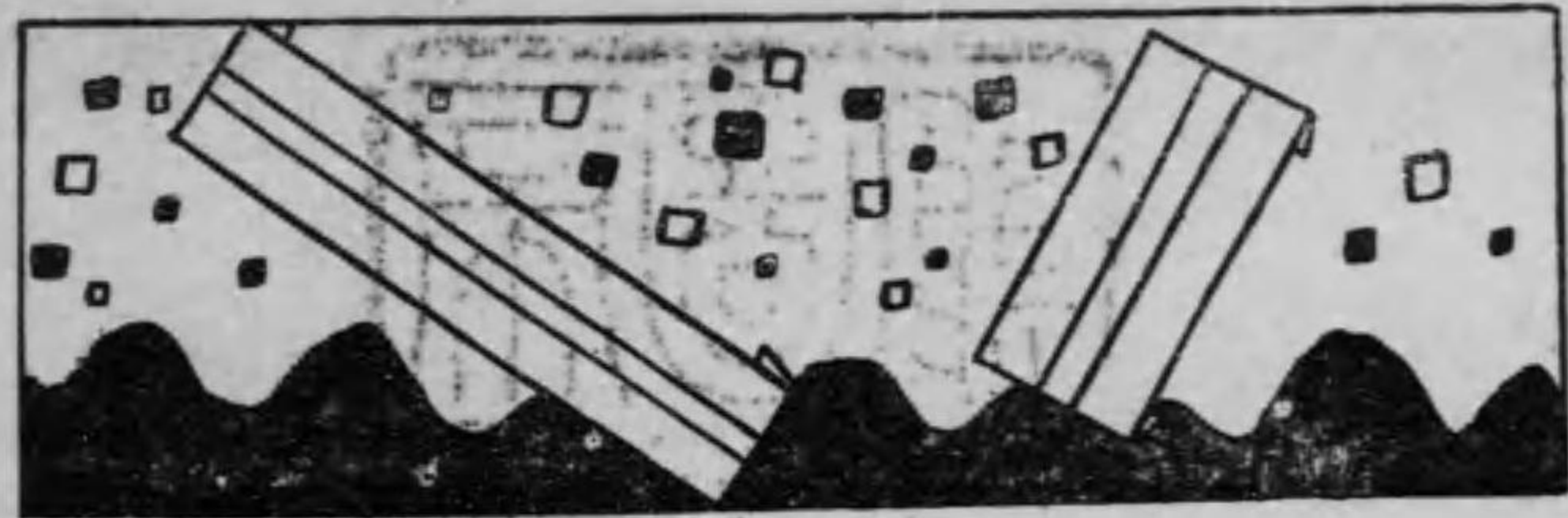
○うめむすび、むすびやう說明、圖解……………三二八

目次終

目次

五





『著者の折形についての傳統』

宮中式傳統

高橋宗恒 — 高橋親宗 — 高橋宗直

宮中御料理之家

臣民式傳統

伊勢貞丈

伊勢流

近古禮節師範家伊勢家之孫

水島之成

小笠原流

近世小笠原流諸禮指南之祖

伊藤甚右衛門

右門人

松岡辰方

松岡行義

松岡明義

同門人

大谷小仲太
有住 齋

石井治兵衛

四條流料理師範家九代目
宮中式臣民式。禮節と料理。繼承傳統

石井泰次郎

奥儀 圖解 小笠原流折形と

水引の結び方

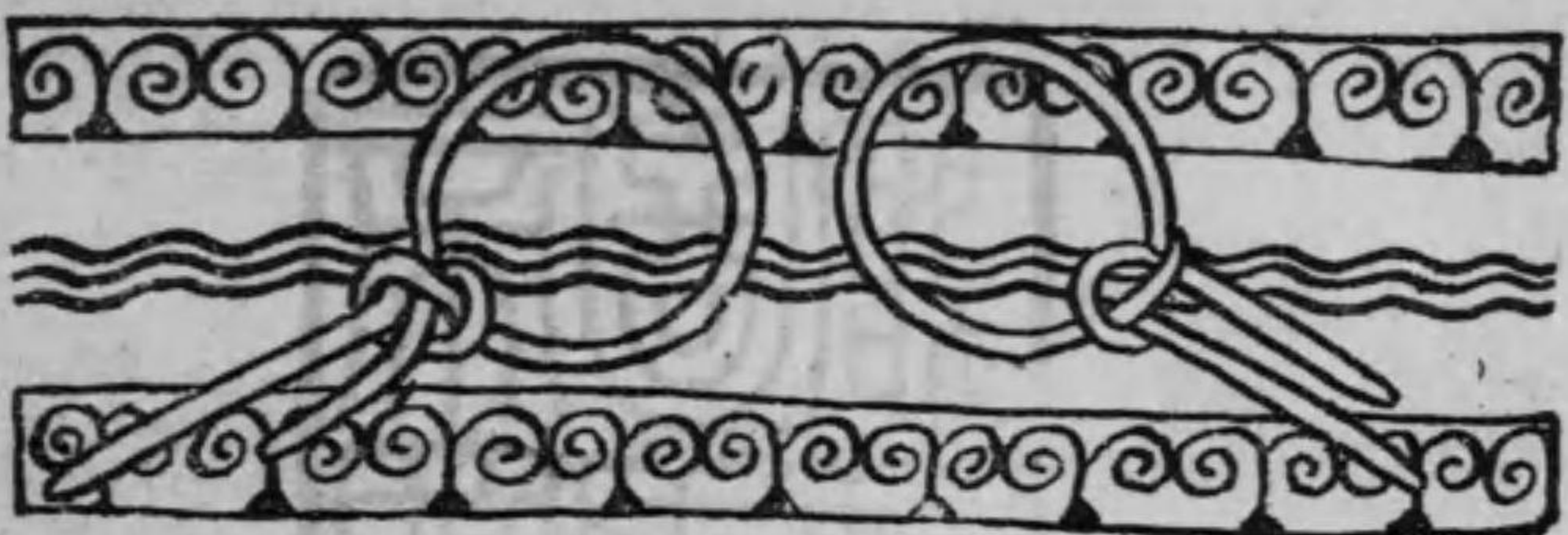
石井泰次郎著

本書を著はすに就て

禮節の教授法に附たる、一の學科として傳來せる折方の事は、其習ふ者の手順、能く其手本の寸法に合はすべく折習へども、多くは極めて少しなれど、異りて同じからず。又教ふる者の手本にも、其傳へ正しからぬが多し。

先年『包物標本教授法』を著してより以來、全國に其真似事する者、數多の折方標本を製作販賣するを見るに到れり。然れども其全部とも正しき物なく、百餘種の物を調査せしに、僅に二三種の折方らしき物の交れるを見、又他に百餘種の物の悉皆折方らし

本書著はすに就て



小笠原流折形

二

き物なき一包をも見し事あり。或は二百種、或は三百種、是を分類すれば、小笠原流古傳に似たる物、吉良曾我の一部分なり。而して吉良流或は曾我流の名稱を冠せす或は折方の種類によらず、何も「のし」と思ひなせるにや「何々のし折様」など、他の包方を指して「のし」となし「のし鮑を包む折方」と「他の品物包む折方」との差別もなく、「のし」と云へば「包方、折方」の名稱の如く誤りてにや何々を包むのしの折方なども有りし様なり。

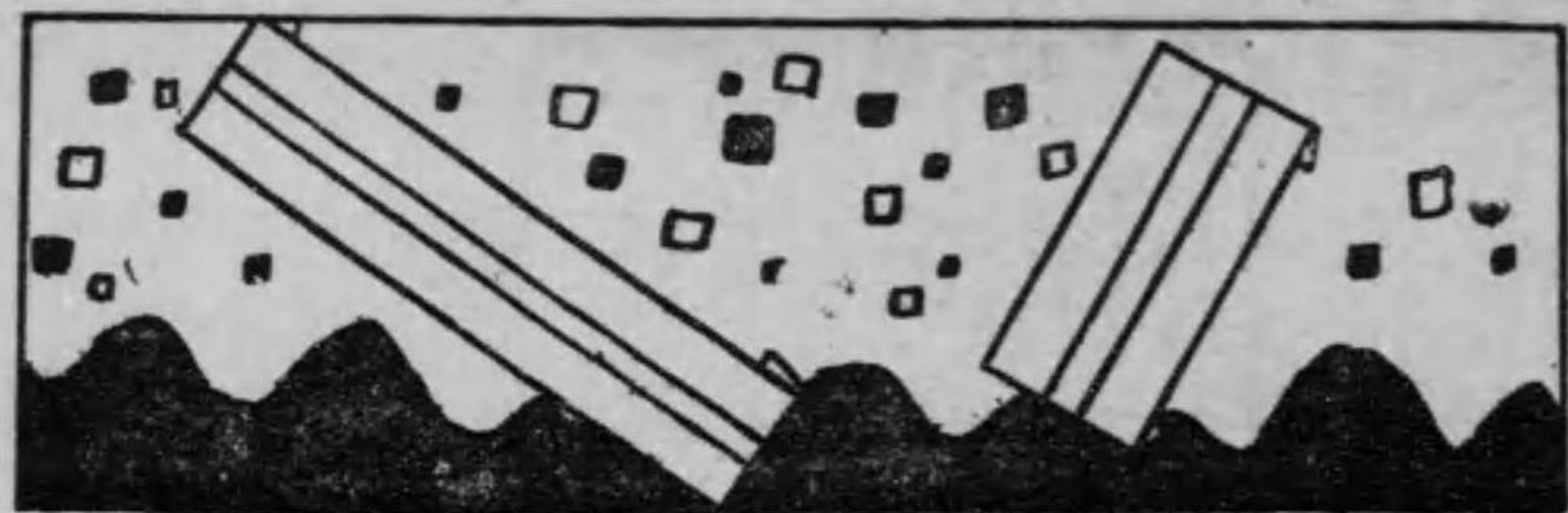
扱右様なる誤りをもて、人に教ふる者を、世間あやまりて禮法の教師とし、四條流、伊勢流、小笠原流等の家元と稱する、不思議なる者をも同じく禮儀作法の教師としたるを明治の初年より大正の今日にかけて、全國到る處に見聞するは、誠に時世の然らしむる所にして、教ふる者の罪にあらず、習ふ者のあしきにも非ず、只其教授上の基礎と爲べき柱石を失ひたりしに由れるのみ、著者は其柱石たるべき良師の出現して、基礎の傾きたるを直すの時期を待つ事久し、然るに未だ其人を得ず、爰に於て自ら進みて其責に當るの止なきに到れり。即ち古今小笠原流の奥傳として傳ふる所の「實物折方秘傳」を著すものなり。

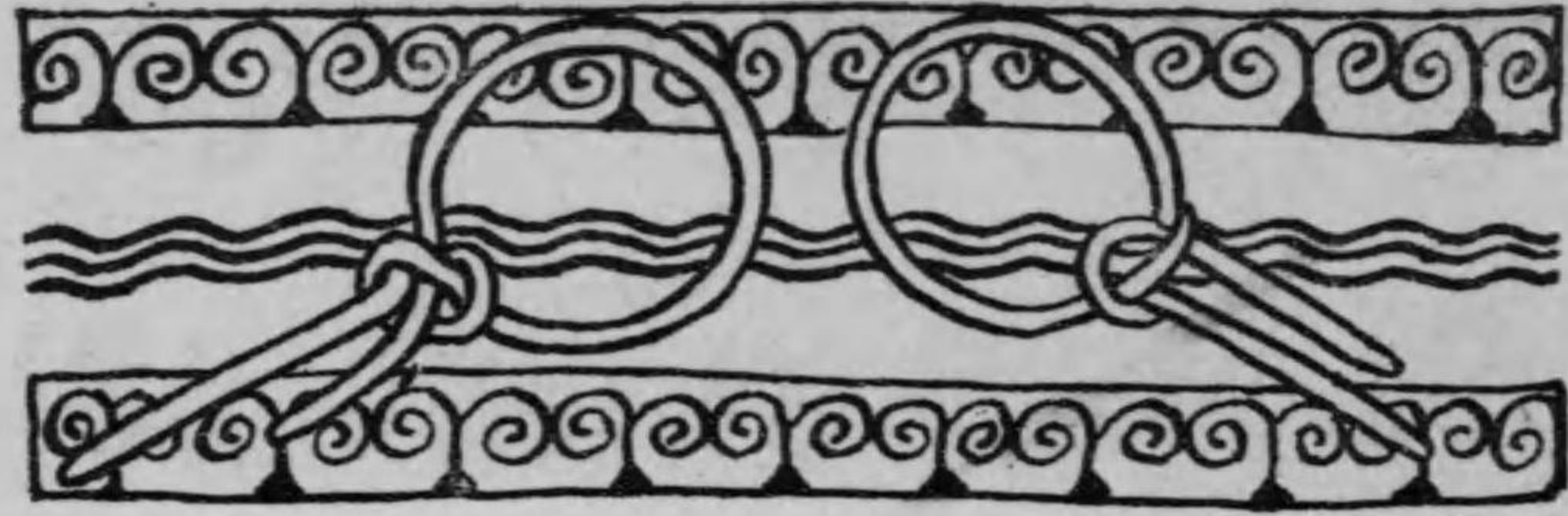
第一卷 折 順

上 折形原料の寸法紙の圖解

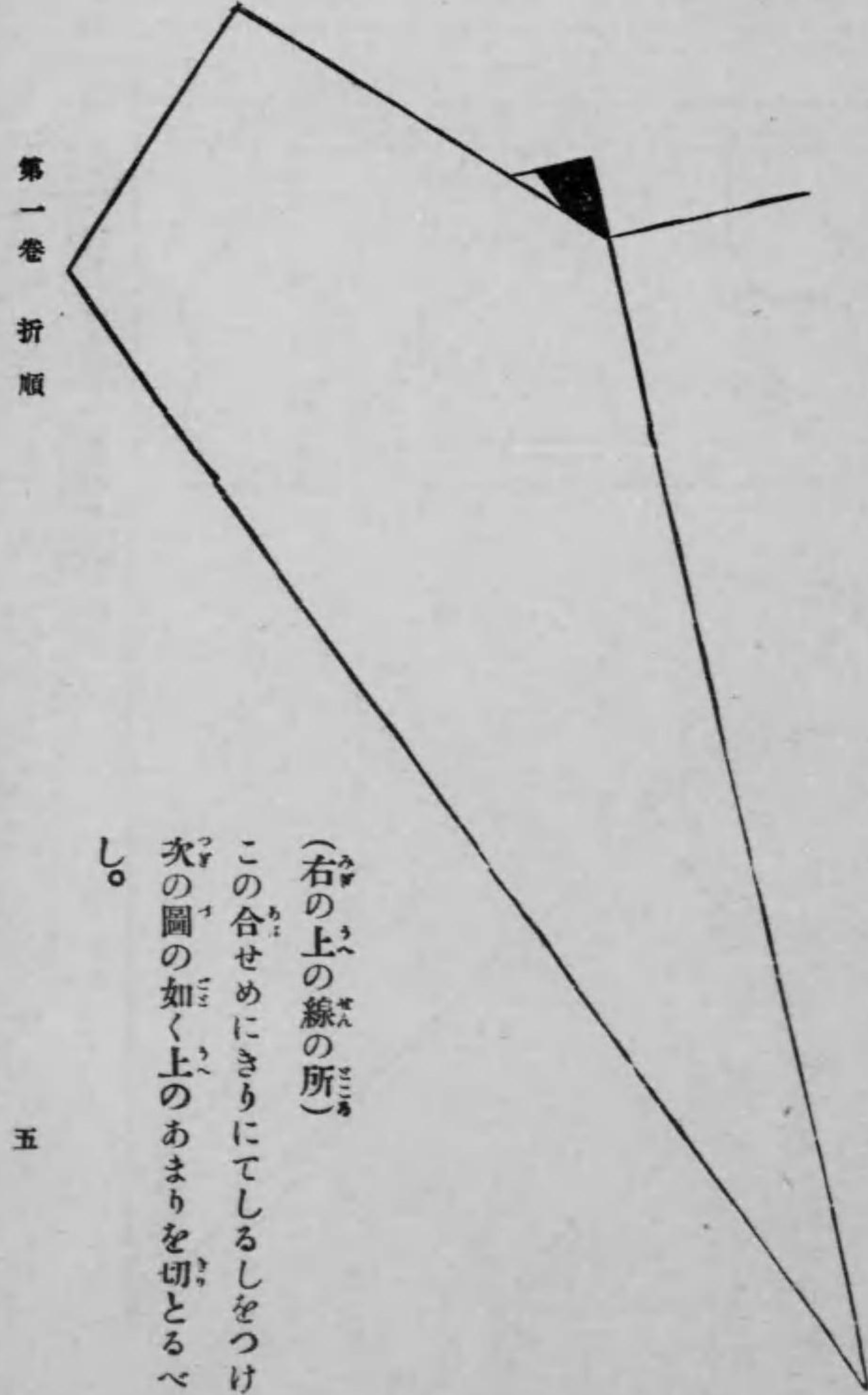
すべての折方に紙の寸法の大中小あるは、其包むもの、ほど〜につけて、おほきくもちひさくも、しながらよろしく見ゆるやうに、たけ長きには長く、短きにはみじかく、方なるにはかど〜しく、圓なるにはやはらかに、つゝみなすべき爲なり、そが大中小にしたがひて、方形（何寸四方といふこと）長方形（長一尺一寸三分幅八寸といふわり合の如き）紙のまゝの寸法、長方形の長さのつまりたる寸法などこの四種のほかにもあれど、おほかたは此しなく〜にて折なすこととなりたり。

抑も寸法紙と云は、古傳に「裏曲の法」と云て、折方傳授の奥傳なるを、今其名を改めて寸法紙と稱するは、他の方法の紙取と、用紙原形の物と、此長方形の紙取との三種の用法を示すべき方便の爲なり。

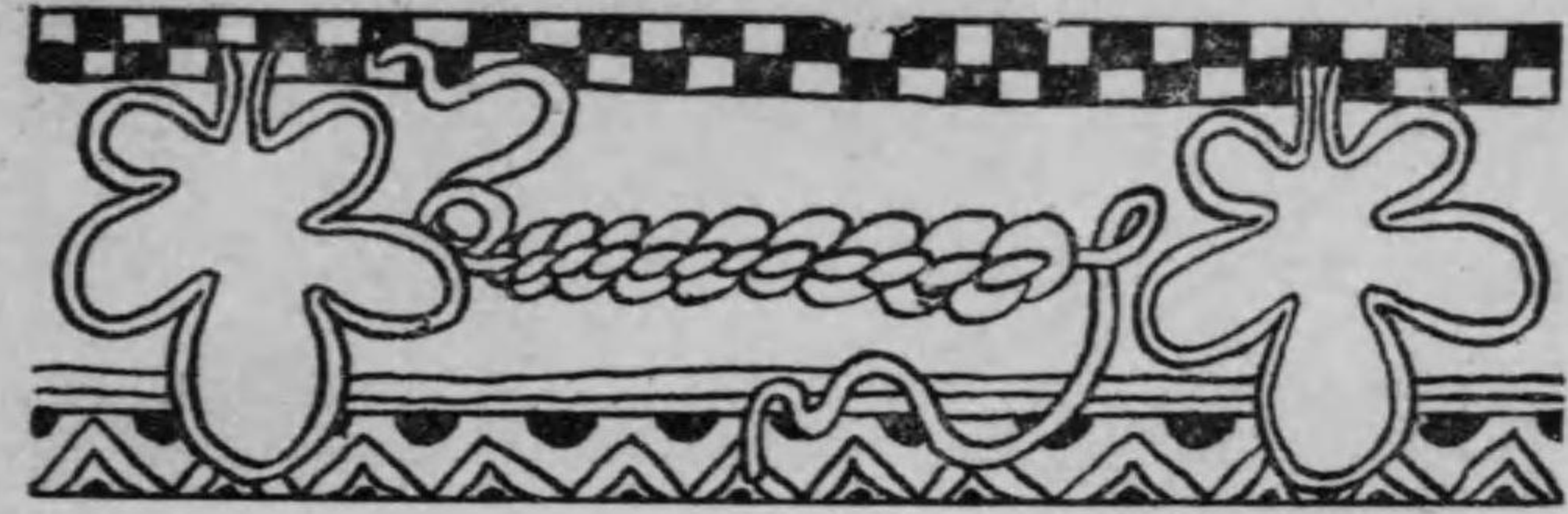




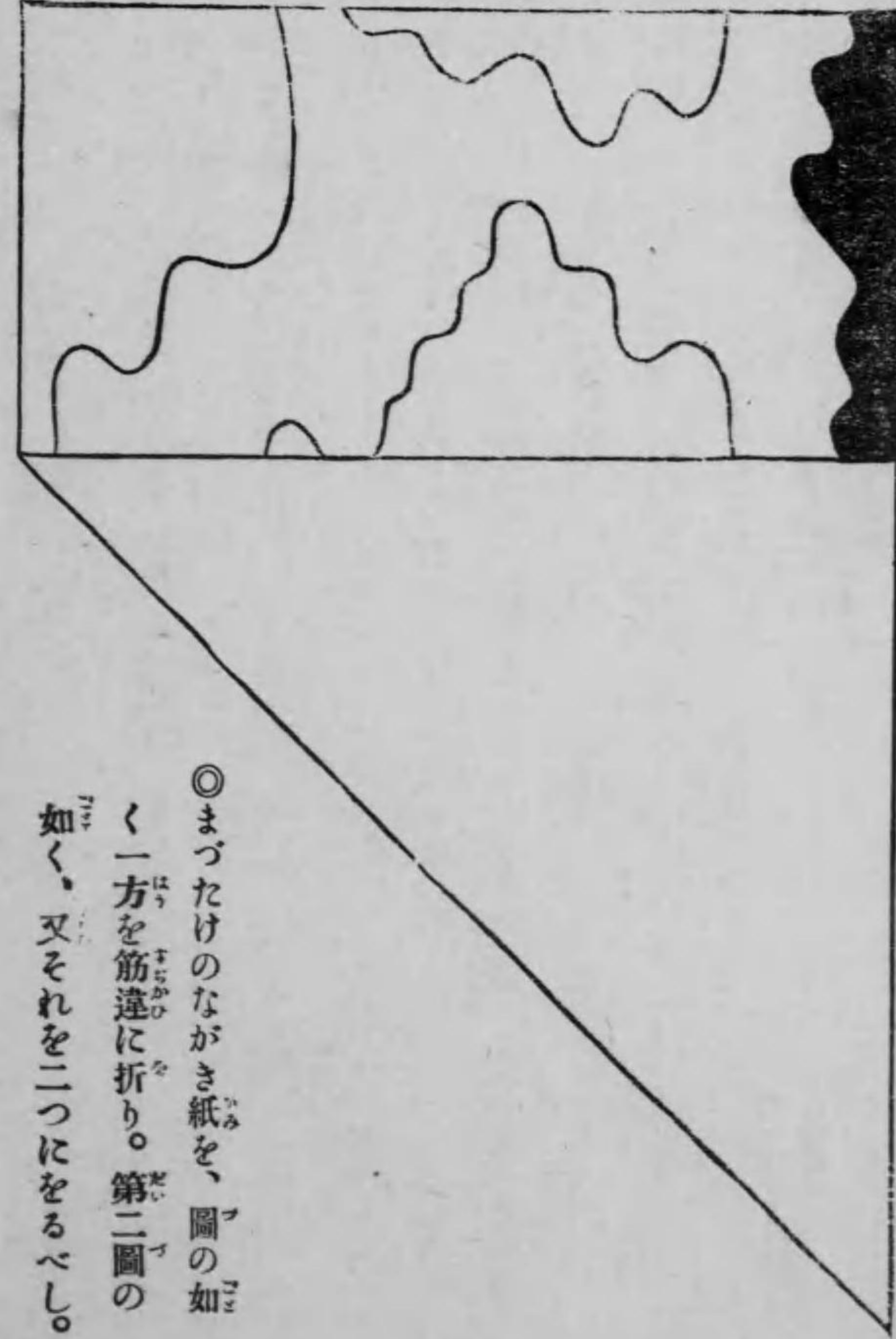
第二圖 寸法紙とりやう (其二)



(右の上の線の所)
この合せめにきりにてしるしをつけ
次の圖の如く上のあまりを切とるべし。



第一圖 寸法紙とやりと (其一)

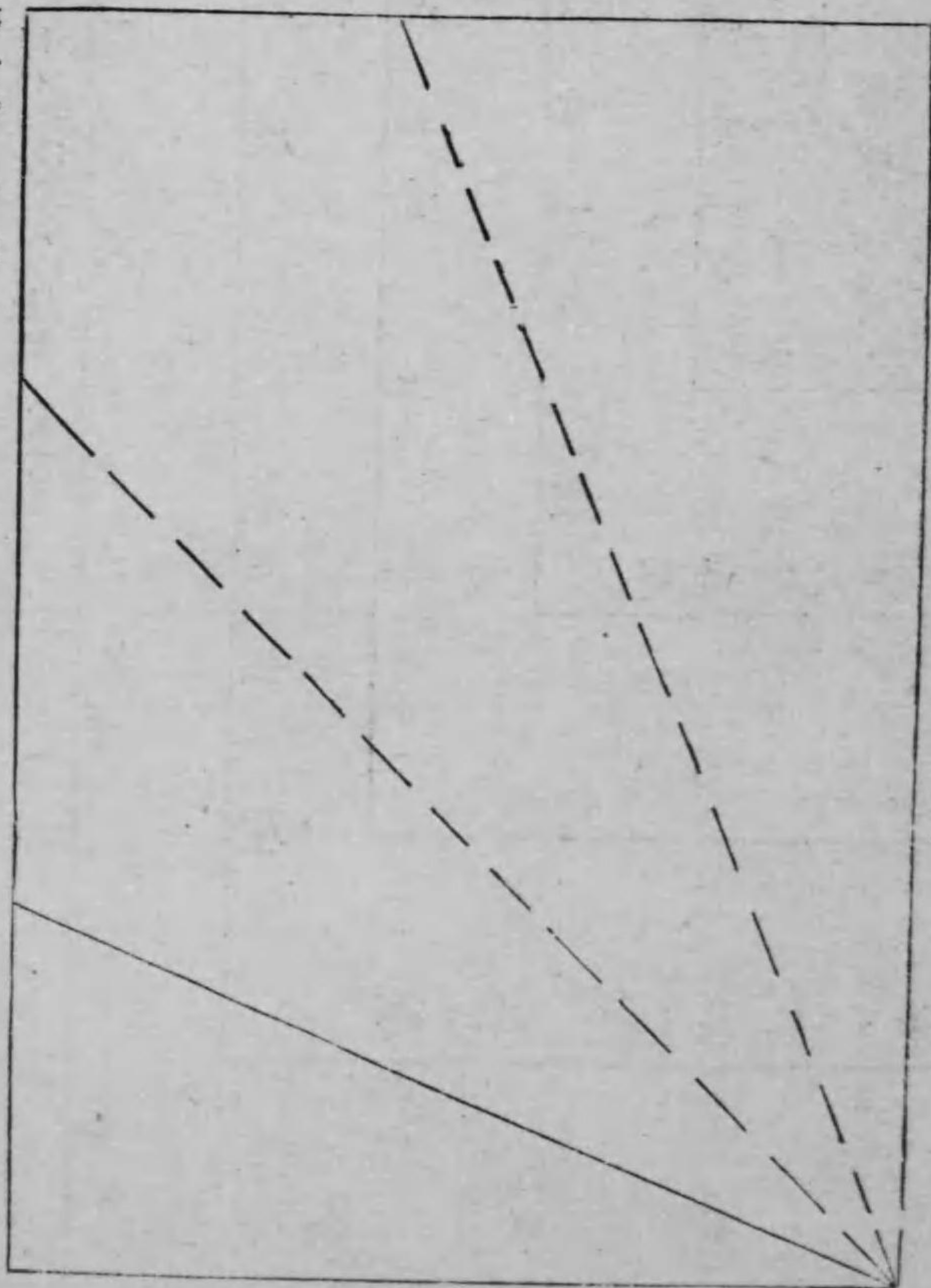


◎まづたけのながき紙を、圖の如く一方を筋違に折り。第二圖の如く、又それを二つにをるべし。



○これ
にて
出来
り。あが

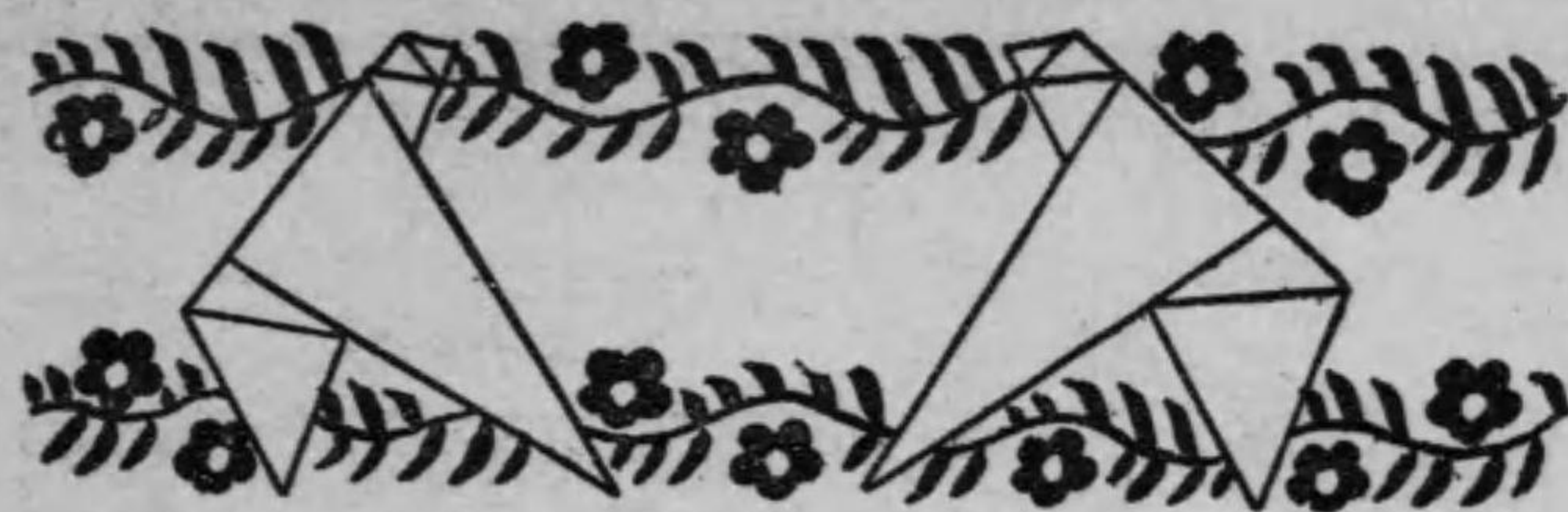
第一卷 折順



七

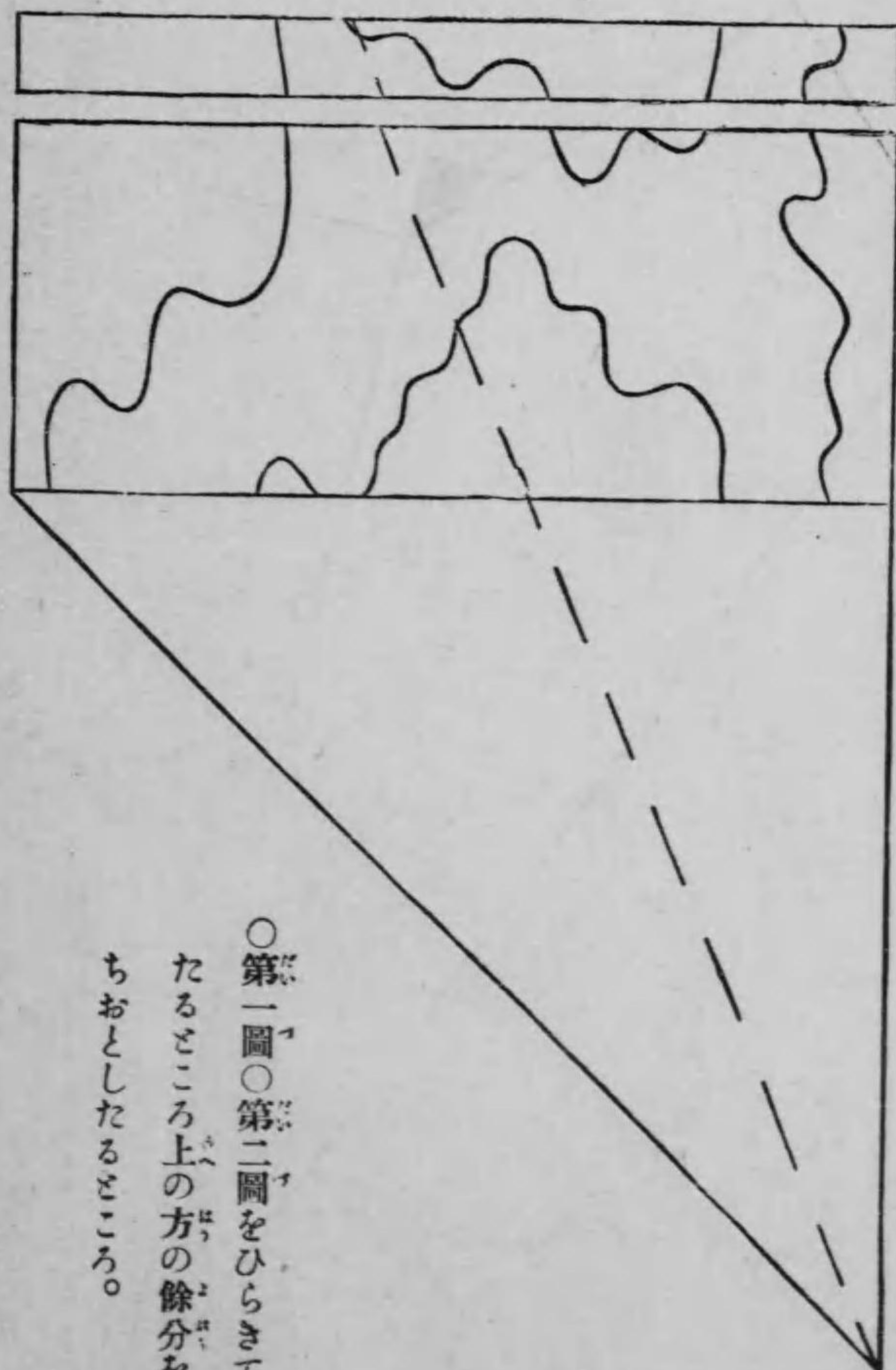
第四圖

寸法紙とりやう (其四)



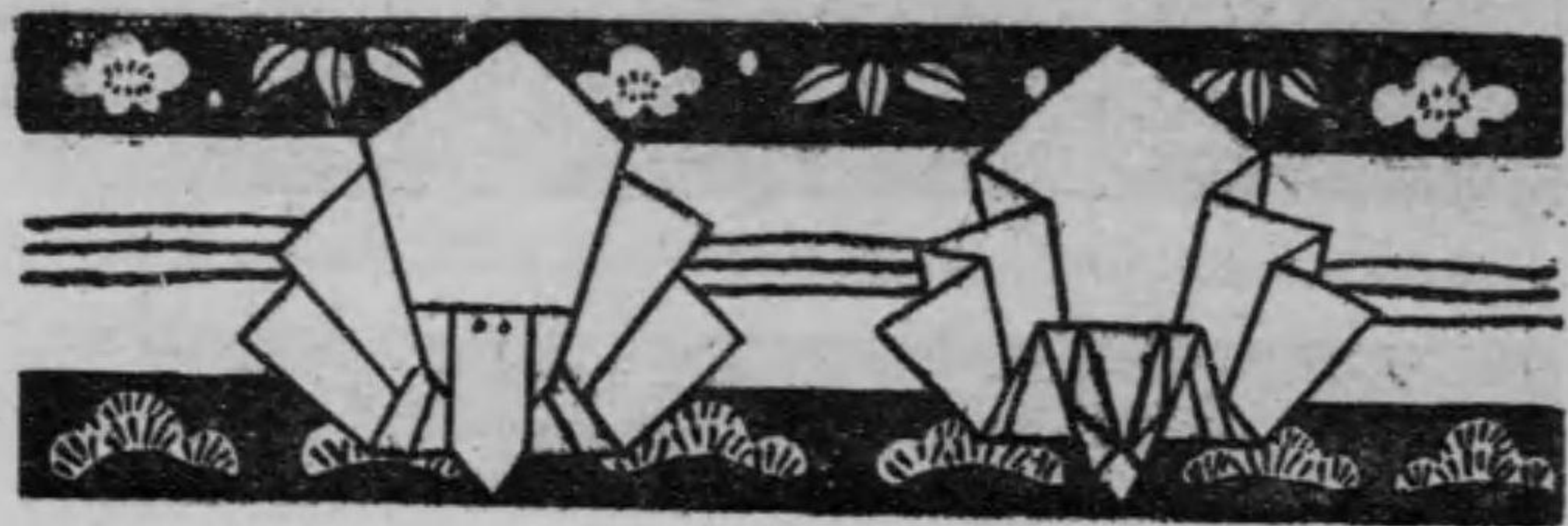
第三圖

小笠原流折形
寸法紙とりやう (其三)



六

○第一圖○第二圖をひらきて見
たるところ上の方の餘分をた
ちおとしたるところ。



○#大 ○K#小 ○K#中 ○K ○#

第一卷 折順

一尺二寸三分	一尺八寸四分五厘	二尺四寸六分	三尺	三尺
八寸七分	一尺三寸五厘	一尺七寸四分	三尺七分五厘	三尺六寸九分
	二尺一寸七分五厘			三尺九分
				三尺

第六圖 寸法紙の大小の割合 (其二)



○#大 ○#小 ○#中 ○#

第五圖 小笠原流折形 寸法紙の大小の割合 (其一)

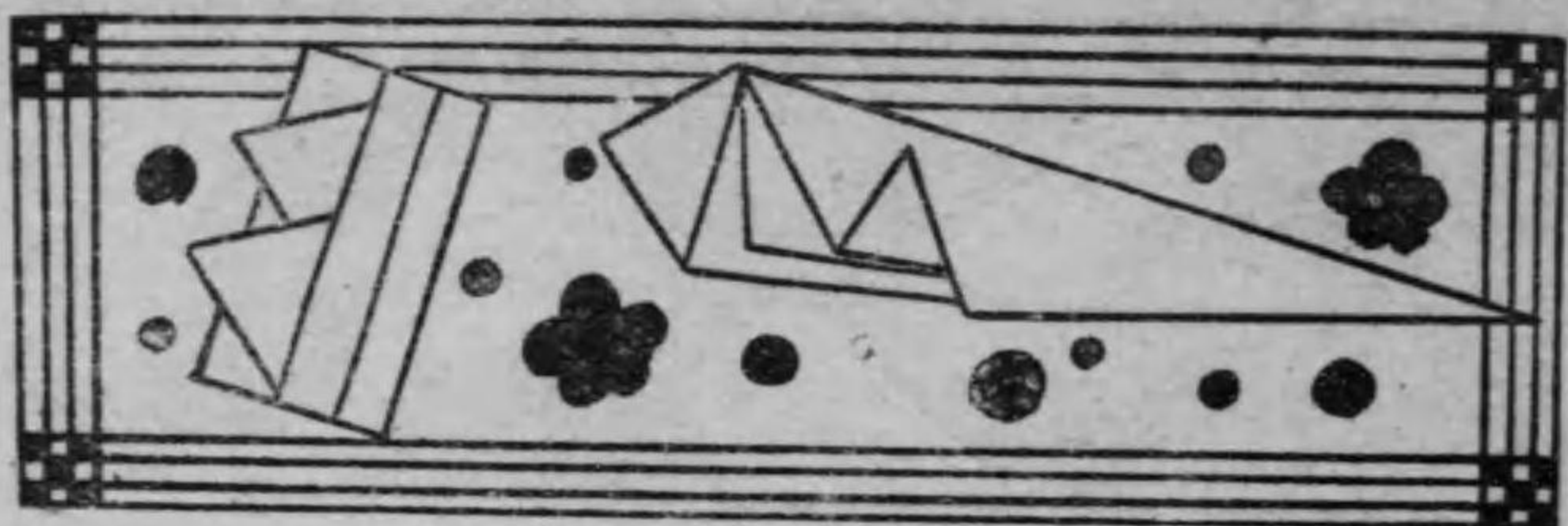
本縮書 四寸一分	六寸一分五厘	八寸二分	一尺二分五厘	一尺二分
寸法 八寸七分	一尺三寸五厘	一尺七寸四分	一尺七寸二分五厘	一尺七寸二分
				一尺七分



小笠原流折形

◎つけていふ、此紙どりの方法は、古くよりありて、元祿頃げんろくごころに折ける折形の今いまにのこれる物にも、享保頃きやうほうごころにかきとめぬる吉良流きちらりゅうの折方をりかた、曾我流そがりゅうの折方をりかたにも、なほ古き京都將軍きよと將軍の時代じだいにつかはれしものとして記されたる伊勢家いせけの包つつみの記の繪圖えいずにも、心して正し見れば、此寸法紙このすんぽうしの方法によりたるもの、見ゆれば、四五百年前よひごもせんぜんかたよりやつかひそめられけん、と思はるゝなり。

此寸法紙このすんぽうしのをしへは、小笠原流せがさわらりゅうの正統せいとうなる（小笠原家臣某より、水嶋之成へ、之成より伊藤幸氏へ、幸氏の子孫より松岡辰方へ傳はる學の統をさしていふ、著者が學統も、水嶋之成より伊藤幸氏の傳、根井新兵衛の傳、又松岡辰方、同行義より同門人某より、又其他よりの傳をも受たり、松岡氏の折方の奥傳に取わけて教授する學科の一つなれば、其門に入る者も初傳には未だ其教を受けられず、從て其折方の使用法をも教へられざりしなり、故に世間流布の小笠原流の折方を載たる女禮書にょれいしょはあれども、其使用法を記したるもの少なく、寸法紙の裁方を掲げたるもの無きやうなり、然るに明治三十四年九月、著者が「紐結包物標本井標本解説紐結包



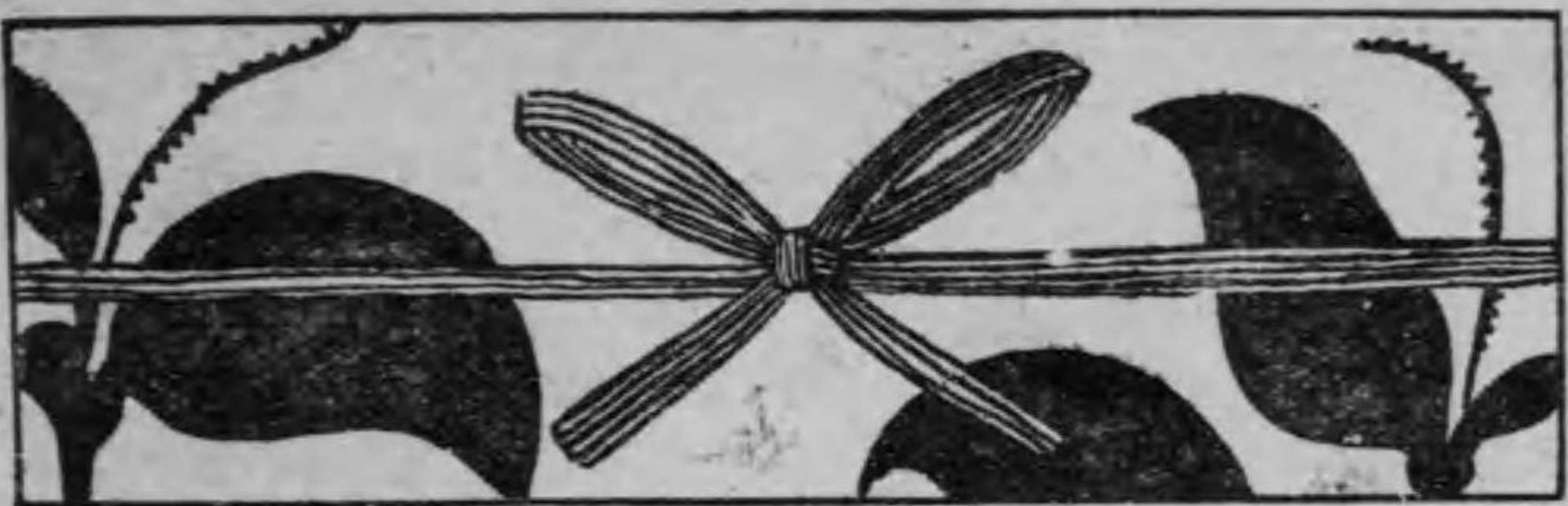
物教授法ものけつじゆほう」を嵩山房そうざんぼうより著しつる時、寸法紙の方法を記載したるよりこのかた、世間に此方法をつかひて折方を學ぶ者も出來にけり。

「紐結包紙教授法」の一節に載たる詞

◎この紙取法を以て習ふものは、即ち松岡氏の門下生を以て包方の傳を受たる者と斷定す、これ他の禮節といひ作法といひて教授する者の傳ふる所にあらざるを以てなり、もし松岡門下生にあらじといはんはんと欲する者あらば、紙取法以外に於て包方を習ふべし、此法を用ゐたらんには、さいふ事をゆるさじ、是此法ををしむにはあらじ、このみちのためにこそわりおくなり」紐結包物教授法

「仲蛇の記」の一節に載たる詞

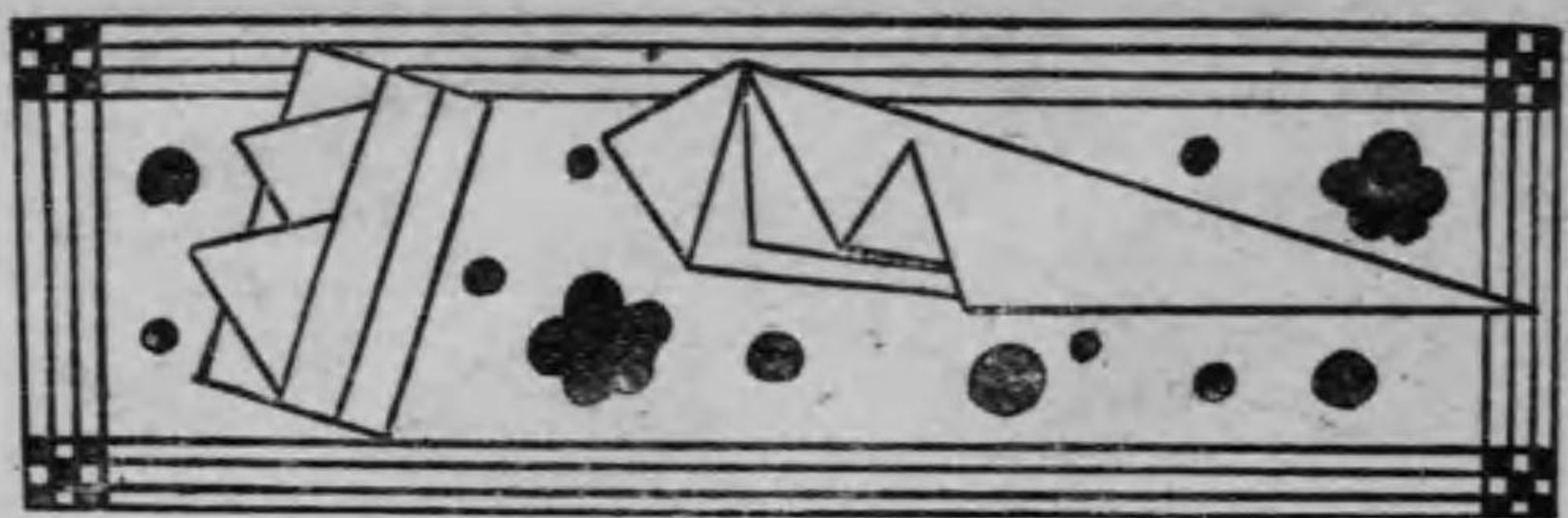
◎今より後、此紙取法を記す者あらば、小笠原流の傳を受けたる者と雖も又「包の記」の折形を學び得たりと云ふ者も、皆我説に隨へるものと覺えて可なり。未出版△ついでにいふ、此折方の傳へにつきては、本書に所載の物は總て小笠原流なれば他傳のことは略して記さねど、あらはすものゝ學統はこの流儀のみならず、宮中式



の學統と、臣民式の學統の基とする、伊勢家の學統をうけたへたり。今世間「小笠原流の作法と折方を（結方をも）教授する者の、伊勢流と稱し、曾我流、吉良流の折方を教授する者も、小笠原流と稱するなどの誤傳あれば」其あやまりの間において一流の折方奥傳を著すに當り、其學統を明らかにせん爲に、このよしを聊かしるしおくなり。

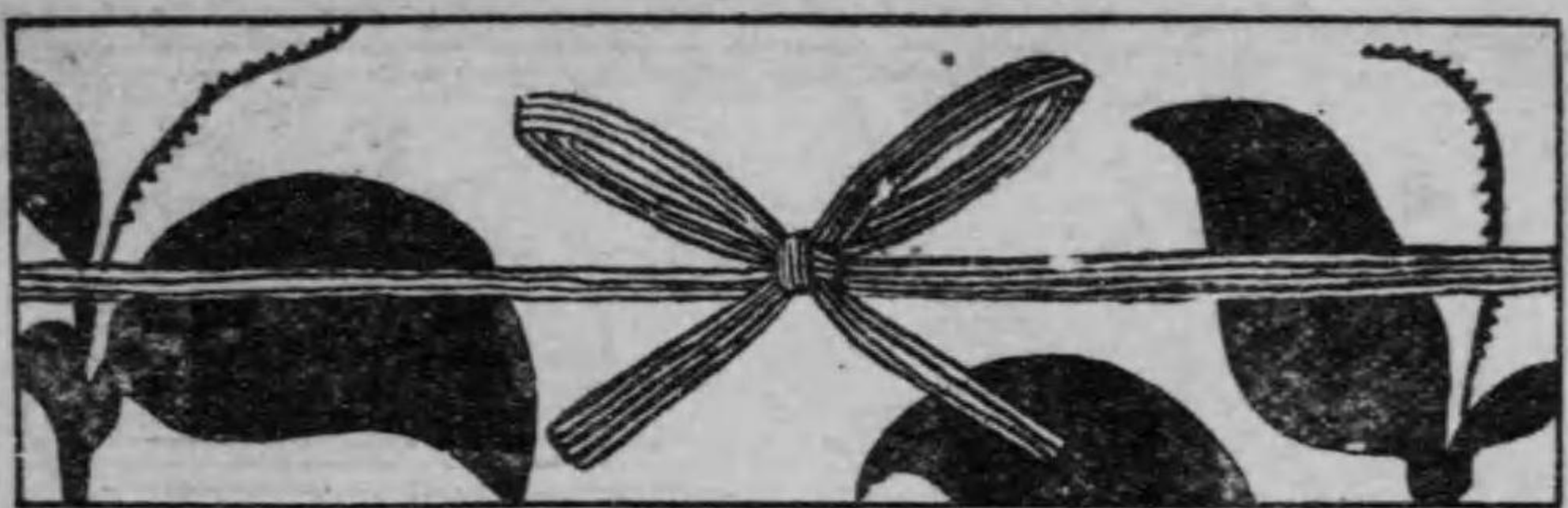
中 實物折形の型紙折様圖解

實物を折なさんとする時、手馴るれば、かたがみなしにても、折る事を得れども、初學の時は、かたがみなしにては、折る事を得ず、能く折あげんとするには、すべてかたがみをあて、折る事となりをれり、此かたがみつくりやうは、實物を折るの原本なれば、むづかしきものにて、まづ紙の大小にしたがひて、一つ物を數十返も折習ひて、もはやどれも、同様に折なし得るやうにならねば、よきかたがみは出来がたきものなり、方形、長方形、其他の紙によりて、折やすきも折にくきもあるものなれば、



よく手馴しおくべし、其折あぐるやうの一例を圖を以て記載す、此圖は寸法紙にて折るもの、内、行の伸縮包のかたがみにして、上下の正しく三角形になる物を示すなり、順序は圖にて知るべし。

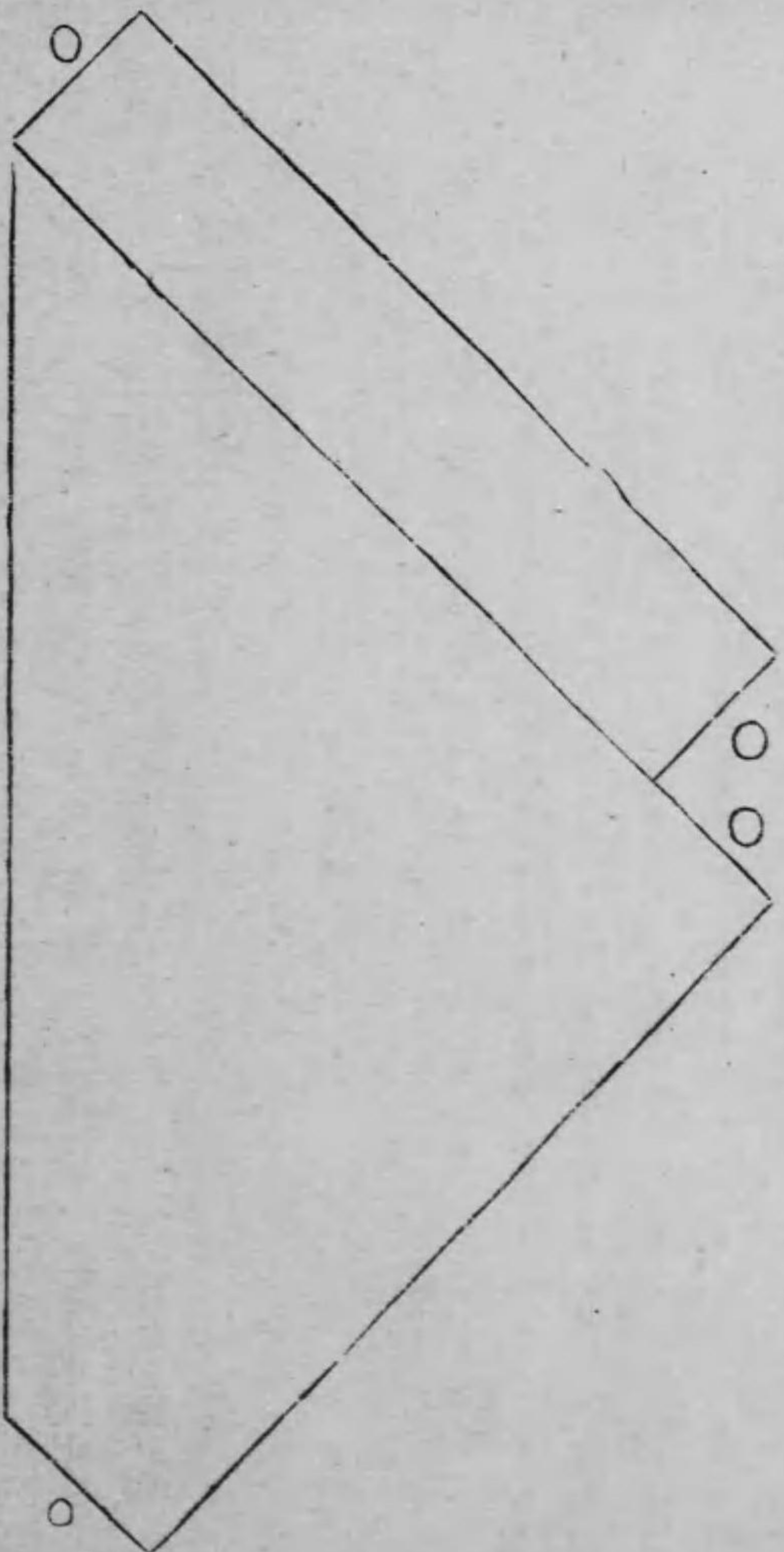
「折形を習ふ者の心すべき事の一つとして、教ふる者の師より教へられたる手本につきて、其手本のまゝに寸法も同じ紙にて少のたがひなく折なしたる折形を今習ふ手本としてあたへられ、それに依りて折ならふ時、其手本の紙の一枚なるも二枚かさねなるも、白き紙のみにて正しく折なしたるを、ひらきて其寸法をまなびて、他の料紙にて折いづるを常とせるが、其手本とする物のおほくは、形紙なりと知るべし」



小笠原流折形

第七圖 かた紙とりやう (其二)

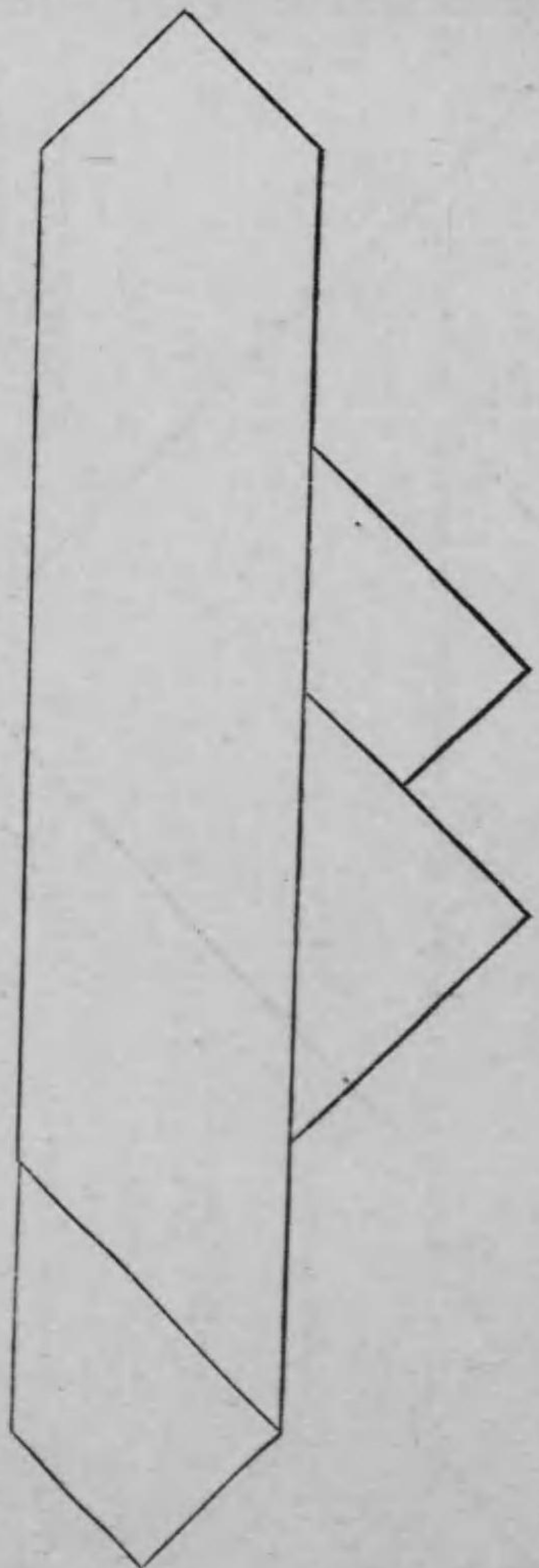
○寸法紙をなゝめに二つ折に手前より向の方へと折る。寸法○じるしの所にて、たとへば一寸ならばいづれも○じるしのところを一寸になるやうに折るべし。



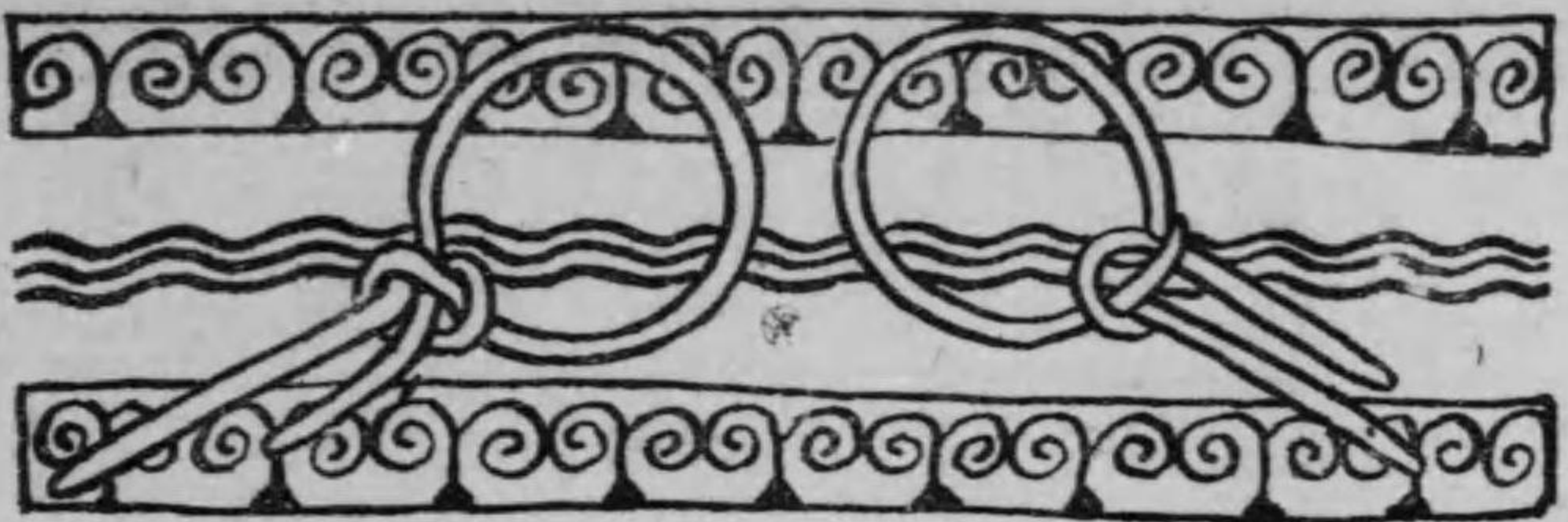
第八圖 かたがみ取様 (其二)

○七圖の手前の方を再び向へと折かさぬるなり。これも三角に出せる紙のはし同じ寸法に折るべし。

(カ) の 面



第一卷 折願

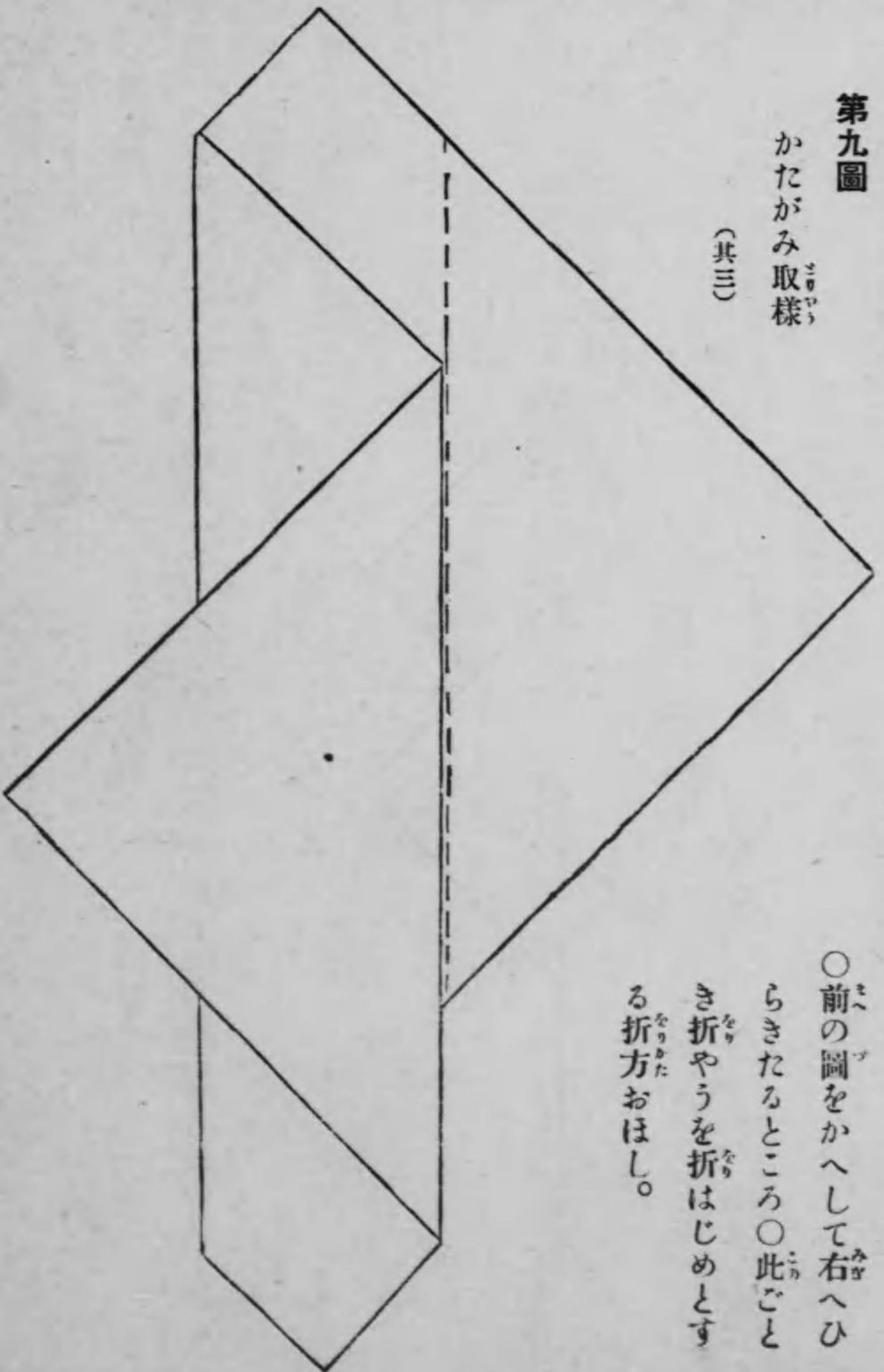


第九圖

小笠原流折形

かたがみ取様

(其三)



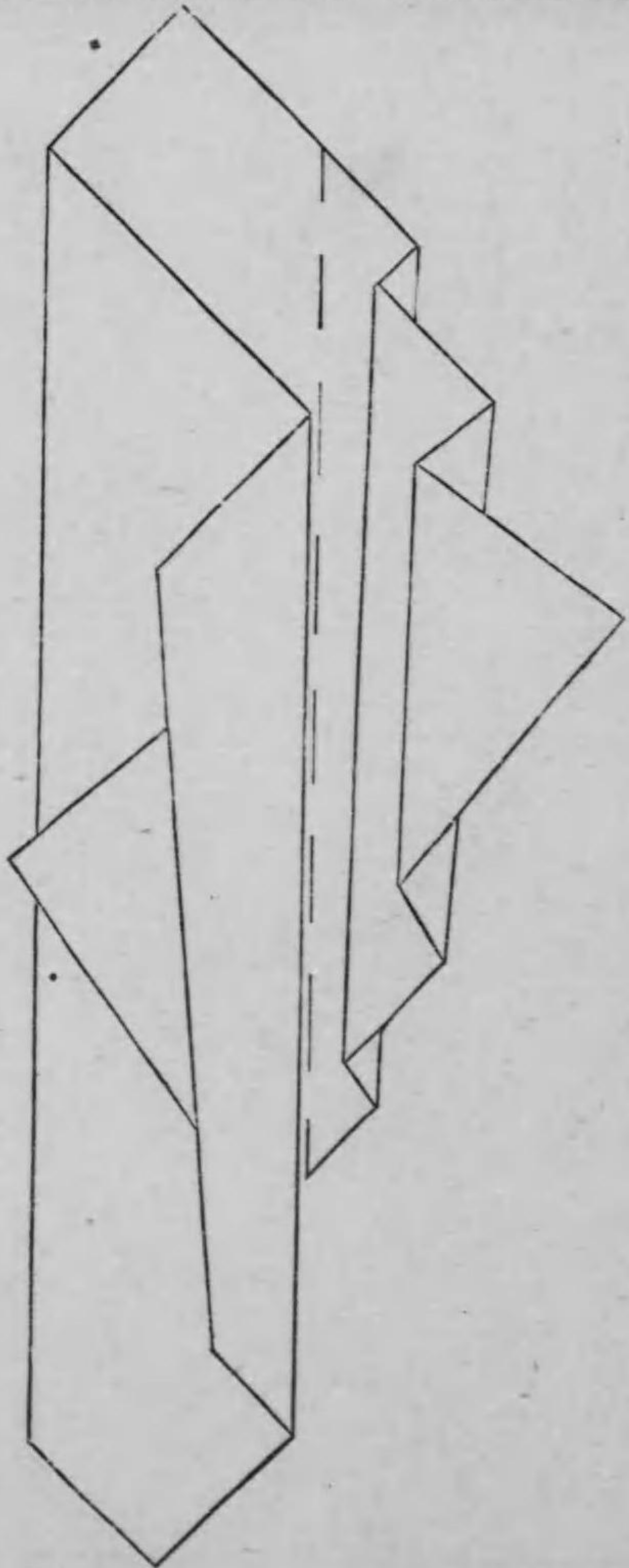
一六

○前の圖をかへして右へひらきたるところ○此ごとき折やうを折はじめとする折方おほし。



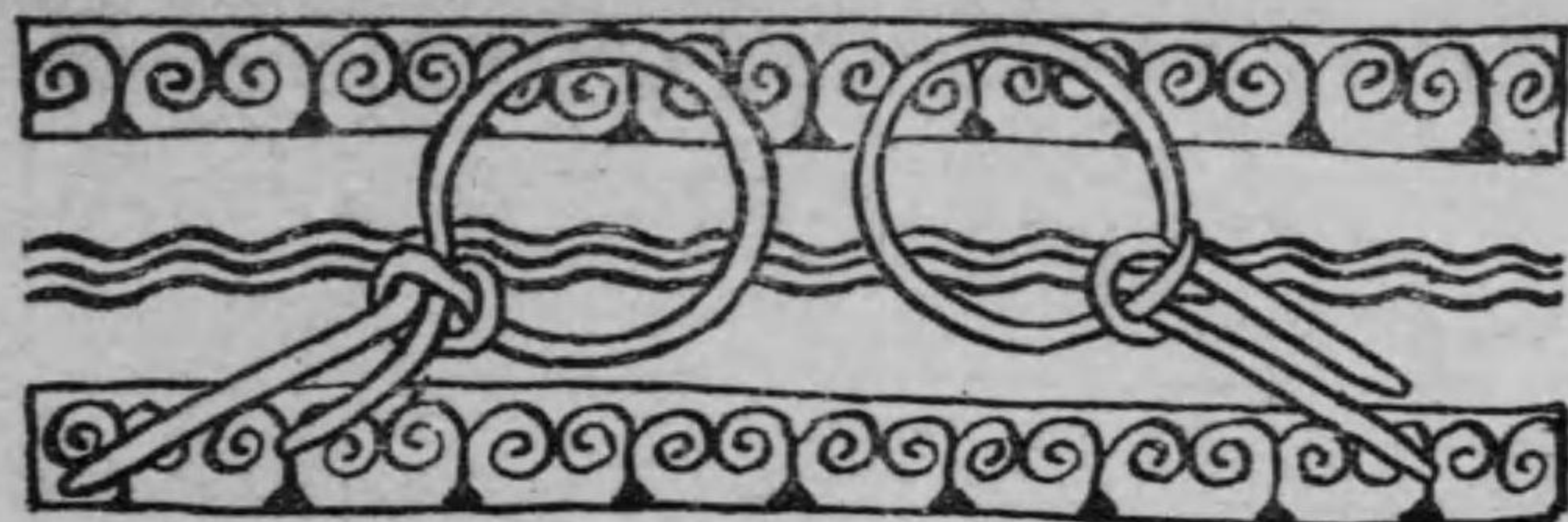
第十圖 かたがみとりやう (其四)

○前の折はじめの圖より「行の伸蛇包」の折方をつくるところを記載す。



第一卷 折順

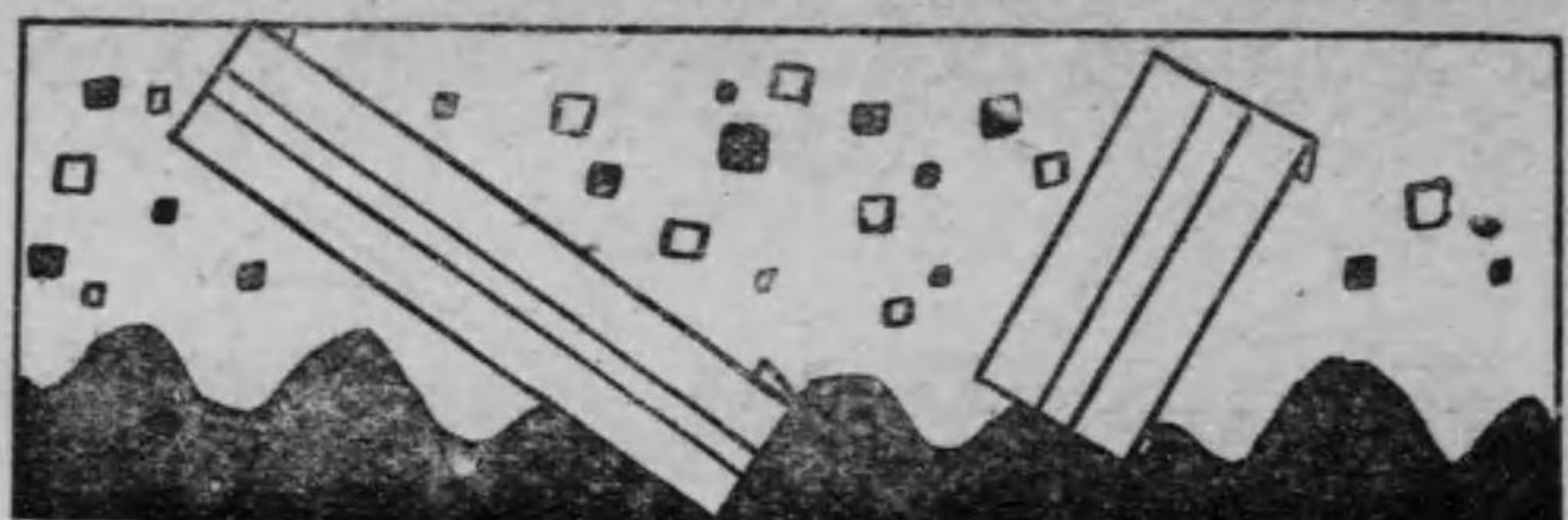
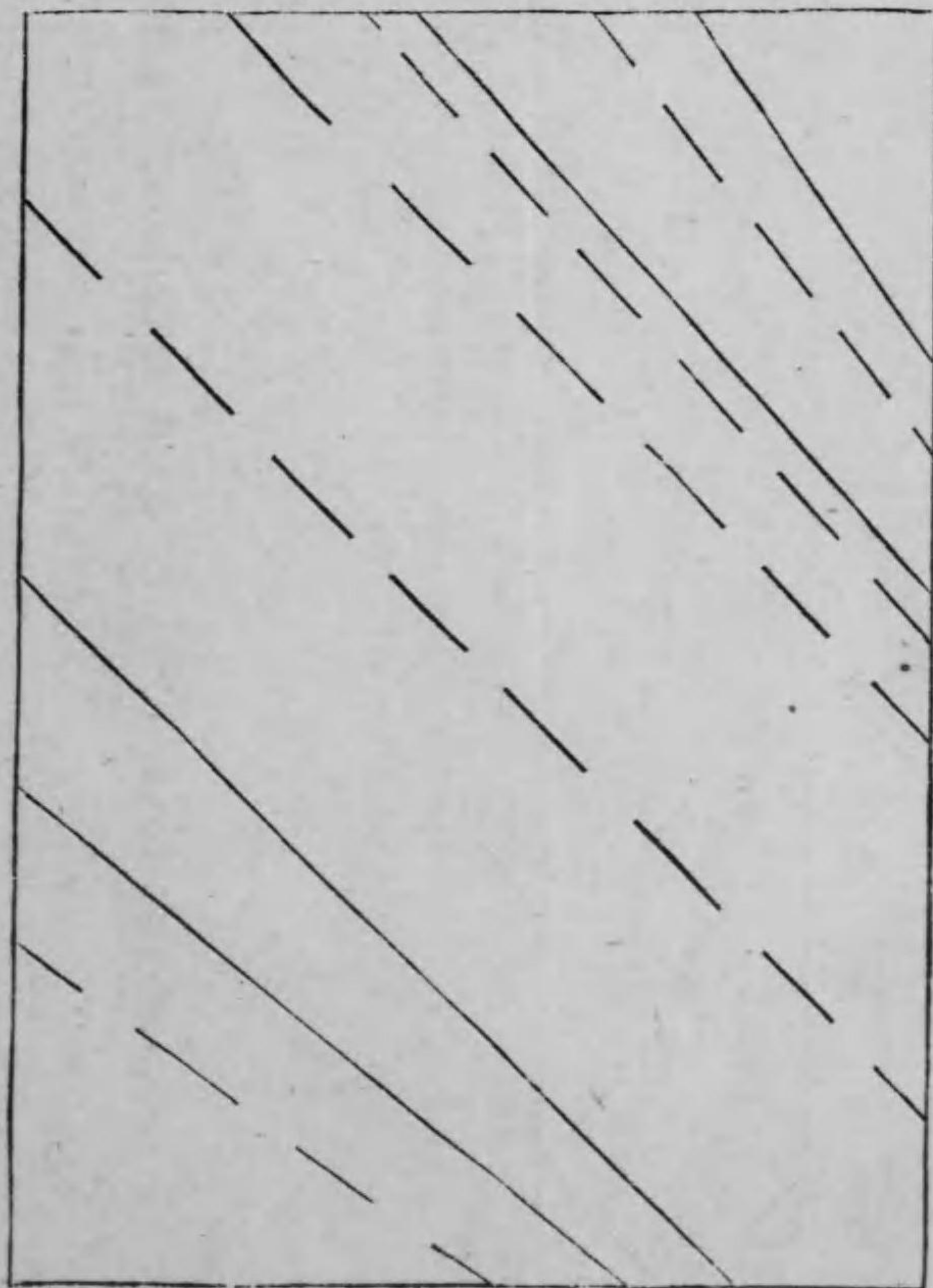
一七



第十一圖

かたが
み取様
(其五)
○前の圖
をひらく
と即ちこ
のやうに
なる。(内
の方)の
圖なり。

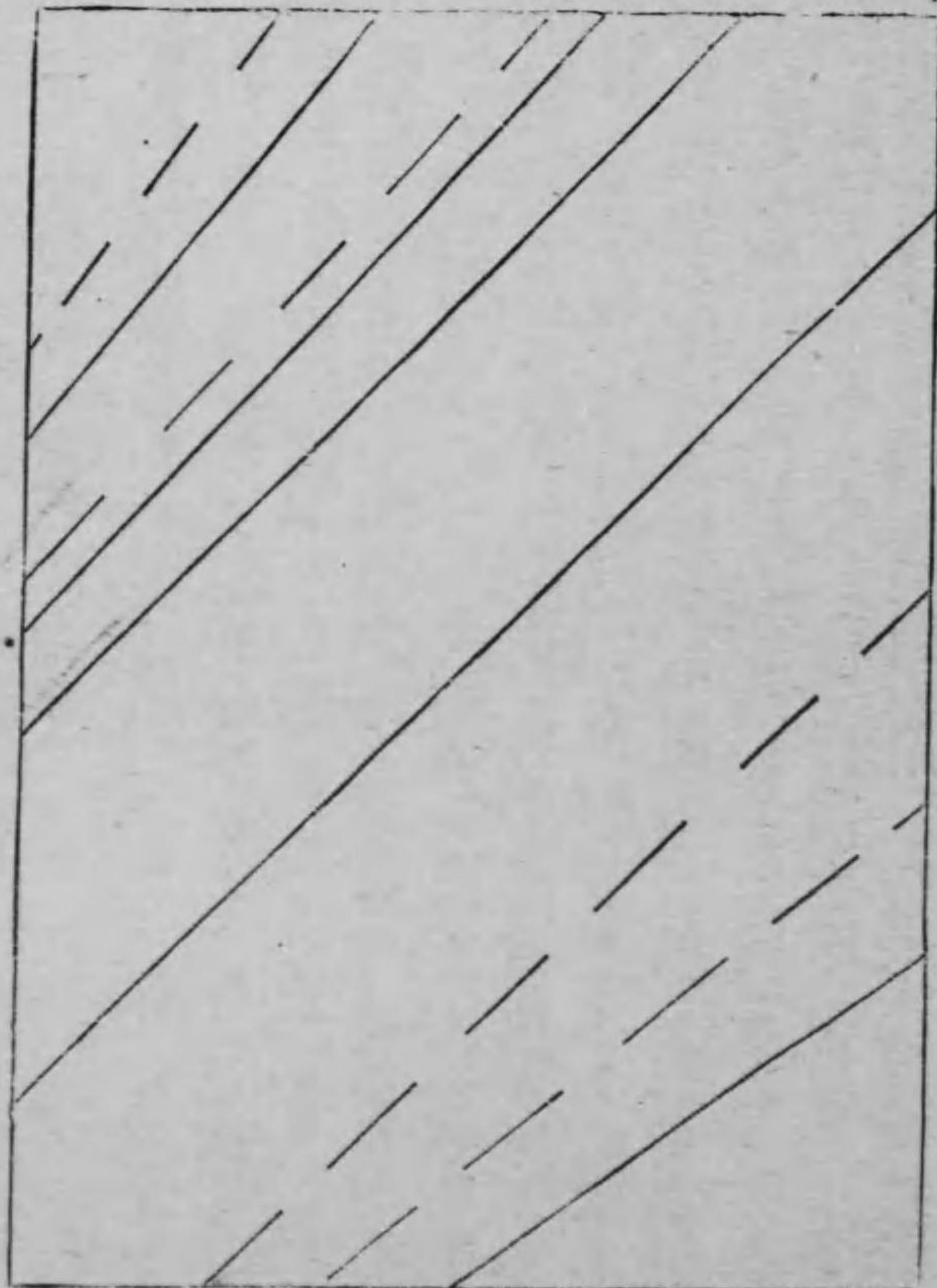
小笠原流折形



第十二圖

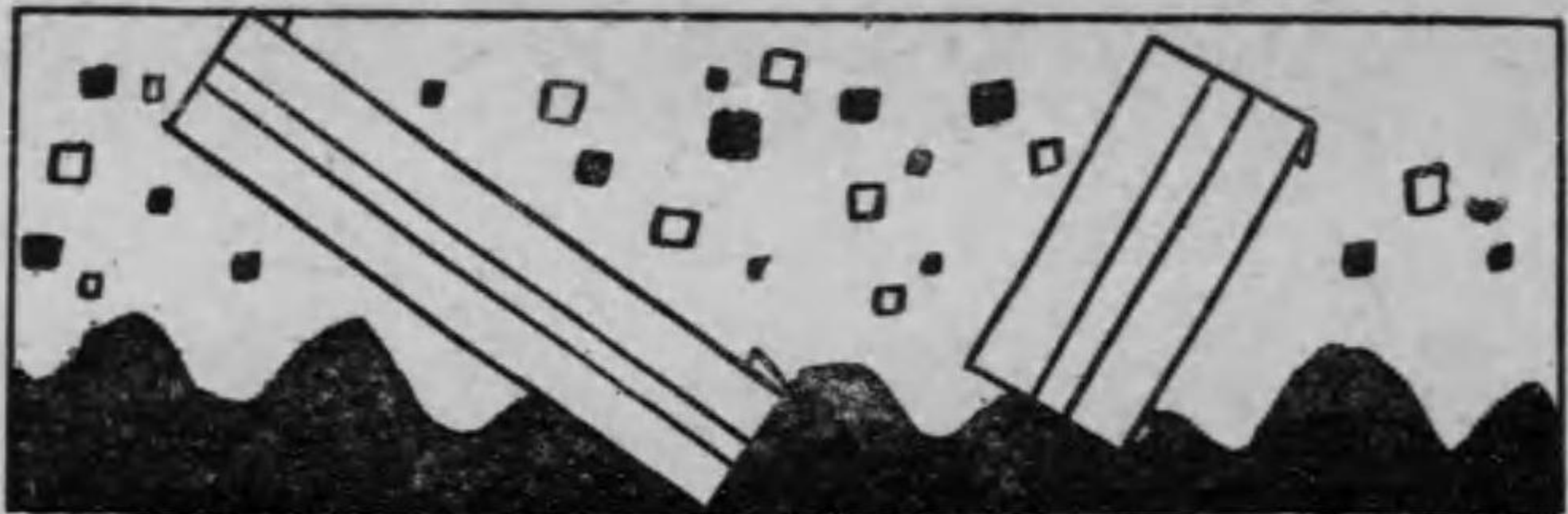
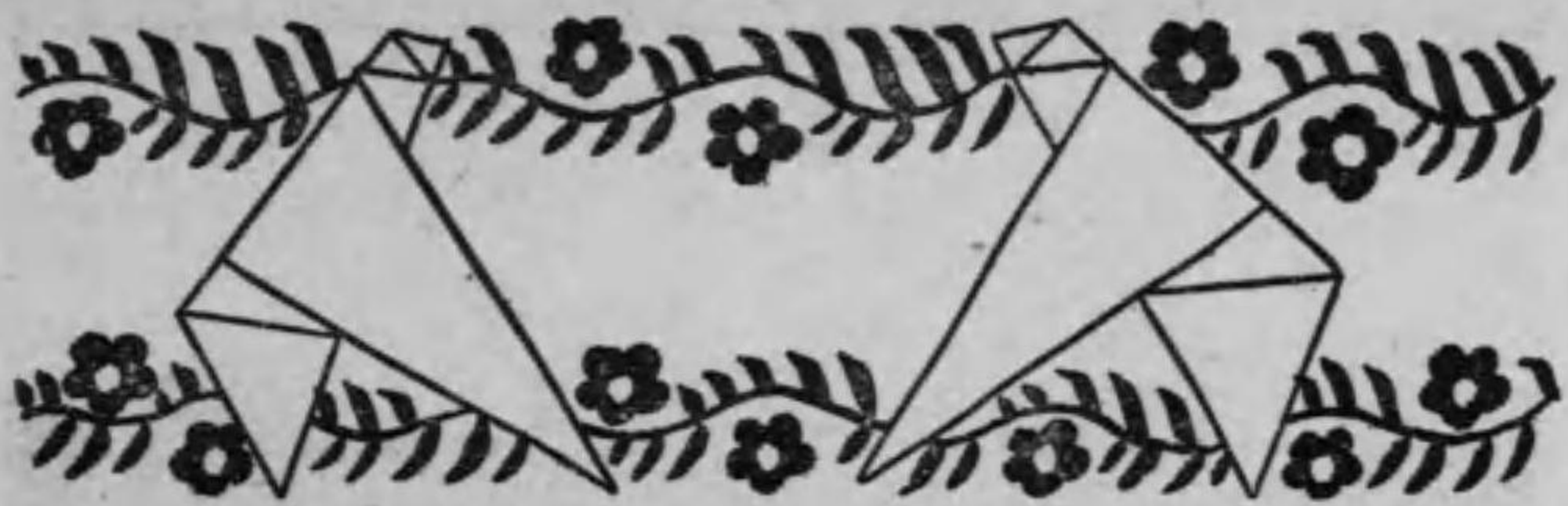
かたが
みどり
やう
(其六)
○これは
(表の方)
なり。一、
二、三、
の順の如
く折て、
折あげた
るなり。

第一卷 折順



下 實物かさね紙折上の圖解

かたがみの出来たるを、用紙、(檀紙、奉書紙、色紙にても同じ、此所には習ひはじめのこしらへやすきをもて、廣奉書紙にてする事を説明するなり、其心して讀むべし)の上のせて、かたがみの四方、二所づゝに錐(細き丸ぎり)にて標をつけ、かたがみをのけて、其大きさに錐の標のあな(極めて小さくつくる)の所に、定木をあて、小刀にて裁ちてかたがみ同寸法のものをつくり、其たちたる奉書紙を、裏になすべき紅紙(兩面紅紙は有合せには少なければ、片面の物をつかふなり)の表を裁板の面にして、裏を上にして置きたる、其上にこれも表を上にして、裏の方を下になし、紅紙の裏にのせ、中央をゆびさきほご糊にてつけ合せて(奉書紙の上より其糊の所へ別の奉書紙たちくづなどおきて、指先にて平におしつけおくべし、この所のみならず、すべて用紙のあつかひは静になし、けばだぬやうに氣をつくべし)、錐にて奉書紙よりは一分宛おほきく四方に二所づゝ標をつけ、其所に定木をあて、裁方すべし、此一分宛うら



の紙の出たるを「匂ひ」といふ、さて糊のかわきて後、其そばに小さき裁屑を入れて、上の奉書紙のもちあがる様にして、紅粉を筆にてふらだけ深く塗る、其ま、紅を乾しおき、乾きたる時に間のくづ紙をぬきさり、奉書紙の上にかたがみをあてがひ、錐にて線の上下二所宛の標をつけ、かたがみを取除て、用紙をうらがへし、紅紙(裏方)を上になし、定木をあて、篋にて細く筋を引き、それより折方の順序にしたがひ折るべし、内へ折る時は篋にて奉書紙をおして折る、外へ折る時は指もつかひて折る、奉書紙の方なるべく指にておさぬやうに心すべし、此折順はかたがみ折る時の順に同様にをりてよし、折上り下の方を裏へをる折方は細き丸木にて両手にておしくるゝと押柔げて折なり。



小笠原流折形

第十五圖 實物製作の圖

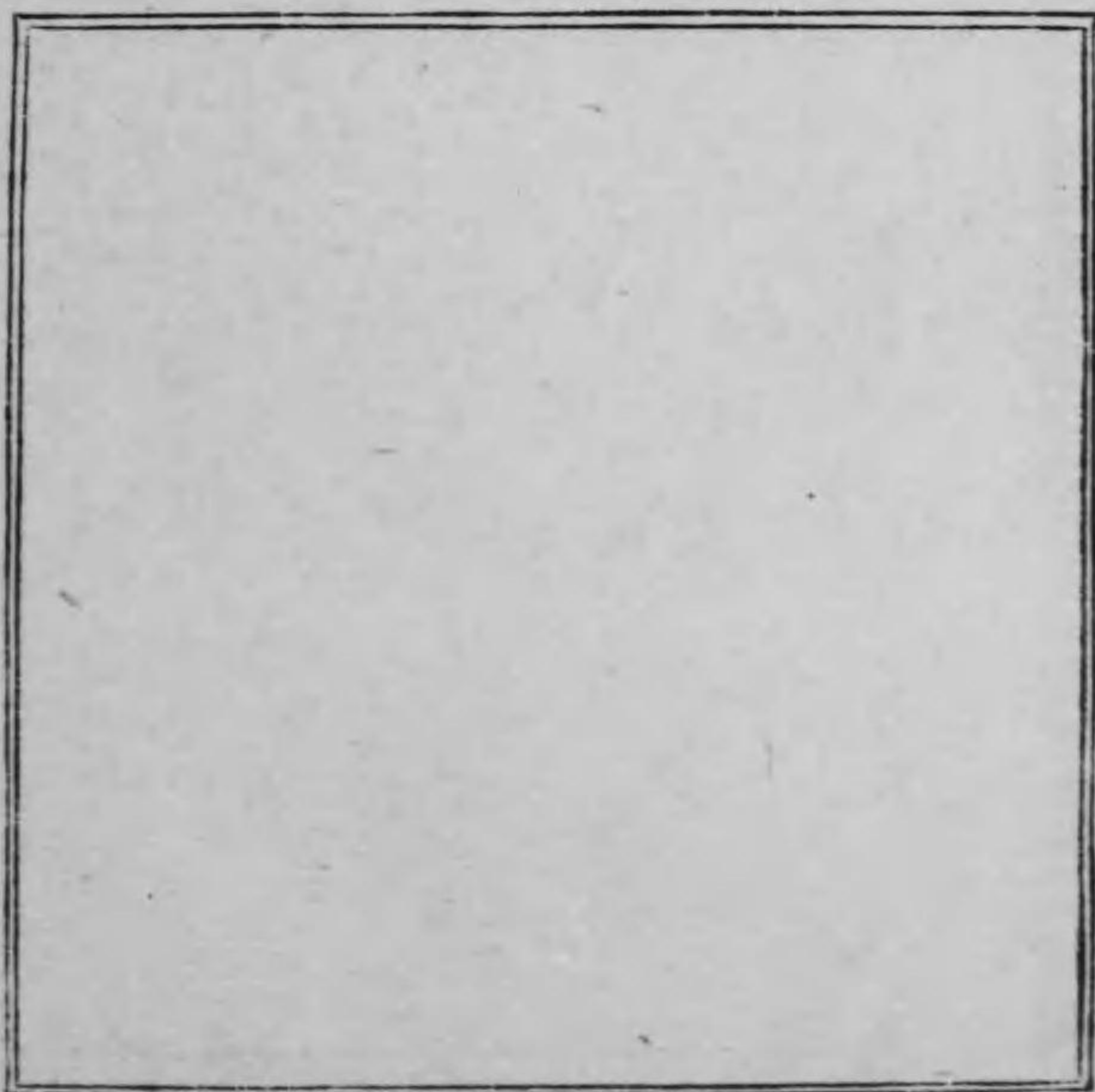
(其三)

○表裏の用紙たちかたの出
來あがり。

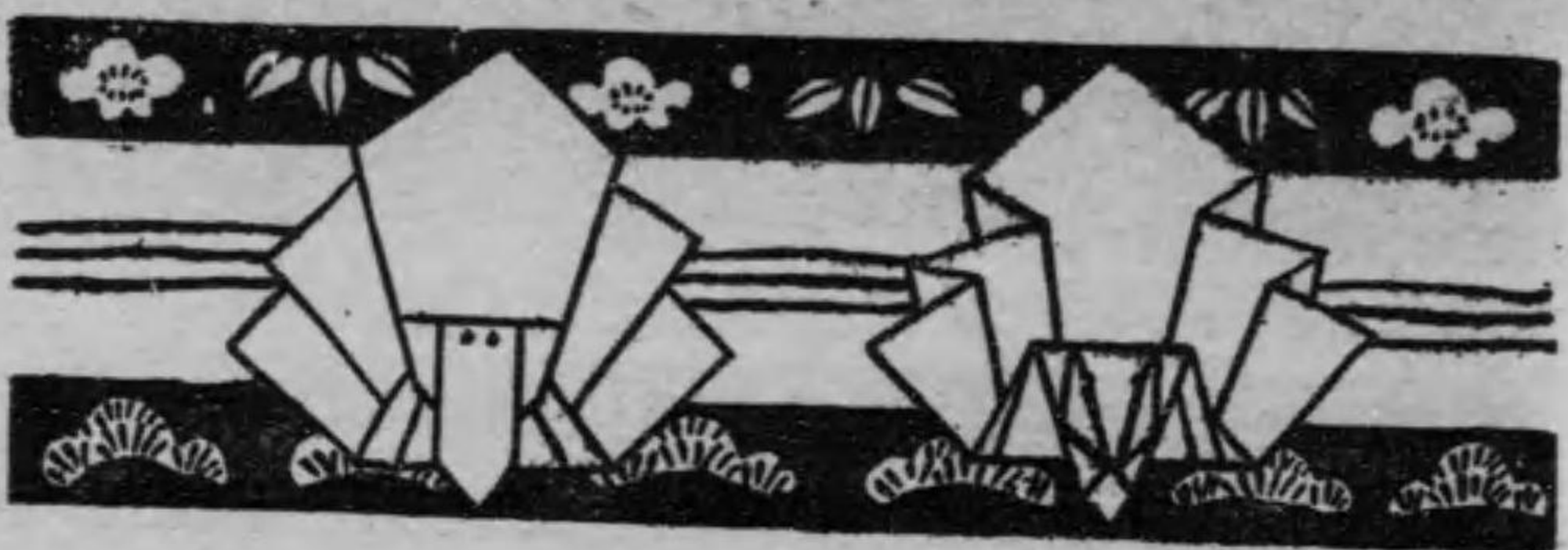
○此四方の匂ひ一分づゝ出
すやうに裁つなり。

但し小き物は一分内に
もする。大なる折方の

時は一分餘にもする△色
紙重ねの匂ひの寸法も同
様なり。



二四

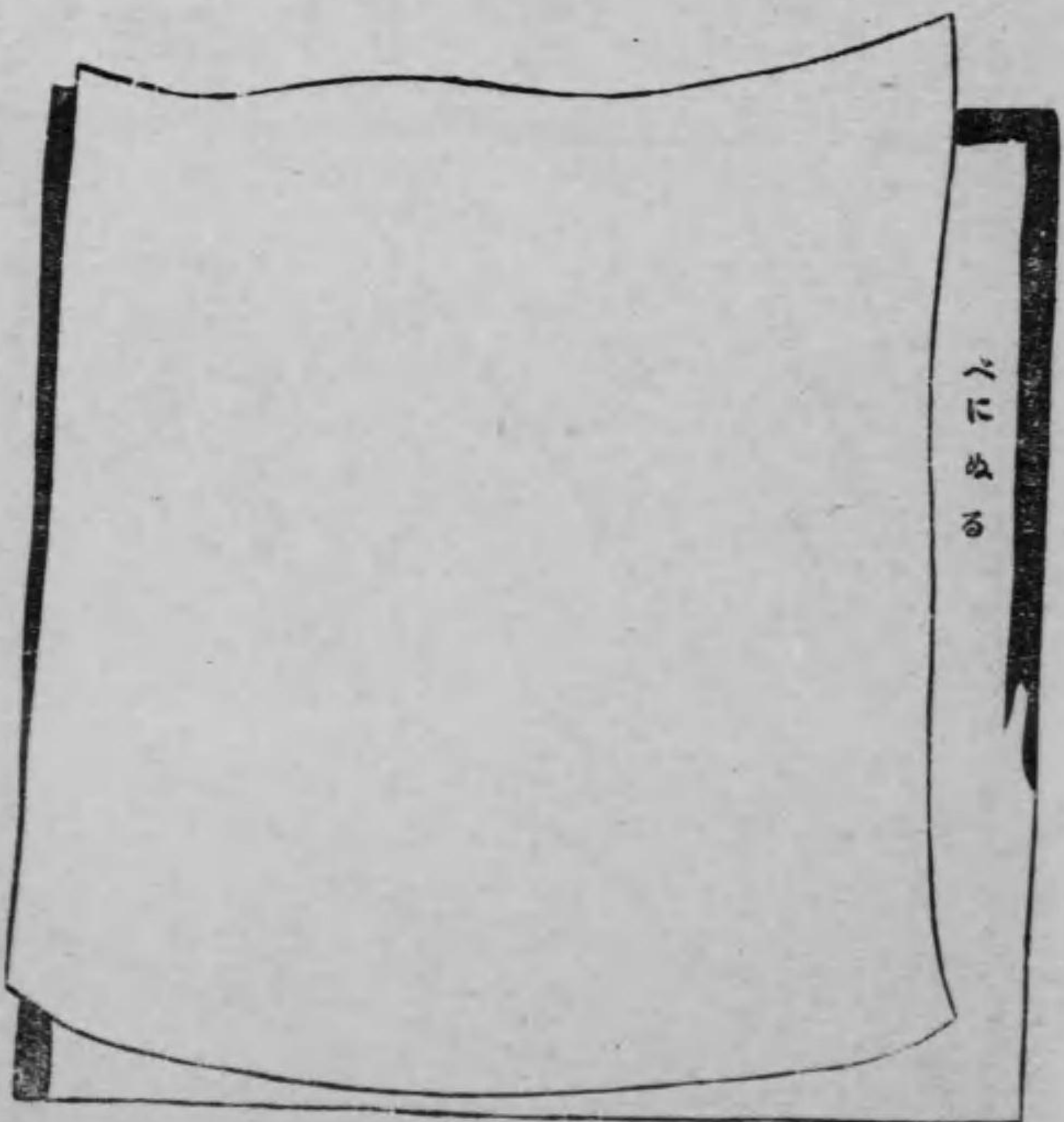


第十六圖 實物製作の

圖 (其四)

○用紙の紅紙のうらの
方。匂ひのいでたる
四方を三四分づゝ紅
粉にてぬる。四方の
端を持ちあげ細き紙を
入れおきてぬる。食
用紅上品の糊にてね
りたる物よし。粉の
紅。あしきべにはあ
し、△紙の中央は前
に糊にて張つたり

第一卷 折順



二五

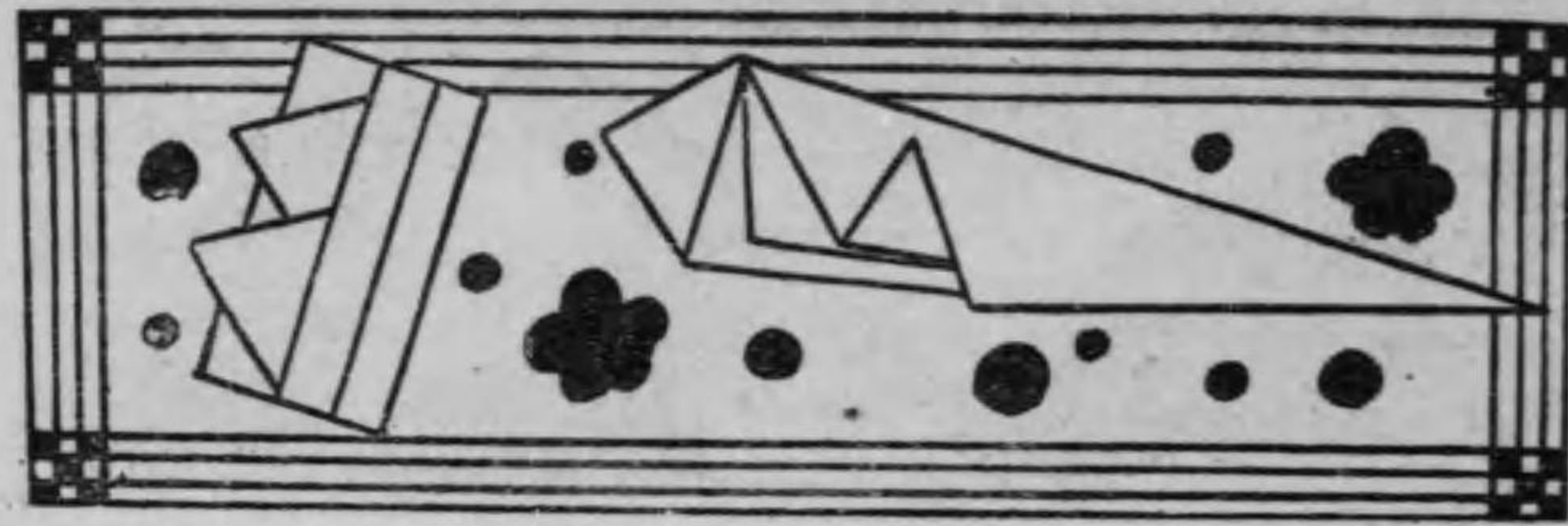
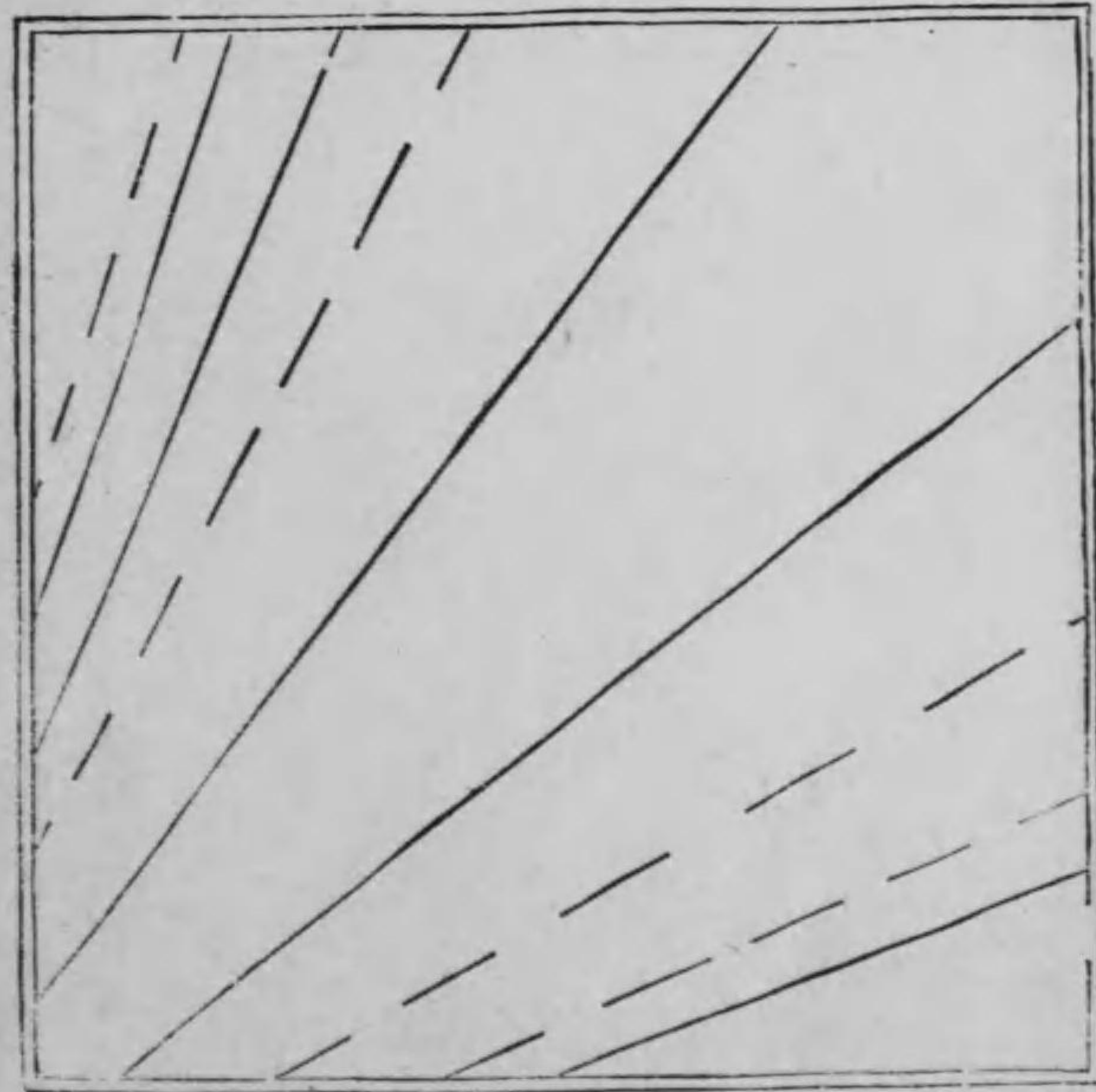


小笠原流折形
第十七圖 實物製作の圖

(其五)

○紅をぬりて乾して後、表の紙の上にかたかみをのせ、錐にて極ちひさき星をうつ。

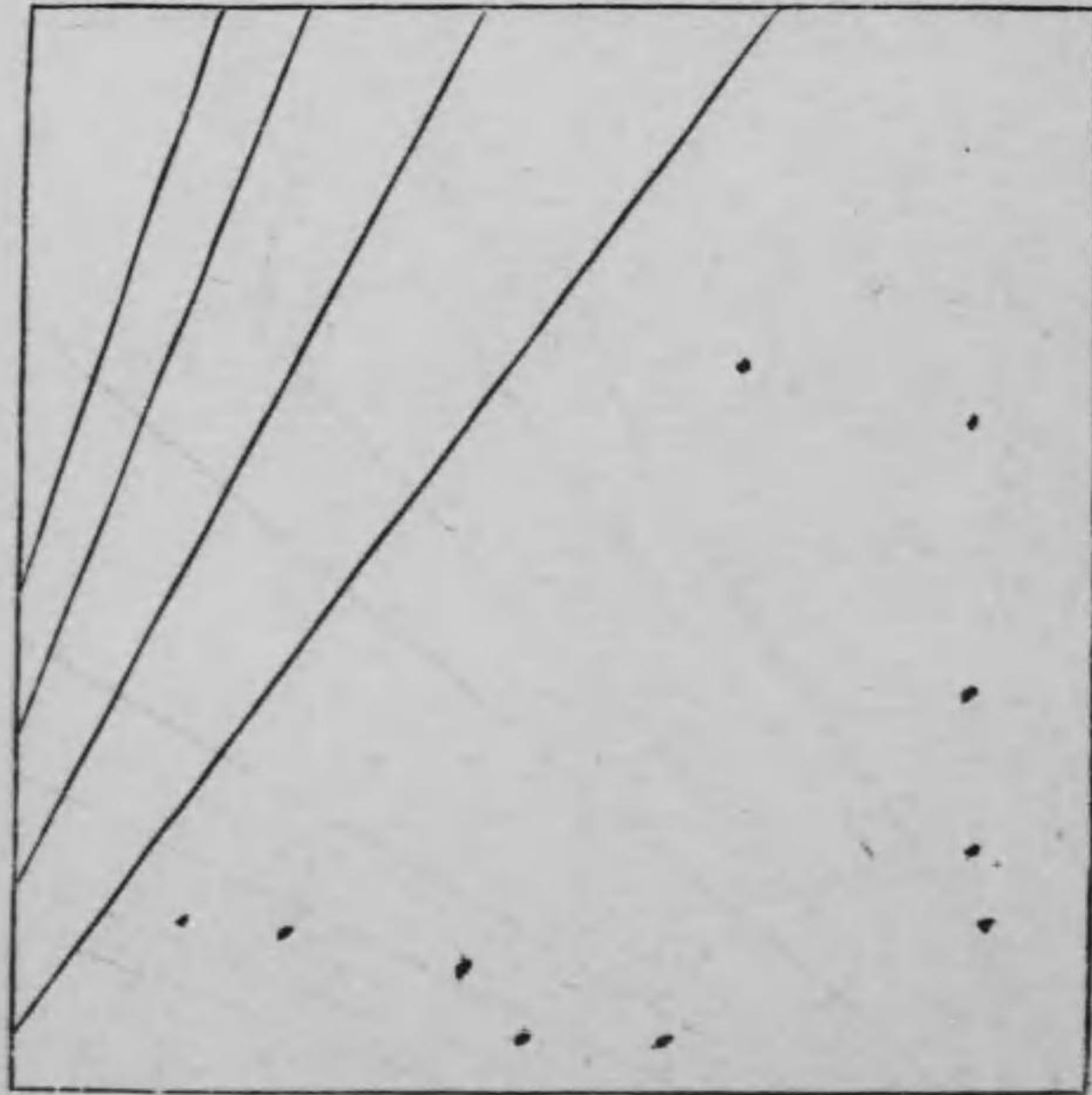
○此圖はかたかみを奉書紙の上のせたる圖なり、四方のふちの細く見えたるは裏のべにがみの匂ひだけ見えたるなり。

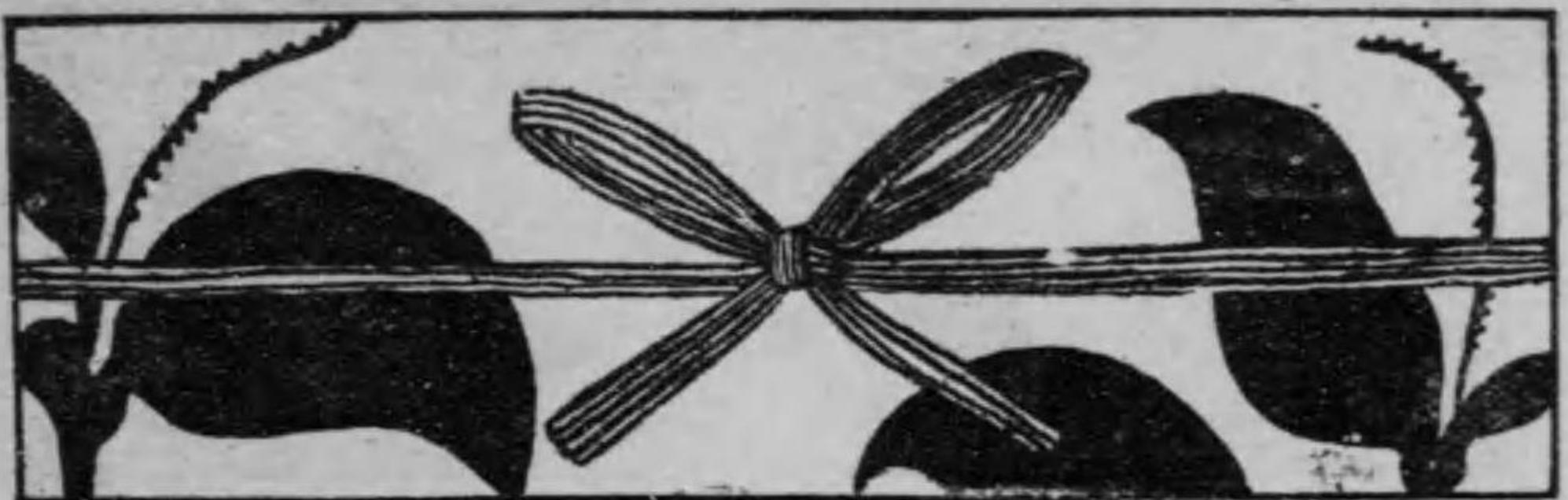


第十八圖 實物製作の圖

(其六)

○裏の紅紙の方なり、●點は錐の穴なり（表より突たる）此あなの所へ定木をあて、へらにて筋をひくこと圖の左の方のごとし△このへらは必うらの方よりするなり、裏の紅の方よりするなり。



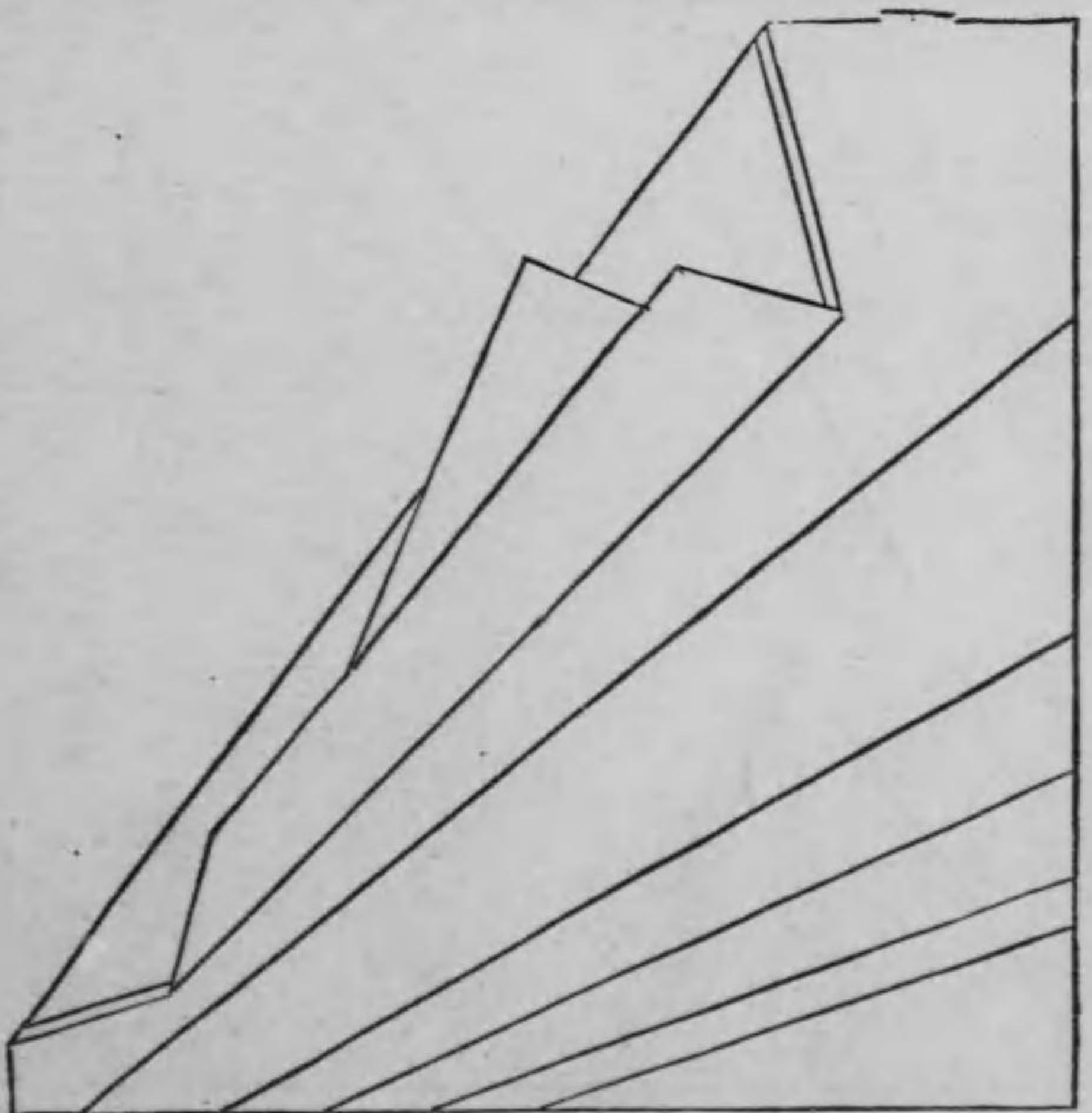


小笠原流折形

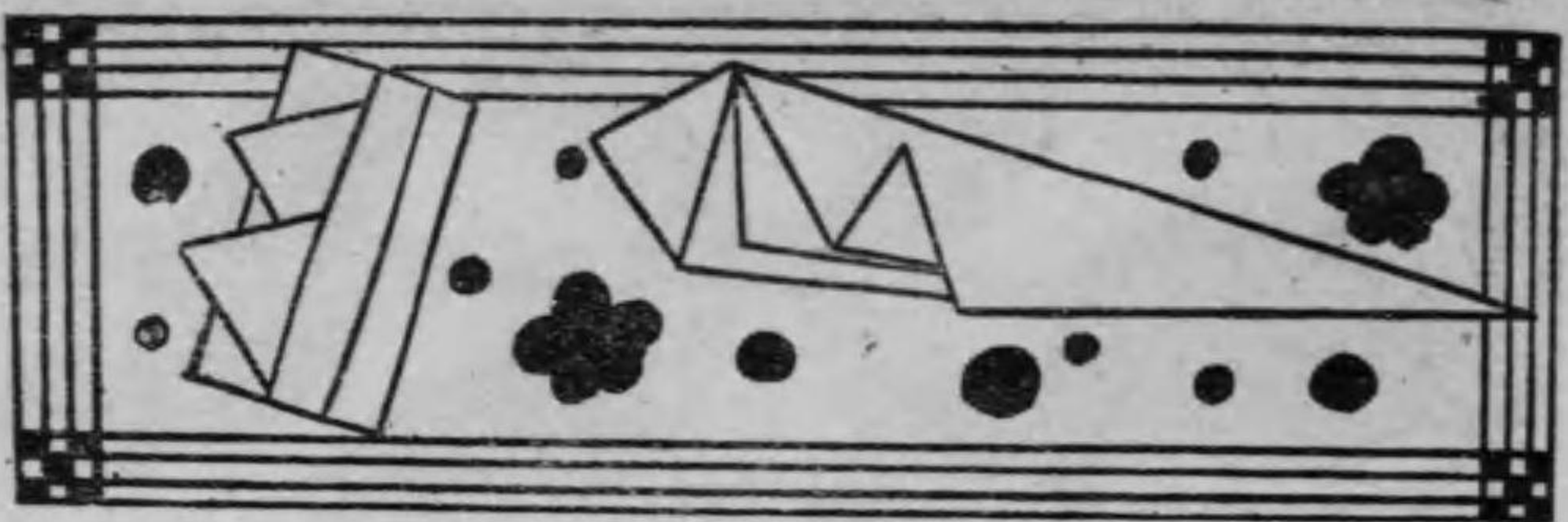
第十九圖 實物製作の圖

(其七)

○前の圖のごとくして筋をつけたる所を、手にて軽く紙を押へ、へらにて裏の方はつよく、表の白の方はよわくやはくとして折目を筋の通りにつくるなり、



二八



第二十圖 實物製作の圖 (其八)

○これは實物を折あげたる圖なり(こゝなるは末廣包なり、何の折形も同じ手續にてするなり)

○下の兩

脇のし

るしの

所より

うらへ

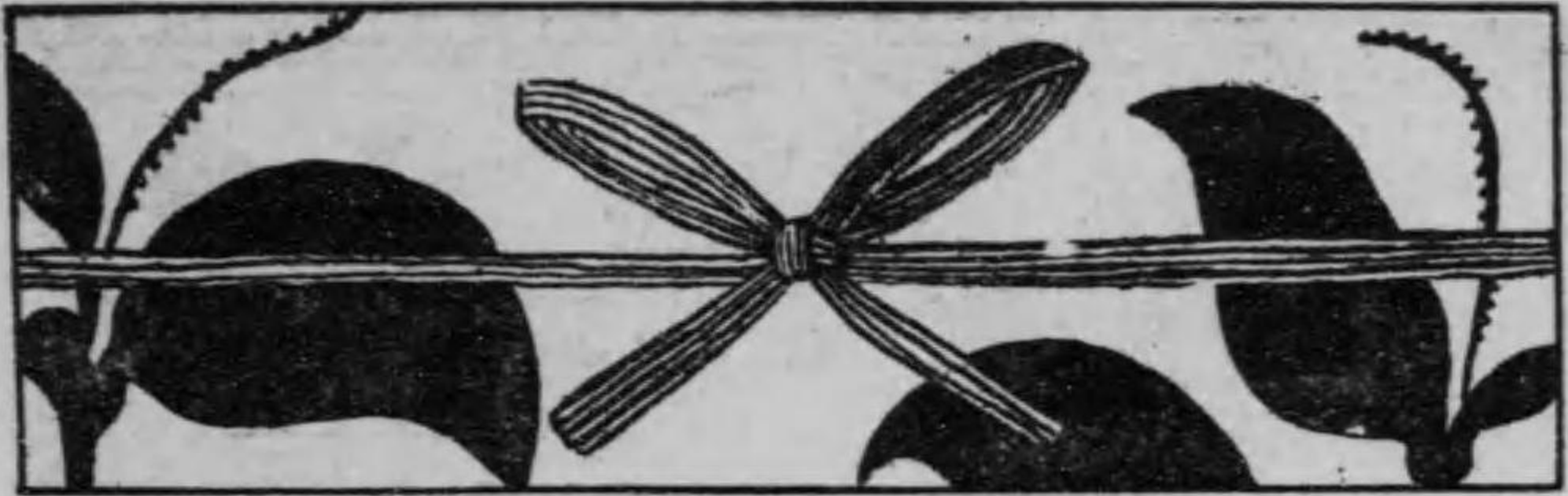
をるべ

し(表の方を板の上につけてうらがへしにおき、其折る所を四分位の細き棒にてくらくとこきてやはらかになし折目を丸くふくらしたるやうにをるなり)



第一卷 折順

二九

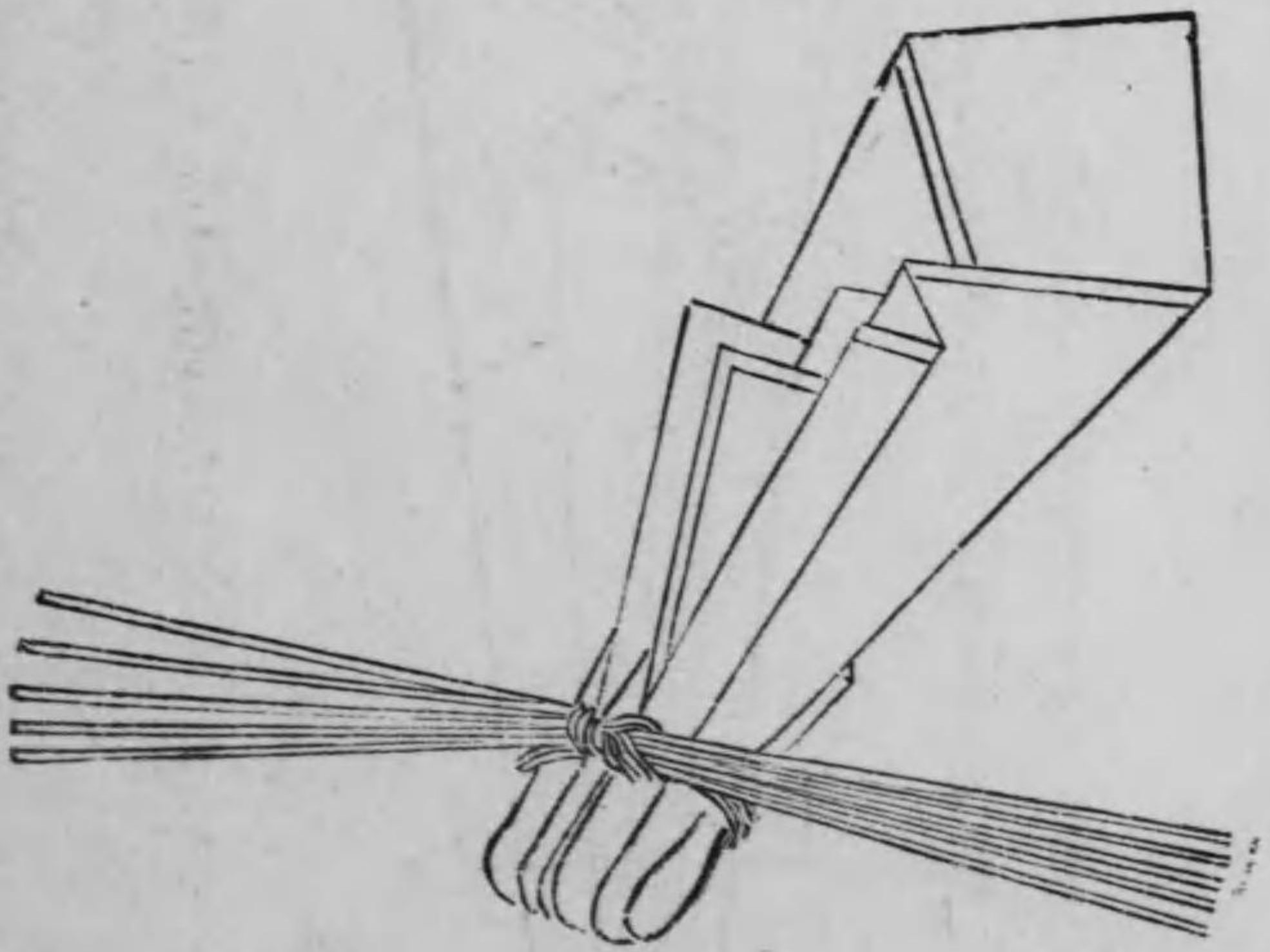


小笠原流折形

第二十一圖 實物

製作の圖 (其九)

○をりあげたる折形へ水引をかけたる圖なり。

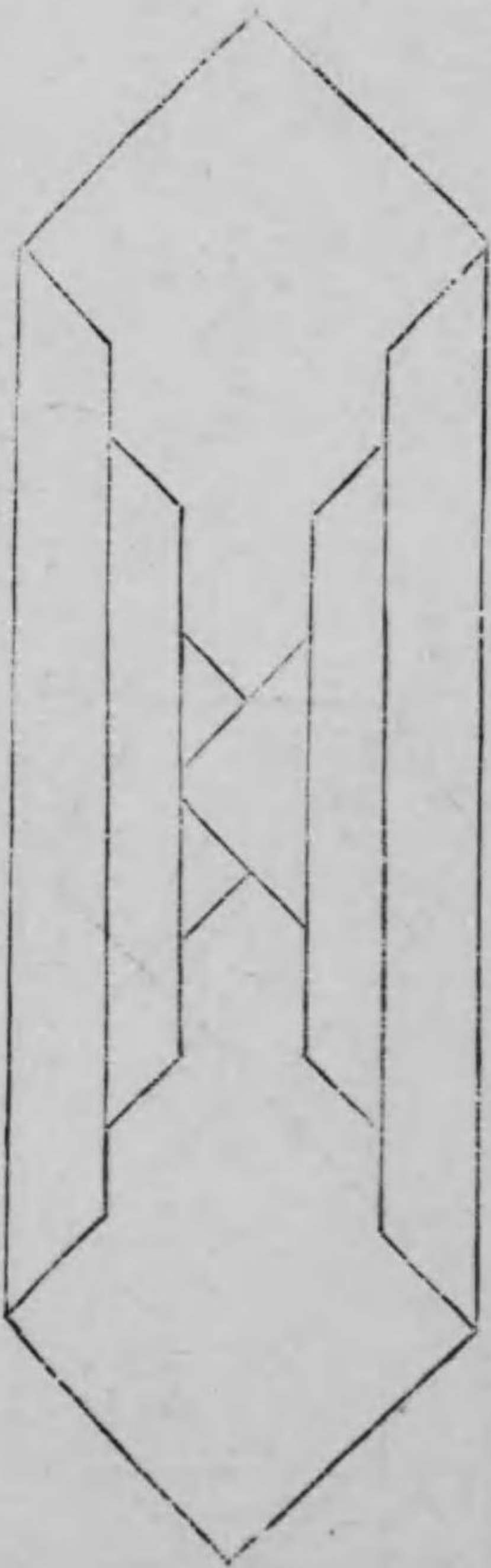


三〇

第二卷 文書類折形圖解

一、硯石包

下包なし、水引、書付あるべし、何硯など、硯石の名を書付るなり、紙は白雪がさね(表裏とも白)、又は色のかさねにても、水引は金銀、銀、いづれも細結、もろわなにてよろし。

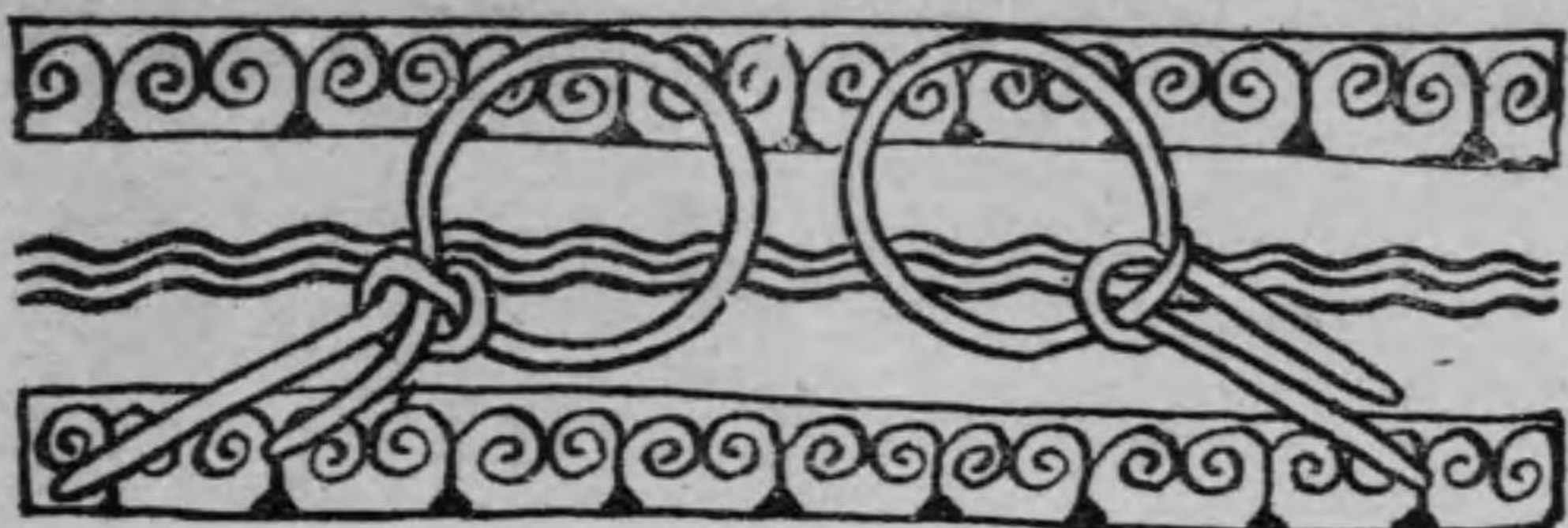


第二十二圖 硯石包 (其二)

△折あがり

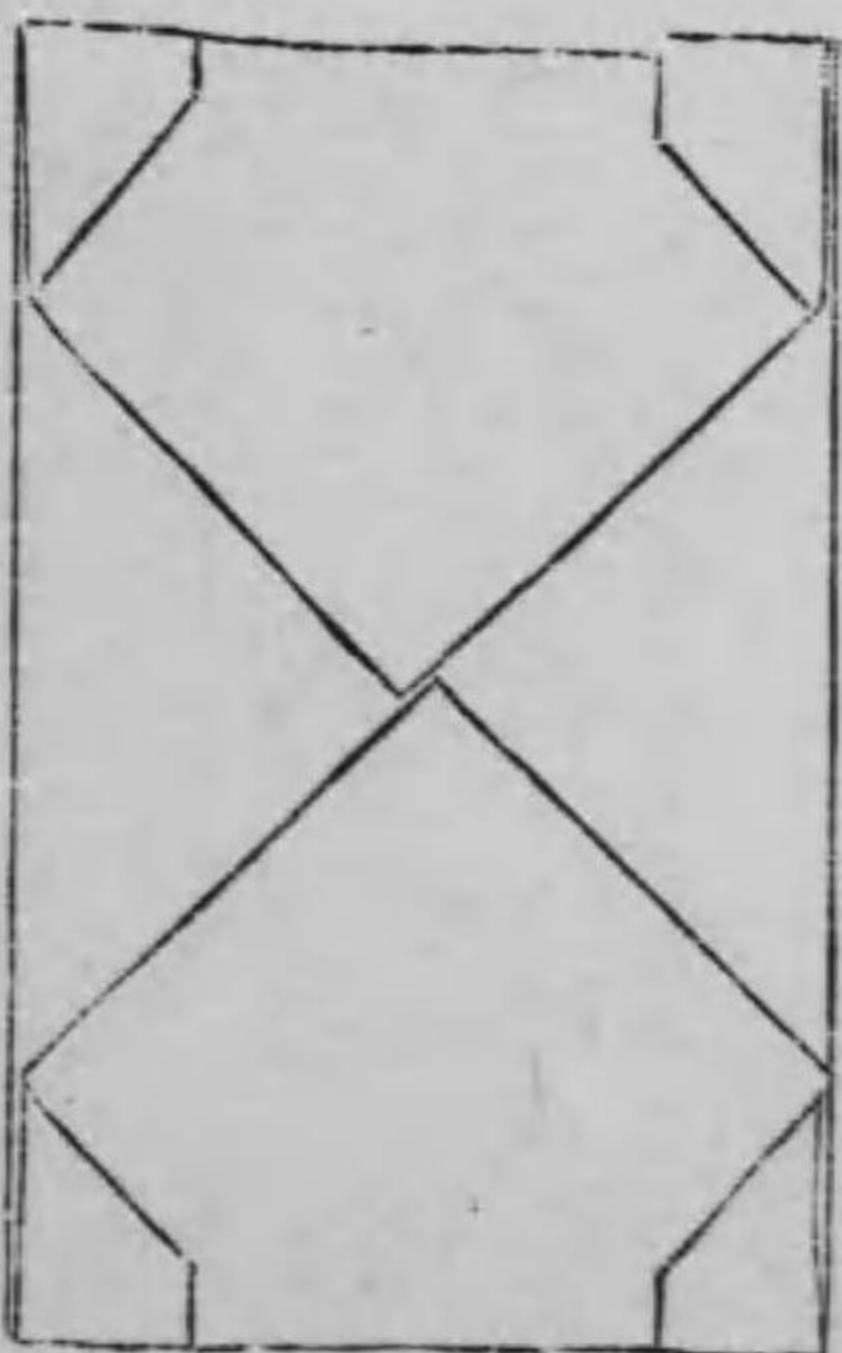
第二卷 文書類折形圖解

三一



第二十三圖 同 (其二)

△折あがりの上下を裏の方へ折りたる様なり。



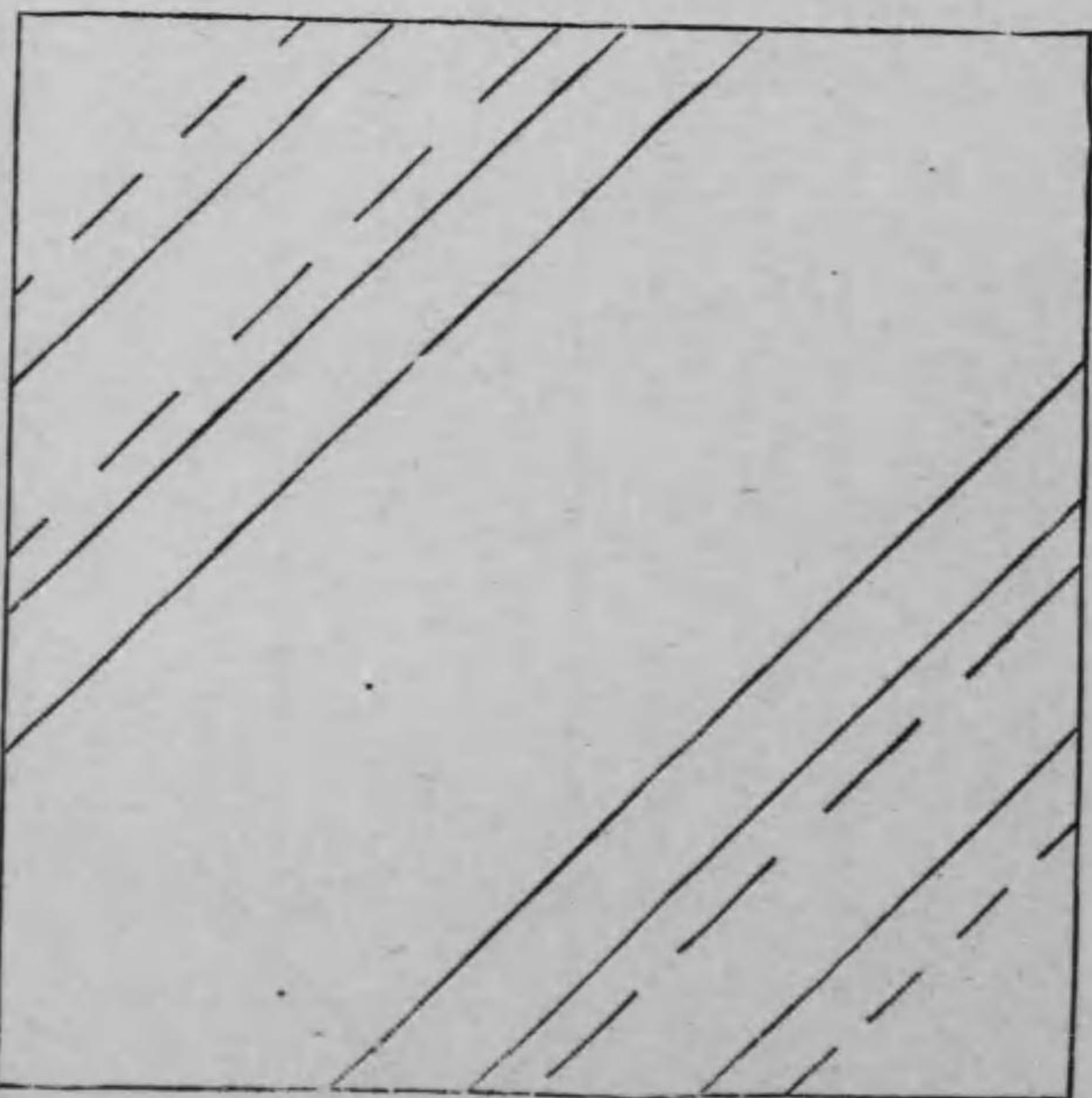
○普通には下包なしにて包めども、風流に下包を白きすきとほる紙にてつゝみ、また白絹などにて包みてもよし、さて右のやうに上を包むなり。

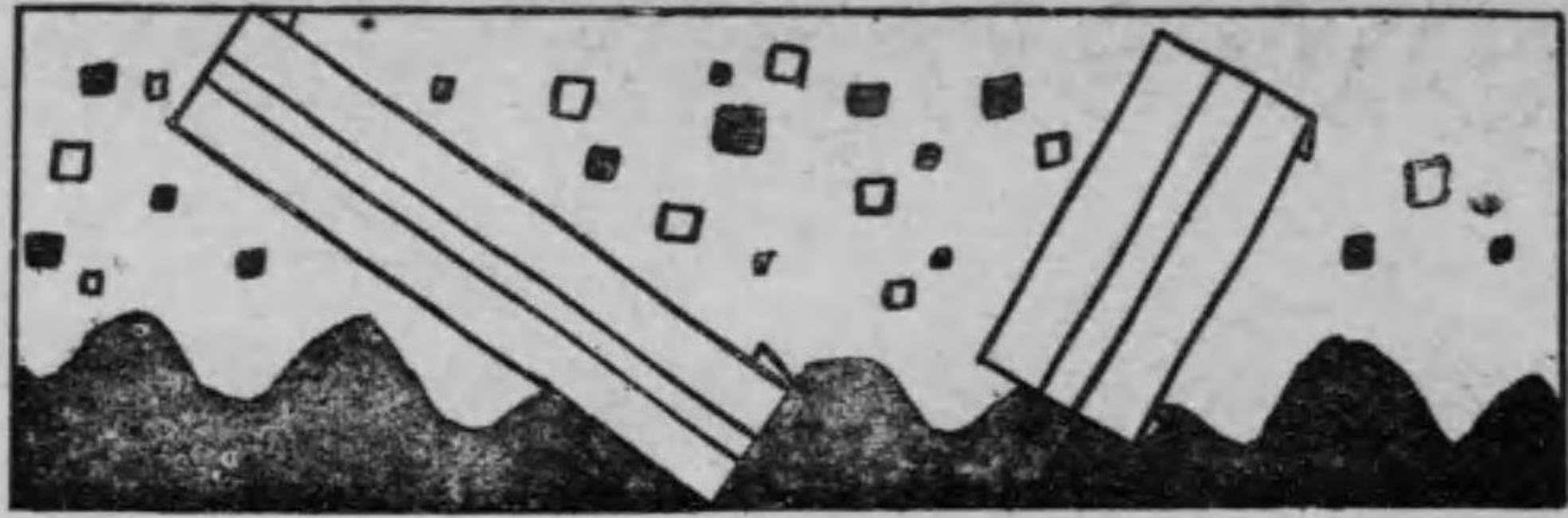
第二十四圖 同 (其三)

○硯石包のかたかみひらきたるところ

△すべて此様に折たるを形紙として、實物をつくる用紙にあて、よし。

△寸法は物により大小あるべし。





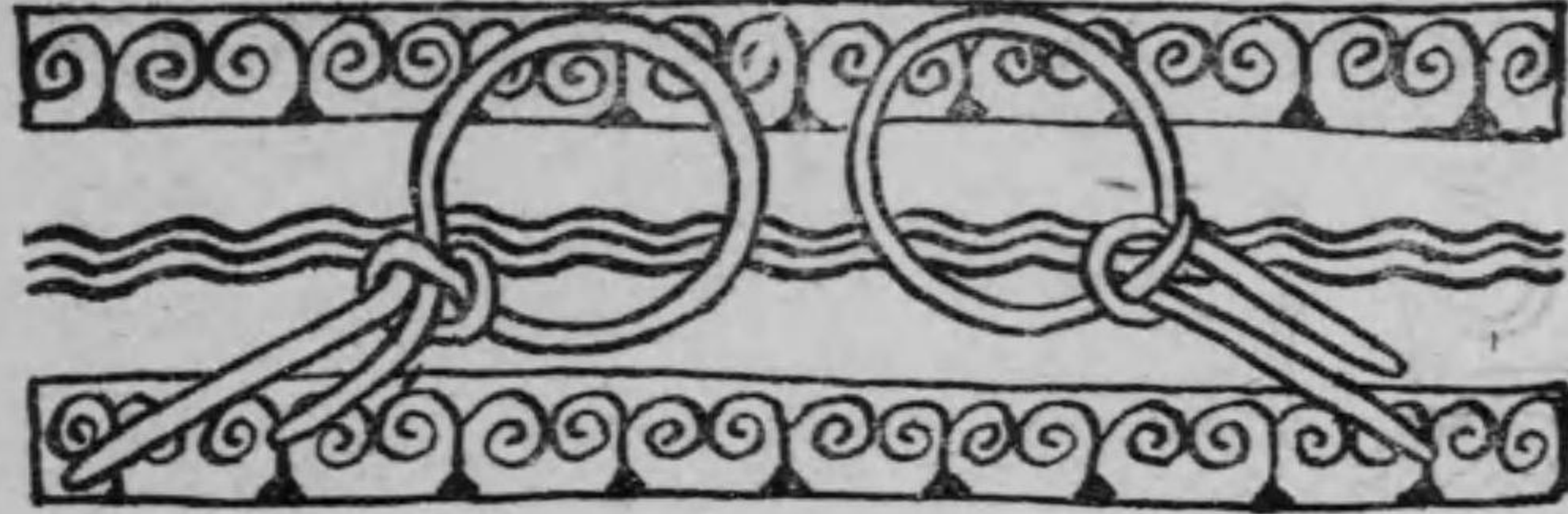
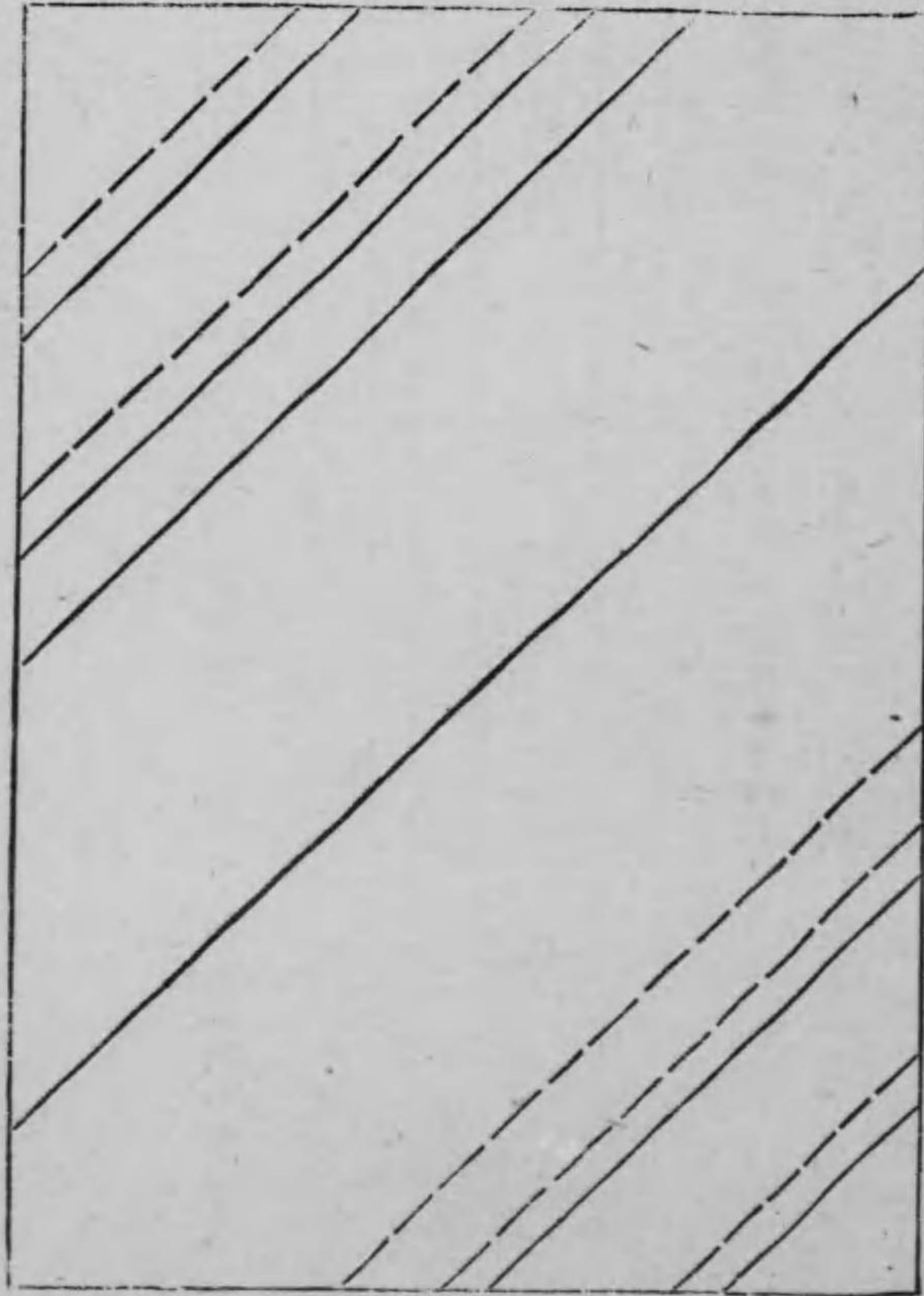
第二十七

圖筆墨包

(其三)

△寸法紙の割合の中以上の紙とりにてをるべし。

第二卷 文書類折形圖解



小笠原流折形

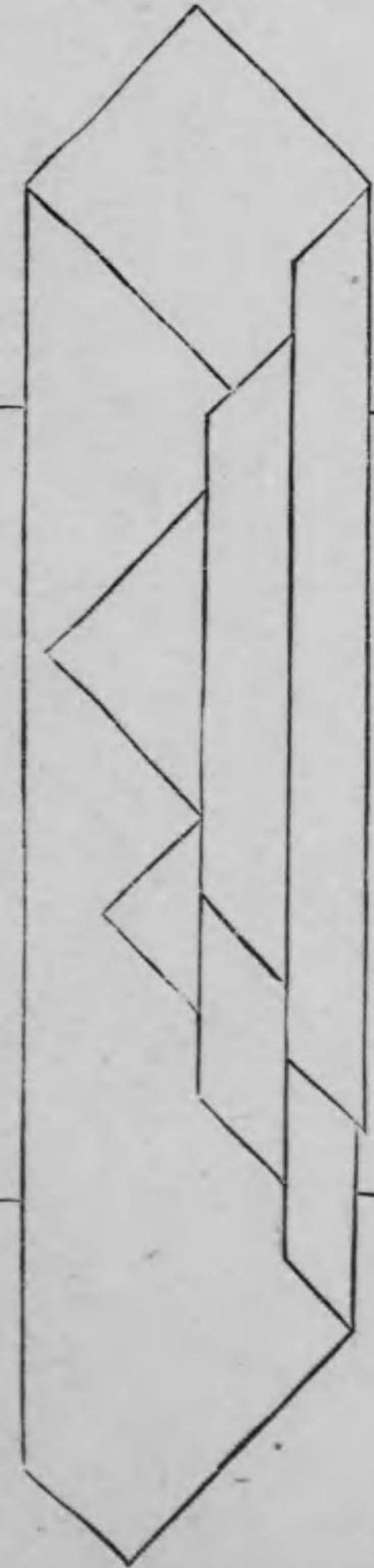
二、筆墨包 下包なし、水引、書付あるべし、紙、水引結方右に同じ。

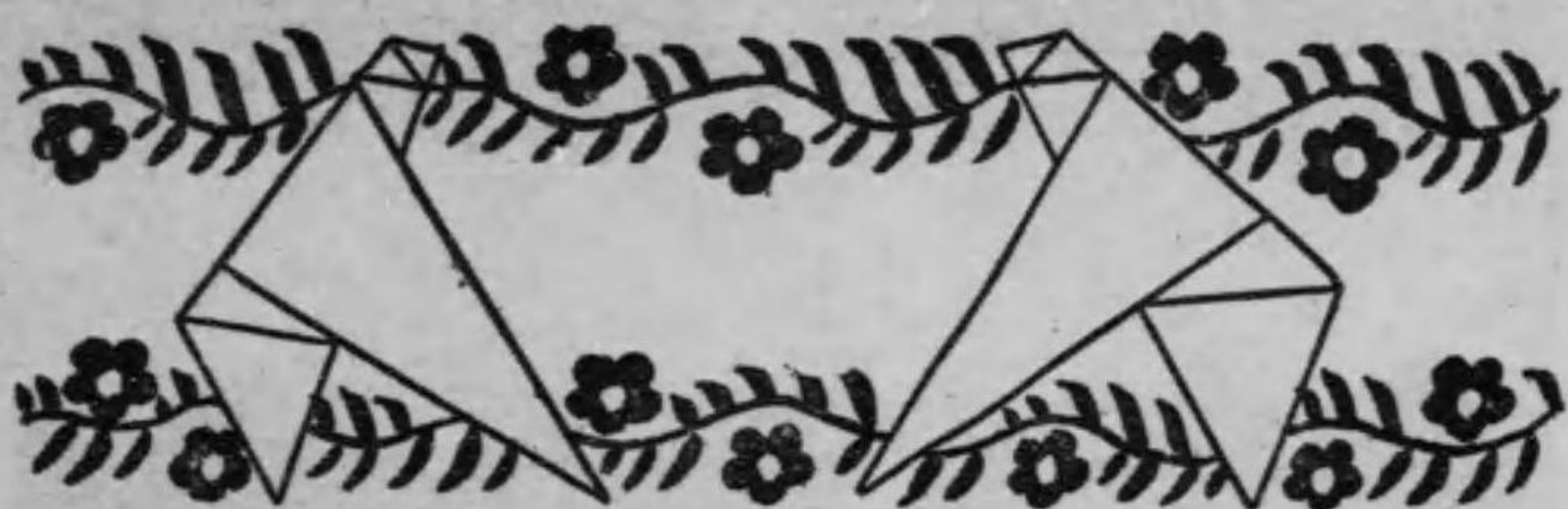
第二十五圖

筆墨包 (其二)

△折あがり。

第二十六圖 筆墨包 (其二)
△折あがりの上下を、うらの方へをりたるなり。





三、料紙包

白紙なれば、色がさねにて包み、色紙なれば白紙にて包むべし、水引はつかはず、包み紙と

同じ紙を

細くたち

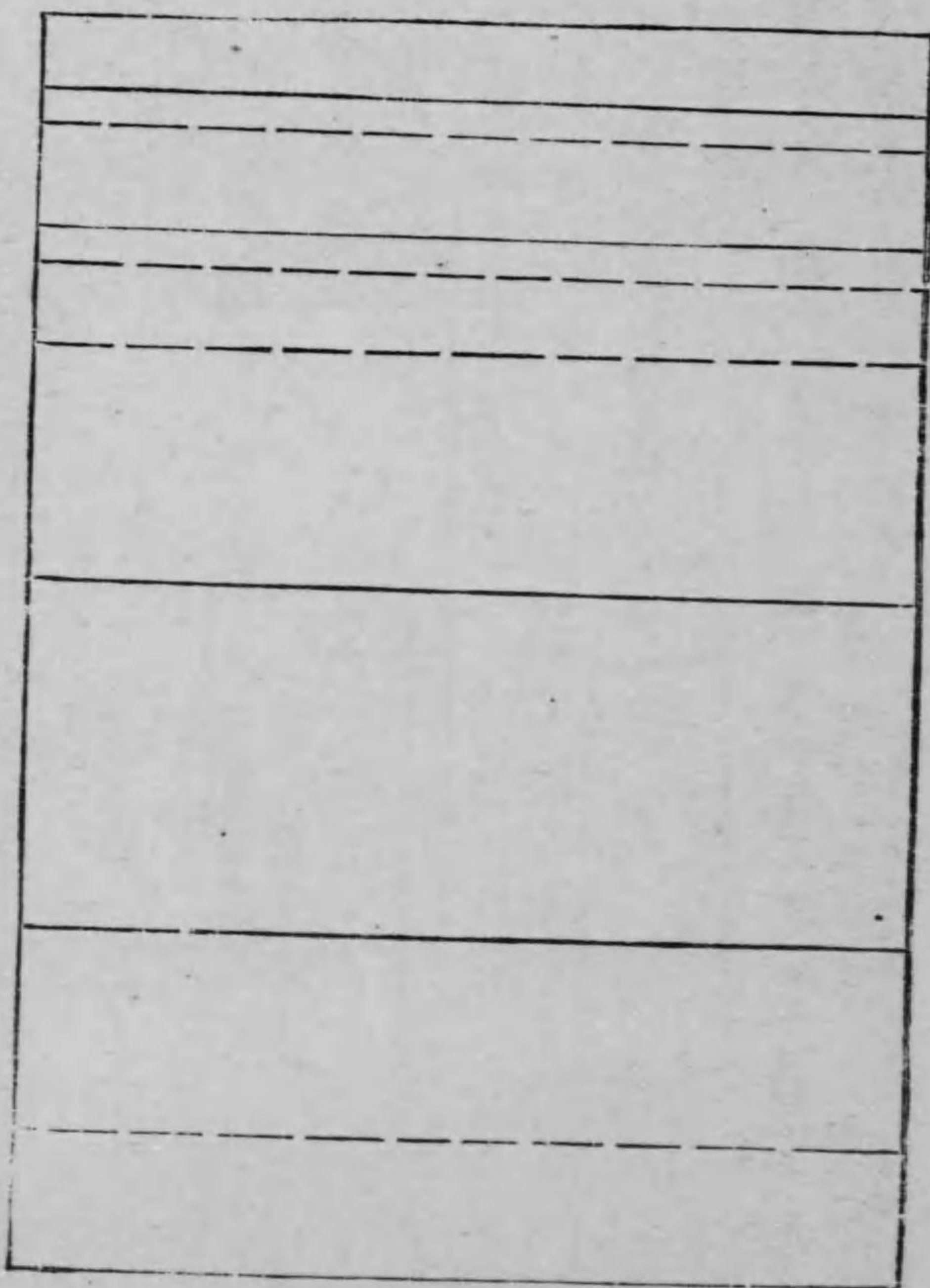
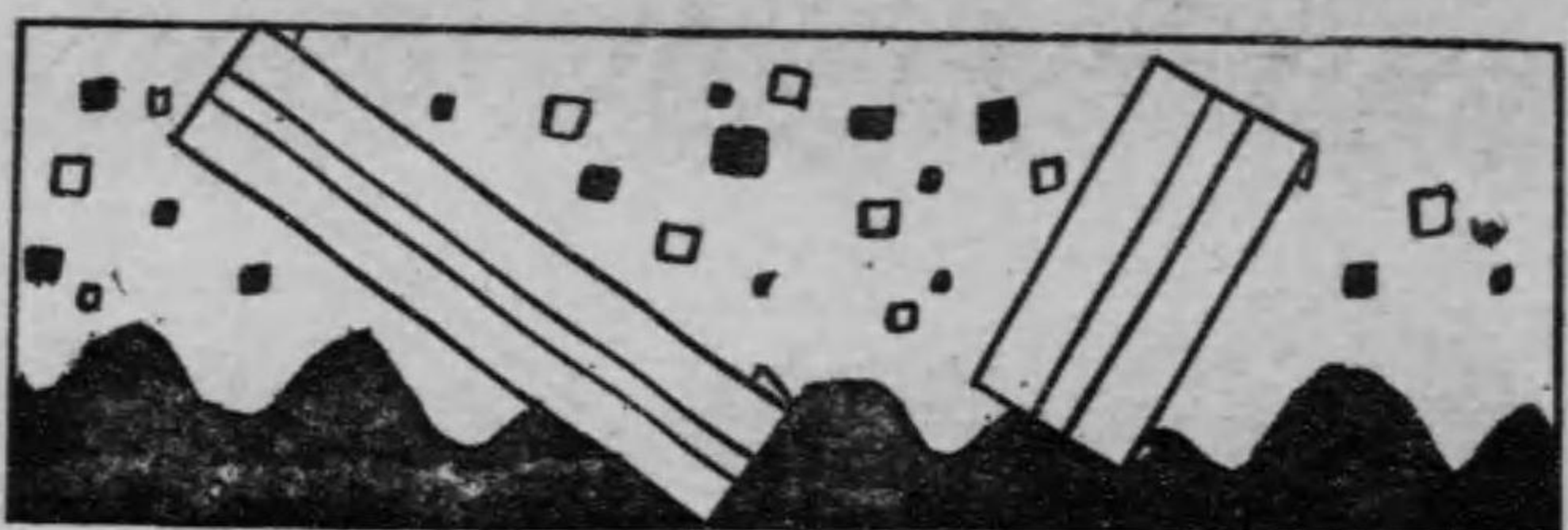
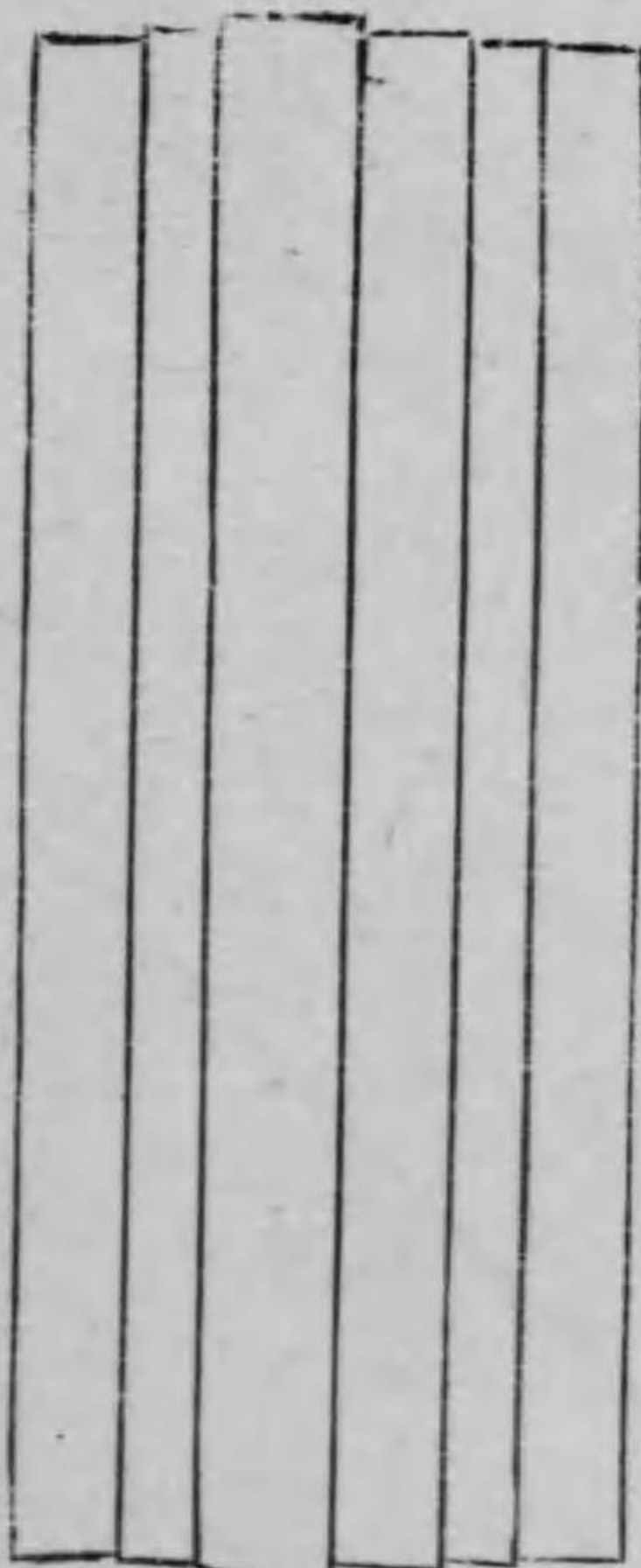
三折にた

ゝみて結

ぶ、又厚

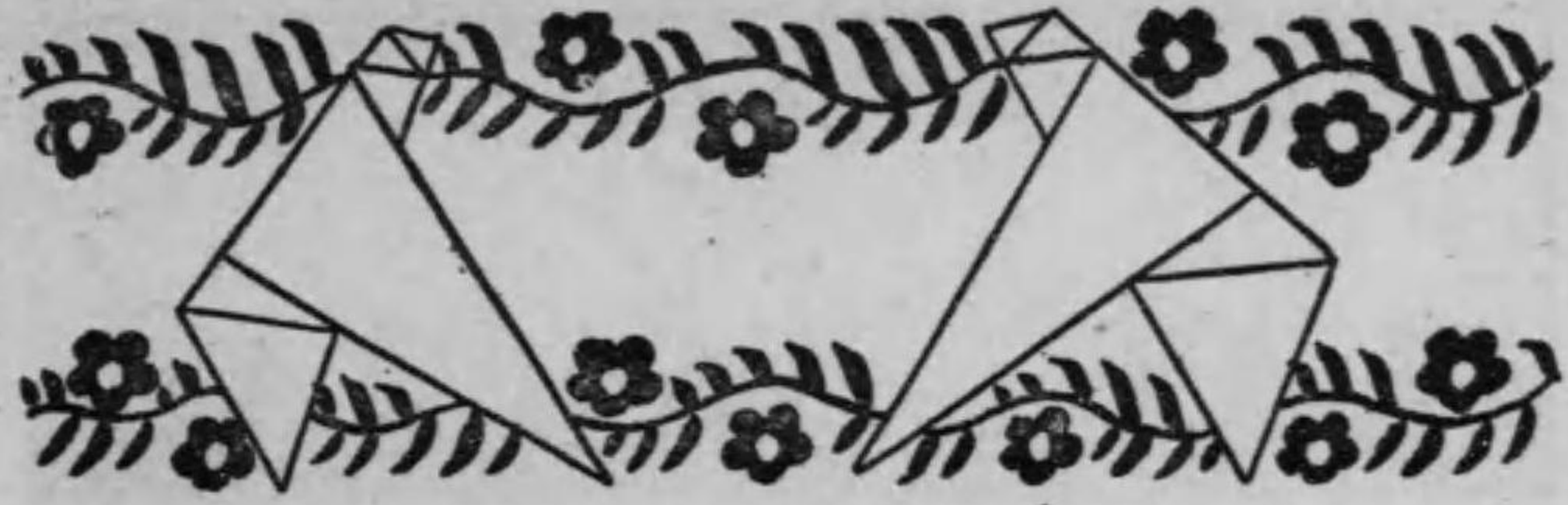
紙を三分五分程の細さに裁てもつかふべし、書付あるべし。

第二十八圖 料紙包 (其一) △折あがりこぐち、右の圖にて見るべし。



△包む料紙のたけに合せ寸法を定むべし。

第二十九圖 料紙包 (其二)



四、巻紙包

是は水引にて結てもよし、紙は右に同じ、書付あるべし。

第三十圖 巻紙包 (其一)

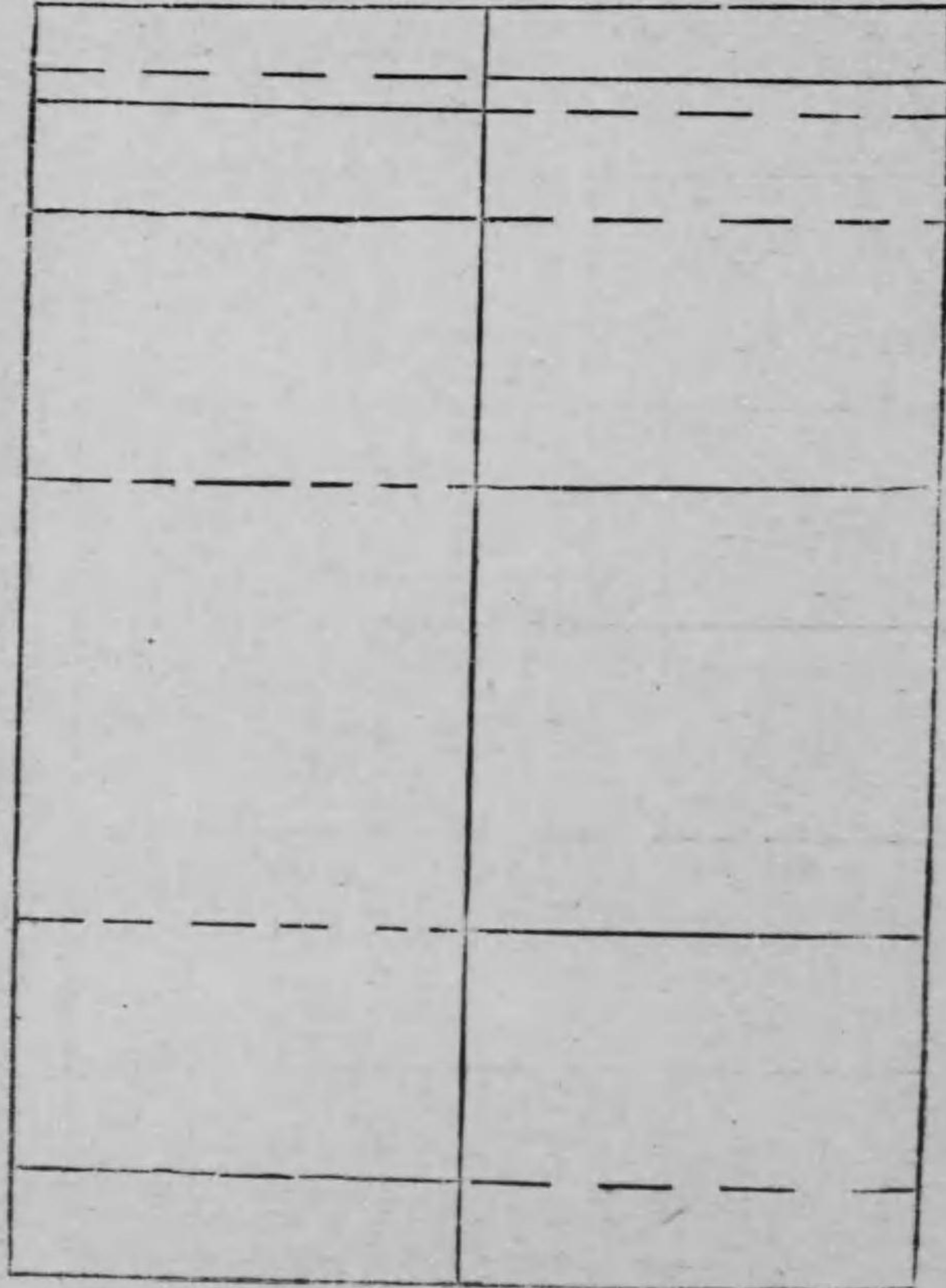
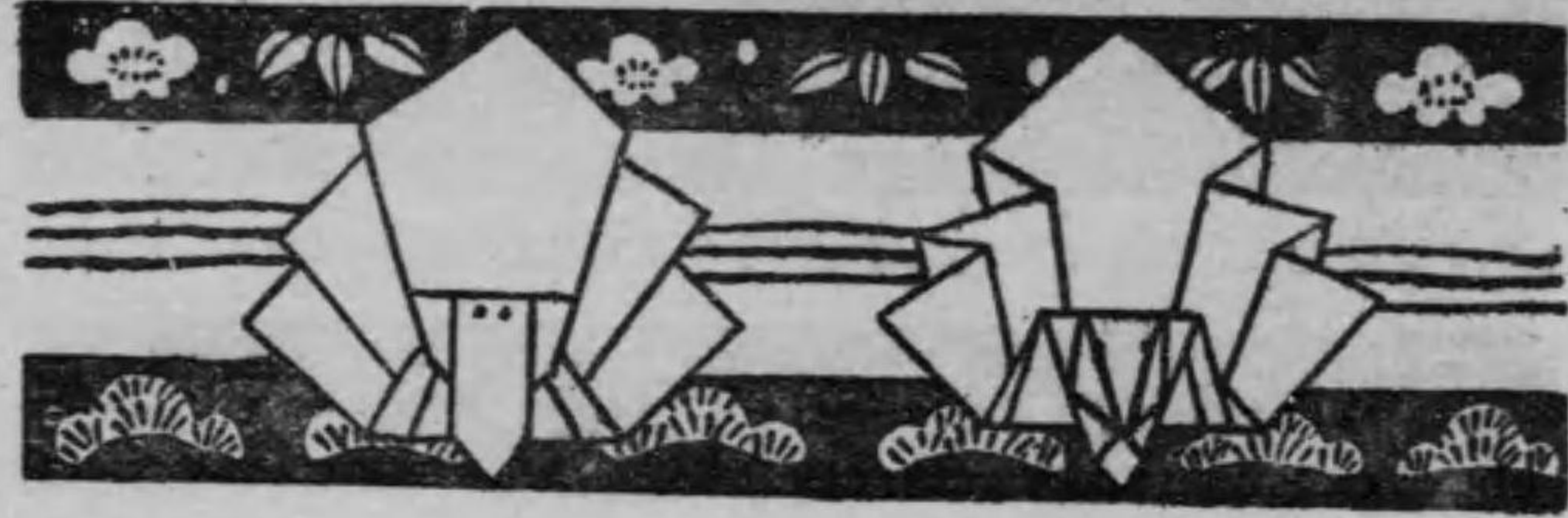
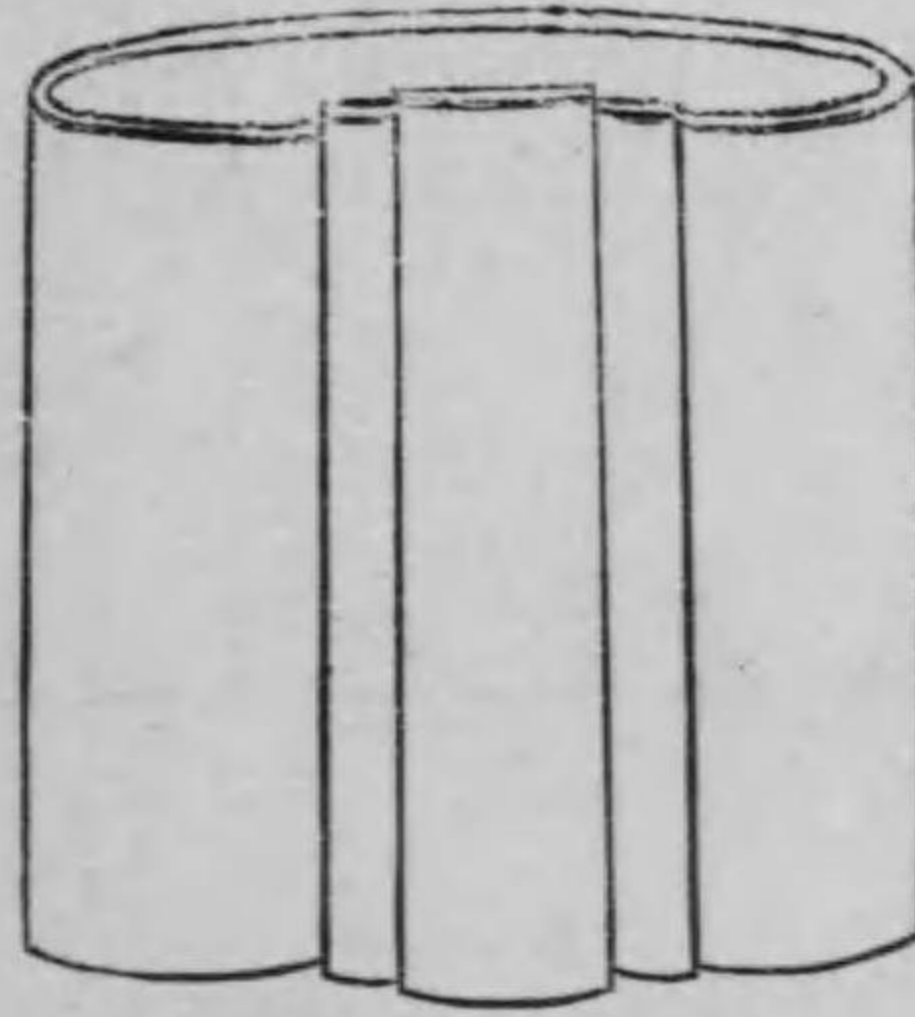
△折あがり

○上の方、かさねたる紙の木口なり。

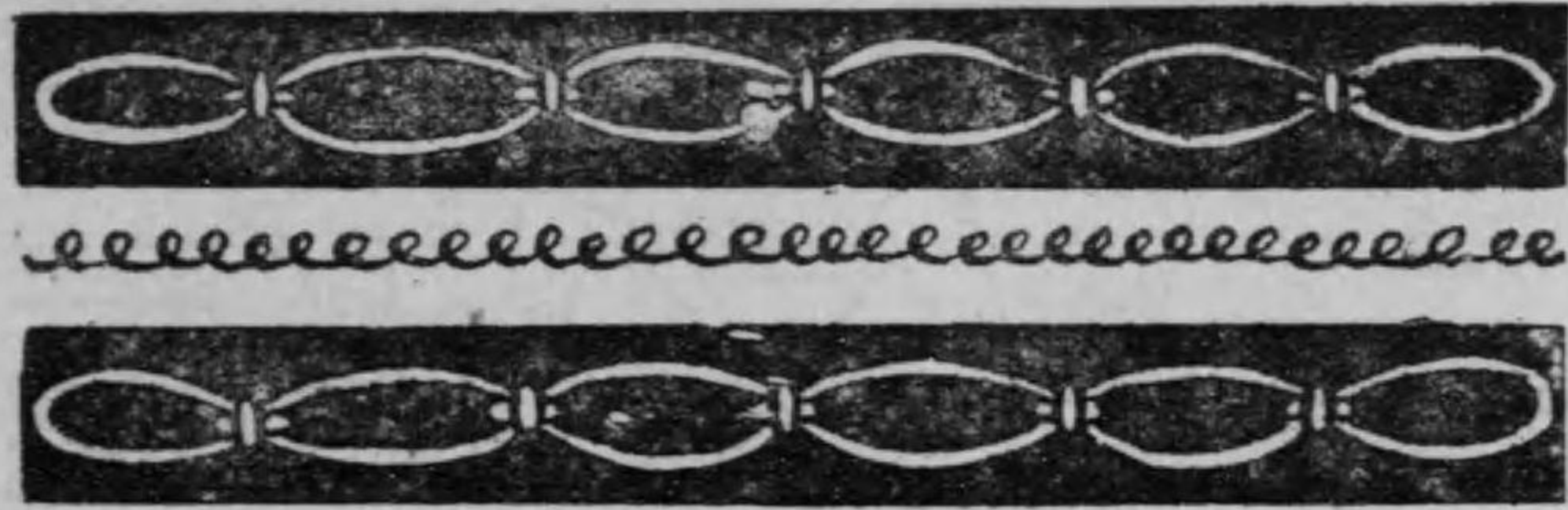
○下の方、折やうを知らせたる

圖なり。

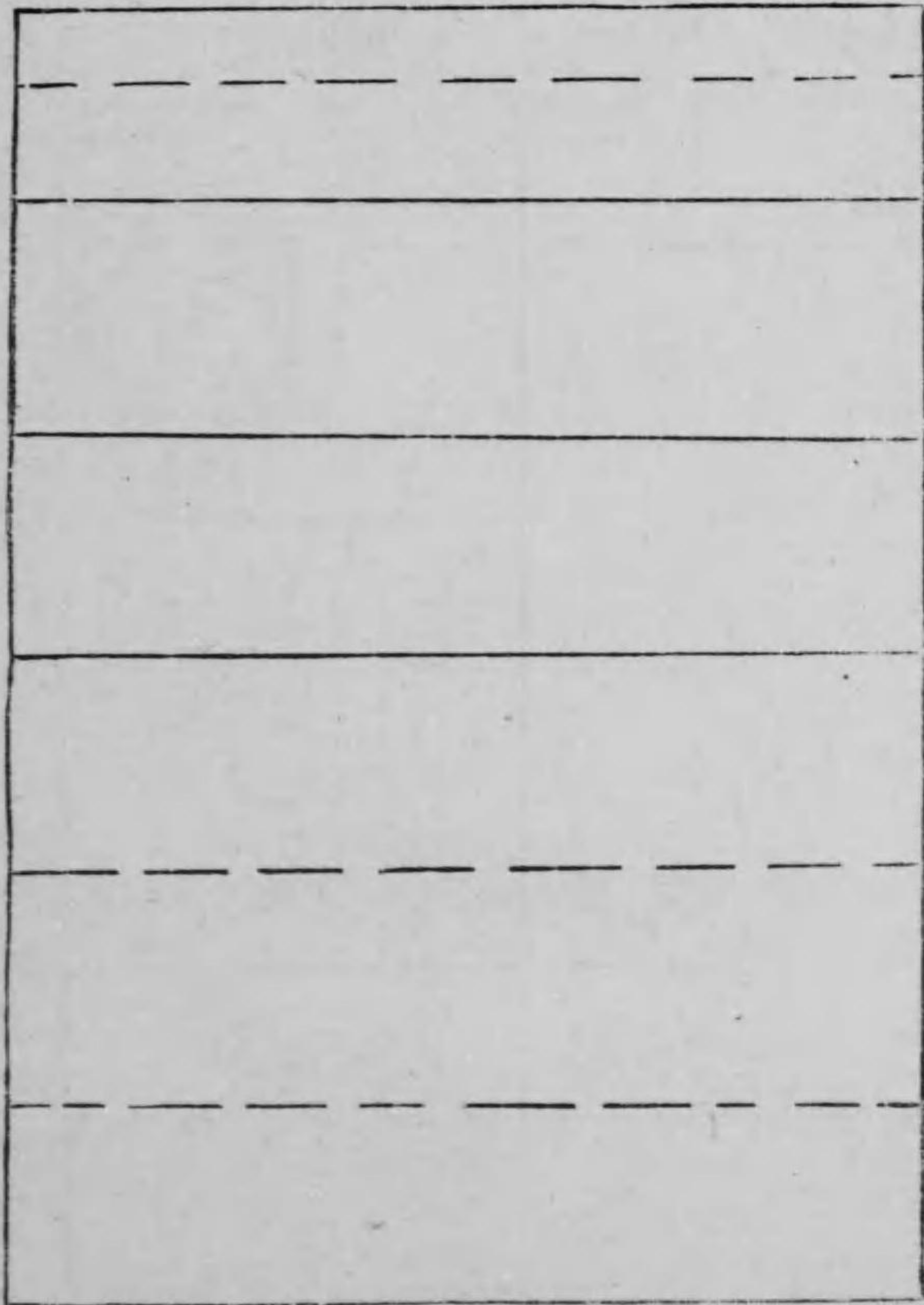
△次の圖は、右をひらきたる紙の表なり。初に横のをりめのとほり二つにをりかさねて。それよりせんの通りにをる。



第三十一圖 巻紙包 (其二)

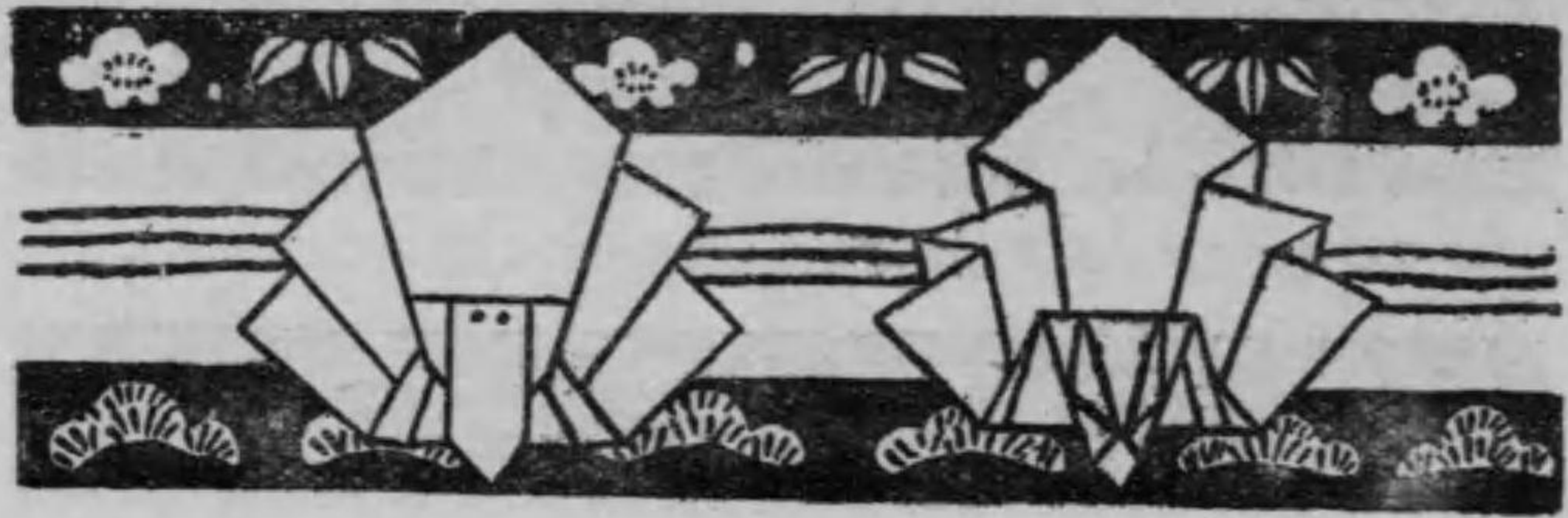


小笠原流折形
五、文筒包 是は料紙包に同じ、水引なし、書付あるべし。



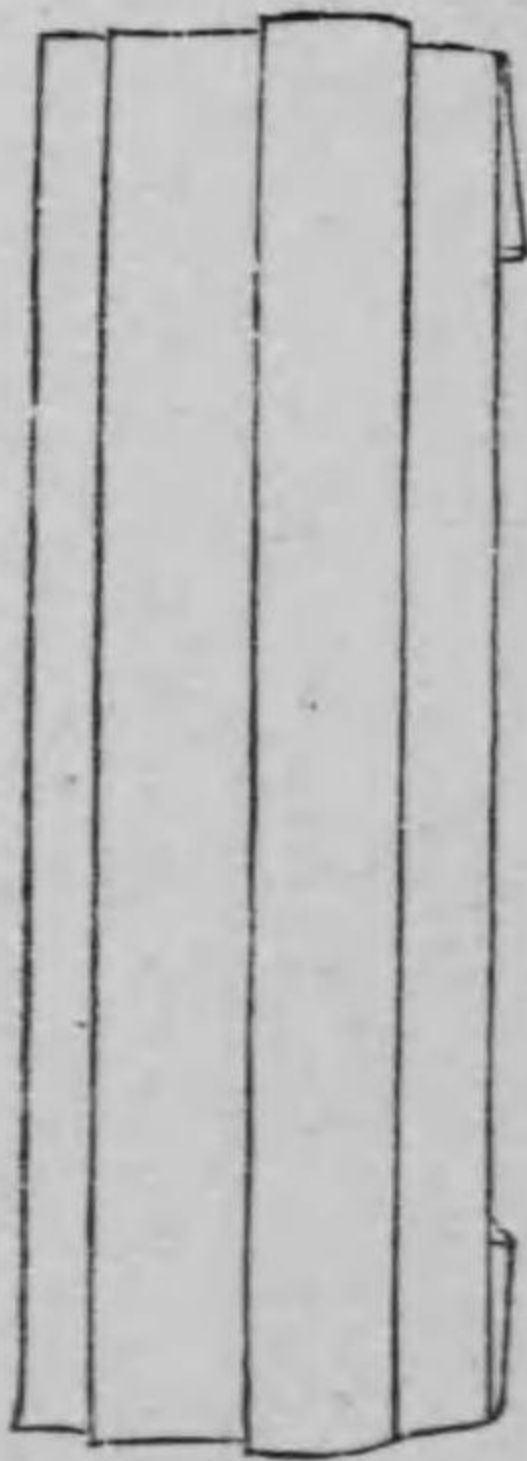
四〇

第三十三圖 文筒包 △をりやう。
○實物は、寸法紙の中以上にて。



第三十三圖 文筒包

△折あがり

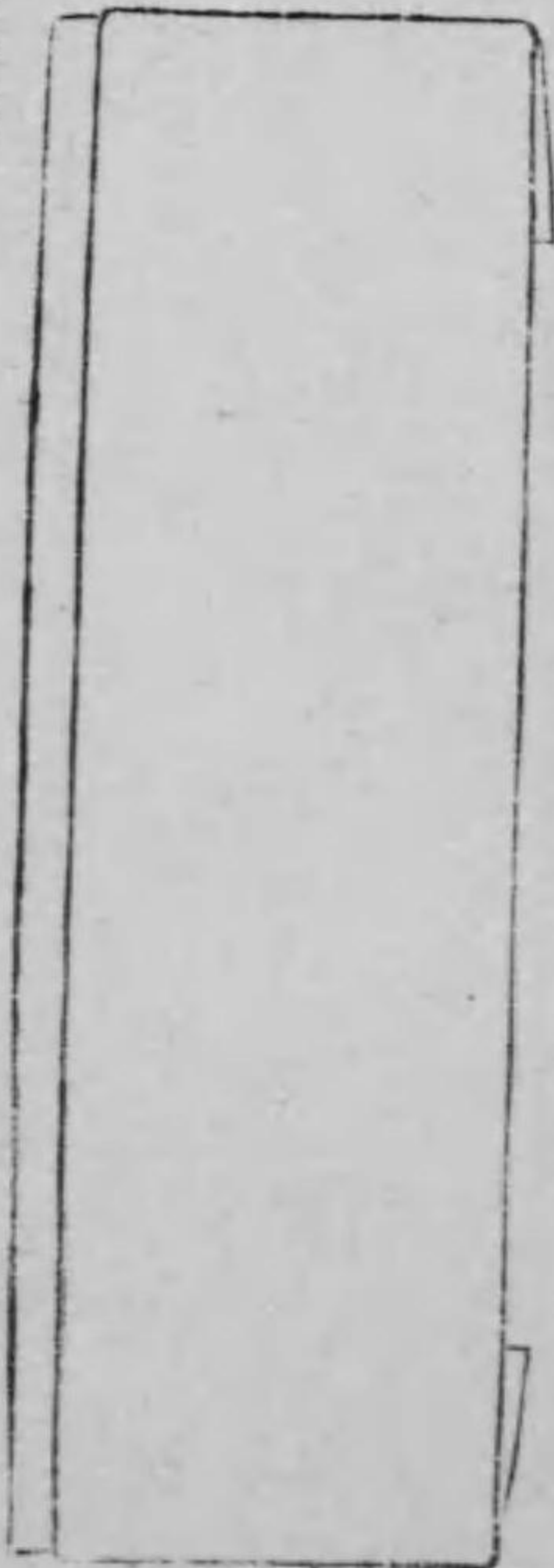


六、懷紙願書包

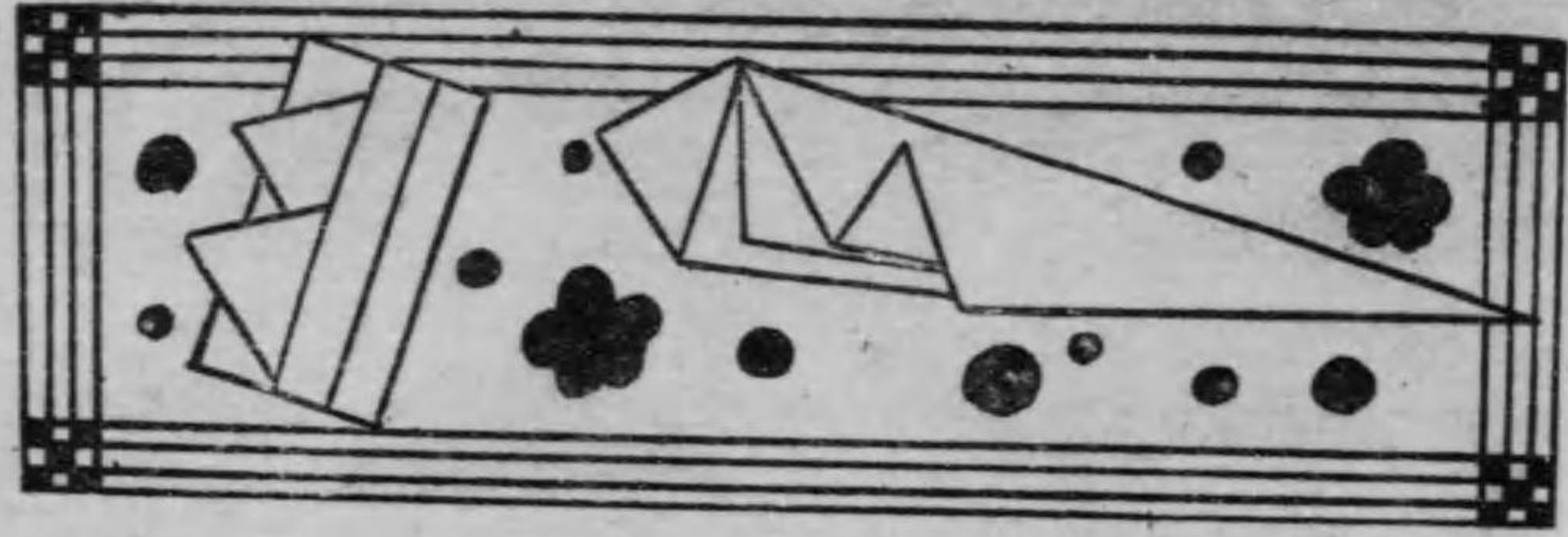
和歌をかくふところ紙、神前への願書を包む、何れも書付に姓名をかくなり。

第三十四圖 ○懷紙願書包

△折あがり

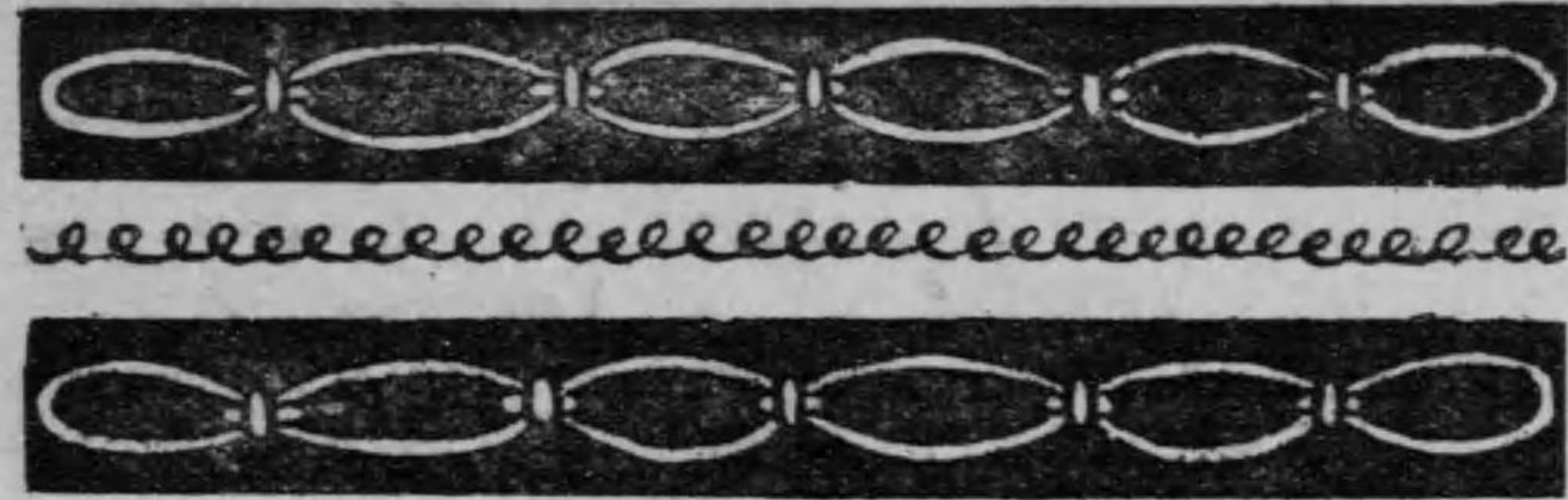
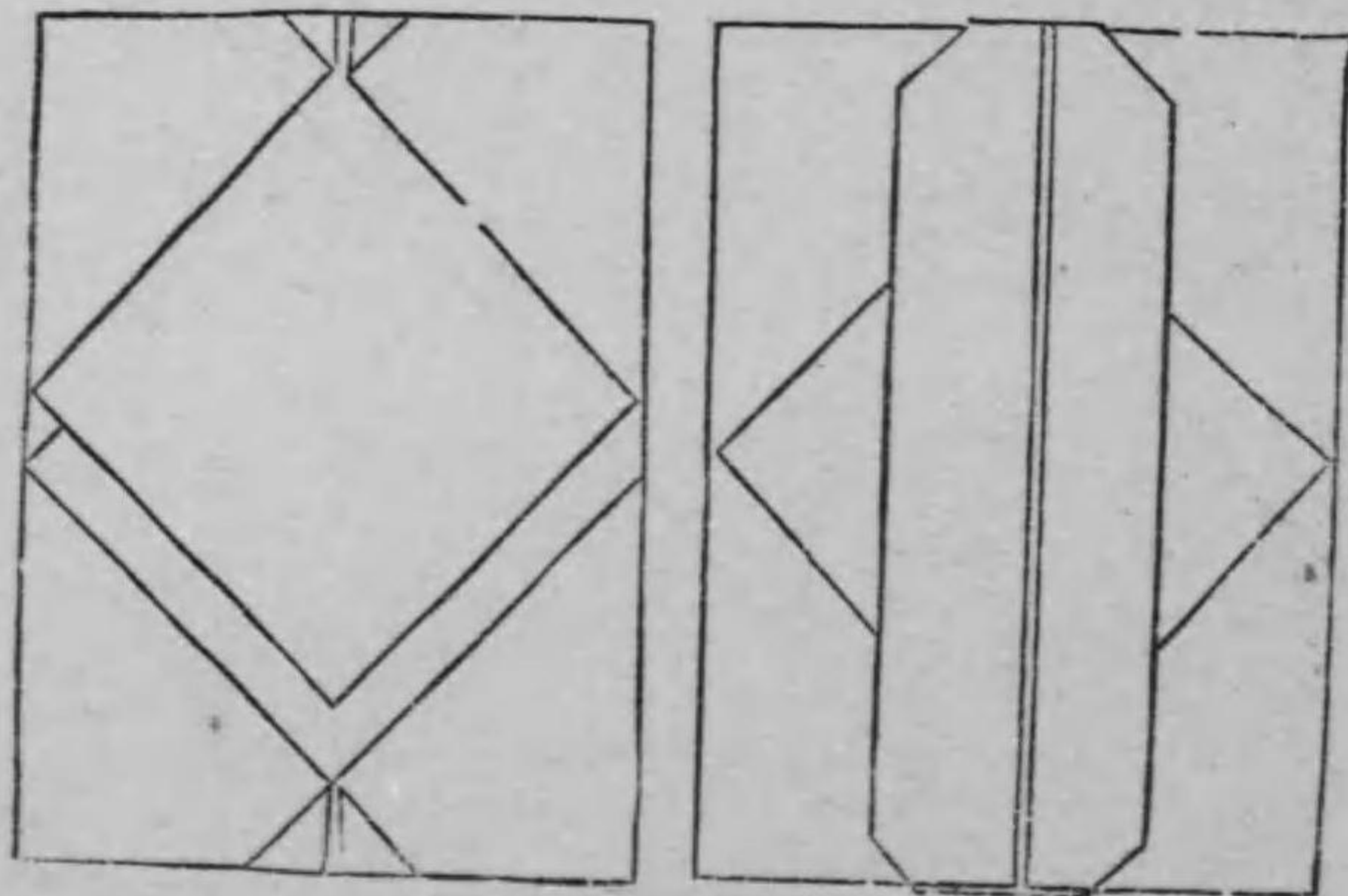


四一



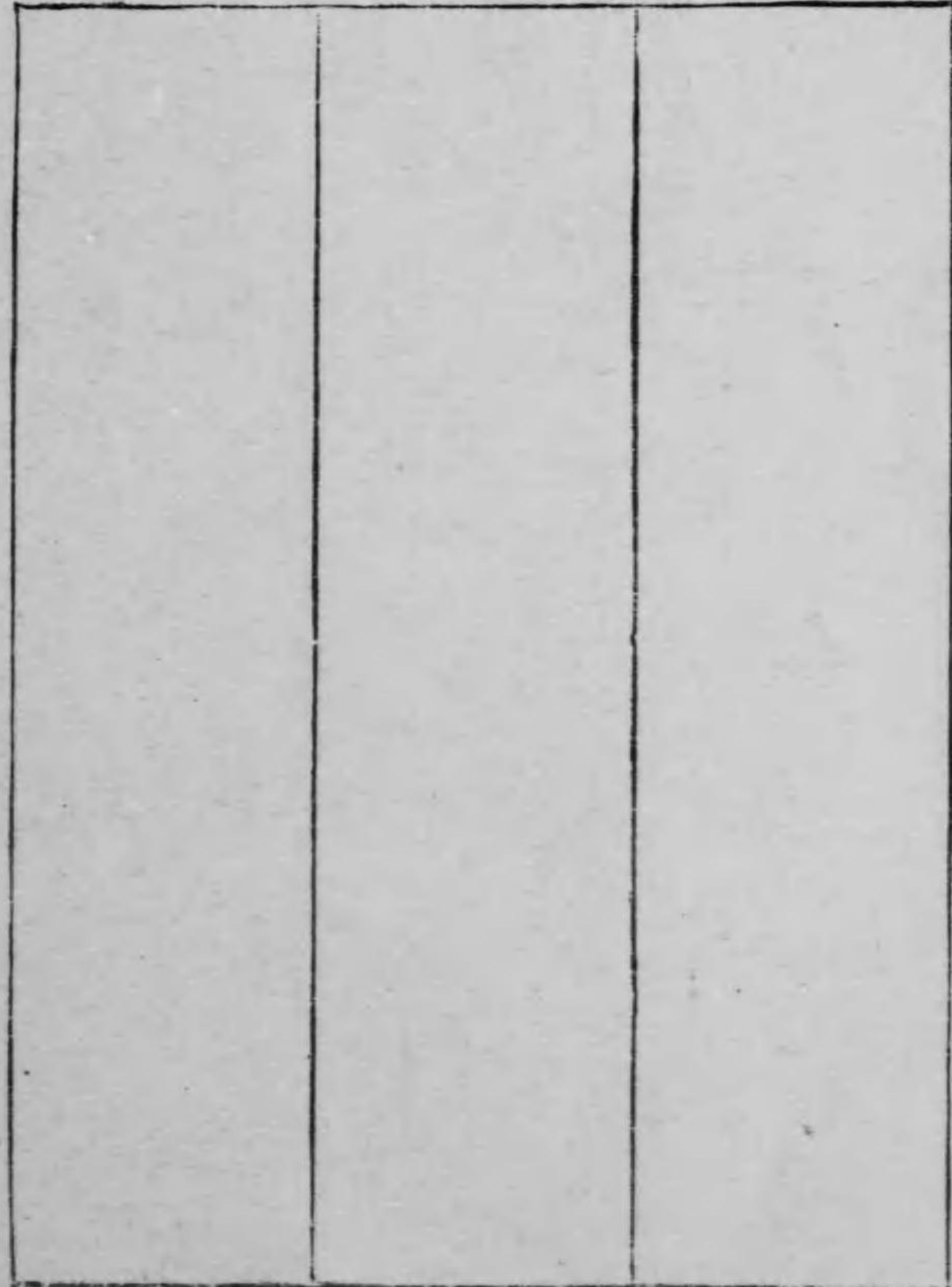
第三十七圖 色紙包 (甲の形)
 △折あがり、裏の方

七、色紙包 (甲) 水引も書付もなし
 第三十六圖 色紙包 (甲の形)
 △折あがり、表の方
 ○色々の紙をかさねて包むべし、三枚かさね、
 五枚かさねにもするなり。



第三十五圖 懷紙
 願書包
 △をり
 やう

小笠原流折形





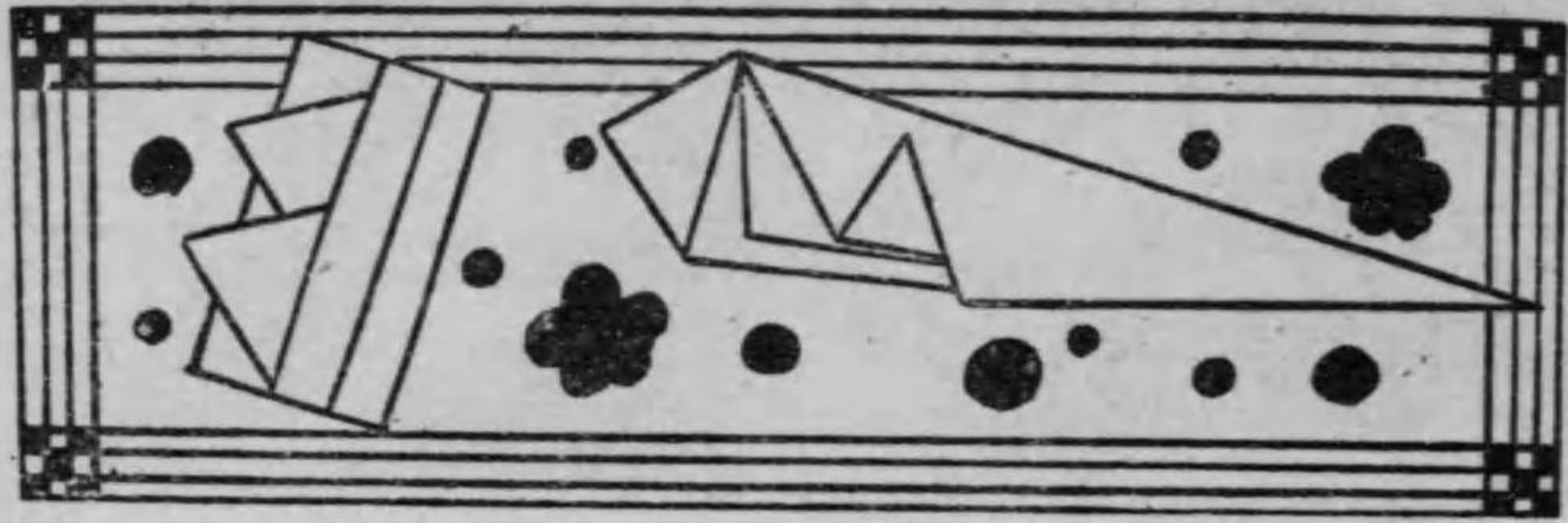
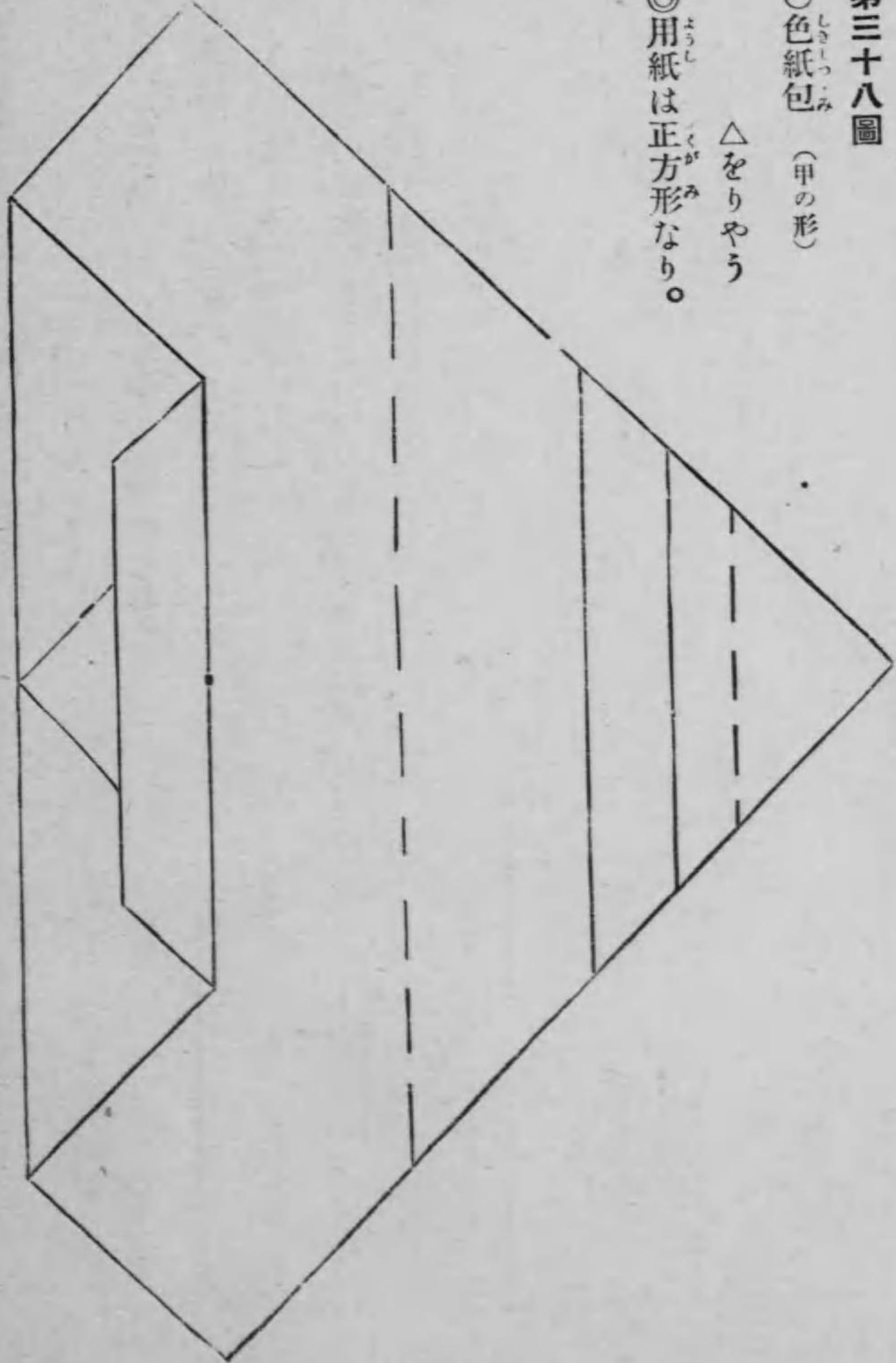
小笠原流折形

第三十八圖

○色紙包 (甲の形)

△をりやう

◎用紙は正方形なり。



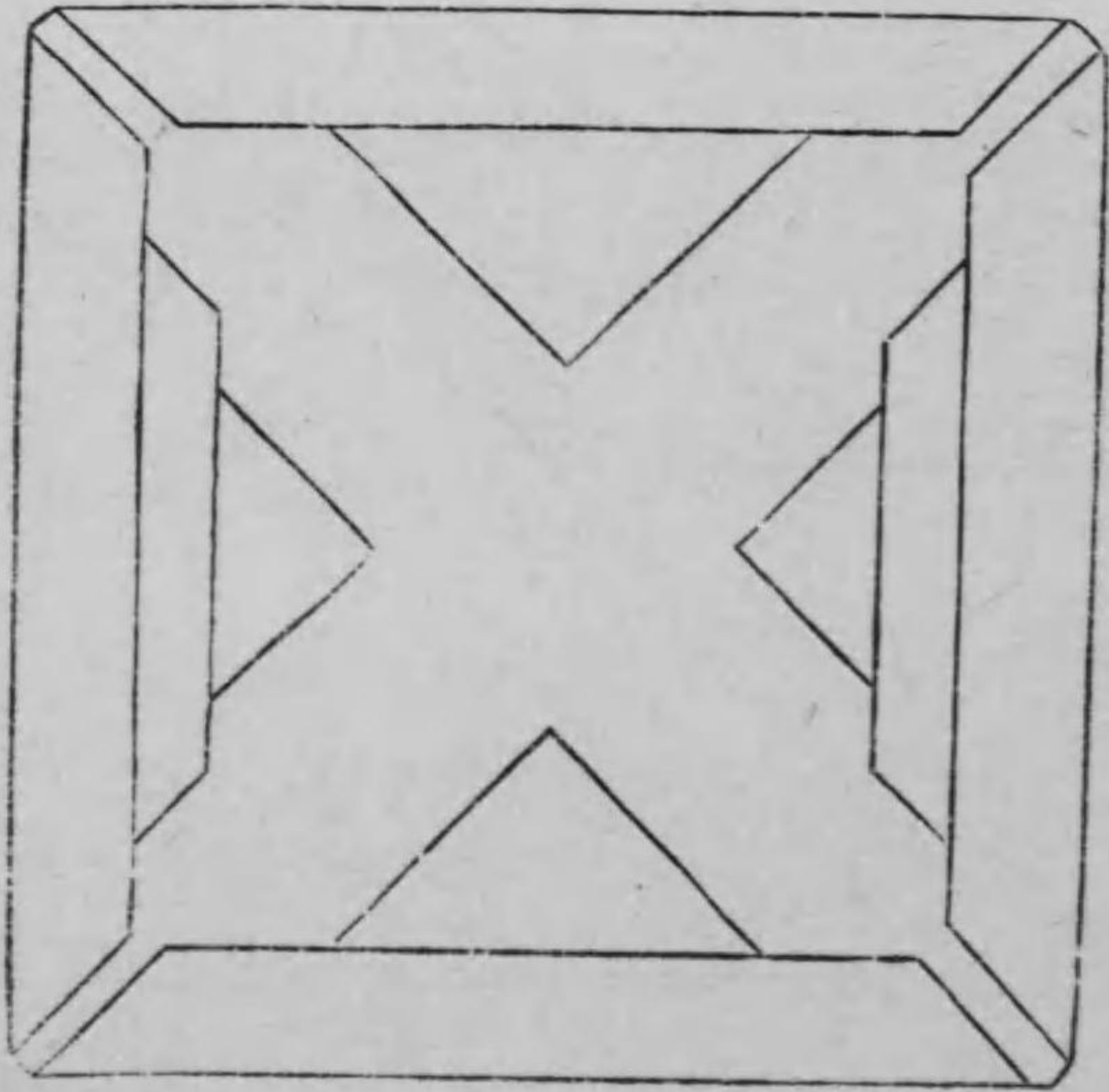
八、同

かきたる色紙を包むなり。

◎紙のこと右に同じ。

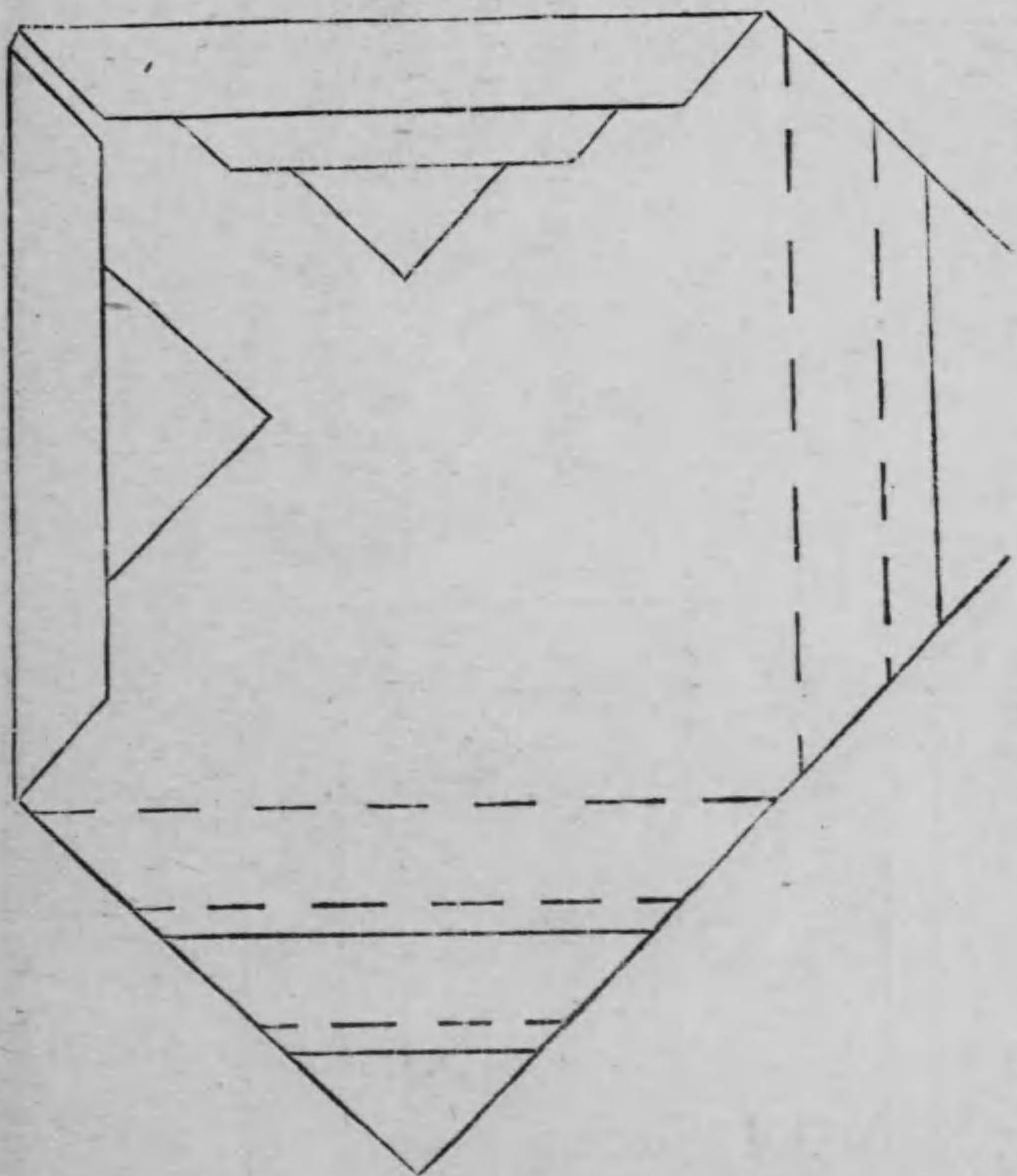
第三十九圖

○色紙包 (乙の形) △をりやう





小笠原流折形



四六

第四十圖
○色紙包
△折やう
この形

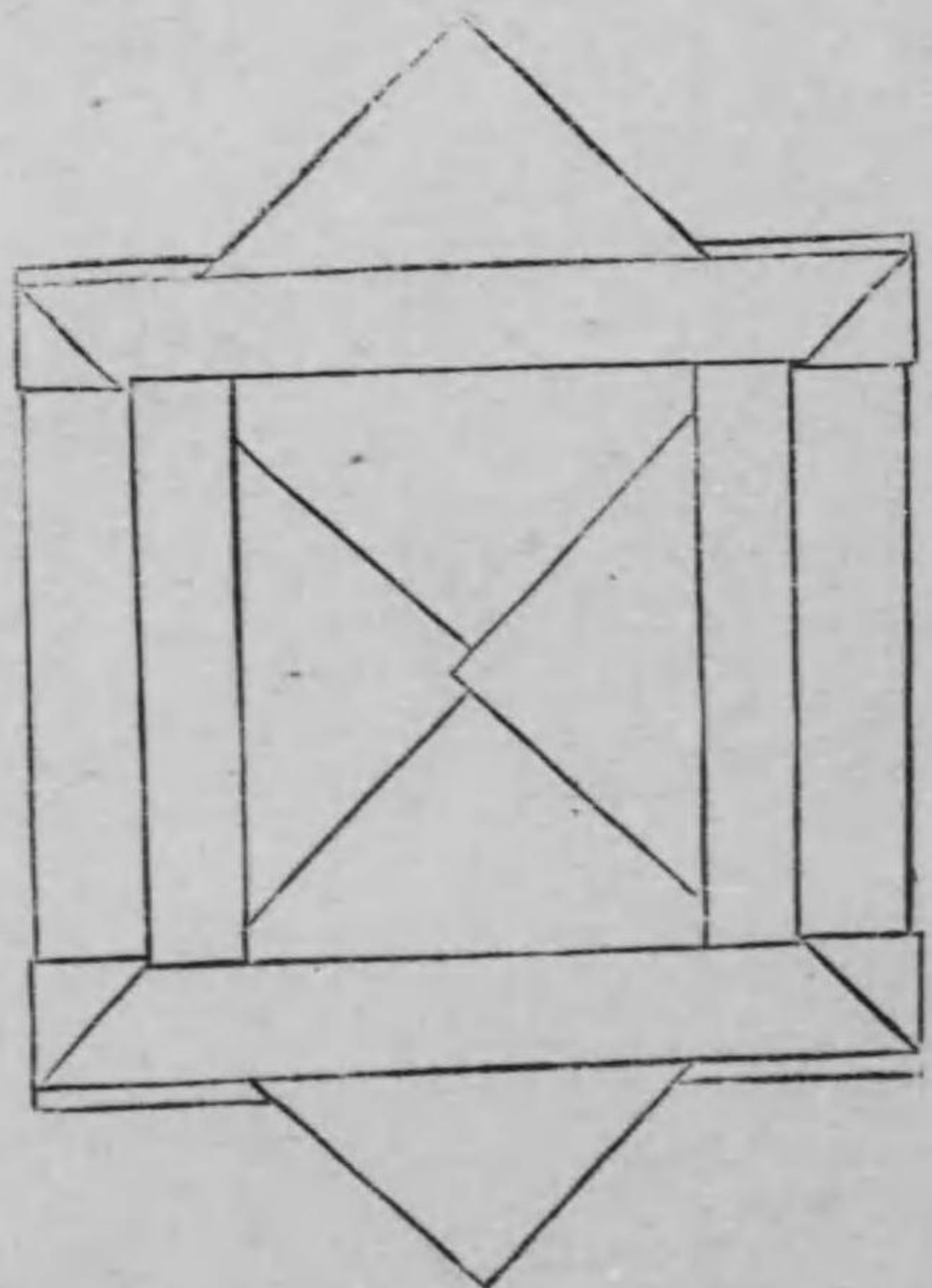


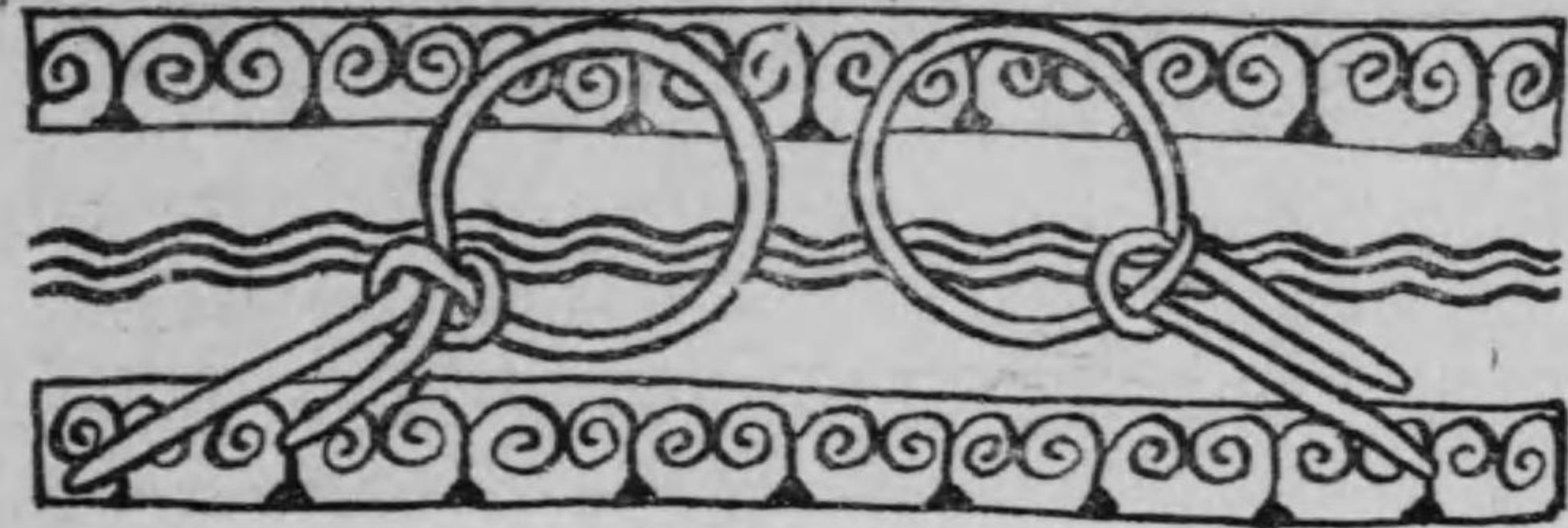
八、同 (丙)
かきたるにもかゝざるにもつかふなり、紙右に同じ。

第四十一圖

○色紙包 (丙の形)

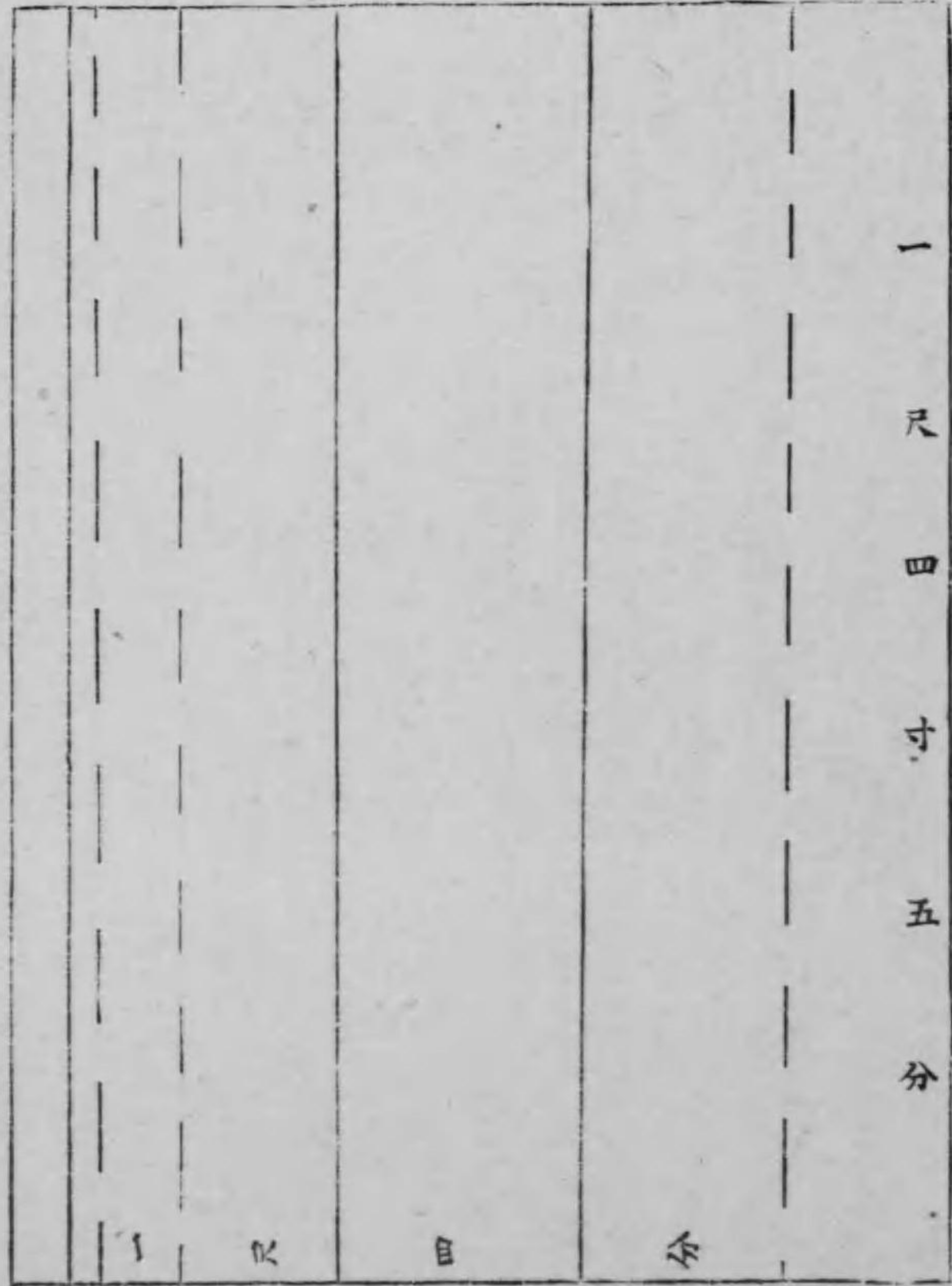
△をりあがり





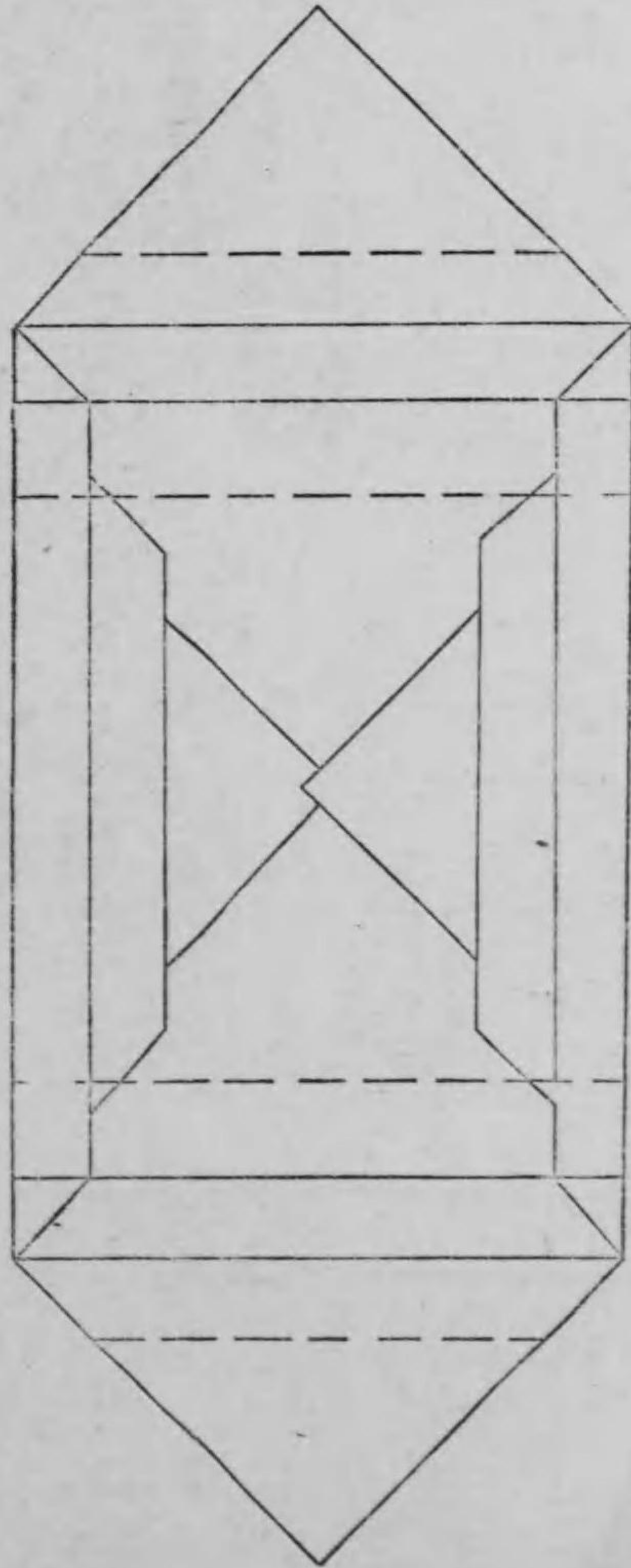
十、短冊包 (甲) 水引をかくる書付な
 し、紙右に同
 第四十三圖
 たんざく包 (甲の形)
 △かた紙をりやう

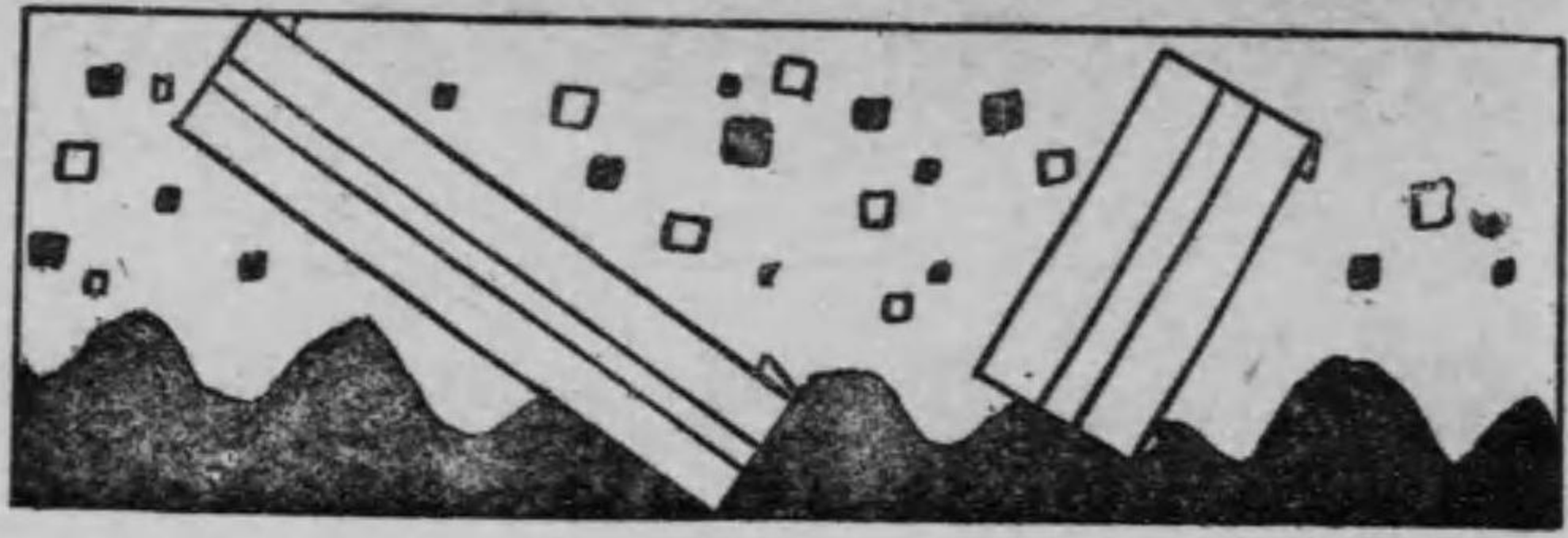
第二卷 文書類折形圖解



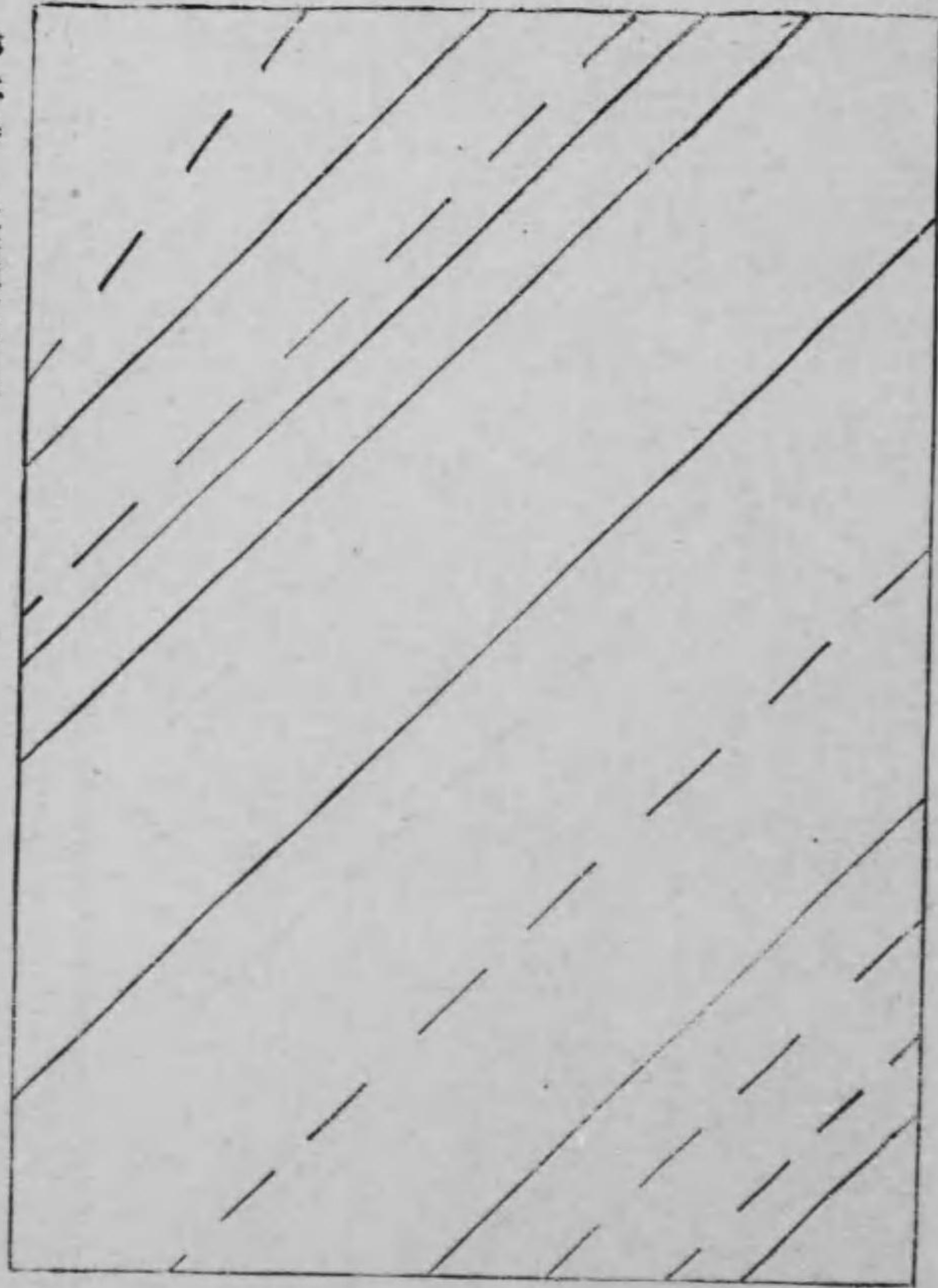
小笠原流折形

第四十二圖 色紙包 (丙の形)
 △をりやう



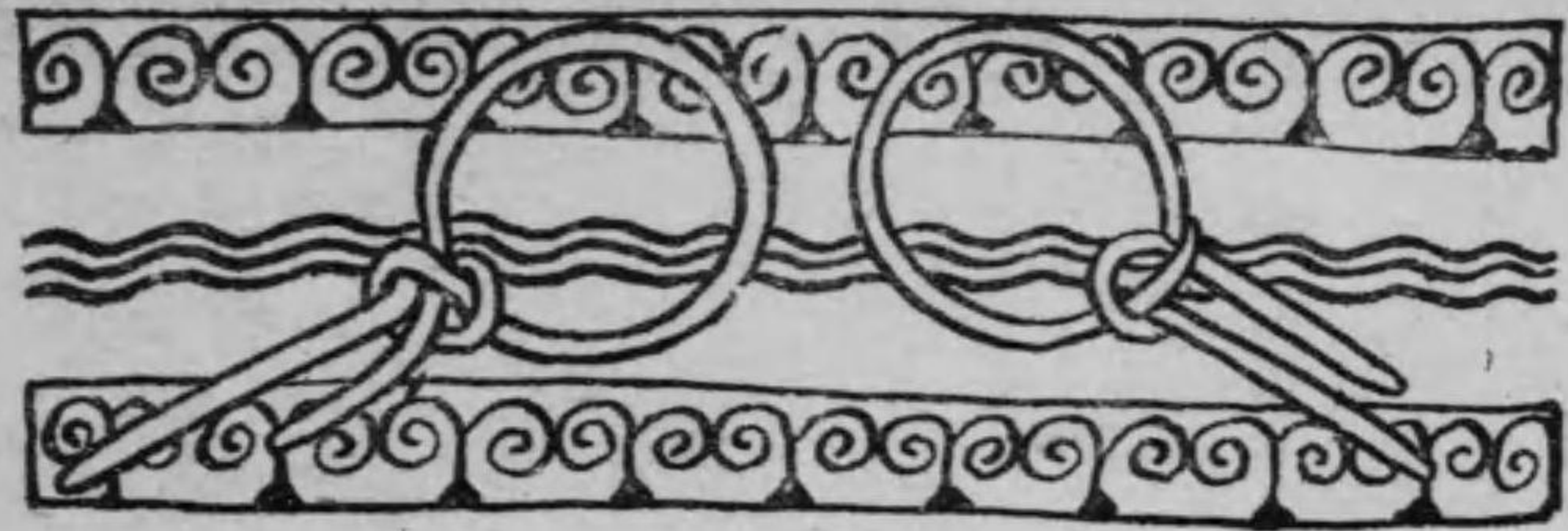


第二卷 文書類折形圖解



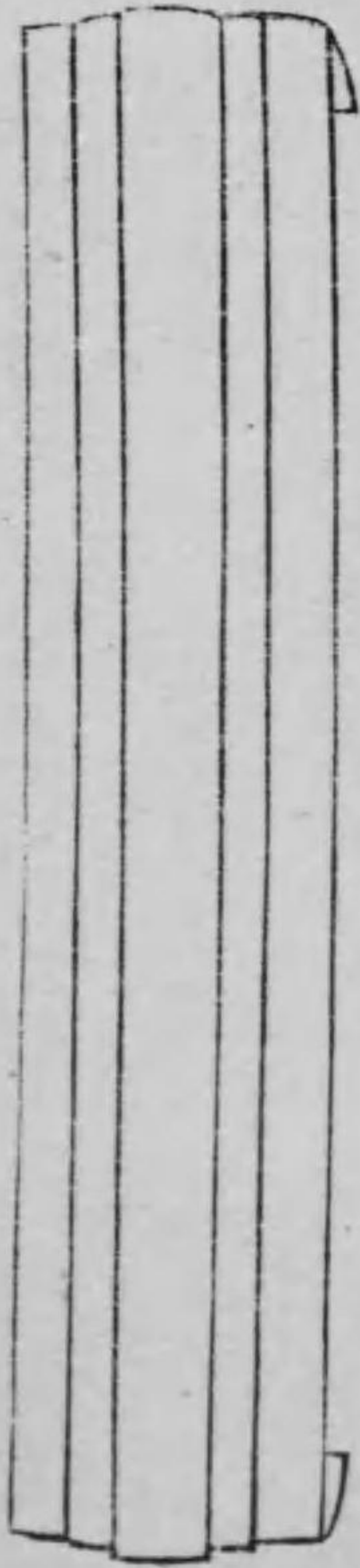
五一

第四十六圖 短冊包 (乙の形) △かたがみ



小笠原流折形

第四十四圖 たんざく包 (甲の形) △折あがり

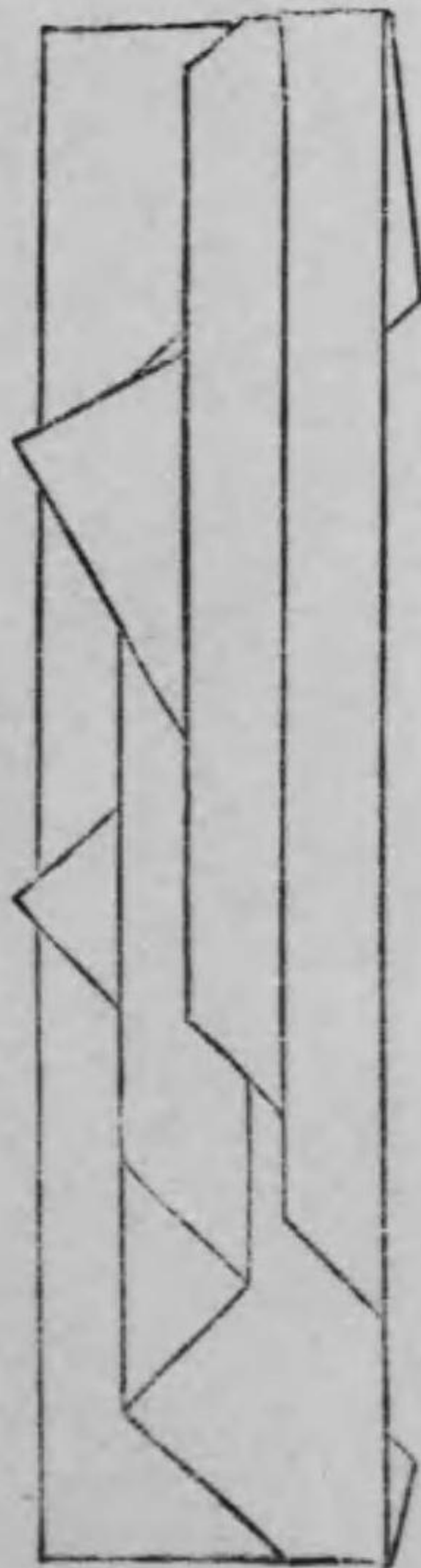


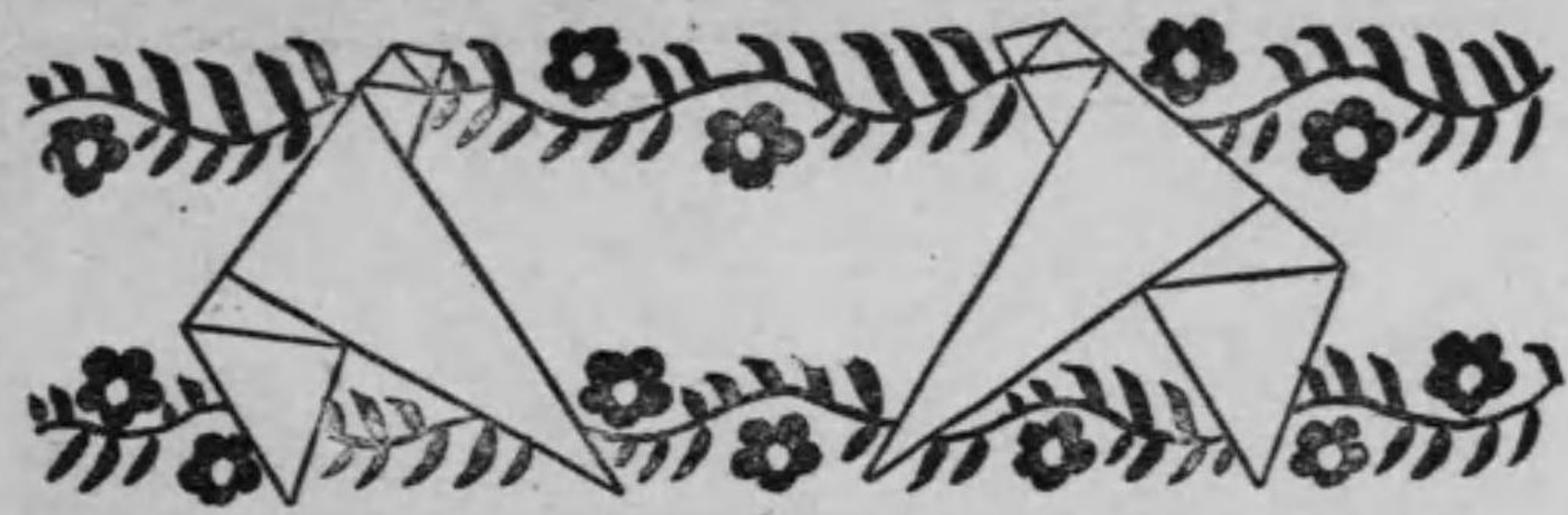
五〇

十一、同 (乙) 右に同じ、金銀水引、銀水引、白紅などよろし。

第四十五圖 短冊包 (乙の形)

△折あがり



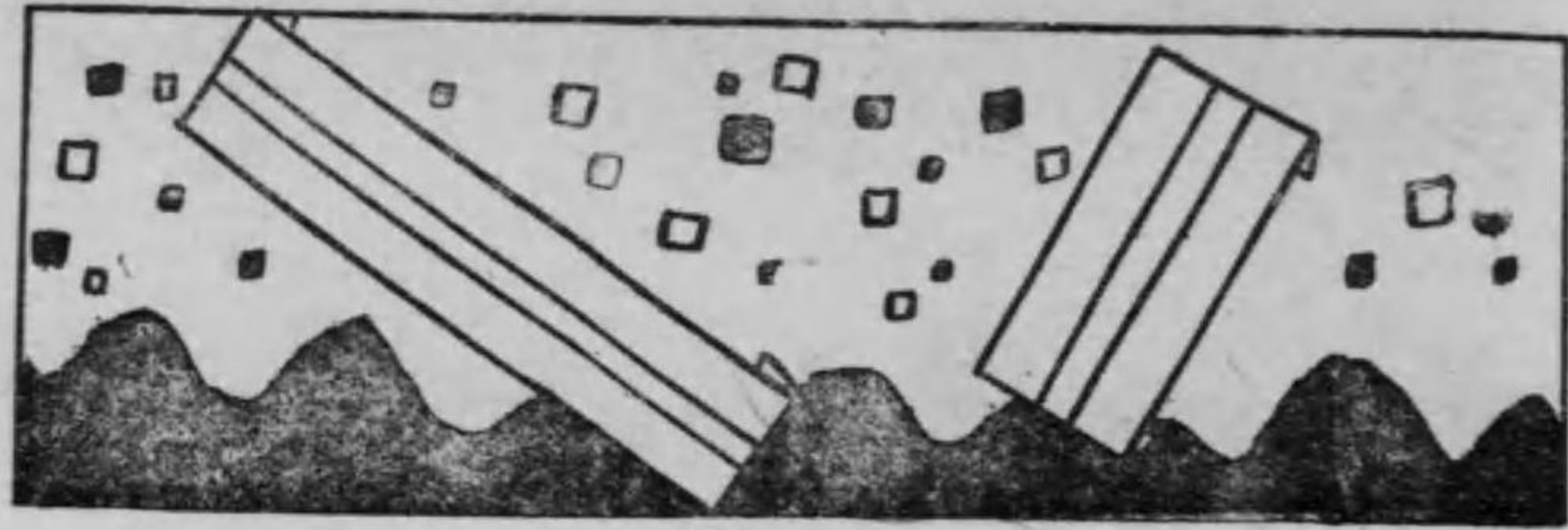
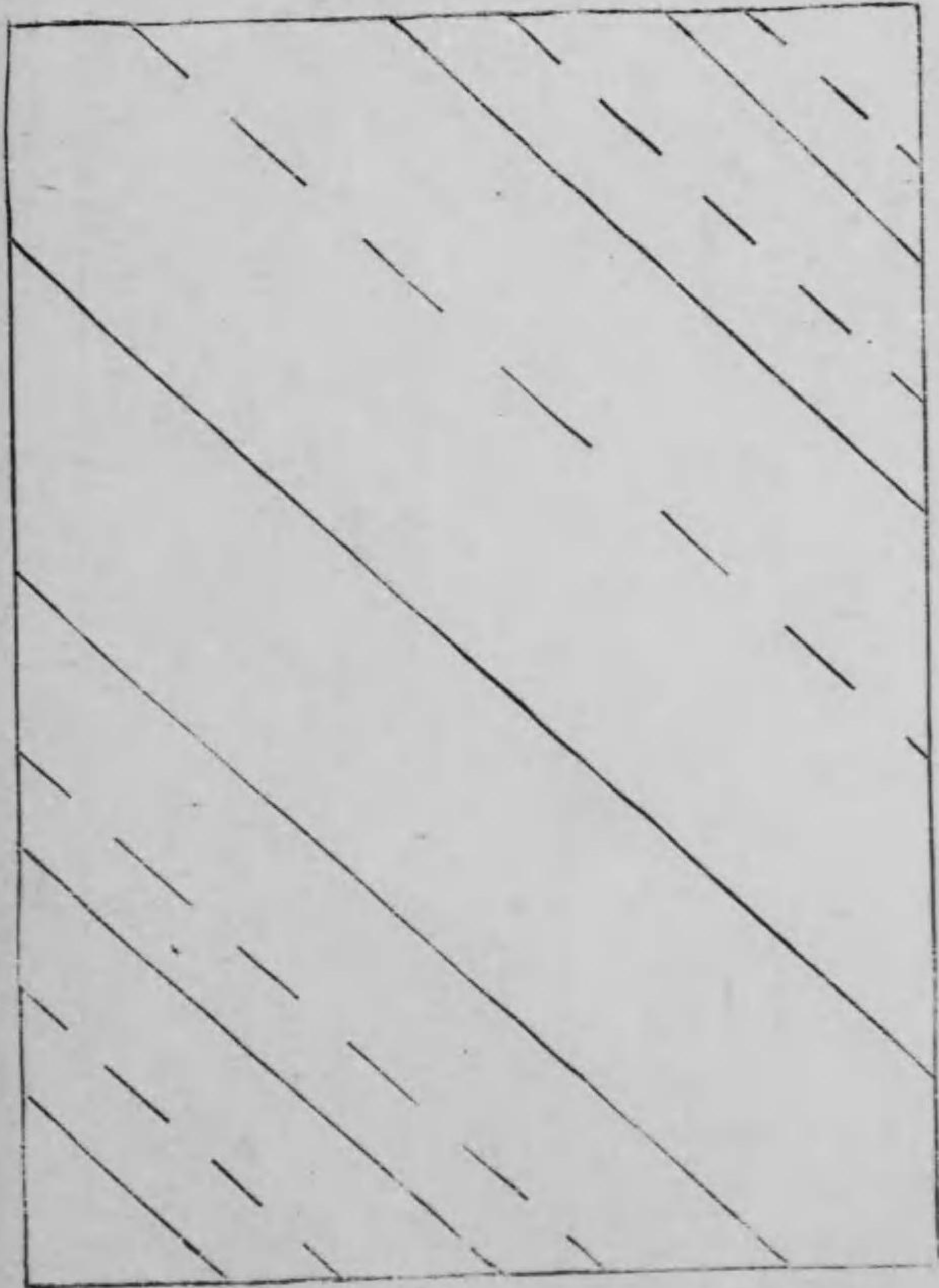


第十二、同 (丙)
第四十七圖
短箱包

(丙の形)
△かたがみ
をりやう

小笠原流折形

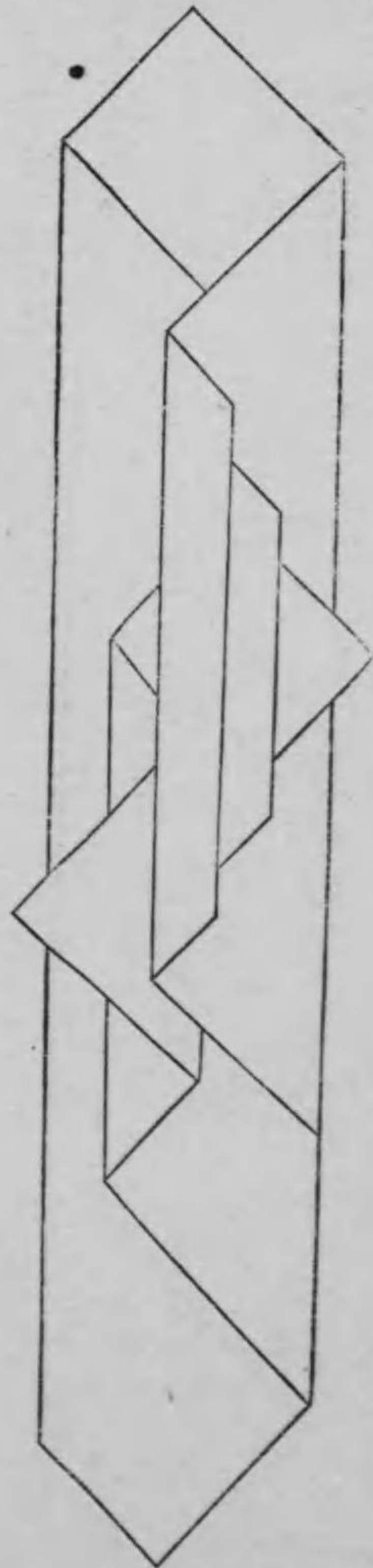
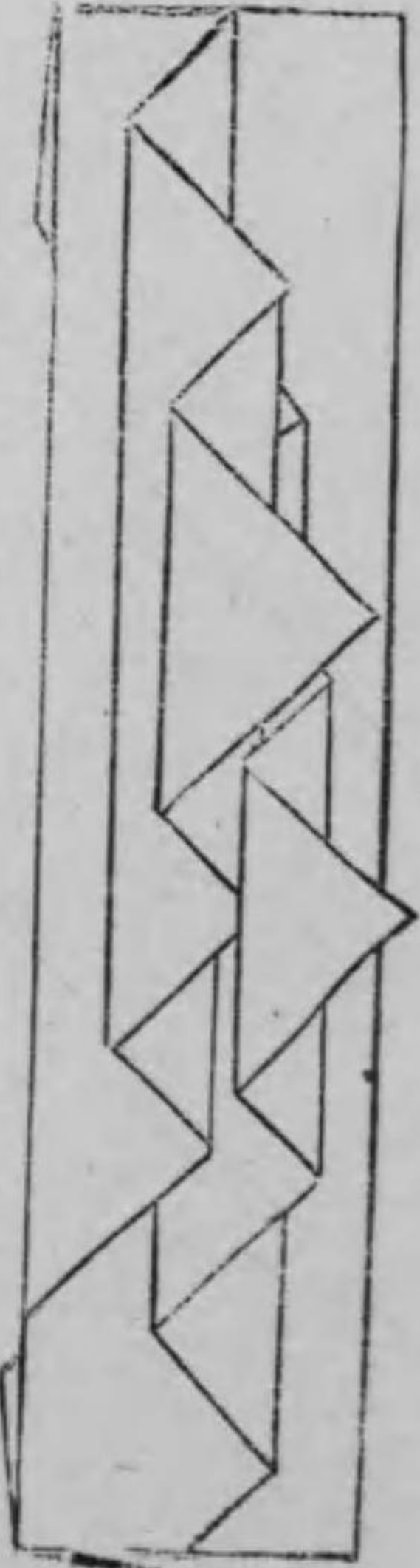
右に同じ、紙のいろどり、風流に包むなり。

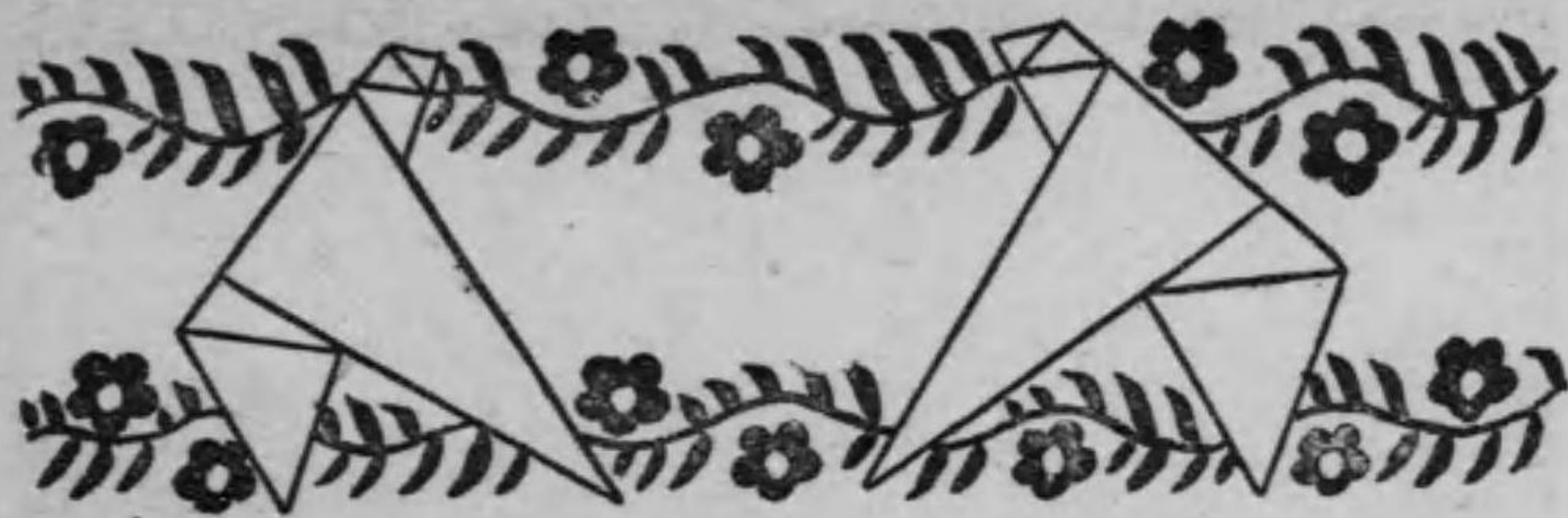


第四十八圖
短箱包

(丙の形)
△をりあがり

十三、水引包 進物にする時は、包て水引かくる、床上棚などに飾る時は水引かけず、色々の紙をかさねて包む表書なし。
第四十九圖 水引包 △をりあがり



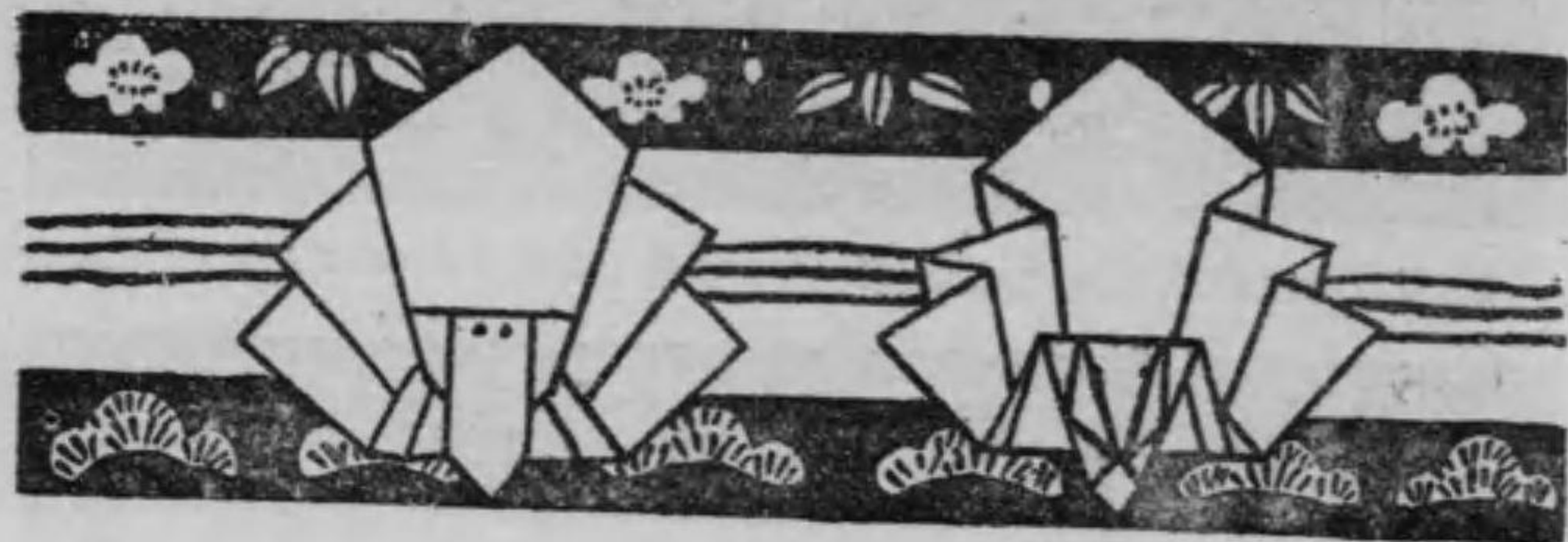
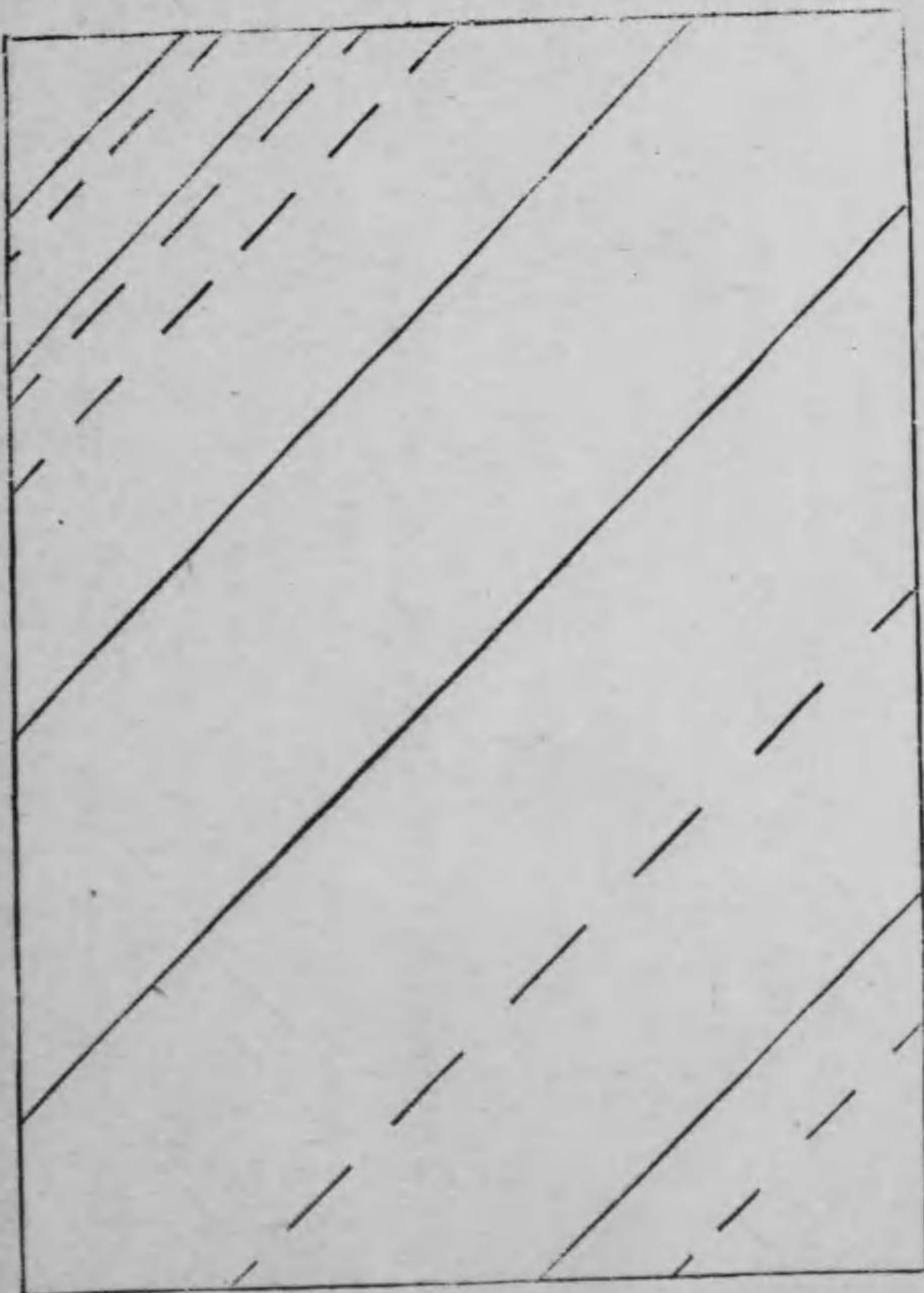


第五十圖

水引包

小笠原流折形

△かたかみ
をりやう
○實物寸法
紙の中以
上にてを
るべし。



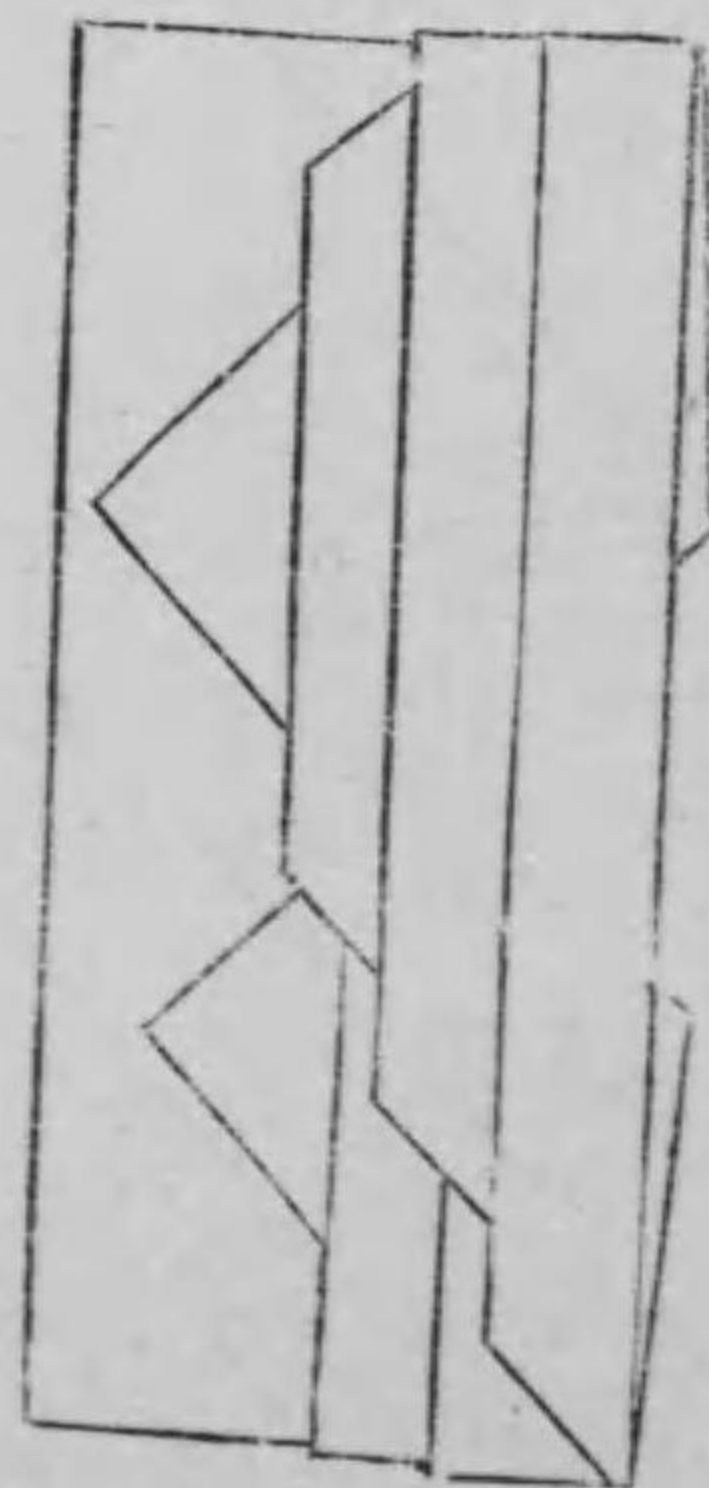
十四、錐小刀包

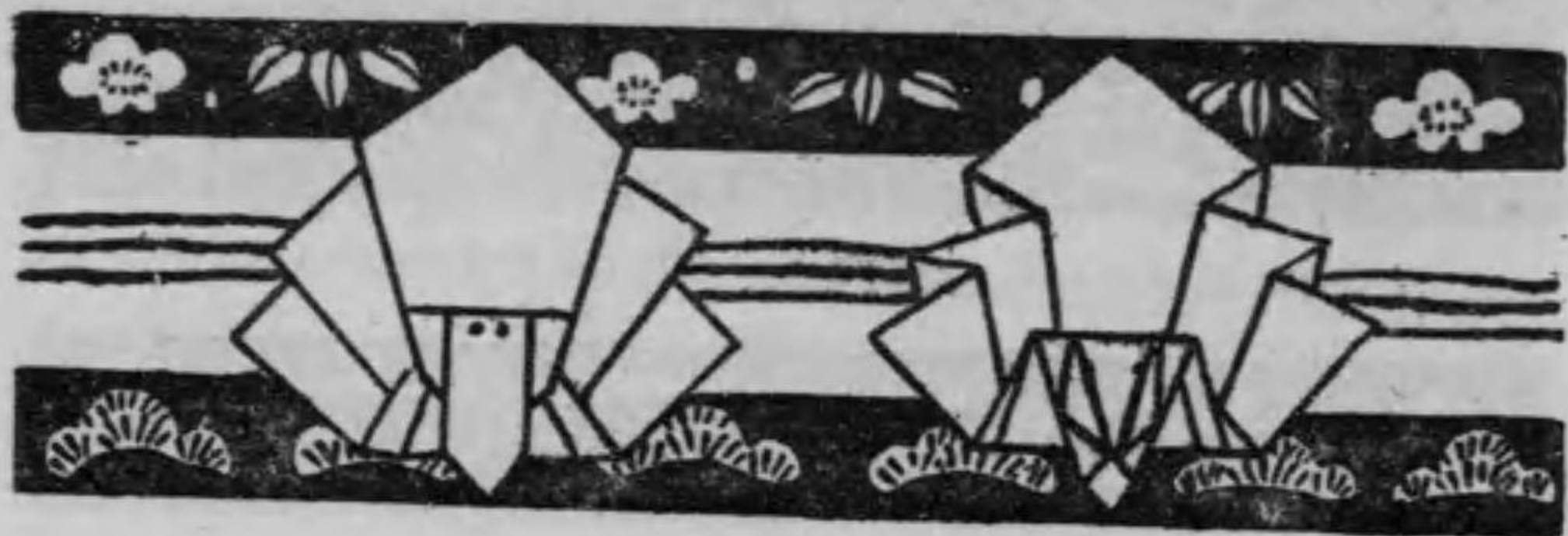
いづれも鞘あるを包むなり、下包あるべし、白紙べにうら、白紙がさねをつねとす、
上品にはこれも色紙かさねたるべし、水引もそれくの紙にならひてよし、つねは
紅白、白紅、上品には金銀水引にてむすぶべし、細結、もろはなにてもよろし。

第五十一圖

○きりこがたな包

△をりあがり

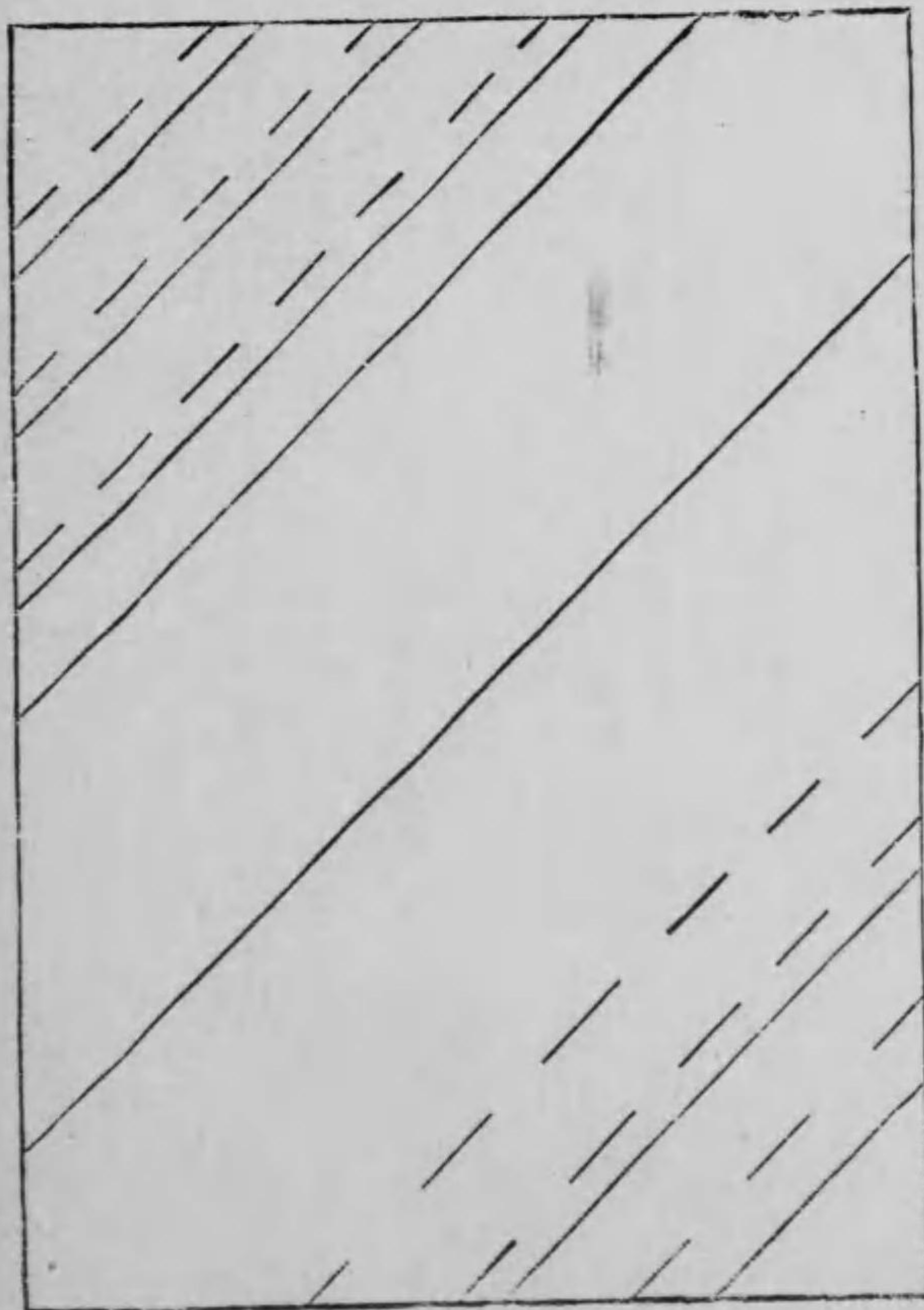




「かさねのいろあひ」の内。春。一重梅おもて白、うらちも。さくらおもて白、桃おもてくれな。ほうたんおもて白、夏。うの花おもて白、かきつばたおもてうすもえぎ。わか葛蒲おもて青、う。花たちばなおもてくち。百合おもて赤、なでしこおもて梅、う。秋。かちおもてもえぎ、萩おもてすはう。菊がさねおもて白、う。同おもて白、う。黄菊おもて黄、もみちおもて紅、冬。氷おもてとりの。初雪の少しうるみたる。松がさねおもて青。この書のほかに版本にては「色のちぐさ」文政元年 京都版 「うすやういろめ」文政九年 江戸版 の二書ともに色刷にて委しくあらはされたり。「女房懐紙色重」持明院本一冊あり。



第五十二圖 さりこがたな包 △をりやう かたがみ



第三卷 衣服類折形圖解

一、錦綾絹布包 (甲)

板の物といひて、薄き板を心に入れてひらくたゝみたる織物、絹類、布類を包む折方なり、其品がらによりて、紙のいろわけ水引の差別、又かざり方の等級もあり、大尺檀紙金銀水引花結にてかざるなり。



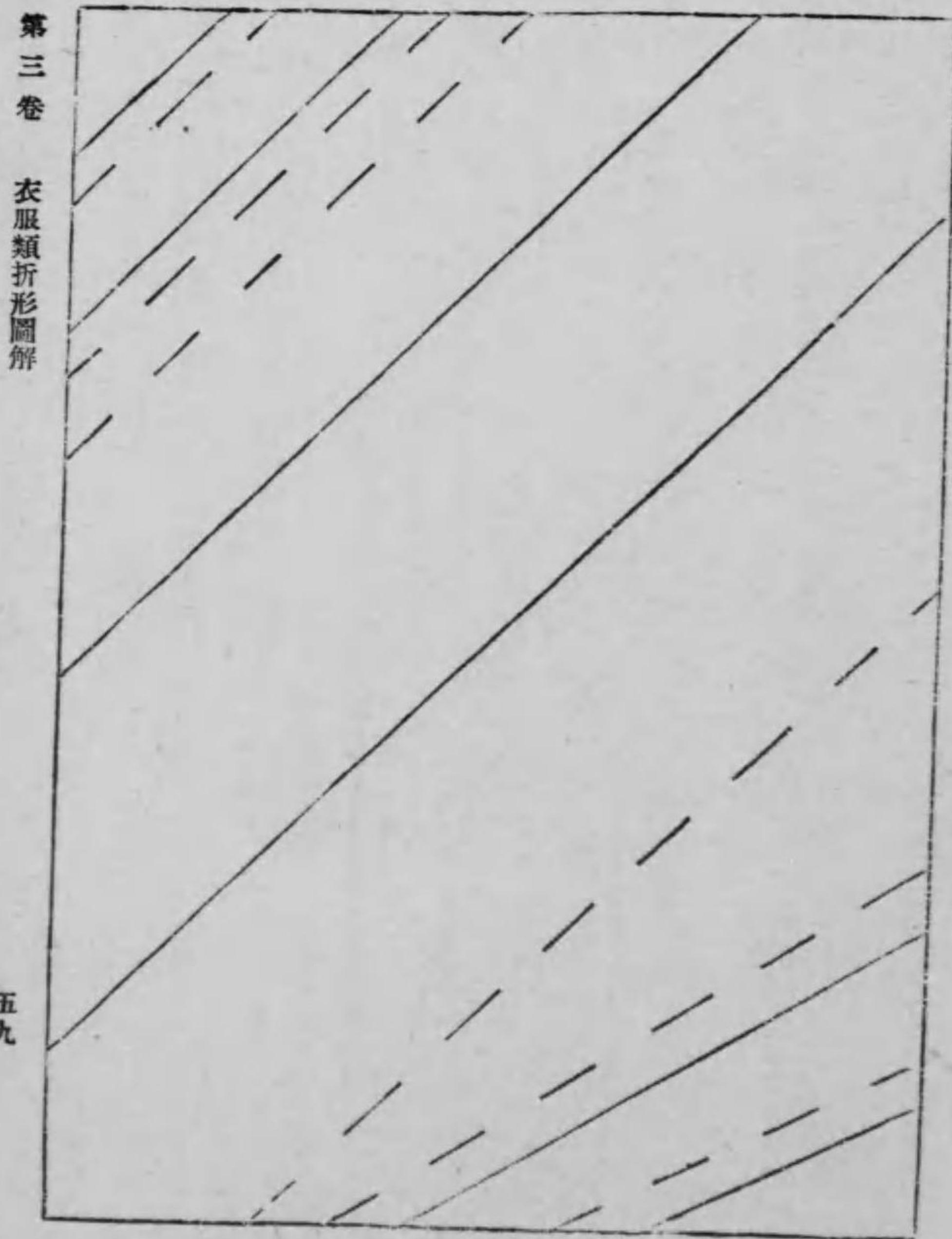
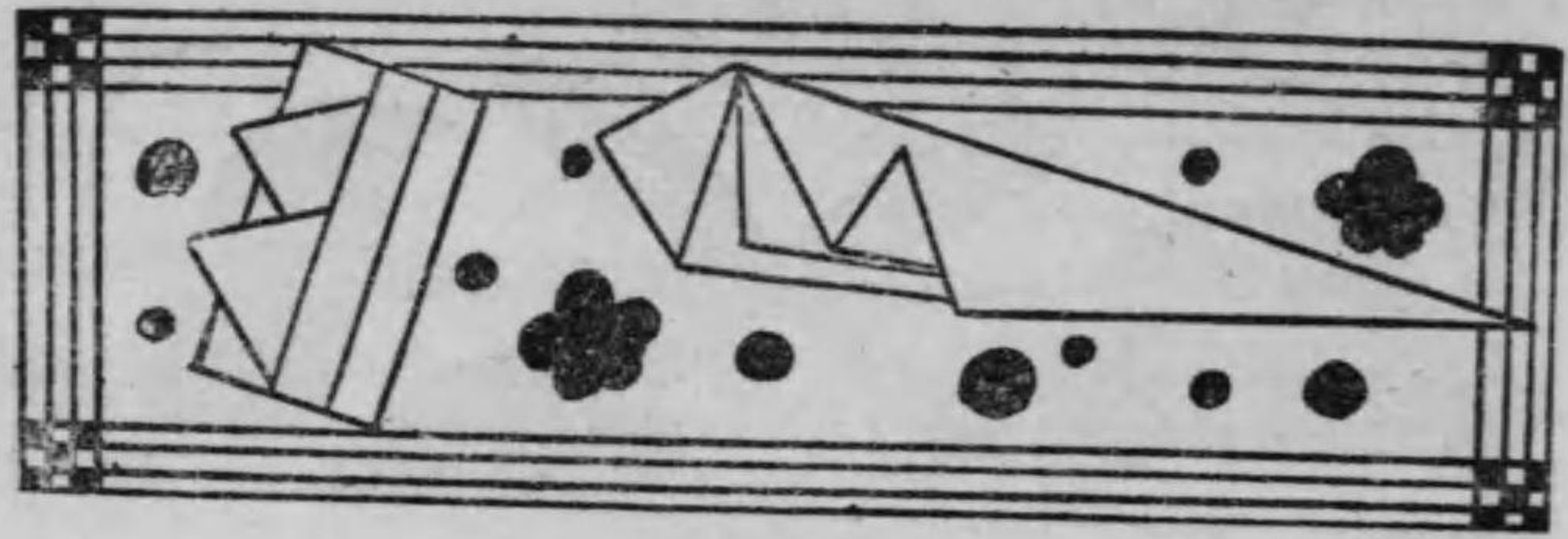
平づゝみと云ふ事

絹布にて物を包むを『ひらつゝみ』といふ。ころもたぐひを包むことは『まさすけの装束抄』といふふみに見えたり。この装束抄にしるしたる包みかたを手本として衣服類なにもつゝむべし。

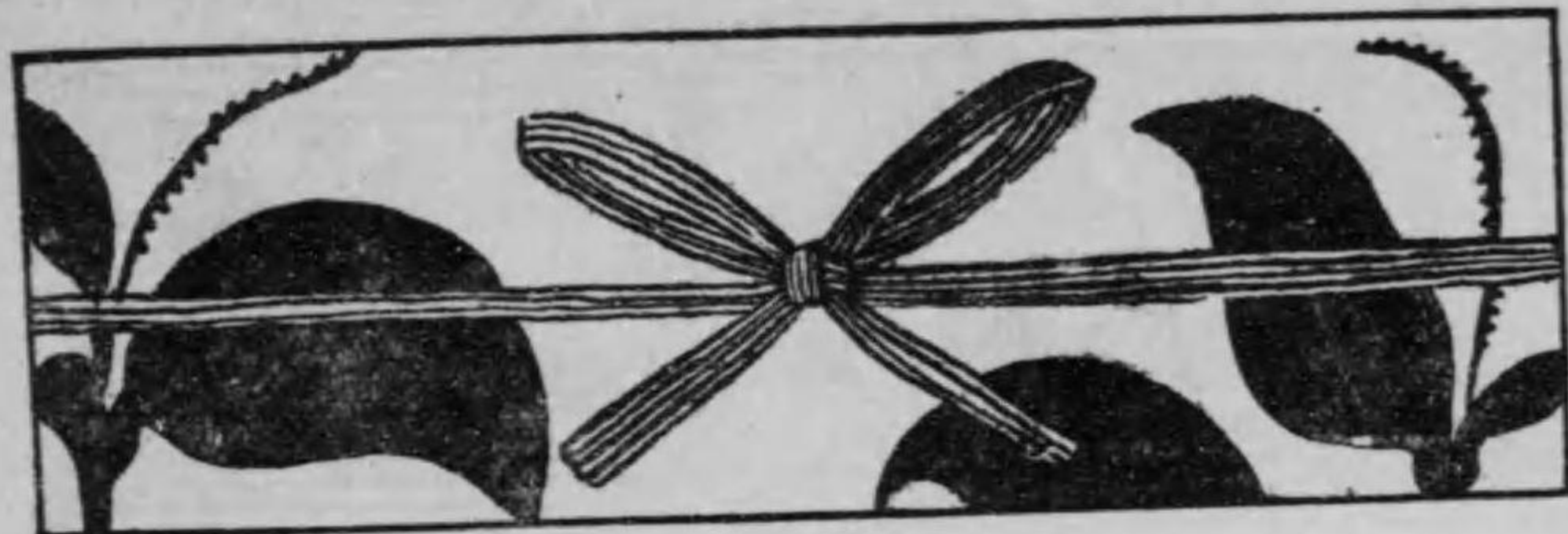
第五十三圖

錦綾絹布包 (甲の形)

△かたかみ をりやう



第三卷 衣服類折形圖解



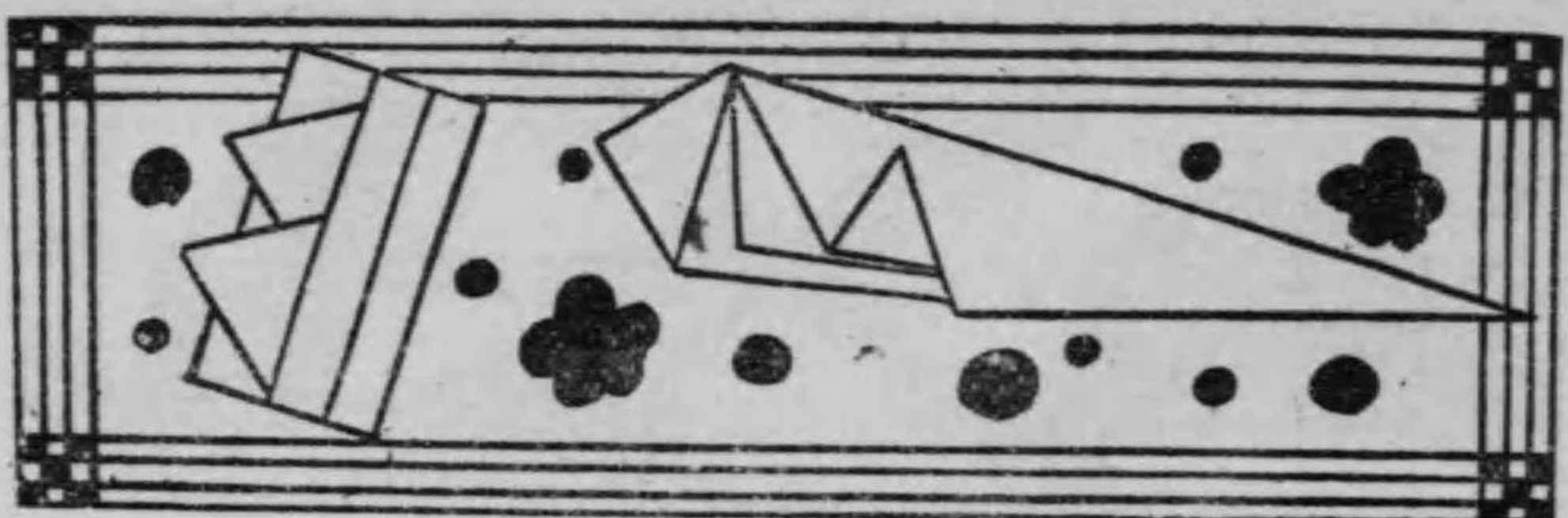
小笠原流折形

第五十四圖 錦綾絹布包 (甲の形) △をりあがり

○寸法紙の大形にて包む。但し用紙は何枚も續てよし。



○品物は折形の上下のさきより少し長くいづる様になるなり、此折形のたぐひいづれも同様に心得てよし。

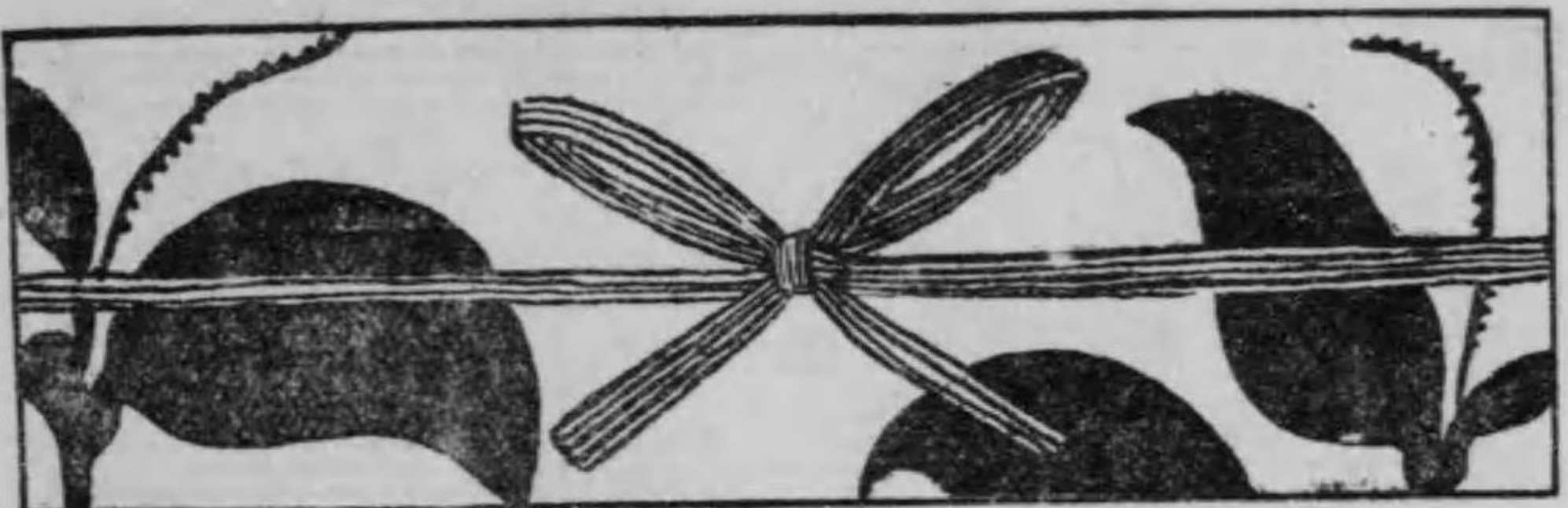


第三卷 衣服類折形圖解

二、同 (乙) これは次の折方なり、奉書紙紅うらにて、金赤、銀赤などの水引にて蛇結にて飾るべし。

第五十五圖 にしき、あや、きぬ、ぬの包 (乙の形) △をりあがり

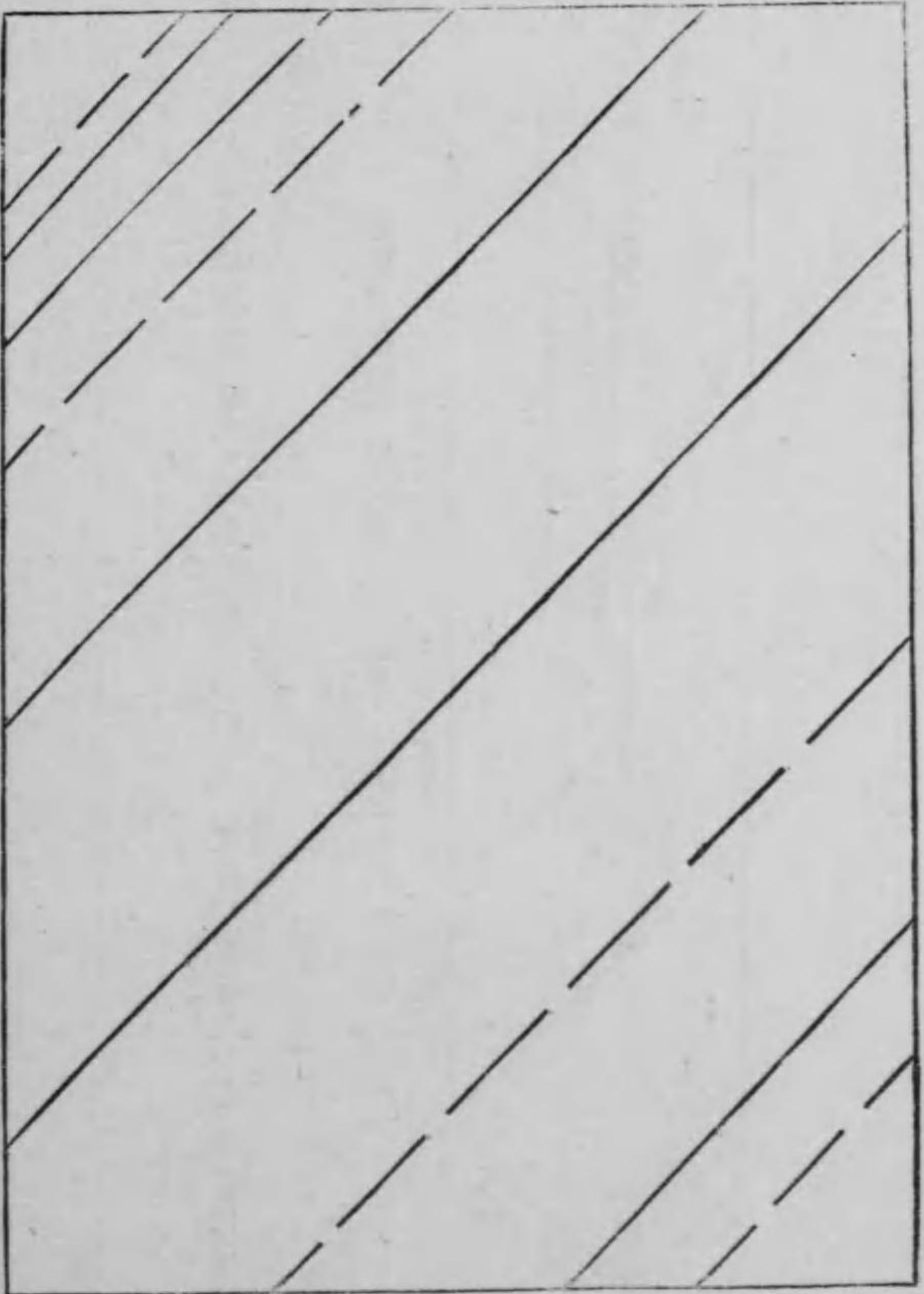




小笠原流折形

第五十六圖 にしき、あや、きぬ、ぬの包。(乙の形)

△をりや
う
○これを
かたが
みにつ
かふこ
と前に
おなじ

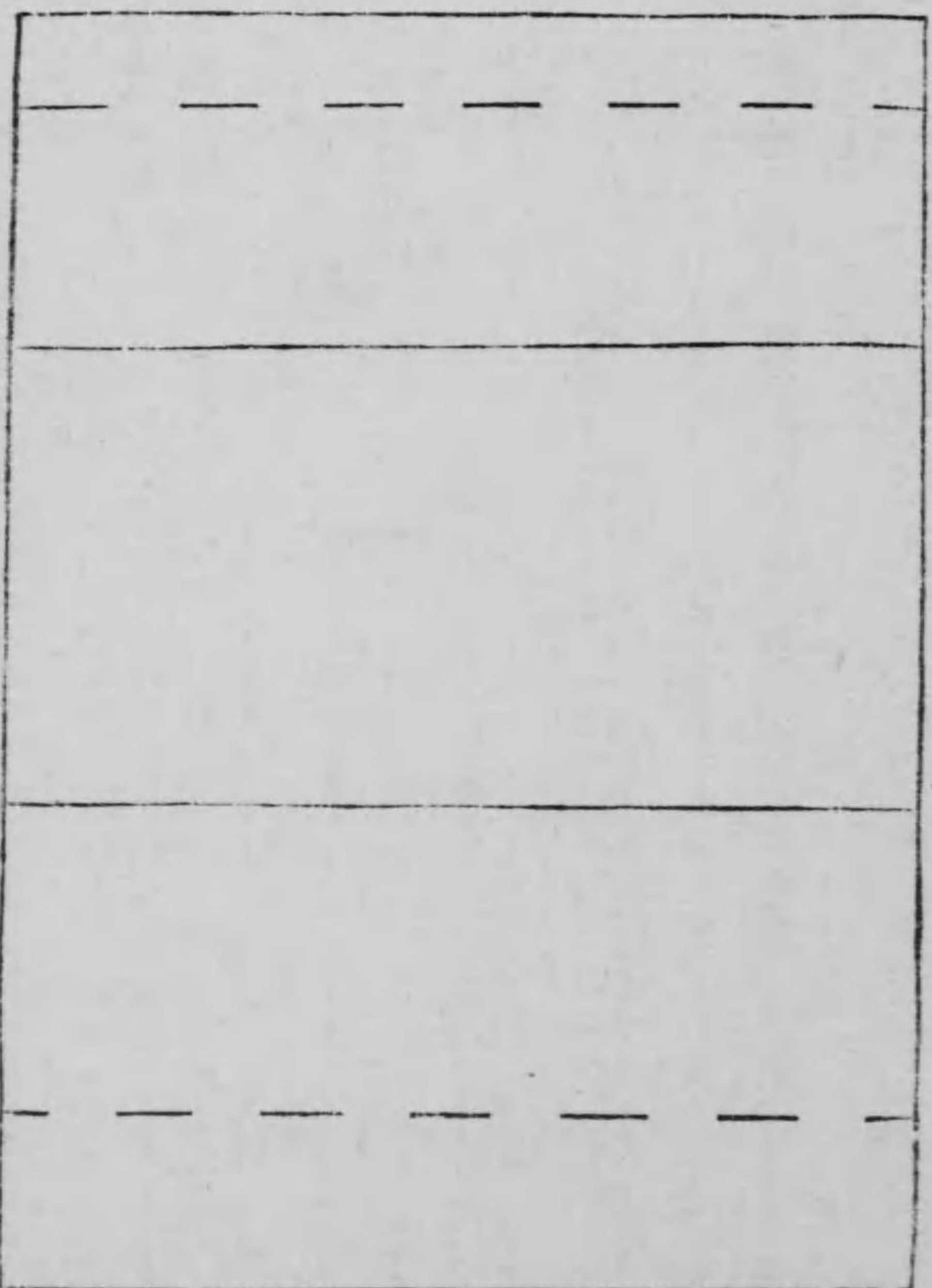


三、同 (丙) これは前のより次なり、奉書紙がさねにて、紅白水引細結もろわな、いづれにてもよろし。

第五十七圖 錦あや絹ぬの包。(丙の形)
△をりや かたかみ

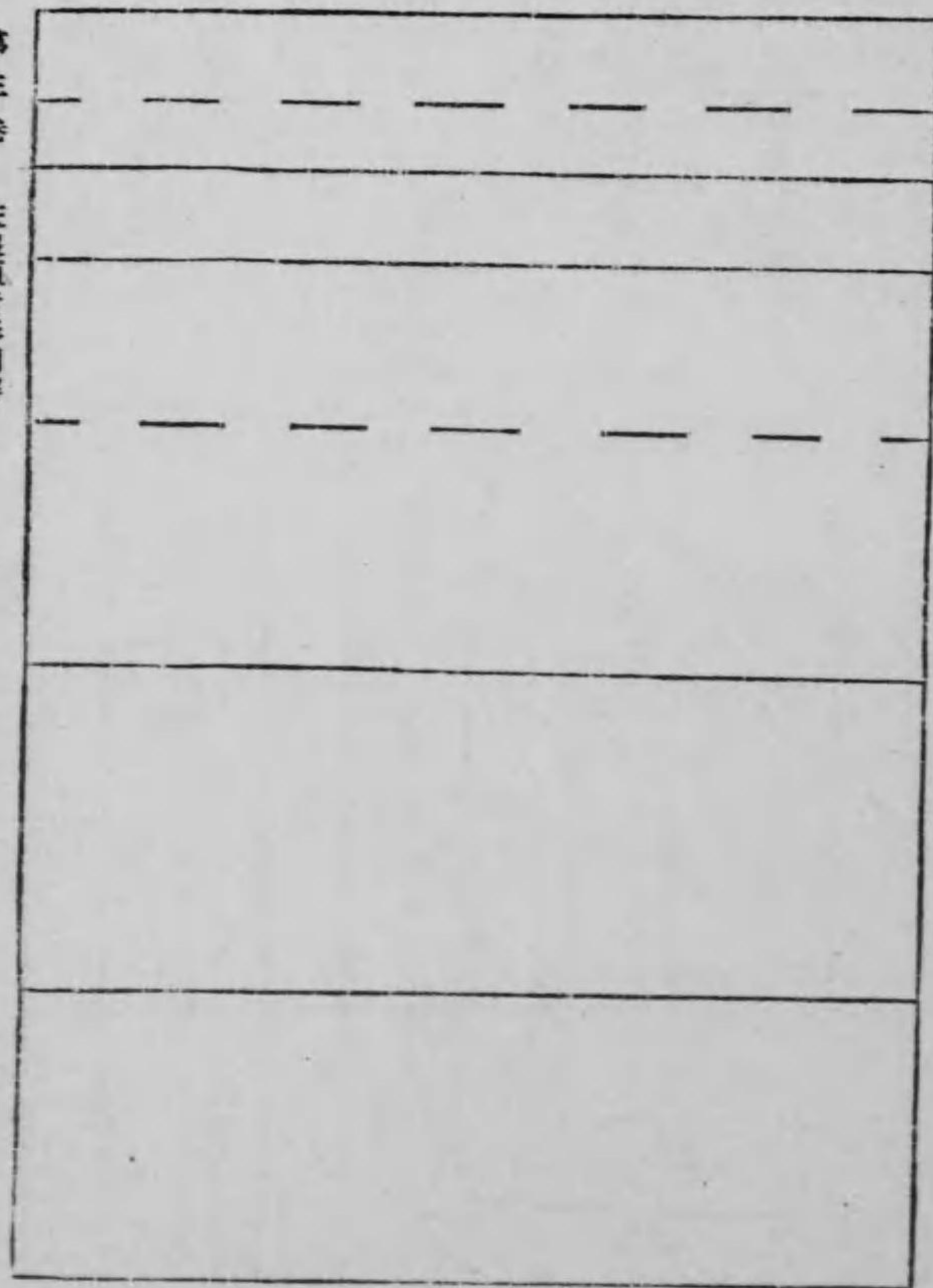


第三卷 衣服類折形圖解

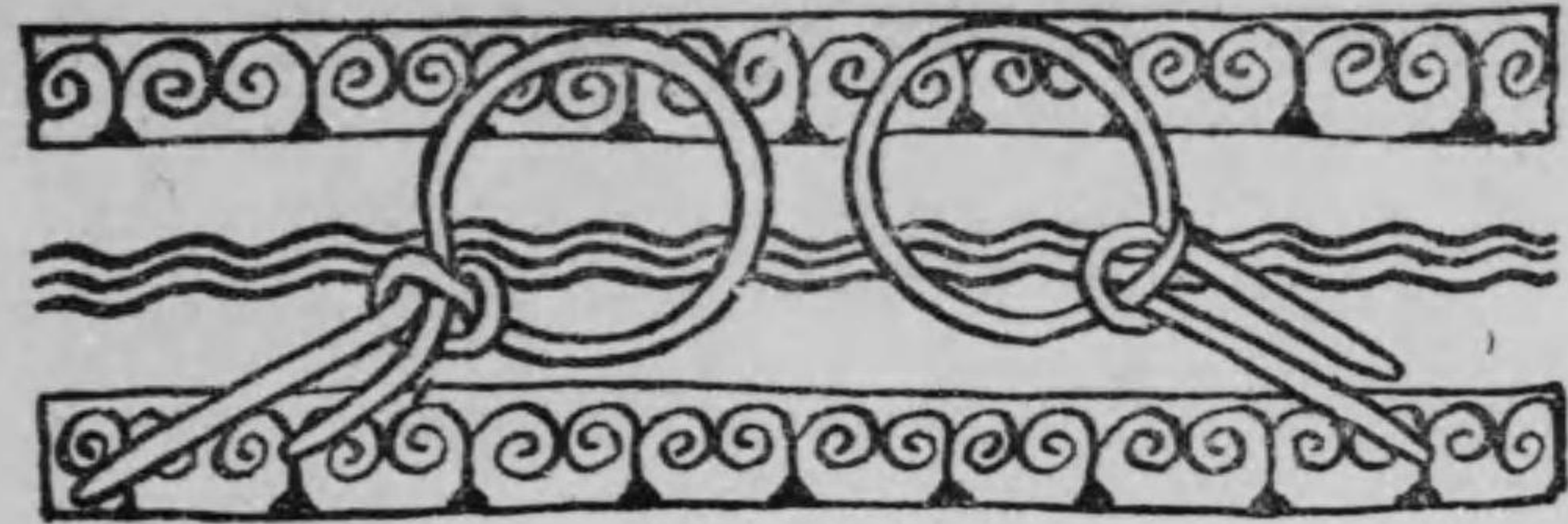




第五十九圖 錦あや絹布包 (丁の形) ○巻たる物 △をりやう。かたかみ



第三卷 衣服類折形圖解



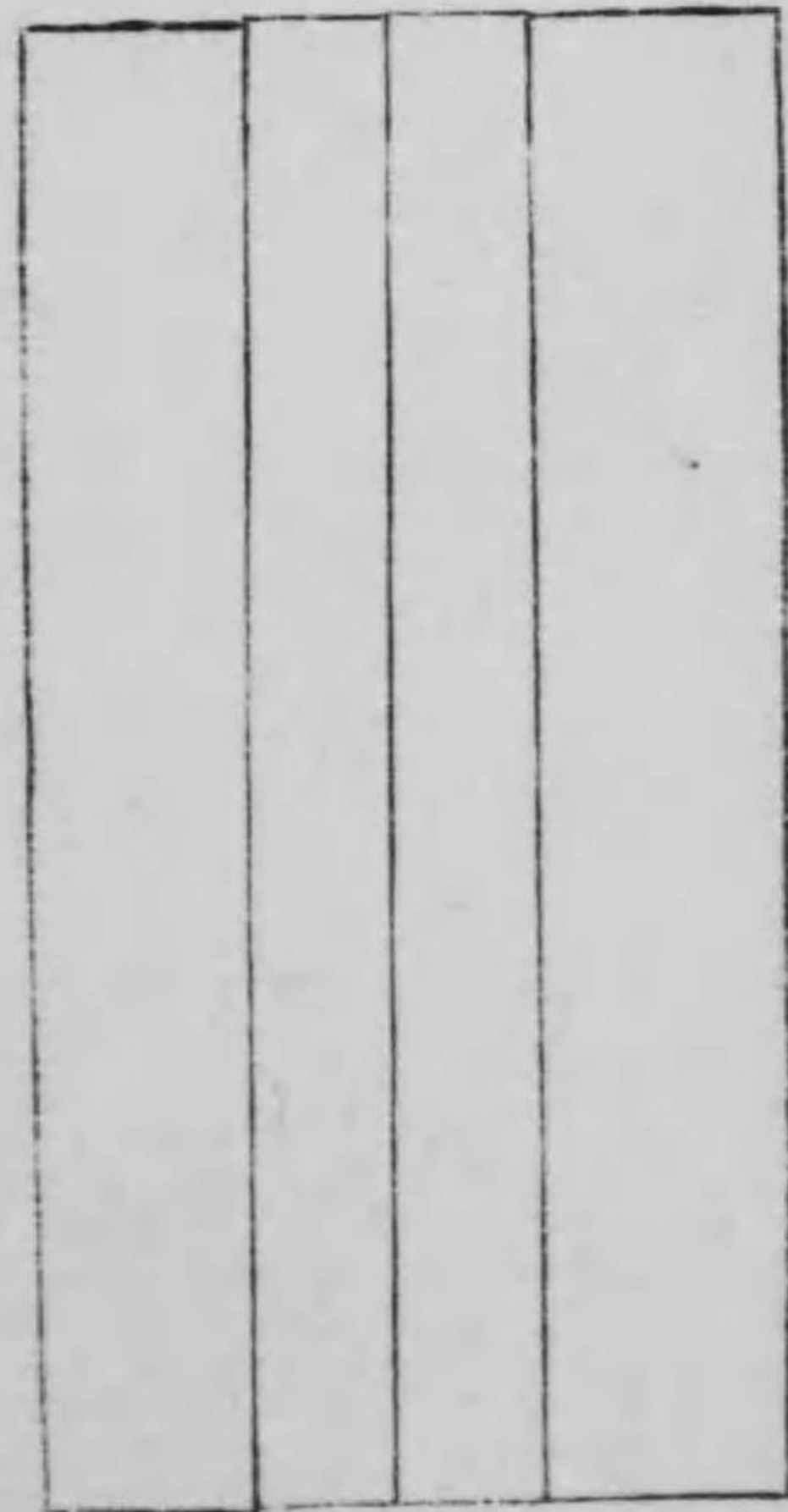
第五十八圖

○錦あや絹ぬの包 (丙の形)

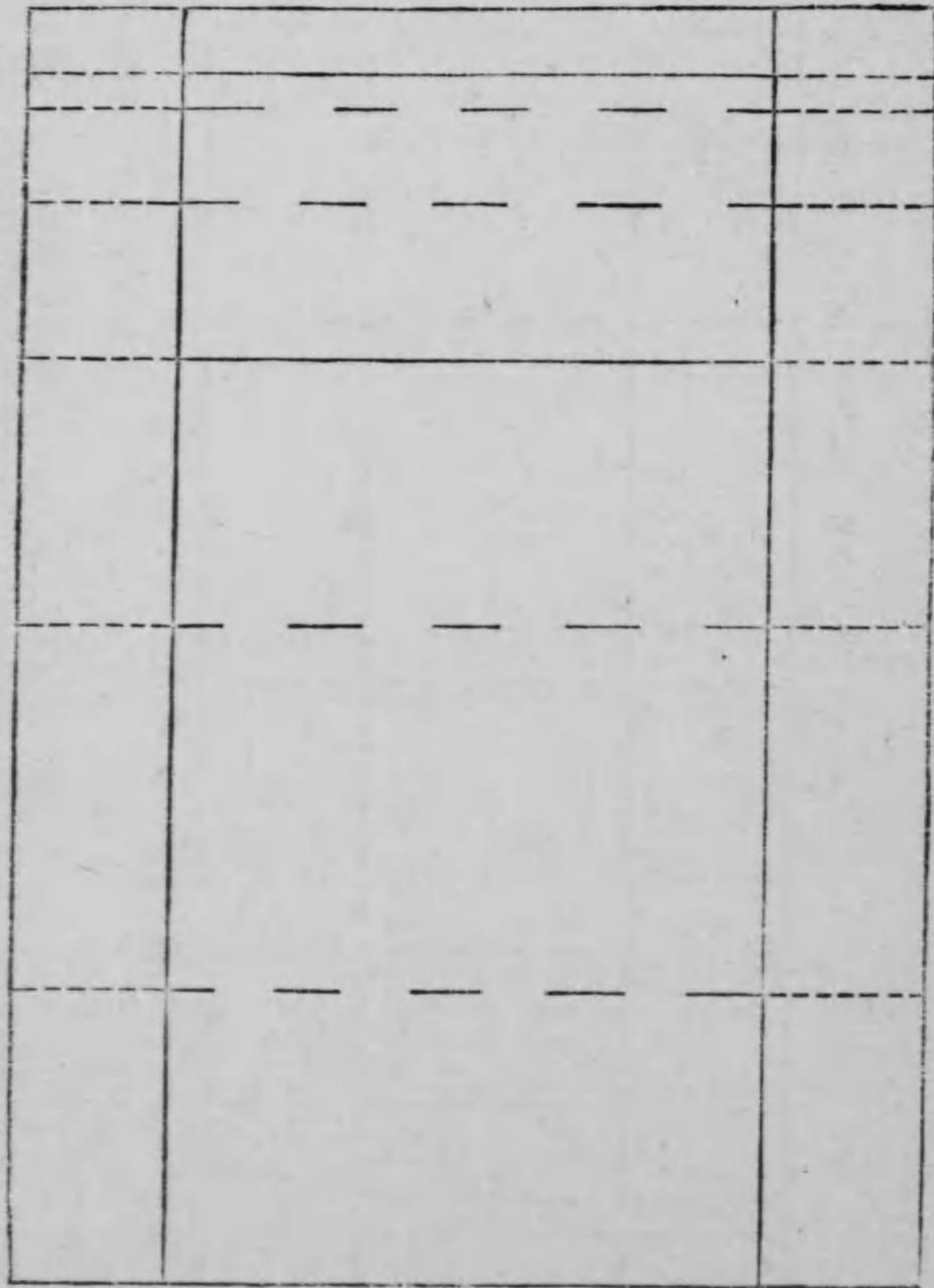
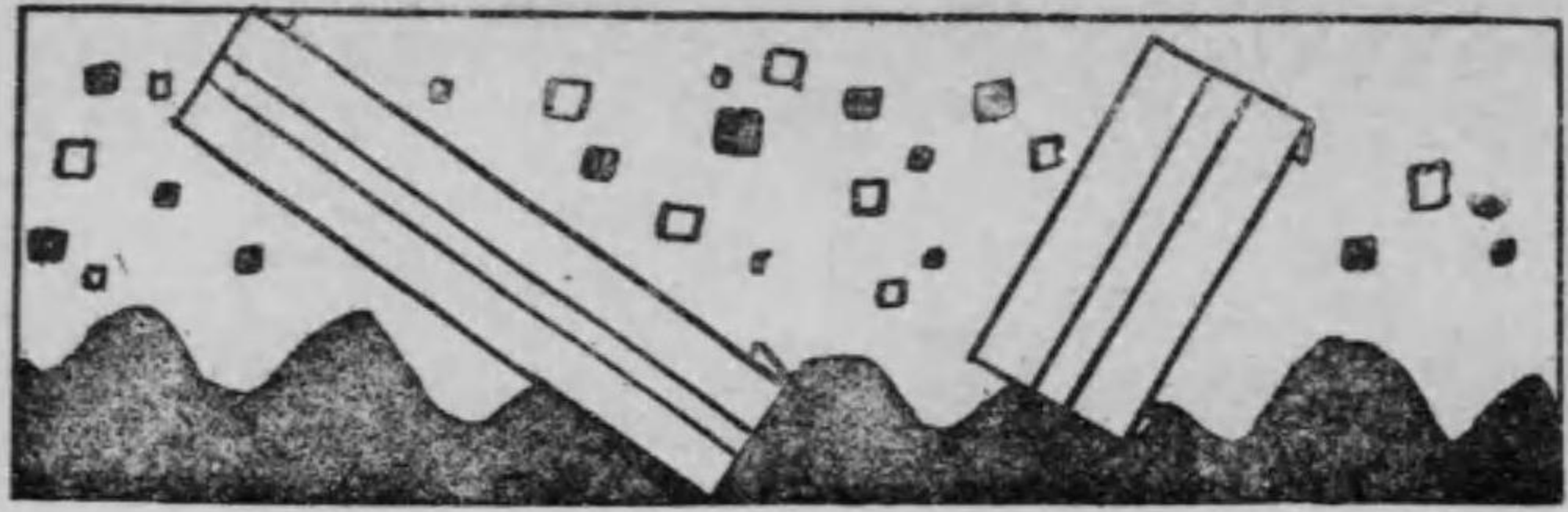
△をりあがり

四、同 (丁)

「紗綾ちりめんの中に綿を入れて巻たる巻物を包む」と包の記にいはれたる「金らん
どんすしゆすなどの類、すべて丸く巻たるもの」をつゝむ折方なり、紙水引とも、
板の物に同じ、水引結も大方前に同じ、いづれも巻たる品物の上下に出る様につゝ
むなり。



小笠原流折形



第六十二圖 にしき綾きぬ布包 (戊の形) ○巻たる物 △をりあげをひらきたる圖。



第六十圖

○錦あや絹布包 (丁の形)

○巻たる物

△をりあがり

五、同 (戊)

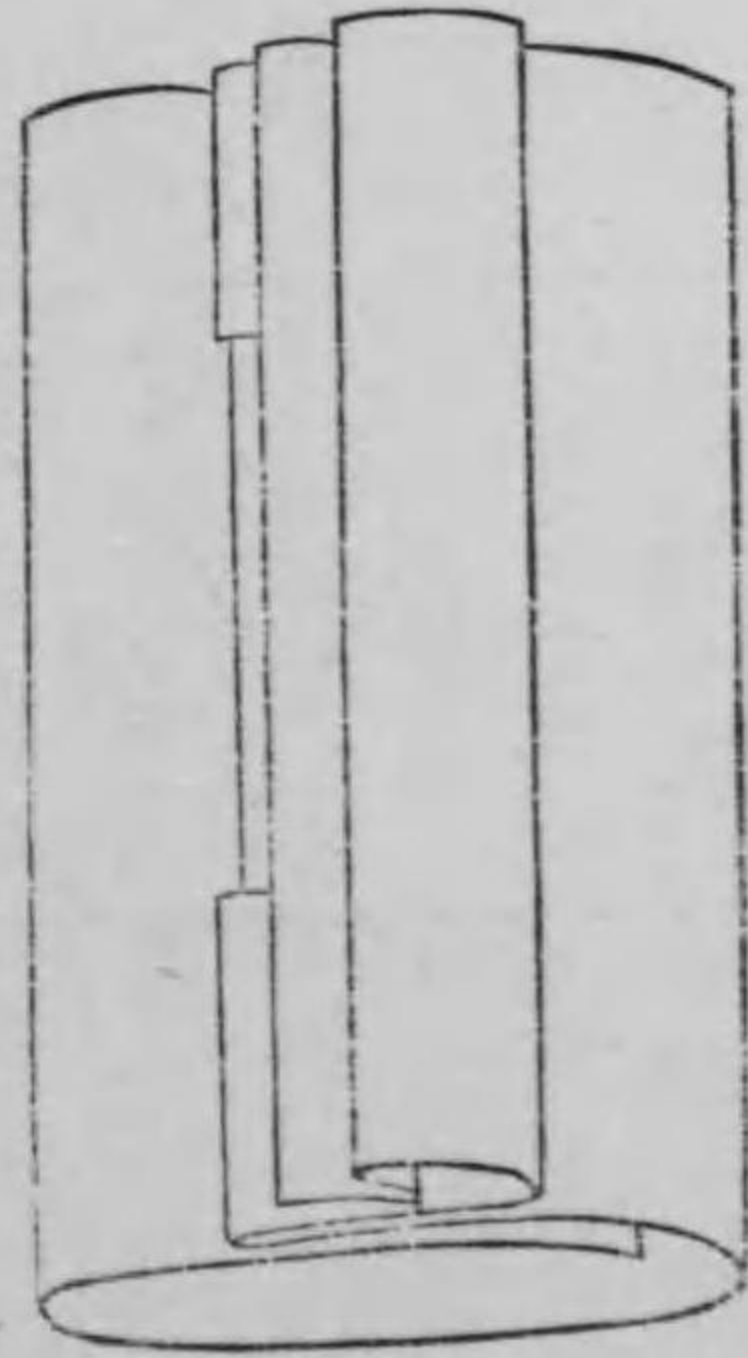
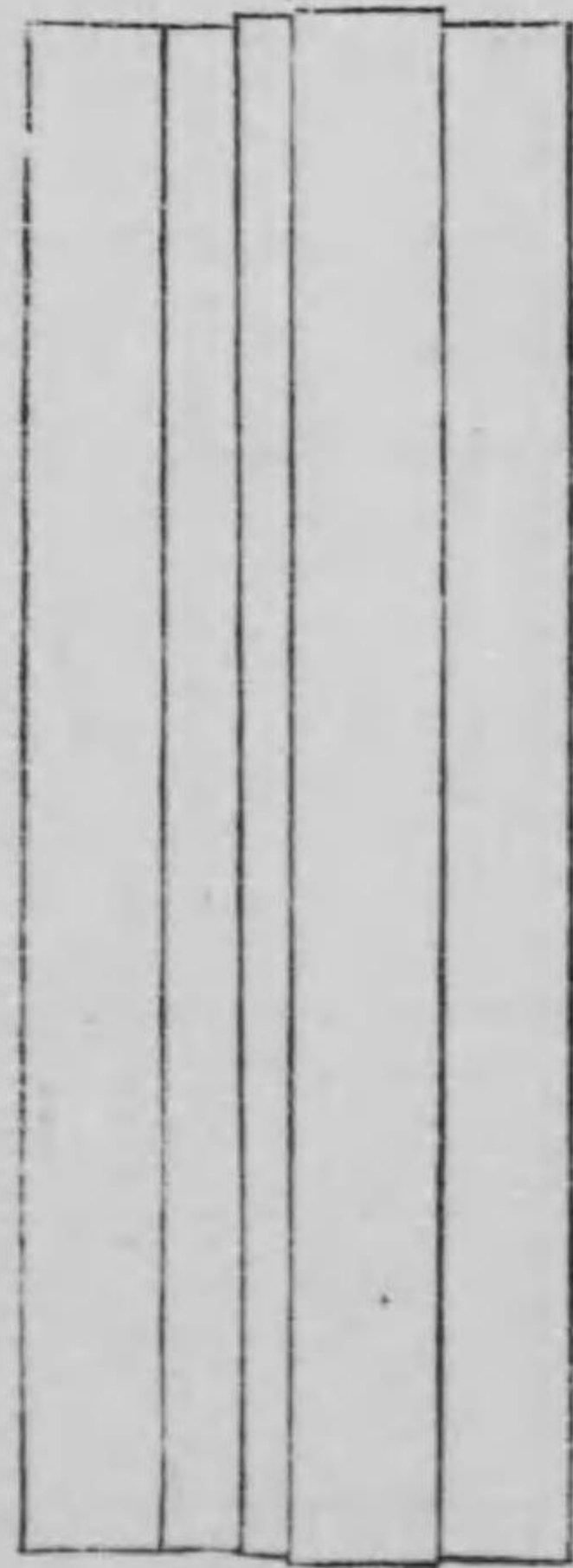
これも巻物を包む折方なり、水引、書付をするなり。

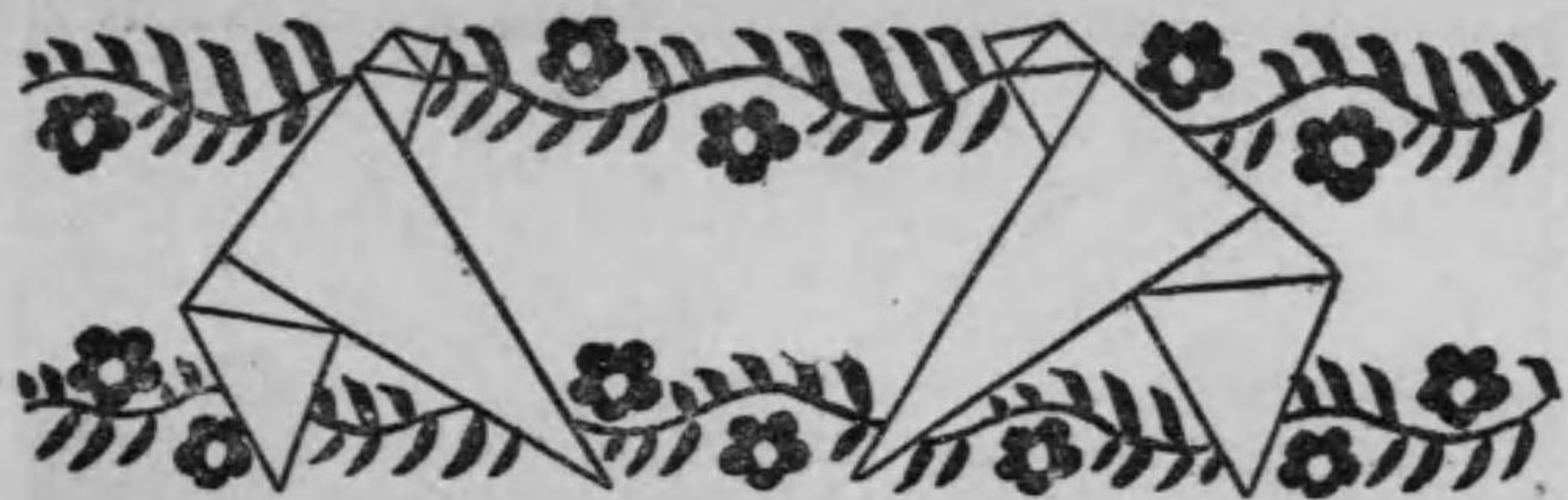
第六十一圖

○にしき綾きぬ布包 (戊の形)

○巻たる物

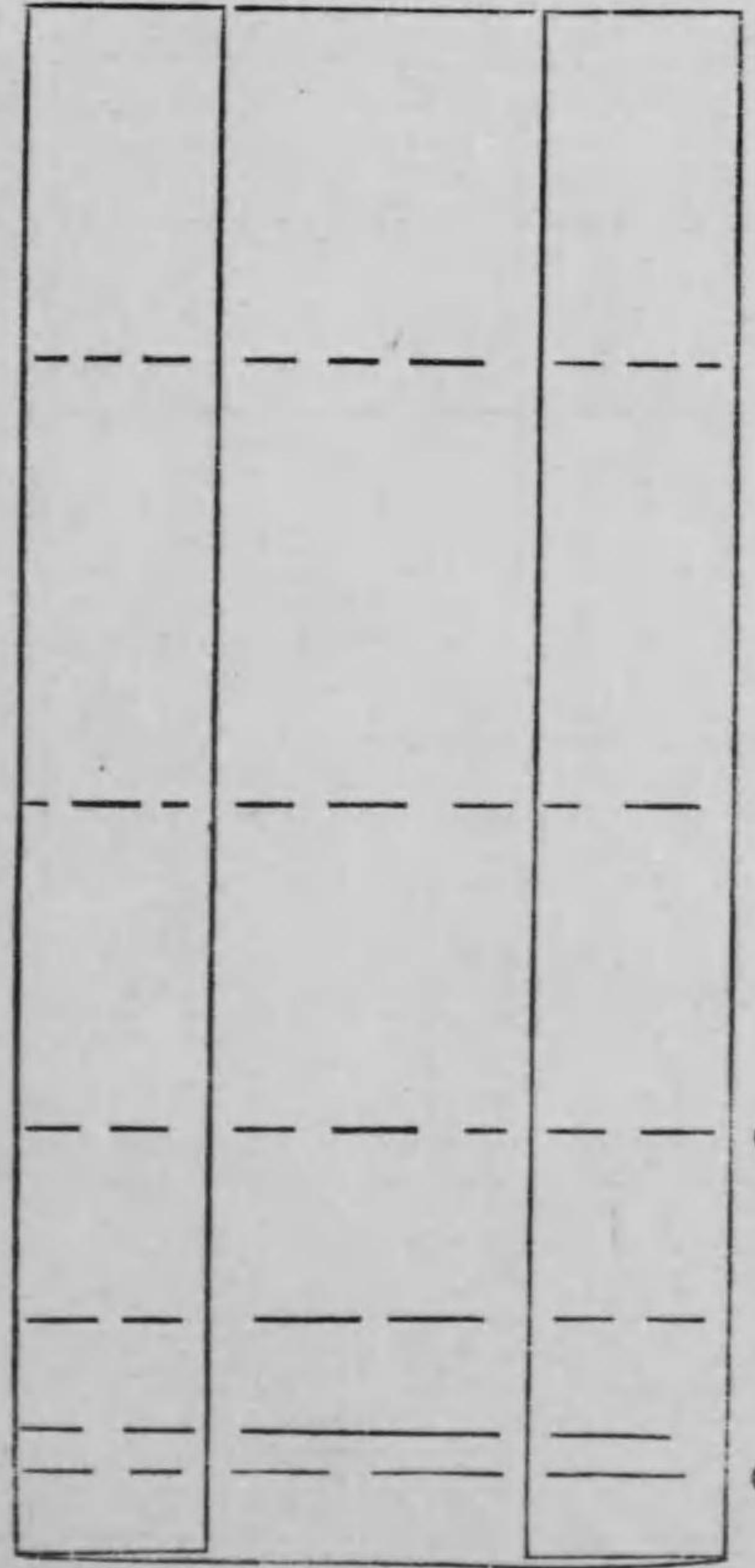
△をりあがり



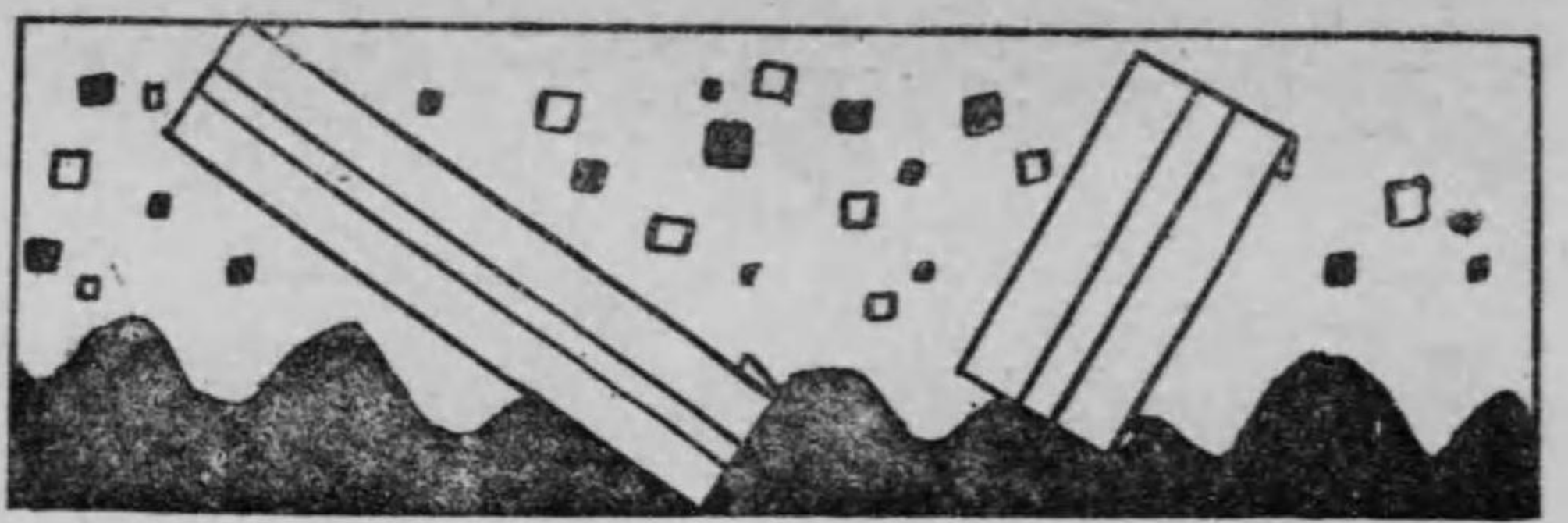


小笠原流折形

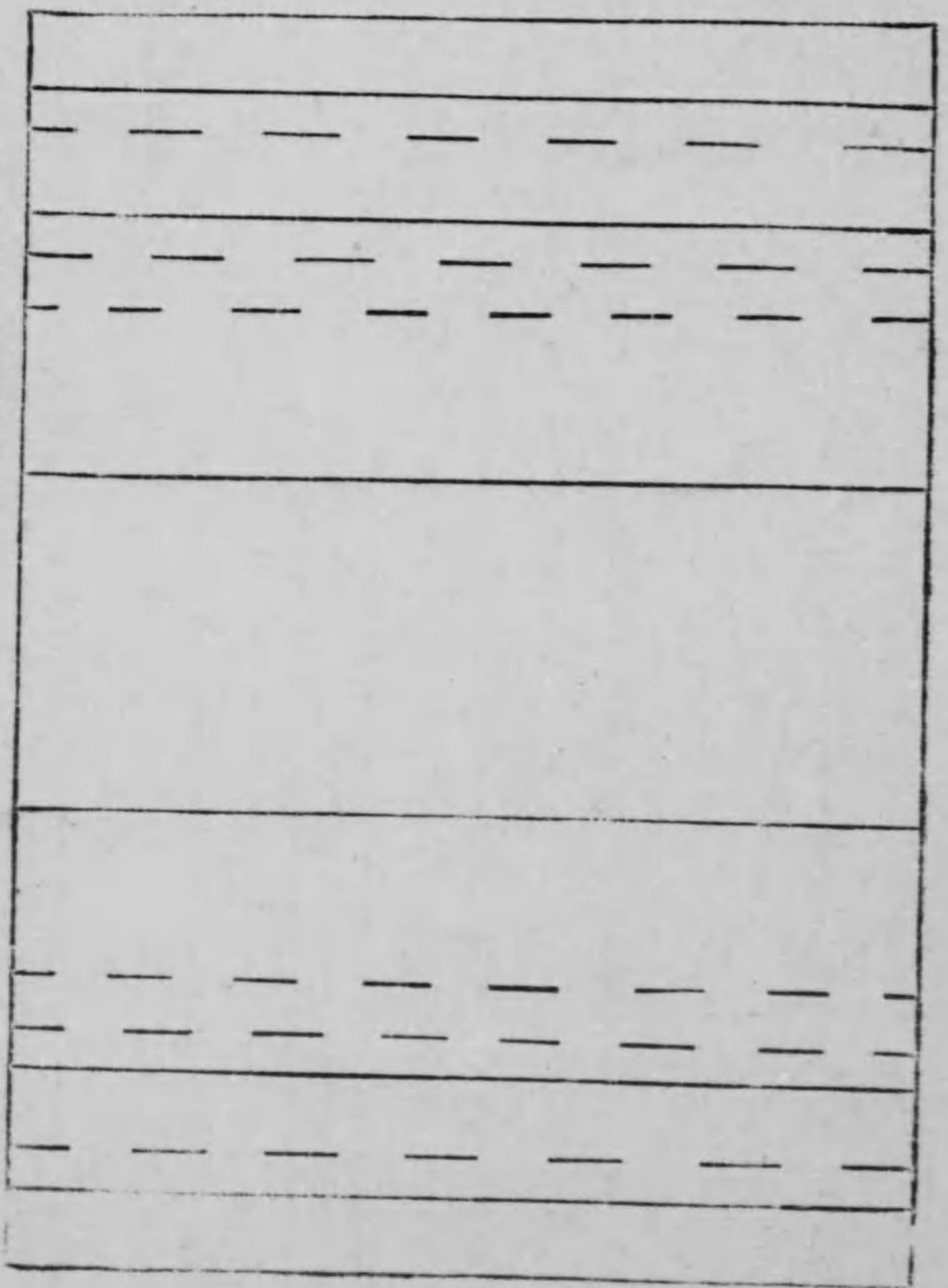
第六十三圖 にしき綾きぬ布包 (戌の形) ○巻たる物
 ○上下を内へ折たるところ。



木版 ● てんせん誤り。並のせんにて表にをるなり

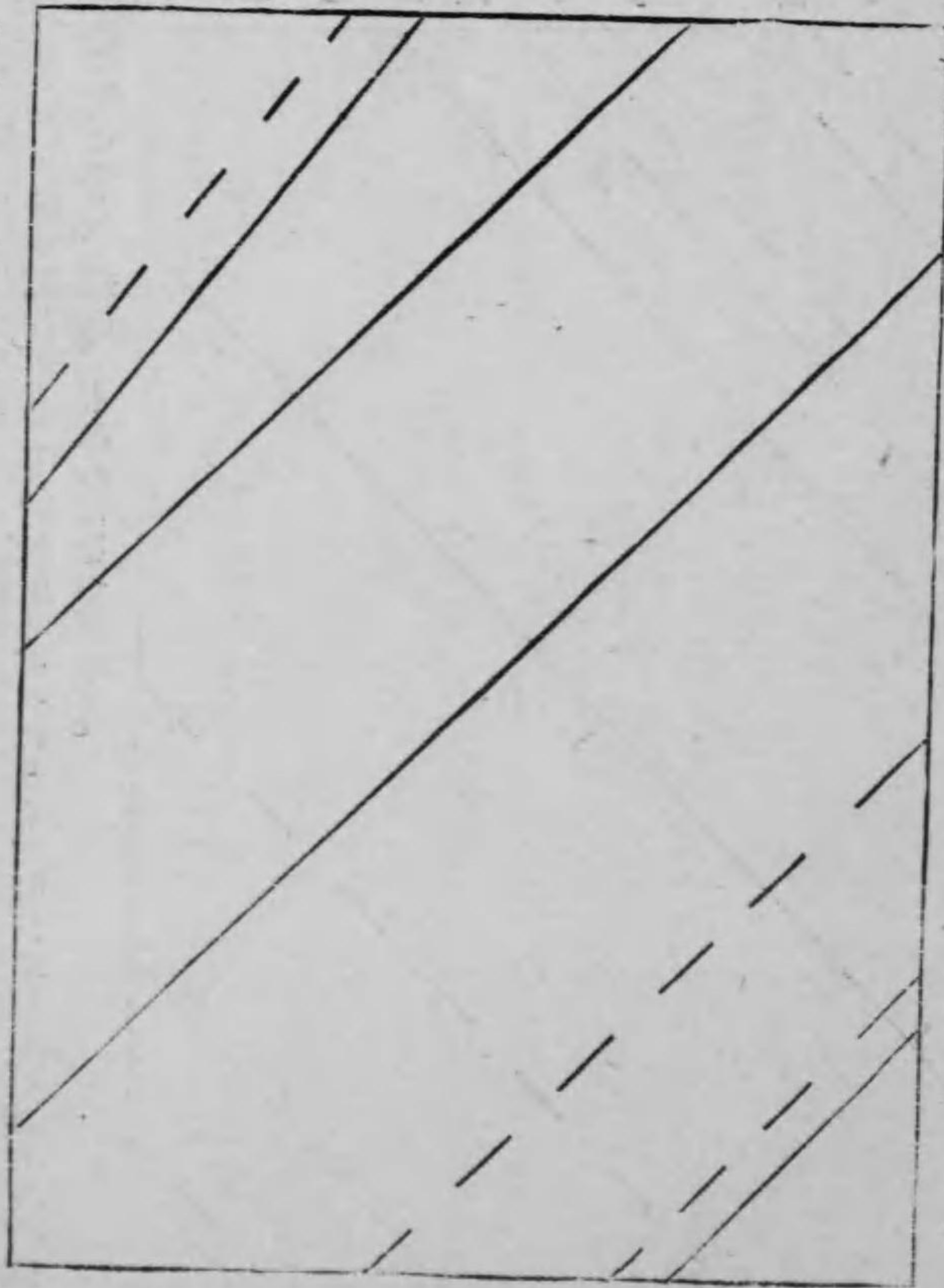


六、綿包 真綿をつむむなり、上書あるべし、紙水引、其程々にて、品がら見はからふべし。

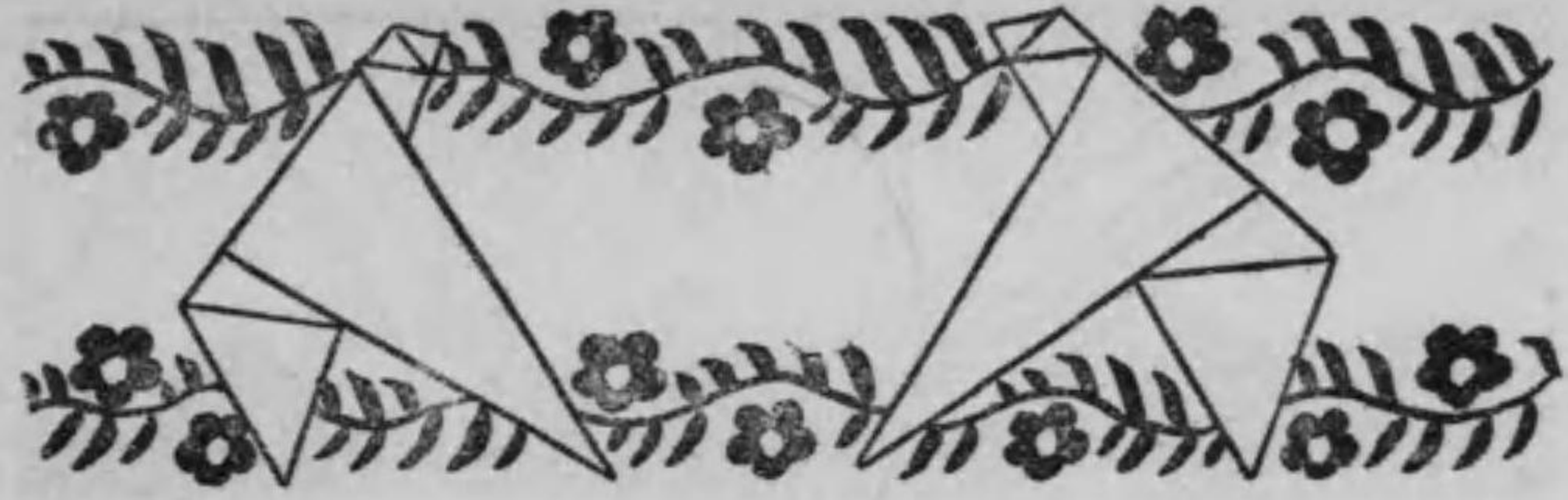


第六十四圖 わた包
 △をりやう、かたかみ。

第三卷 衣服類折形圖解



第六十七圖 染小袖包 △をりやう かたがみ ◎寸法紙の大の形にて包む。



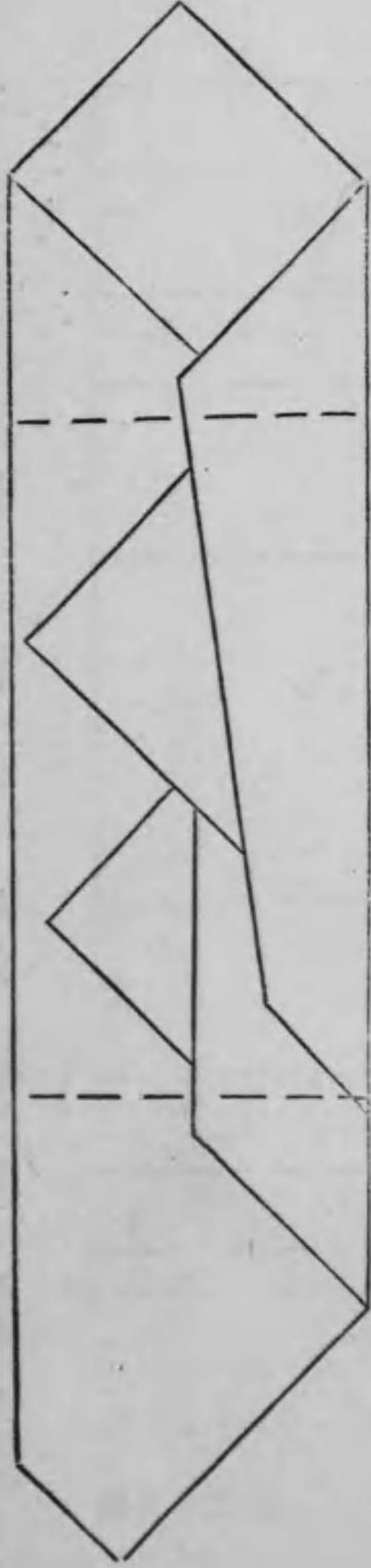
第六十五圖 綿包

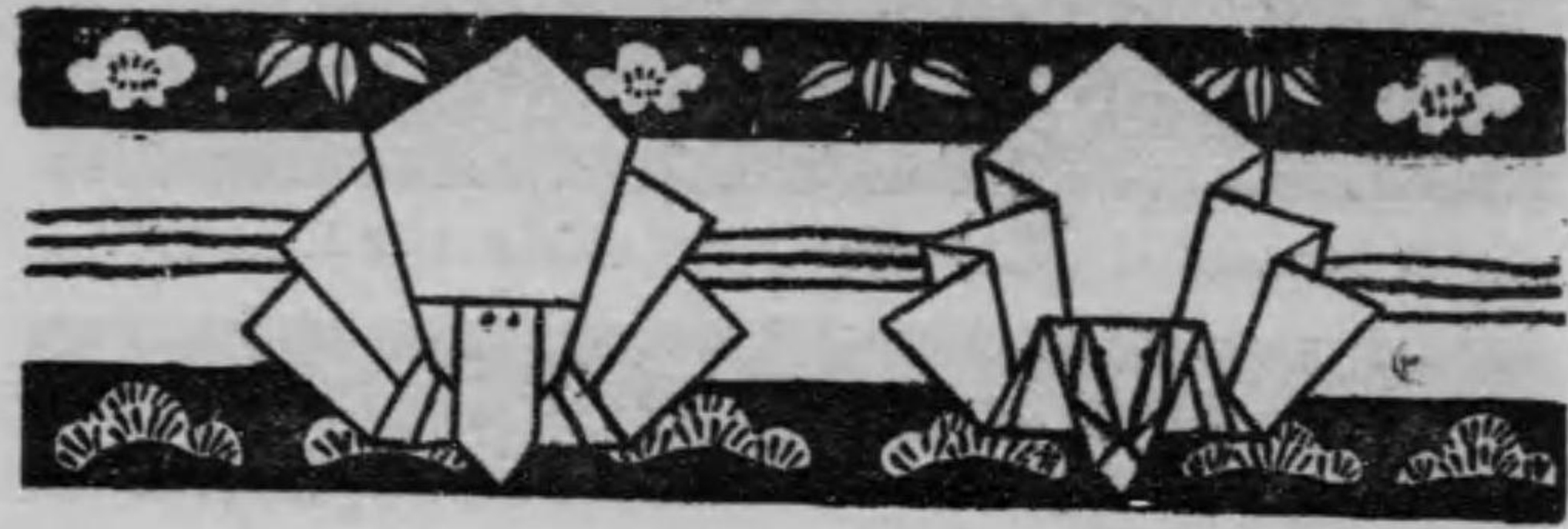
△をりあがり



七、染小袖包 小袖地を包むなり、裏地、わたなどを添て包む事、有なり、細白に裏、水引金赤、銀赤などにて、細結、もろわな、位高き方々にては、金銀水引花結をもつけらるゝなり。

第六十六圖 染小袖包 ○上下をうらへをるべし △をりあがり



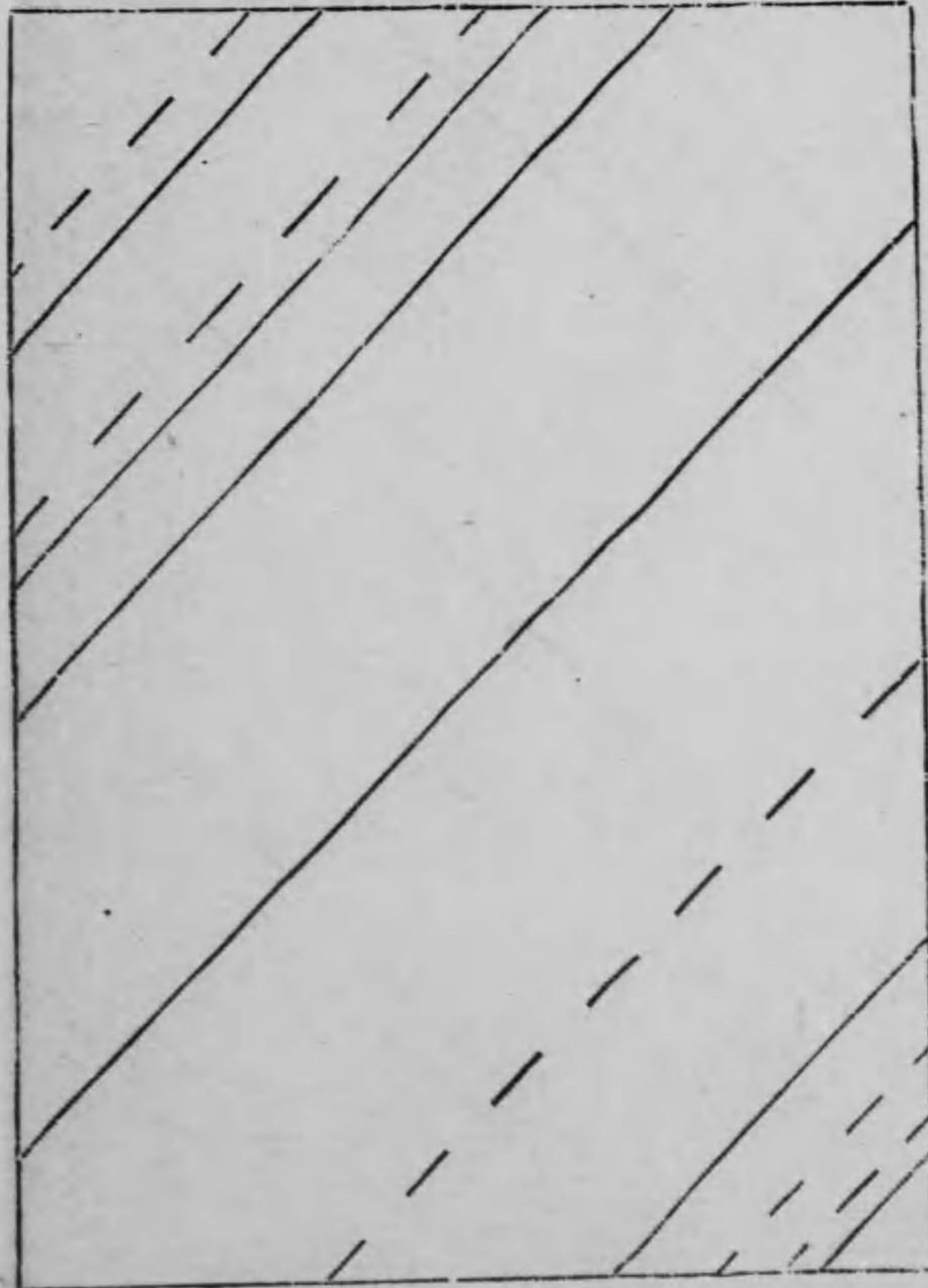


小笠原流折形
 八、帶包 (甲) 男帯を包む折方なり、紙廣奉書べにうら、紅白水引を尋常とす、蛇結を付けるをほどし、細結もろわなをつぎとす。

七二

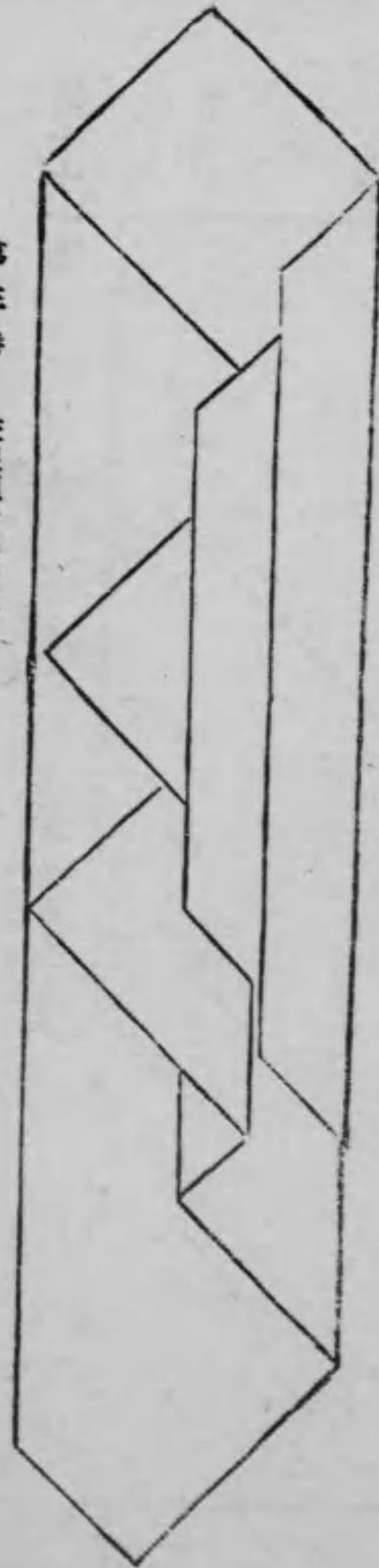
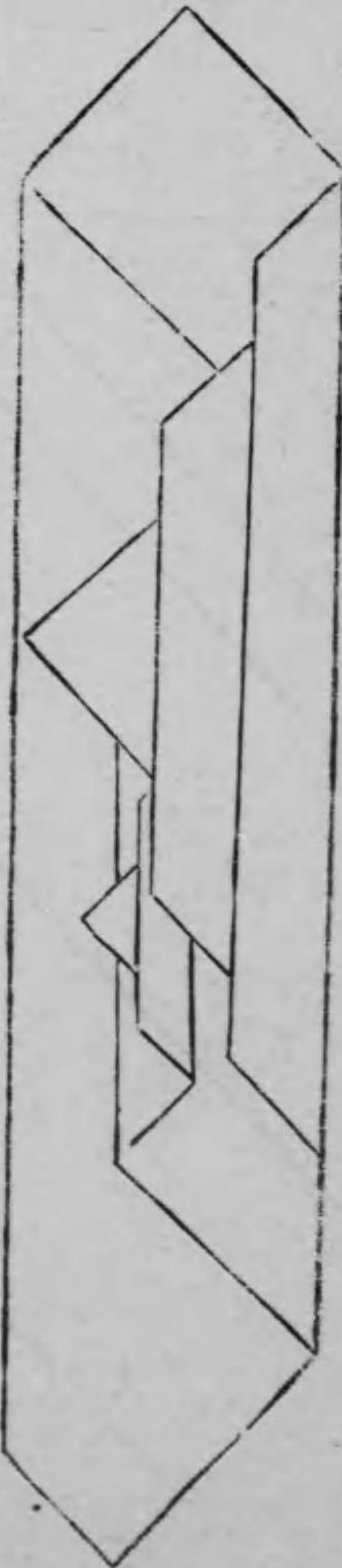
第六十八 圖帶包 (甲の形)

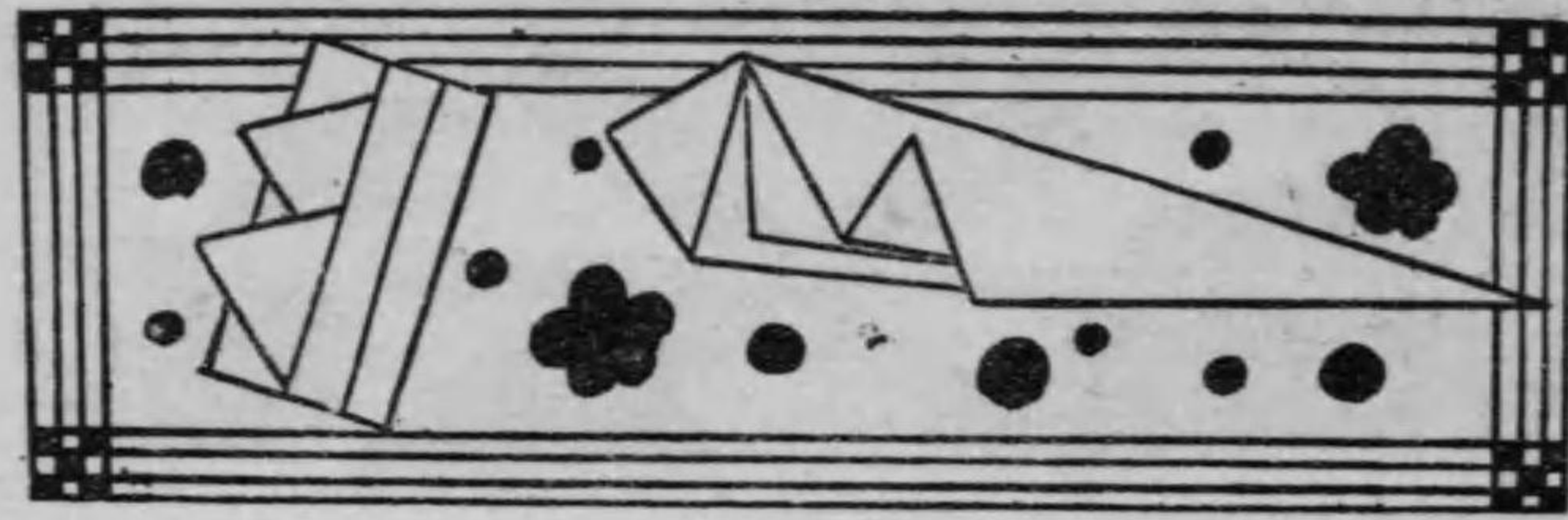
○用紙は大の寸法にて包むなり。
 △これはかたがみなり



第六十九圖 帶包 (甲の形) △をりあがり

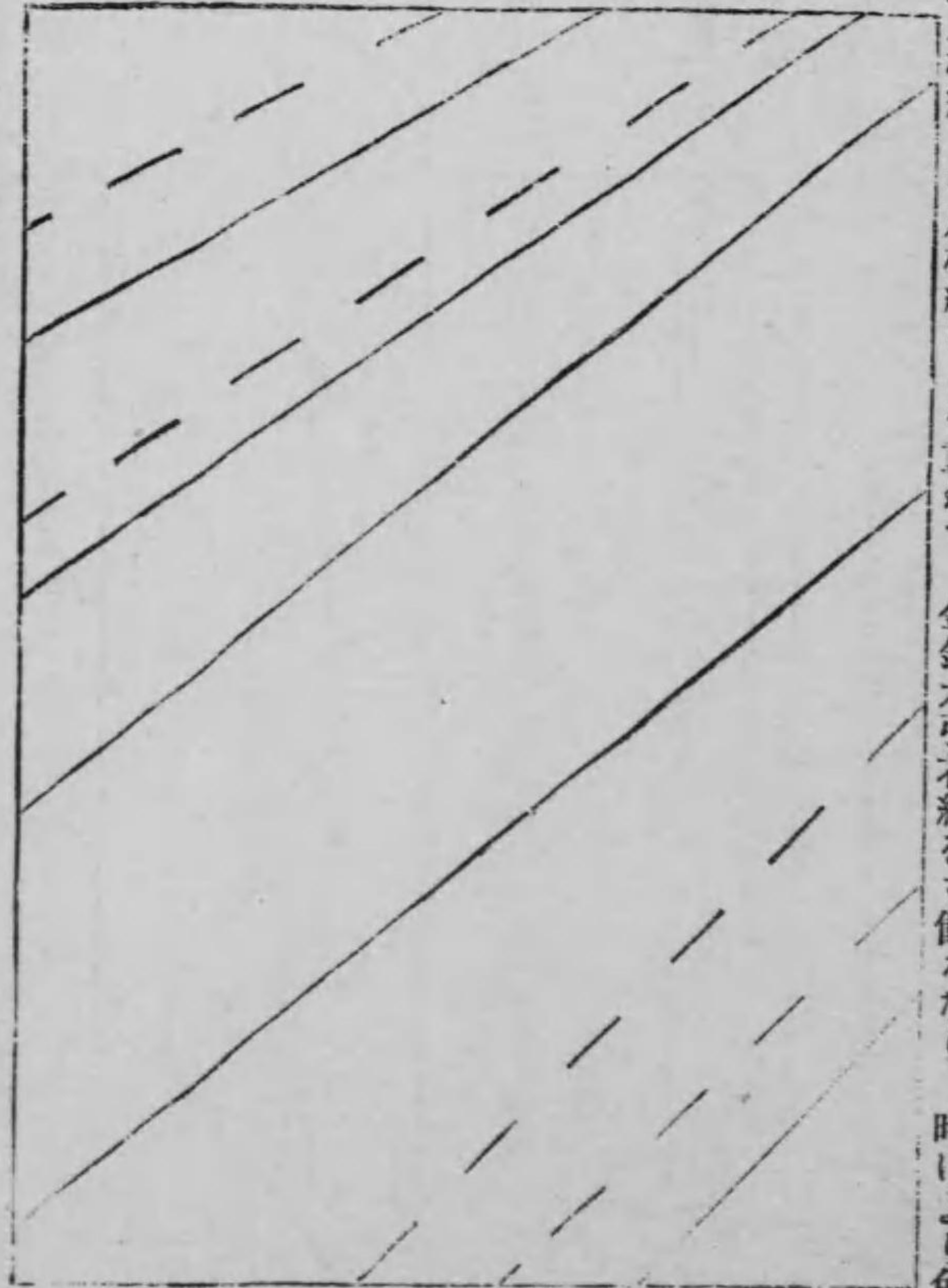
九、同 (乙) 右同し、これは次なり、大奉書がさね、紅白水引結なり。
 第七十圖 おびづみ (乙の形) △をりあがり





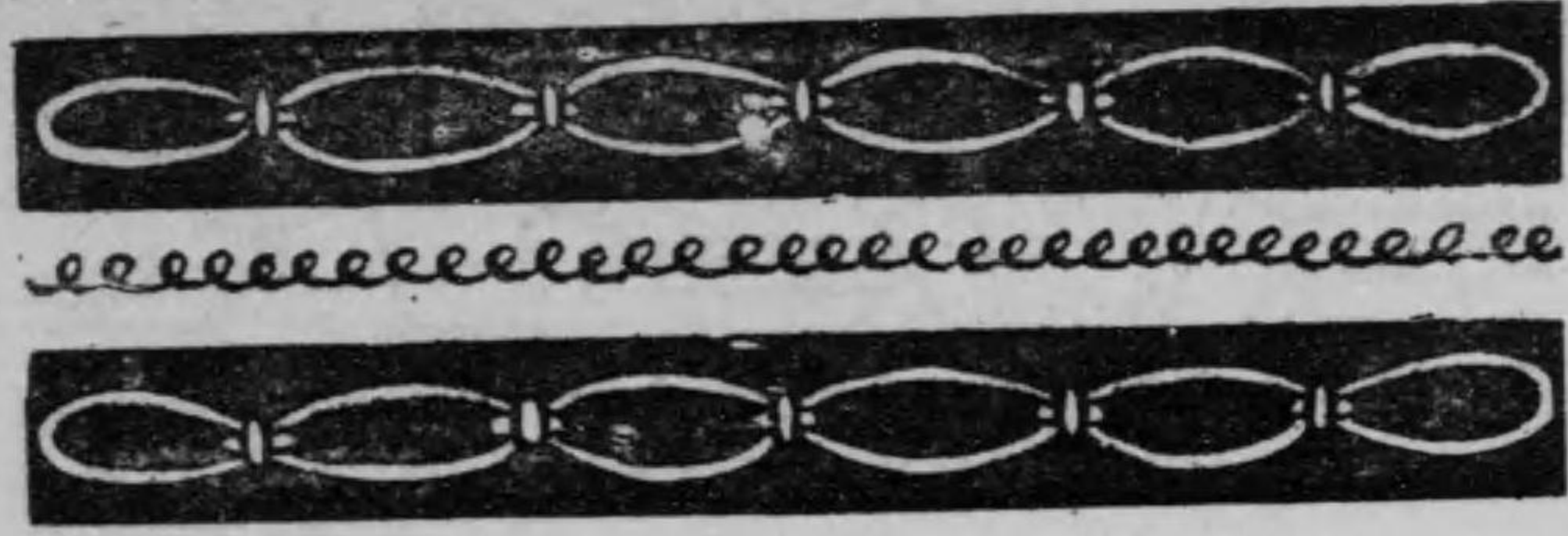
十、同、(丙) 紙がさ
 ねにも
 するこ
 とあり
 第七十二
 圖お
 び包
 (丙の形)
 △かたが
 み
 をりや
 う

第三卷 衣服類折形圖解



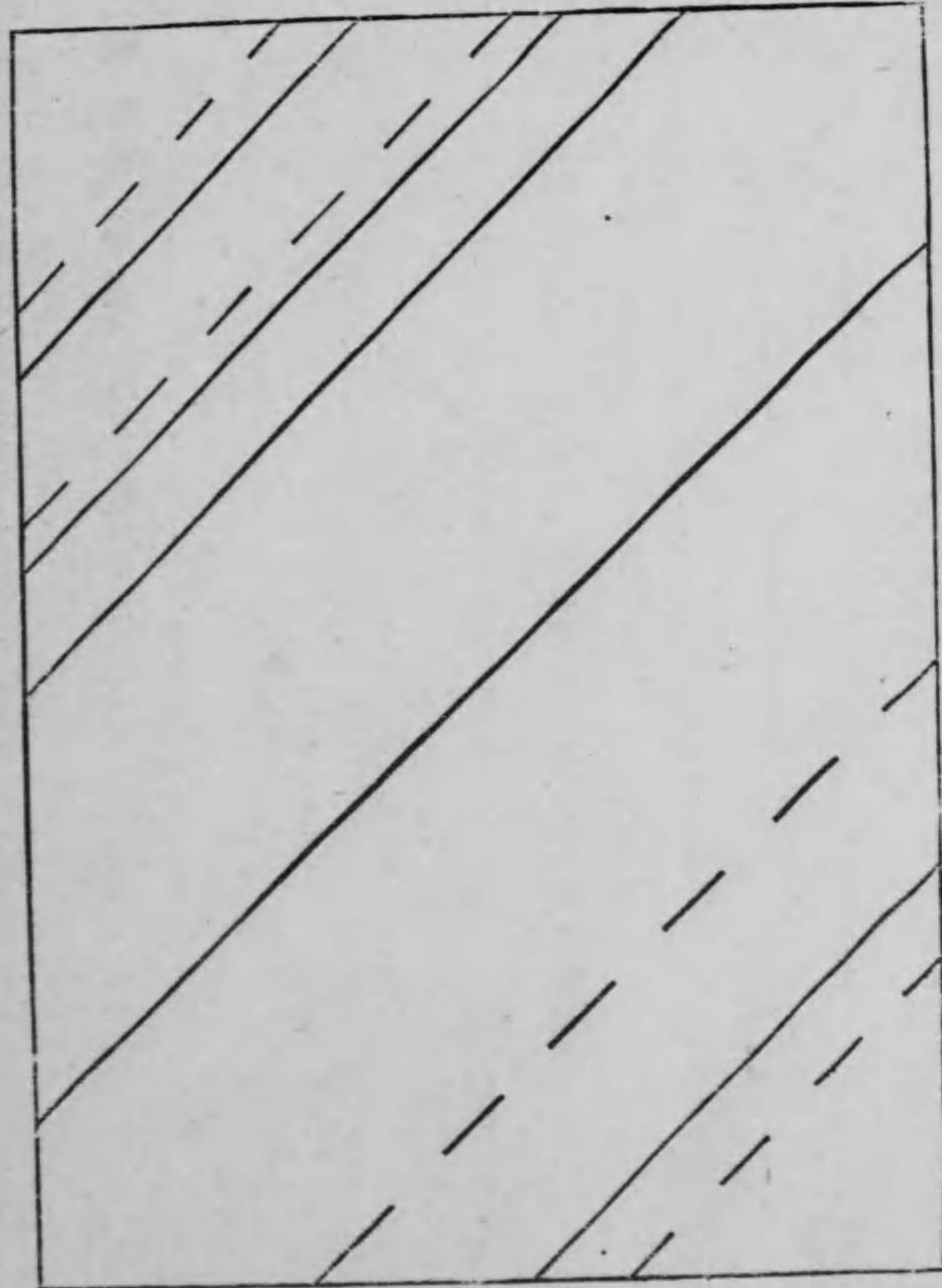
七五

これは女帯を包む折方なり、中位には右の程度なり、それよりあがり
 大尺檀紙、中尺檀紙などを重ねて、金銀水引花結をも飾るなり、時により色

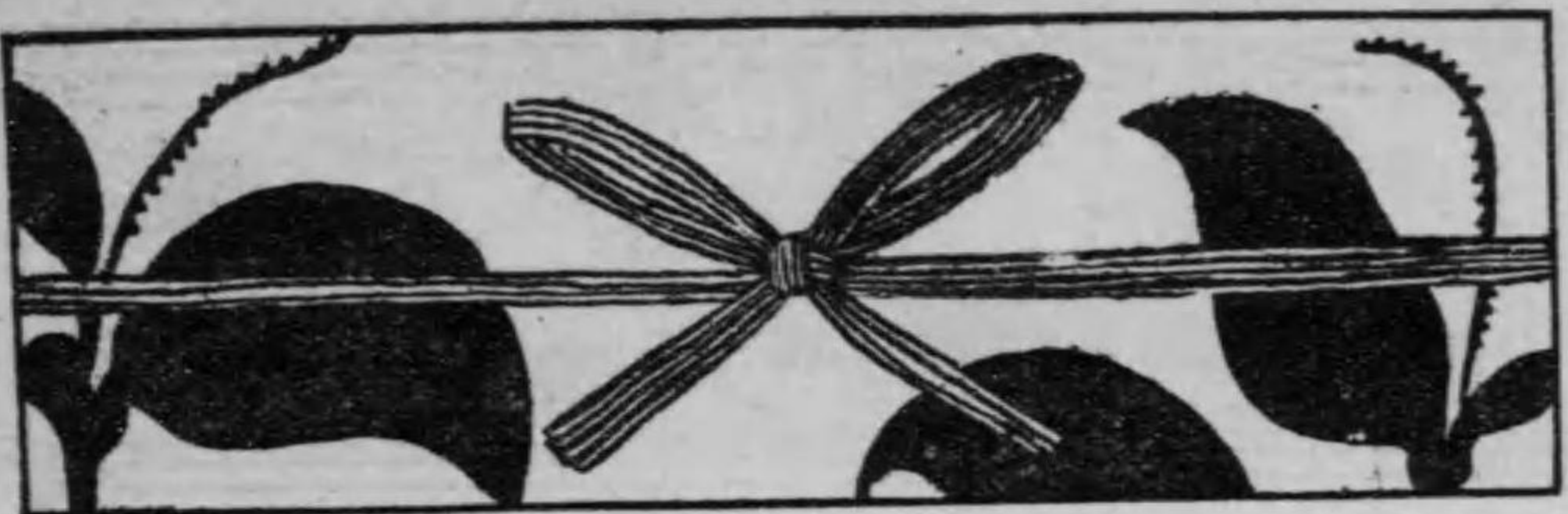


第七十一圖 おびづゝみ (乙の形) △をりやうかたがみ

小笠原流折形



七四



小笠原流折形
第七十三圖 おび包^{つみ} (丙の形) △をりあがり



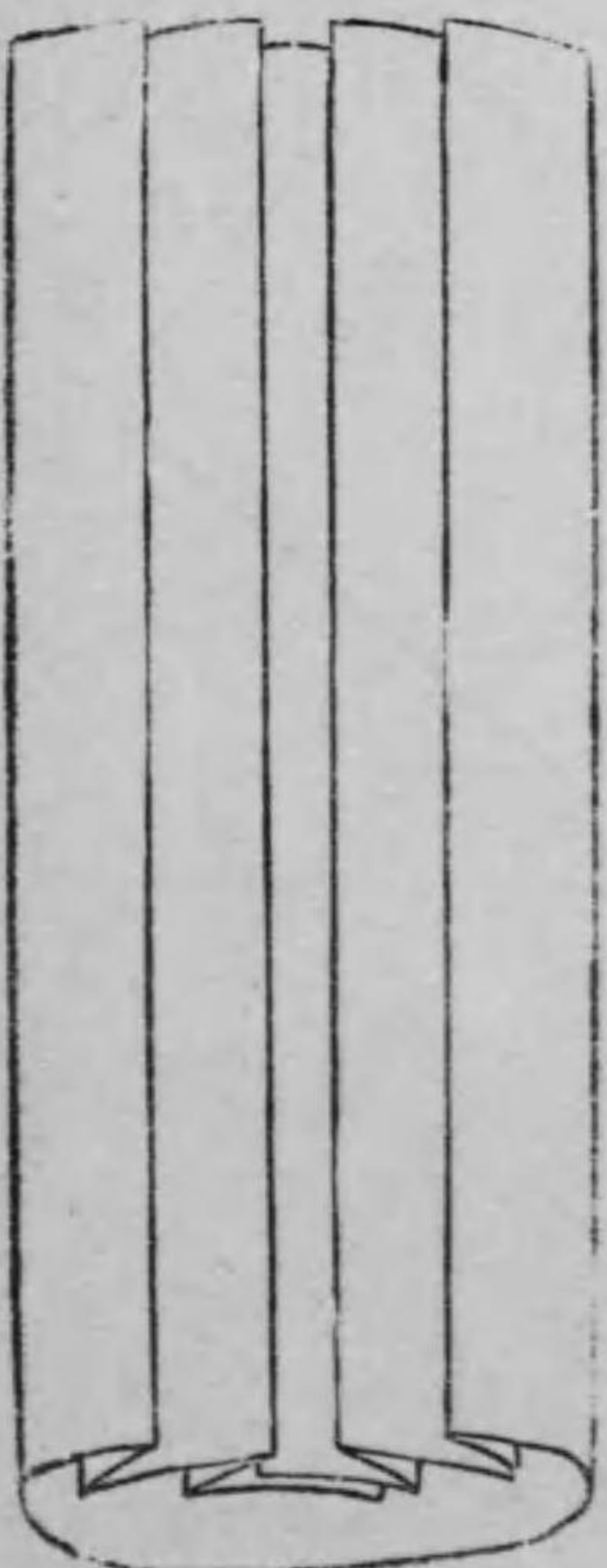
七六

十一、同^な (丁) くけぬおびを包むなり、紙のつかひ方、右にならふべし。

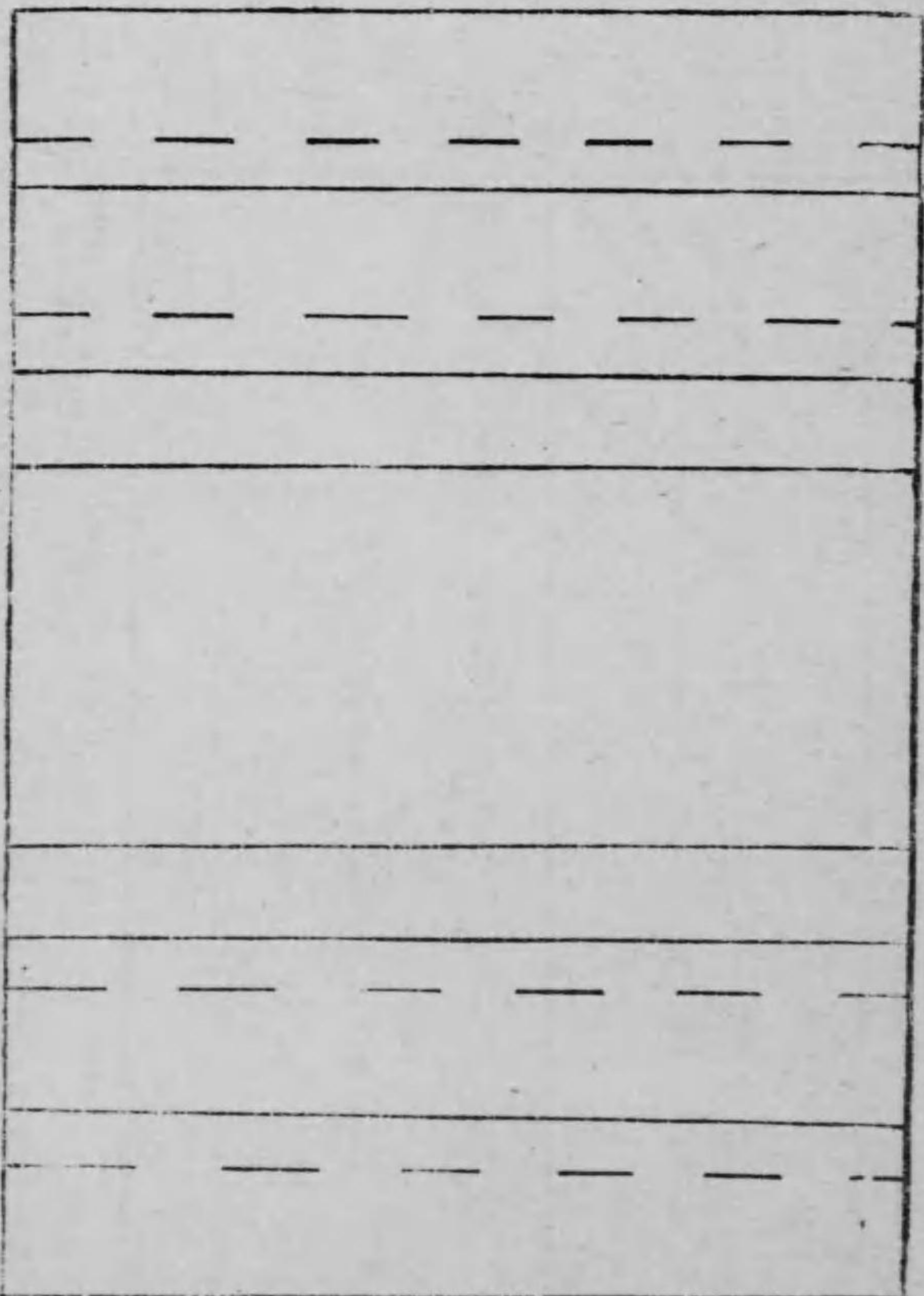
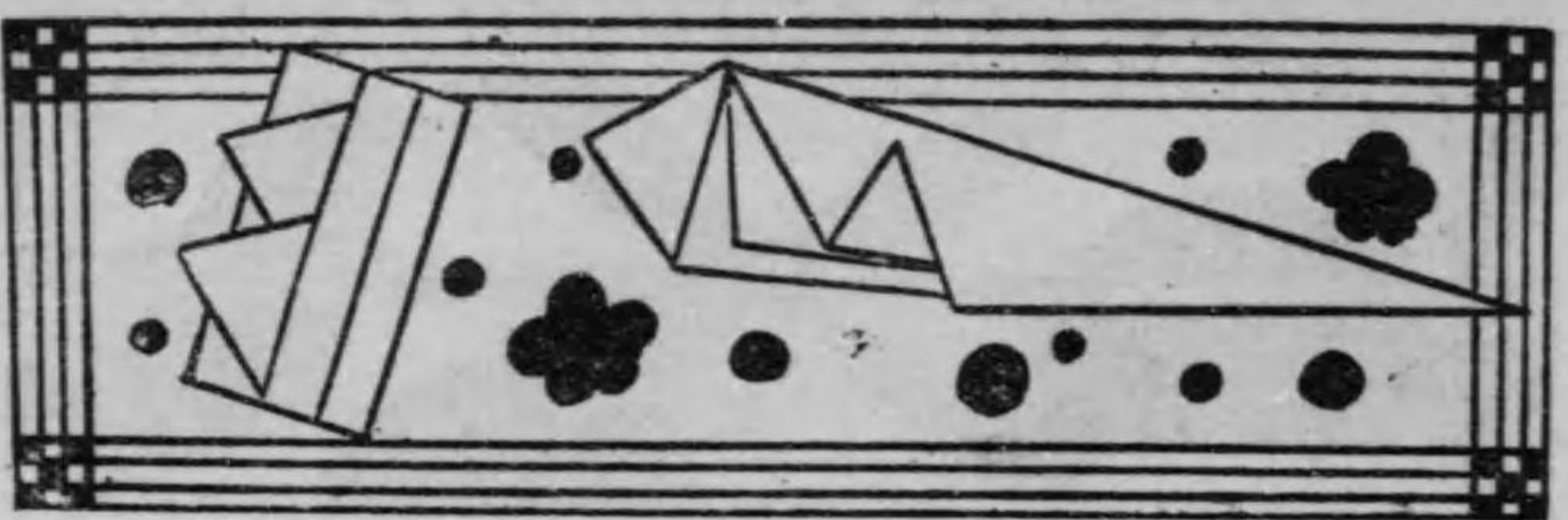
第七十四圖 おびつ

つみ (丁の形)

△をりあがり



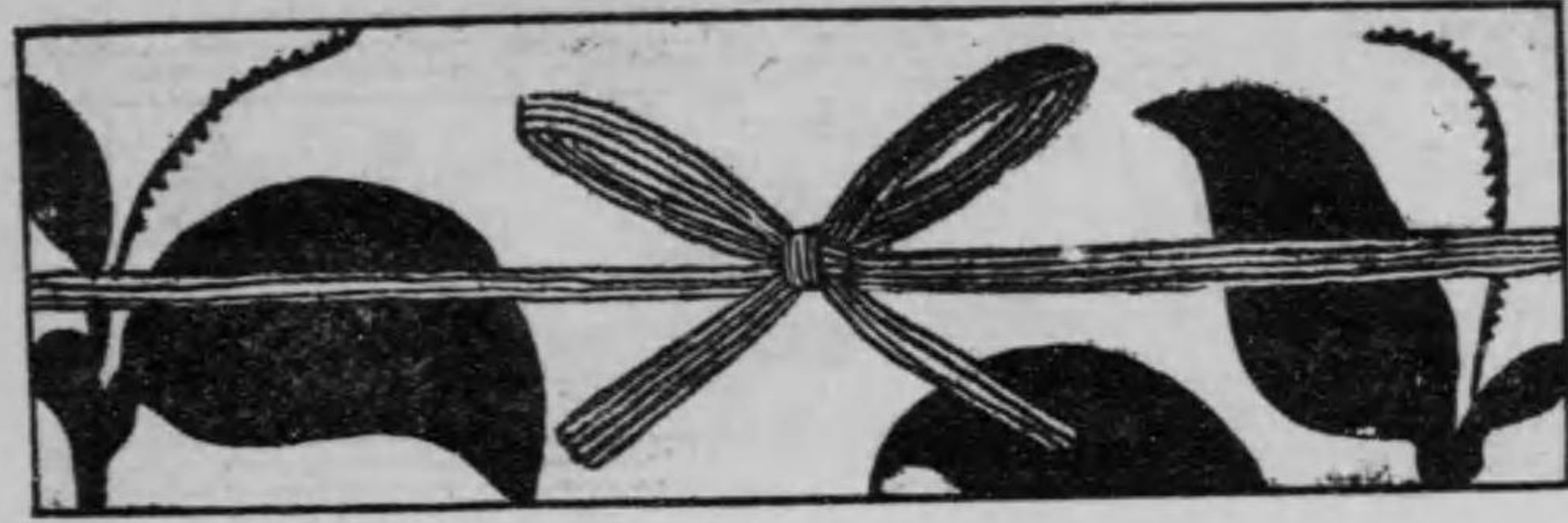
第七十五圖 おびつ^{つみ} (丁の形)



○へはぬおび^{つみ}のみ
△をりあがり かつかみ

第三卷 衣服類折形圖解

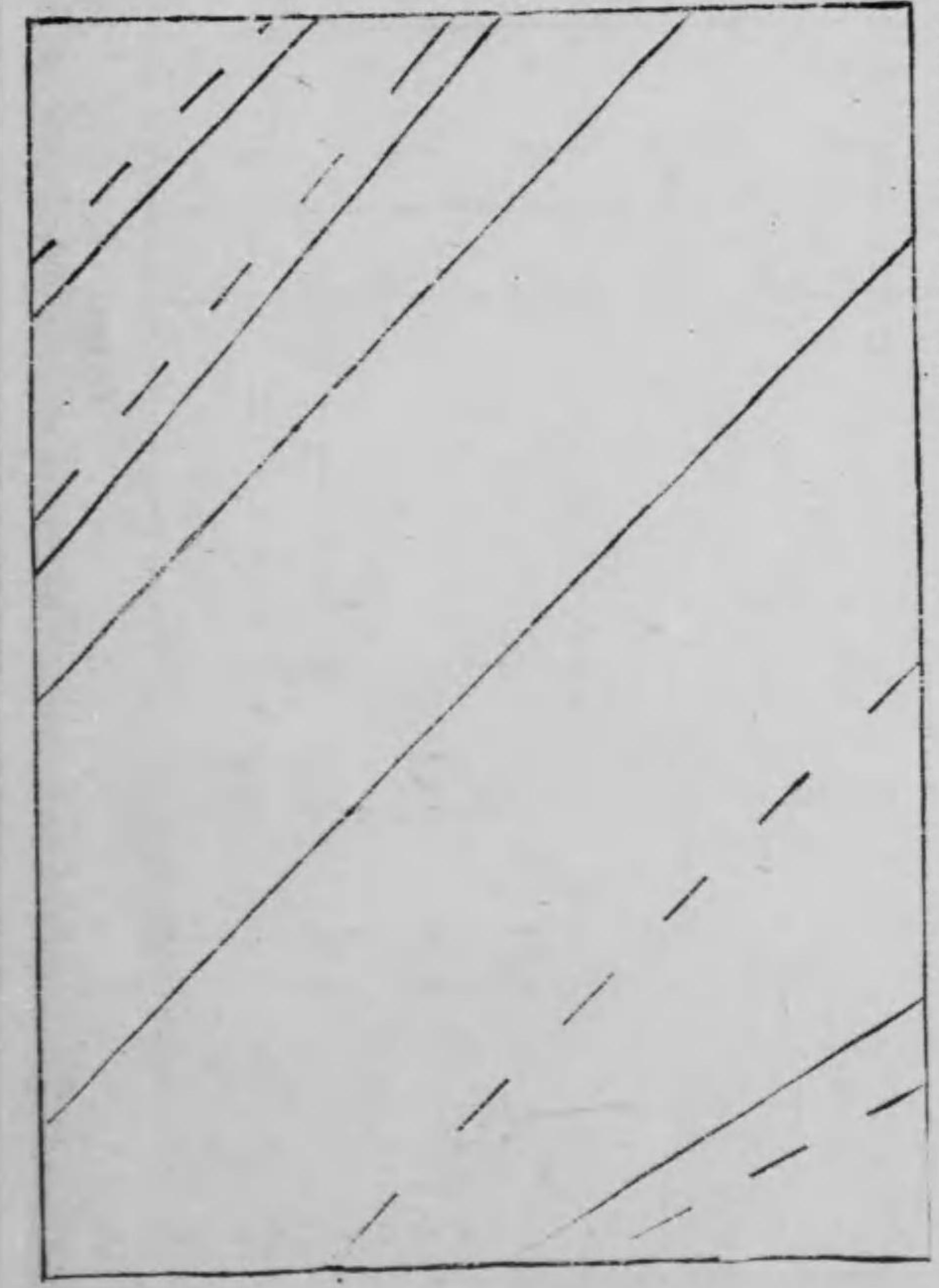
七七



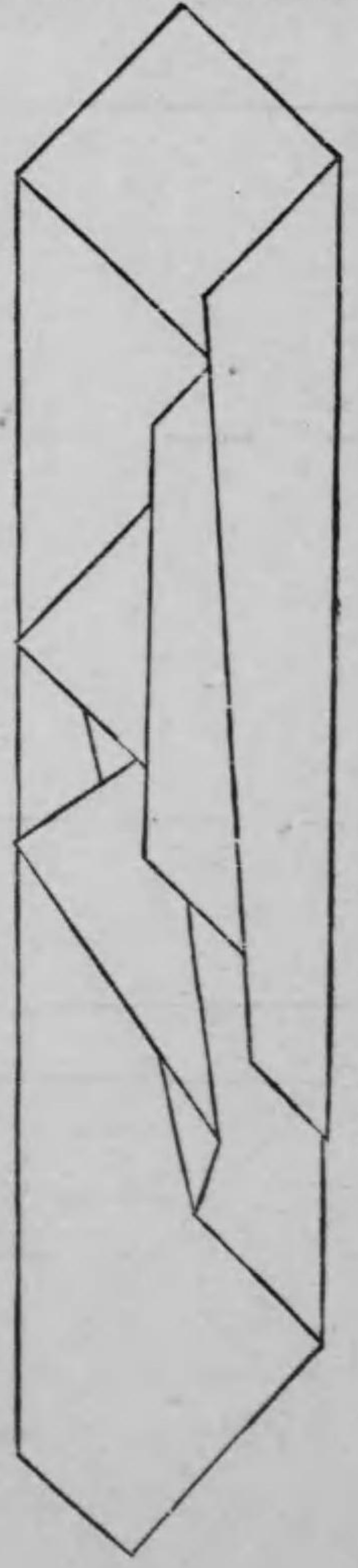
小笠原流折形
 十二、同 (戊) くけ帯を包む折方なり、納結の帯につかふ、紙水引上中の等級有べし、上には金銀水引菊結、寶珠結などにて飾るなり。

第七十六

○おび包
 (戊の形)
 △かたが
 み
 をりや
 う

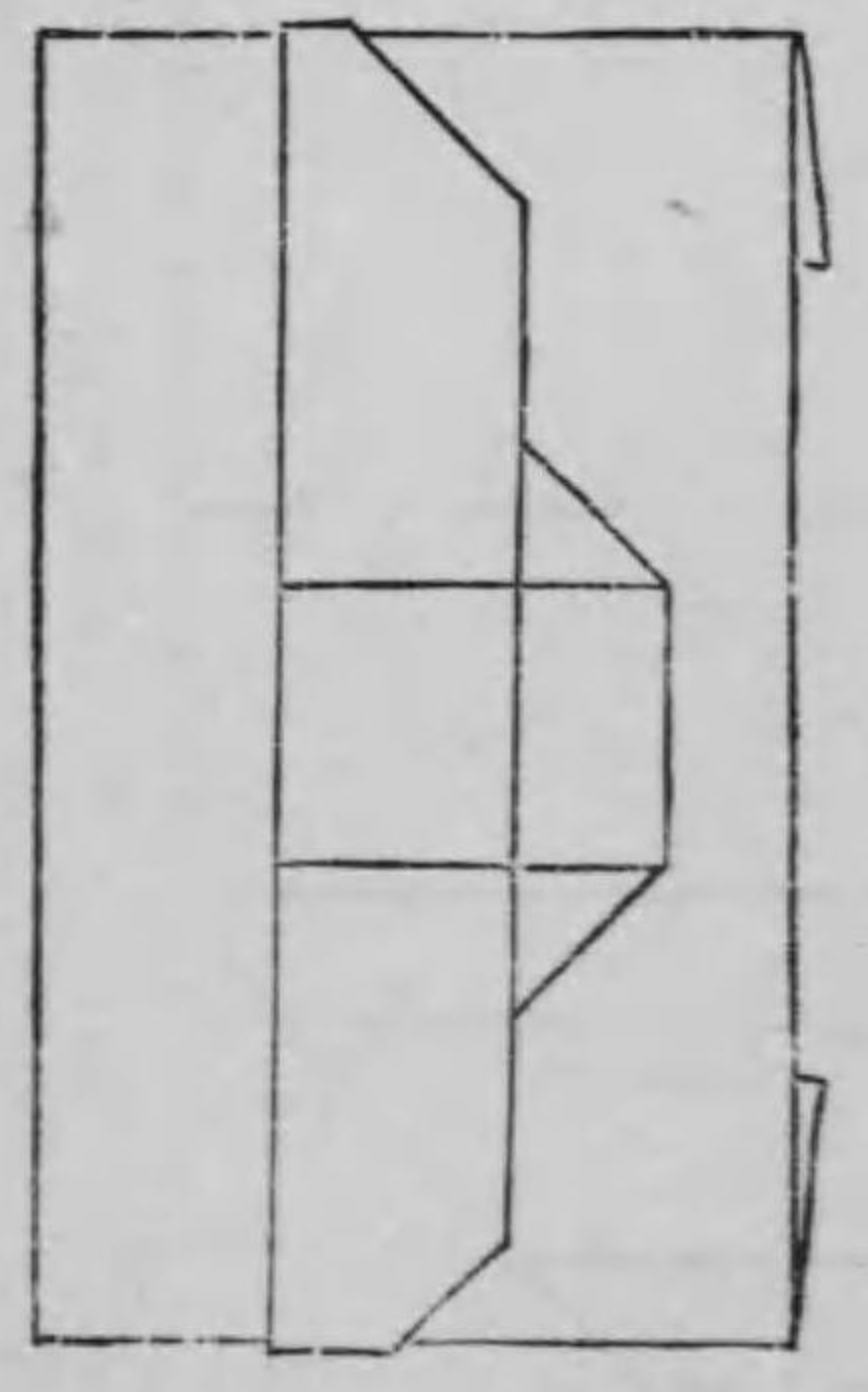


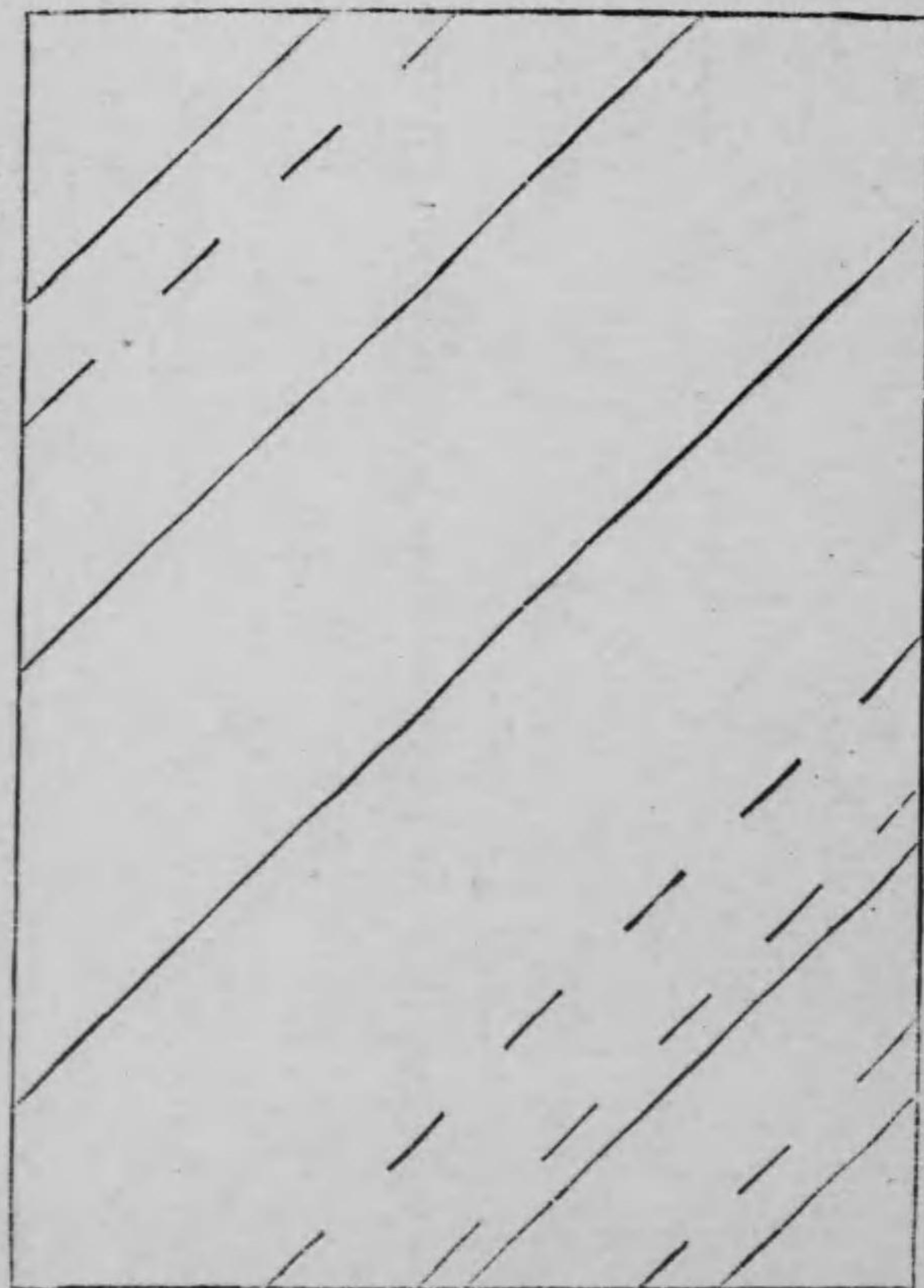
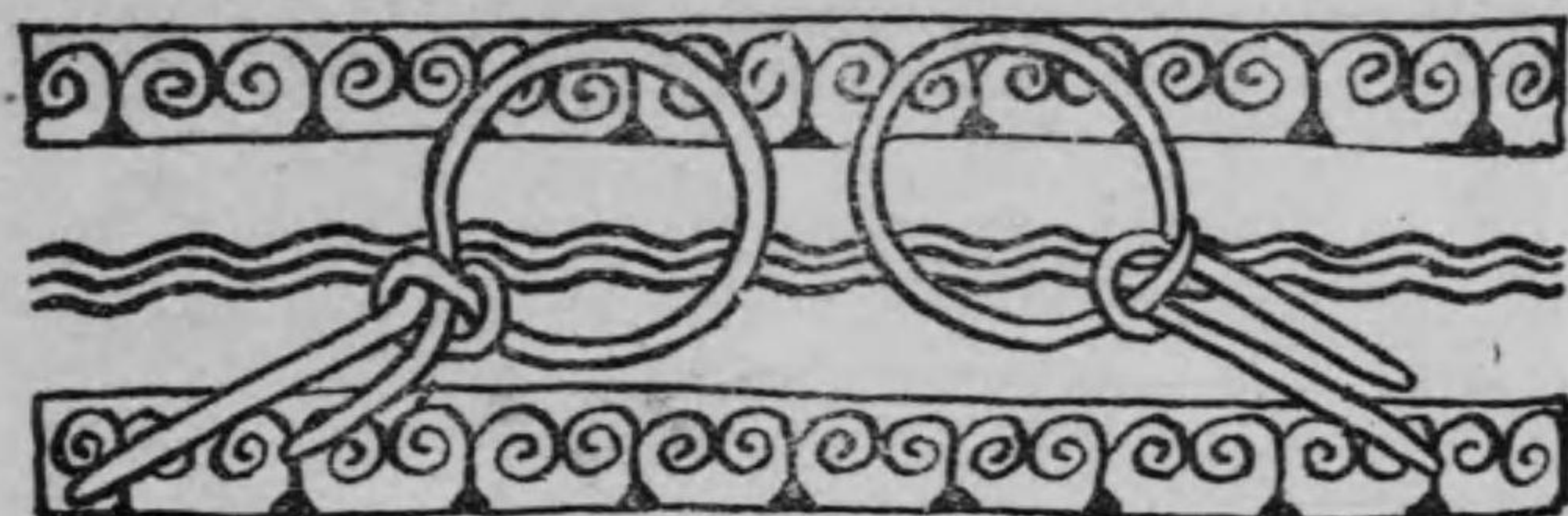
第七十七圖 おび包 (戊の形) △をりあがり



十三、革類織物切類包 下包なし、書付をして、水引かけてつかふ、品により折方の上下ををらぬ事もあり。

第七十八圖
 革類織物切類包
 △をりあがり



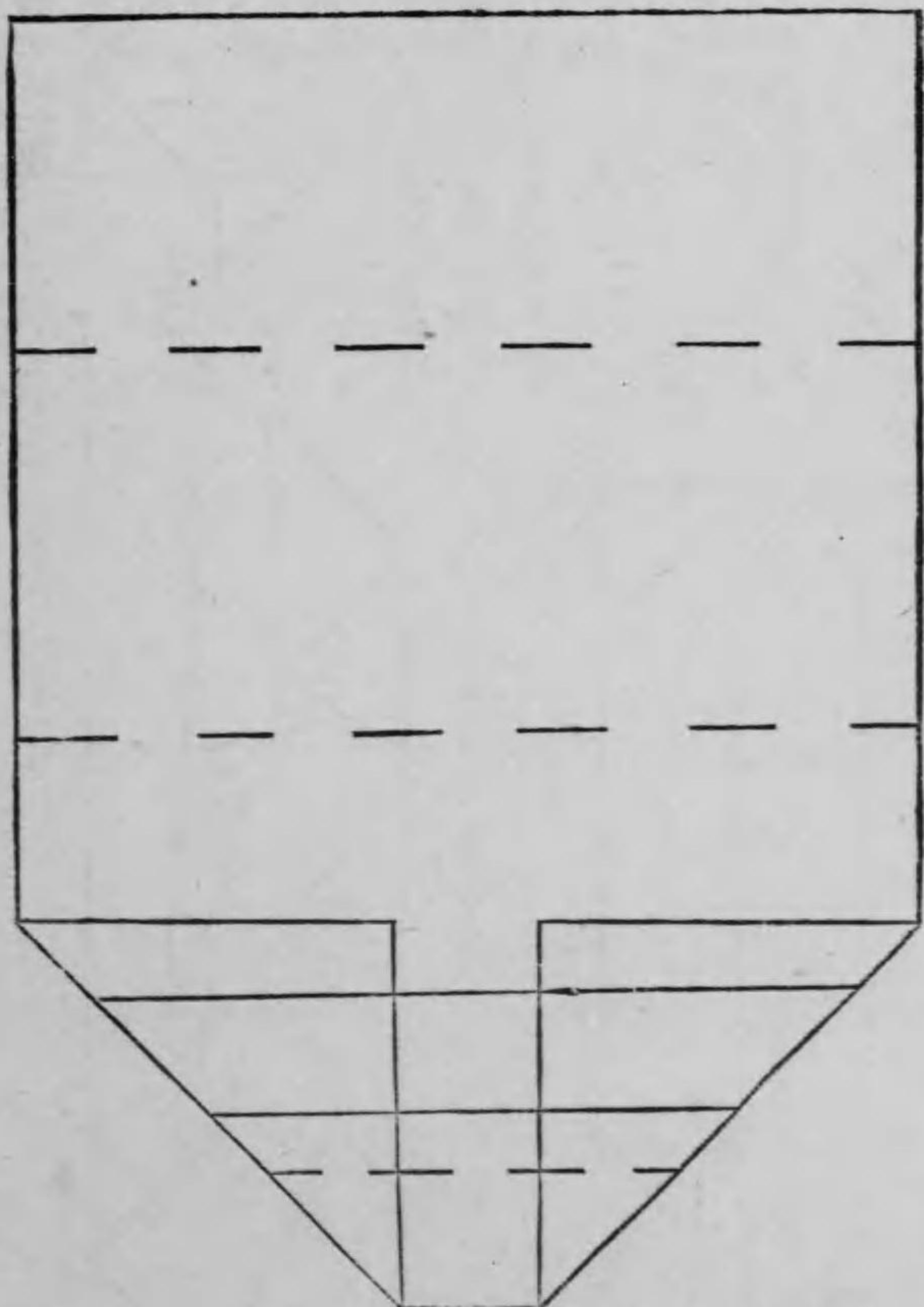


八一

第八十圖 ○くハりを ひもるゐ包 △をりやう
○寸法紙の中の小べらゐなり。

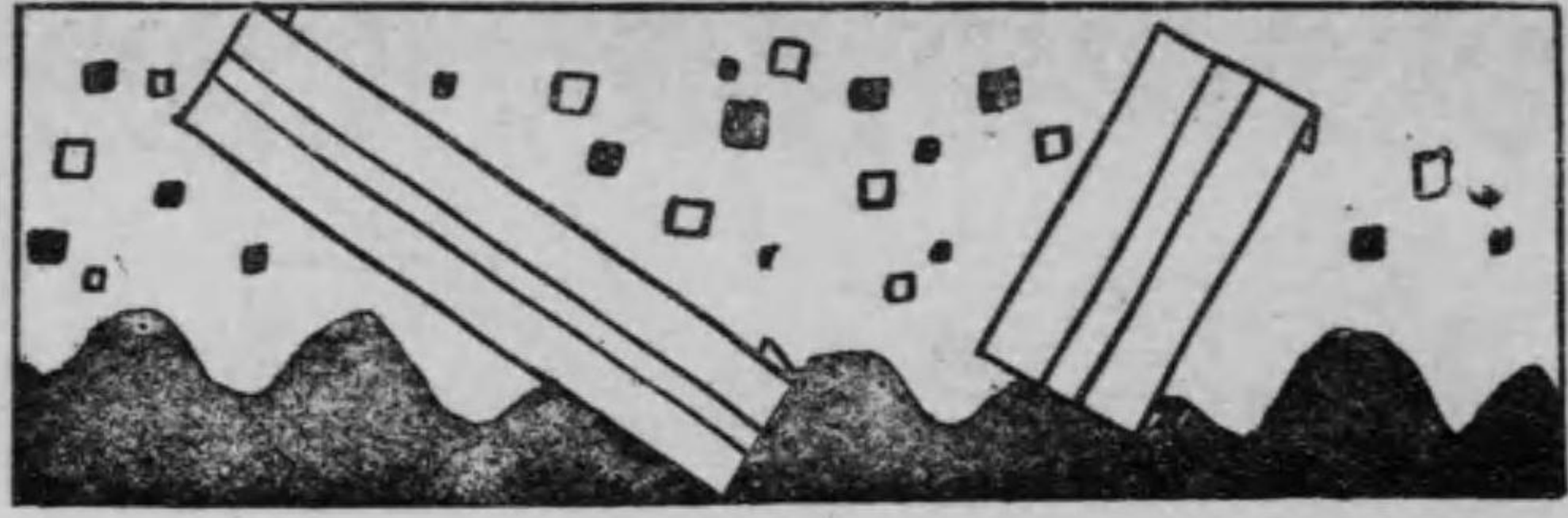
十四、括緒紐類包 衣服其他、口の括りにつかふ緒、組紐、絹布紐をも包む折方なり、水引、書付あるべし。

第七十九圖 草るゐ織物切るゐ包 △をりやう

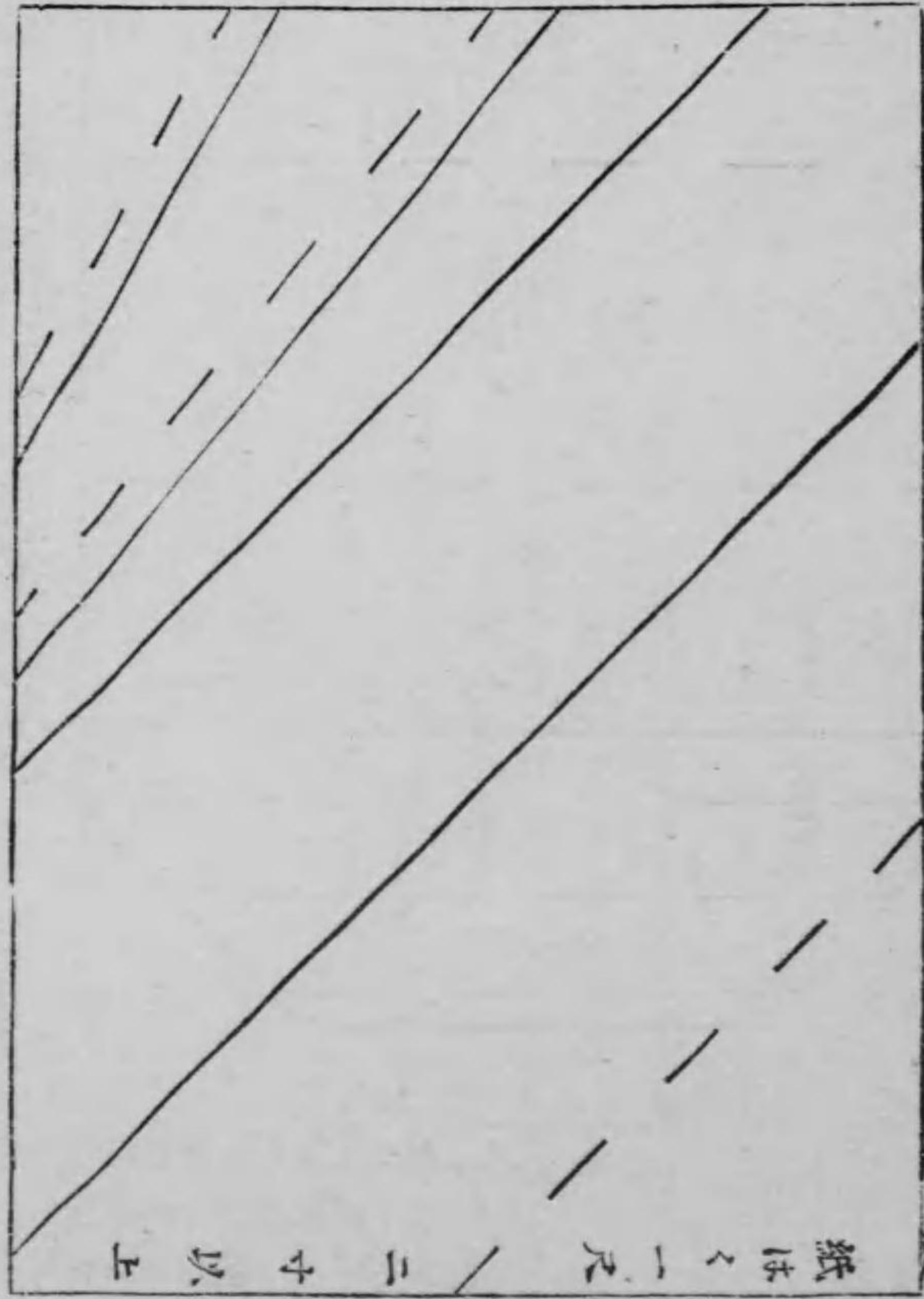


八〇

○折方うちの圖なり。
寸法紙の中の大より大形なり。



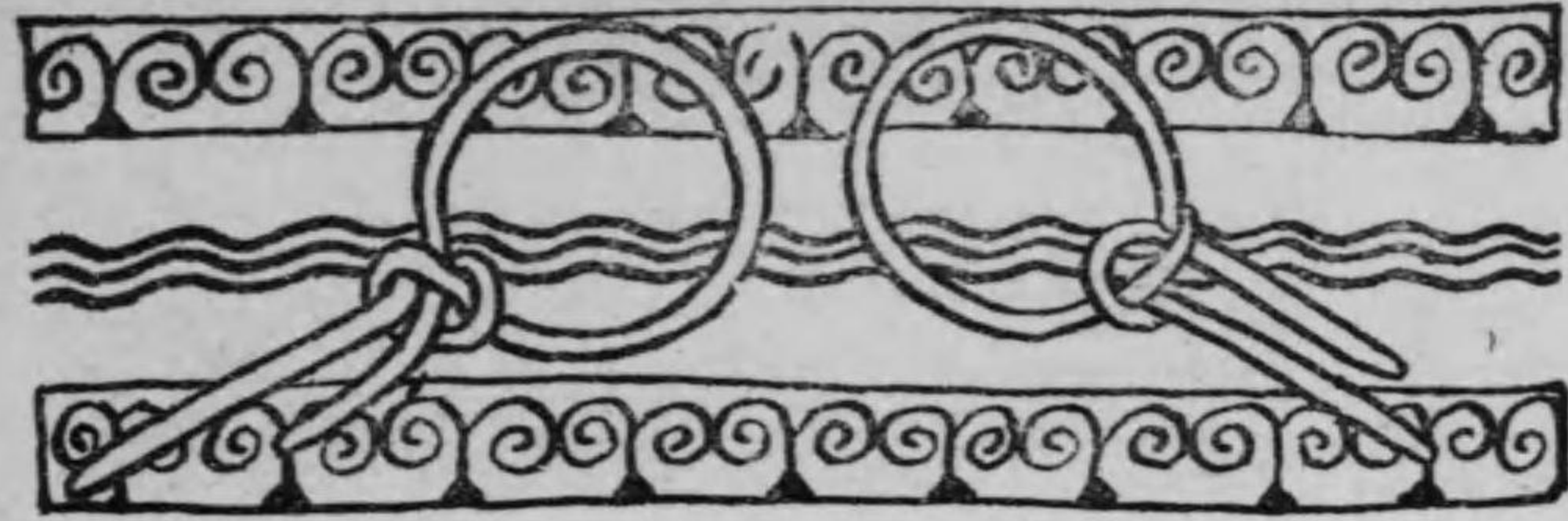
第八十三圖 かつぎ、づきん、わたぼうし包
 △かたが
 みをり
 やう



第三卷 衣服類折形圖解

八三

紙は二尺以上



小笠原流折形

第八十一圖

○くゝりをひもるゐ包

△をりあがり

十五、被衣、頭巾、綿帽子包

書付、水引細結、もろわな、紙白がさねよし。

第八十二圖

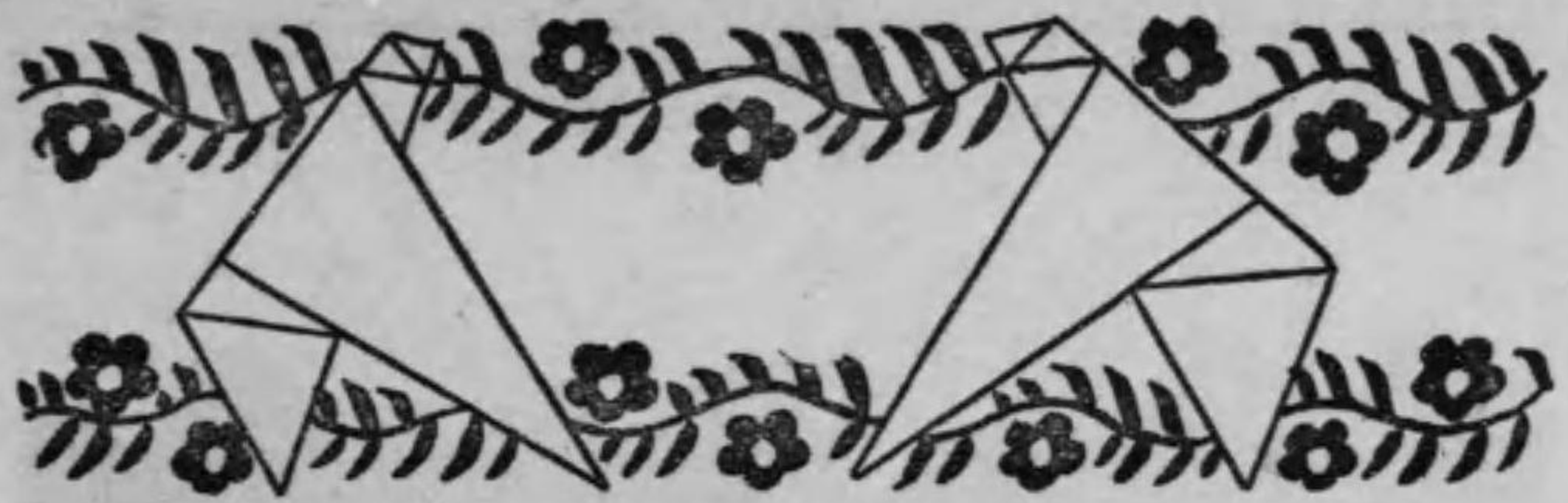
○かつぎづきん

わたぼうし包

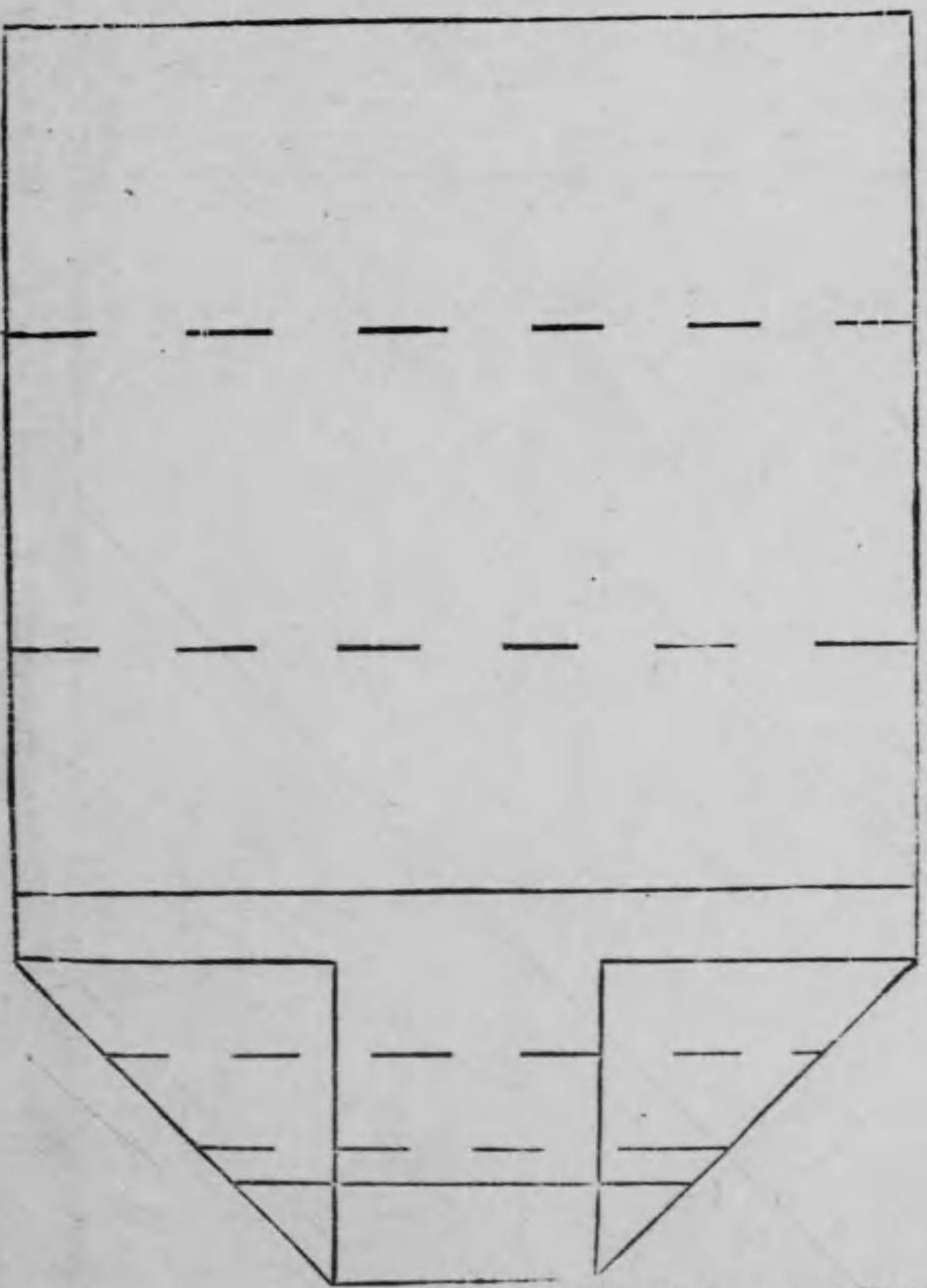
△をりあがり



八二

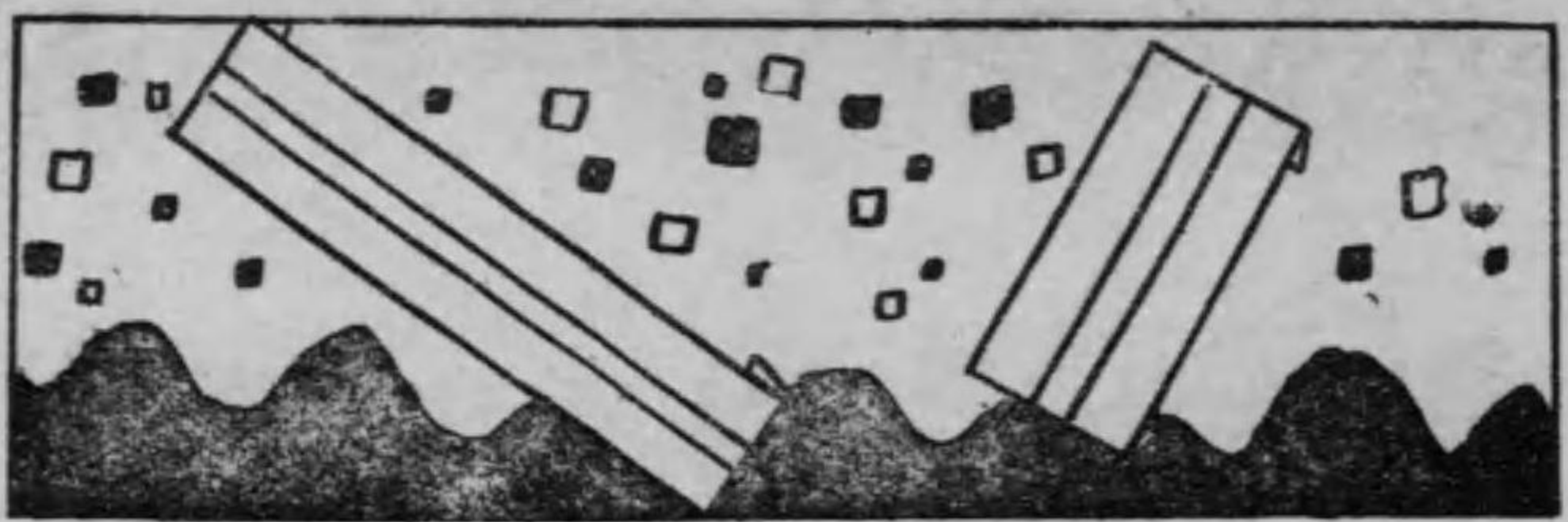


小笠原流折形
十六、手袋包、書付、水引あるべし、大方右に同じ。



八四

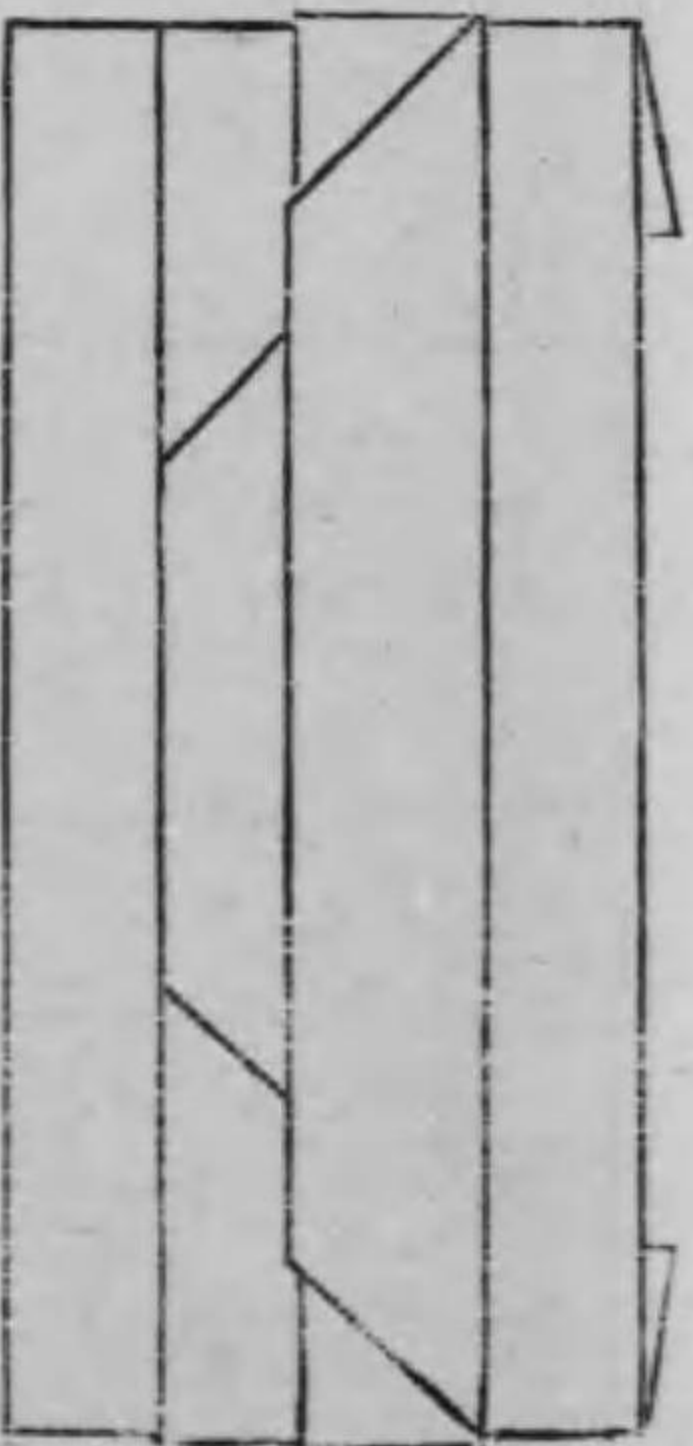
第八十四圖 七ぶくろ包
○折方々の圖なり。
○紙のたて一尺一寸餘。



第八十五圖

○てぶくろつゝみ

△をりあがり

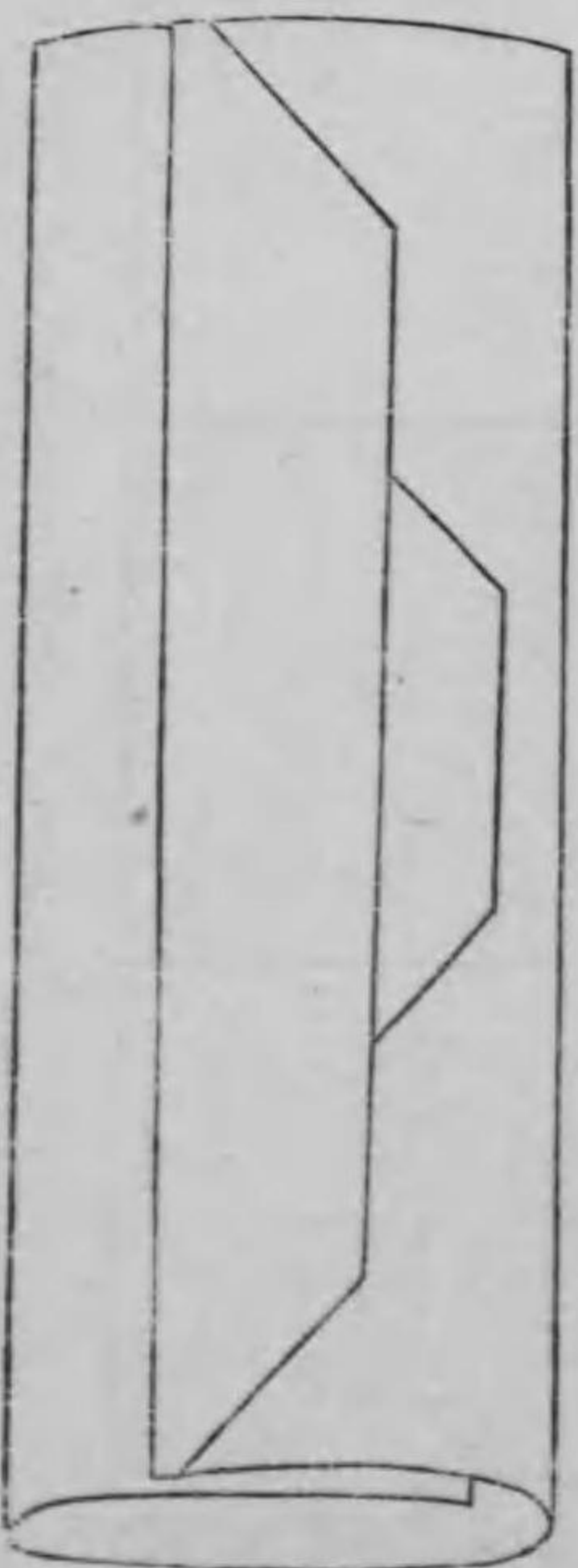


十七、足袋上草履包 是は爪先の方を上にして（字頭の方）包む、書付あり、古くはすべて中の品の見えぬ折方には上書をなし、中の品の見ゆるものは上書に及ばぬ定めなりしを、百年以前の頃よりは、見ゆる折方にも上書する様になれり、これ自然のならばしなれば、きつとしたる包物のほかは近き世ぶりにしたがふべきにや。

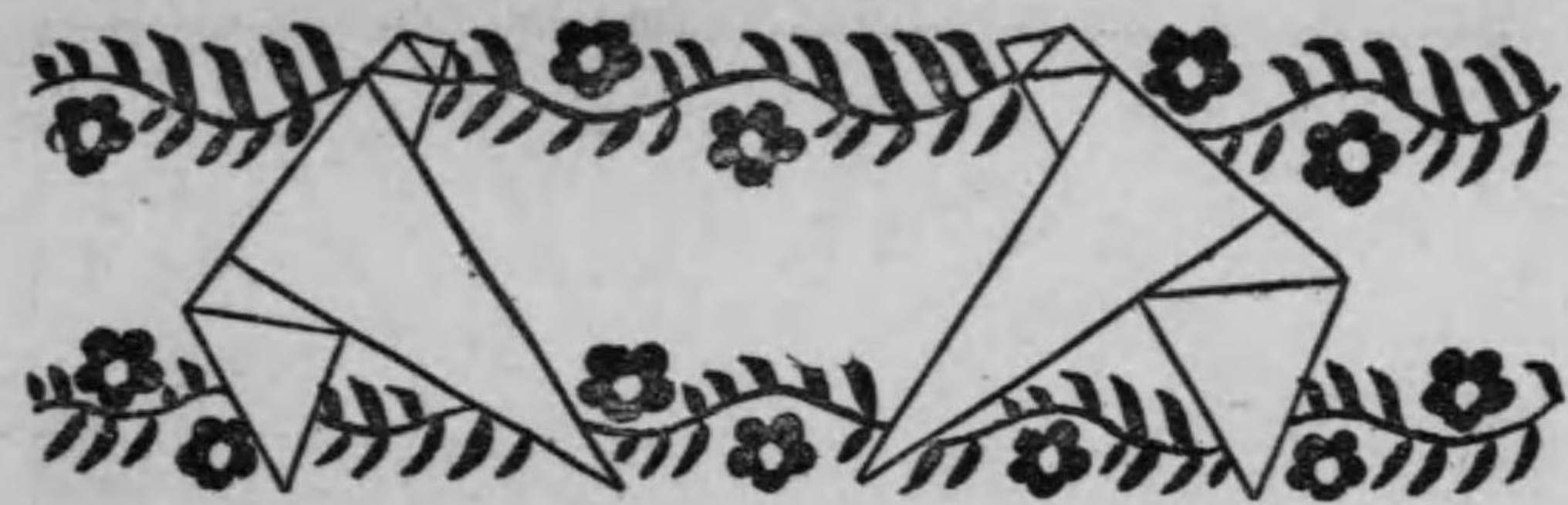
第八十六圖

○たびうはざうり包

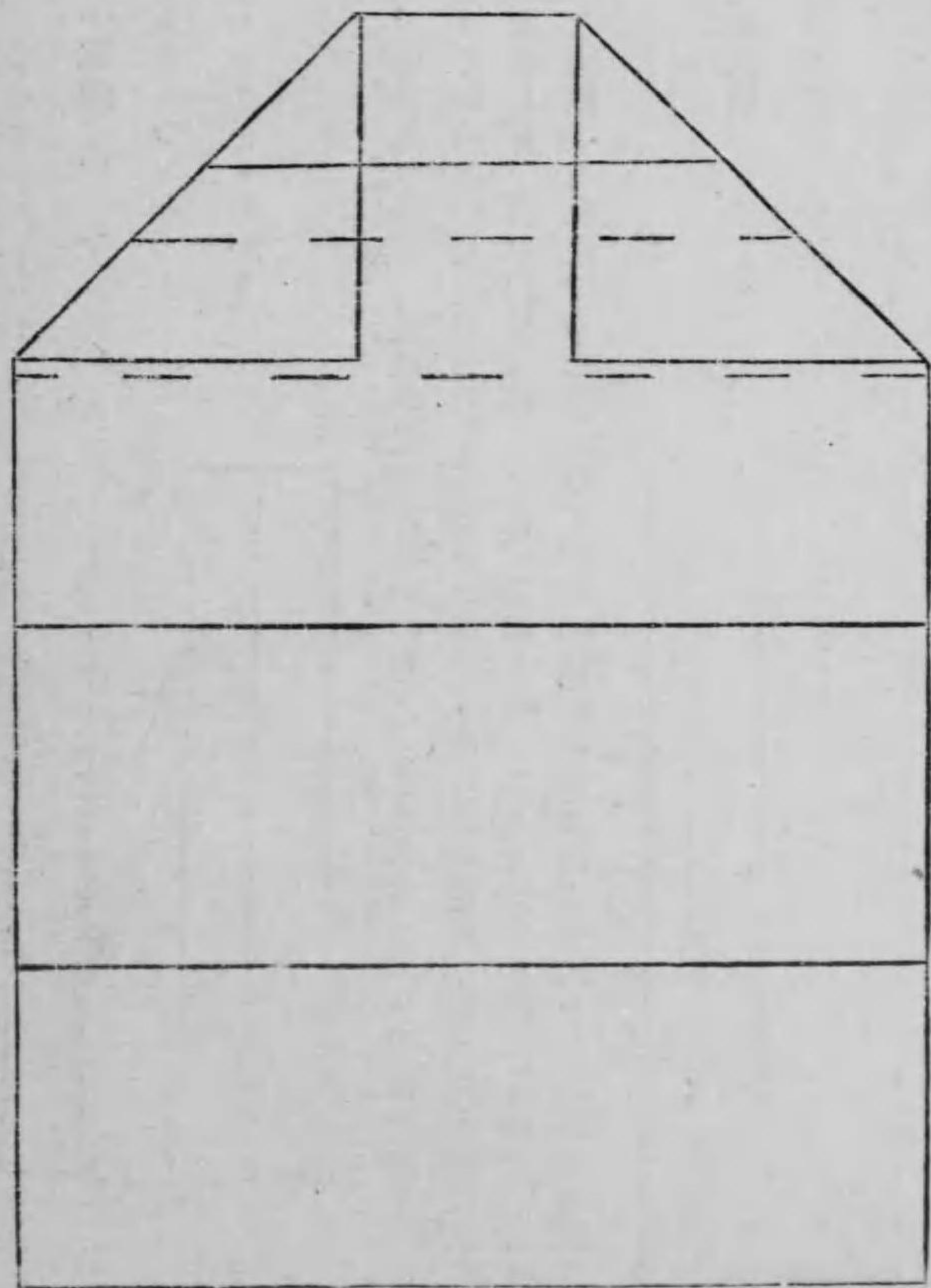
△をりあがり



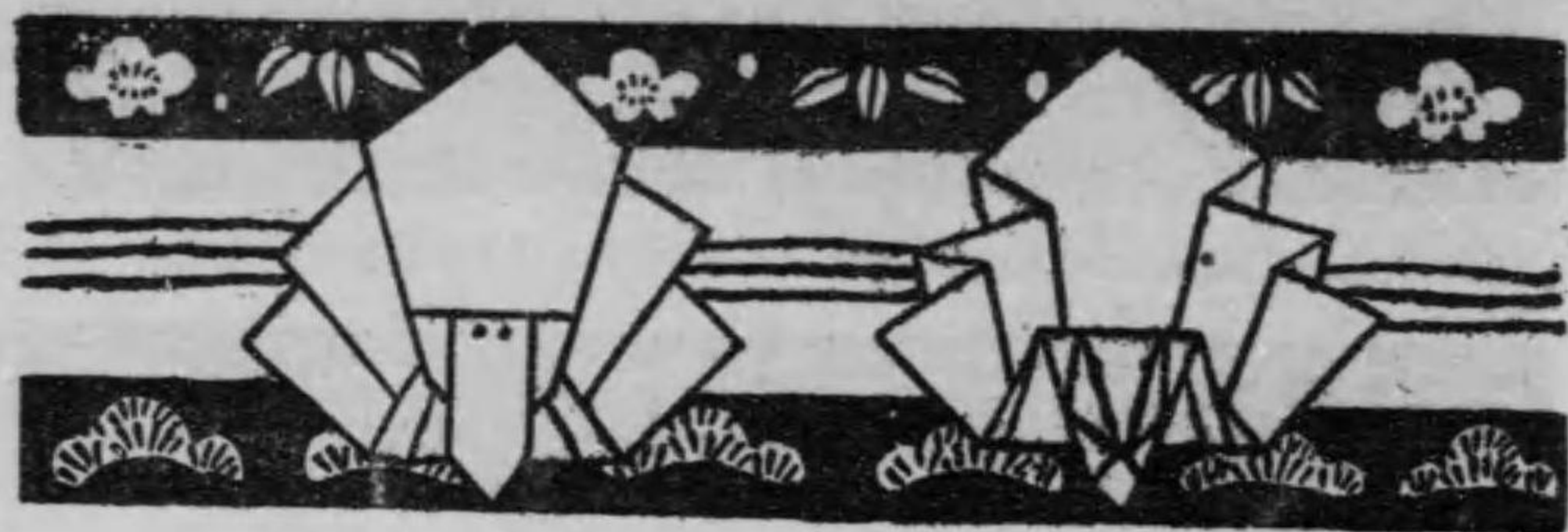
八五



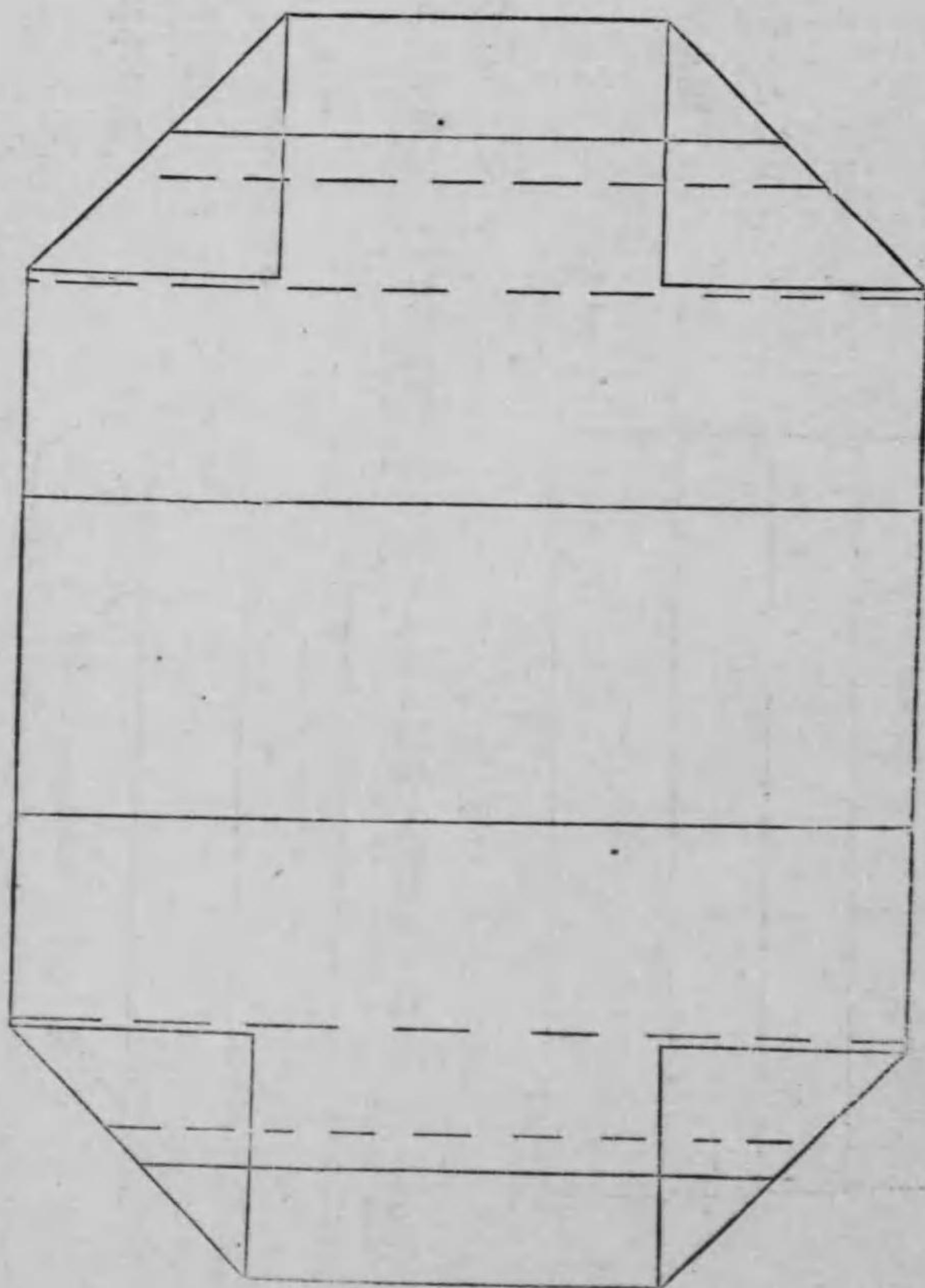
小笠原流折形
第八十七圖 たびうはざうり包



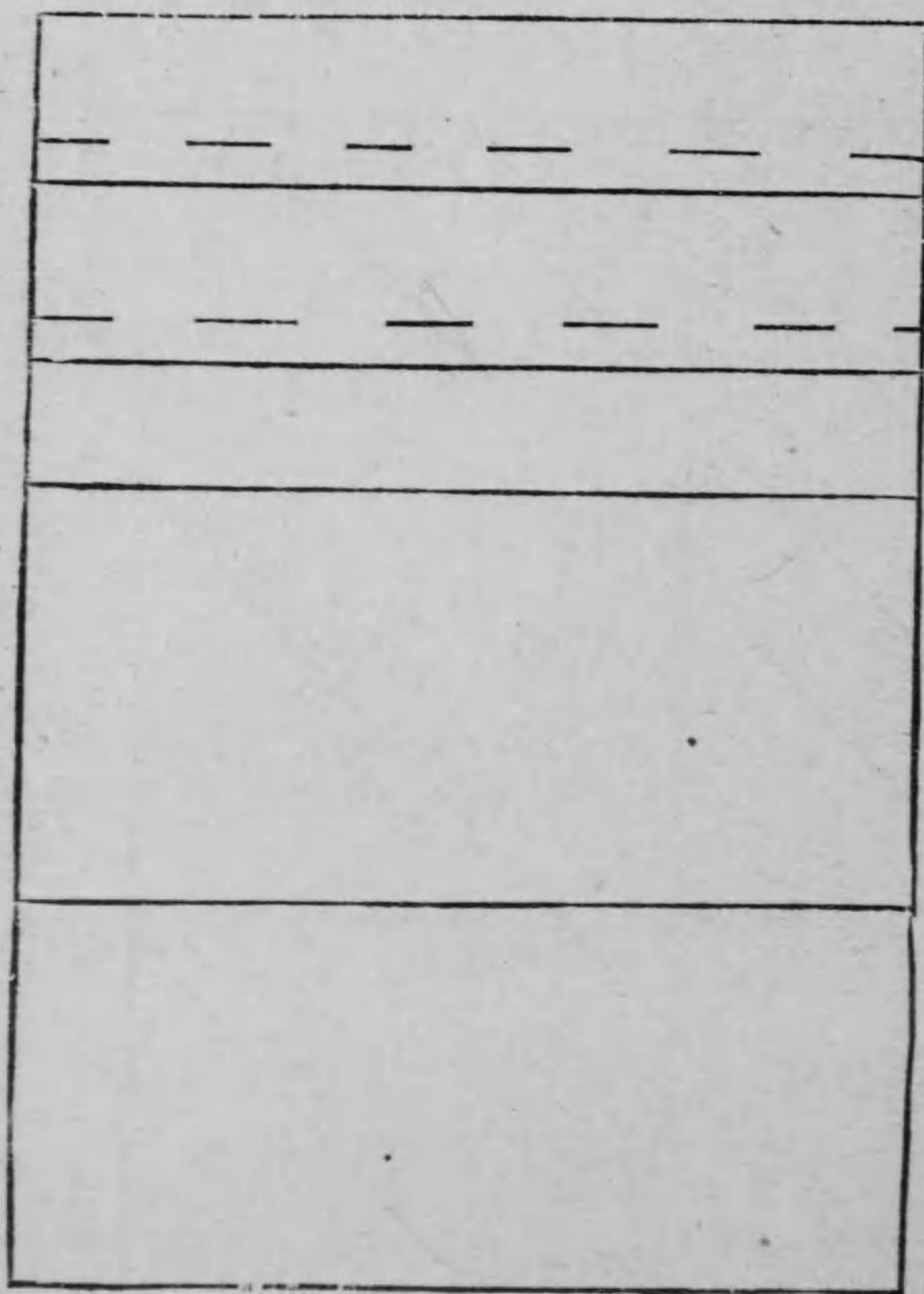
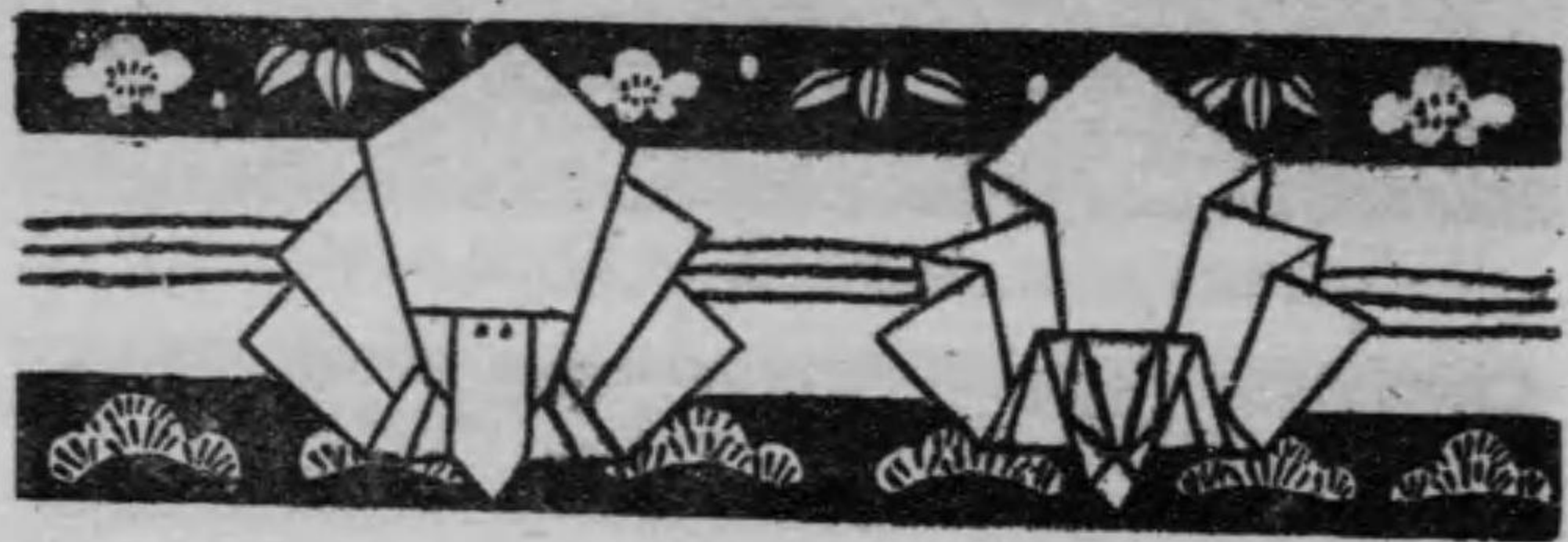
○かたかみ、せりやう表の圖



十八、鼻紙包 紙は大奉書、中奉書のかさね、紅白水引結、つねの物としては糊入紙がさねにてよろし、もろわな結、書付あるべし。

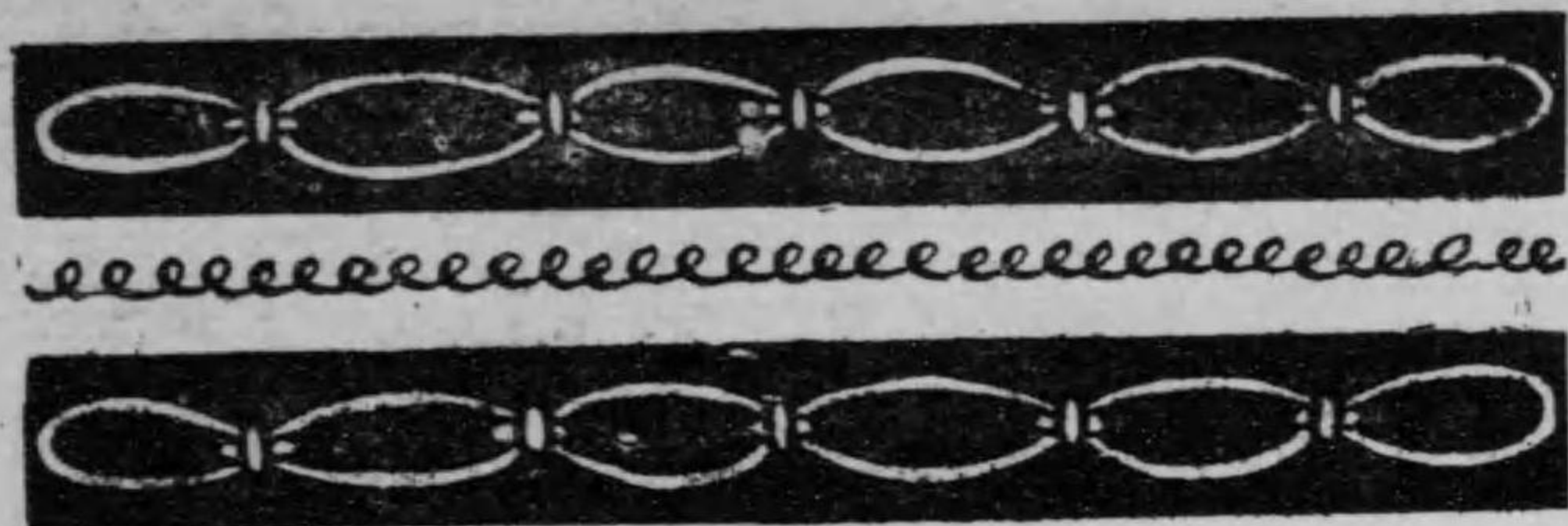


第八十八圖 はながみ包 △せりやう表



第九十一圖 かみいれ包

○かたかみ、せらやう表の圖



第八十九圖

○鼻紙包

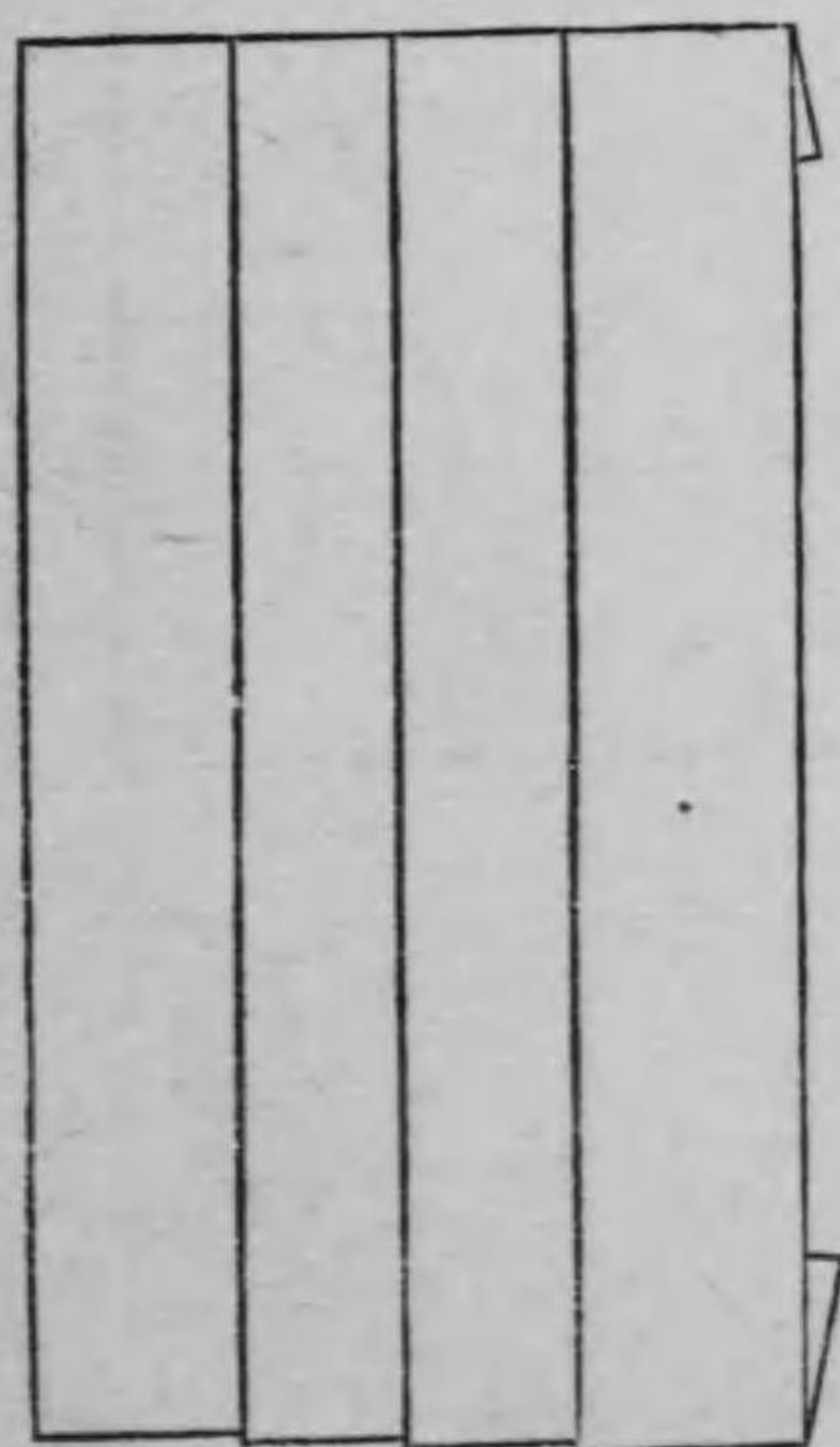
△をりあがり

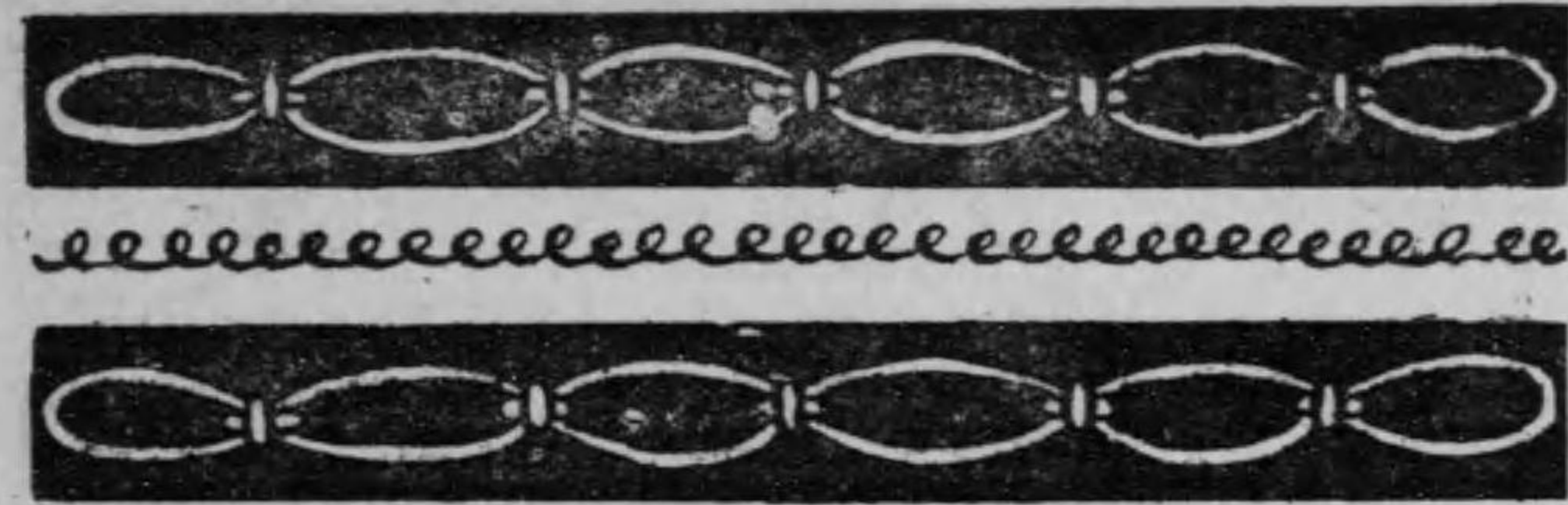
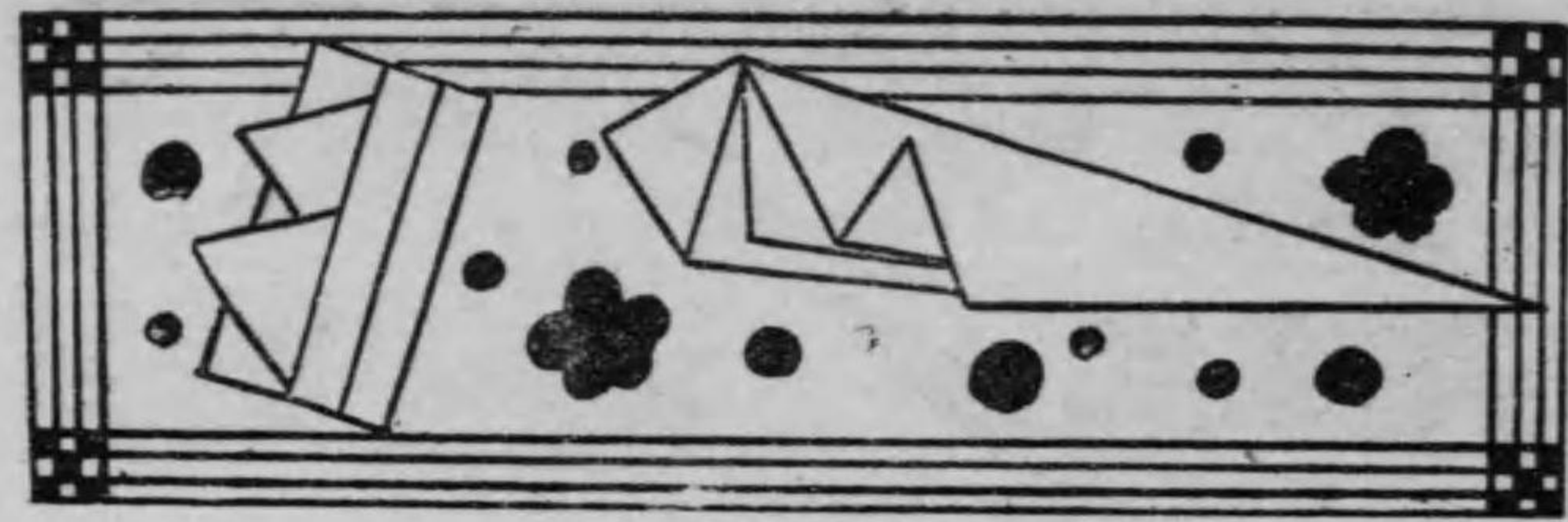
十九、紙入包 これは鼻紙其他の物を入れる、袋物を包む折方なり、紙水引等、右のほ
どにてよろし。

第九十圖

紙入つゝみ

△をりあがり





小笠原流折形
 二十、楊枝指煙草入包やうじさし たばこいれ づまみ これも右のほどにてよろし、但上位に進する時は色紙がさ
 ね、金銀水引かくる事もあるべし。

第九十二

圖

○楊枝さ

し 煙草入

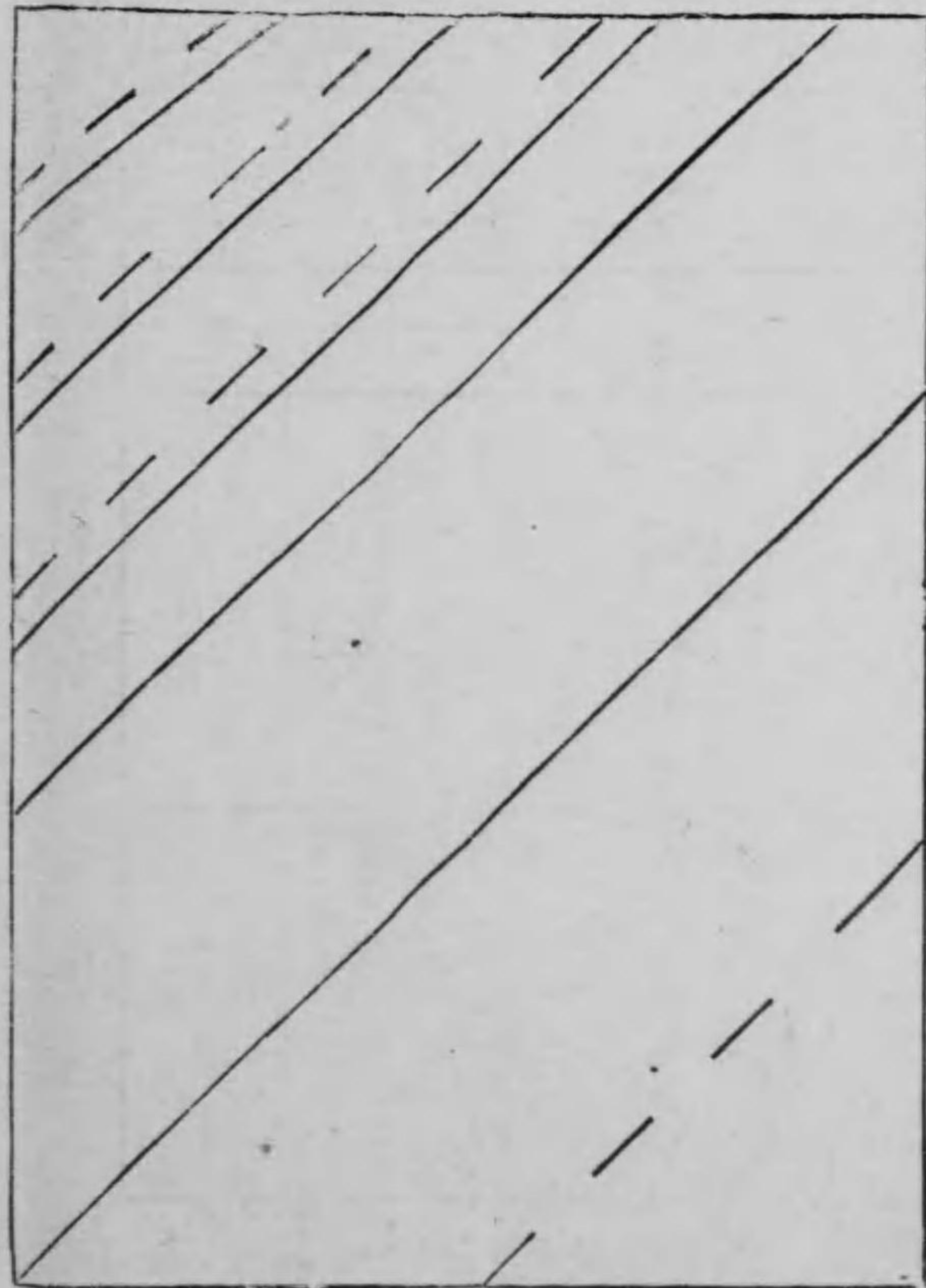
包

△をりや

う

かたが

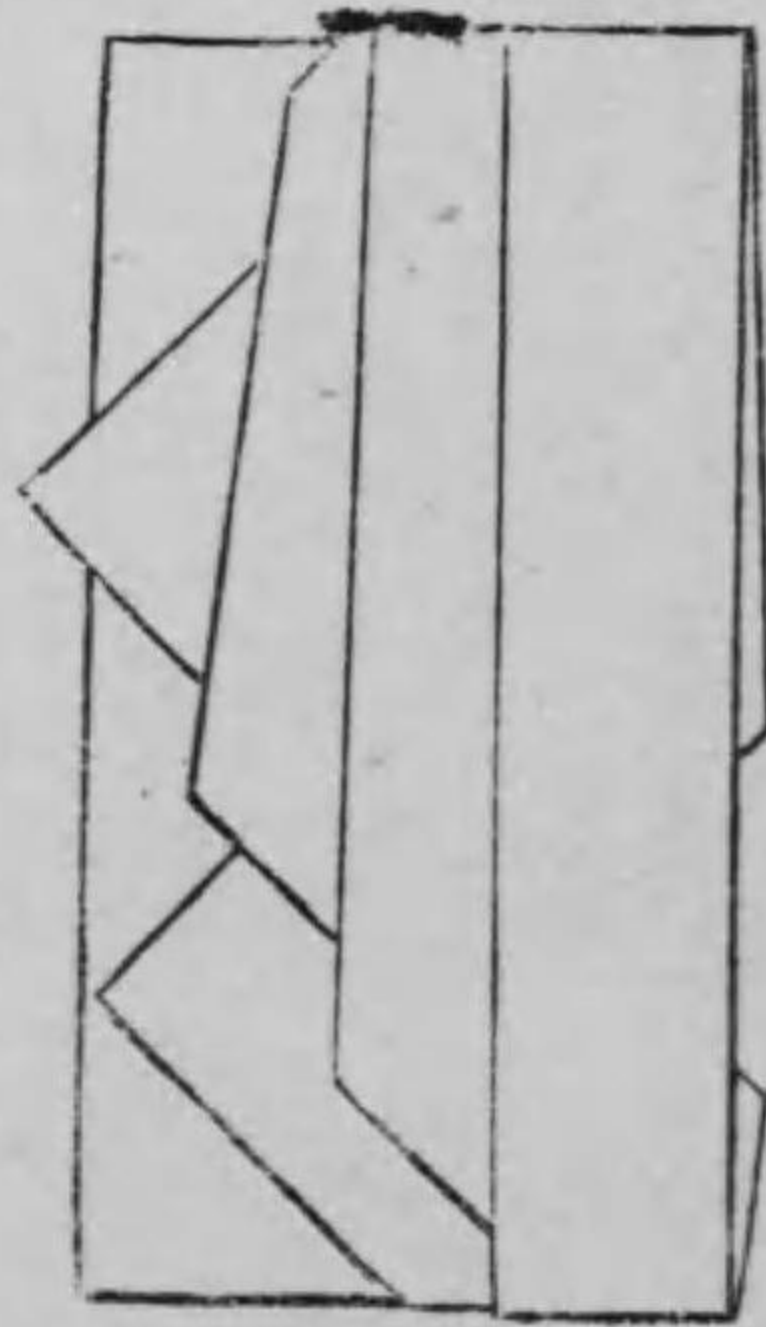
み



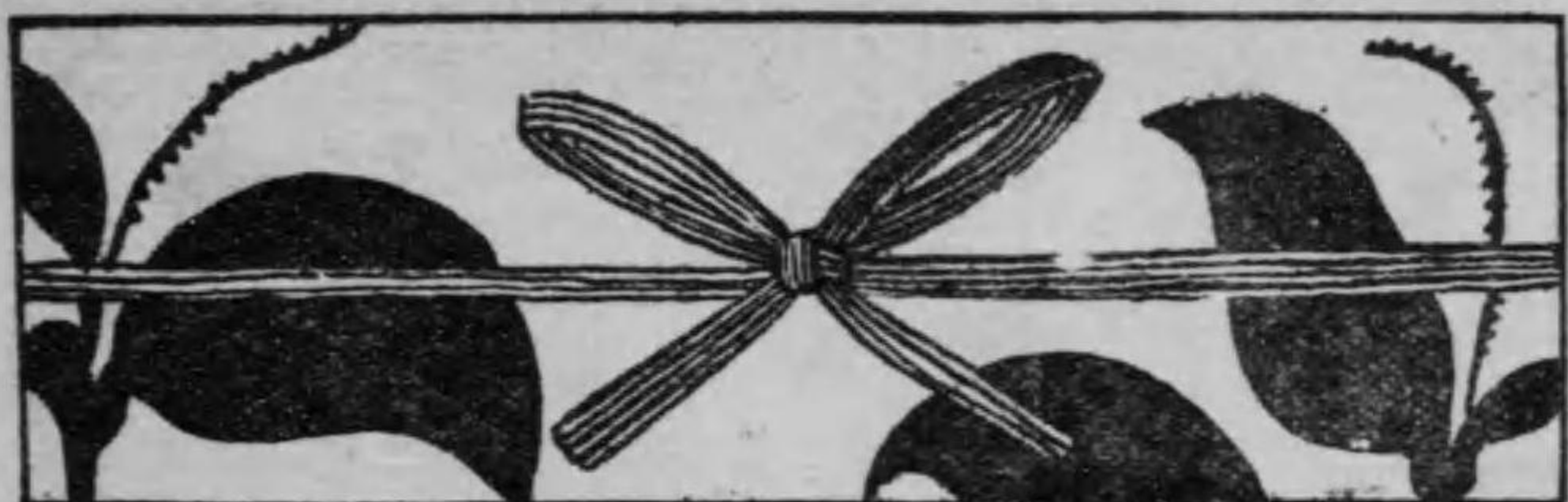
第九十三圖 やうじさし

たばこいれ包

△をりあがり



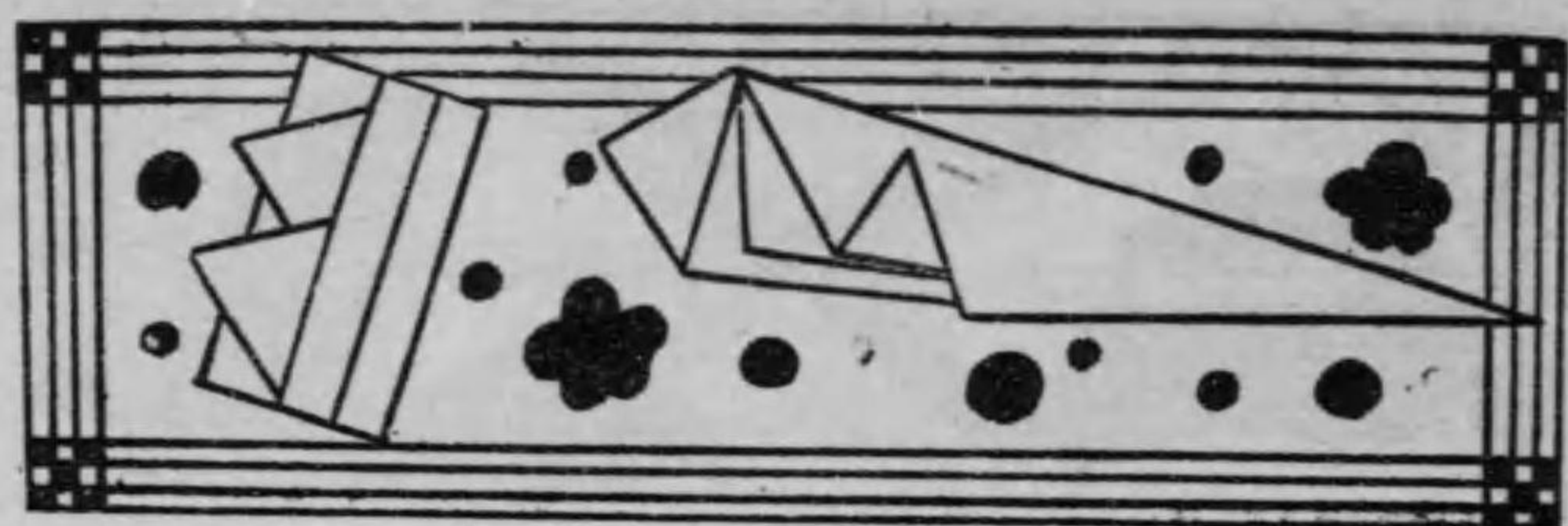
◎折かた用紙「おほたかだんし」のたかといふ事
 ○大尺中尺小尺と檀紙の品をわけたるは、尺の大中小をさして名付るなり、かりの文
 字には、麿とも、高とも書たり。



第四卷 歳事用折形圖解

一、かや、かちぐり包 正月の祝の臺に（くひつみ臺といひて山野田島海河の物を積合せて客にも進め主人も揃みくらふ、此臺にもつかひ、又蓬萊の臺といひて餅の上さまぐりの物をおく、此臺にも使ふ）此包を餅の上に若松をたて、其松の根元へ立掛ておく、紅白の紙にて包みて飾る、水引は金銀、銀赤など、結びやうはもろわなにするなり。

此たぐひの包形は、諸祝儀のかざり物にいろくさまぐりの物をつ、む包形におなじく、其儀式の上中下にしたがひて、其用紙も水引も花やかにも、品たかくもかざりわくるなり。



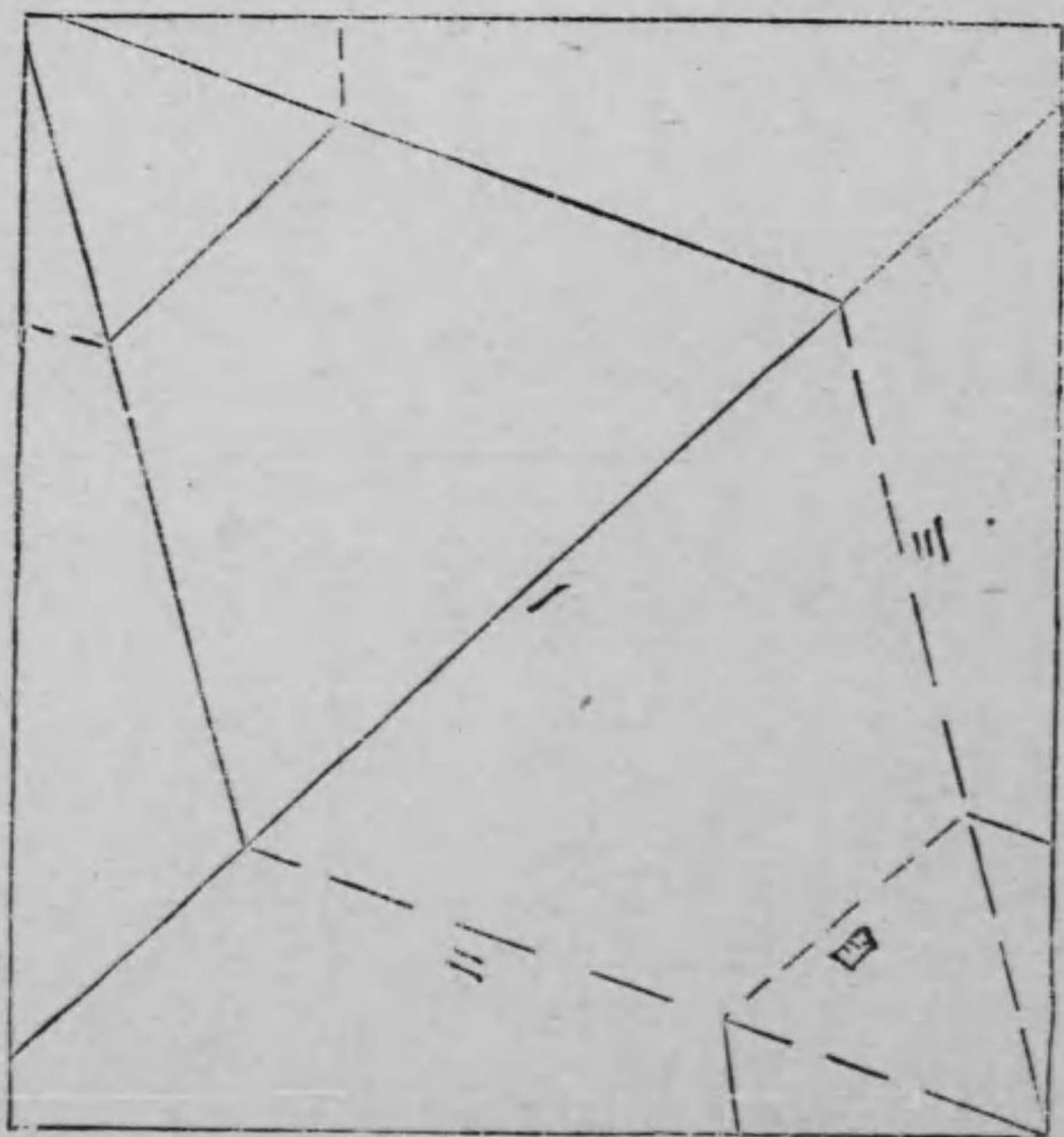
第九十四圖

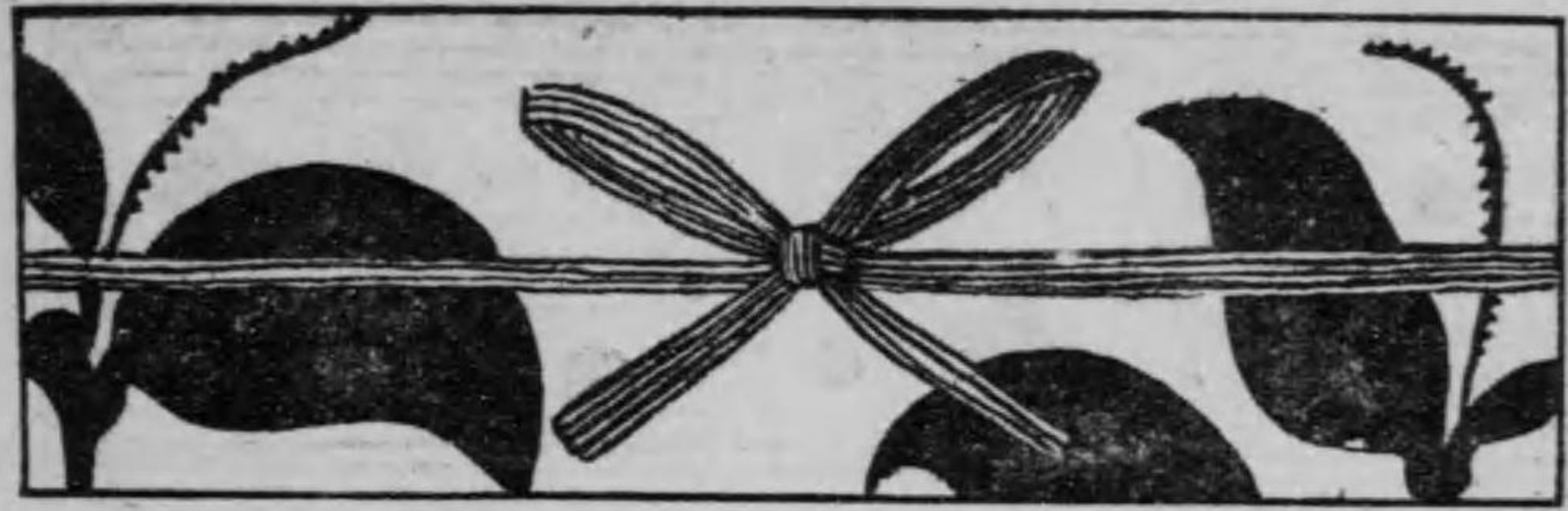
○櫃、鴉栗包

△をりやう

かたがみ

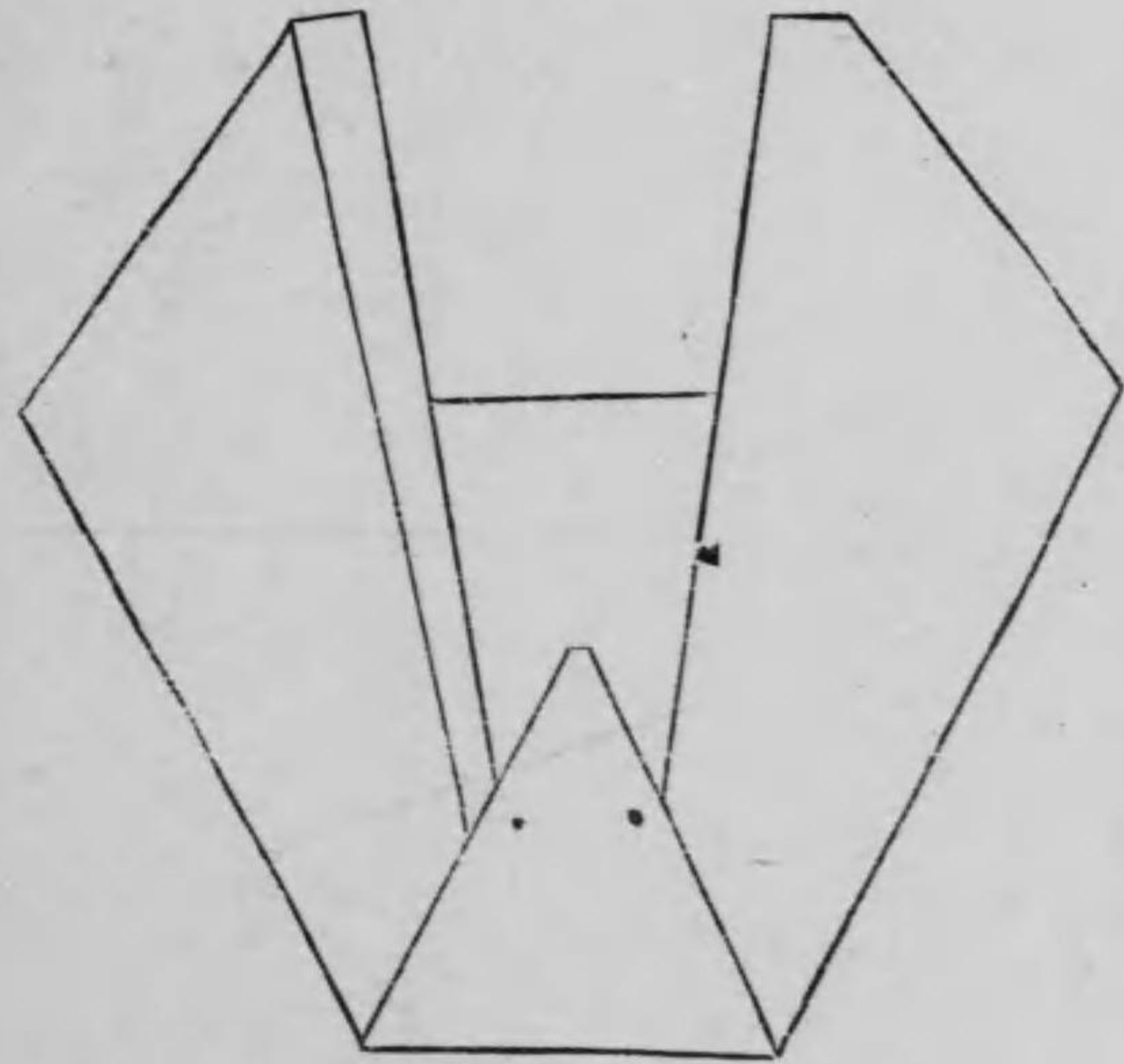
○大小いろく並形は大奉書紙にて紙どりする





第九十五圖

小笠原流折形
かやかちぐり包 △をりあがり



九四

● じるしは左右の裏より水引のはしを通して前にてもろわなに結ぶ。

…この先を圖の如く上に折かへすなり。

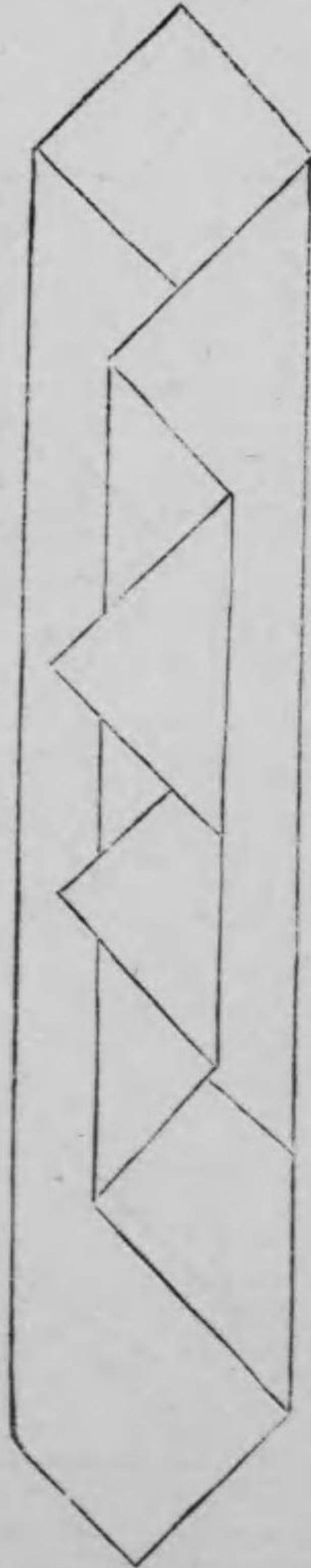
○もろわなに結たる水引の左右のひらき四寸。



二、串柿包 これも餅の上にかざる。右の包方と共に飾る事もあり、其時は、かや搗栗包を立掛けて、手前の方へ横に平らにおくなり、紙水引、右に同じ、細結又は、蛇結にかざる、この包形の内へ共に長鮑昆布をさし添てかざる事もあり、串柿は包方大きければ二本、包方小さければ一本、いづれも包方より柿は長く左右へ二寸位づゝ出づるなり。

第九十六圖

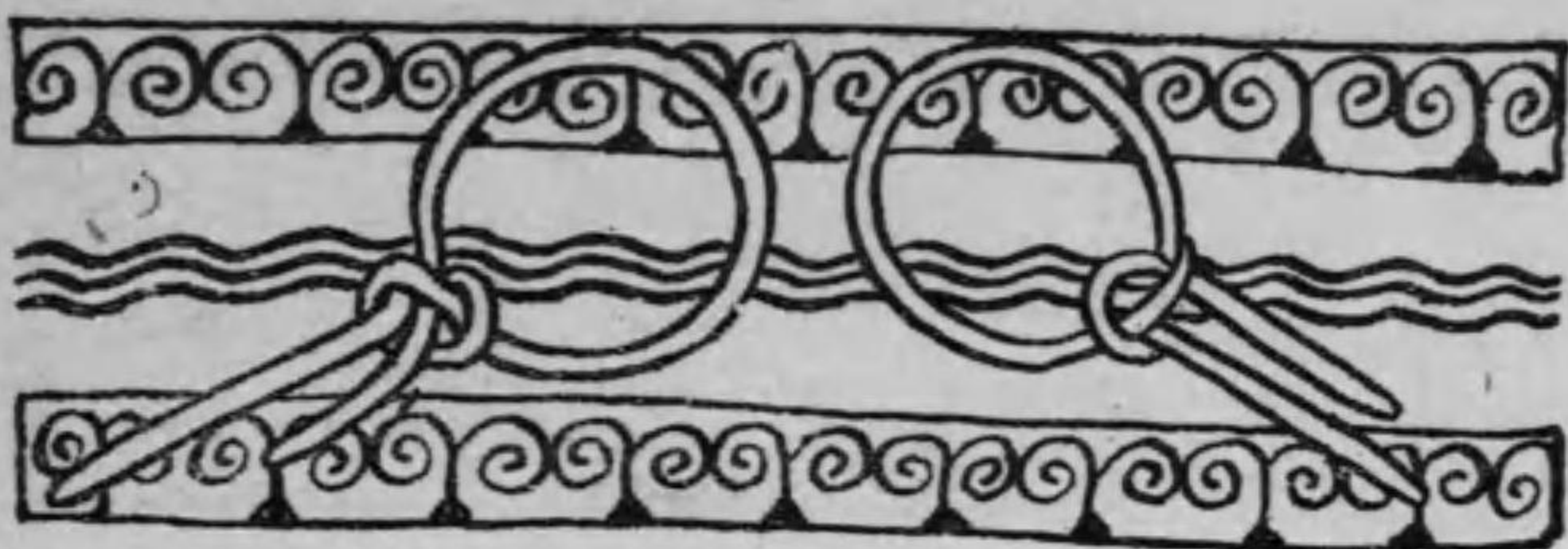
くしがきづゝみ △をりあがり



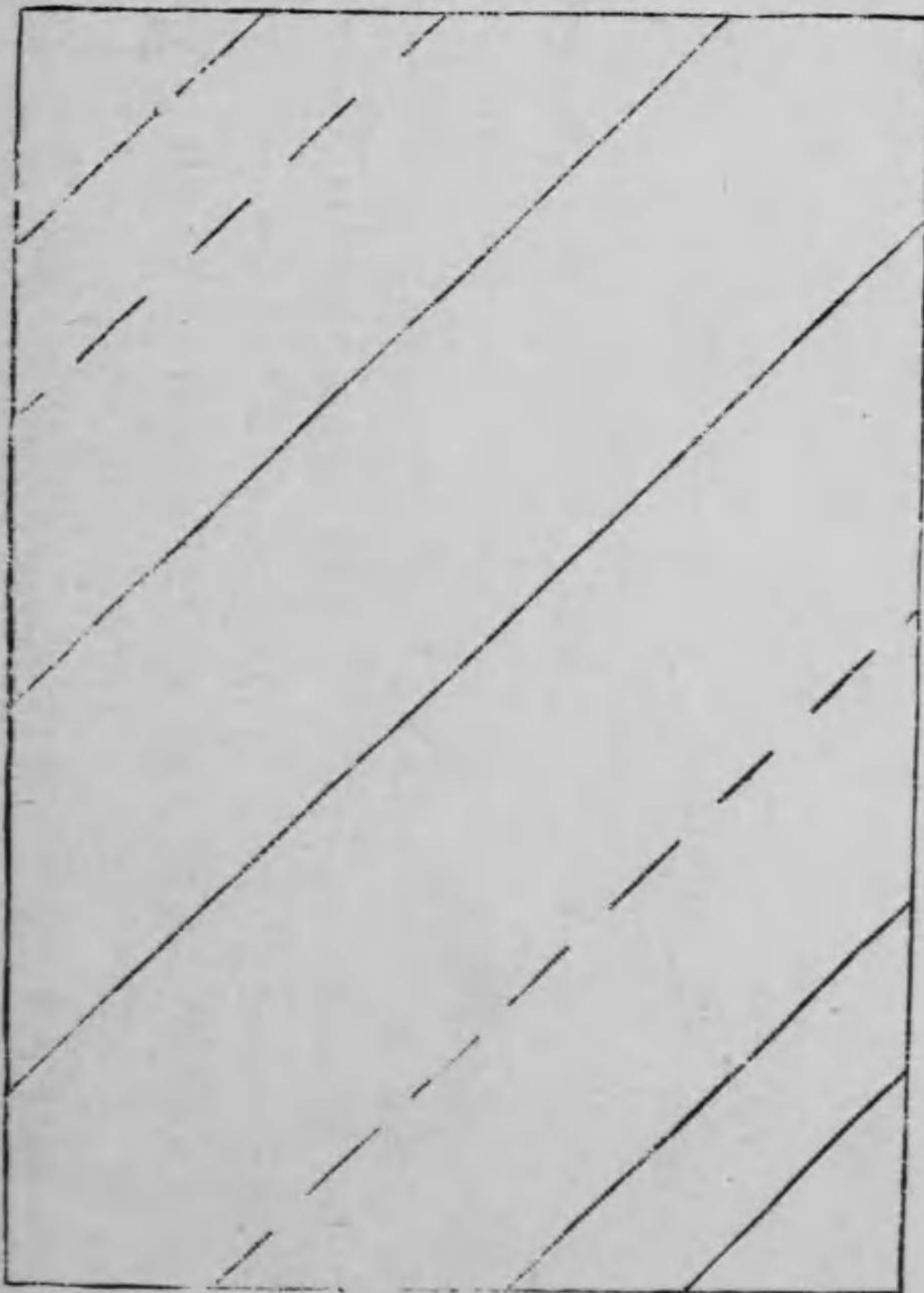
第四卷

歳事用折方圖解

九五



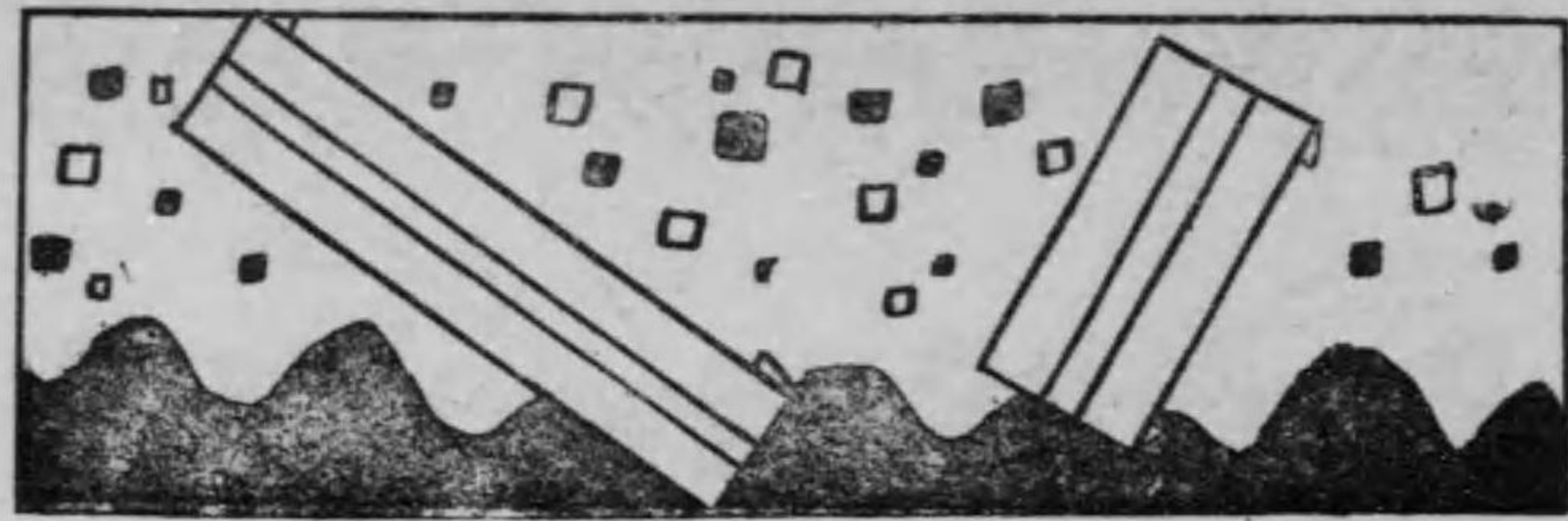
第九十七圖 くしかきづゝみ △をりやう かがみ



三、羽子板羽子包 (甲) 紙は白べにうら、上位には檀紙、金銀水引花結、中位には奉書、銀赤水引細結、もろわなにも、いづれも包方をひらきて羽子板を入れ、水引にて柄の所だけ下包したる上を、包方のうらへ穴をあけてとほし、中にて結留て、包方を合せて、上の水引をかくるなり、包方のすその方を裏へ返す仕方は、細き丸き棒にてくるくと兩手にて棒の左右の端をおしてころがし、紙をやはらかにして、其丸き棒 (ふとき筆の軸ぐらゐ) を入れながらうらへをる、丸くふくらしをるなり、何の折方もうらへかへす物は、同様にするなり。

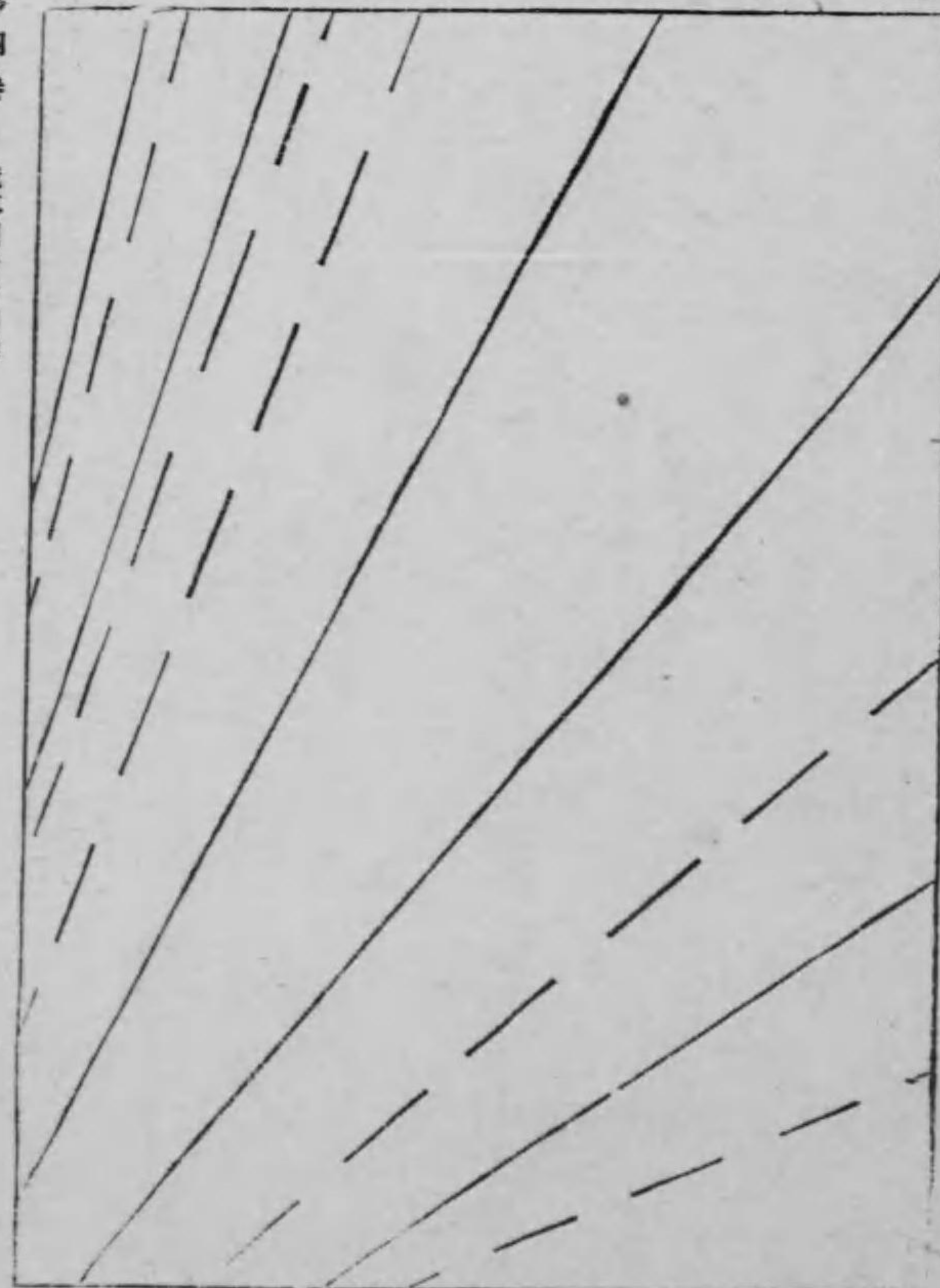
第九十八圖 はご板はね包 (甲) △をりあがり





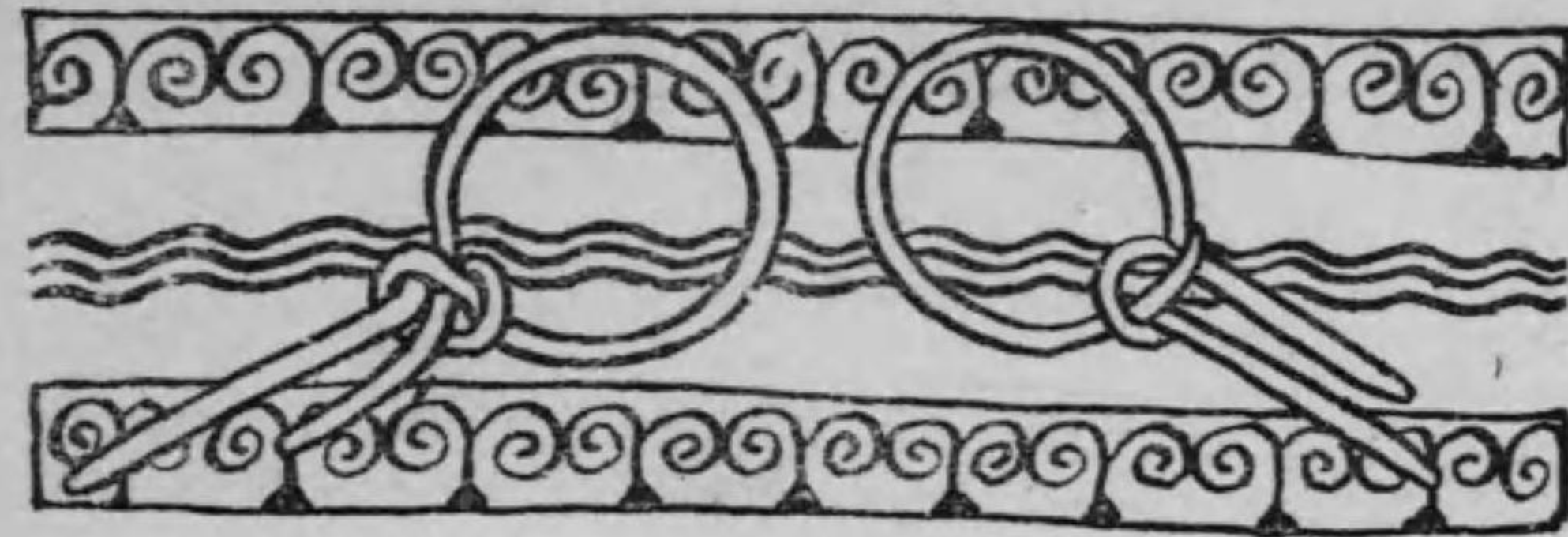
第壹百圖
 はこい
 たはね
 包つみ
 (乙の形)
 △をり
 やう
 かがみ
 み

第四卷 歳事用折方圖解

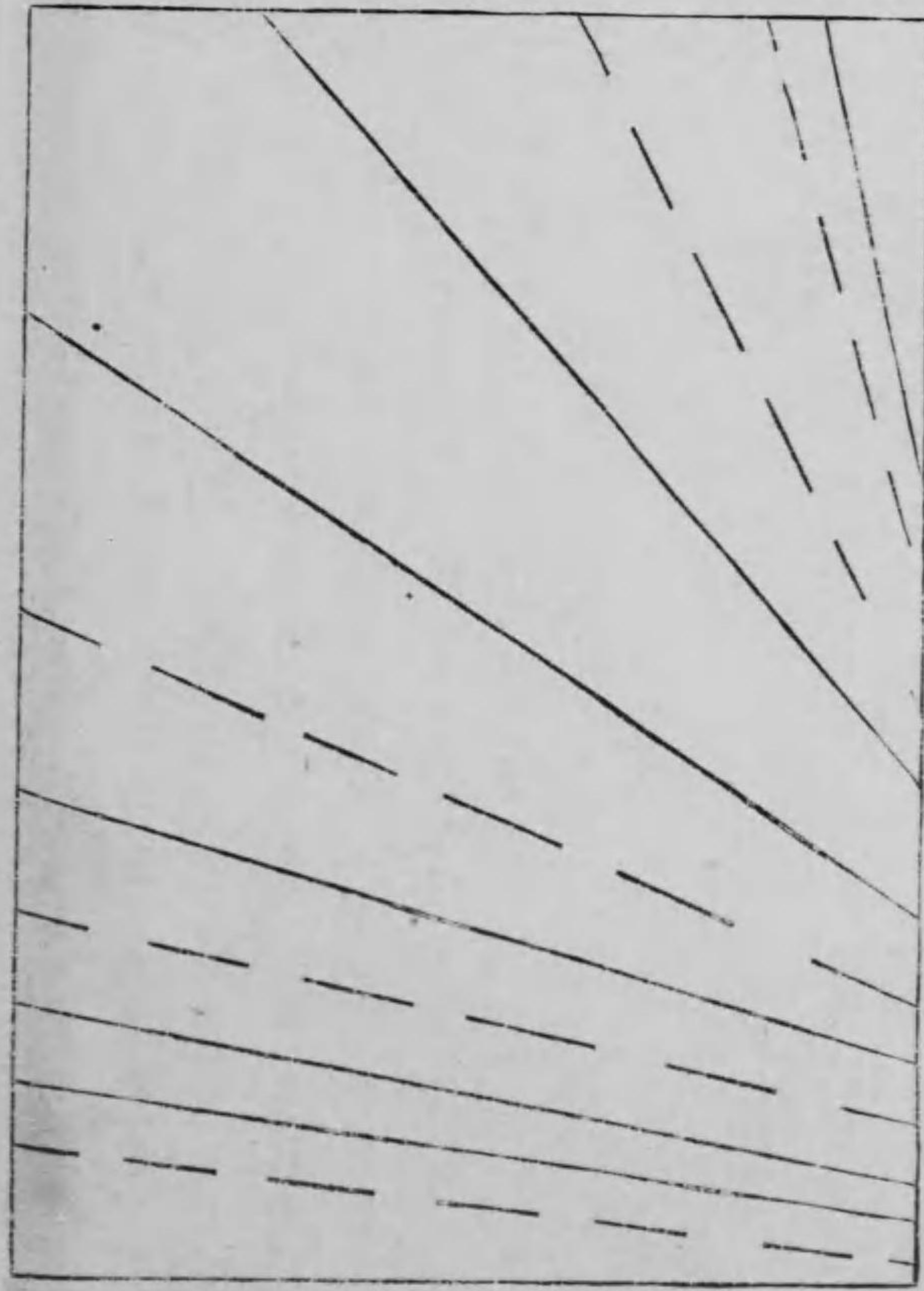


九九

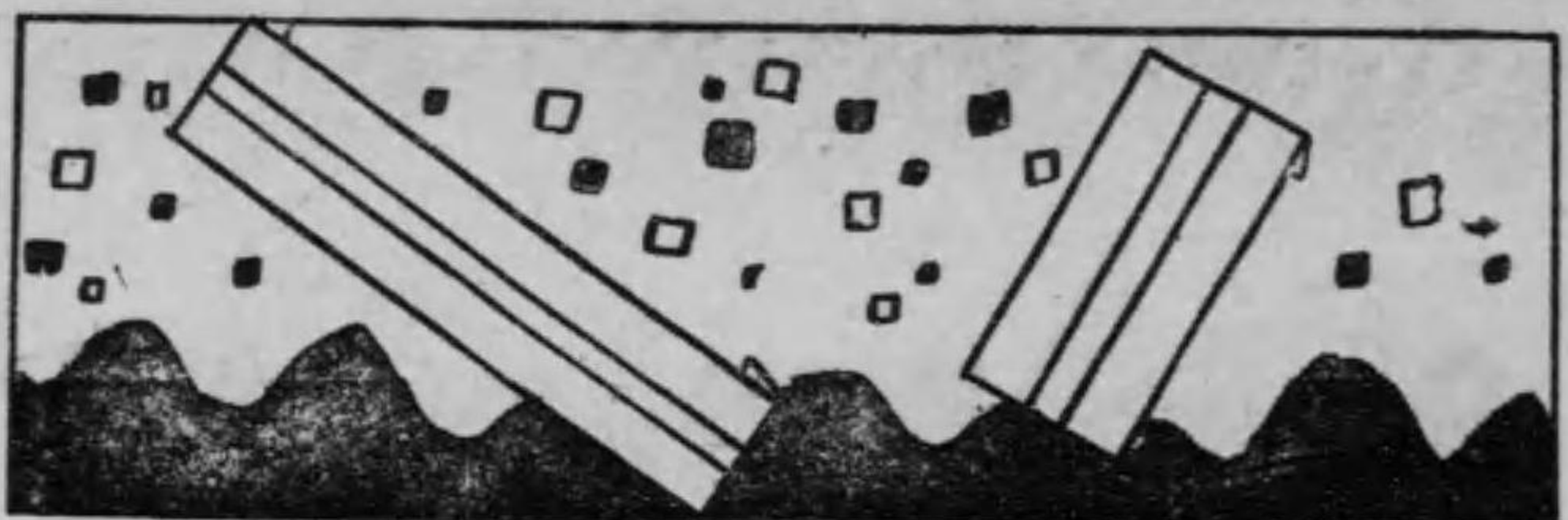
四、同(乙) これも同じ、花やかに飾るべし、羽子を包むにも、下留あるべし、別々に包むと、共に包むとあり、いづれにてもよし。



草 尺 壹 寸 壹 分

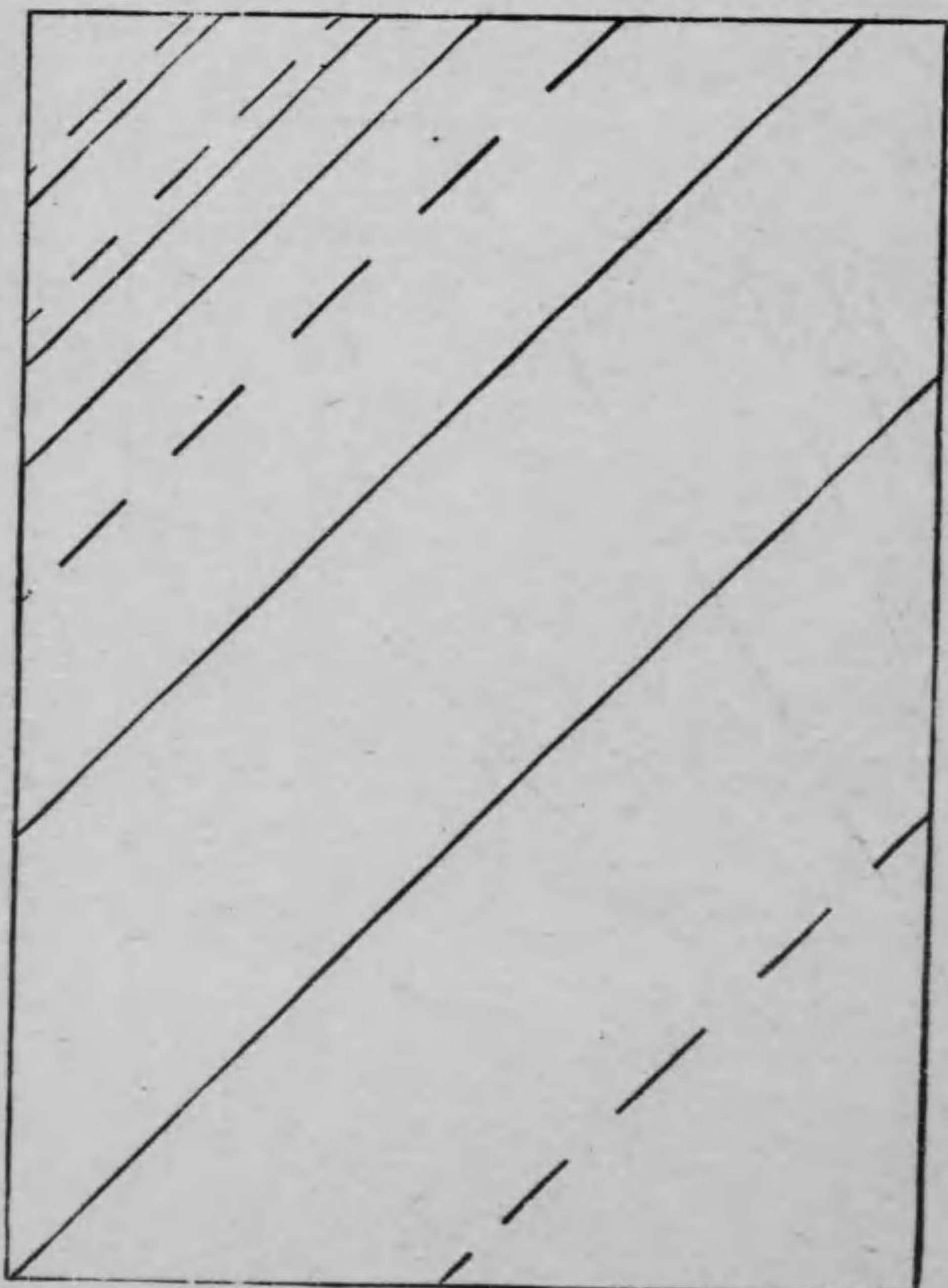


小笠原流折形
 第九十九圖 はこいたはね包つみ (甲の形) △をりやう かがみ
 壹 尺 五 寸 七 分
 九八



第百三圖

かみびなづみ △をりやう かたがみ。



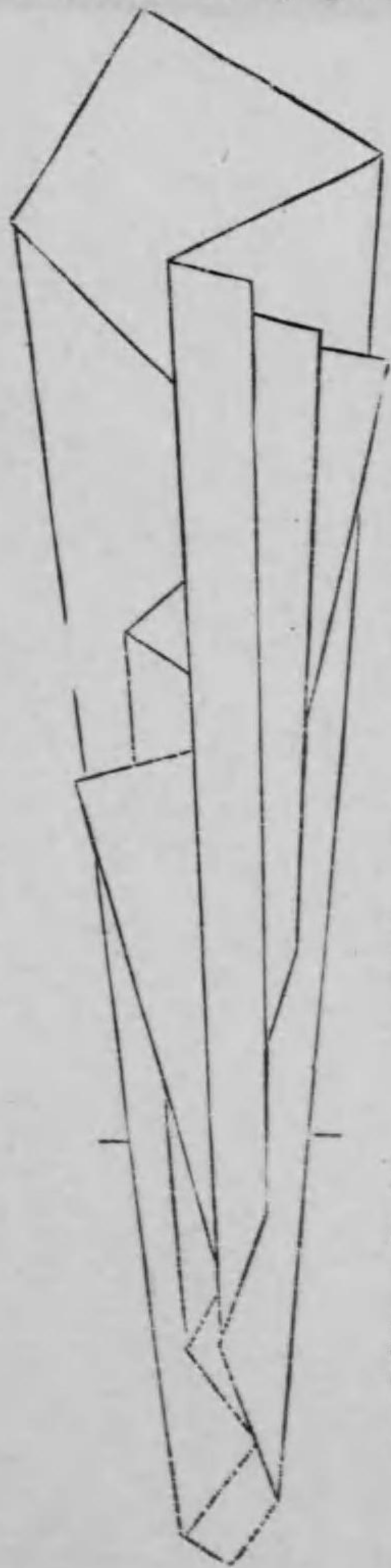
第四卷 歳事用折方圖解



第百壹圖

小笠原流折形 はごいたはね包 (乙の形) △をりあがり

この所より裏へをる

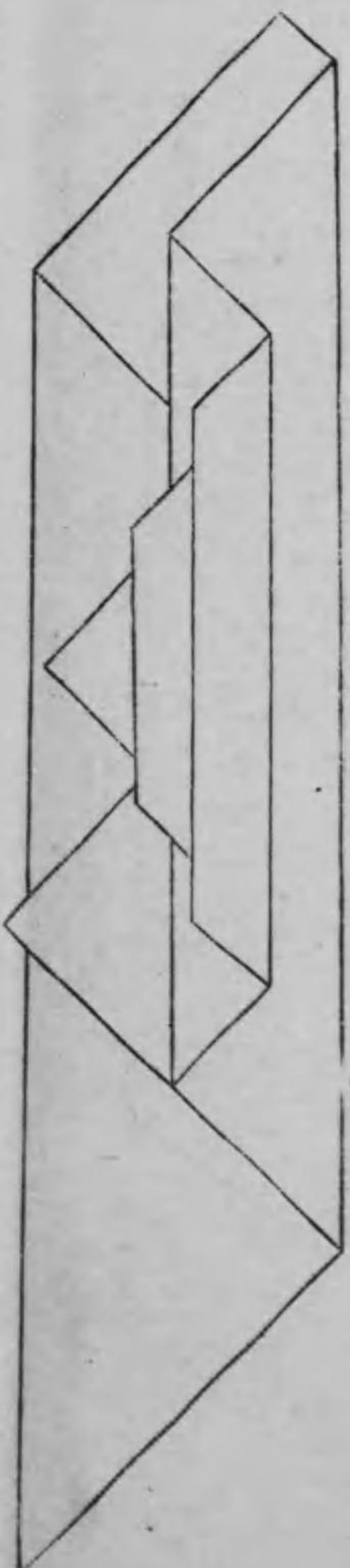


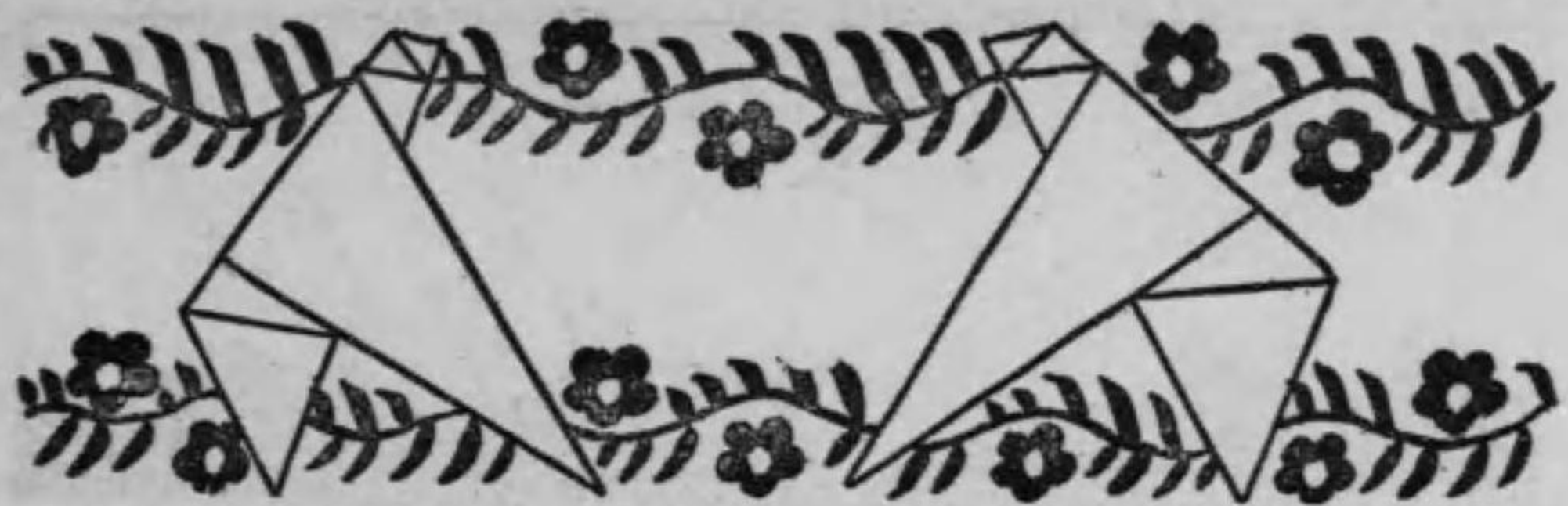
五、紙びいな包 紙水引右に同じ、色紙がさねにして、同紙の紙捻にて結ぶこともあ

るなり、上書は平假名にて「ひいな」などかくべし。

第百二圖 かみびなづみ △をりあがり

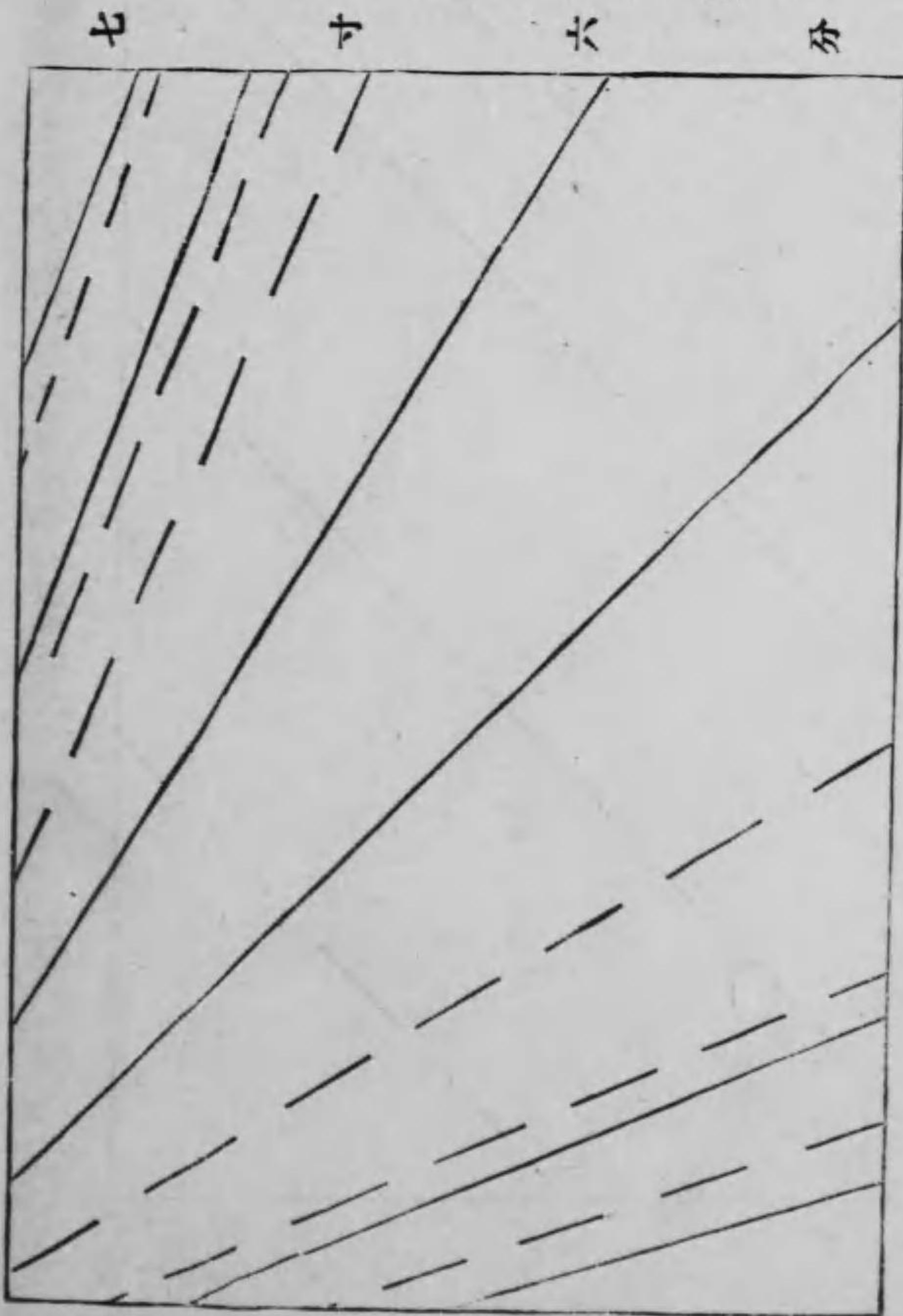
○上下●このしるしの所よりうらへをるなり。



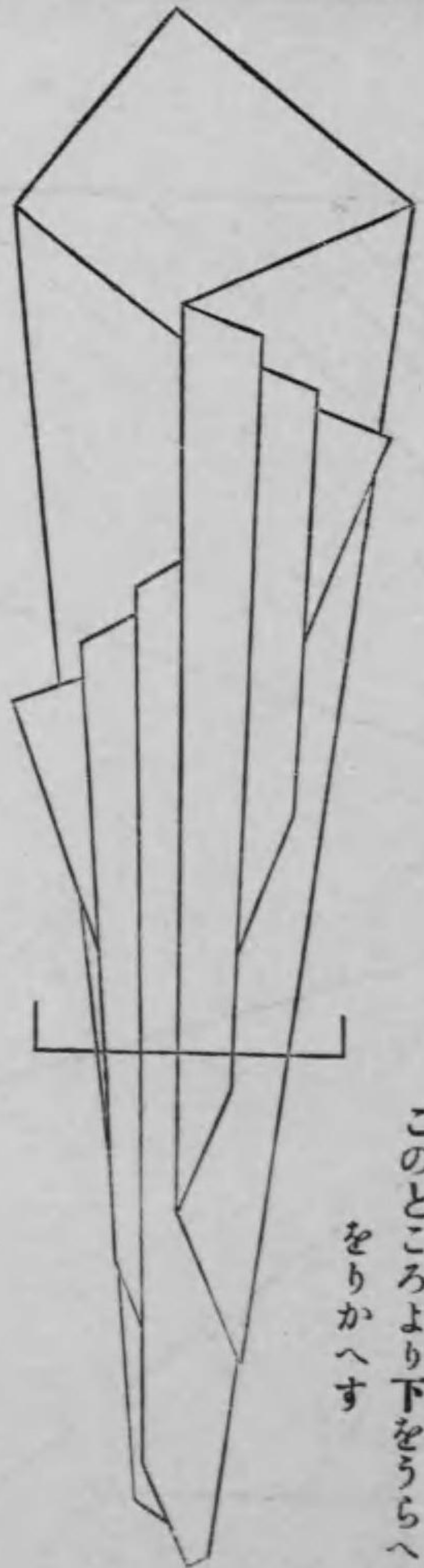


小笠原流折形
 第六、桃花包 紙は白がさね、水引は銀水引、細結、もろわな
 第四百四 壹 尺 七 分

○桃の花包
 △をり
 やう
 なた
 がみ



第一百五圖 もゝのはなつゝみ △をりあがり

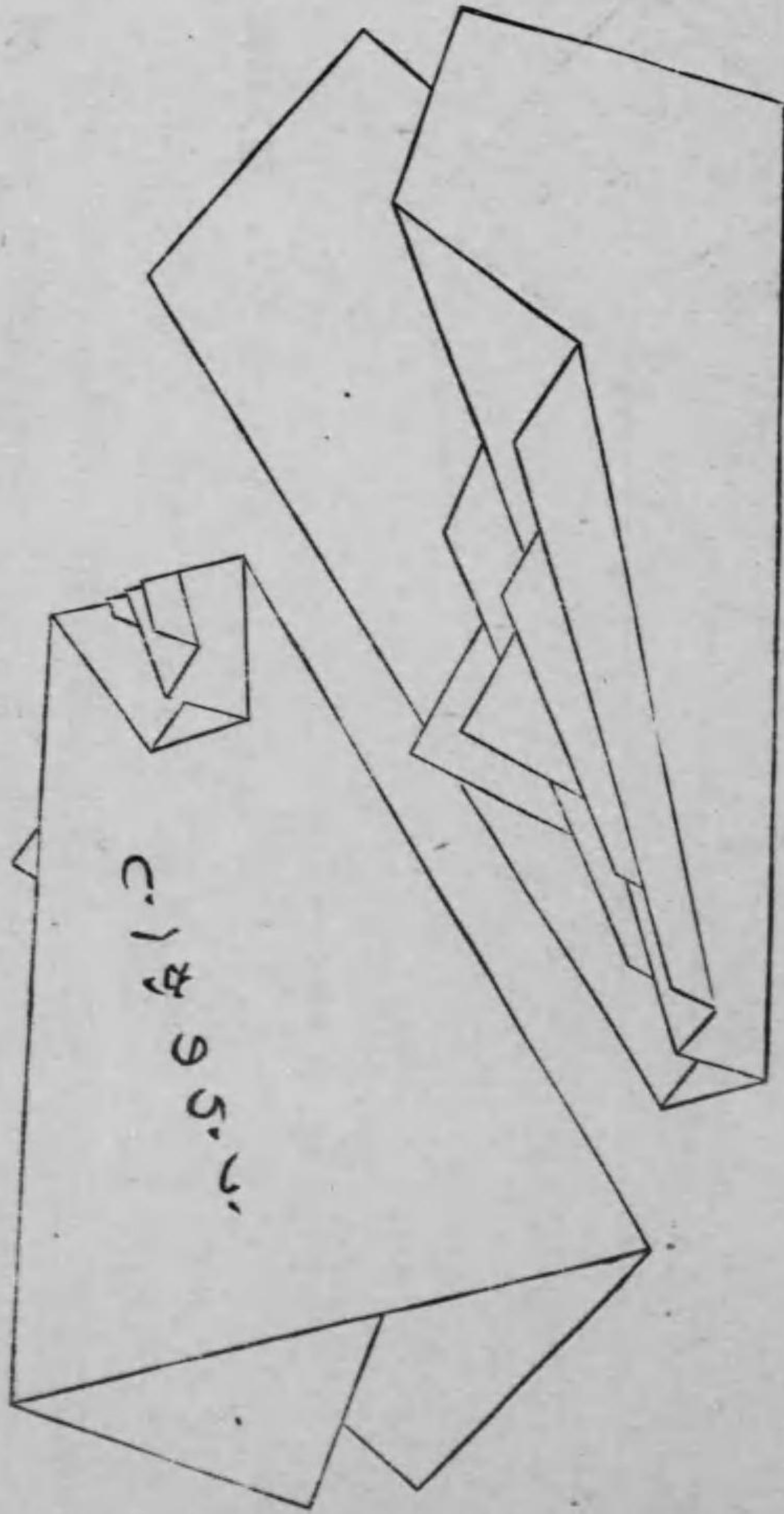


このところより下をうらへ
 をりかへす

第七、蓬菖蒲包 紙は紅白、又あやめ色のかさね紙にする、水引銀水引にて菖蒲結などつくることあり、これは五月節供に。桃花は三月節供につかひしものなり、今はそれならずとも、進物にも、装飾にも包みてつかふなり。

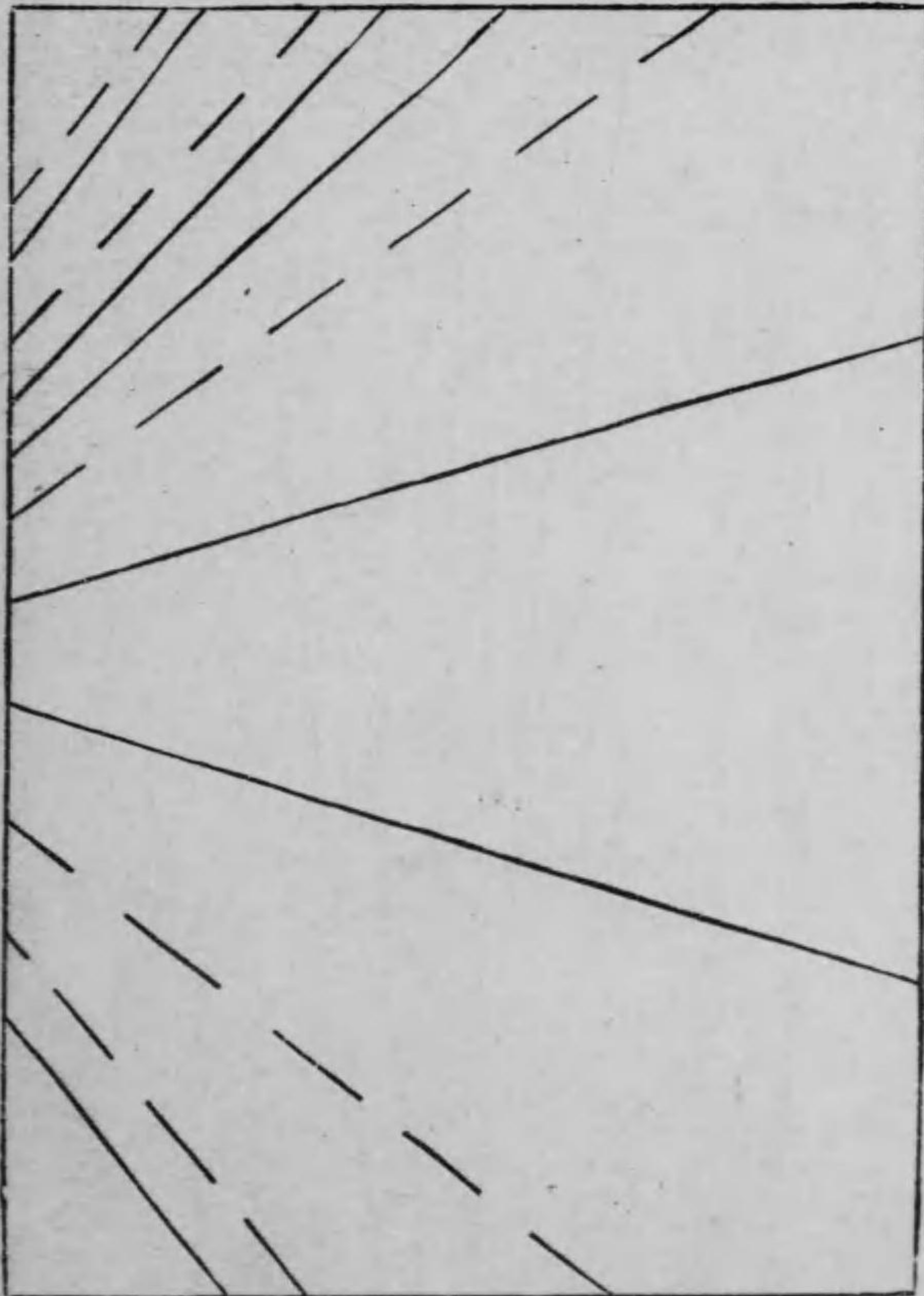


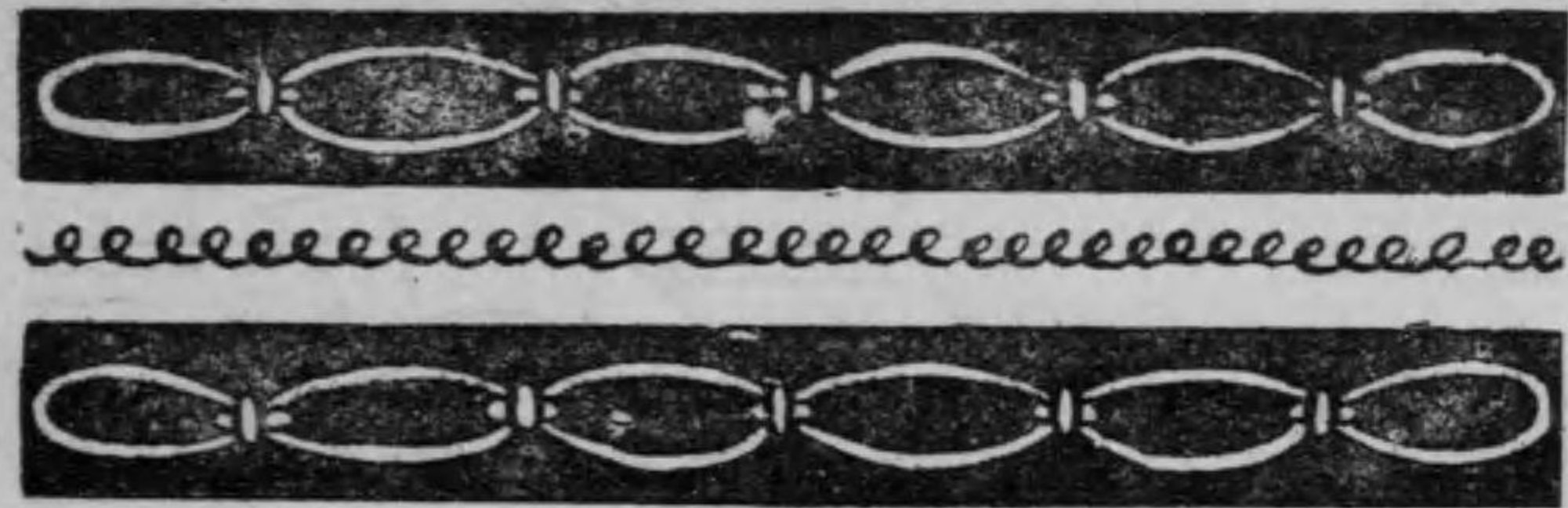
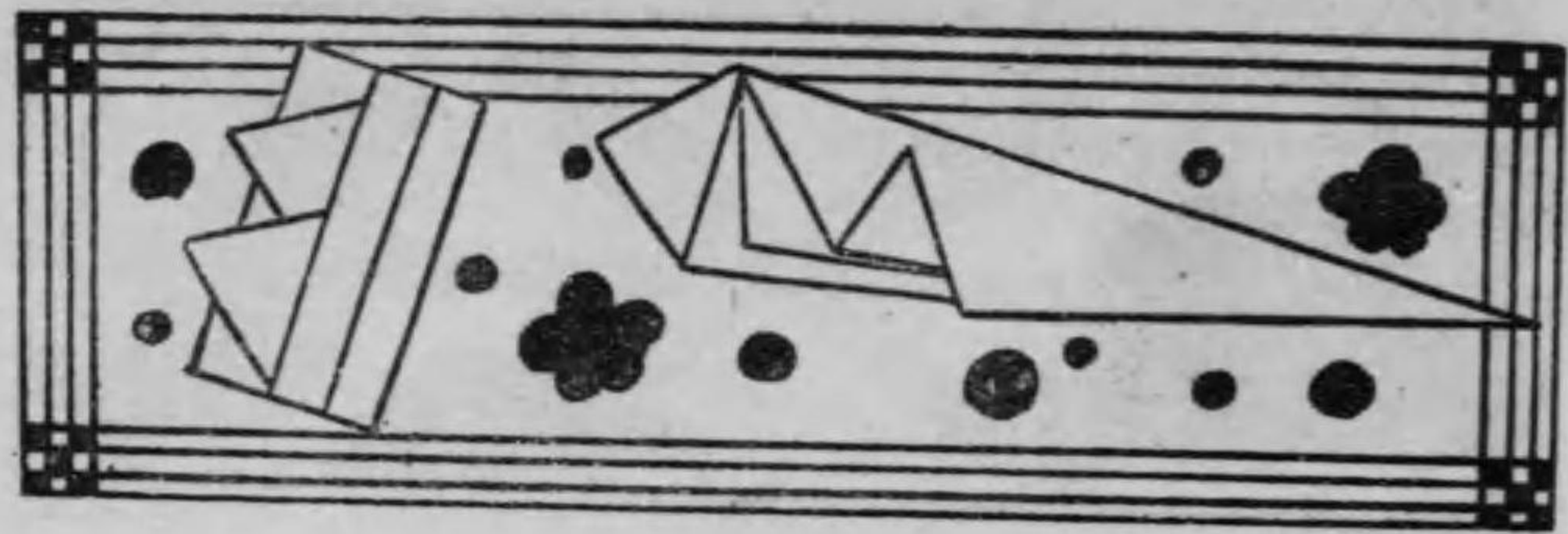
第四卷 歳事用折方圖解



第七百圖 よもぎ、しやうぶづゝみ
△をりあがり ○下の方をうらへをる。

小笠原流折形
第六百圖 よもぎ、しやうぶづゝみ △をりやう かたがみ



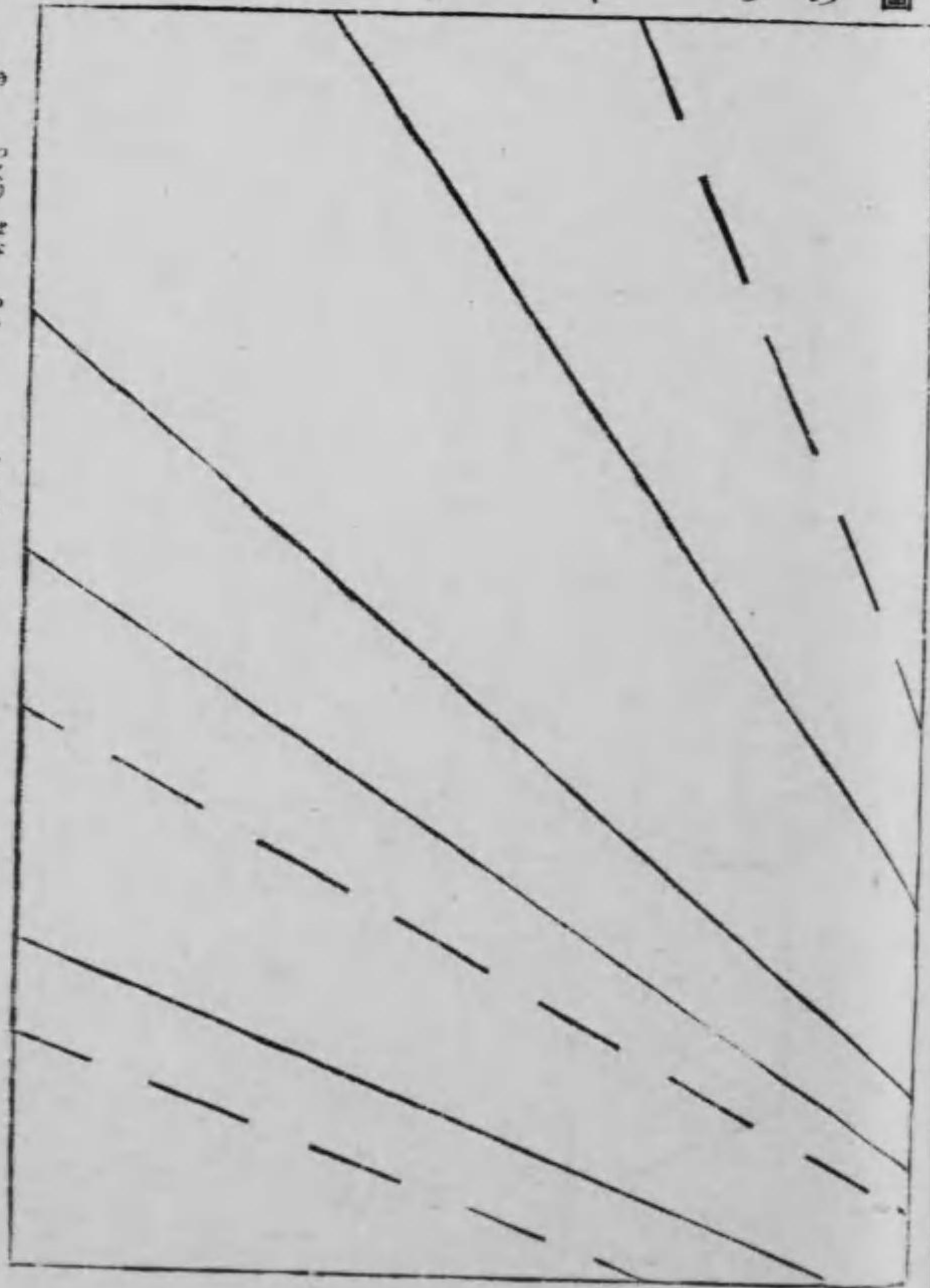


第百九圖

きくの
はなつ
み
△をりや
う
かたが
み

○色香深き四季の糸造花を包みて、進物の上に添ふる事あり、其時には進物の品々も包方して、其上に花包を置なり。

第四卷 歳事用折方圖解

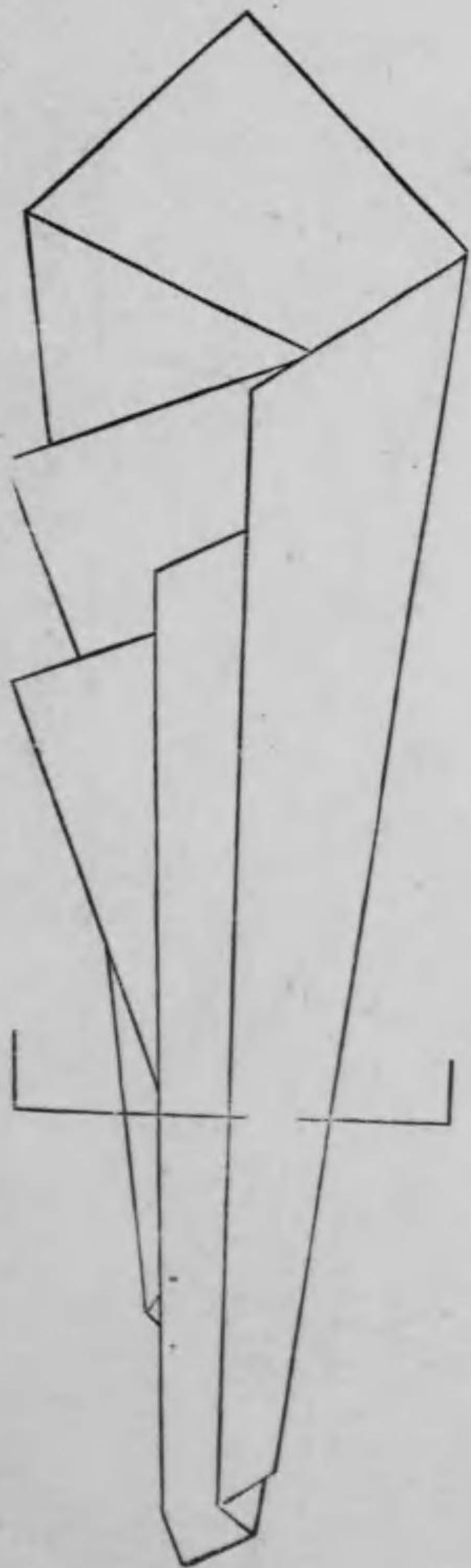


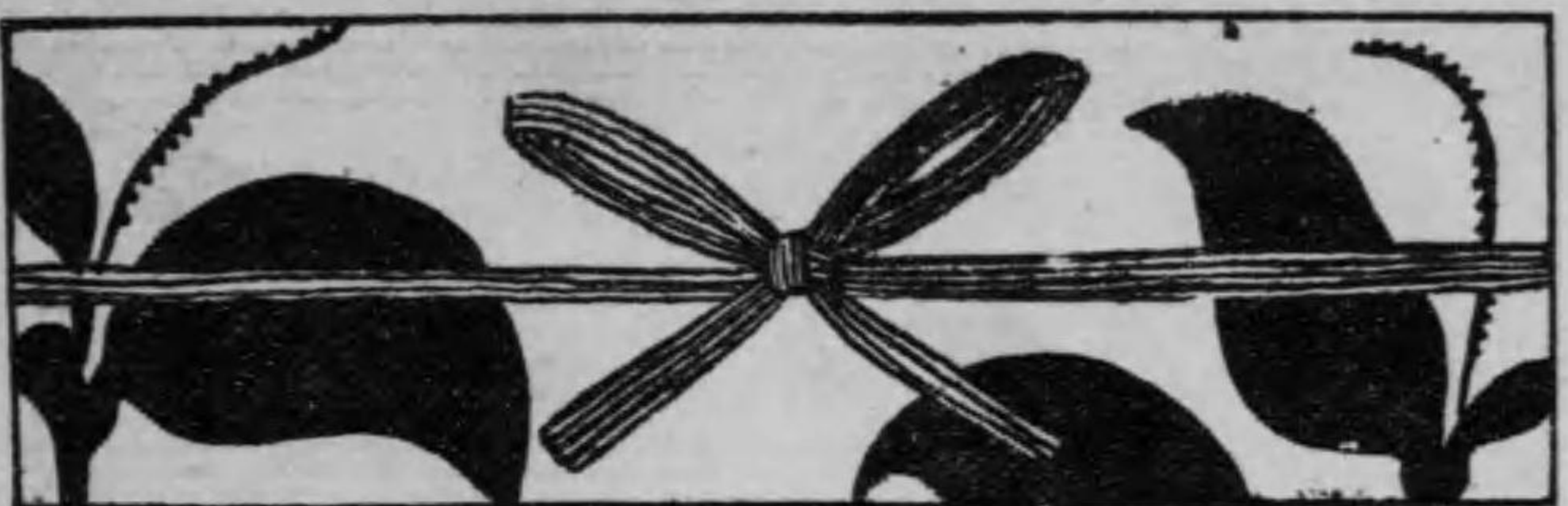
小笠原流折形

八、菊花包 紙は菊がさね、水引金銀、又金赤にても、又大尺檀紙がさねにて、金銀水引にて菊結を結てつくる事もあり、是は極めて上位への献上物の添物にのする時の包方の飾様なり、此様なるは菊もつくり菊の糸花のよろしきを包添るなり。

第百八圖 きくのはなづみ △をりあがり

下の方うらへをりかへす。



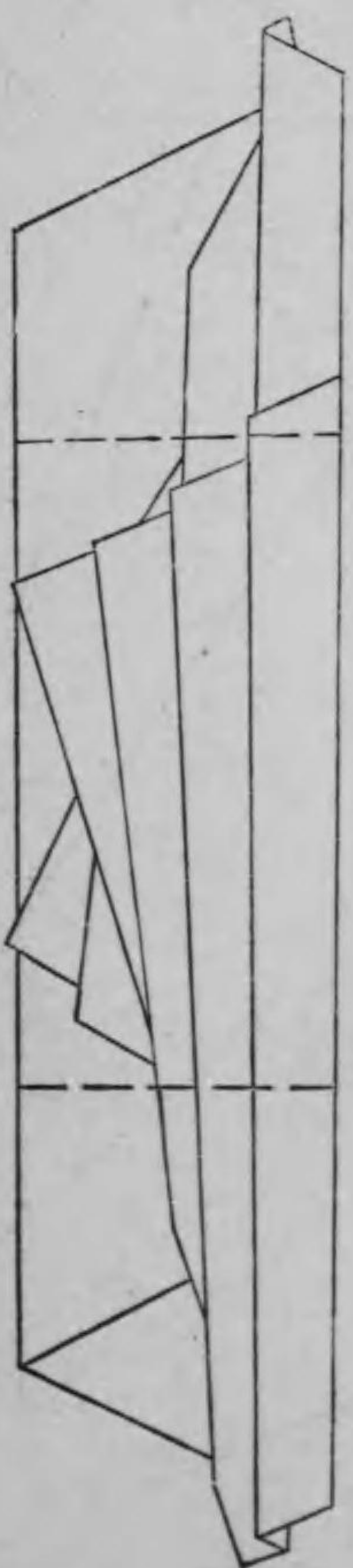


第五卷 花粧用折形圖解

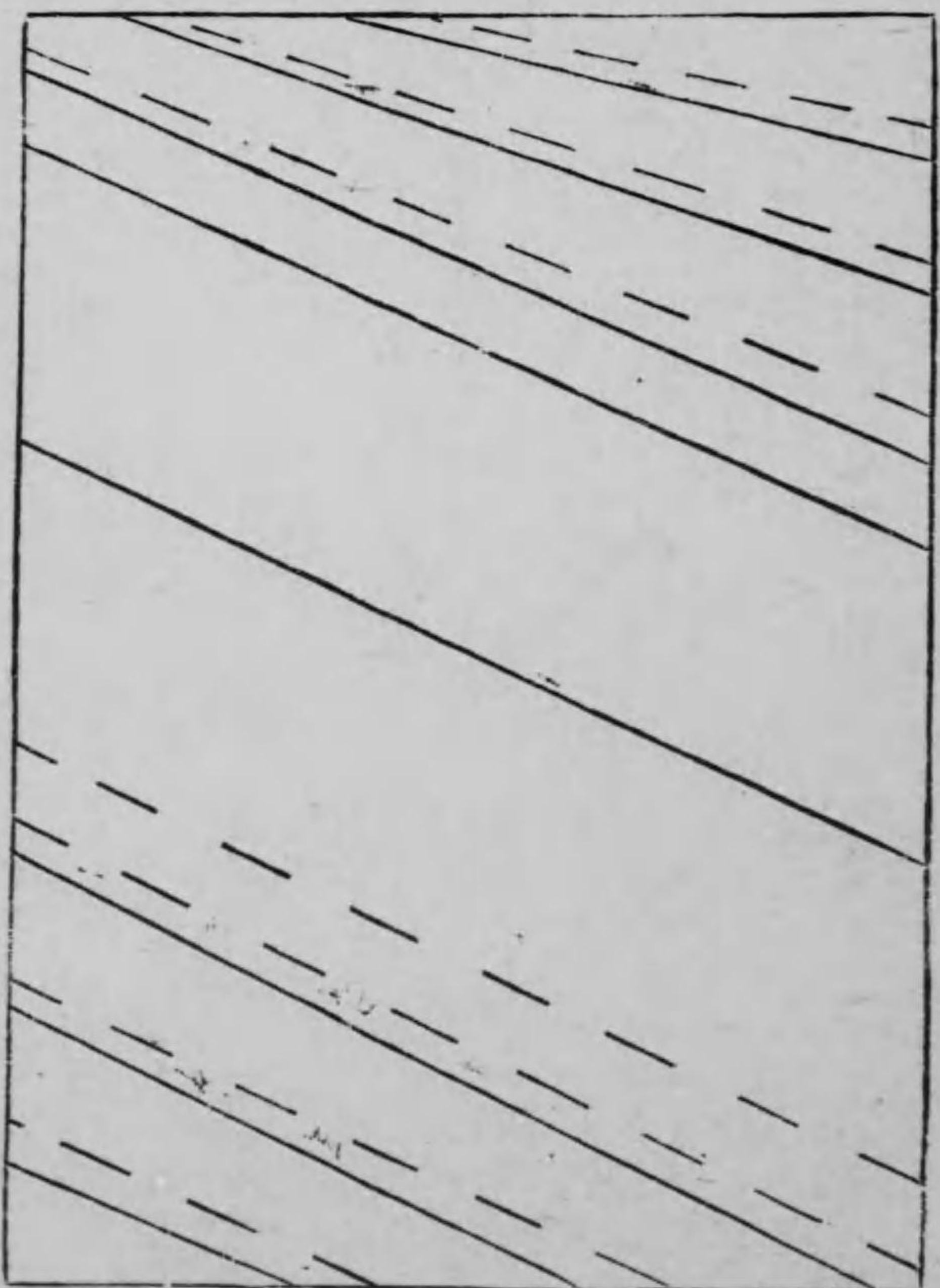
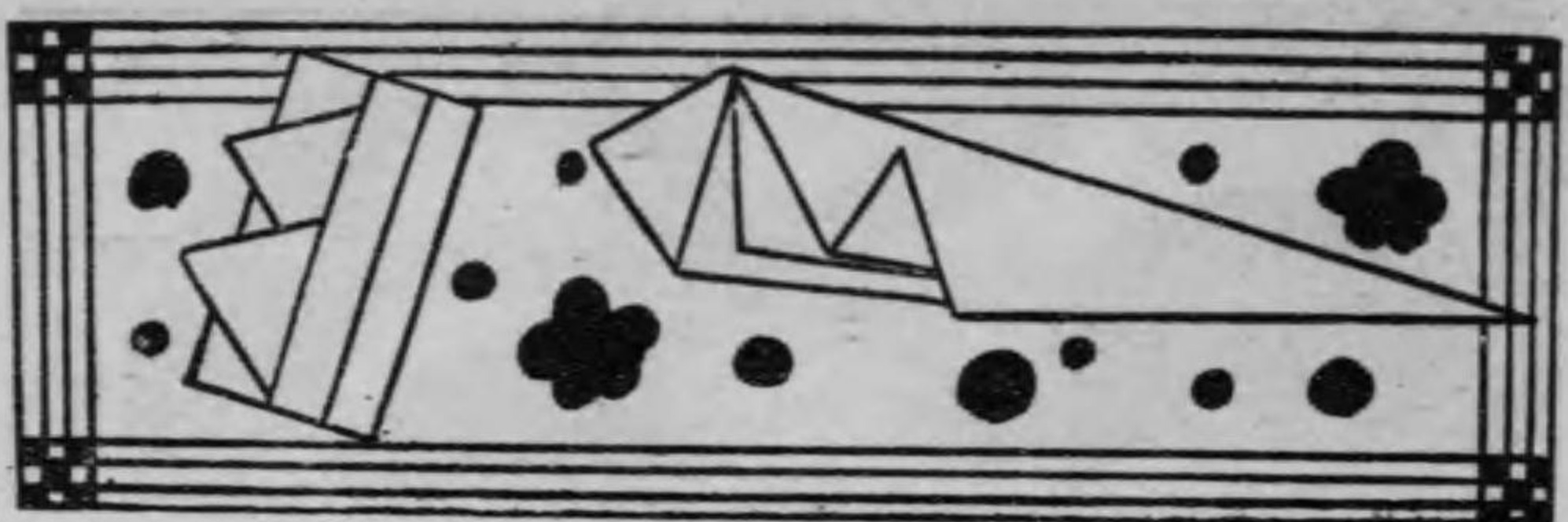
一、鏡包 下包白絹にて包み、折形にて上を包むなり、丸鏡、八花形などの本製をはじめとして、今の方圓いろくの小鏡を包む折形なり、紙は白なれば大尺檀紙のかさね、色ならば松うめ菊がさねの紙、水引は銀水引、笹結、梅結などにて飾るなり、上書あり。

第一百十圖 かみづゝみ

△をりあがり ○うへしたてんせんの所より、うらへをるべし、

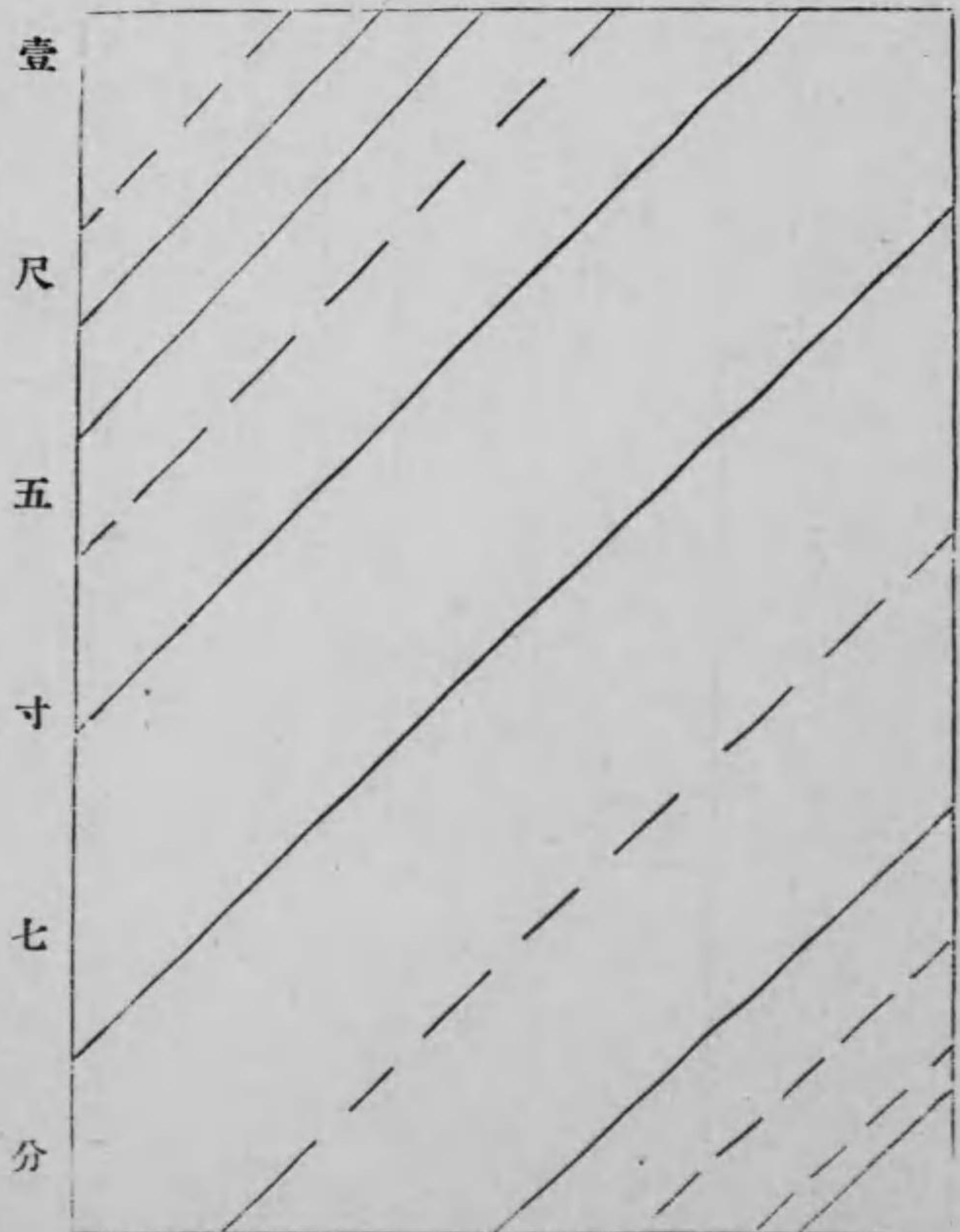


第一百十一圖 かみつゝみ △かたがみ をりやう ○これも表の方なり。





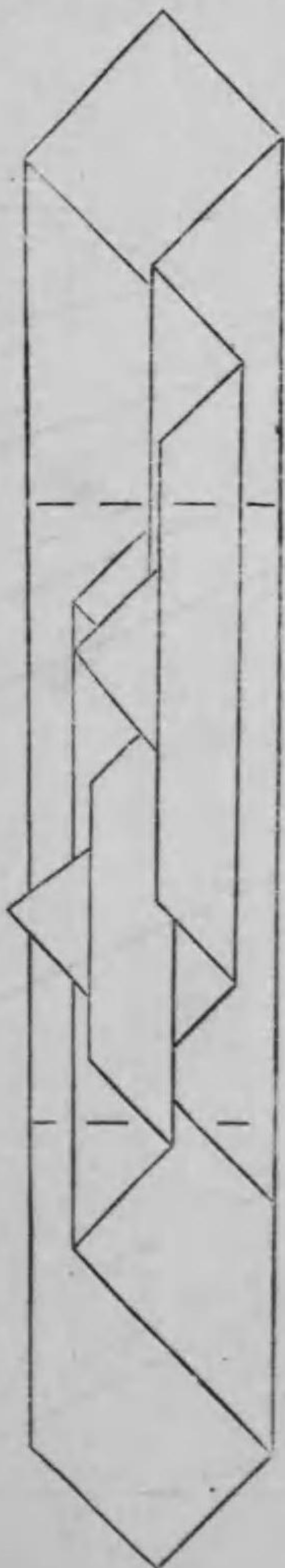
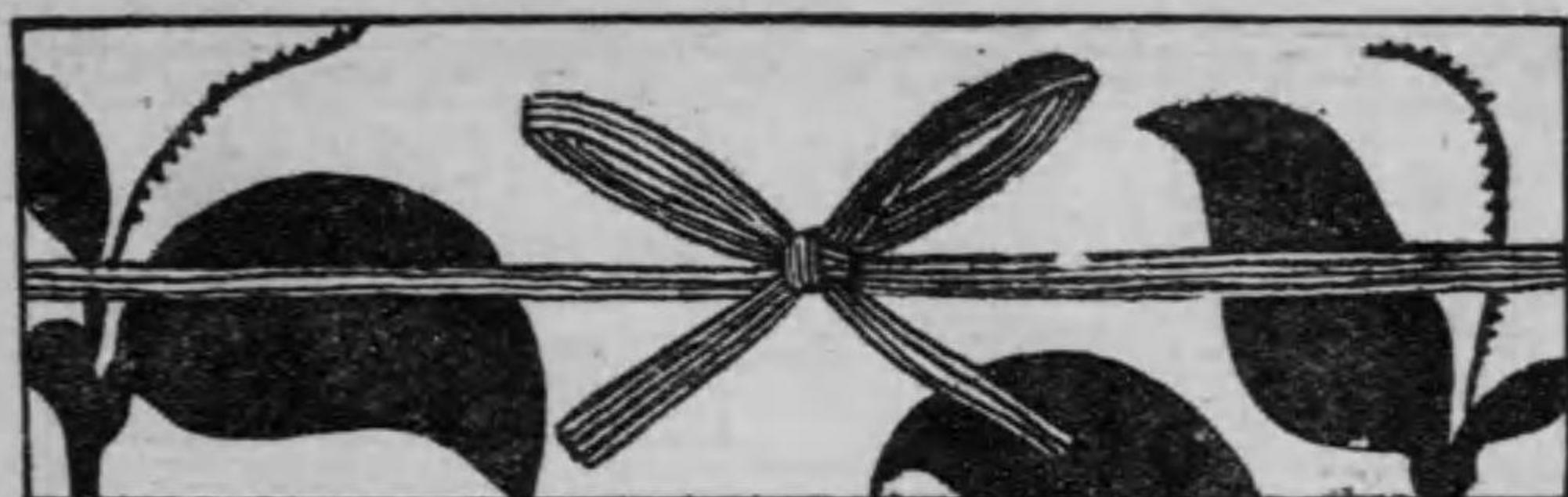
壹 尺 壹 寸 壹 分



第五卷 花紙用折方圖解

一一一

第百十三圖 おしろい包 △かたがみをりやう



○おしろい、べに、其ほかの花粧品の包形は、繪模様紙にても、金銀箔の紙にてもつゝむなり。

二、おしろい包 つねの白粉を包む折形なり、紙は白に紅うら、上位には大尺だん紙、紅奉書かさねて、金銀水引花結、中位には廣奉書うらべに、銀赤水引蛇結、其次には大奉書かさね、紅白水引細結、もろわな結にても、上書あるべし、以上はよのつねなれど、ことによりては色紙がさね、銀紙に空色の裏を合せて銀水引飾にする事もあり。

第百十二圖 おしろいづゝみ △をりあがり
○うへしたをうらへをりかへすなり。

小笠原流折形

一一〇

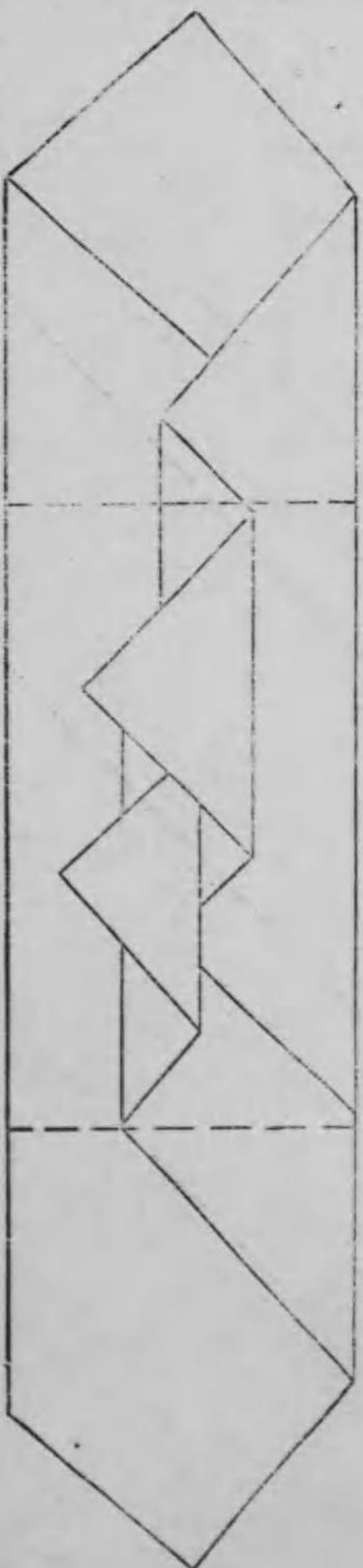


小笠原流折形

三、水白粉、煉おしろい包 いづれも器物に入れて裝飾したるを包むなり、吉野紙にて下包あるべし、紙水引の飾やうは前に同様なり、又水引をつかはずして、絹紐、組糸にて結ぶことあり。

第百十四圖 水おしろい、煉おしろい包

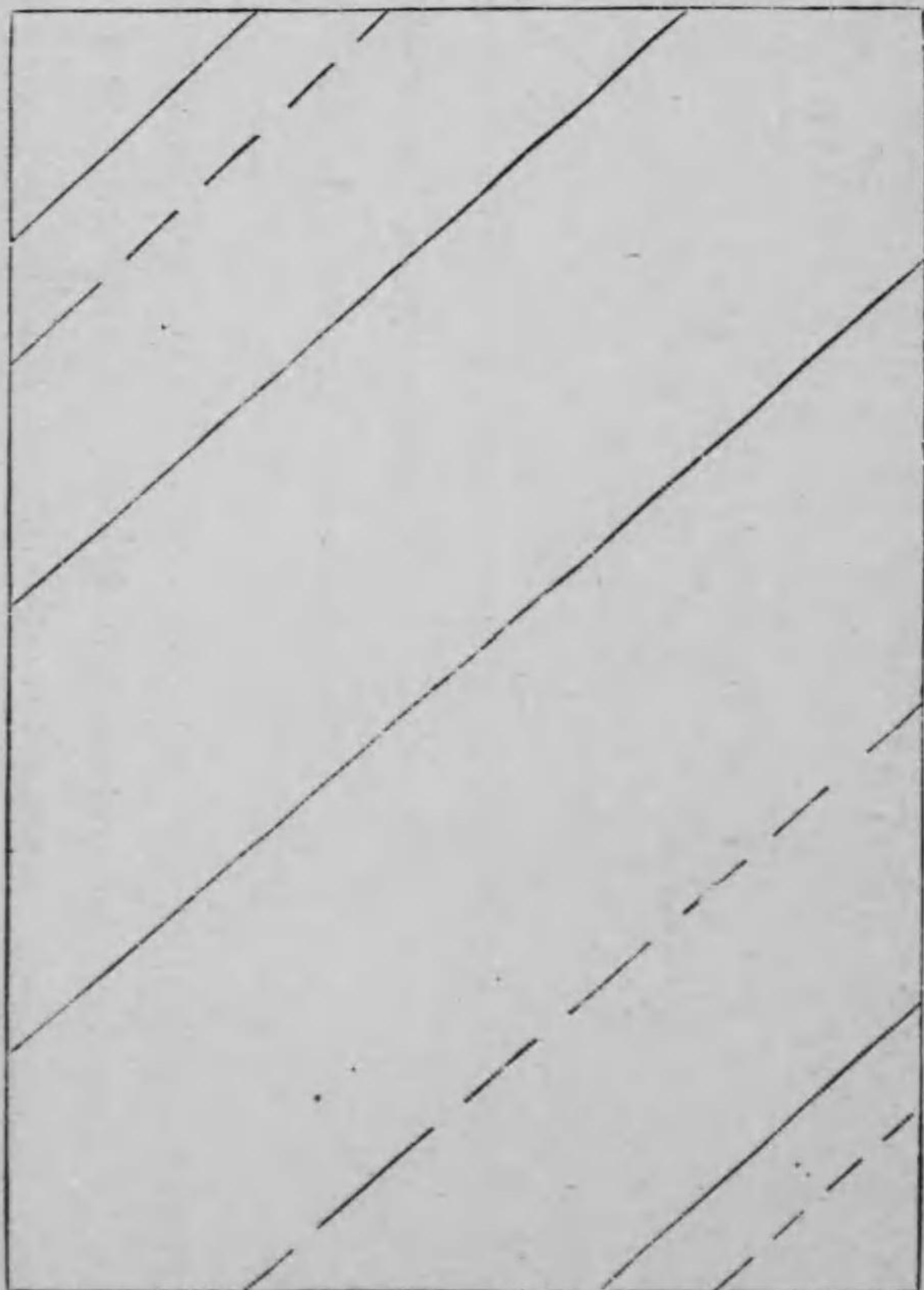
△をりあがり ○上下をうらへをるべし。



○繪様ある用紙、金銀箱の紙にて包むこと、おしろいるのにおほくつゝむなり。



第百十五圖 水おしろい、煉おしろい包 かがみをりやう



第五卷 花紙用折方圖解

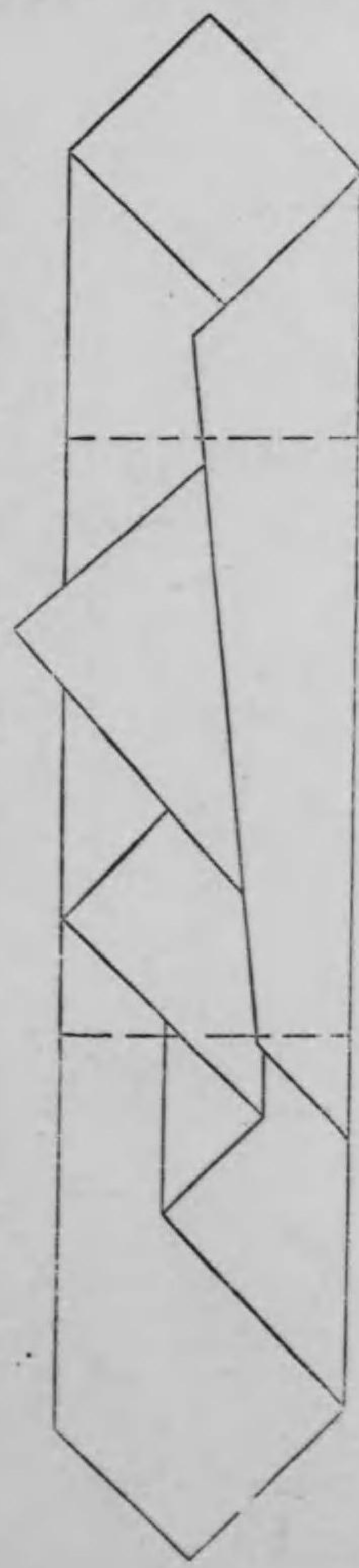
一一三



小笠原流折形

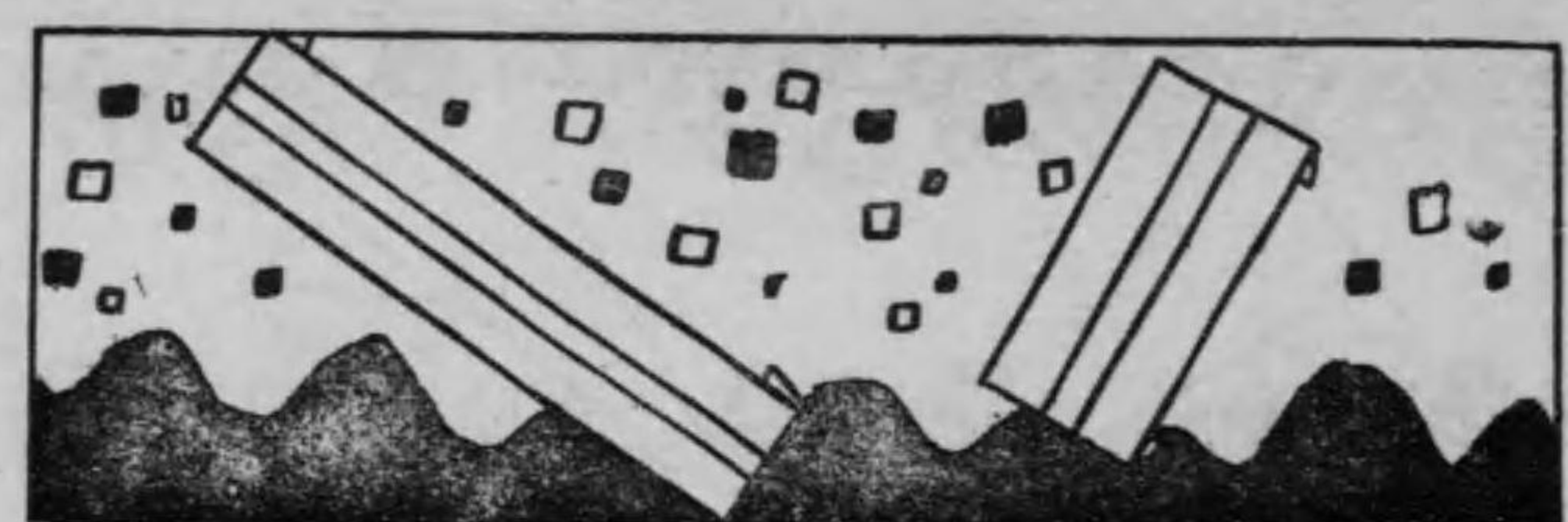
三、紙おしろい包 色がさぬの紙にて包むべし、以上三種とも白木臺にのせて進物の時、長鮑包の同じたけ位に小さく細く包たるを添へ、其ほか、おしろい包の上に、絲花の髪挿を、小形の花包にして置くことをつねとす、包方に花結つくる時は、かんざしの花をそへす。

第百十六圖 紙おしろい包 △をりあがり
○上下をうらへをりかへすべし。

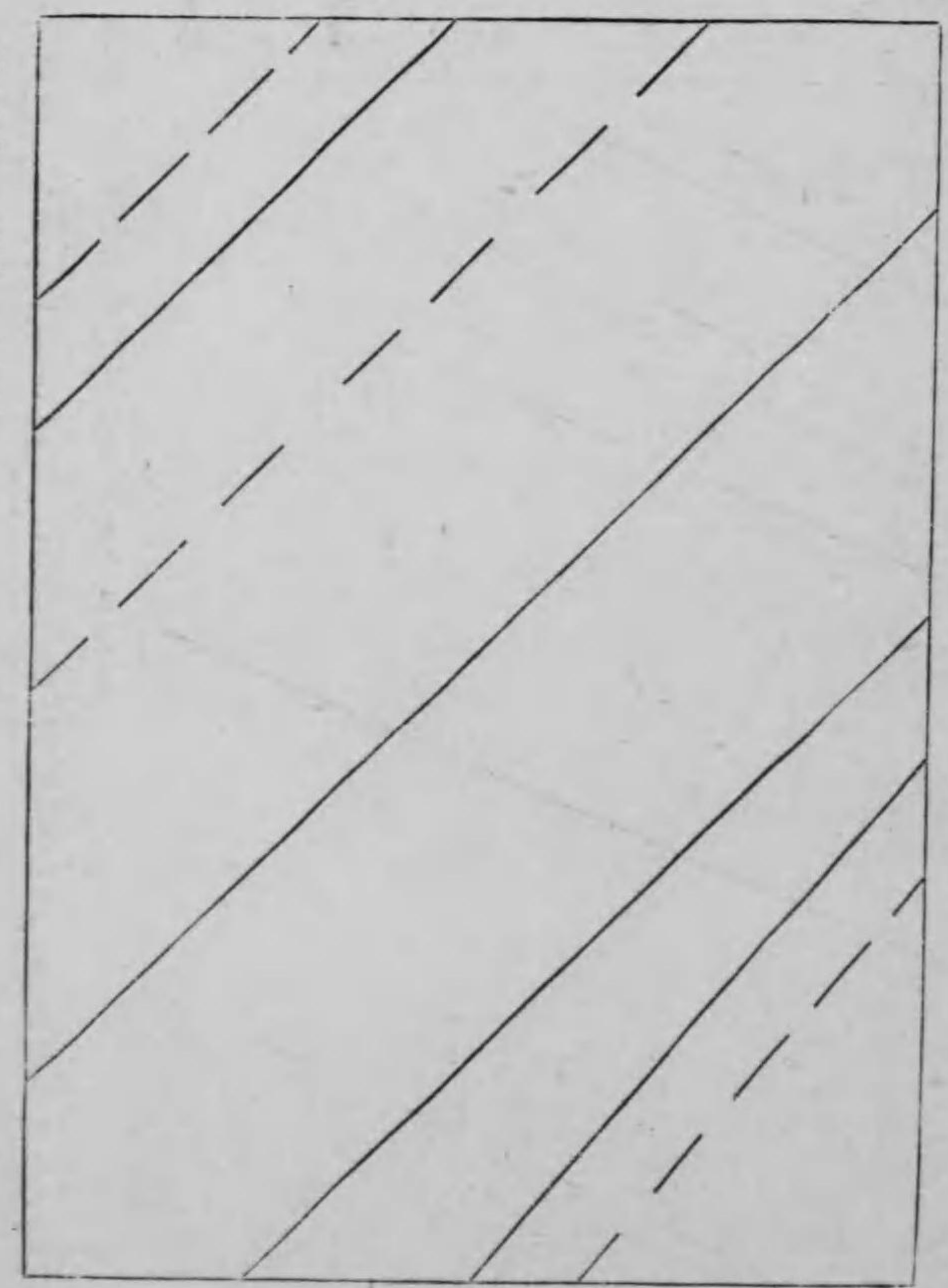


○繪は、蘆手繪などにて、上品なる紙をつかふべし、色重の紙捻をもて結べば、一段とよろし。

一一四

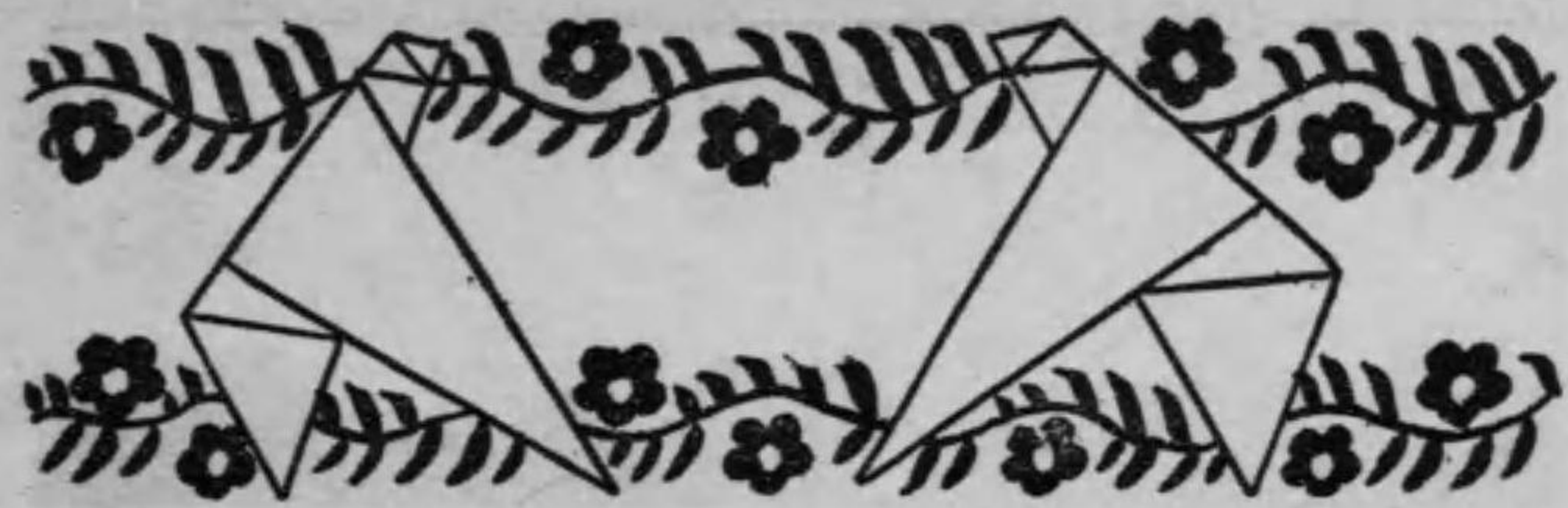
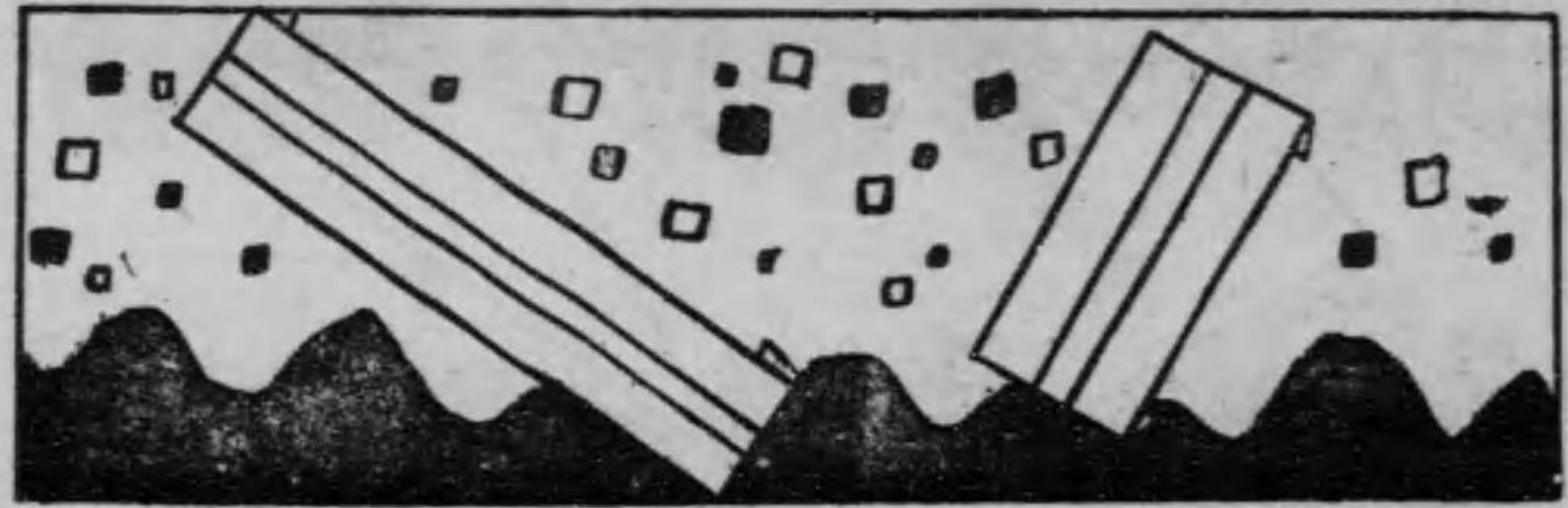


第百十七圖 紙おしろい包 △かたがみ をりやう



第五卷 花粧用折方圖解

一一五



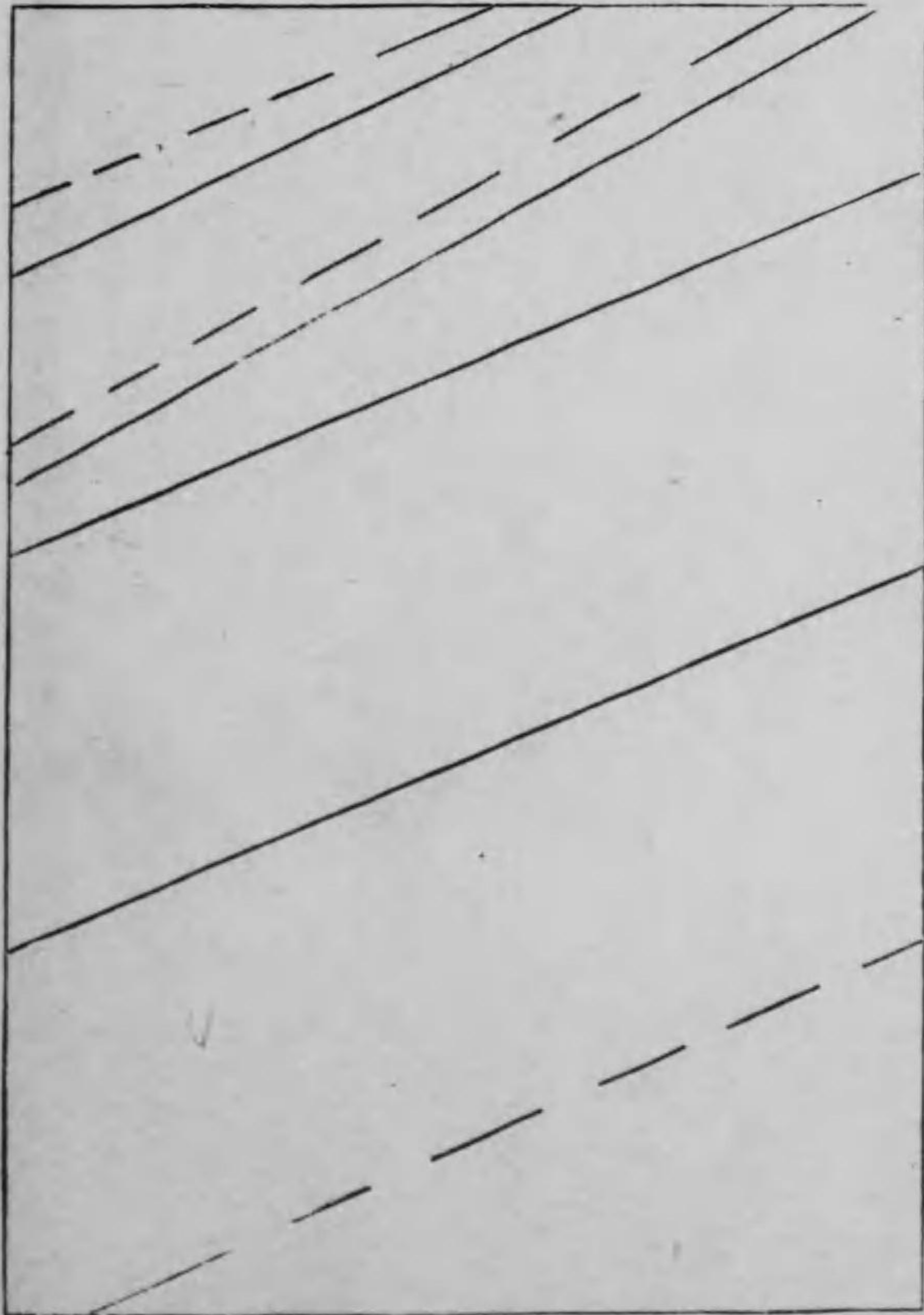
第百十八

小笠原流折形

五、花粧水包けしやうすゐづかみ これは水おしろい包すゐおしろいづかみと同様の飾方かざりかたにてよろし、上書うしやうあるべし、細結こまむすび、紐ひも、糸いとにて結ぶ時は花のかんざしはなのかんざしをへてよし。

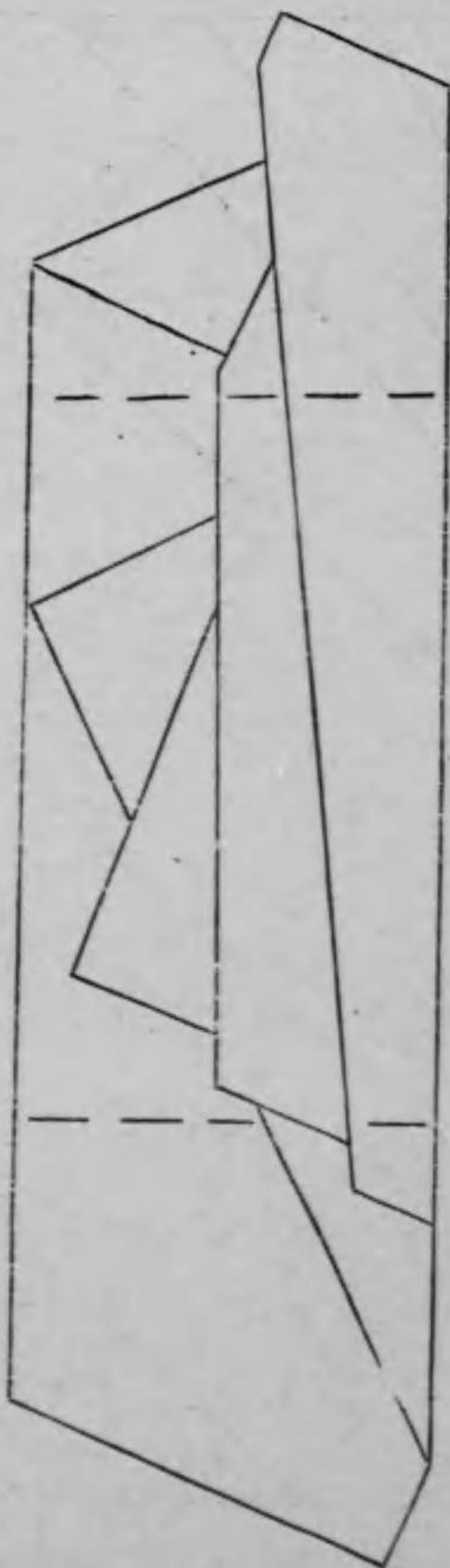
一一六

△かたが
み
をりや
う

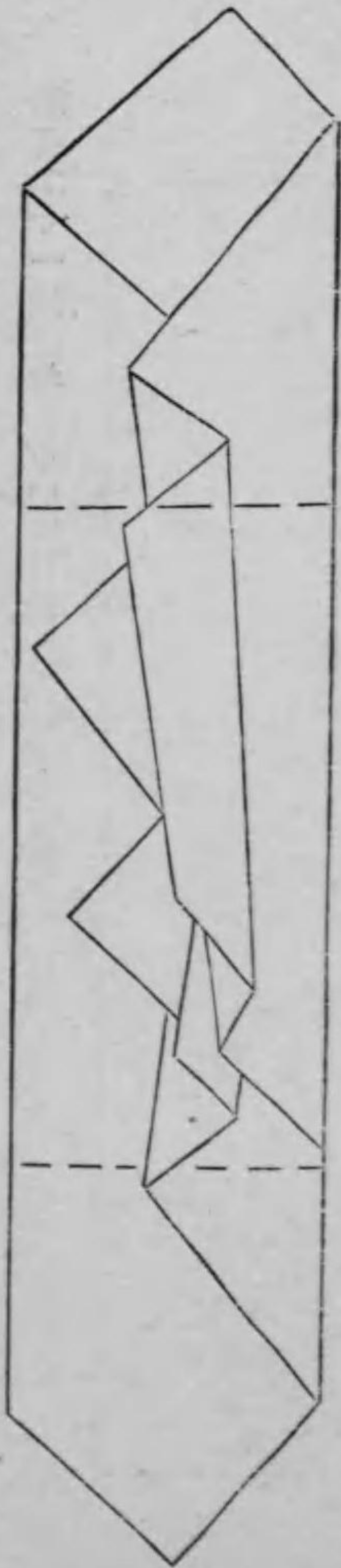


第百十九圖

花粧水づゝみ △をりあがり

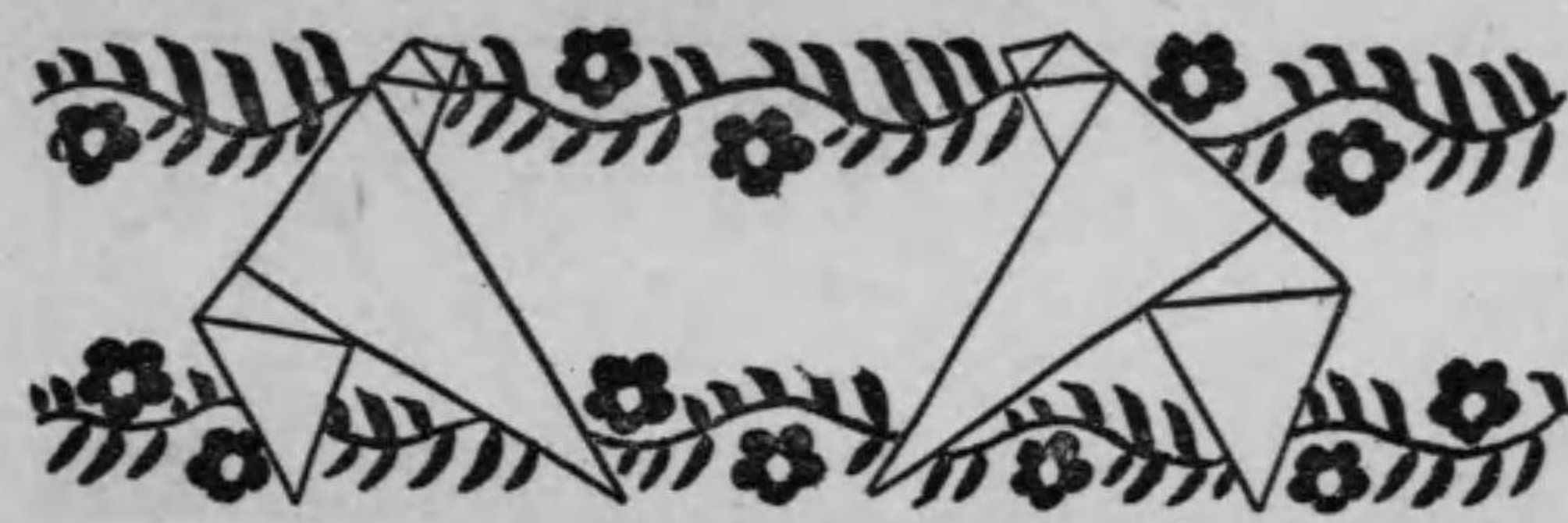


六、白粉刷毛包おしろいはけづかみ (甲) 紙はおしろい包おしろいづかみと同じ、水引細結すゐひきこまむすび、もろわななり。
第百二十圖 おしろいはけ包おしろいはけづかみ (甲の形) △をりあがり

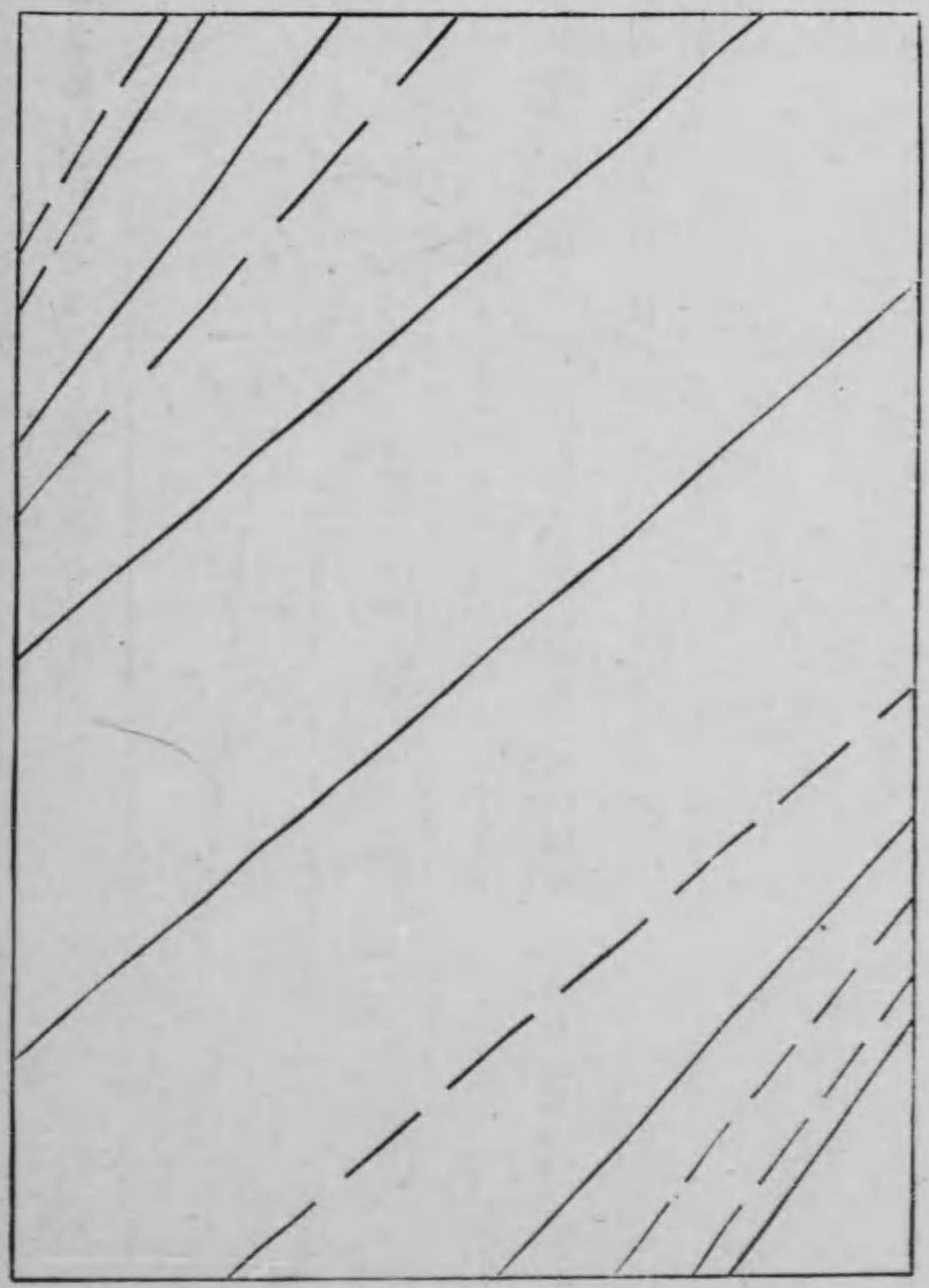


第五卷 花粧用折方圖解

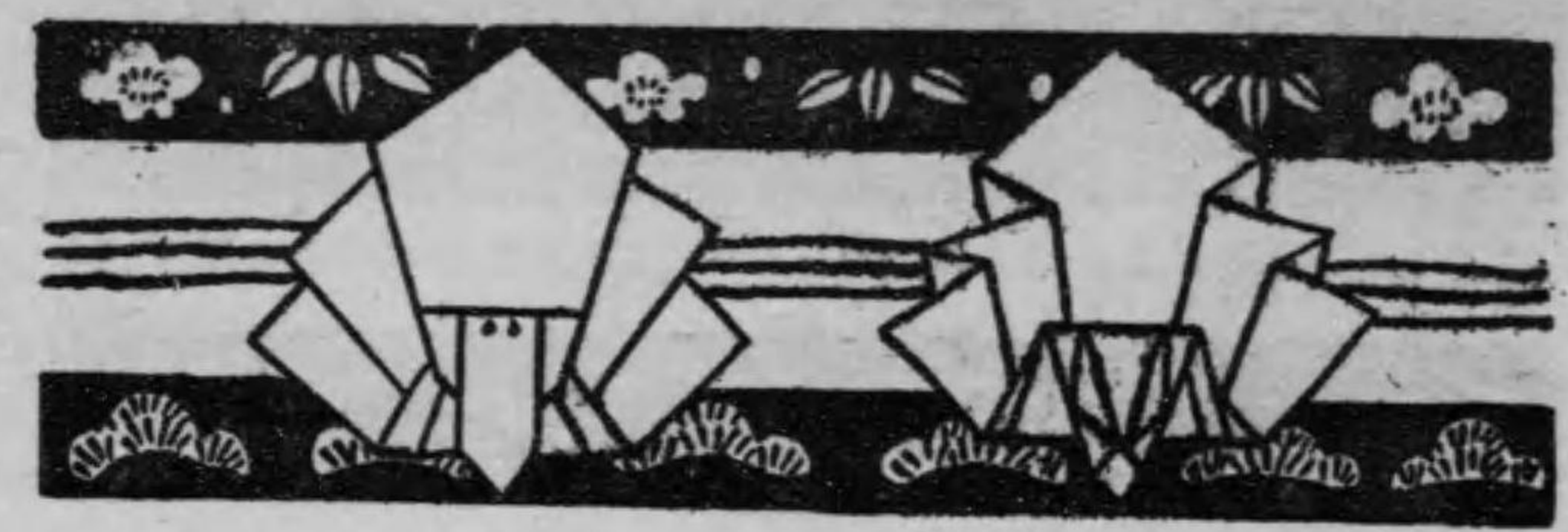
一一七



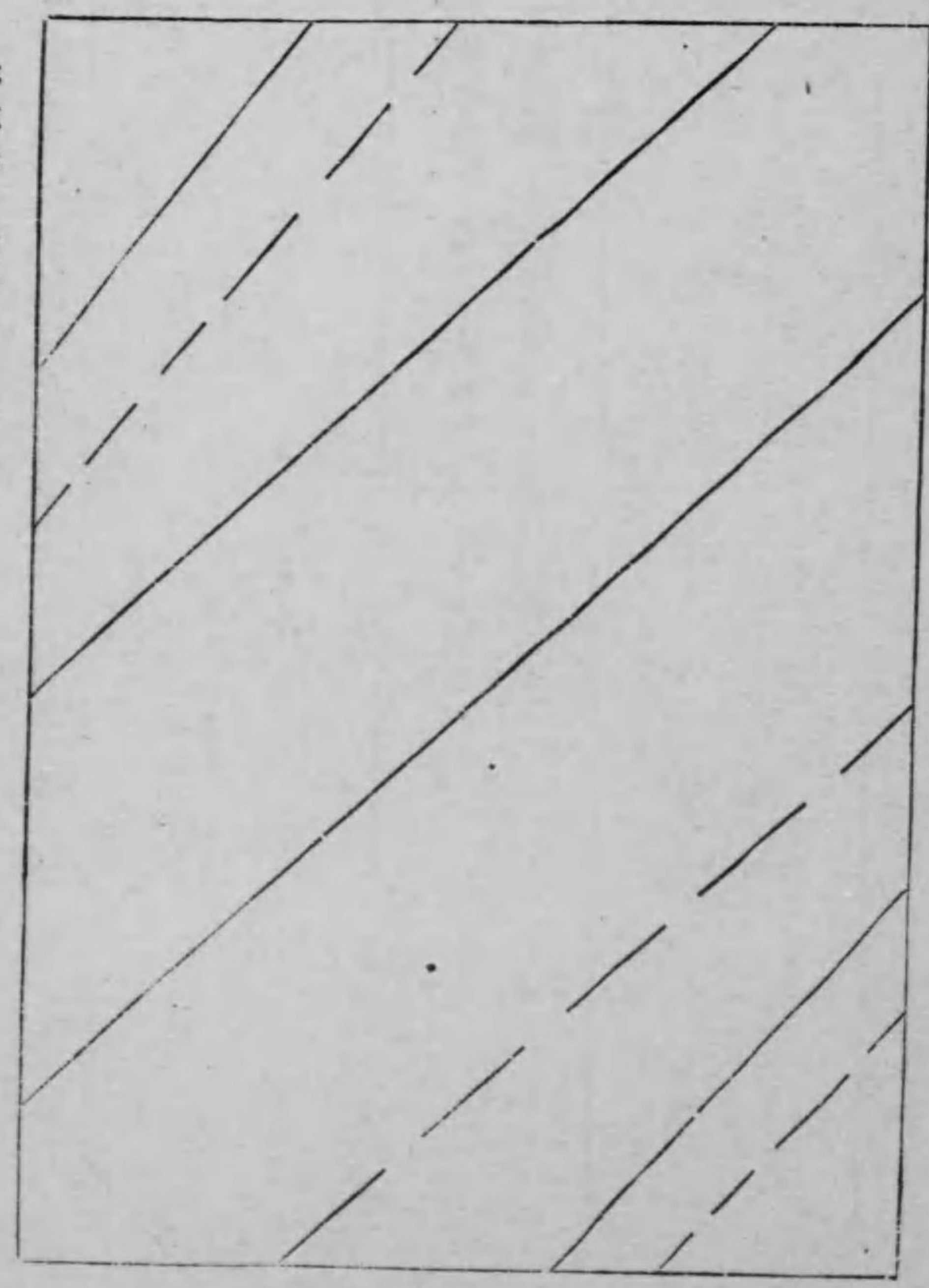
小笠原流折形
 第二百二十一圖 おしろいばけ包 (甲の形) △かたがみ をりやう



七、同 (乙)
 第二百二十二圖 右に同じ、これは次の方へつかふなり、大奉書紅白水引。
 おしろいばけ包 (乙の形) △かたがみ をりやう

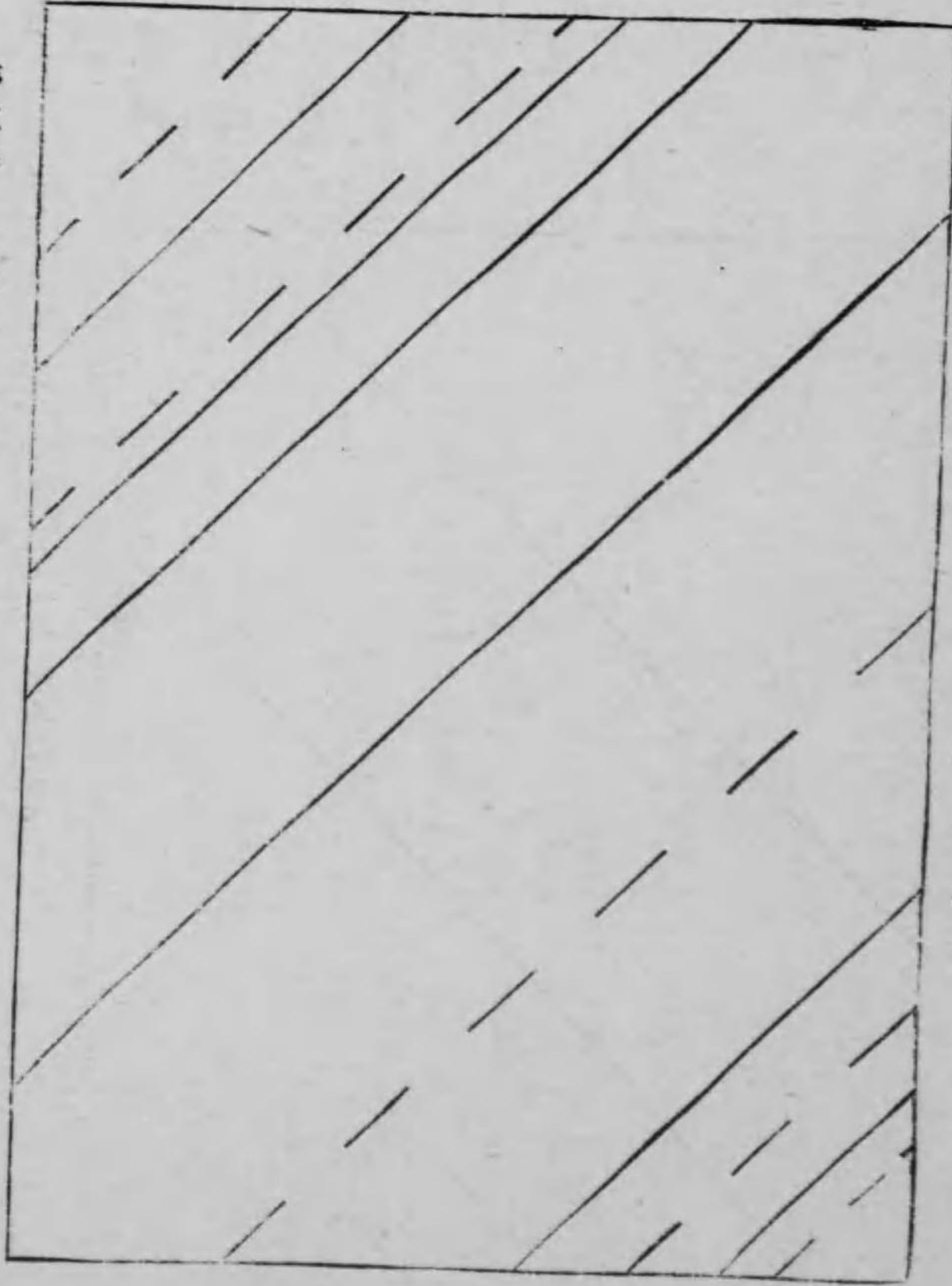


第五卷 花粧用折方圖解



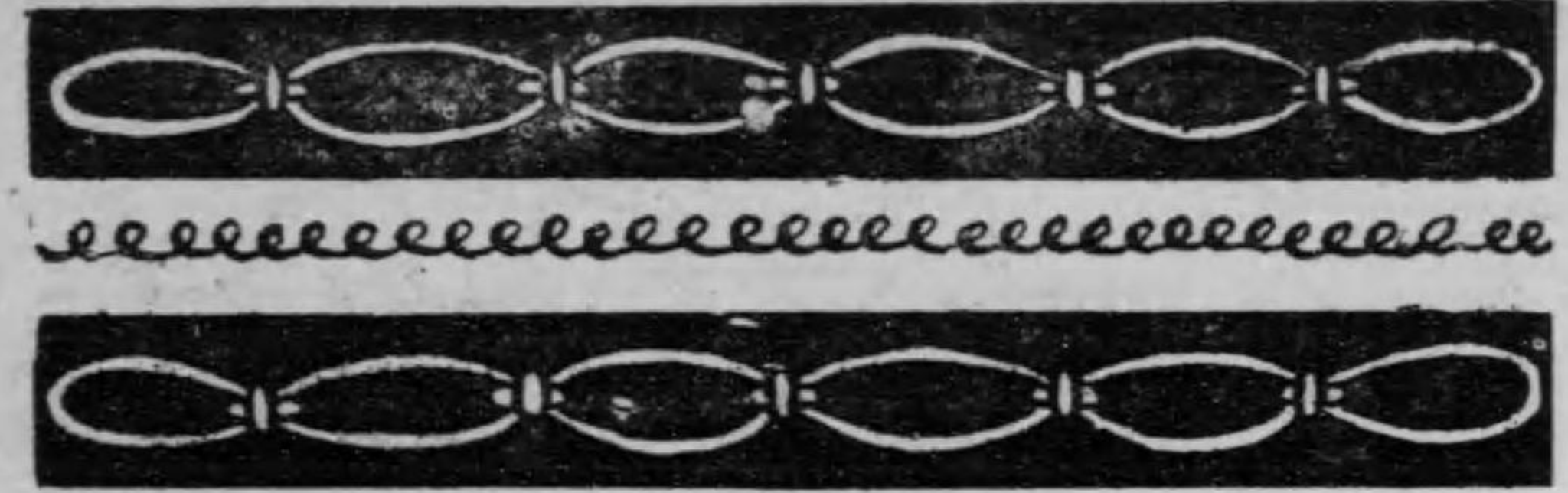


第五卷 花粧用折方圖解



一一一

第二百二十五圖 美顔用具包 (甲の形) △かたがみ をりやう

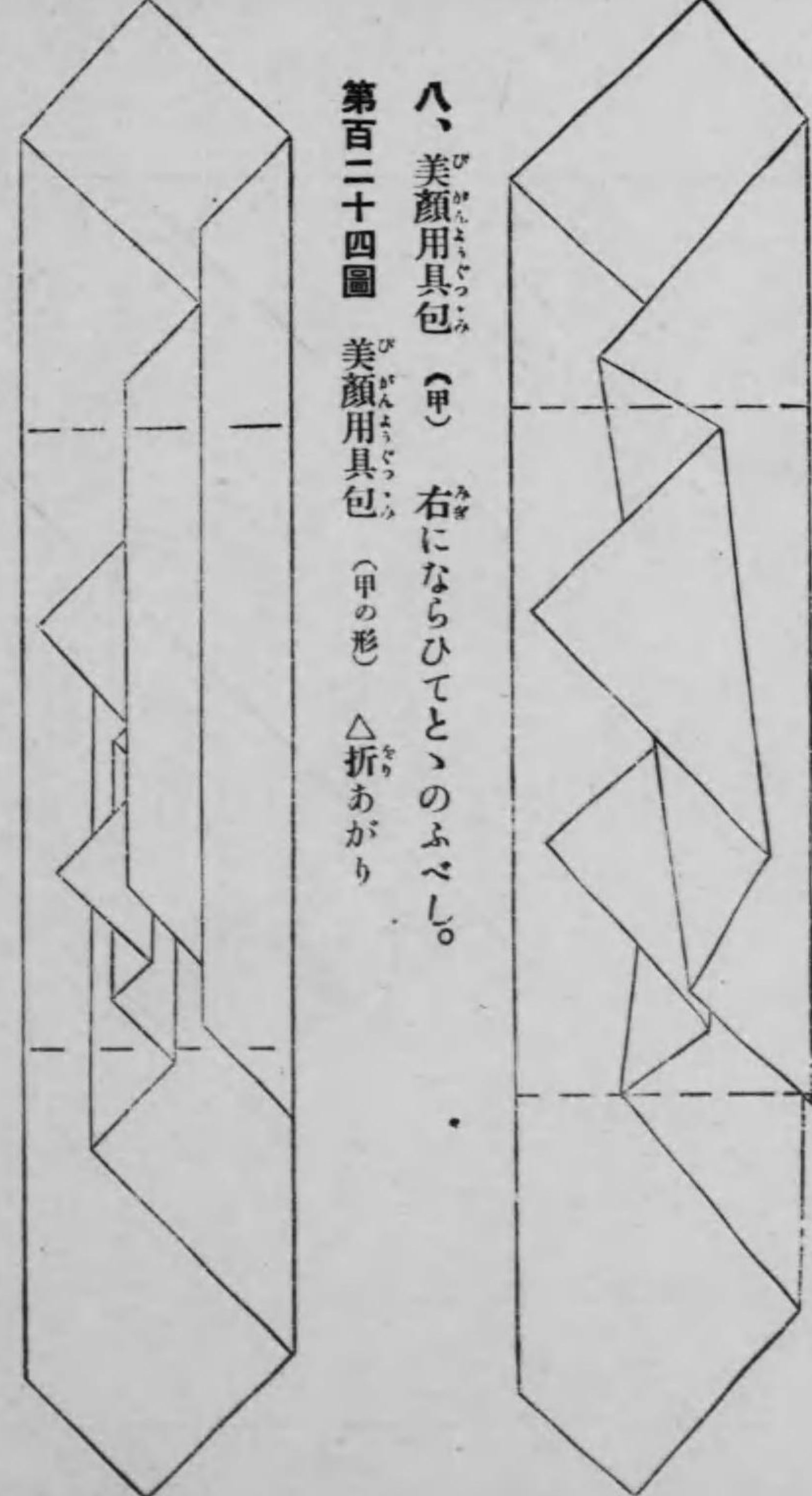


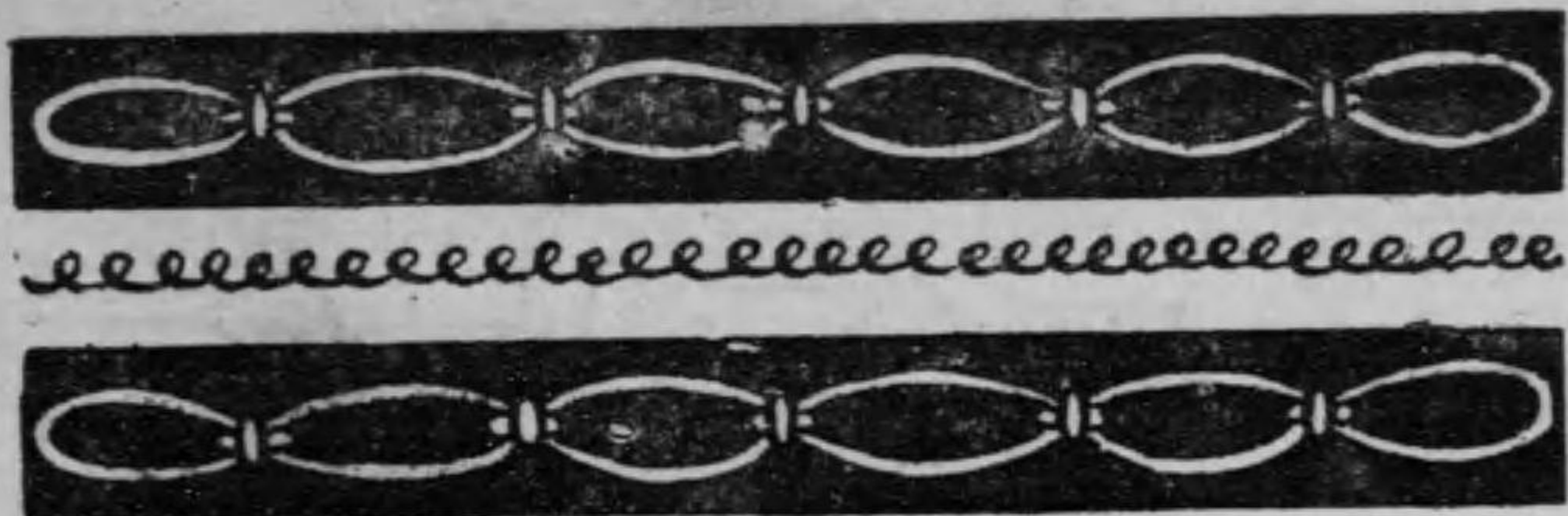
小笠原流折形

第二百二十三圖 おしろいばけ包 (乙の形) △折あがり

一一〇

八、美顔用具包 (甲) 右にならひてとのふべし。
第二百二十四圖 美顔用具包 (甲の形) △折あがり





小笠原流折形

九、同(乙) 右に同じ、これは次の方へつかふなり。

二三三

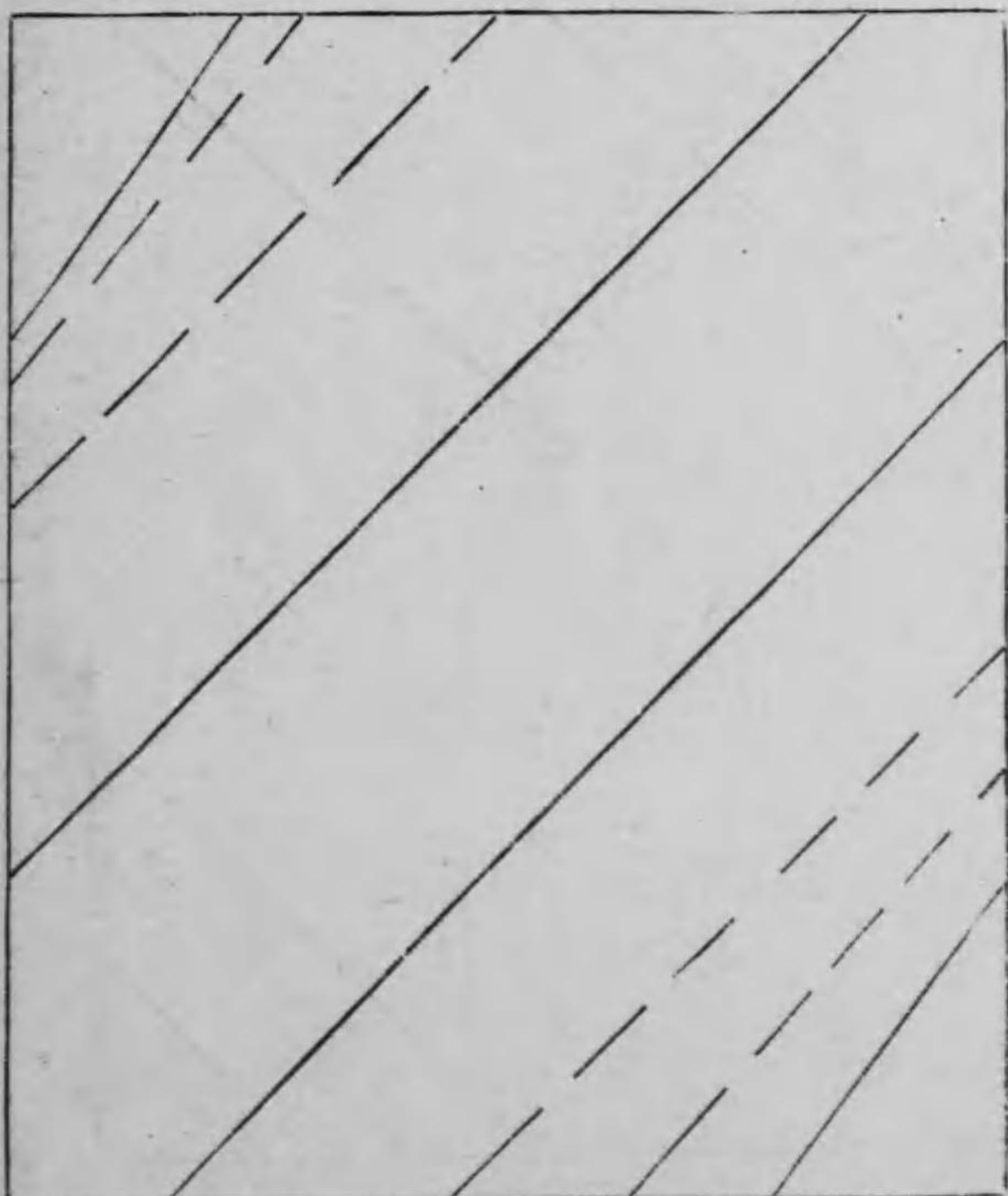
第二百二十六圖

美顔用具包

(乙の形)

△かたがみ

をりやう

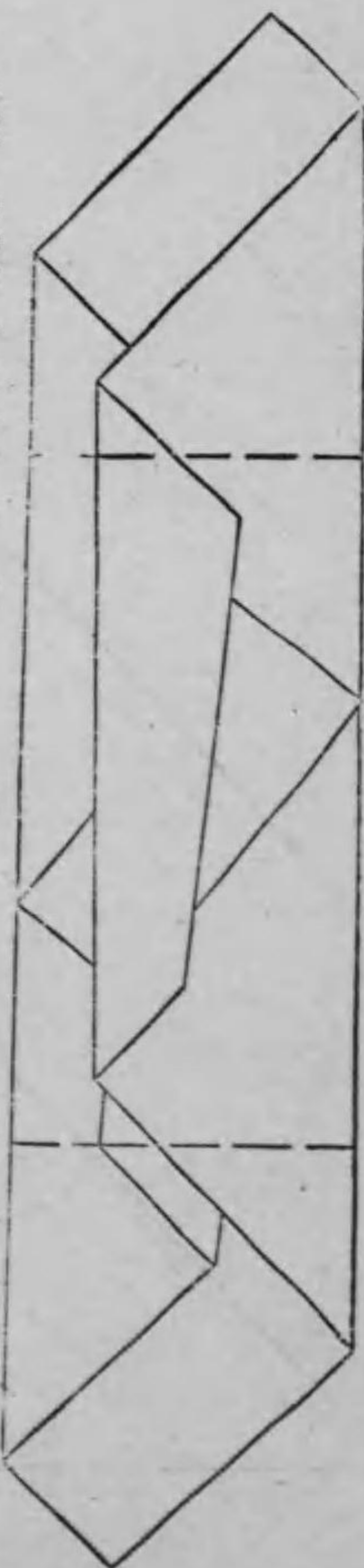


第二百二十七圖

美顔用具包

(乙の形)

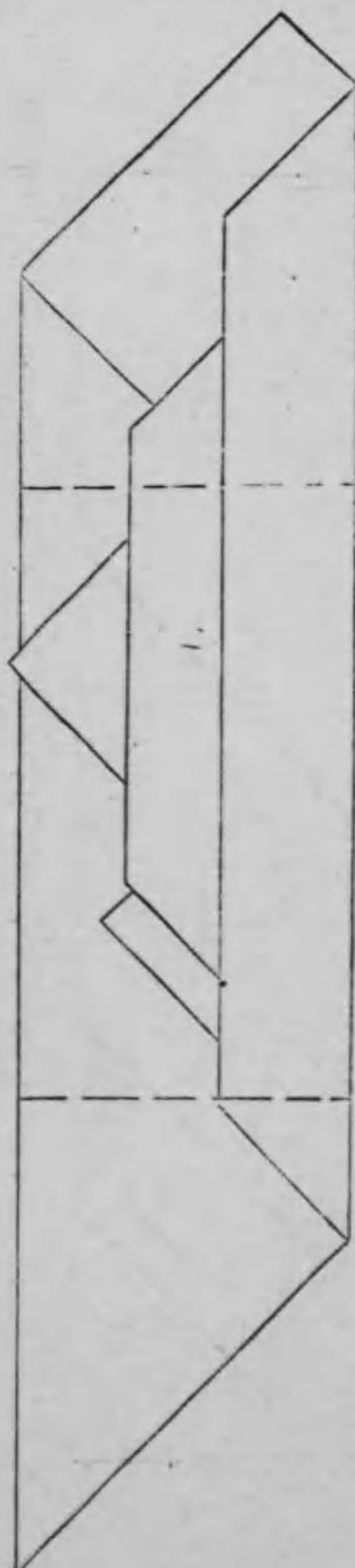
△折あがり



十、口紅、頬紅包、器物に入、白がさねの紙、白くねなる水引細結、又色紙がさねに白紅水引にてもよし、花結をつくる時は銀水引にてすべし、上書あり、ほつべに、つまべに、くちべに、いづれも同じ包方にてよし、これも花のかざしをへてよし。

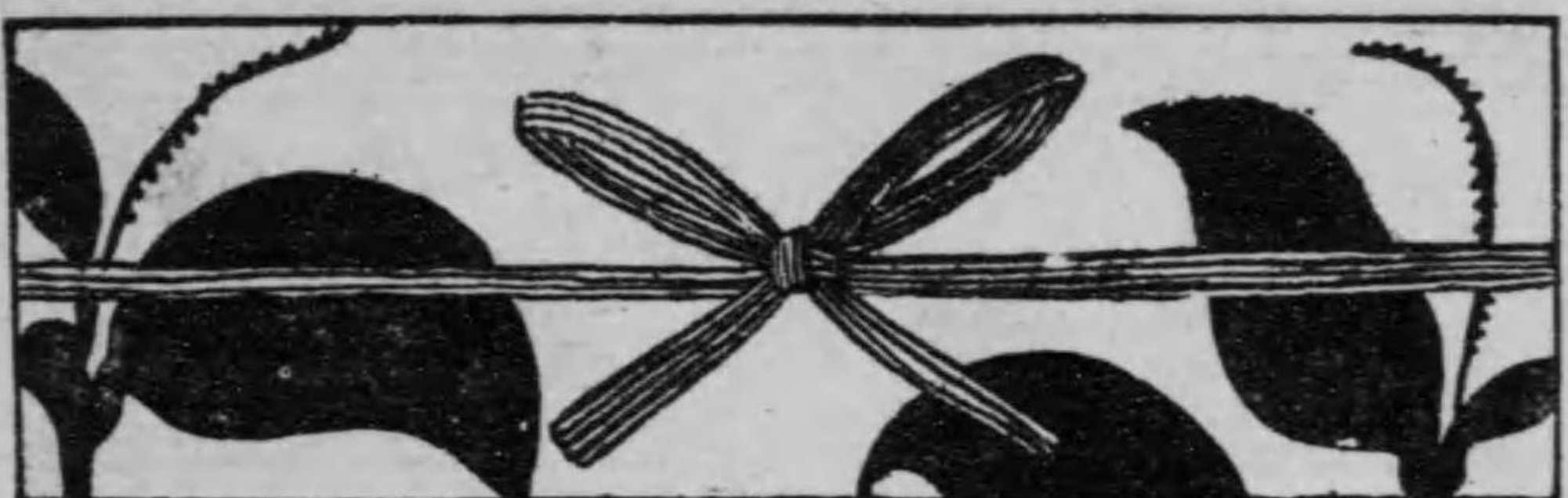
第二百二十八圖

くちべにほつべに包



第五卷 化粧用折方圖解

二三三



小笠原流折形
 第二百二十九圖 くちべにほへに包み △かたがみをりやう



第十一 紅筆包 右と同じ紙水引にて包むべし、口紅と共におくものゆゑ、すべて同じ色目にて飾るべし。

第三百十

圖

○紅ふて

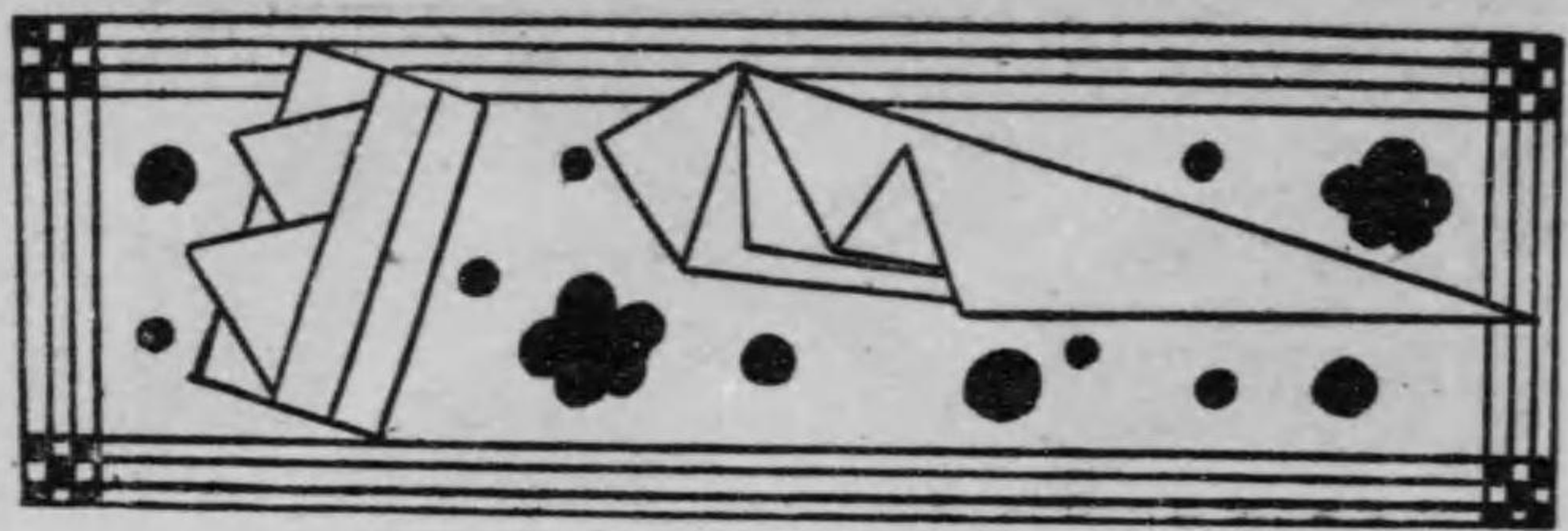
包み

△かたが

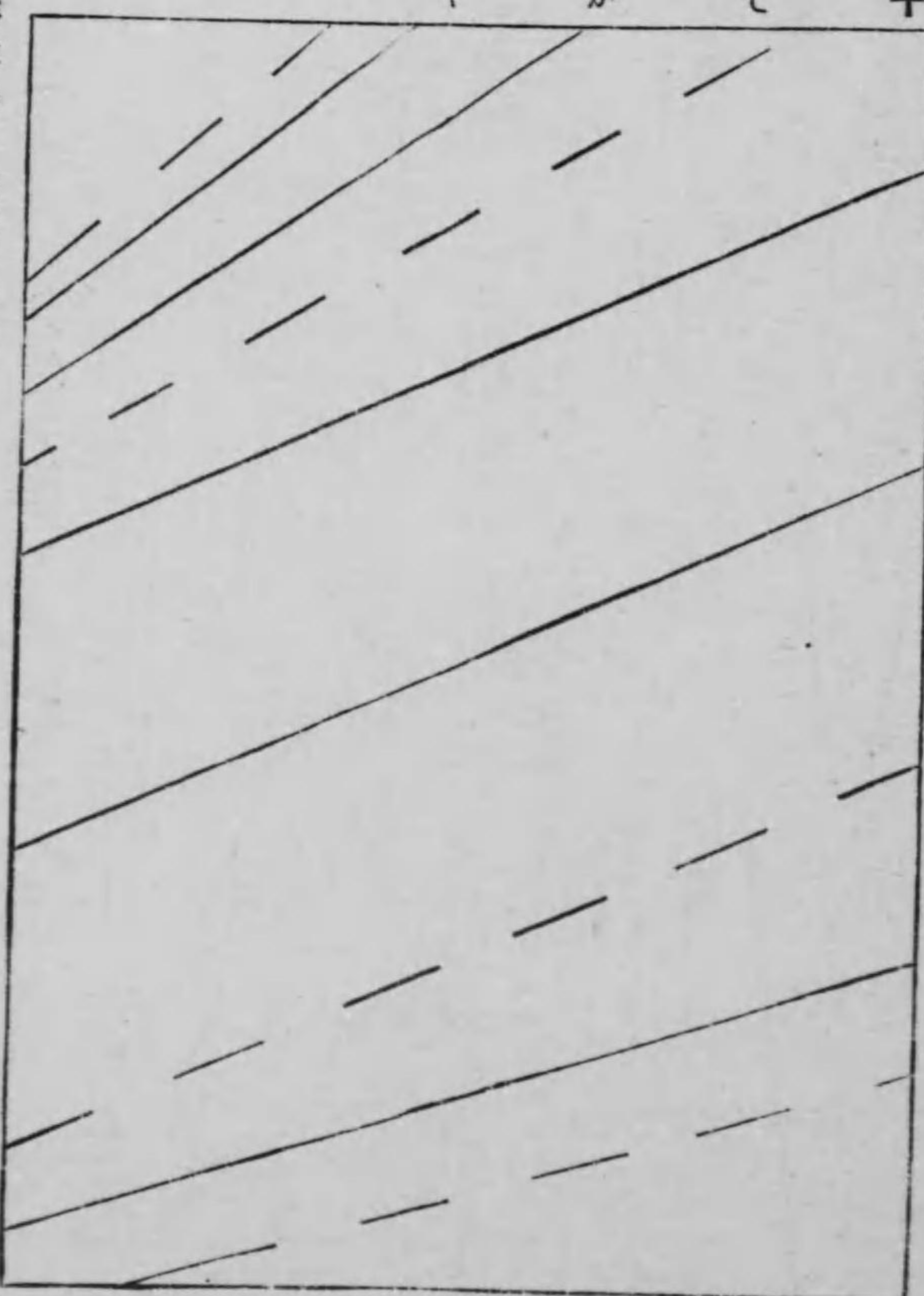
み

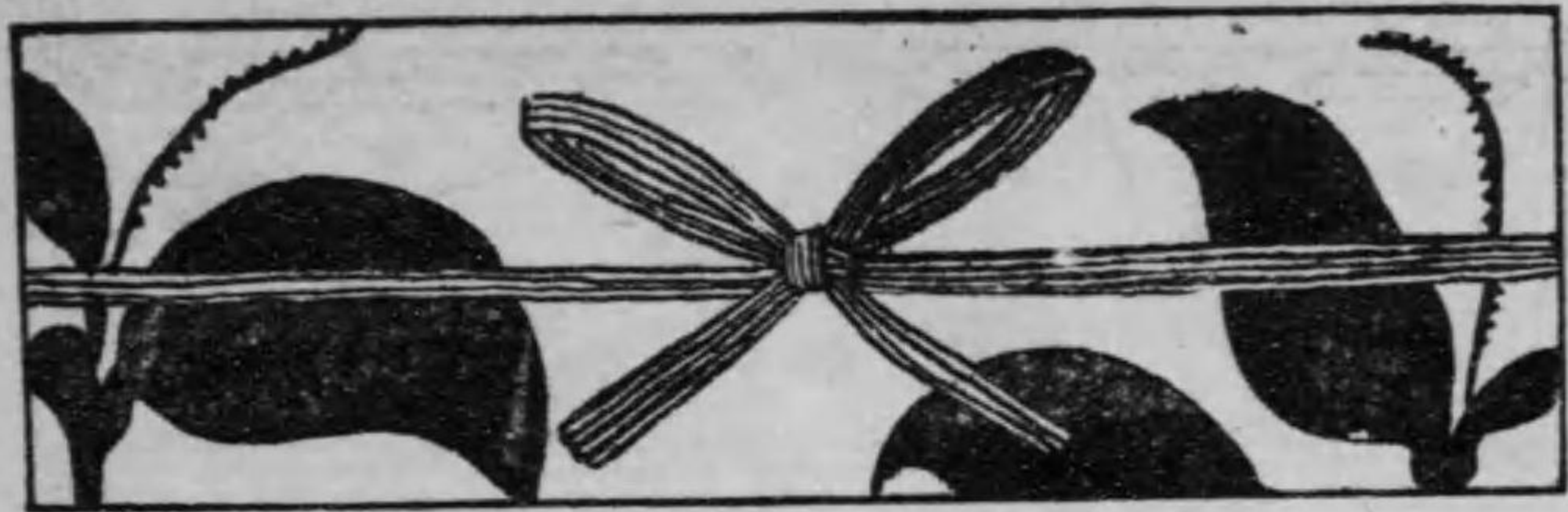
をりや

う



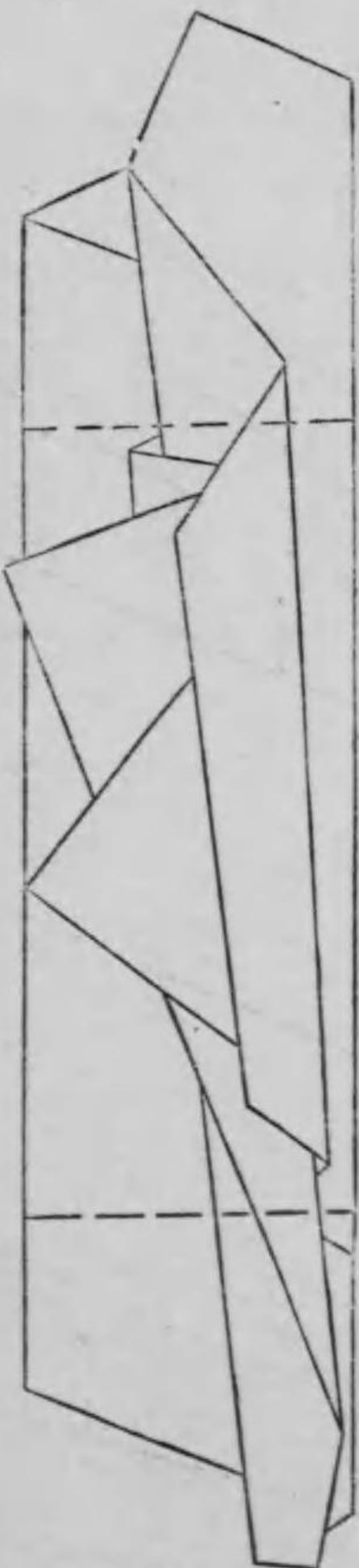
第五卷 化粧用折方圖解





小笠原流折形

百三十一圖 紅ふでつゝみ △をりあがり

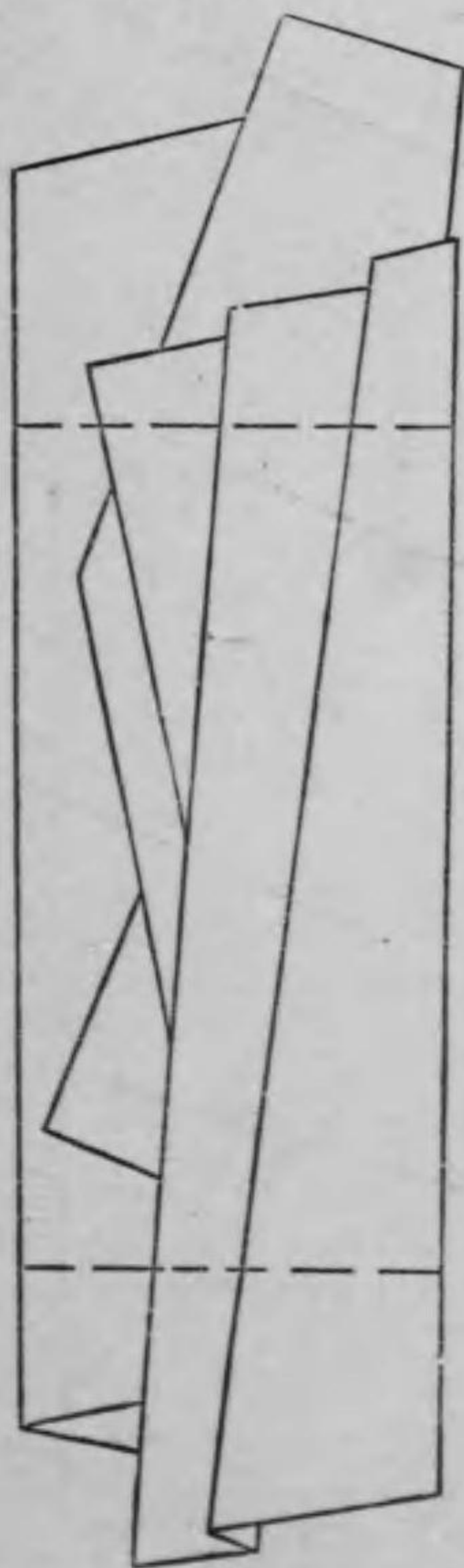


一一六

十二 洗粉石鹼包 洗粉、石鹼、糠袋などを包む、紙は白がさね、又は紅白がさね、水引は金赤銀赤、細結、もろわなにもむすぶ、上書あり。

第三百三十二圖

洗粉石鹼づゝみ △をりあがり



第三百三十三圖 洗粉石鹼包



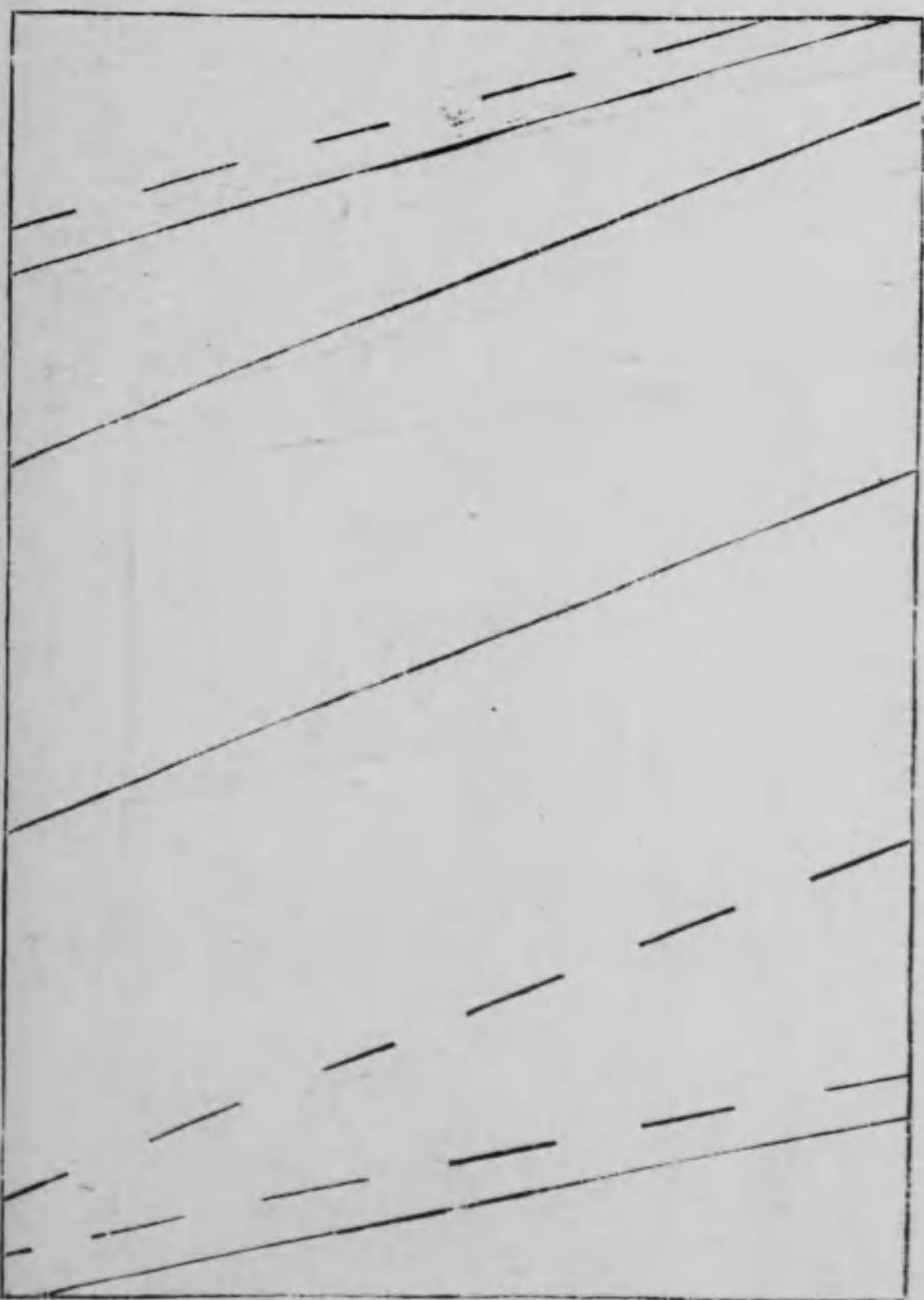
第五卷 花粧用折方圖解

一一七

○かたがみ表 ひらきたる圖



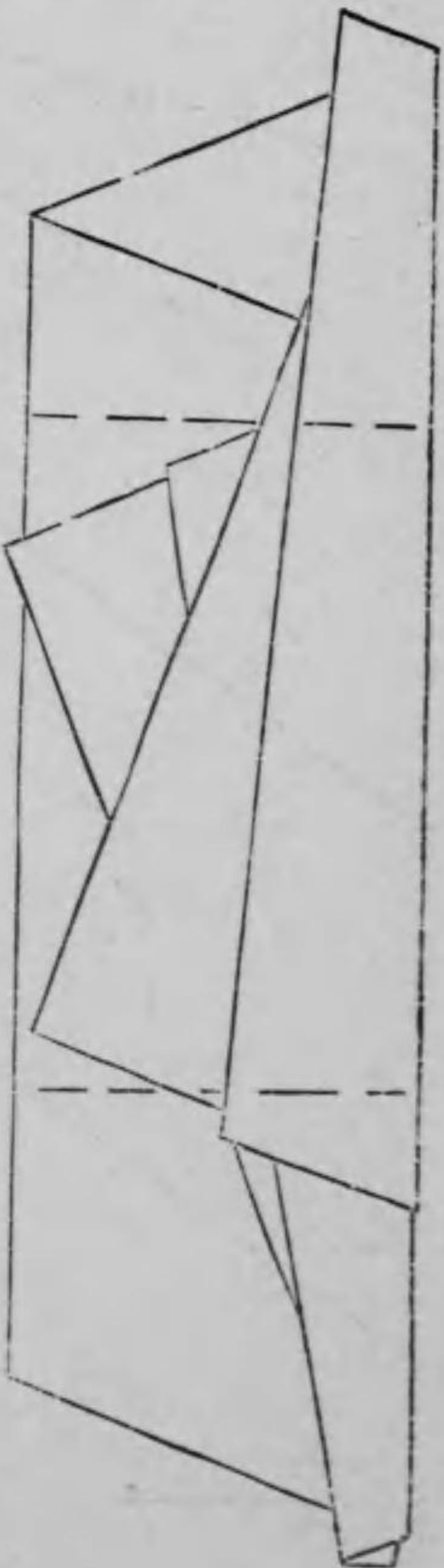
小笠原流折形
 十三 香油香水包 前の花粧水包に同じ、上書あり。
 第一百三十四圖 香油香水づゝみ



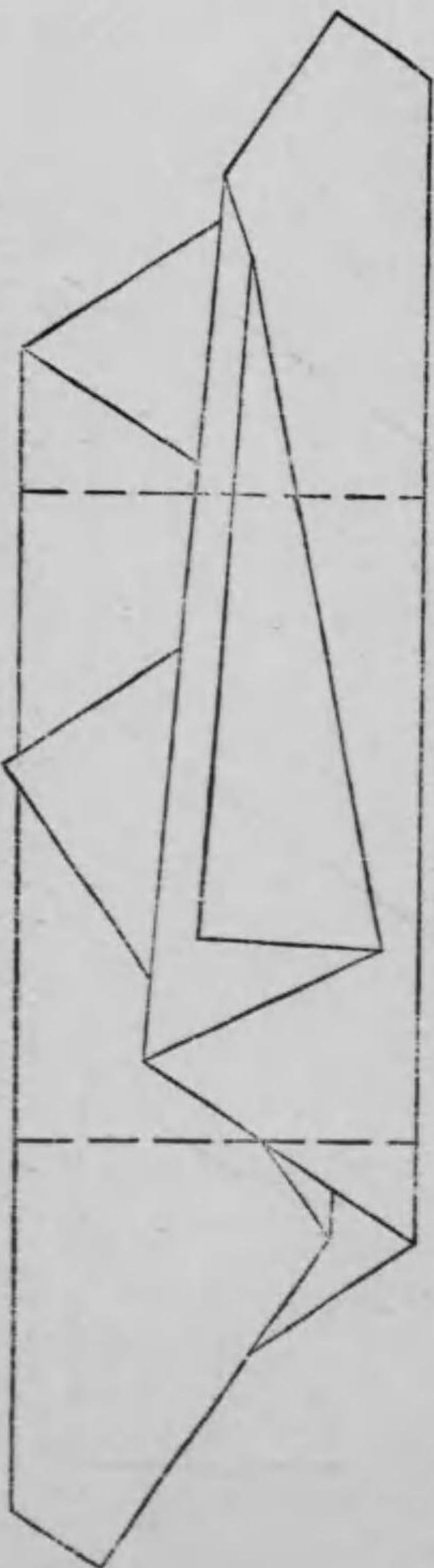
△かたがみ せらぎ



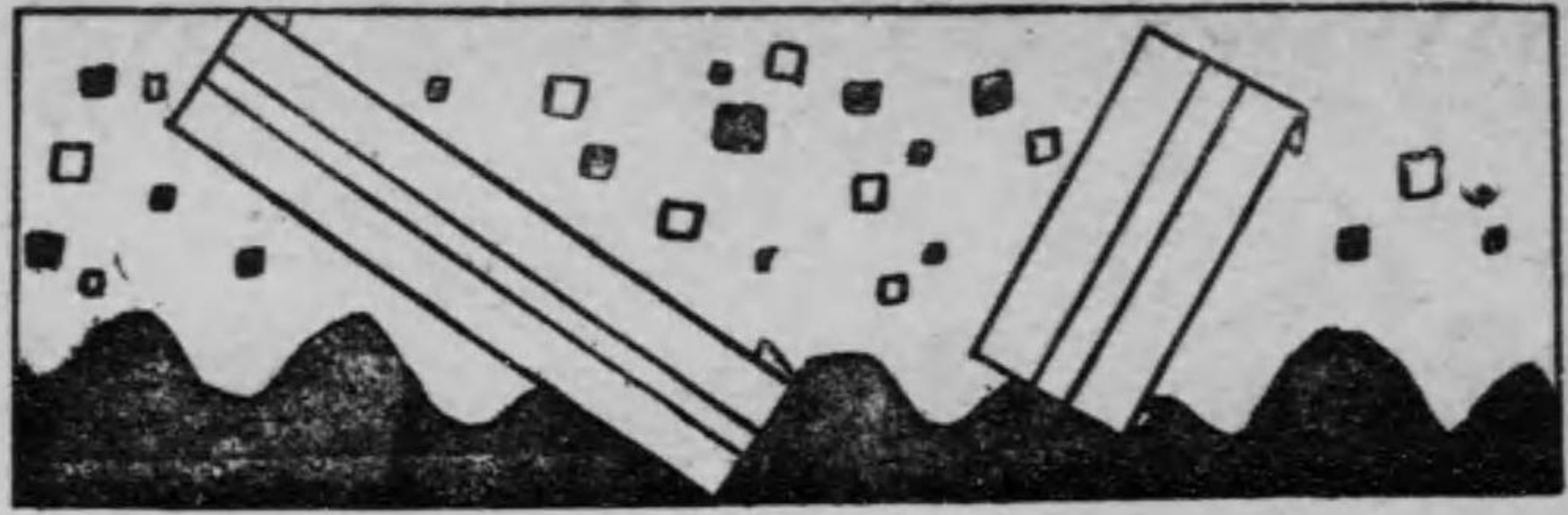
第一百三十五圖 かうゆかうすい包 △をりあがり



十四、櫛包 (甲) 結髪に使ふ三つ櫛とて、解櫛、簾櫛、細櫛の一そろへを包むなり。
 鳥の子紙がさねにて包む、又色紙がさねにても。
 第一百三十六圖 くしづゝみ (甲の形) △をりあがり



第五卷 花粧用折方圖解

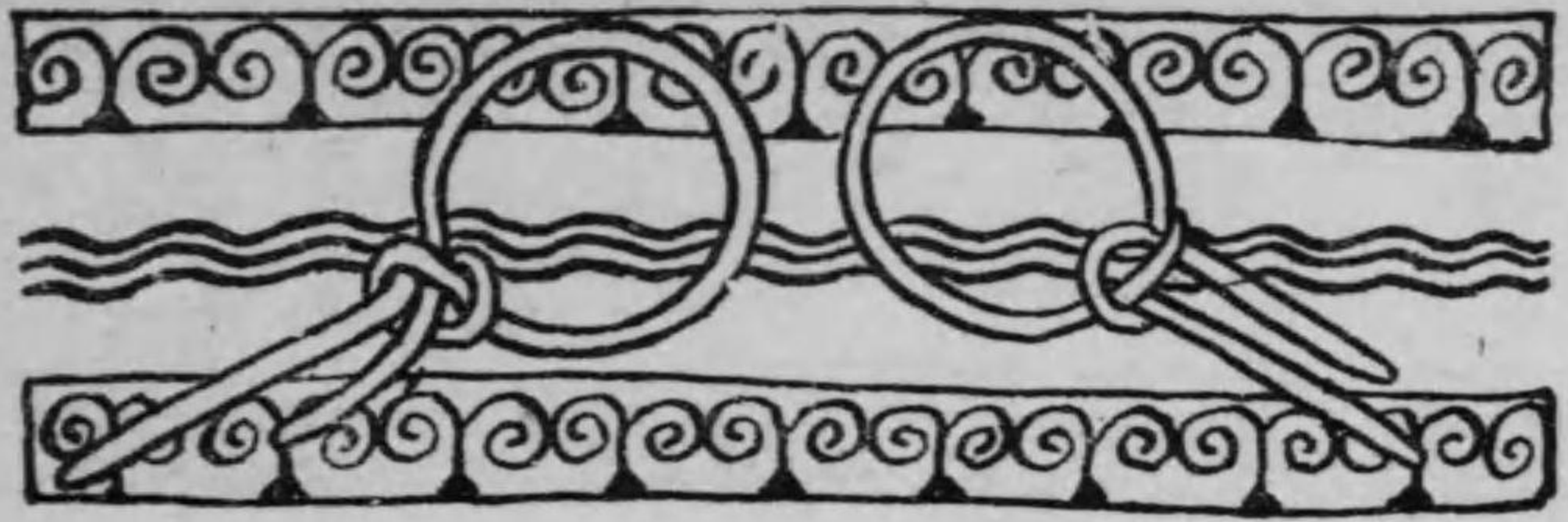


第三百三十
八圖

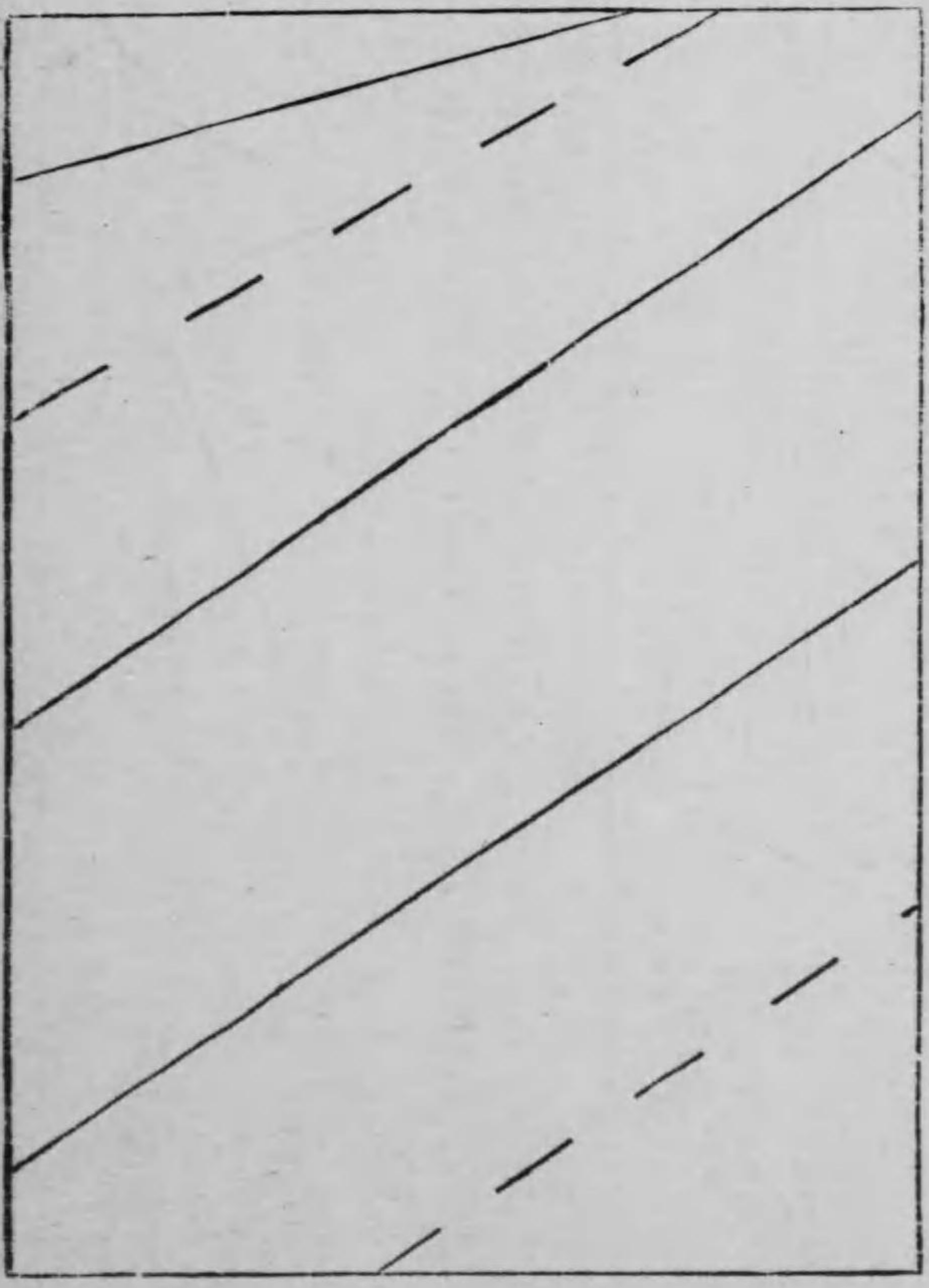
十五、同(乙) には花やかに包むこともあるなり、進物にも同じ。
くしづ
み
△かたが
をりや
う

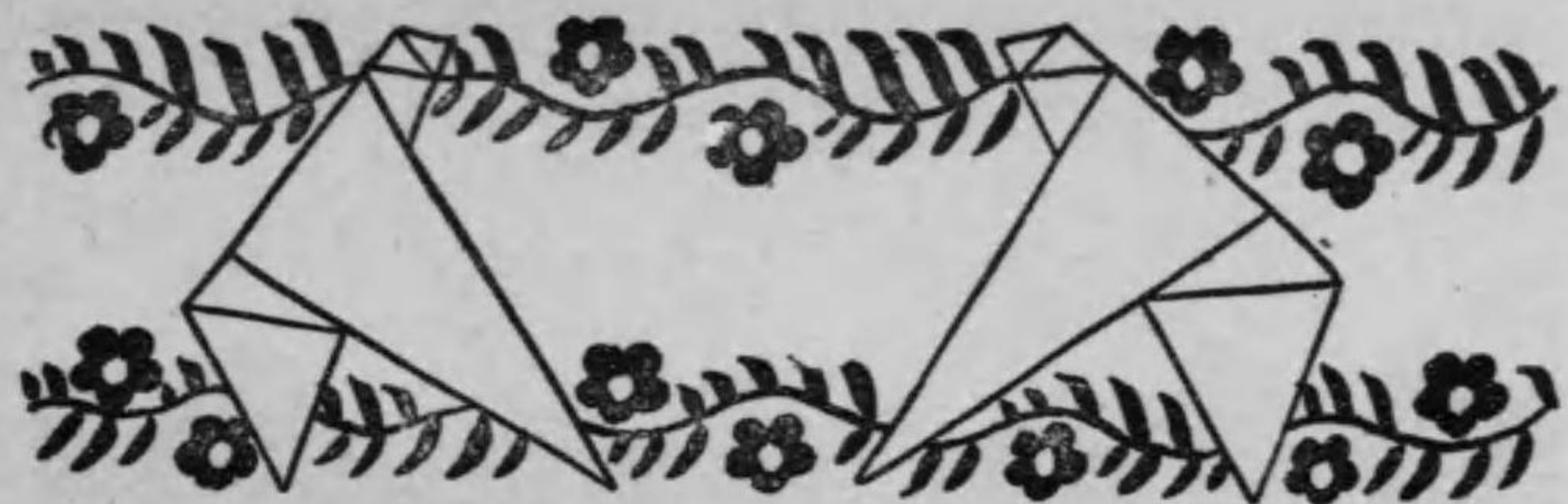


第五卷 花粧用折方圖解



第三百三十七圖 小笠原流折形
くしづみ (甲の形) △かたがみをりやう



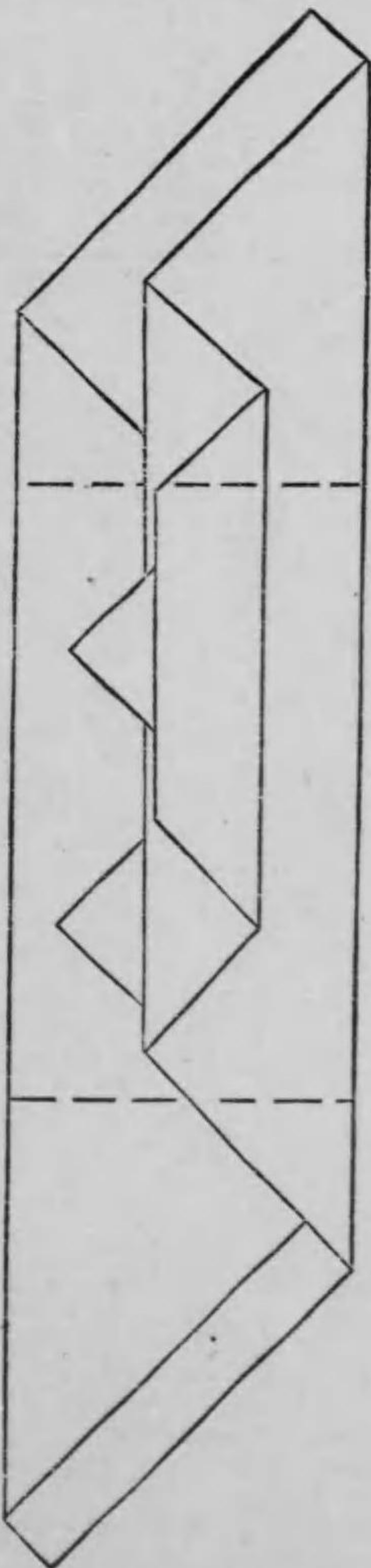


小笠原流折形

第三百三十九圖

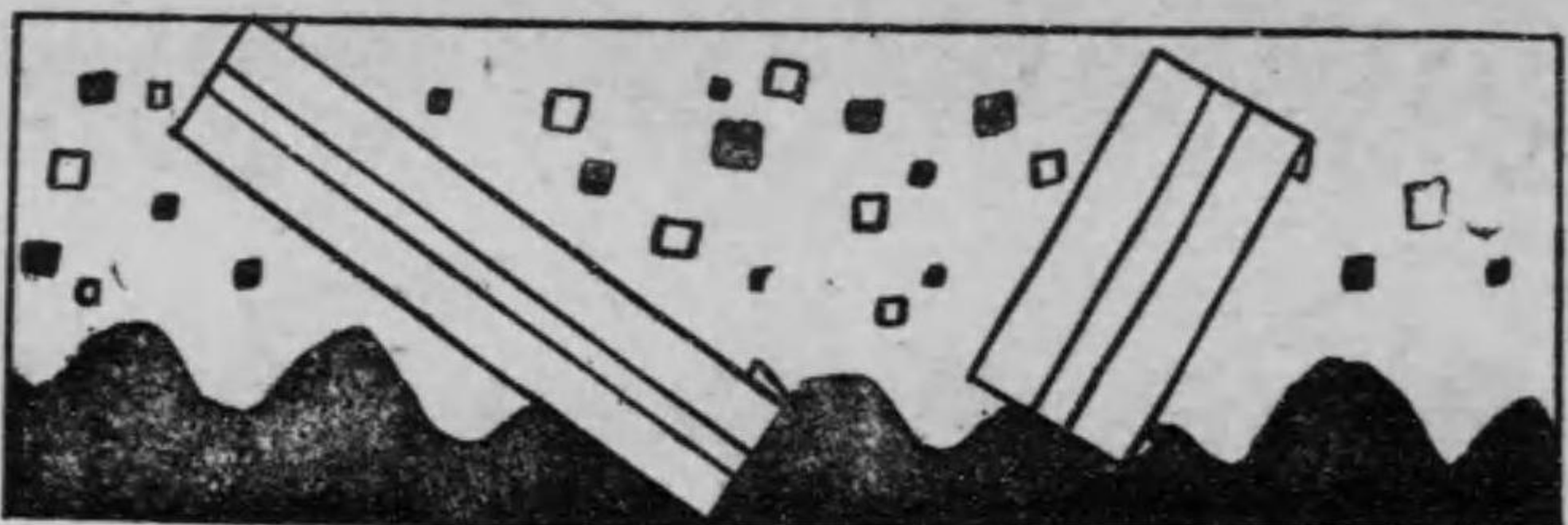
くしづゝみ (乙の形) △をりあがり

〇うへしたのはしを裏へをるべし。



一三三

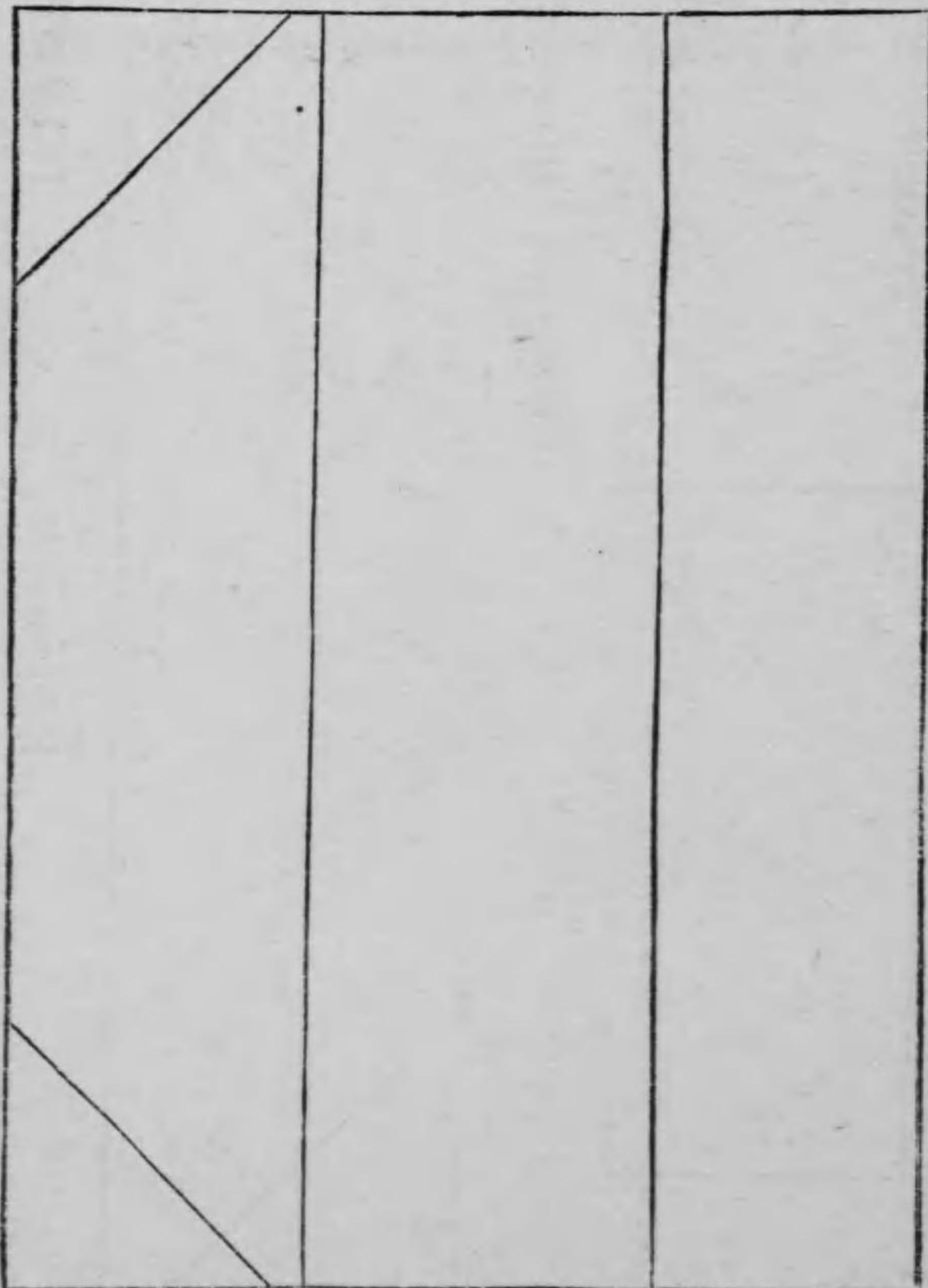
十六、拂の紙 大小 これは大形、小形の二通をいくみとすべし、大は髪を梳る時に
下に敷て髪のおちなど入れ、小は櫛に付きたる垢を入るなり、内色紙表金銀の紙が
さねにてするを上品とす、次々は鳥の子紙、廣奉書紙にて、三枚がさねにもするな
り。



第四百十圖

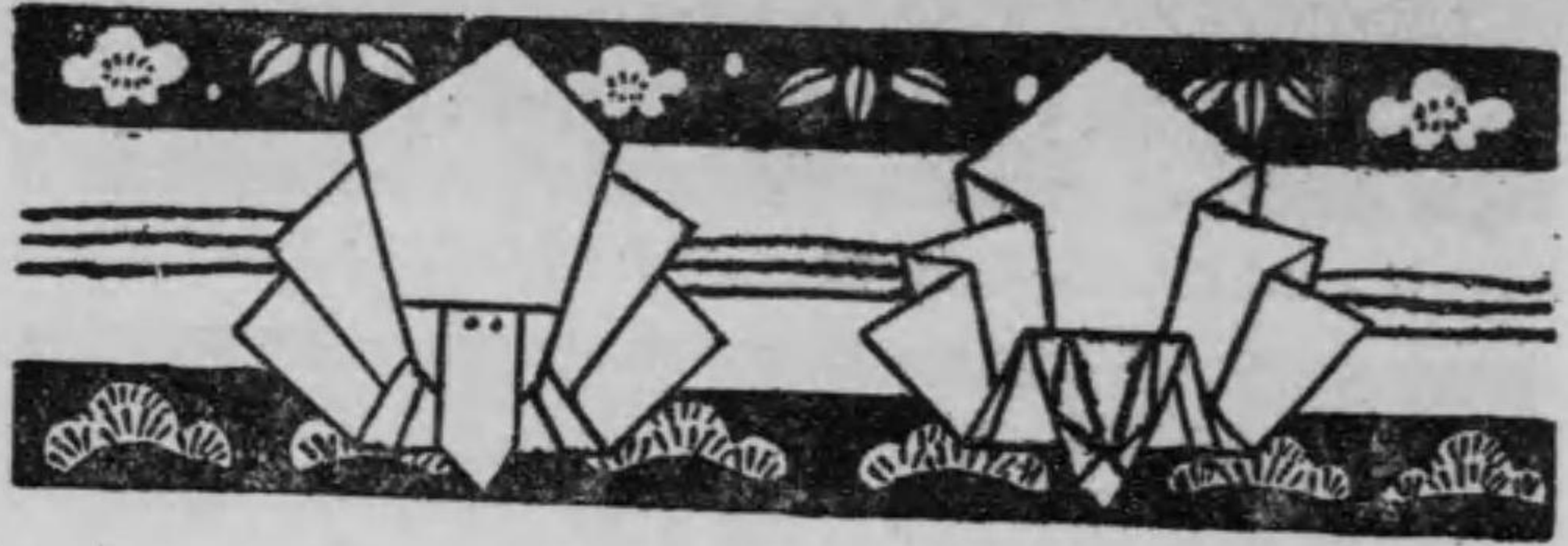
はらひのかみ

△をりやう表

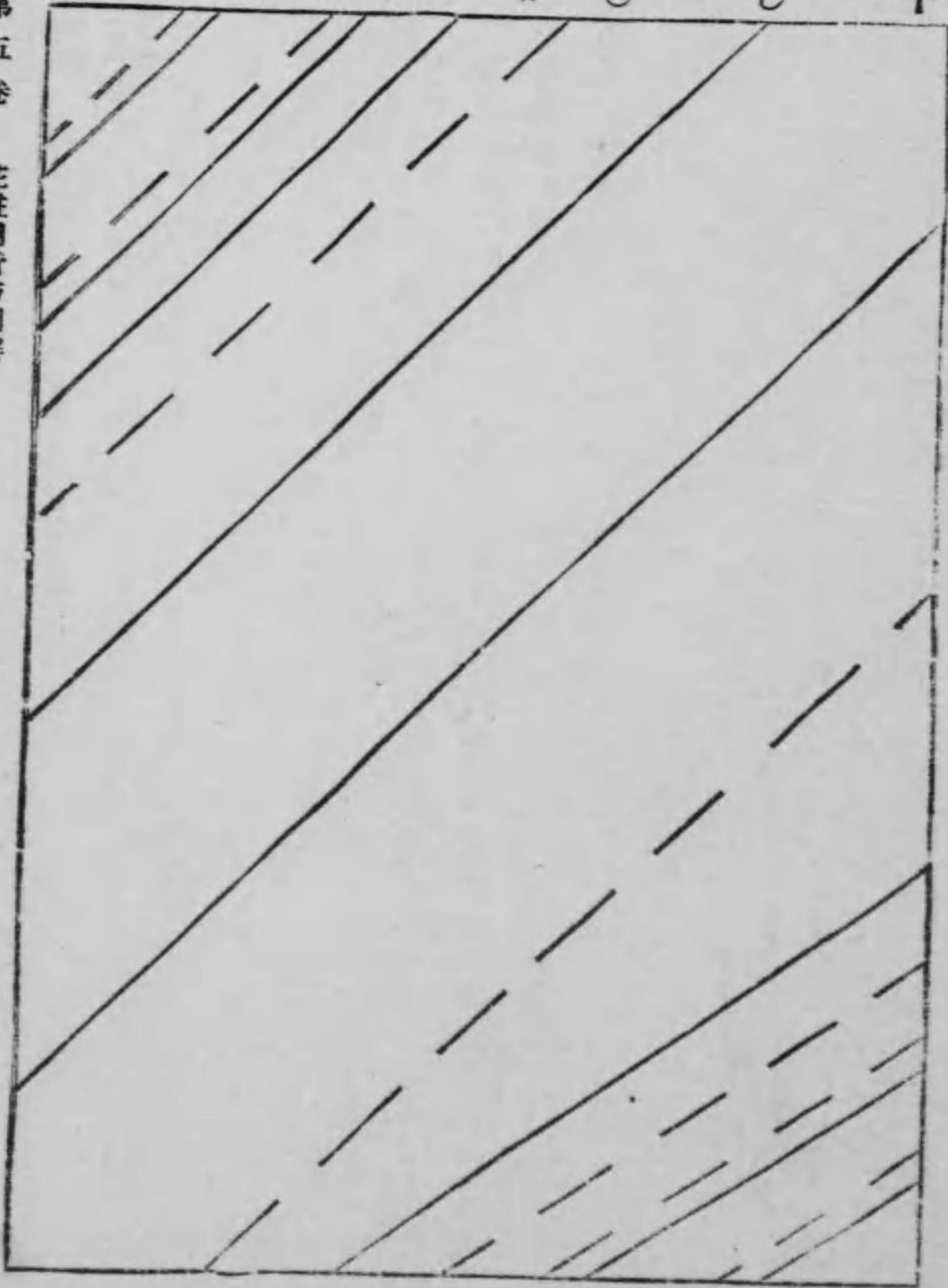


第五卷 花粧用折方圖解

一三三



第五卷 花粧用折方圖解



一三五

第四百四十

三圖

かもじ 包

(甲の形)

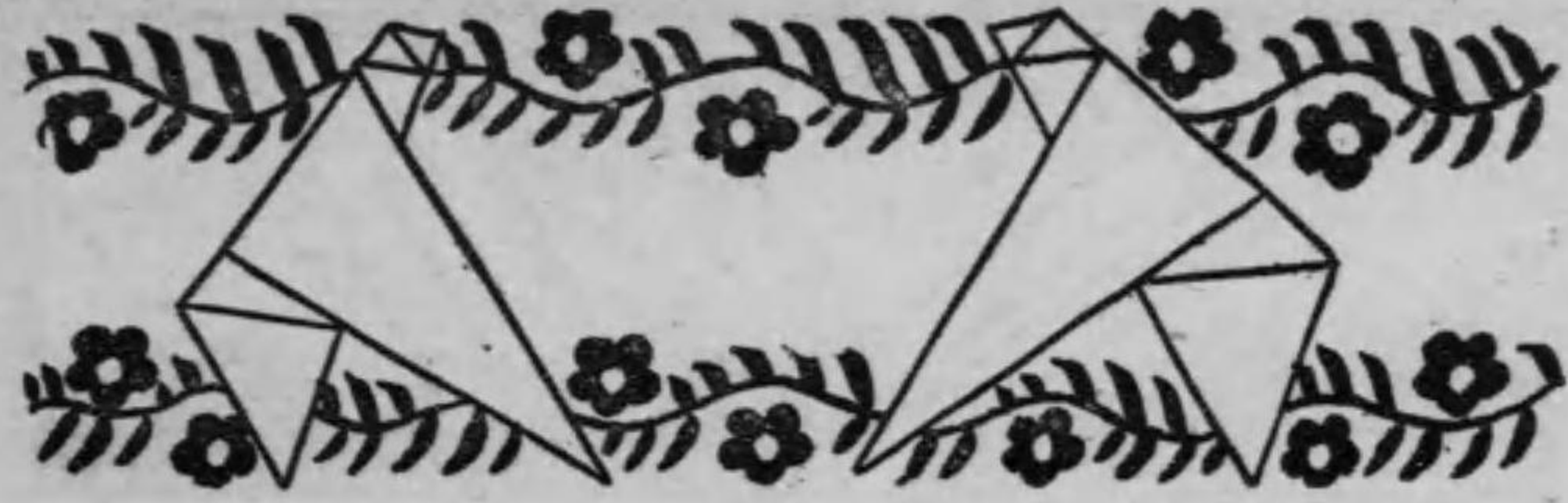
△かたが

み

をりや

う

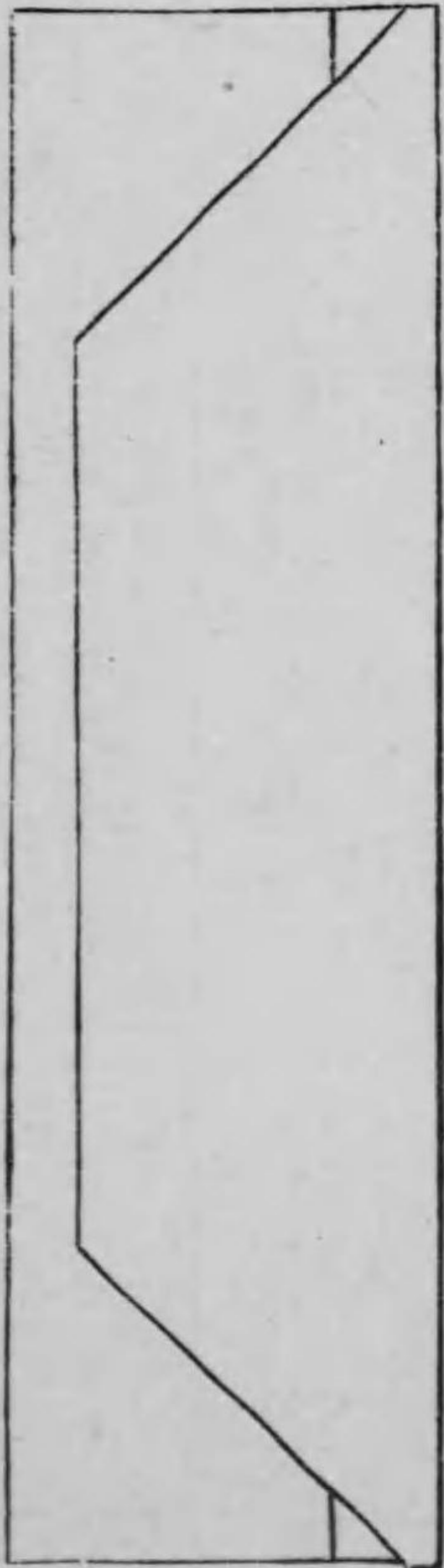
十七 髪文字包 (甲) 進物にする時は、色紙がさねにもする、銀水引、もろわな結
常用には鳥の子がさねなどにて包みおくべし。



小笠原流折形

第四百四十一圖 はらひのかみ △をりやうの二

一三四

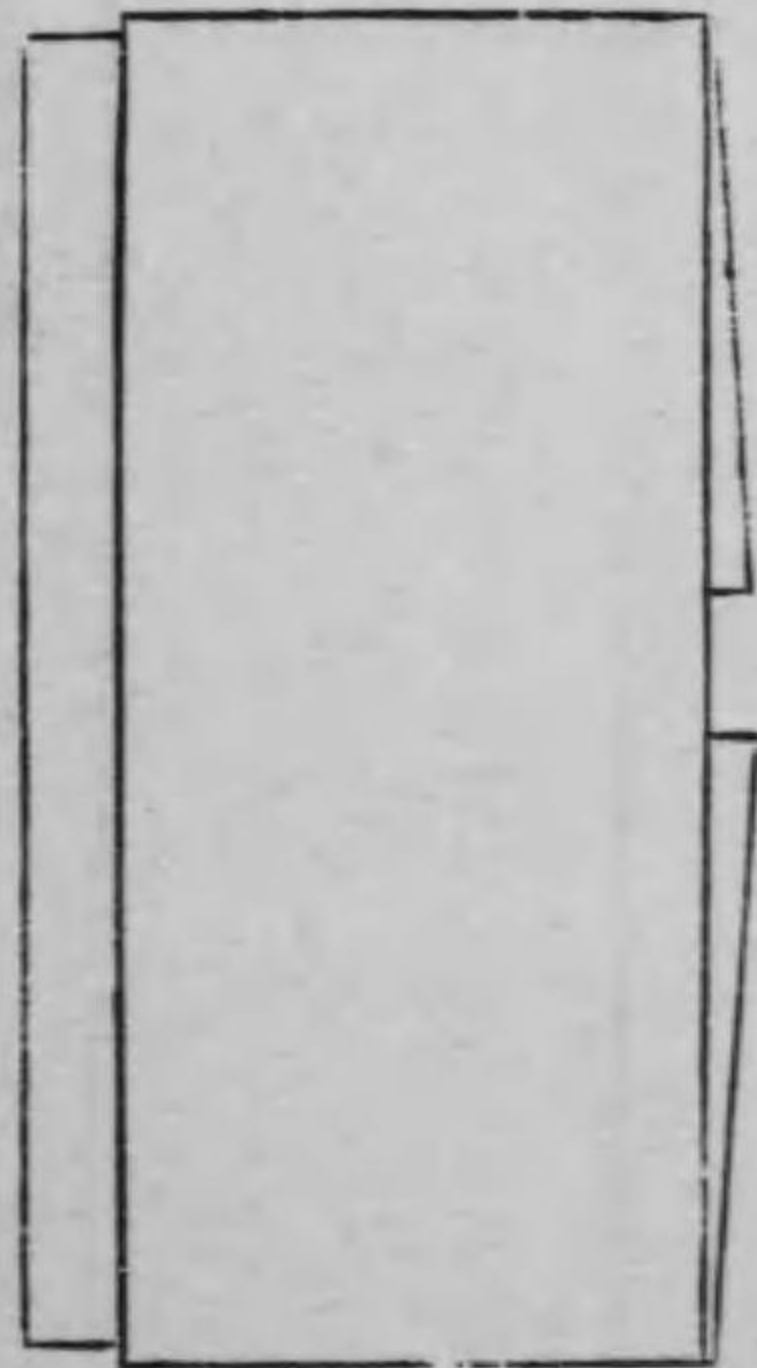


第四百四十二圖 はらひのかみ

○うへした

うらへをる

△をりあがり





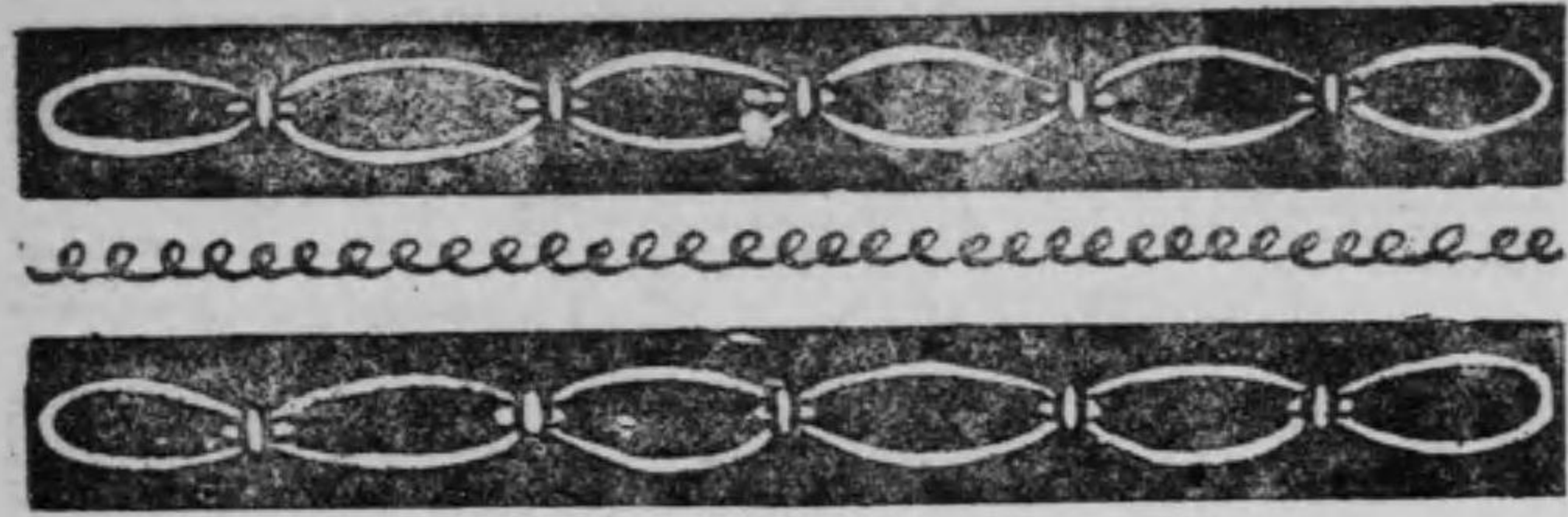
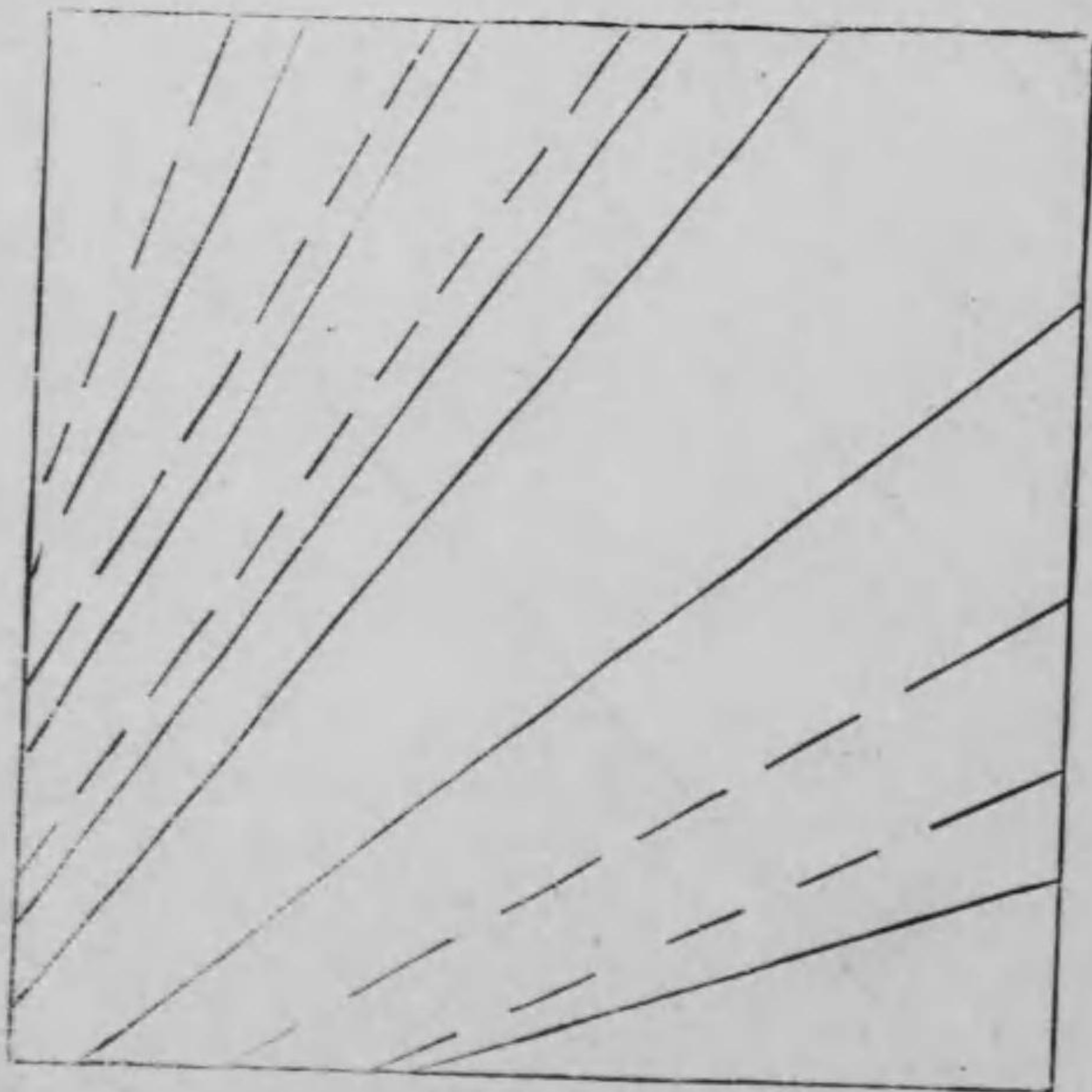
第百四十六圖 かもじ包 (乙の形)

△かたがみ折様

○寸法は

- 中一尺四方
- 小八寸四方

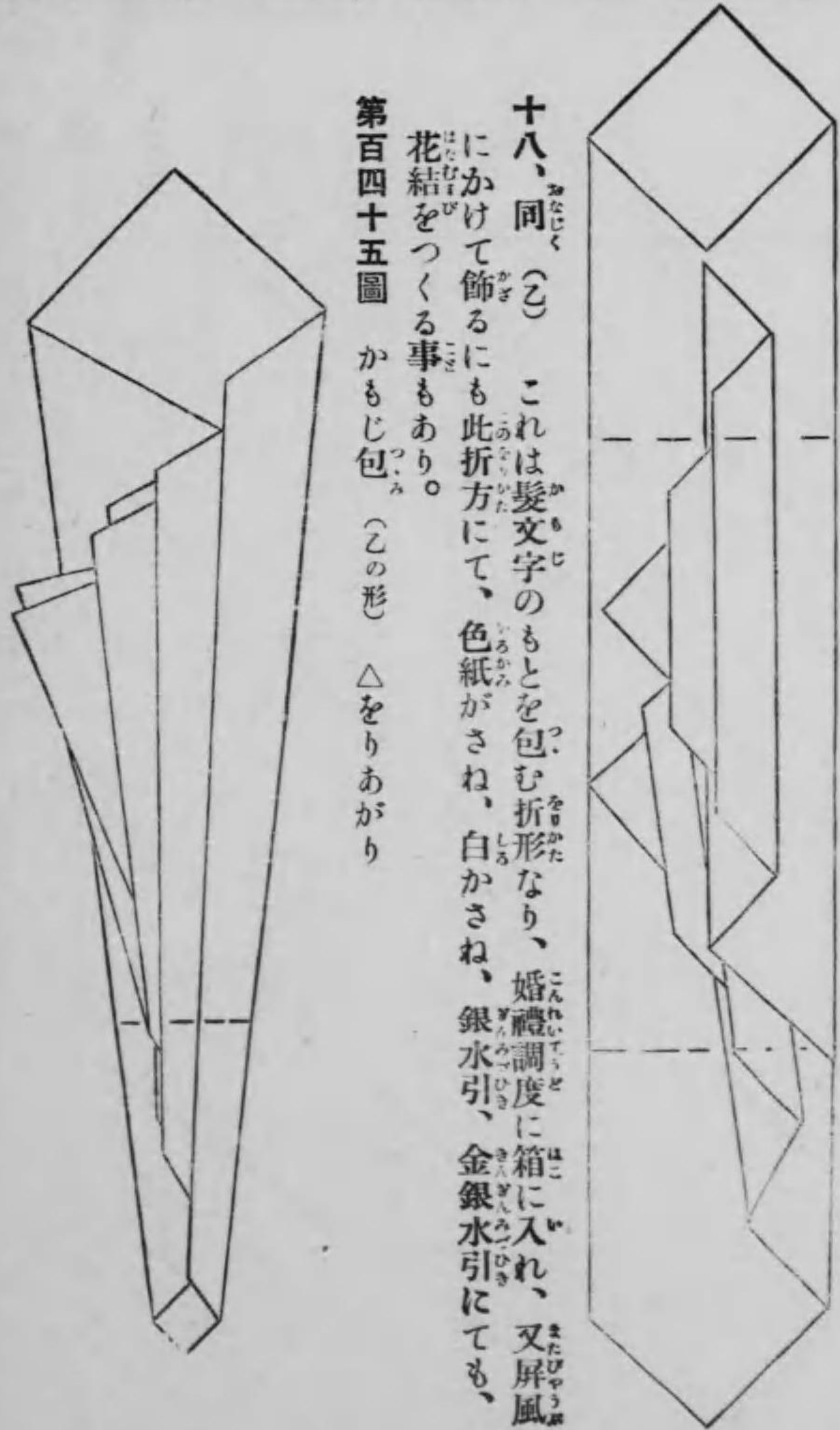
第五卷 花粧用折方圖解

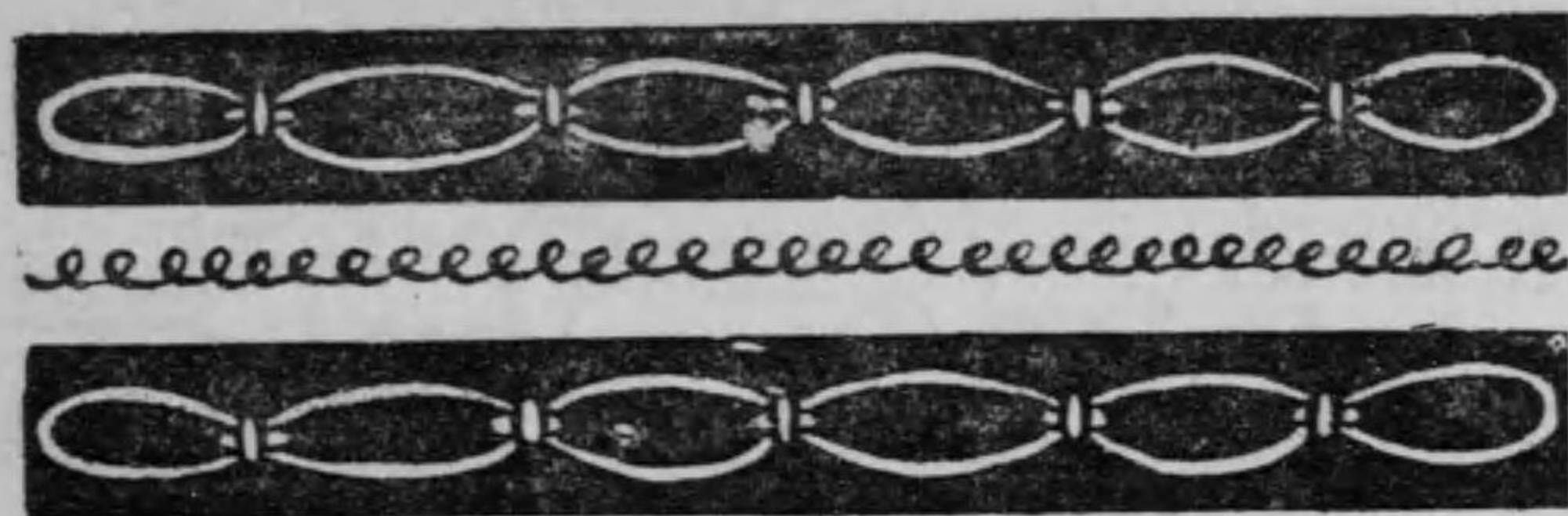
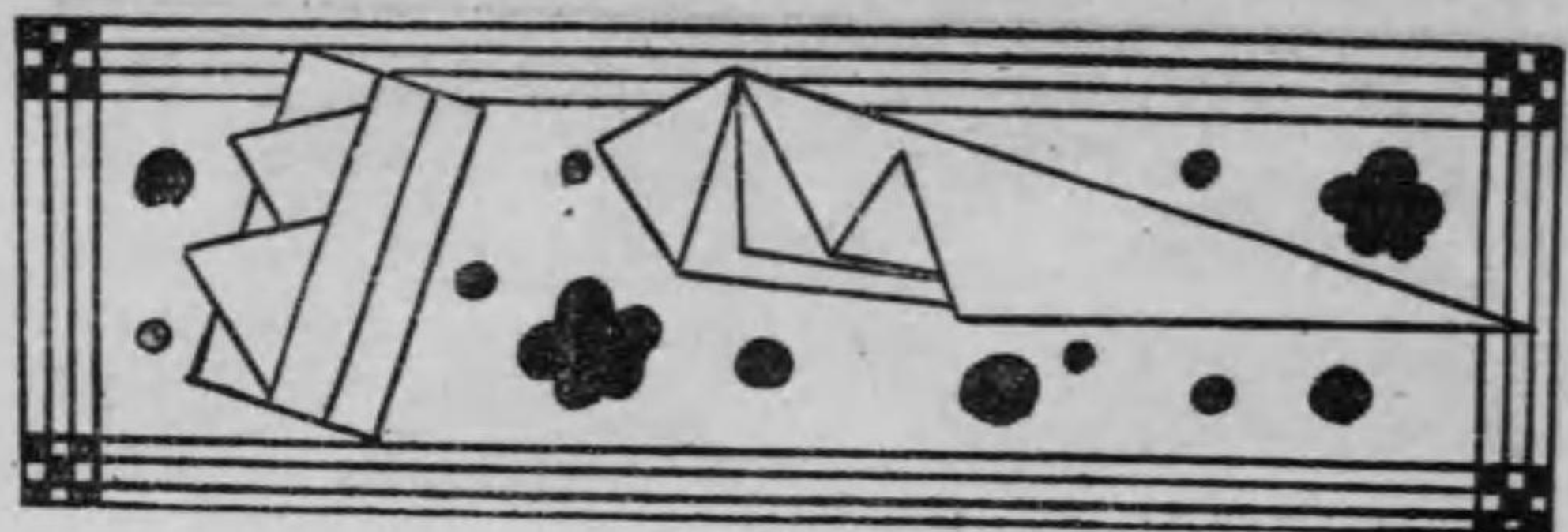


第百四十四圖 かもじ包 (甲の形) △をりあがり

十八、同(乙) これは髪文字のもとを包む折形なり、婚禮調度に箱に入れ、又屏風にかけて飾るにも此折方にて、色紙がさね、白かさね、銀水引、金銀水引にても、花結をつくる事もあり。

第百四十五圖 かもじ包 (乙の形) △をりあがり





小笠原流折形
 一九、水入包 髪上る時に髪水を入る、器物を包む折形なり、婚禮調度の内に入る、時に、紙水引にて飾るなり。

第四百十

七圖

みづい

れつゝ

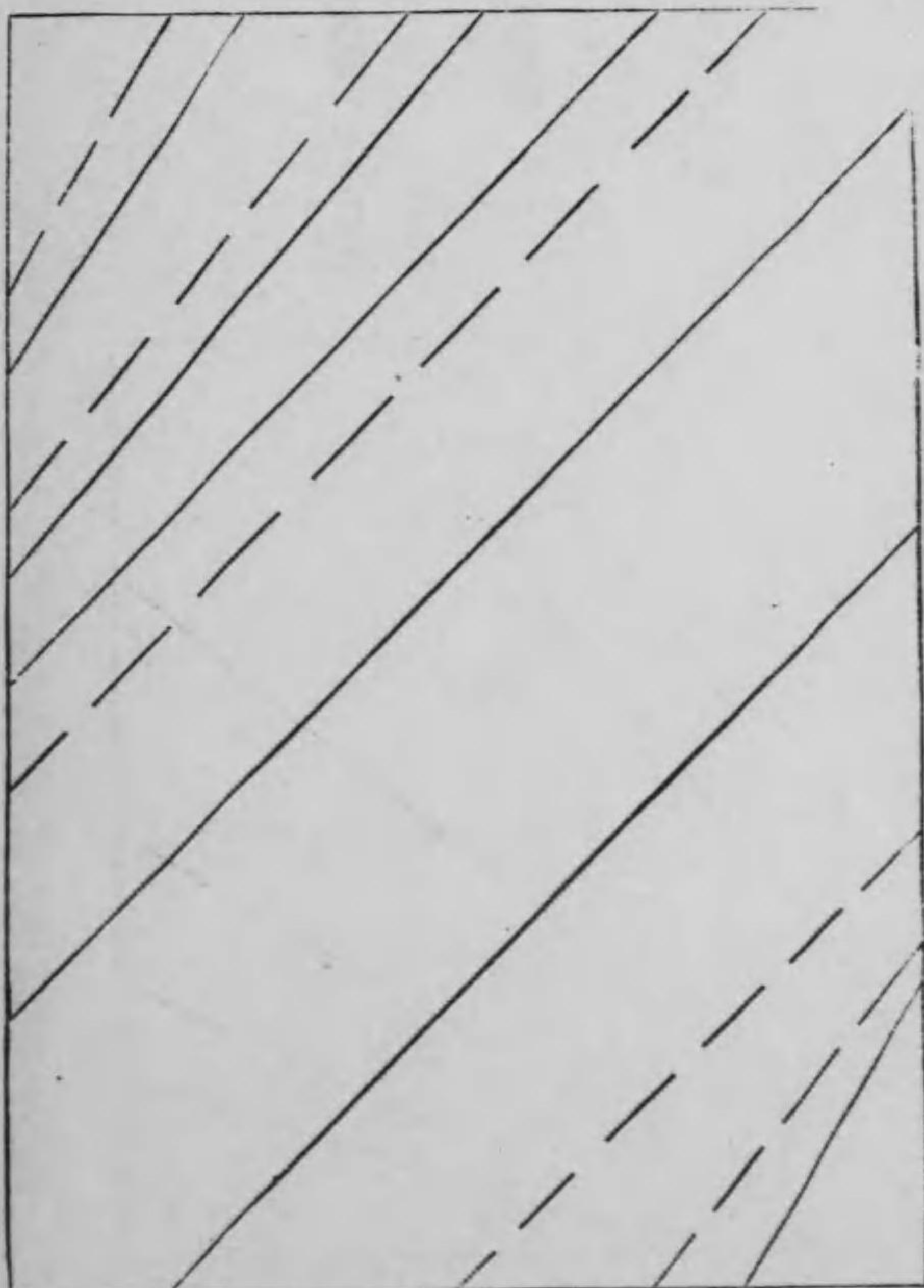
み

△かたが

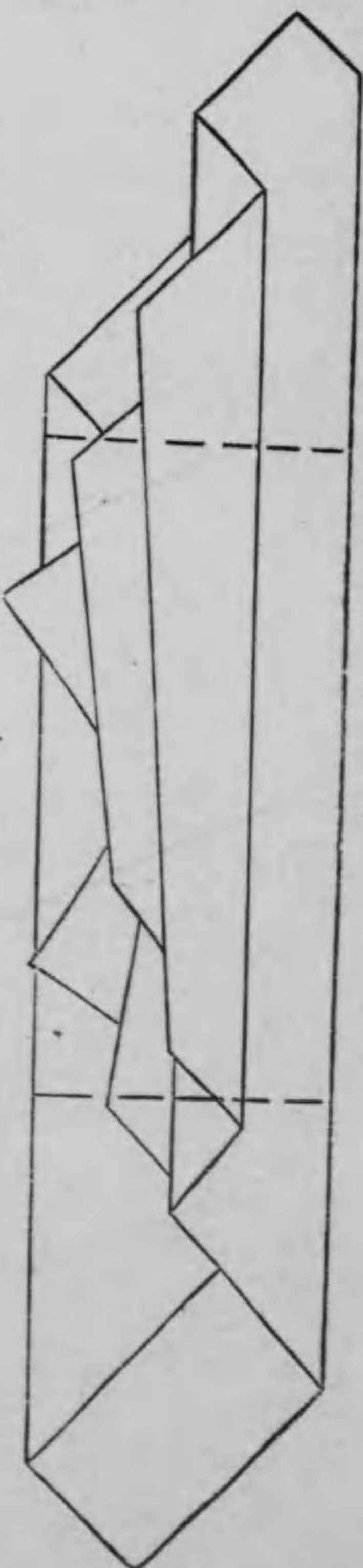
み

をりや

う



第四百十八圖 みづいれつゝみ △折あがり



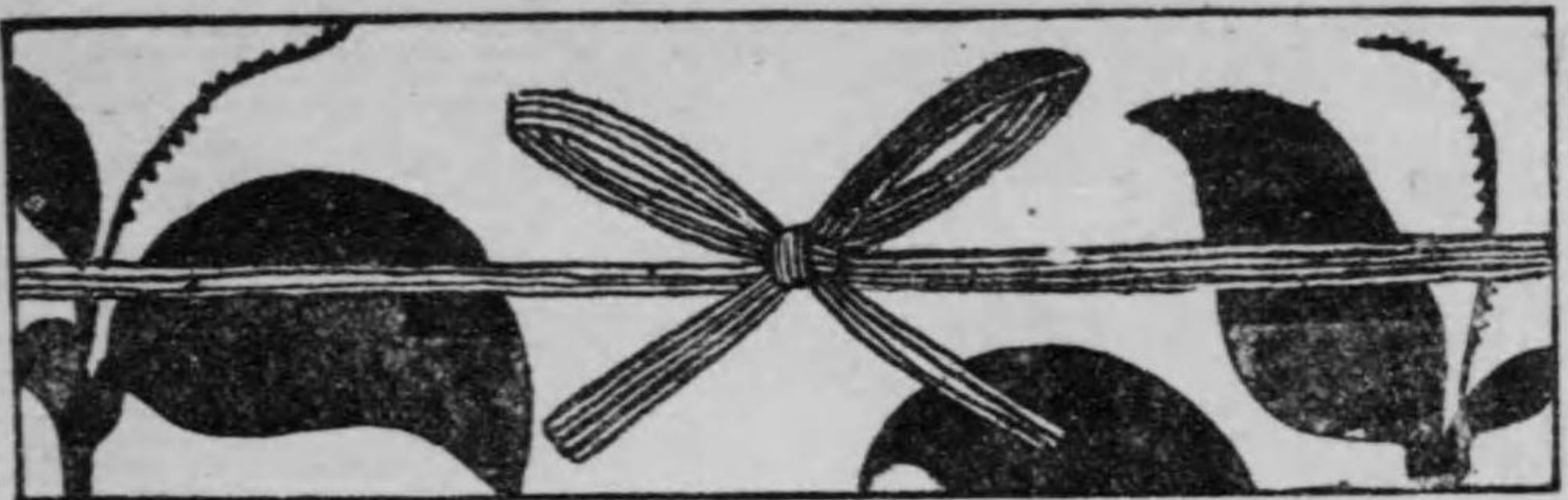
二十、元結包 白もとゆひ色もとゆひ繪元結などを包む折形なり、紙は色紙がさね、金赤銀赤水引、細結、もろわな、上品には檀紙がさねに銀水引花結に飾るべし。

第四百十九圖 もとゆひ

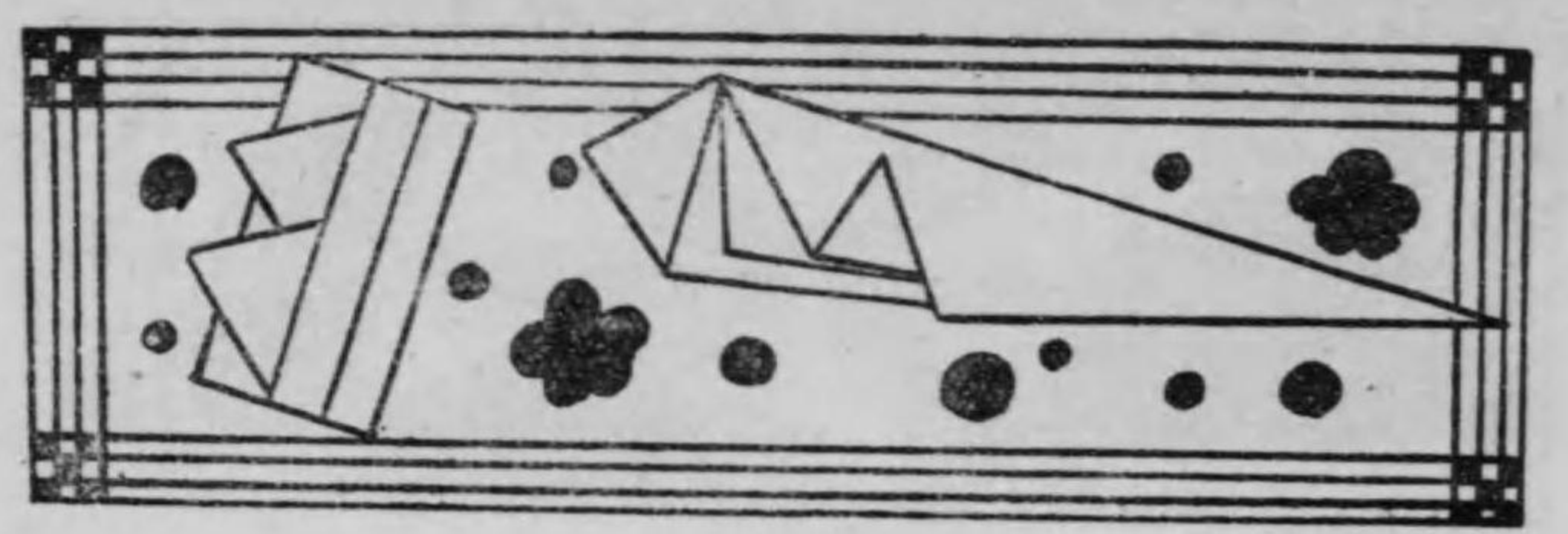
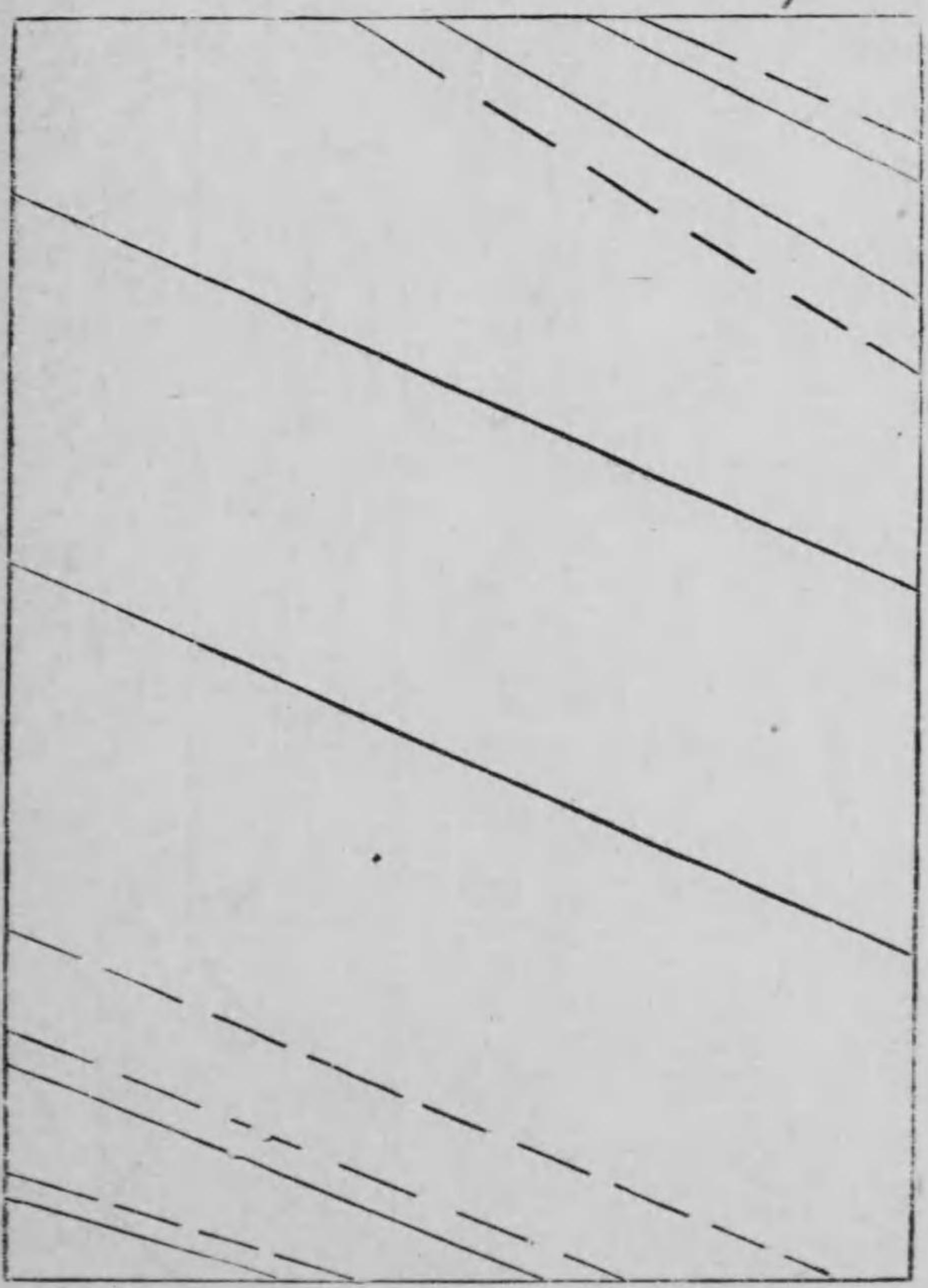
包

△かたがみ をりあがり



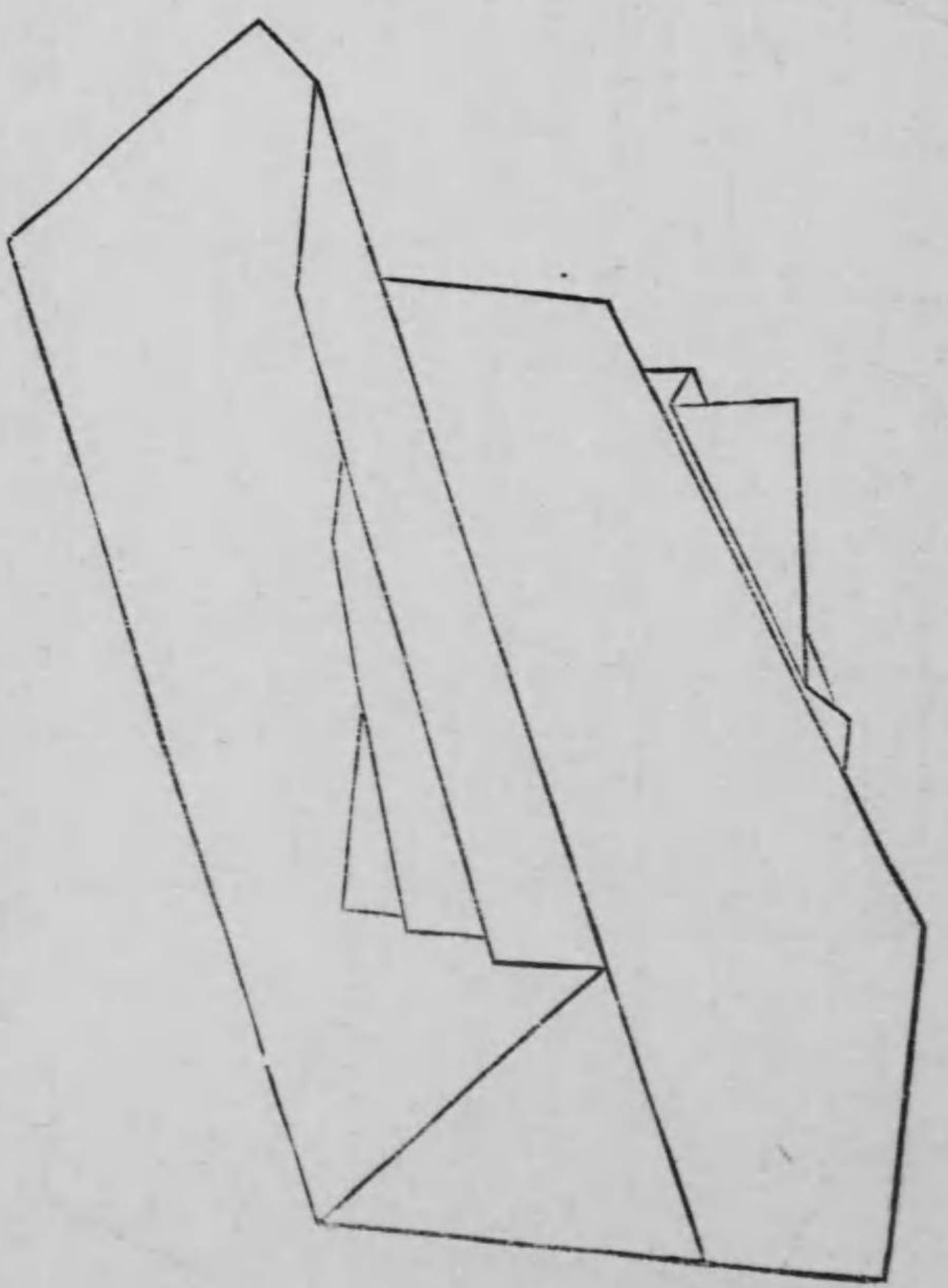


小笠原流折形
 第百五十圖 もとゆひ包^{つづ}をりやうの一



第百五十一圖 もとゆひ包^{つづ}をりやうの二

第五卷 花粧用折方圖解





小笠原流折形

第百五十二圖 もとゆひ包、△折やうの三 ○上下をうらへをる。

一四二



二十一、組紐絹紐包、これも元結の類なり、平打に組たる紐、丸打に組たる紐。飾りに結ぶ絹紐などを包む折形なり、紙水引は前の元結に同じ。

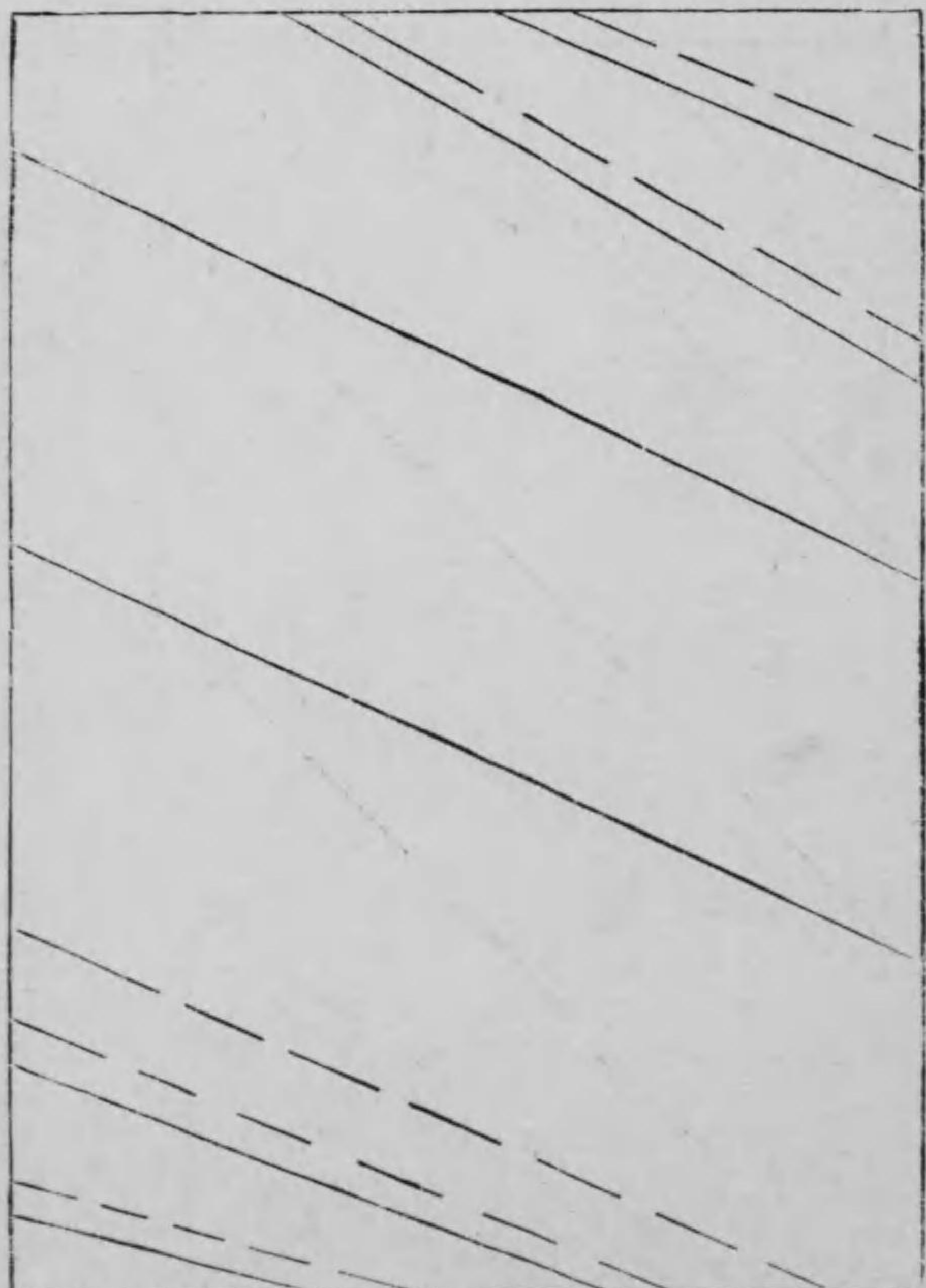
第百五十三圖 くみひも、きぬひも包。○上下をうらへをる。



第百五十四圖 くみひも、きぬひも包。

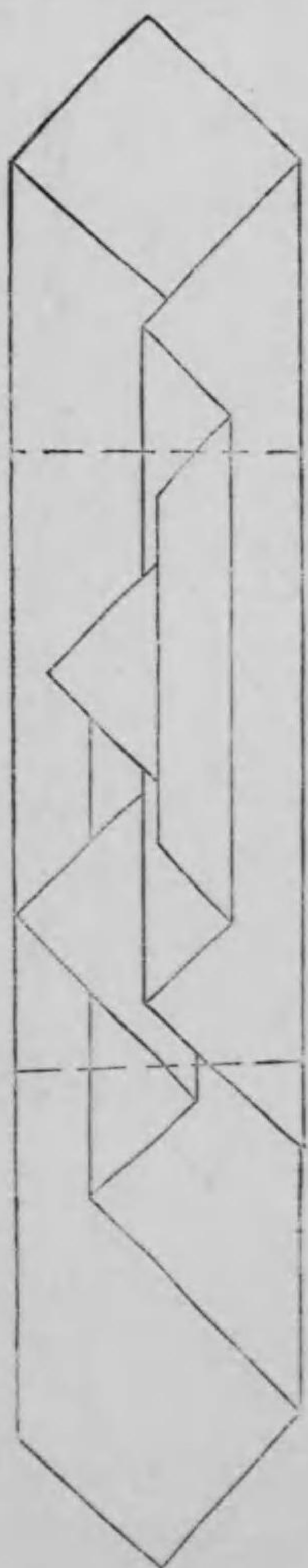
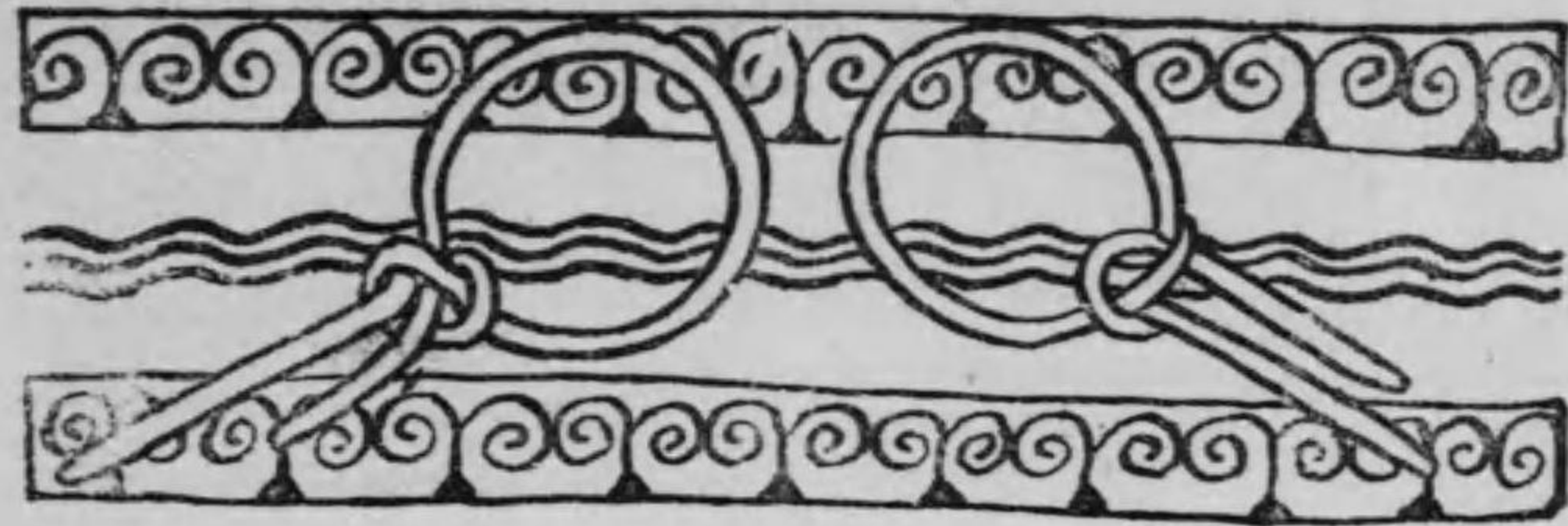


第五卷 花紐用折方圖解



一四三

△かたがみのせりやう

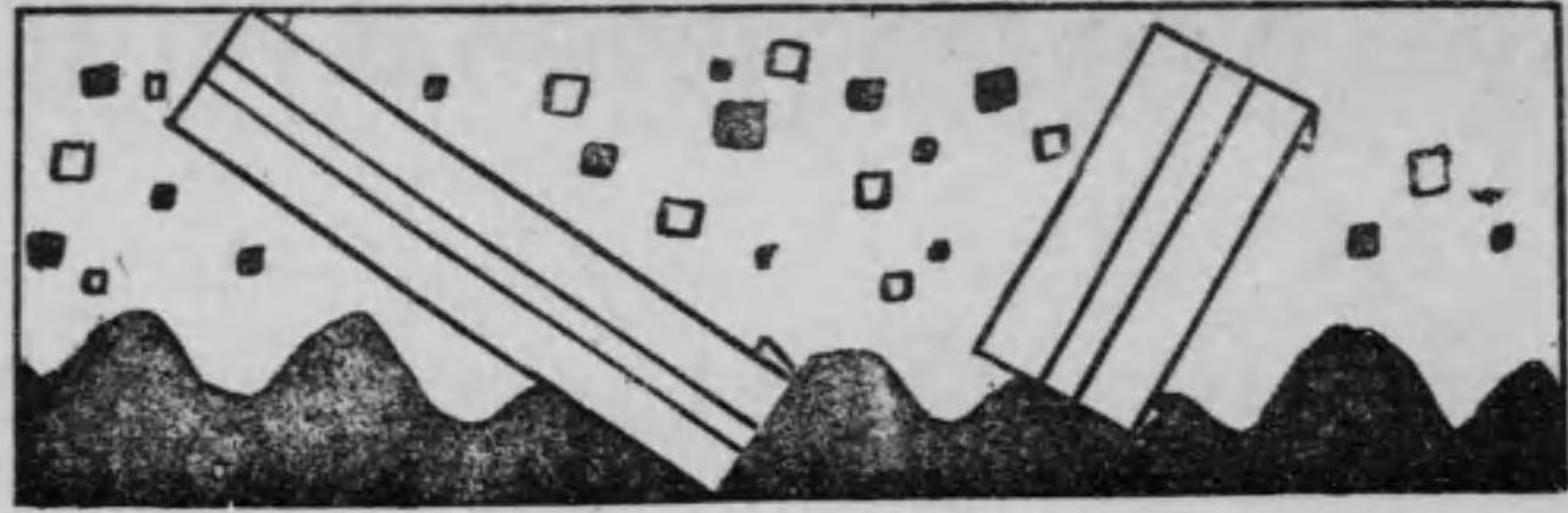


二十三 童子包 かねわかしつみ これは鐵漿わかしなり、此はかに「かねつぎ大中小」をも包む折形なり、紙は右にならふべし、上書あり。
 第百五十七圖 かねわかし包 つみ △をりあがり

第百五十六圖 わたしがね包 つみ △をりあがり



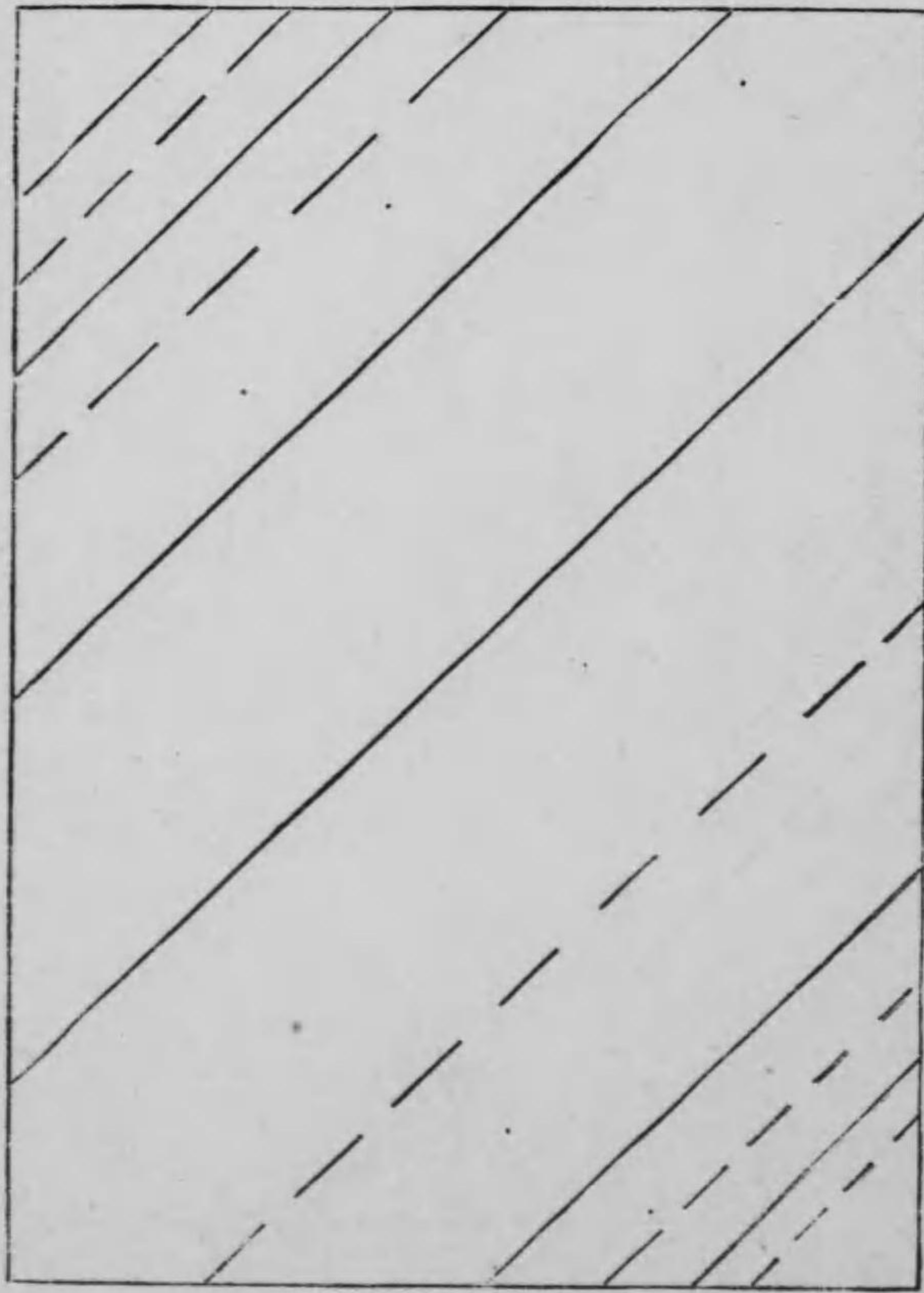
小笠原流折形
 一四四
 二十二、渡金包 わたしがねつみ 齒黒めに耳だらひに渡す金物なり、下包なし、上書あるべし、紙水引は、口紅包に同じ、
 第百五十五圖 わたしがね包 つみ △かたがみ折様。



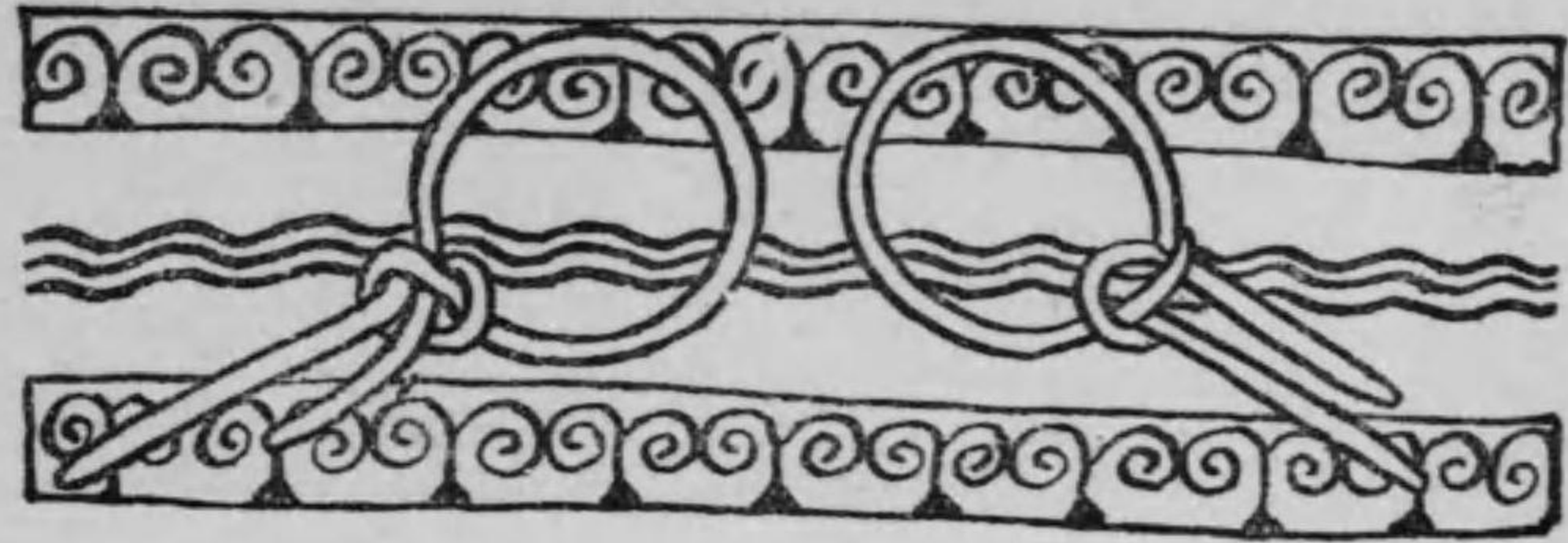
第九圖
 かねふ
 て包
 △かたが
 み
 をりや
 う

第百五十

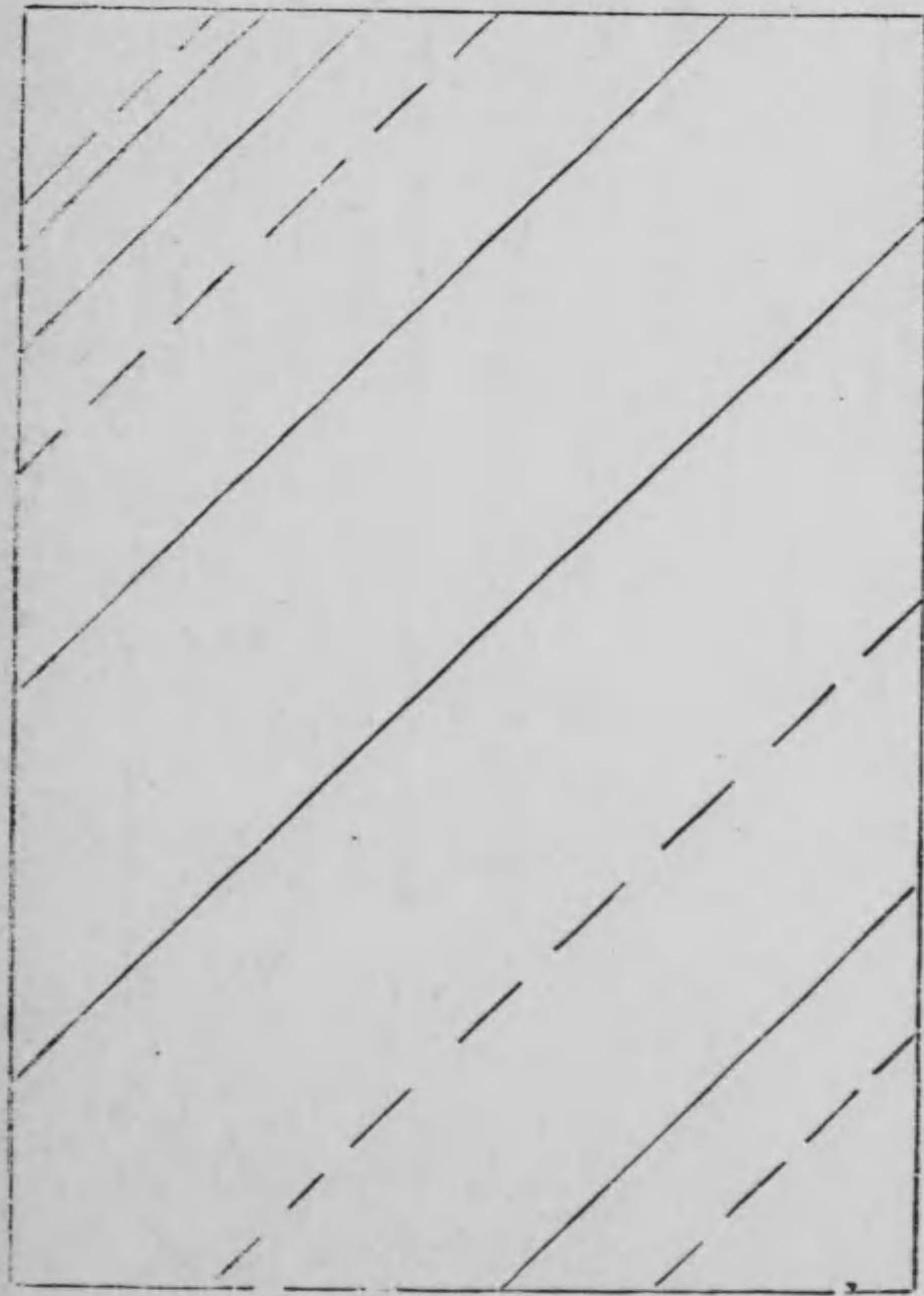
二十四 鐵漿筆包 三鳥揃として、雉子つる鴛鴦の羽にてこしらへたる筆を本式につかふ、包方一つに入るゝなり、略にも何の羽にても此包方をつかひてよし、かね筆とは齒をそむる時につかふ筆のことなり、

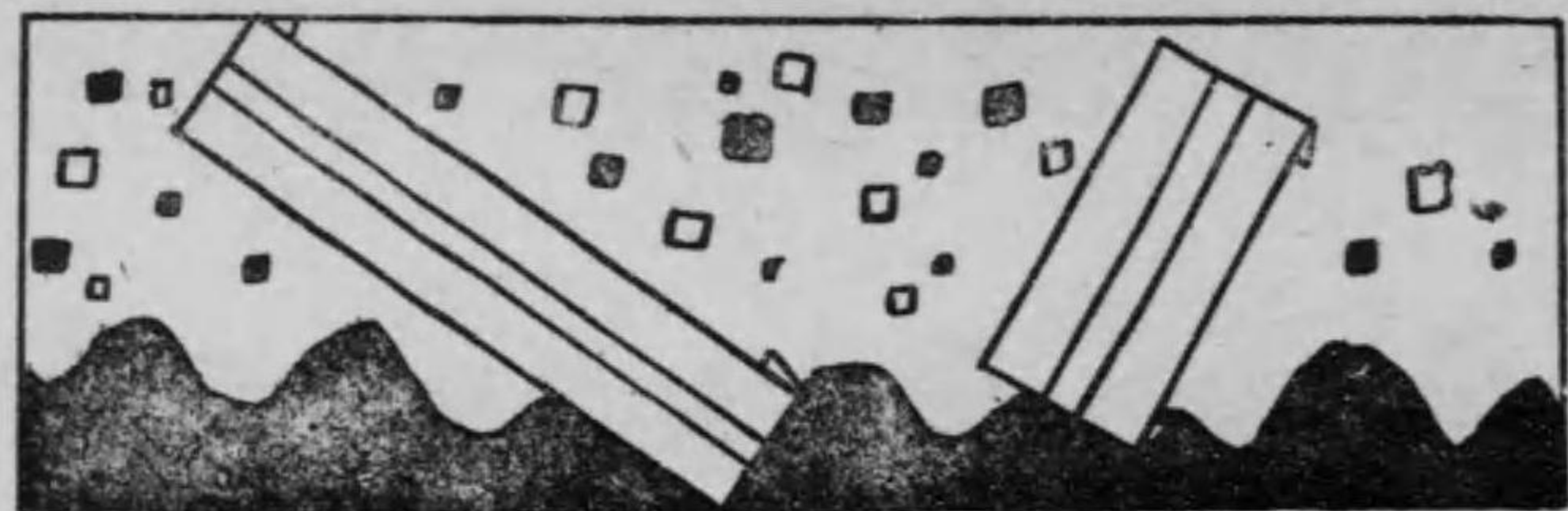


第五卷 花粧用折方圖解

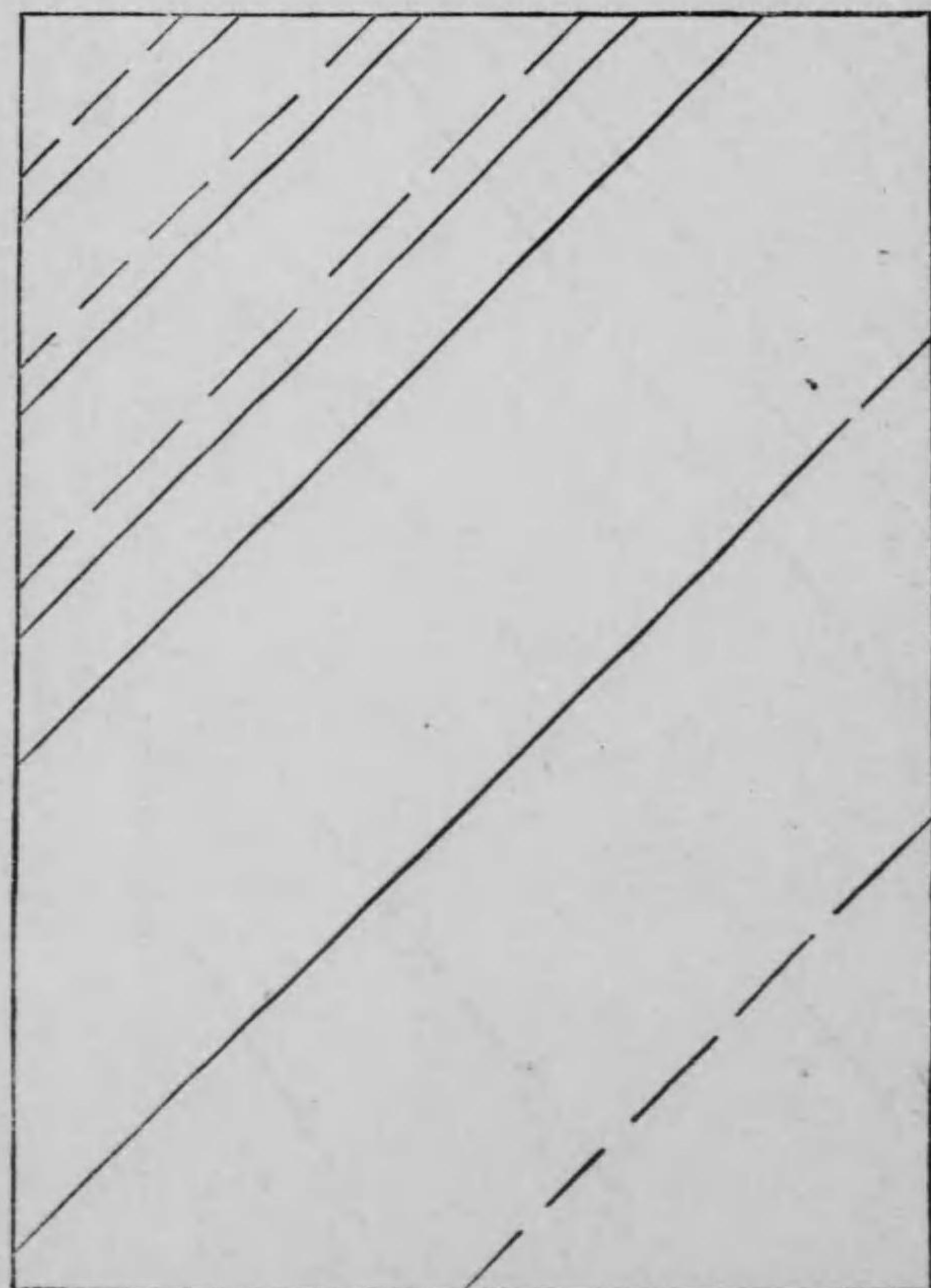


小笠原流折形
 第百五十八圖 かねわかし包 △かたがみ をりやう





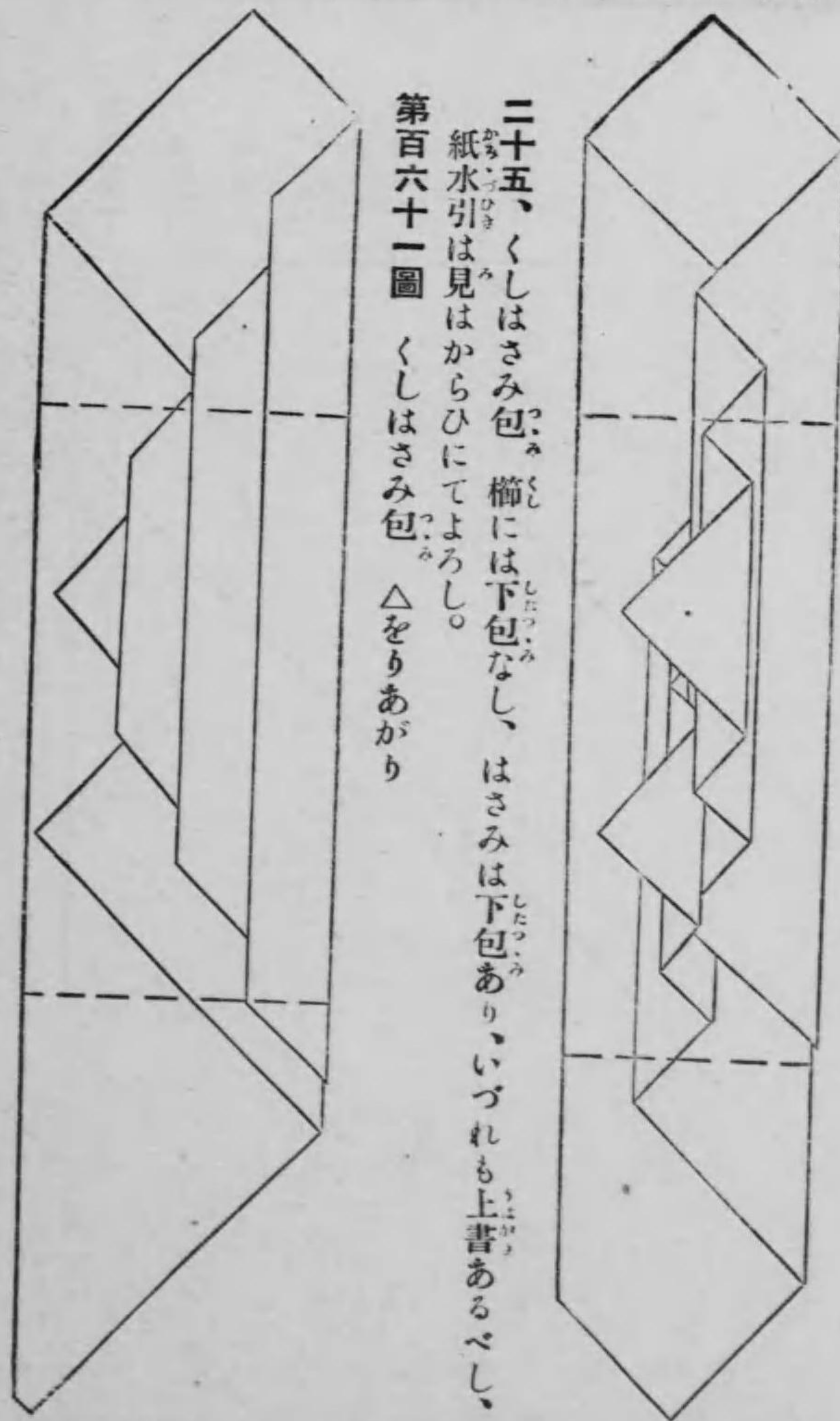
第五卷 花粧用折方圖解



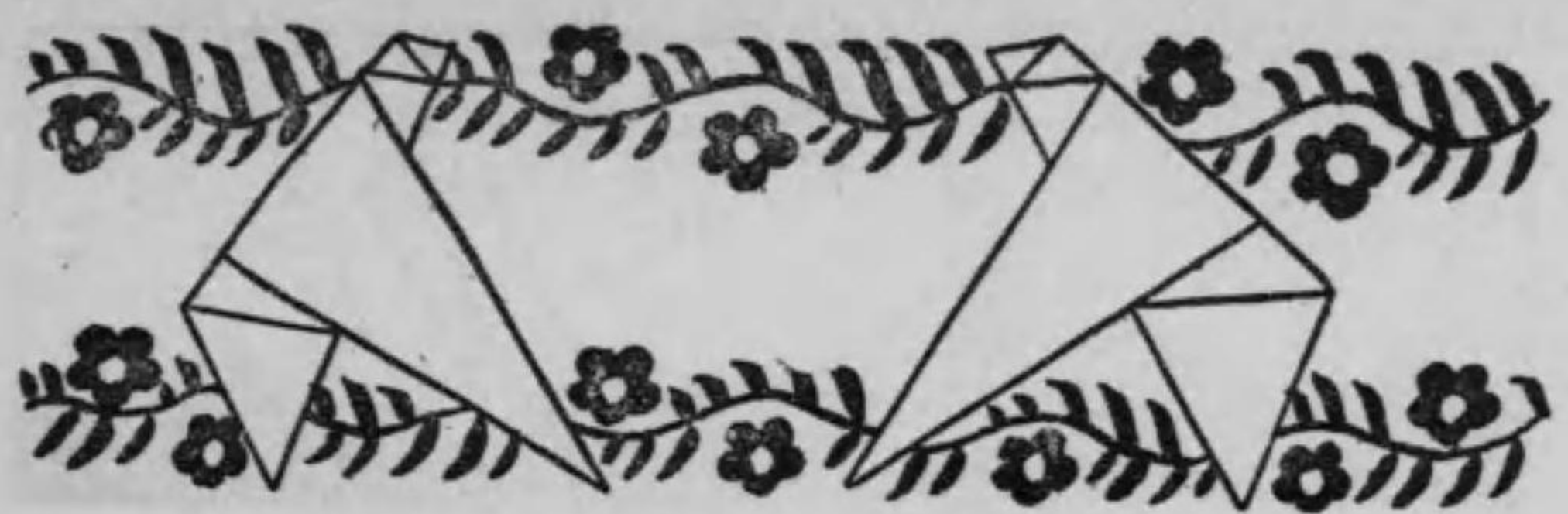
第百六十二圖 くしはさみ包 △かたがみ をりやう



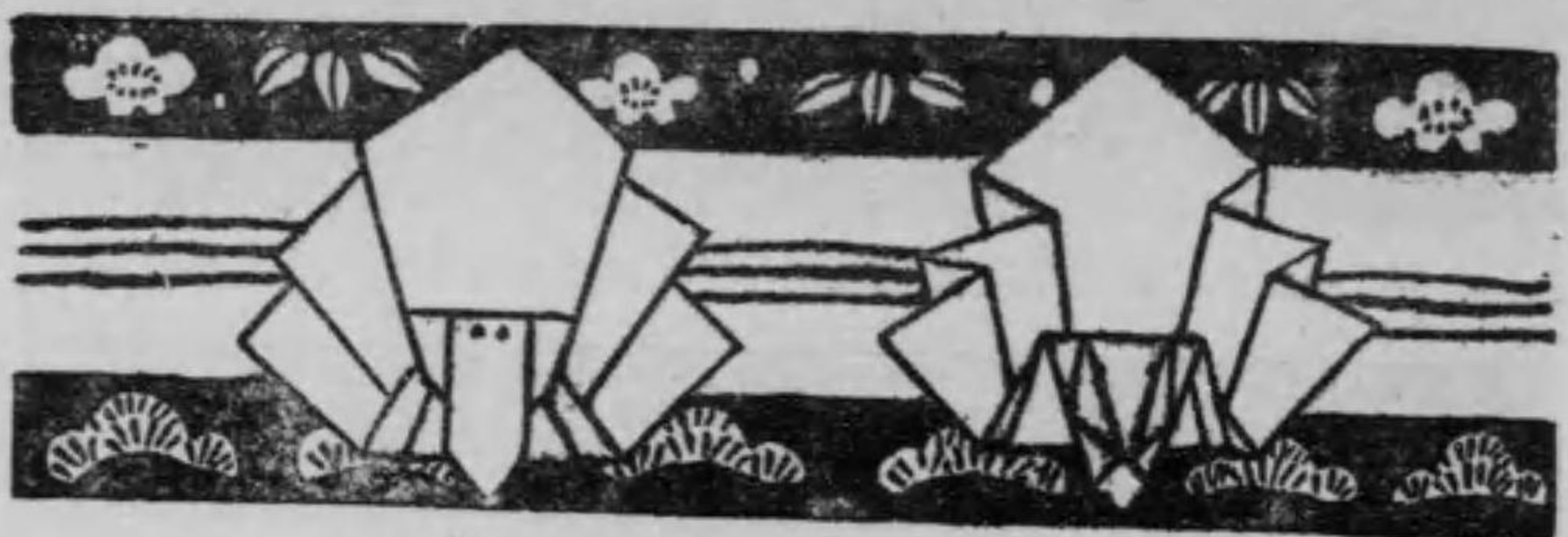
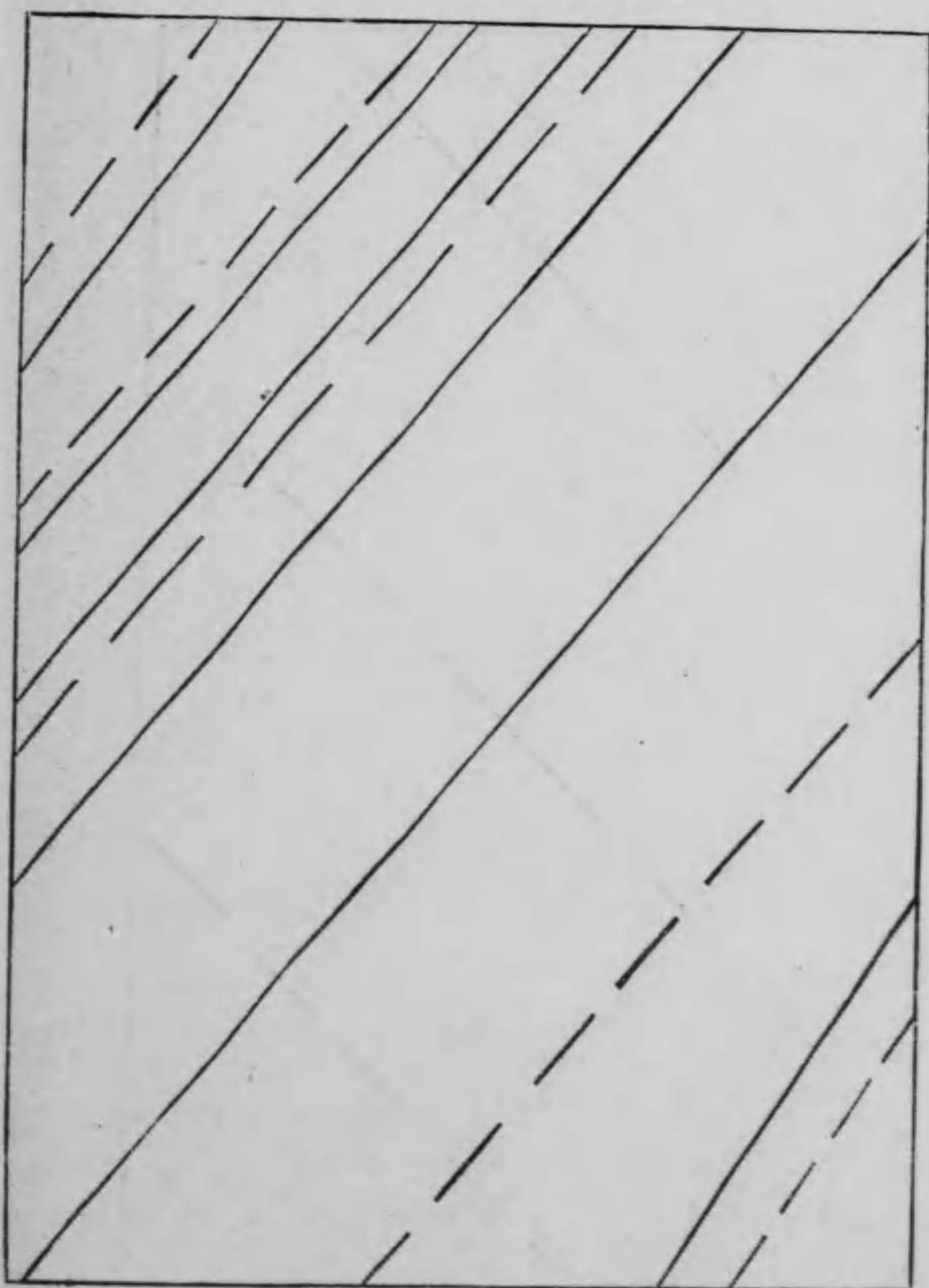
小笠原流折形
第百六十圖 かねふで包 △をりあがり



二十五、くしはさみ包 櫛には下包なし、はさみは下包あり、いづれも上書あるべし。
紙水引は見はからひにてよろし。
第百六十一圖 くしはさみ包 △をりあがり

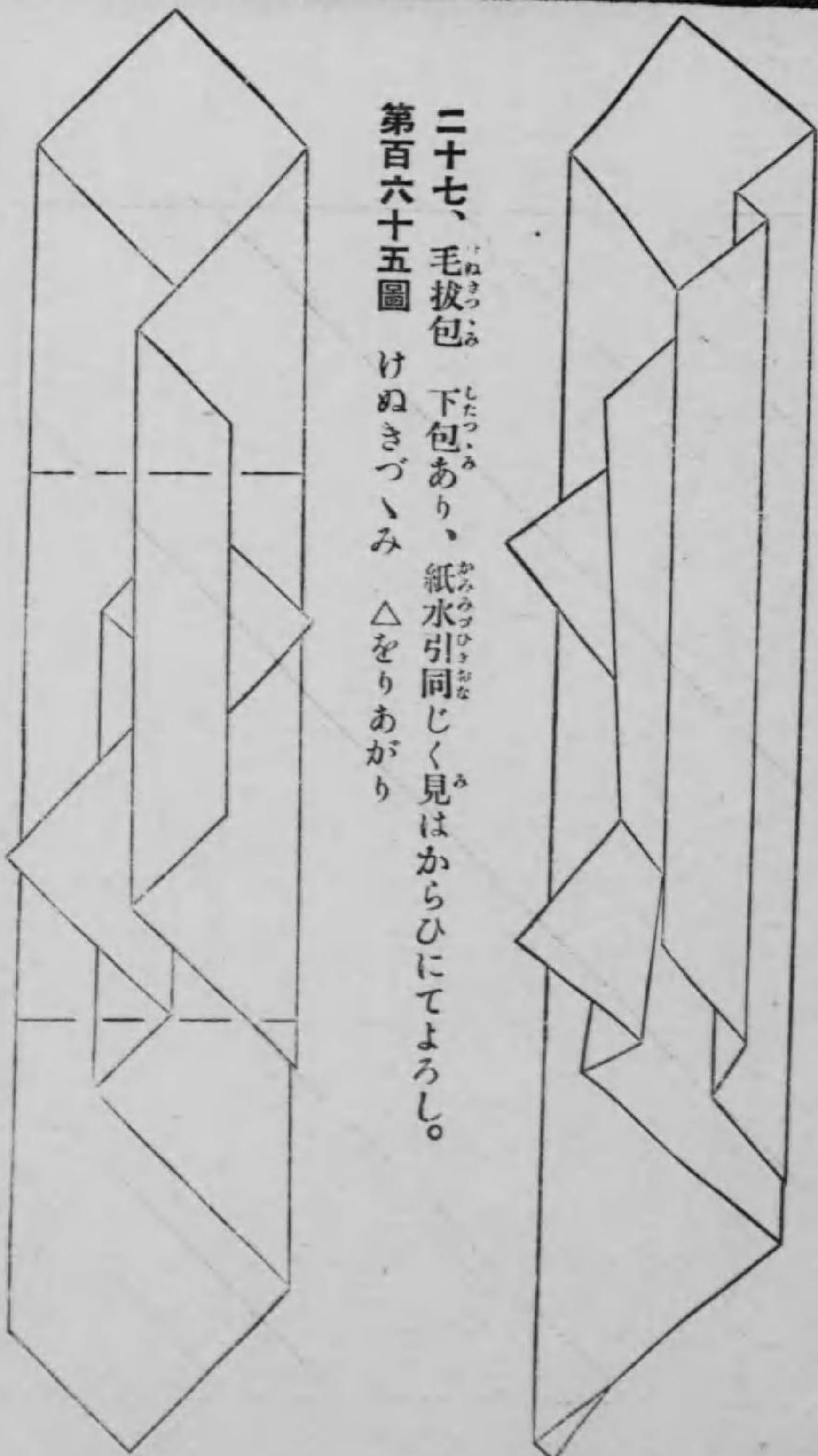


小笠原流折形
 二六、かみそり包^{つみ} 下包^{したつみ}あり、紙水引^{かみづひ}など右^{みぎ}に同じ。
 第百六十三圖 刷刀包^{はしかづみ} △かたがみ^{かたがみ} をりやう



第百六十四圖 かみそり包^{つみ} △をりあがり

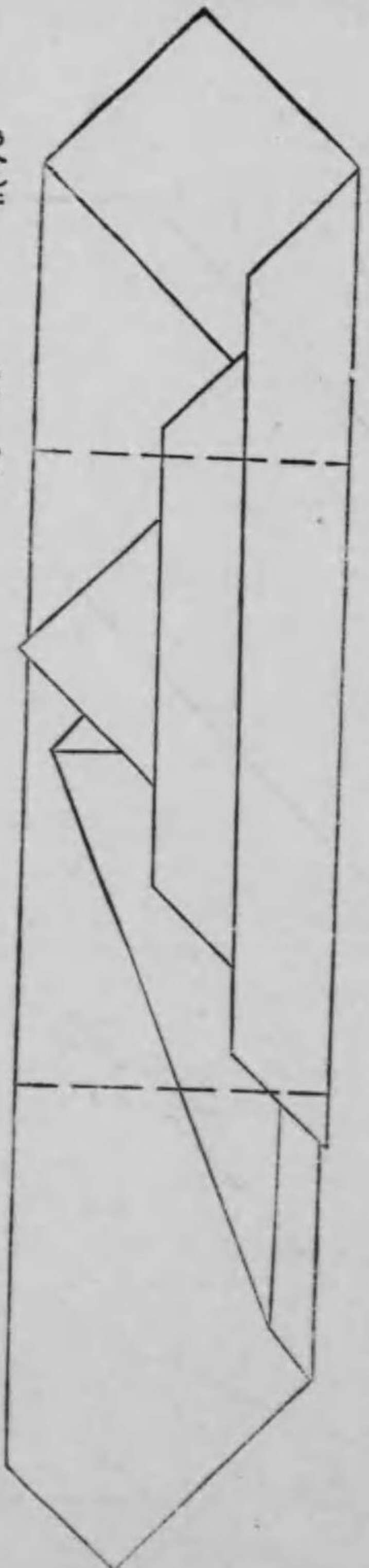
二七、毛拔包^{けぬきづみ} 下包^{したつみ}あり、紙水引^{かみづひ}同じく見^みはからひにてよろし。
 第百六十五圖 けぬきづみ △をりあがり



○上下^{うへした}をうらへをる ○前^{まへ}のかみそり包^{つみ}も同様^{どうじやう}なり。



○上下のはしを裏の方へをるべし。

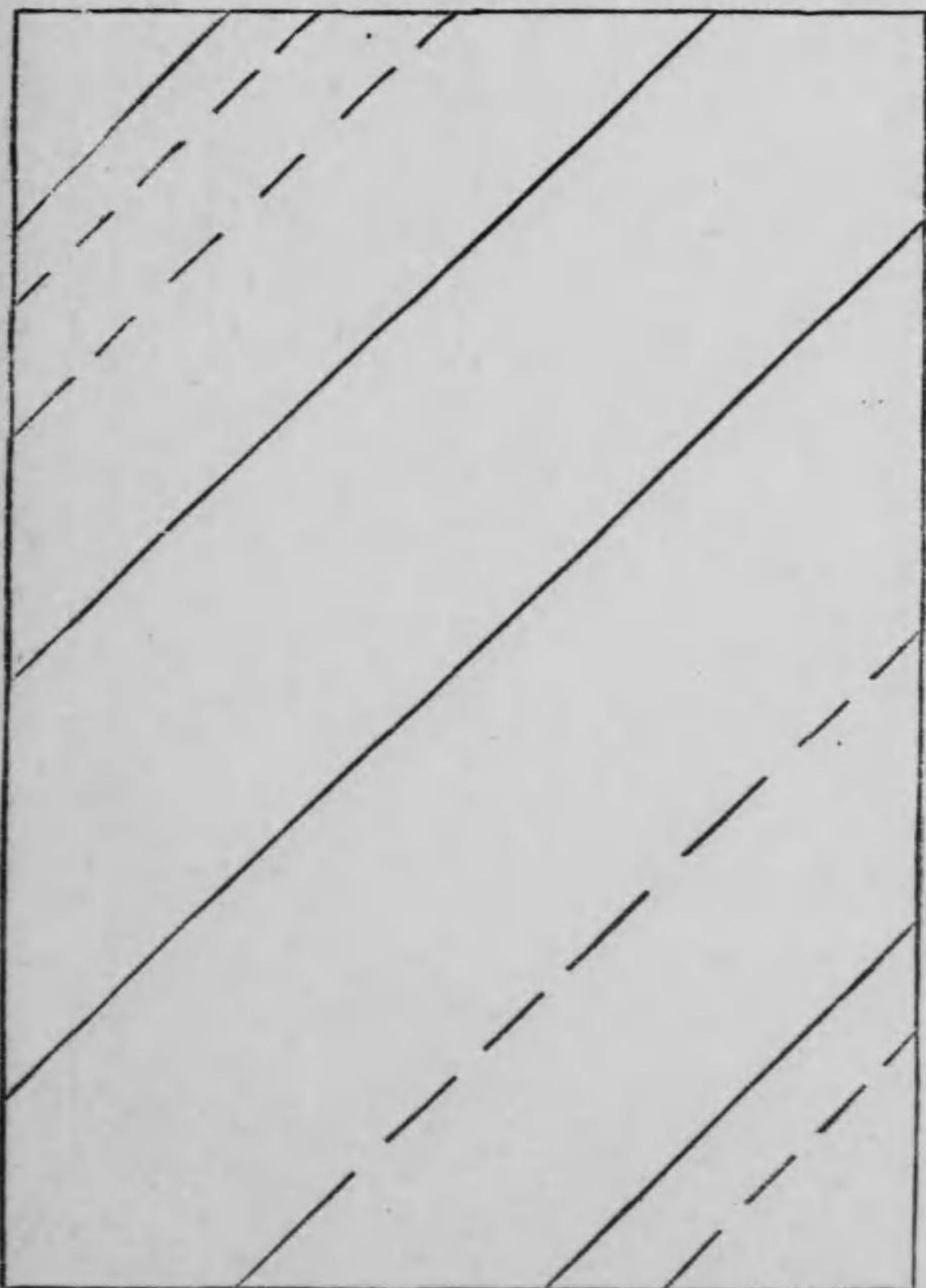


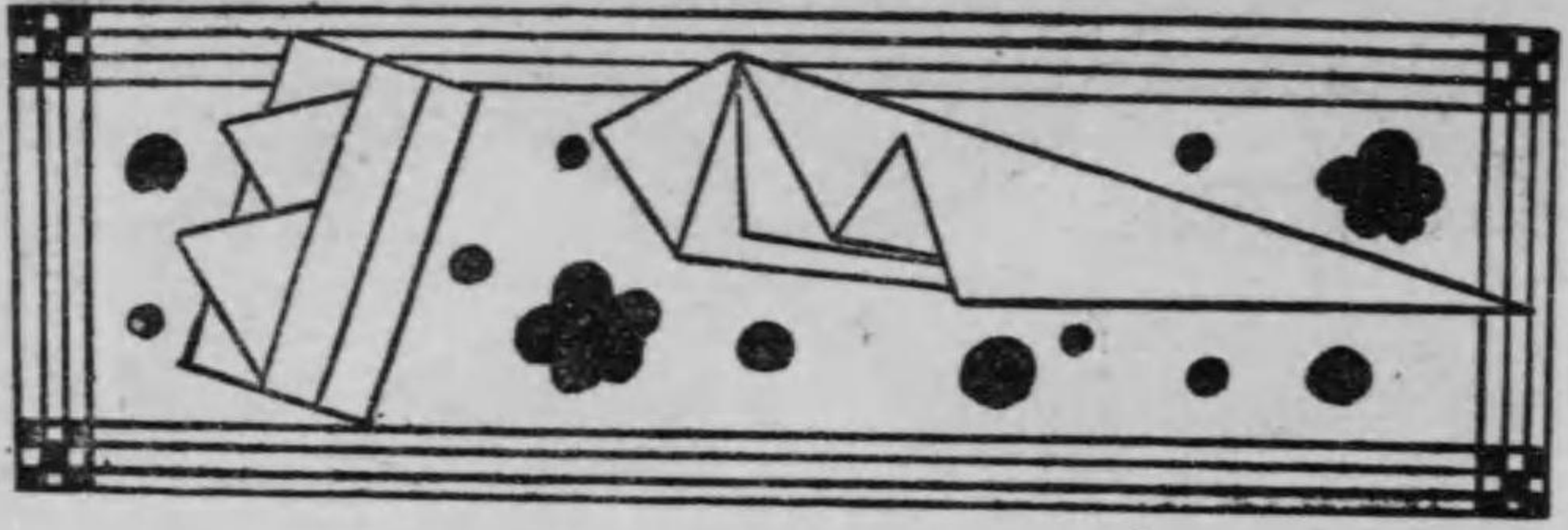
第百六十七圖 たきもの包 △をりあがり

二十八、薰物包 たきものとは煉香のことなり、梅花、荷葉、菊花、侍従、新枕、千種、落葉、此他さまざまの調合あり、紙は色奉書がさね、金銀、檀紙など、美麗に包む、和紙（吉野紙の事なり）にて下包して包むべし、色の紙捻、金銀水引などをかくる。



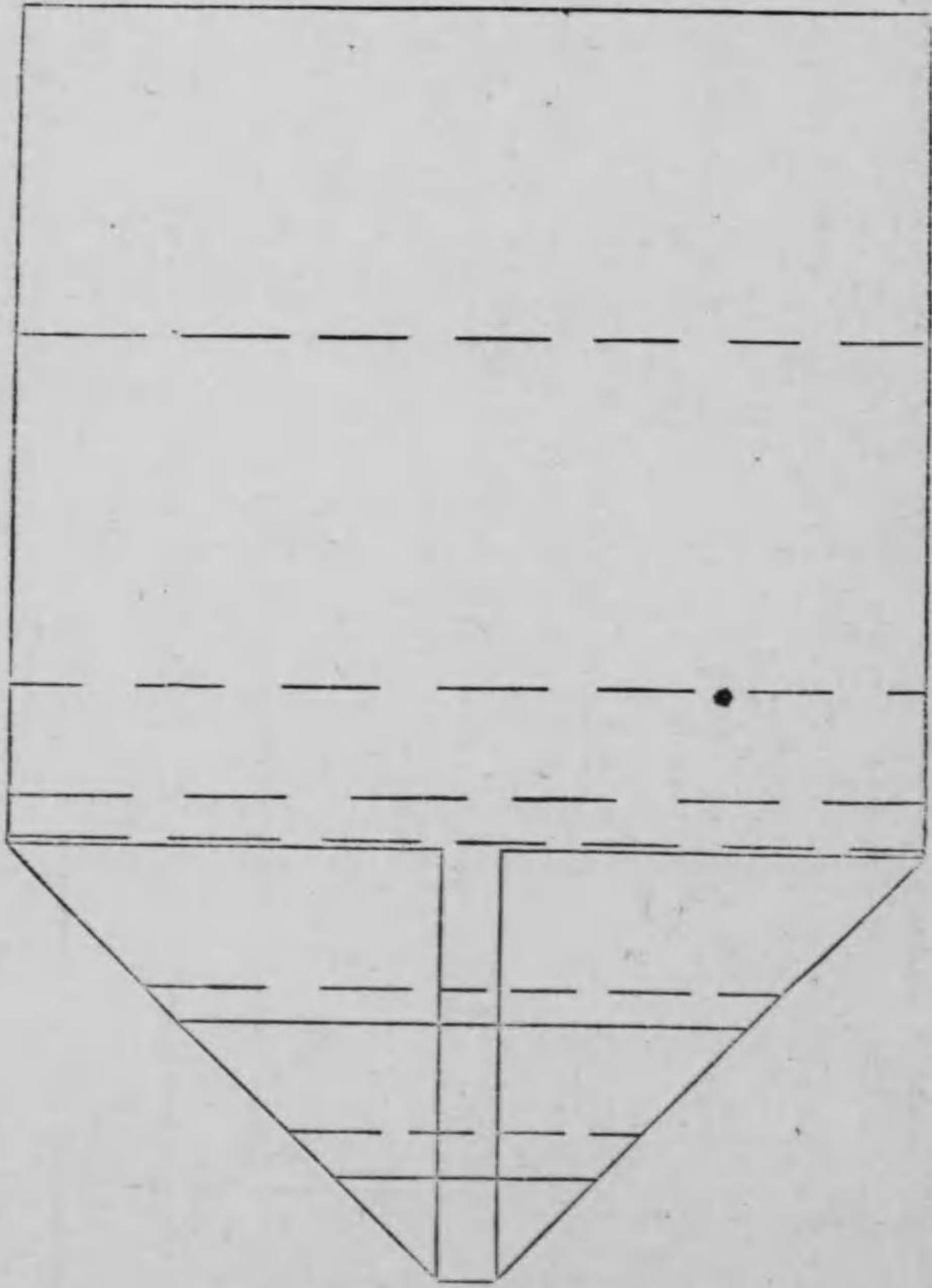
小笠原流折形
第百六十六圖 けぬきづつみ △かたがみ をりやう





第五卷

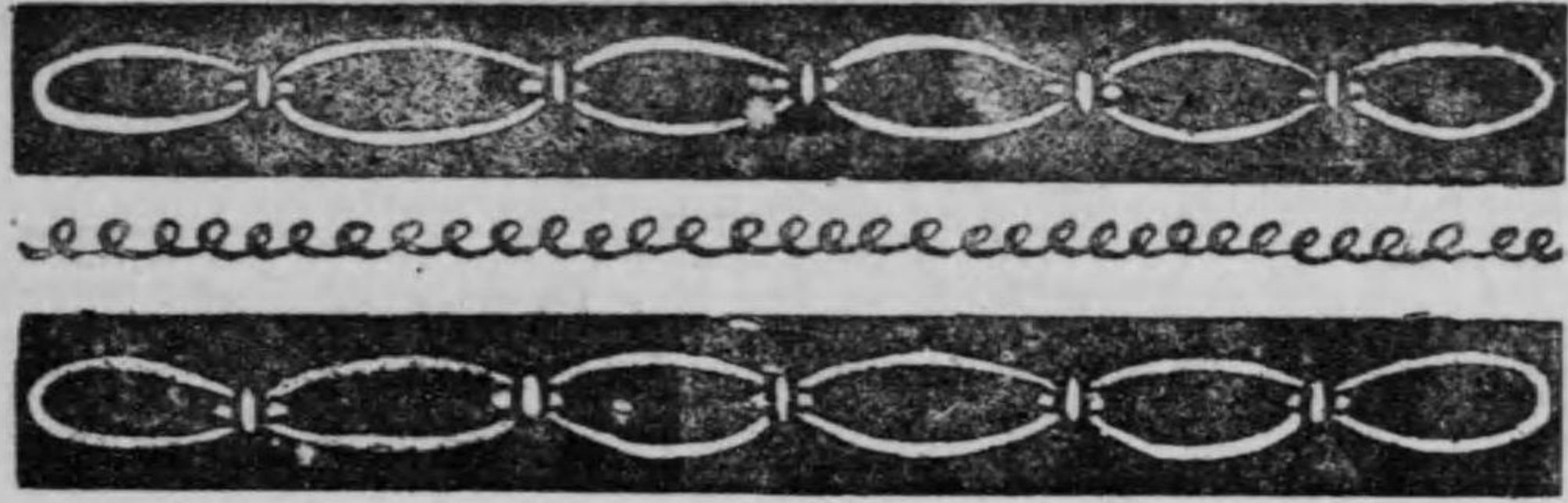
紐用折方圖解



一五五

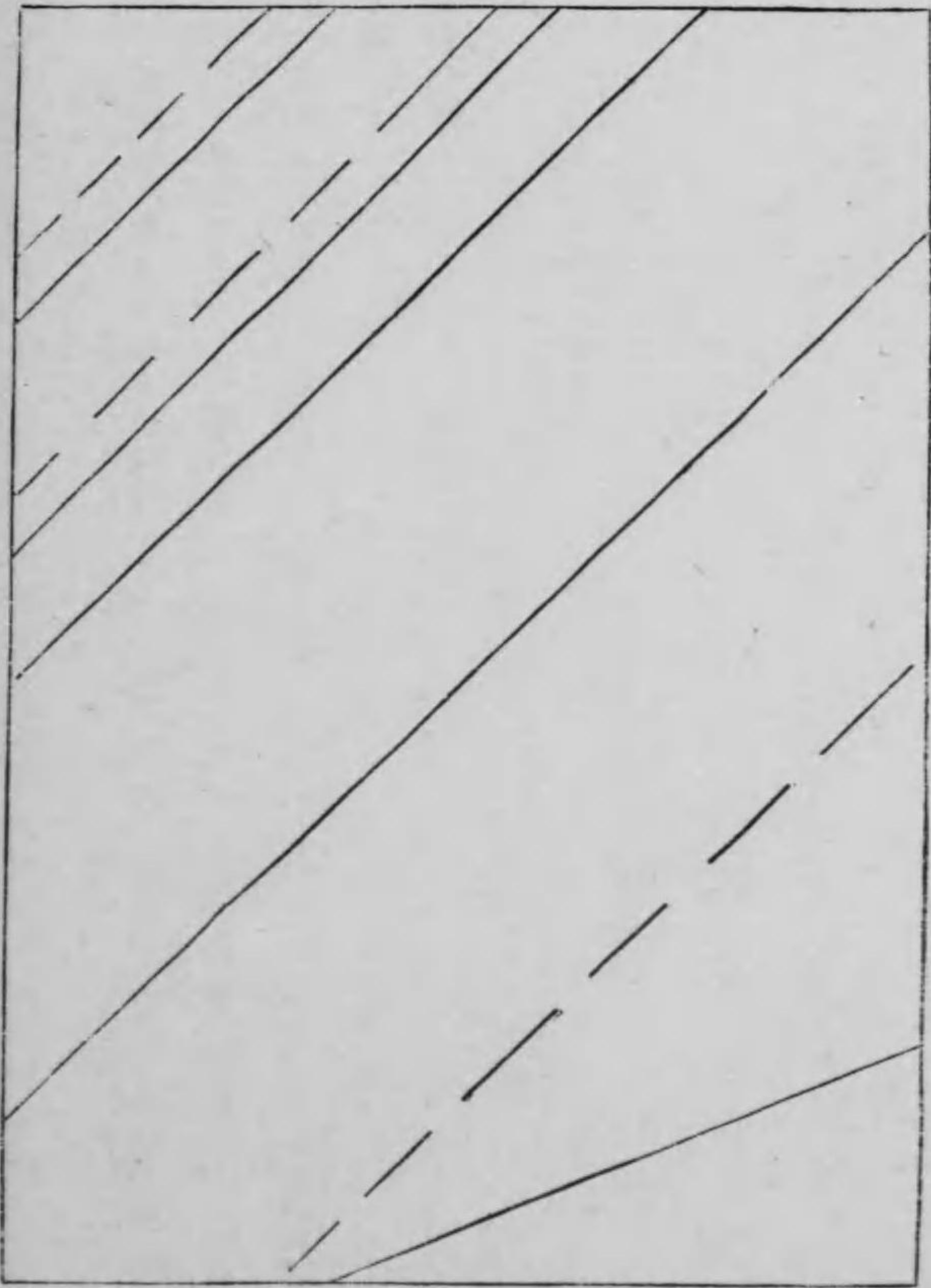
△をりやう、内のかたを見せる圖

二十九、包袋包 (甲) 檀紙に色紙をかさねて、銀水引のこま結にてよし。
 第百六十九圖 にはひぶくろ包 (甲の形)

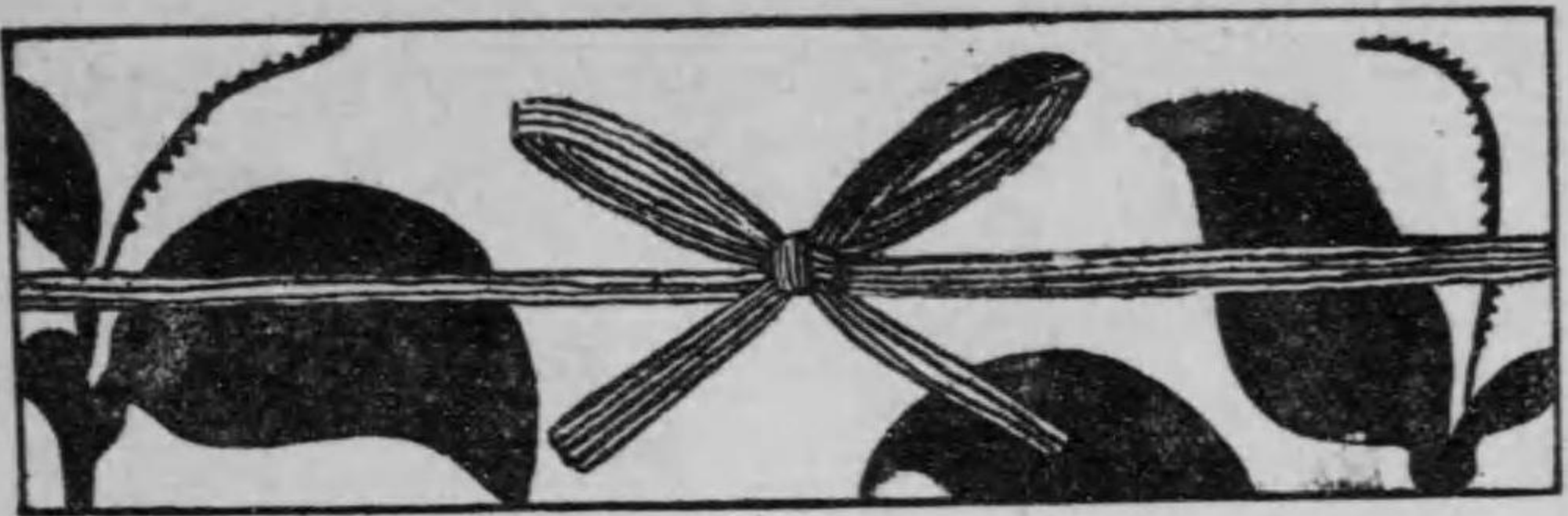


第百六十八圖 たきもの包 △をりやう圖のごとし

小笠原流折形



一五四

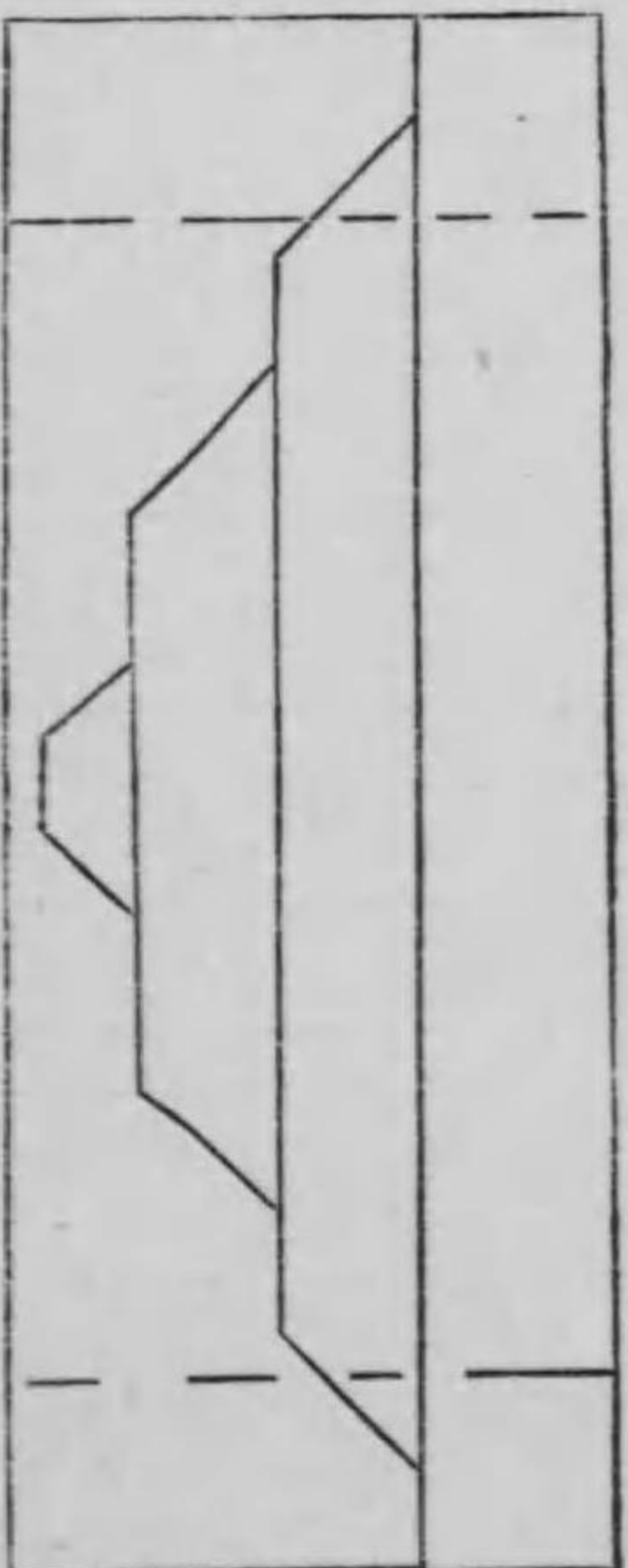


小笠原流折形

第七十圖 にはひぶくろ包 (甲の形)

△をりあがり

○上下をうらへをるべし。

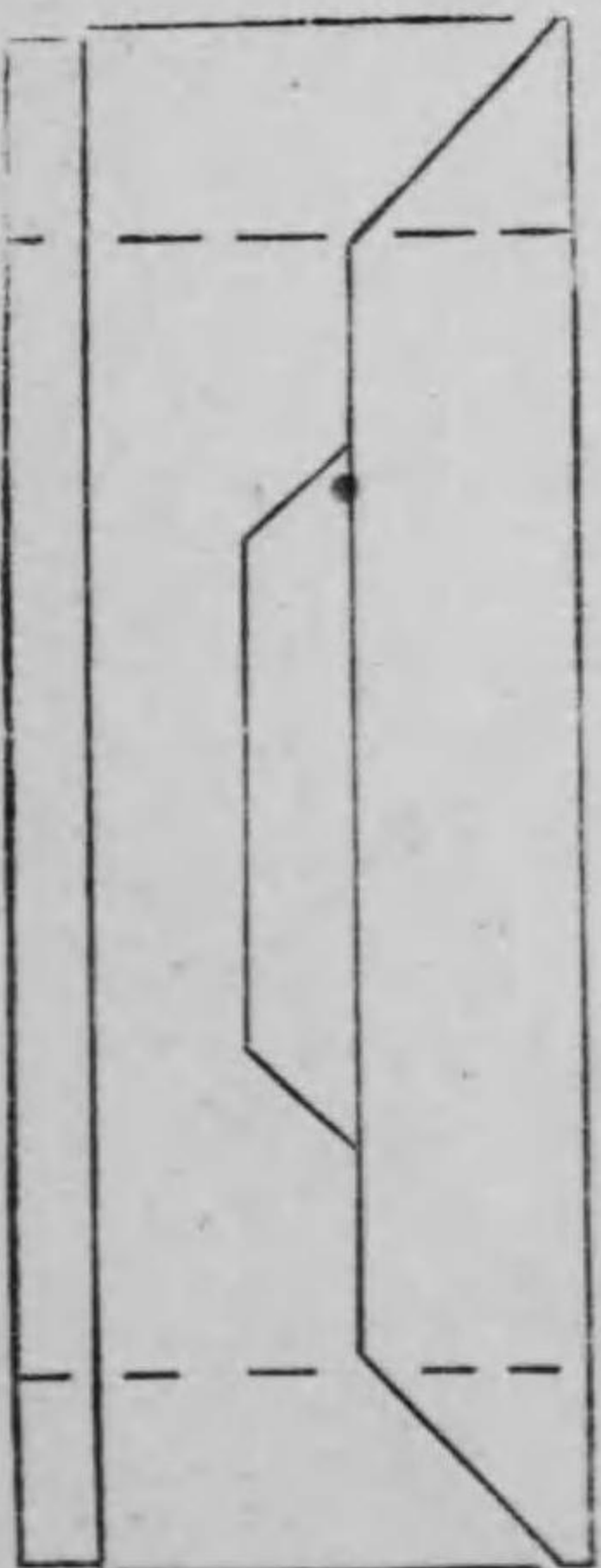


三十、同 (乙) 大廣奉書べにうら、銀赤水引にてよろし、和紙にて下包。

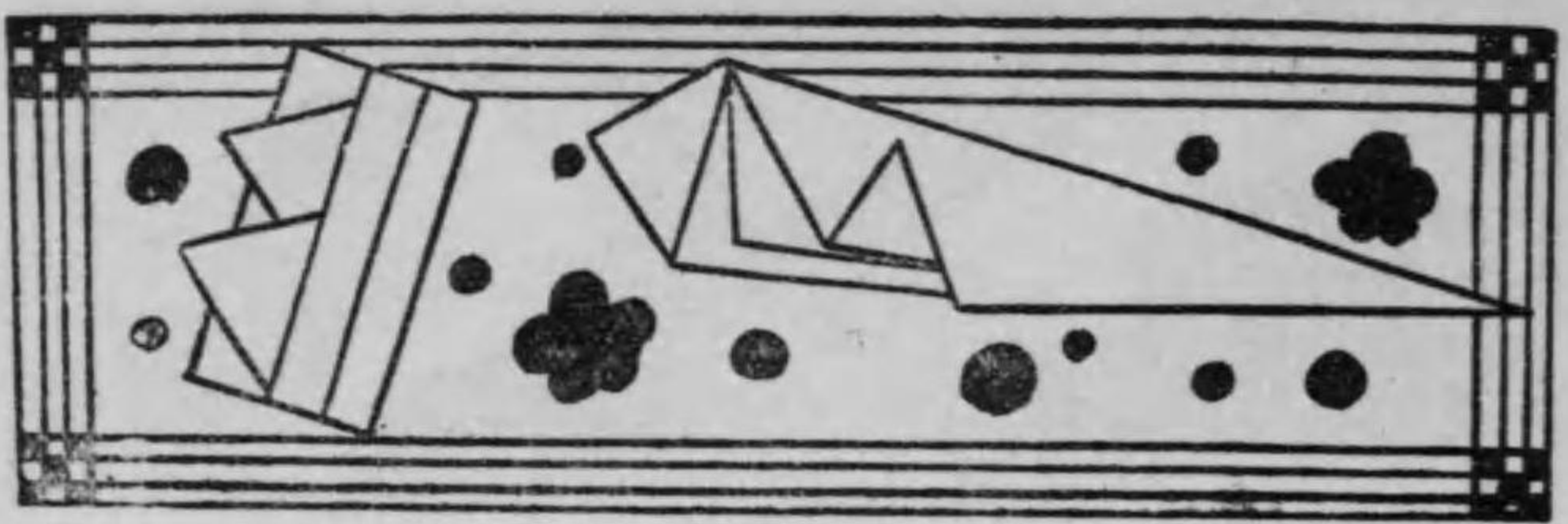
第七十一圖 にはひ袋包 (乙の形)

△をりあがり

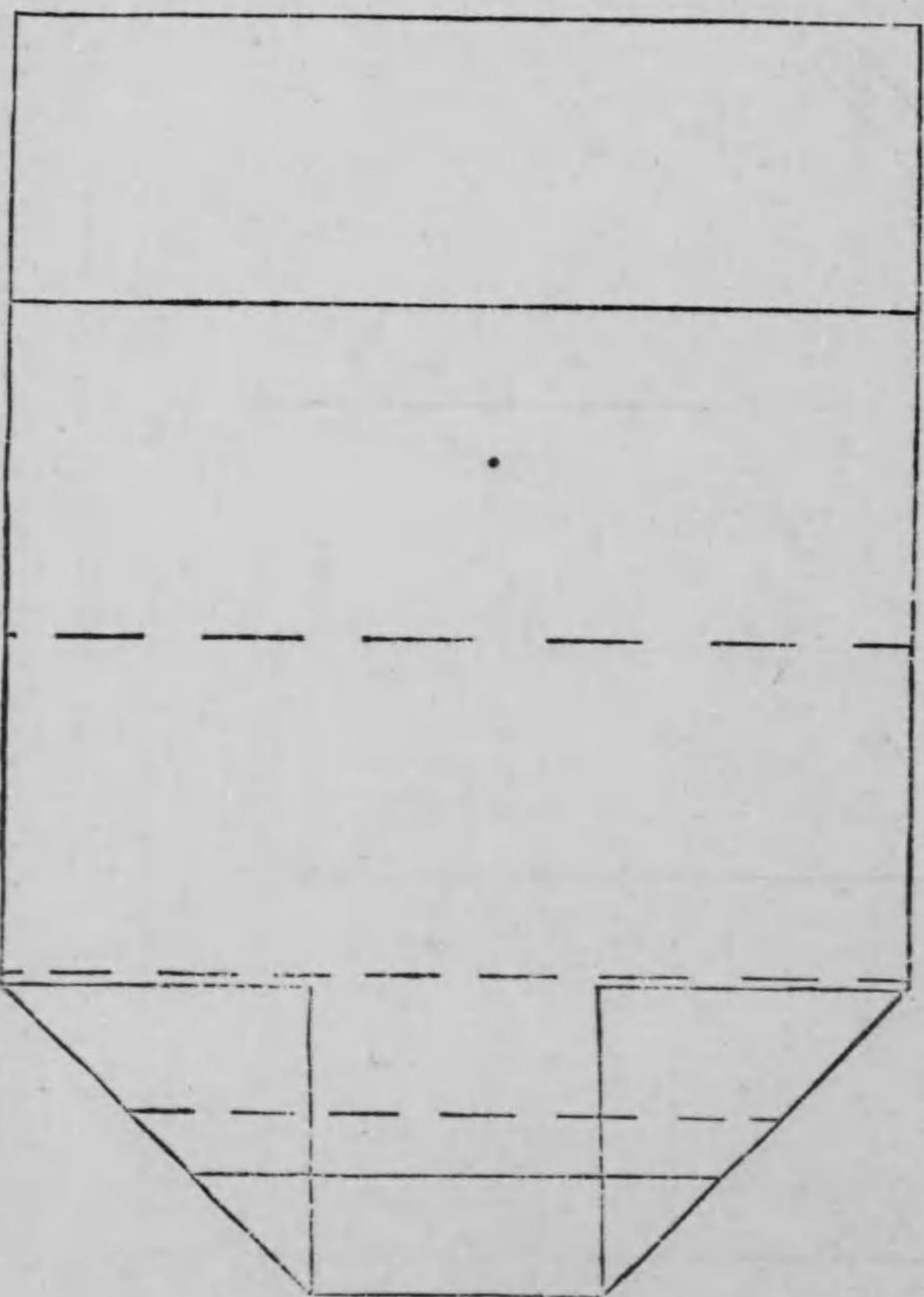
○上下をうらへをる。



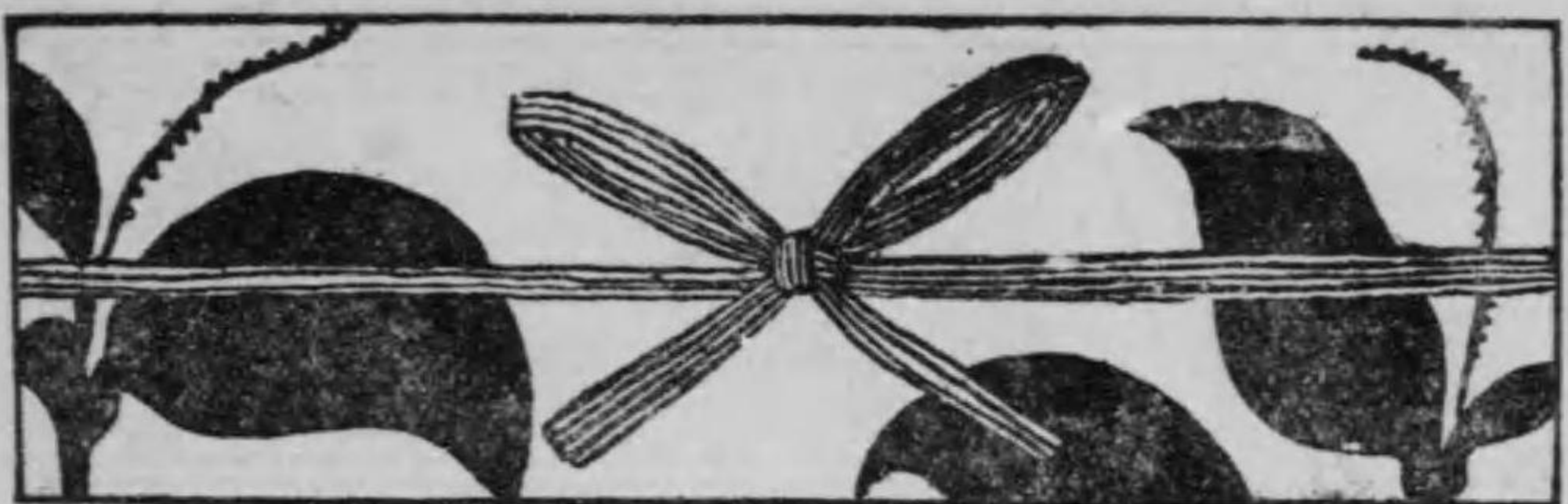
○これは前のよりは次位につかふ折形なり。



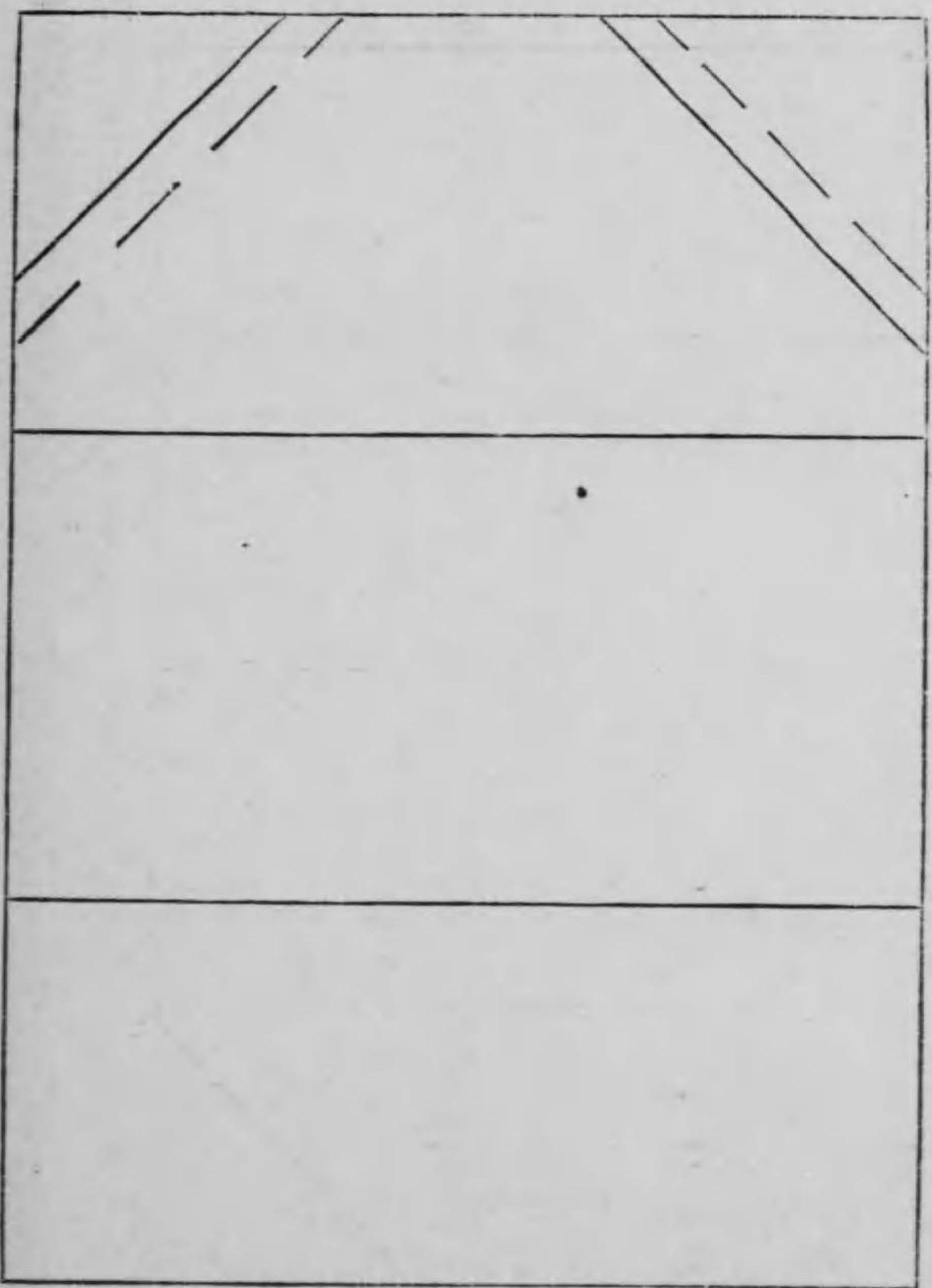
第七十二圖 にはひ袋包 (乙の形)



△をりあがり、うらのかたを見せたり。



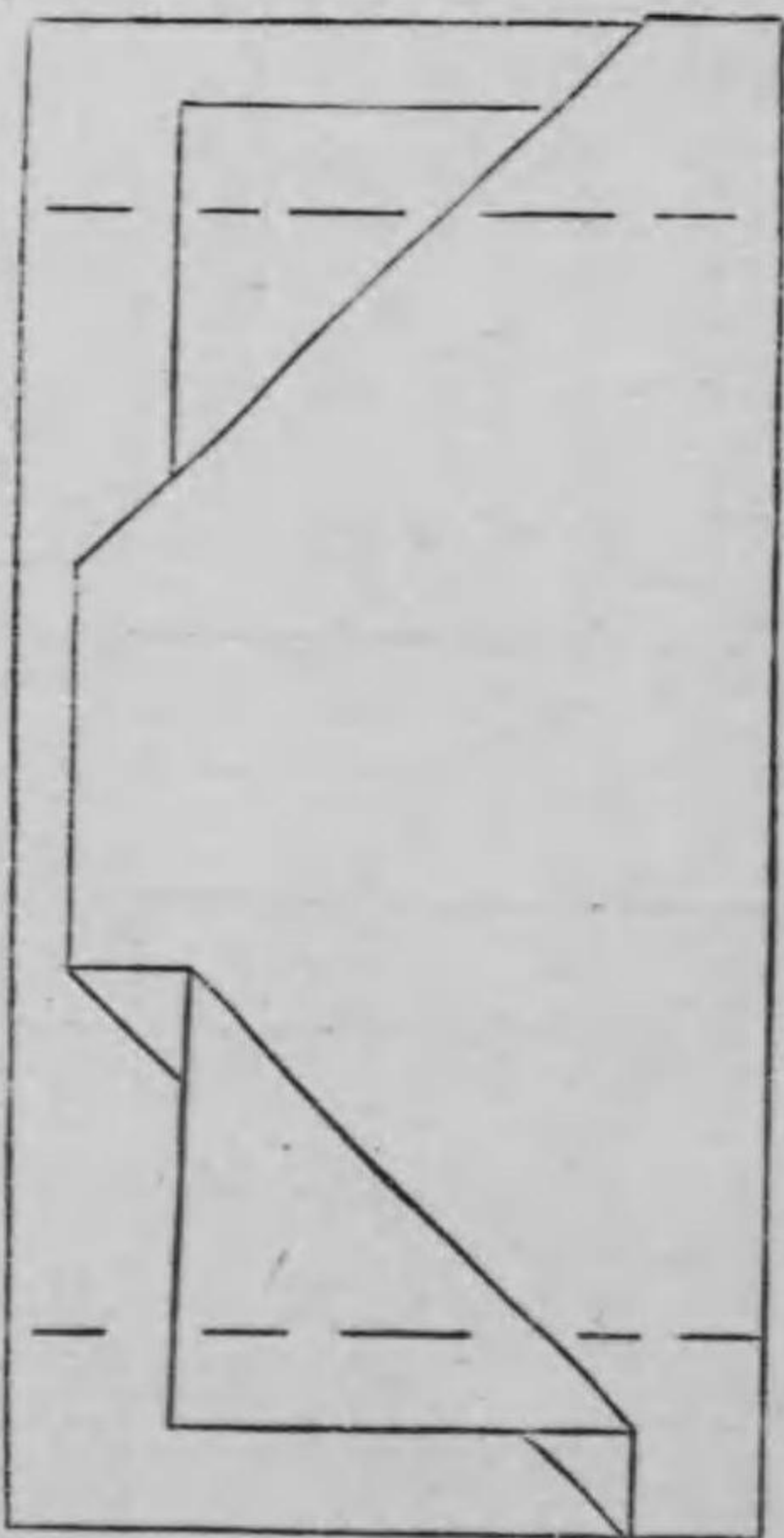
小笠原流折形
 三十一、花粧品包 (甲) これは何にても包む、進物の等級によつて紙を分つべし。
 色奉書がさねをつねとす、其ほか見はからひにてよし。



第百七十三圖 けしやうひんづみ (甲の形)
 △をりやう(表)かたがみ

第百七十四圖 けしやうひんづみ (甲の形)

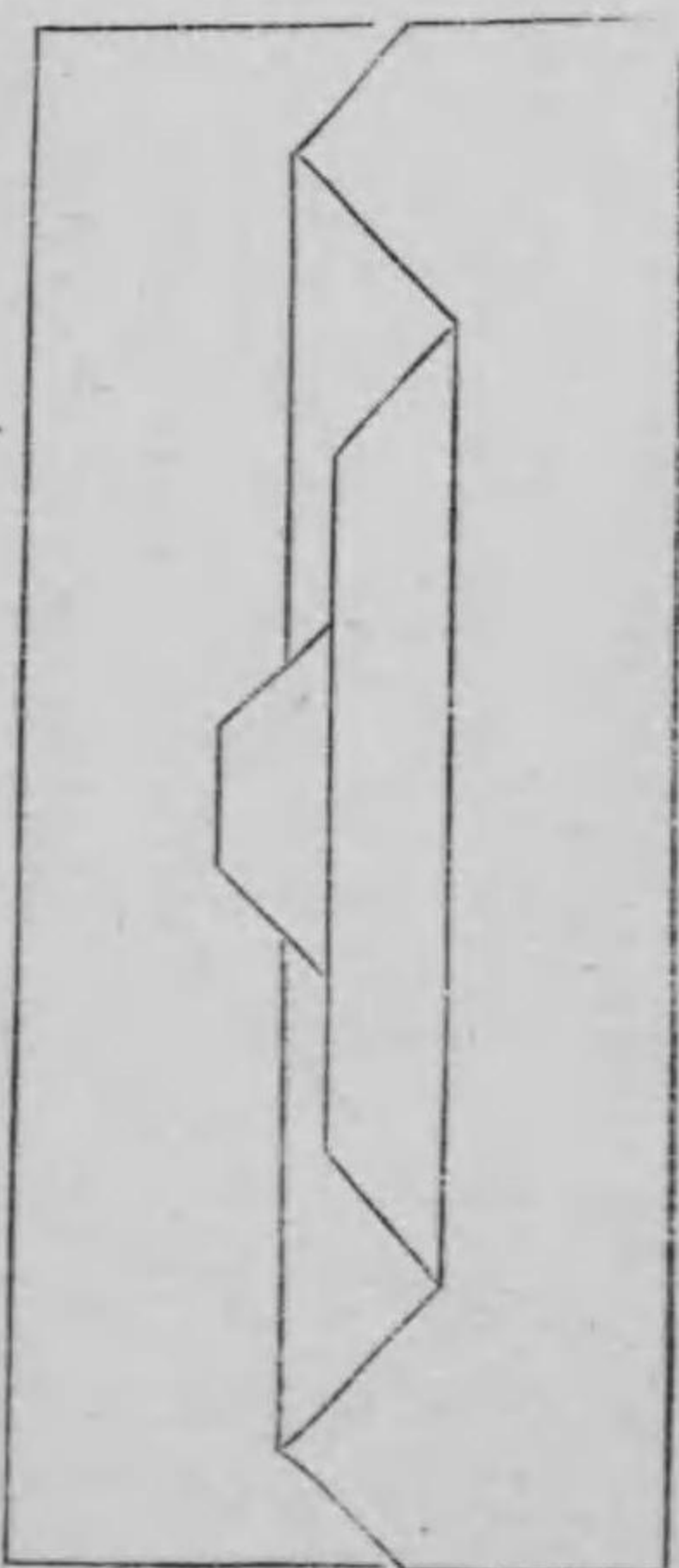
△をりあがり
 ○うへしたをてん
 せんよりうらへ
 をるべし。

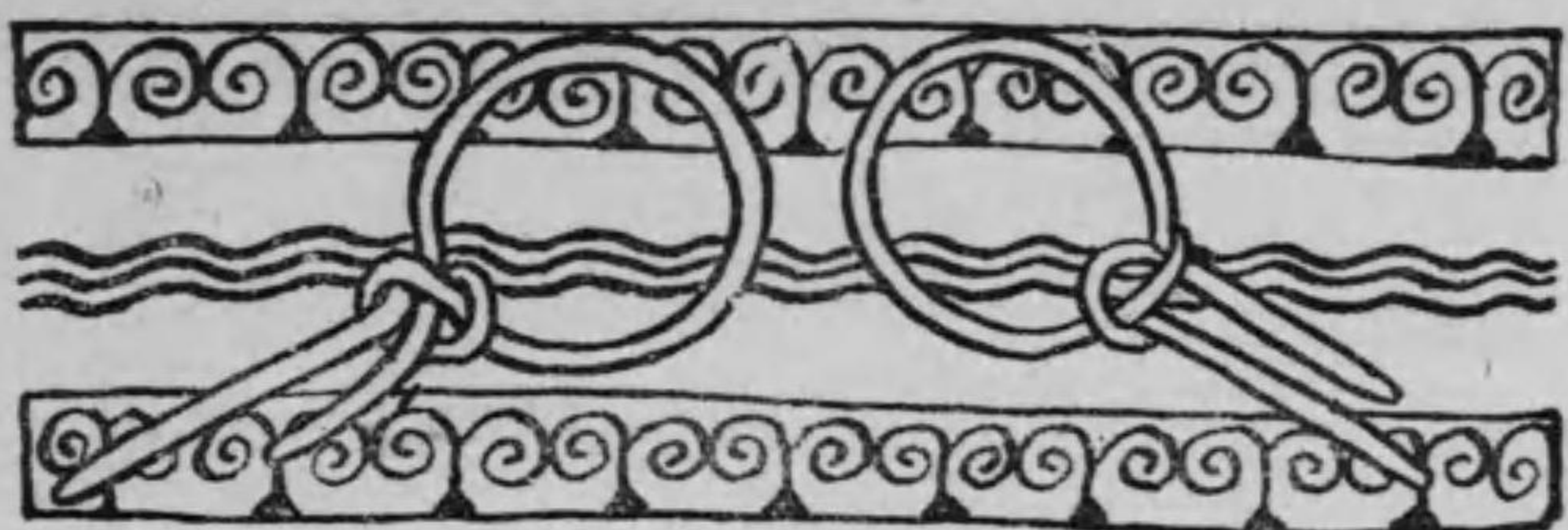


右よりさがりたる時につかふ折形なり。

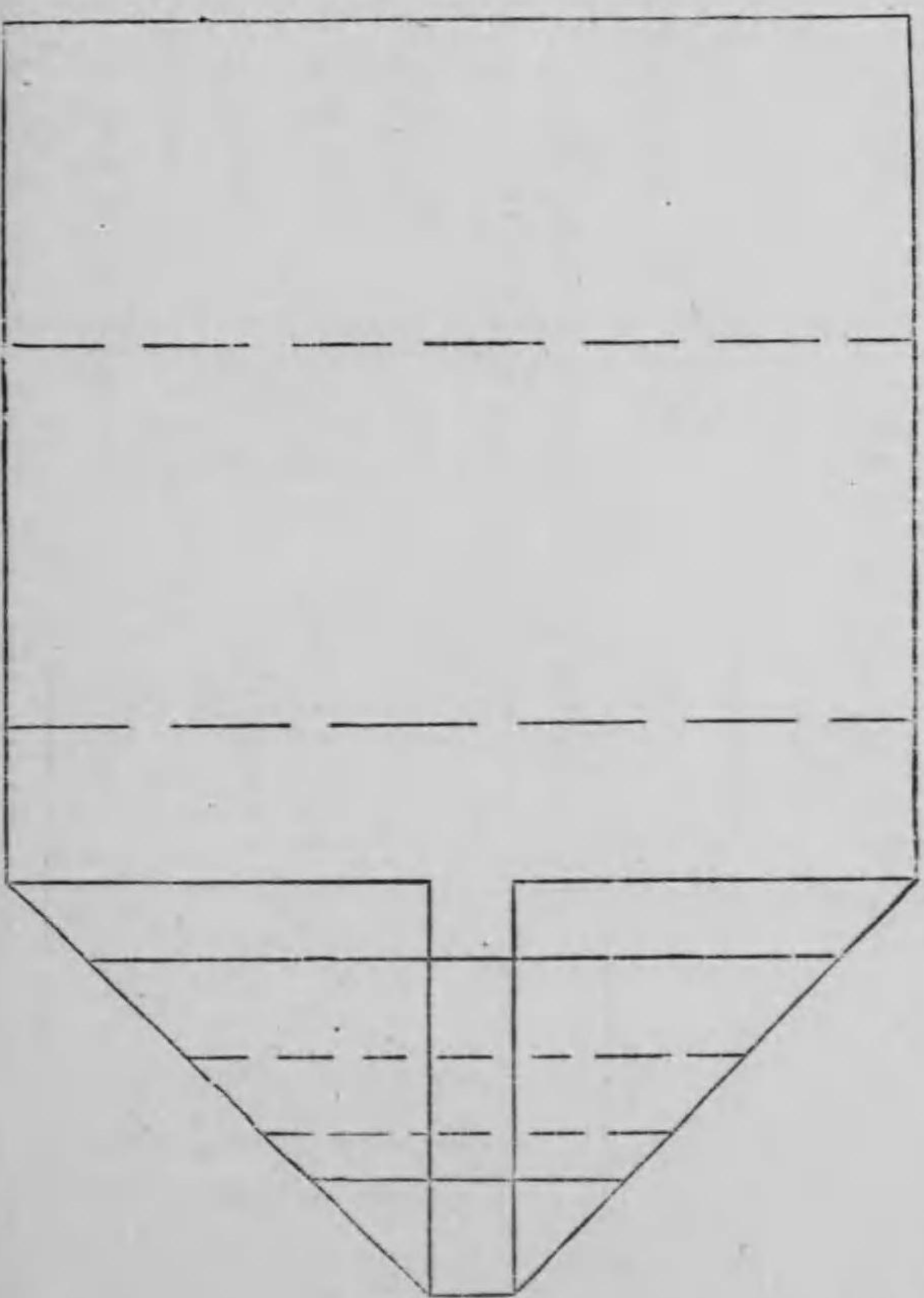
三十二、同 (乙)
 第百七十五圖

けしやうひんづみ
 づみ (乙の形)
 △をりあがり





小笠原流折形
第七十六圖 けしやうひんづゝみ (乙の形)



△をりやう内の方がかたがみ



◎折かた用紙の種るゐと寸法の事

○奉書の種類と寸法 大廣奉書たて壹尺四寸五分よこ壹尺九寸五分、中廣奉書たて壹尺三寸五分よこ壹尺八寸五分、大奉書たて壹尺三寸よこ壹尺八寸、中奉書たて壹尺貳寸よこ壹尺六寸七分、小奉書たて壹尺九分よこ壹尺五寸五分、色奉書、紋奉書、墨流、産地の名を稱せる物種々あり。

○檀紙の種類と寸法、大鷹(檀紙、引合、大縮、松皮紙ともいふ)たて壹尺七寸一分(又五分)よこ貳尺二寸三分、中鷹(引合、中縮)たて壹尺三寸五分(又三寸)よこ壹尺九寸五分より貳尺五分まで(又壹尺七寸七分)、小鷹(小縮、鬼杉原)たて壹尺五分よこ壹尺四寸四分『青竹翁紙譜所載』

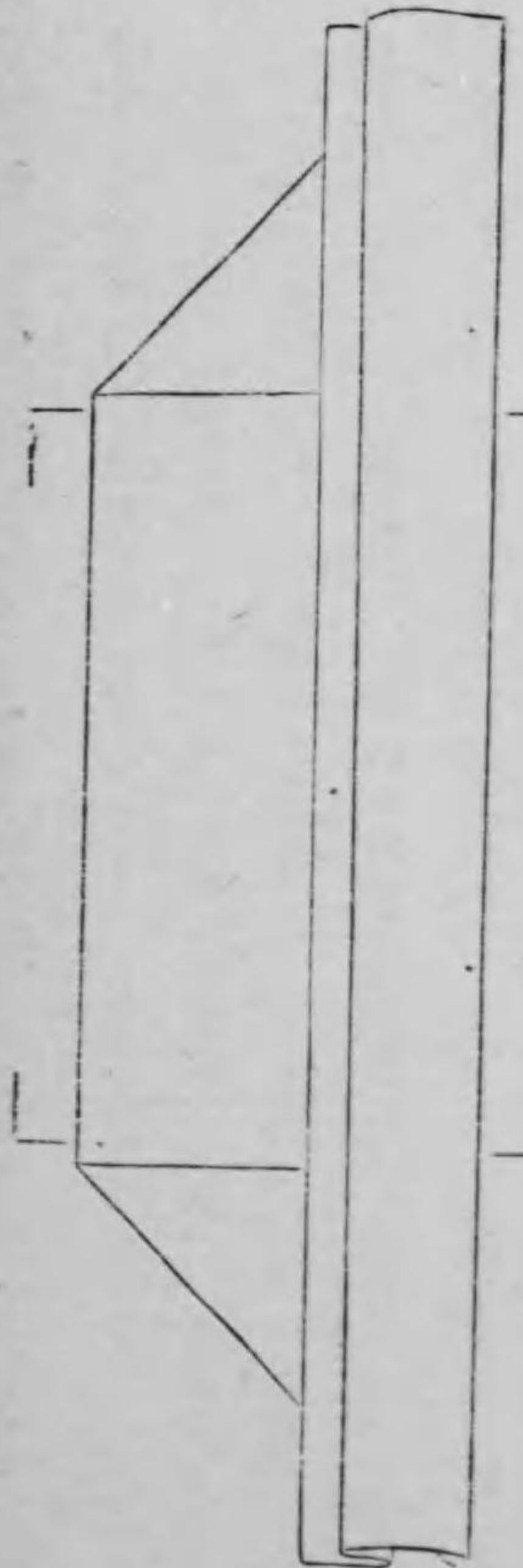


第六卷 粉薬味類折形圖解

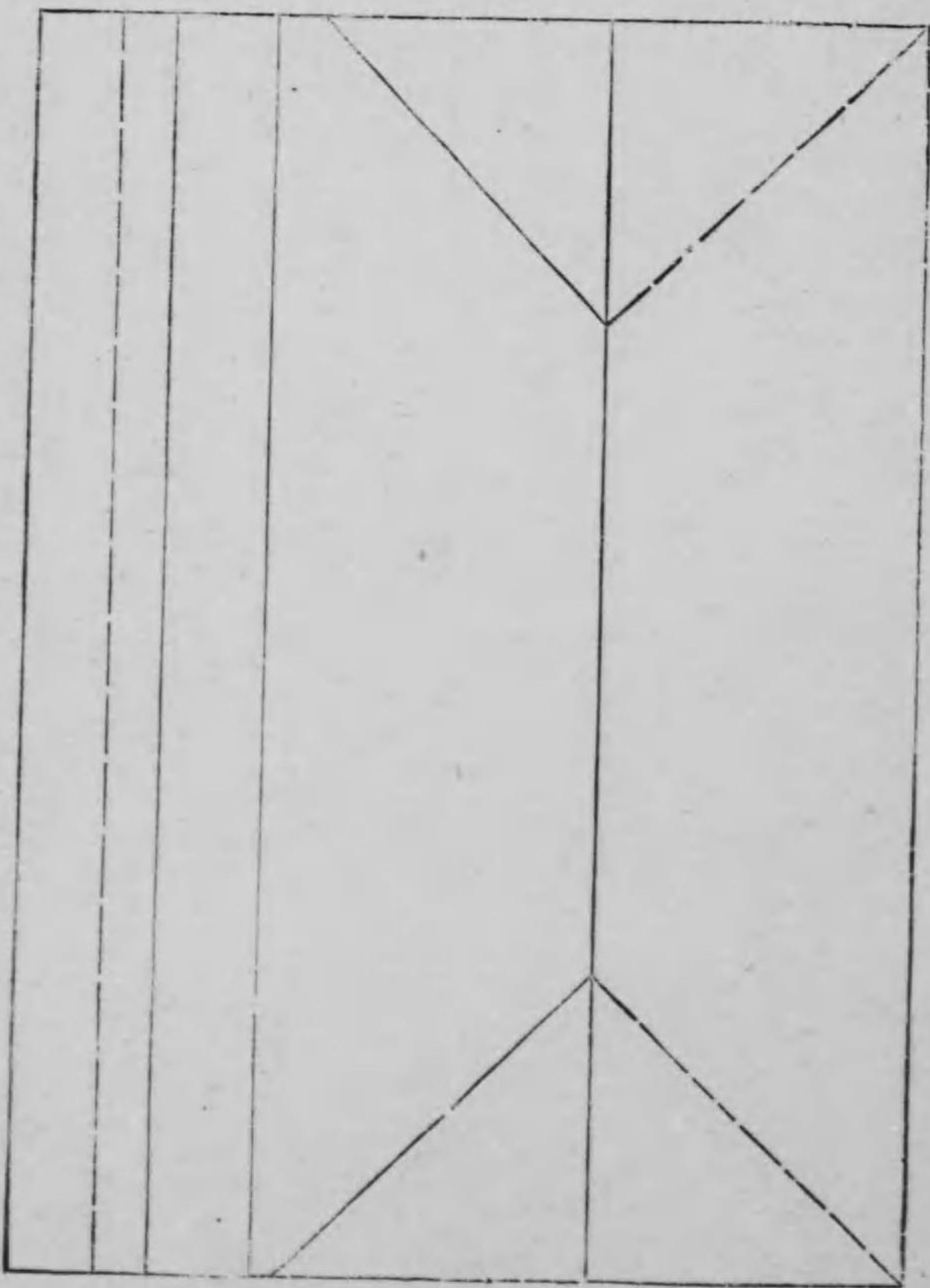
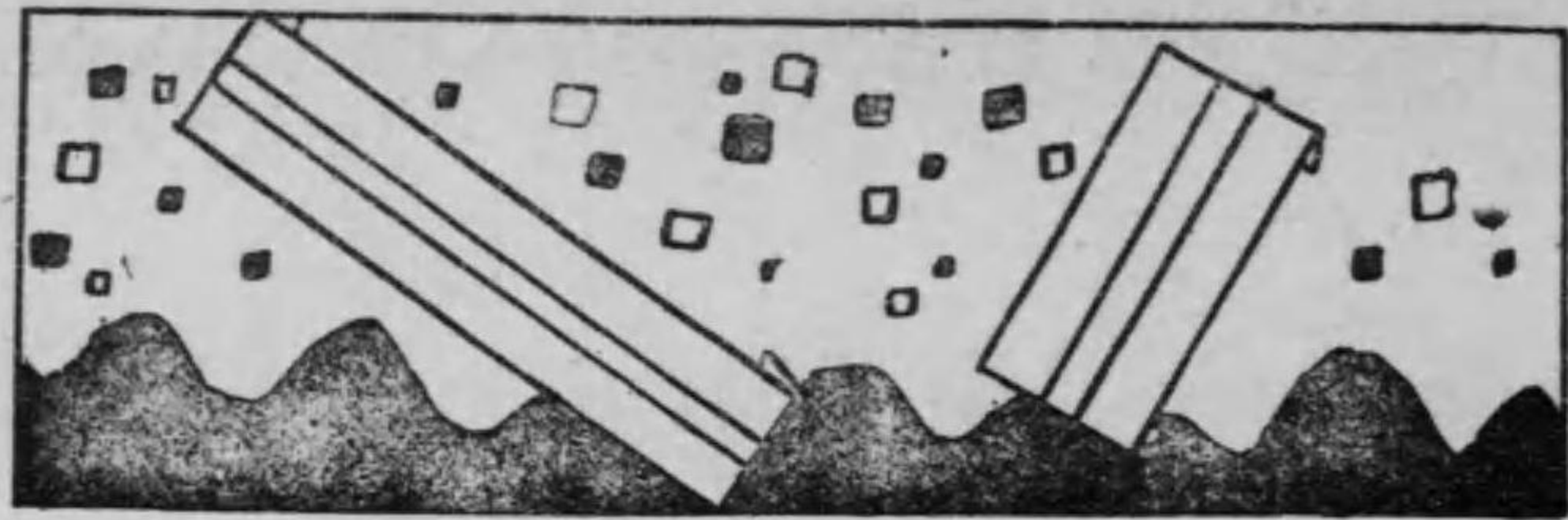
一、大豆粉包、俗に「きなこ」包ともいふ、白紙かさねなり、上位に檀紙をつかひ、次には奉書がさねにするなり、だんしの時は金銀水引、蛇結にて飾る、奉書の際は紅白水引細結にてよろし、古傳には下包なしといへども、今は下包をするなり、年始の鏡餅にもそへ、婚禮の皆子餅にもそふる、豆の粉は、青粉にても、白粉にてもよし。

第七十七圖 まめの粉包 △をりあがり

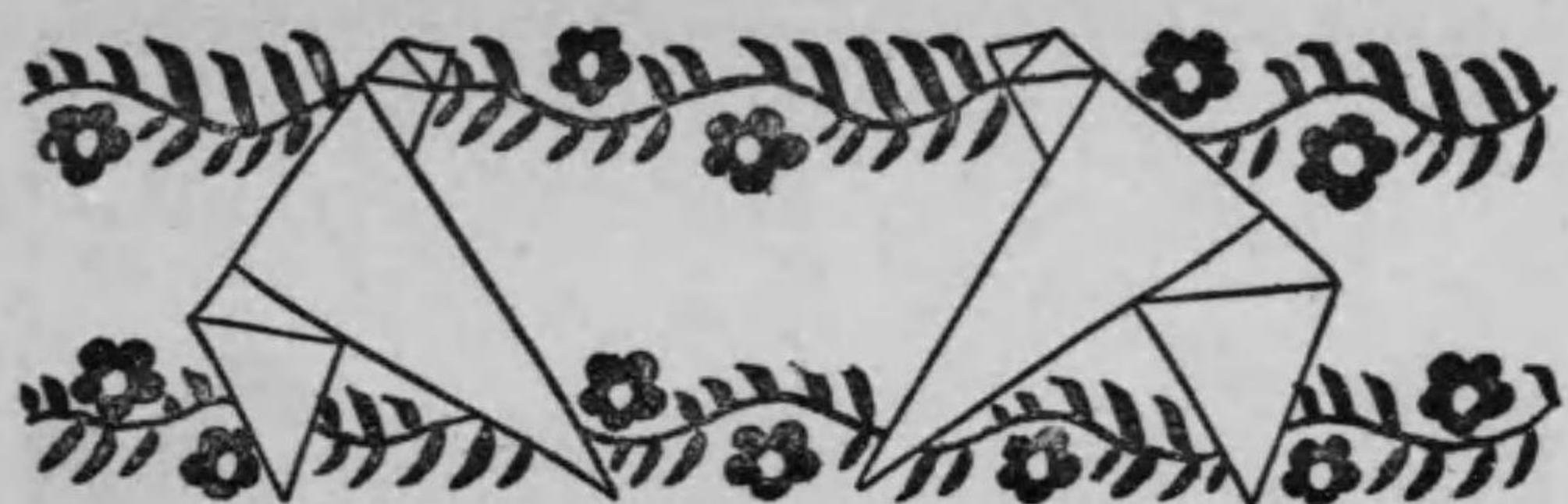
「L」印のところを上下とも裏へをるなり



第七十八圖 まめの粉つゝみ ○形がみ表の圖



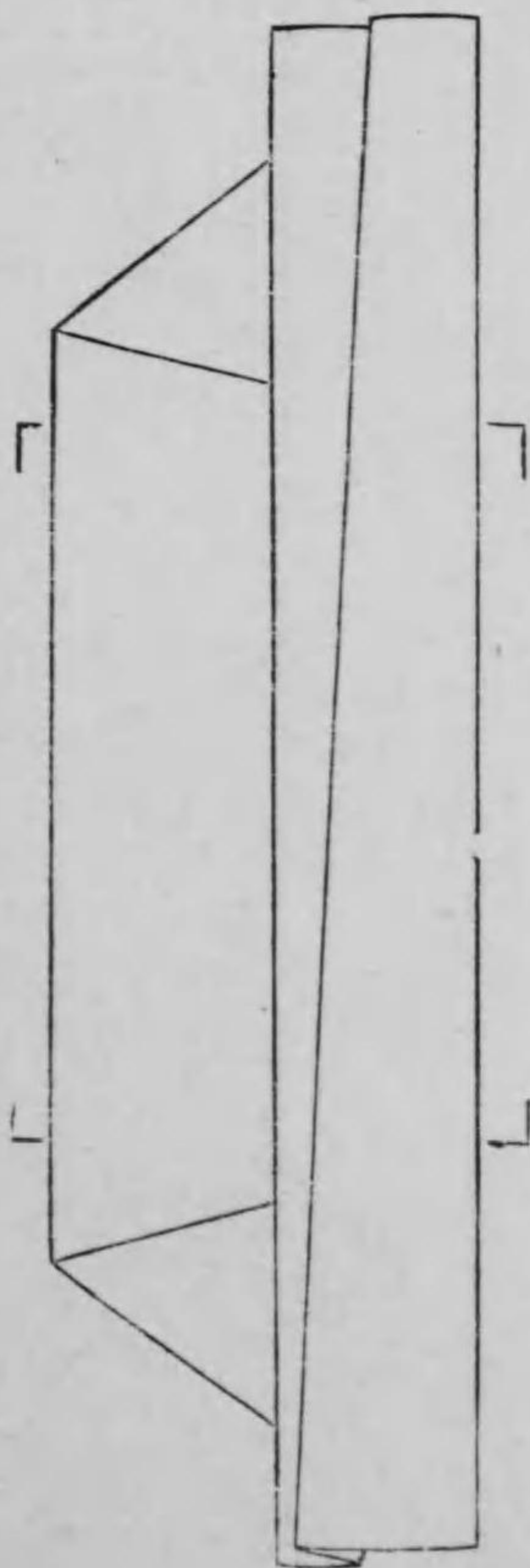
第六卷 粉薬味類折形圖解



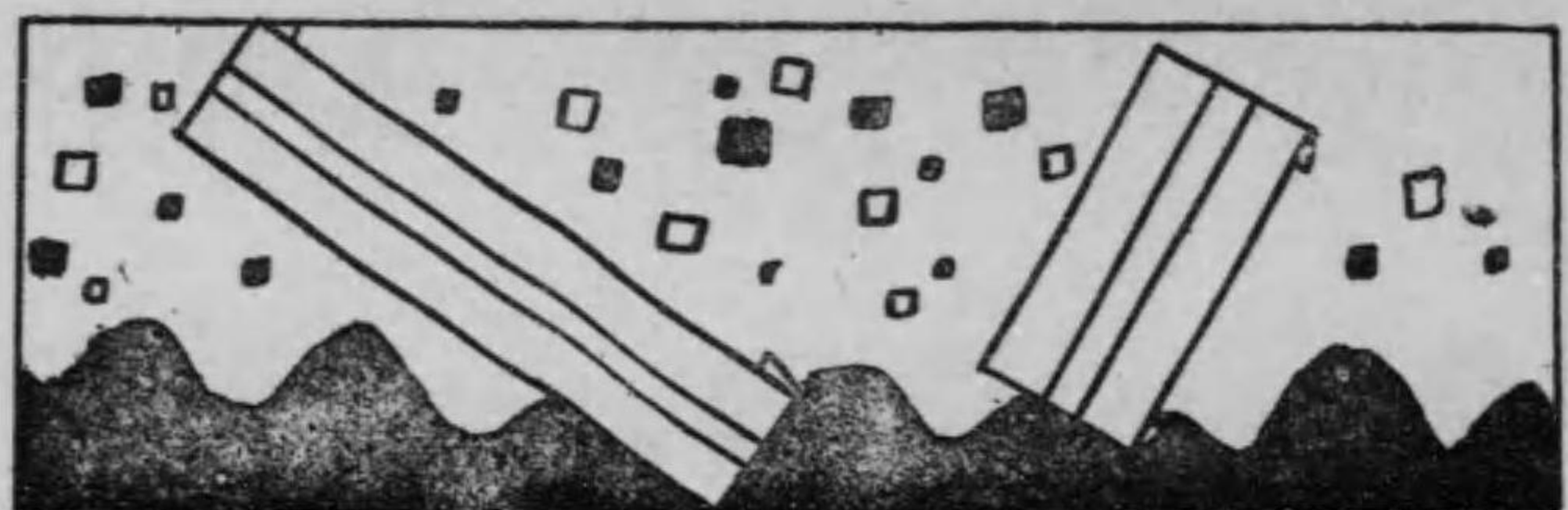
小笠原流折形

二、小豆粉包 今はほしあんの粉をも包むなり、皆子餅に大豆粉を（白粉）といひてそふる時、小豆粉をも（赤粉）といひて共にそふるなり、故にたゞに赤粉白粉といひて通用詞となりをれり、紙水引右に同じ。

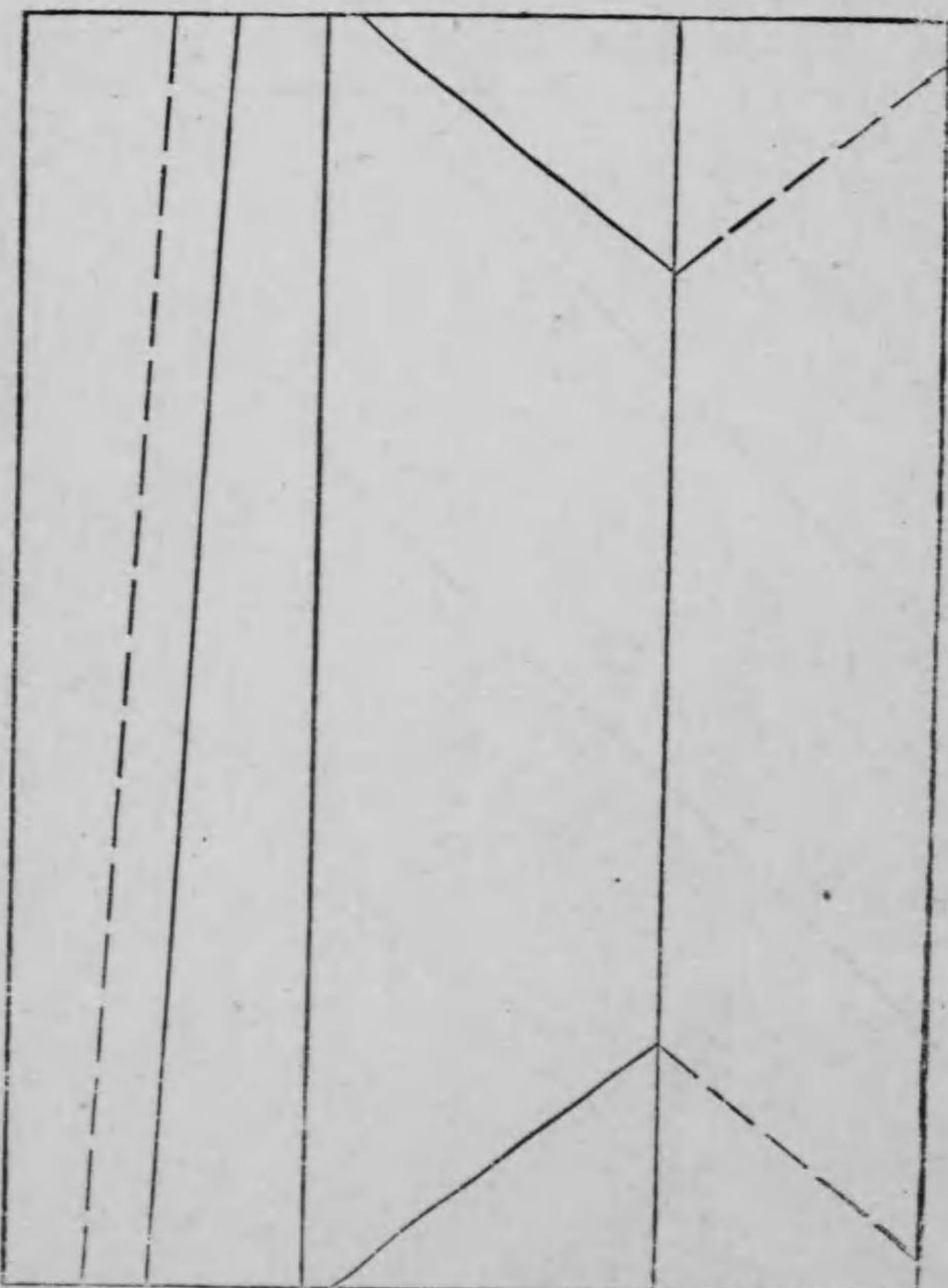
第百七十九圖 あづきこ包 △をりあがり
「」しるしの所上下とも裏へをる。



一六四

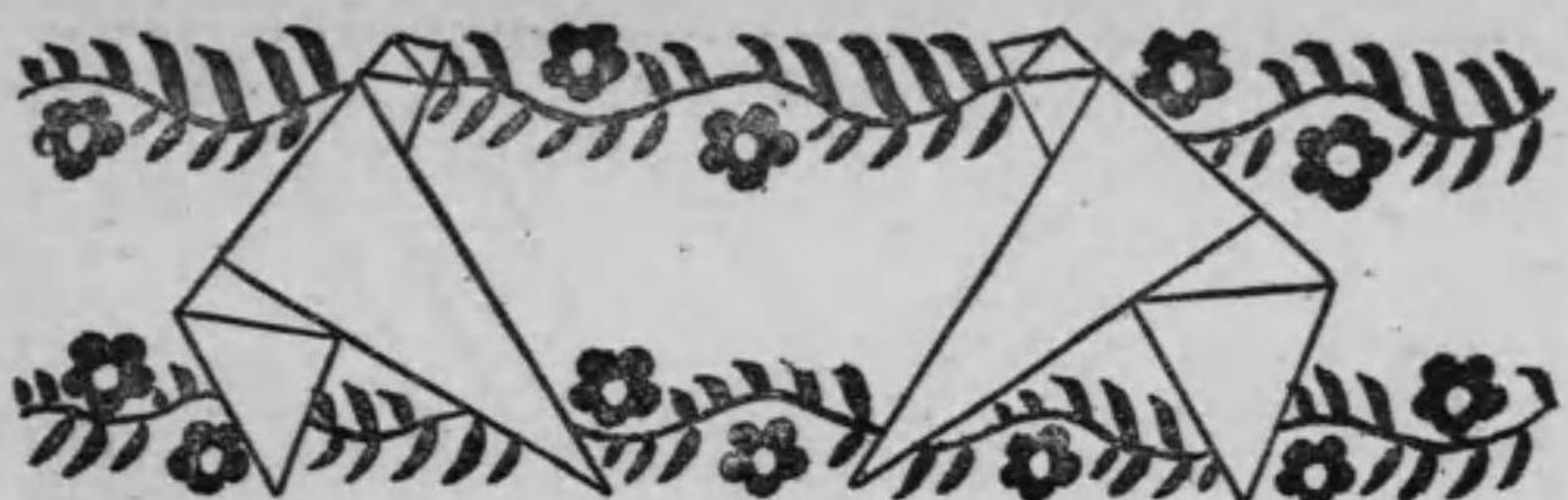


第百八十圖 あづきこつつみ ○形がみひらきたる圖

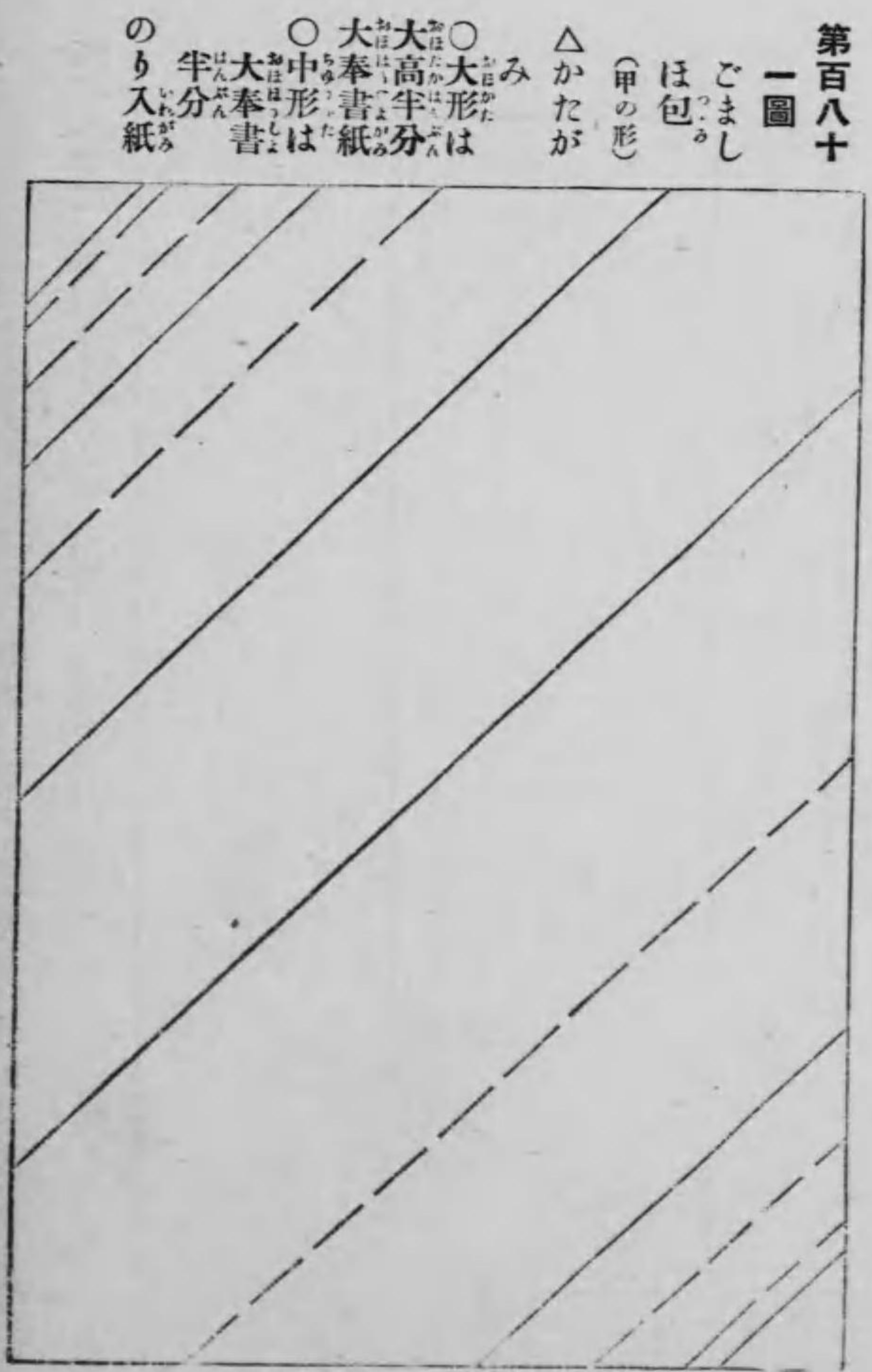


第六卷 粉薬味類折形圖解

一六五



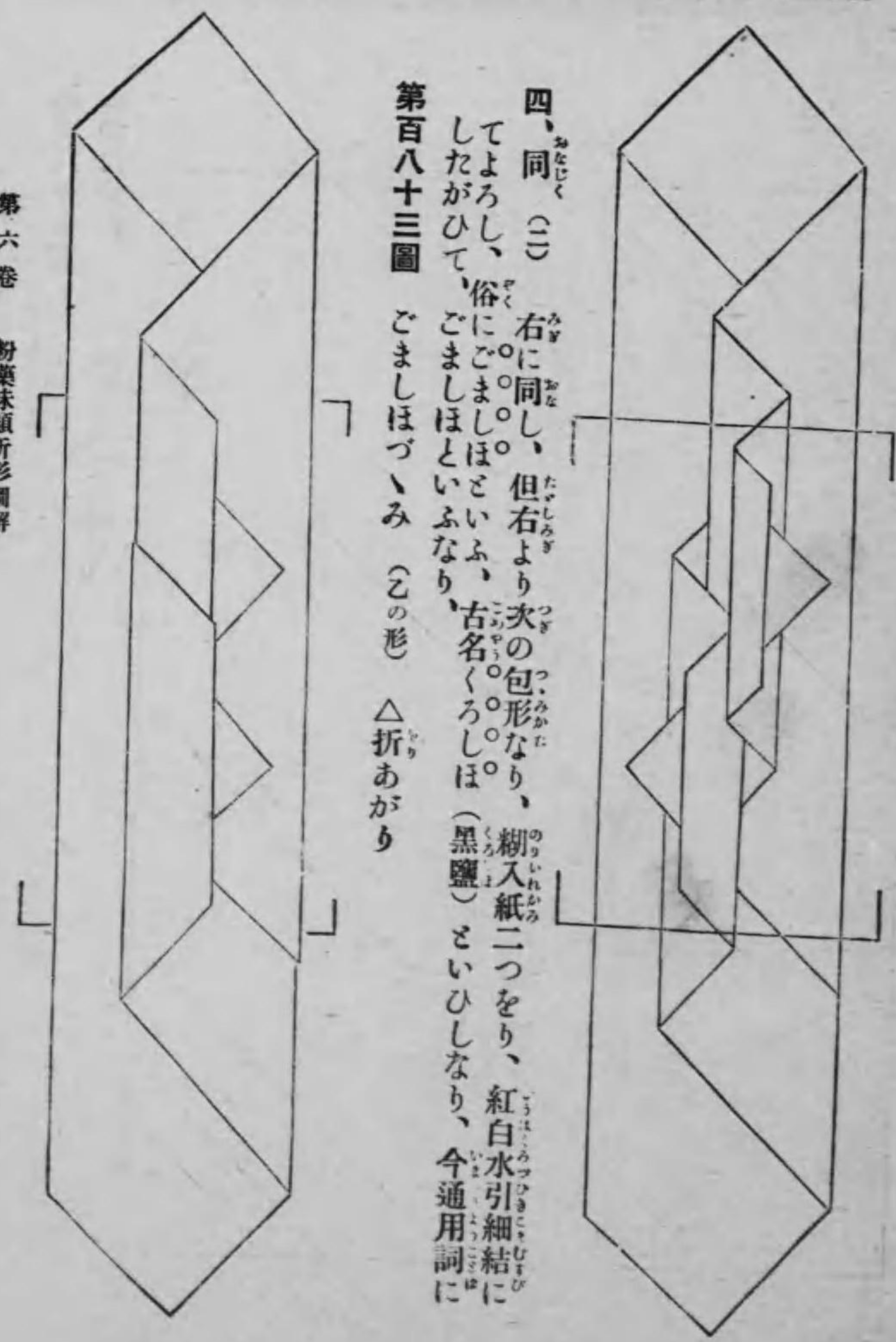
小笠原流折形
 一六六
 三、ごましほ包 (二) 赤飯、強飯に包みてそふる、奉書紙、紅白水引、蛇結つく
 る、下包あるかたよし。



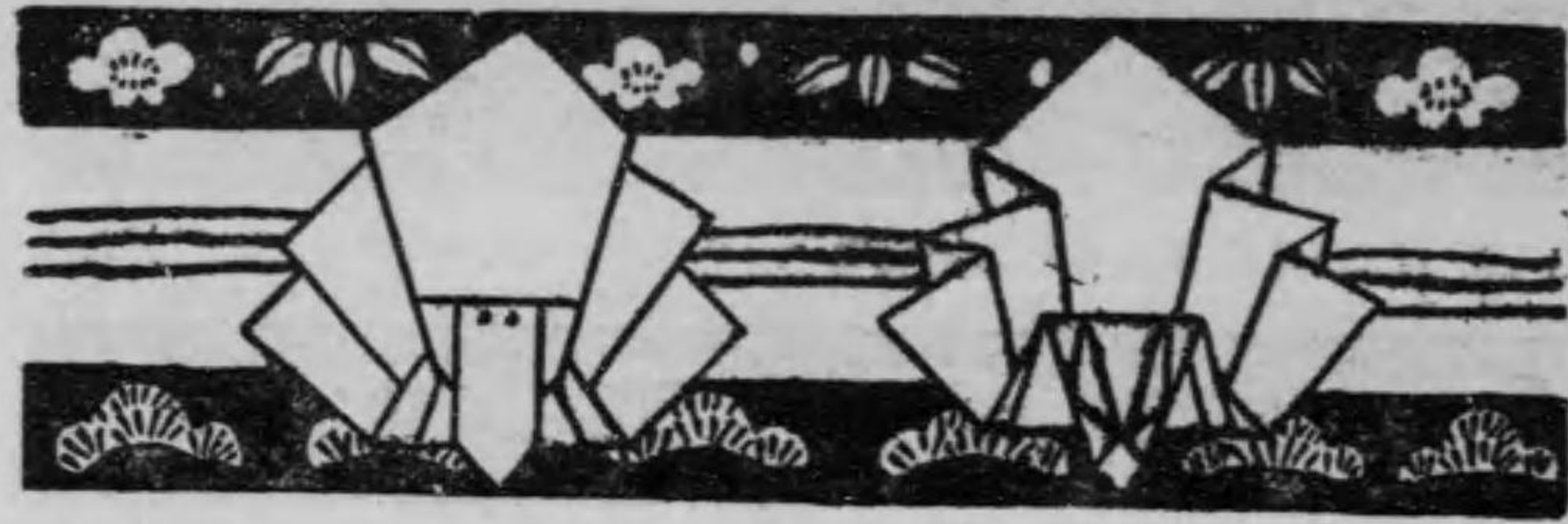
第百八十二圖 ごましほ包 (甲の形) △折あがり



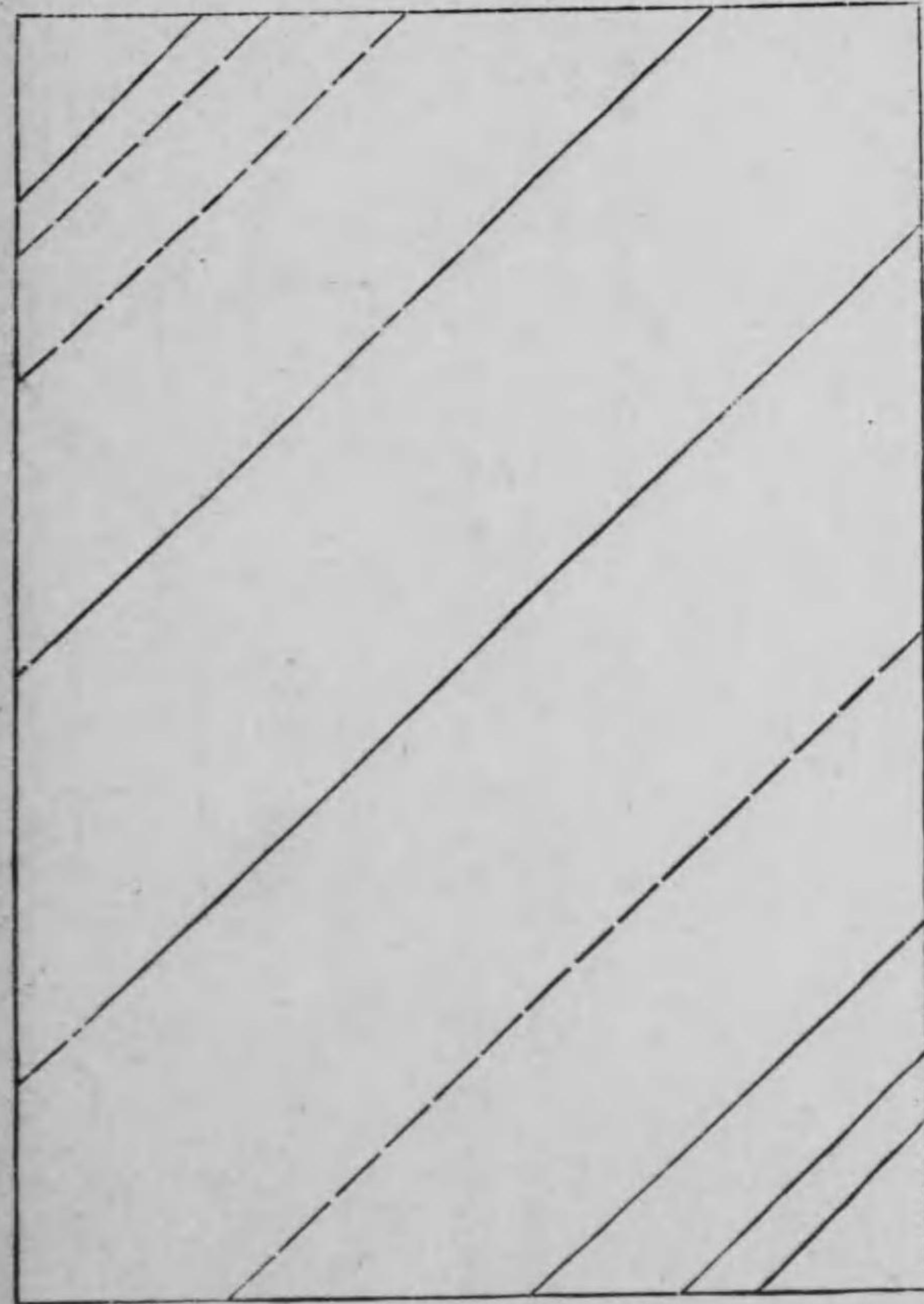
四、同 (三) 右に同じ、但右より次の包形なり、糊入紙二つをり、紅白水引細結に
 てよろし、俗にごましほといふ、古名くろしほ (黒鹽) といひしなり、今通用詞に
 したがひて、ごましほといふなり
 第百八十三圖 ごましほづみ (乙の形) △折あがり



第六卷 粉薬味類折形圖解



小笠原流折形
 第百八十四圖 胡麻鹽包 (乙の形)
 △かたがみ 寸法は甲の形に同じ。



五、砂糖包 これは餅、牡丹餅、萩の餅、其他の菓子に砂糖を加ふべきもの(味にも入れたれども、ことさらに加ふる用あるもの)をおくる時にそへ、又すぐに進むる時にもそふるなり、白紙がさねにてよし、但すぐ進むる時は砂糖を器に盛て出すこともあるなり。

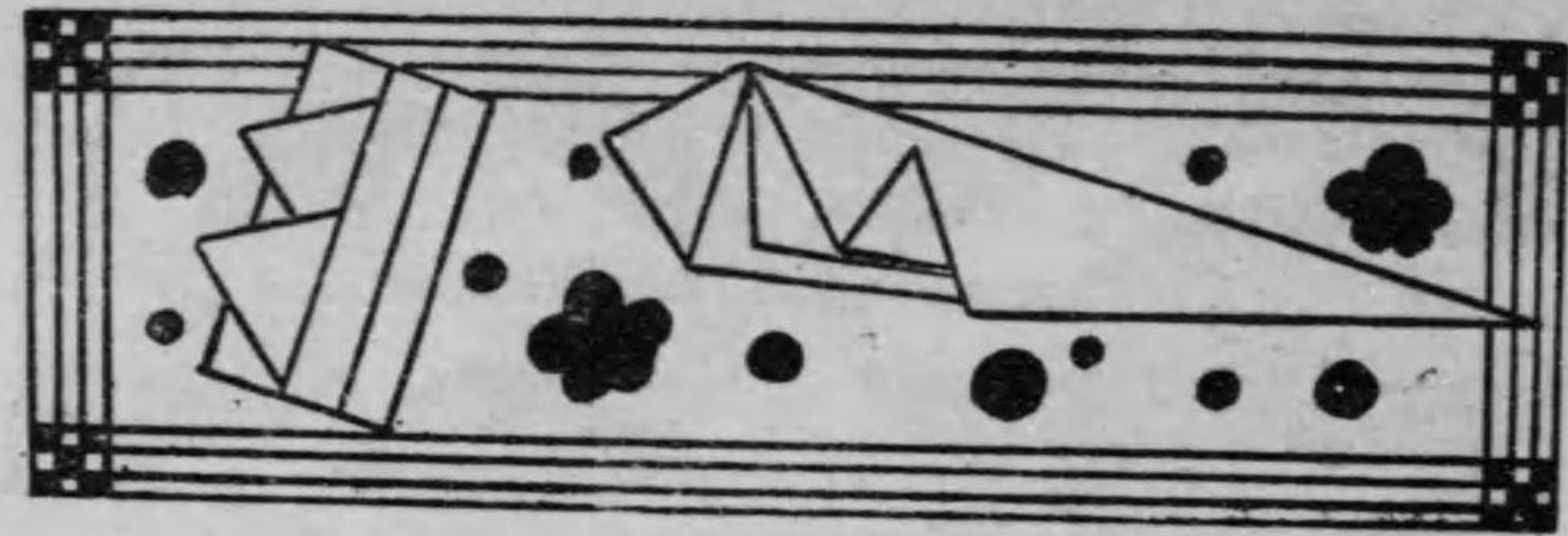
第百八十五圖

砂糖つゝみ

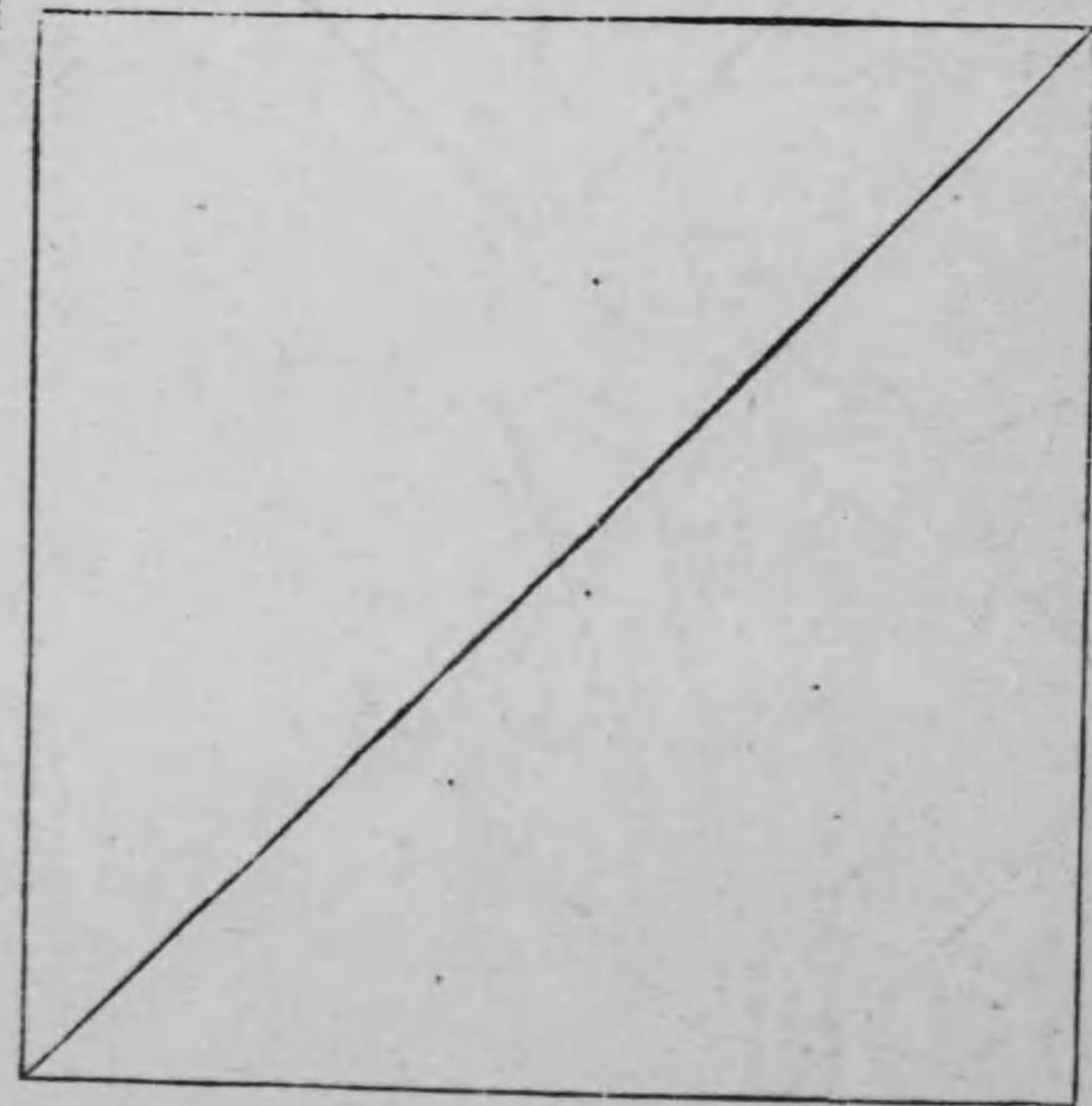
△をりあがり



○寸法は前のごましほづゝみにおなじ、いづれも白紙かさねに仕立るなり。

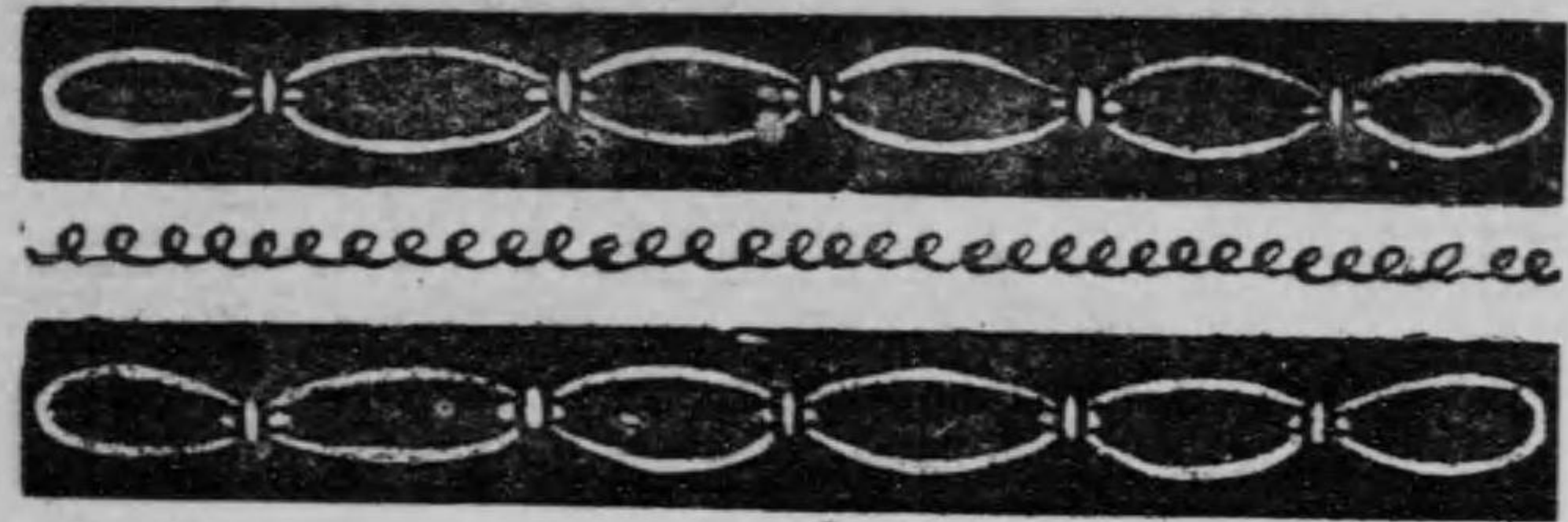


第六卷 粉薬味類折形圖解



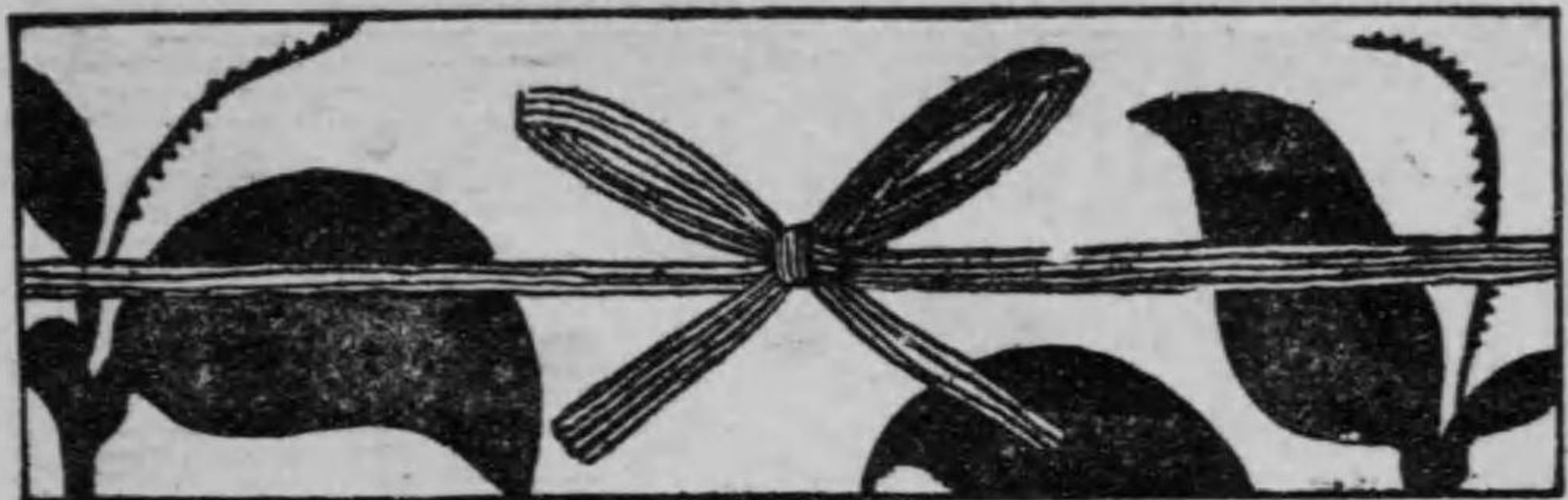
第百八十七圖 粉山椒包
 (一) △折はじめ
 ○まづ方形紙を二つ折にをりて、三角形になし
 ○次に左右の角を中央の角に合せて四角にすること
 次の圖のごとし

六、粉山椒包 干山椒をほうろくにて炒て粉にくだきたるものを包む、薬味につくるなり、白紙にて折る、饅頭素麵などの膳におくなり。

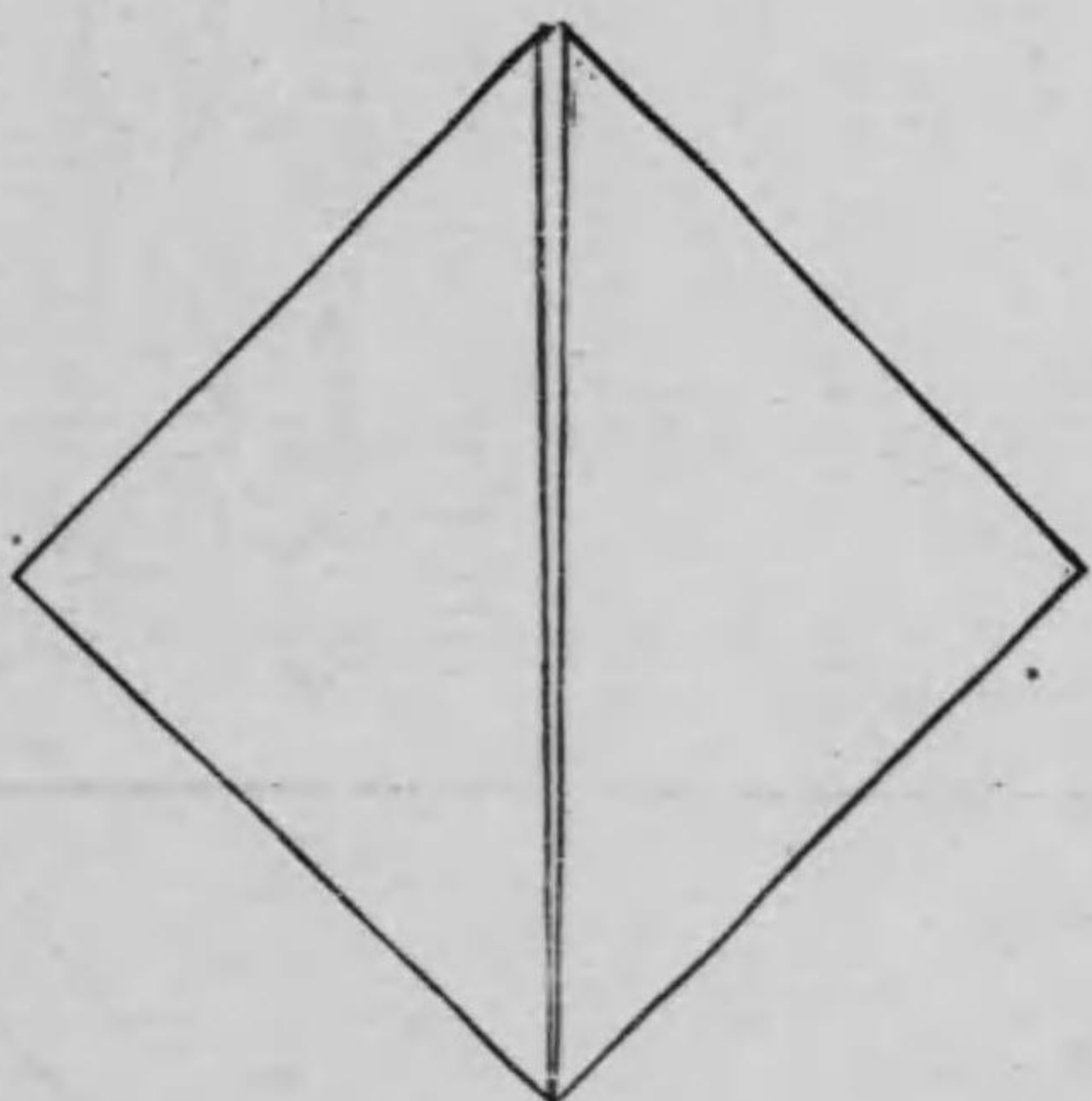


小笠原流折形
 第百八十六圖 砂糖づゝみ △形がみ

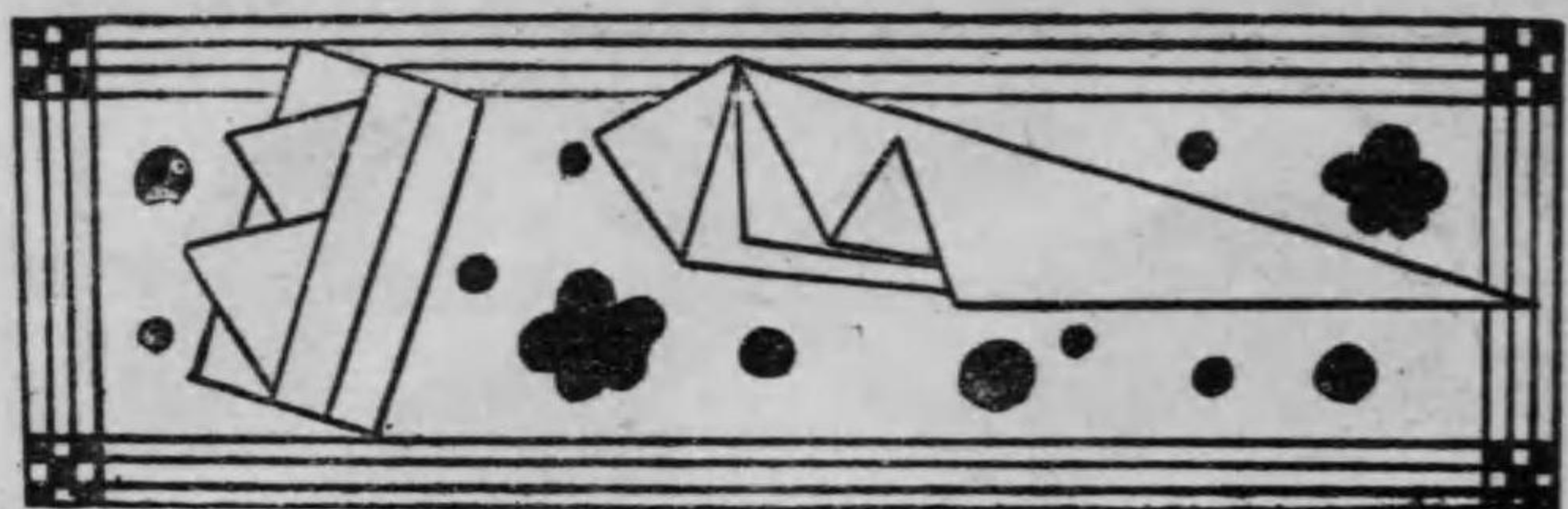
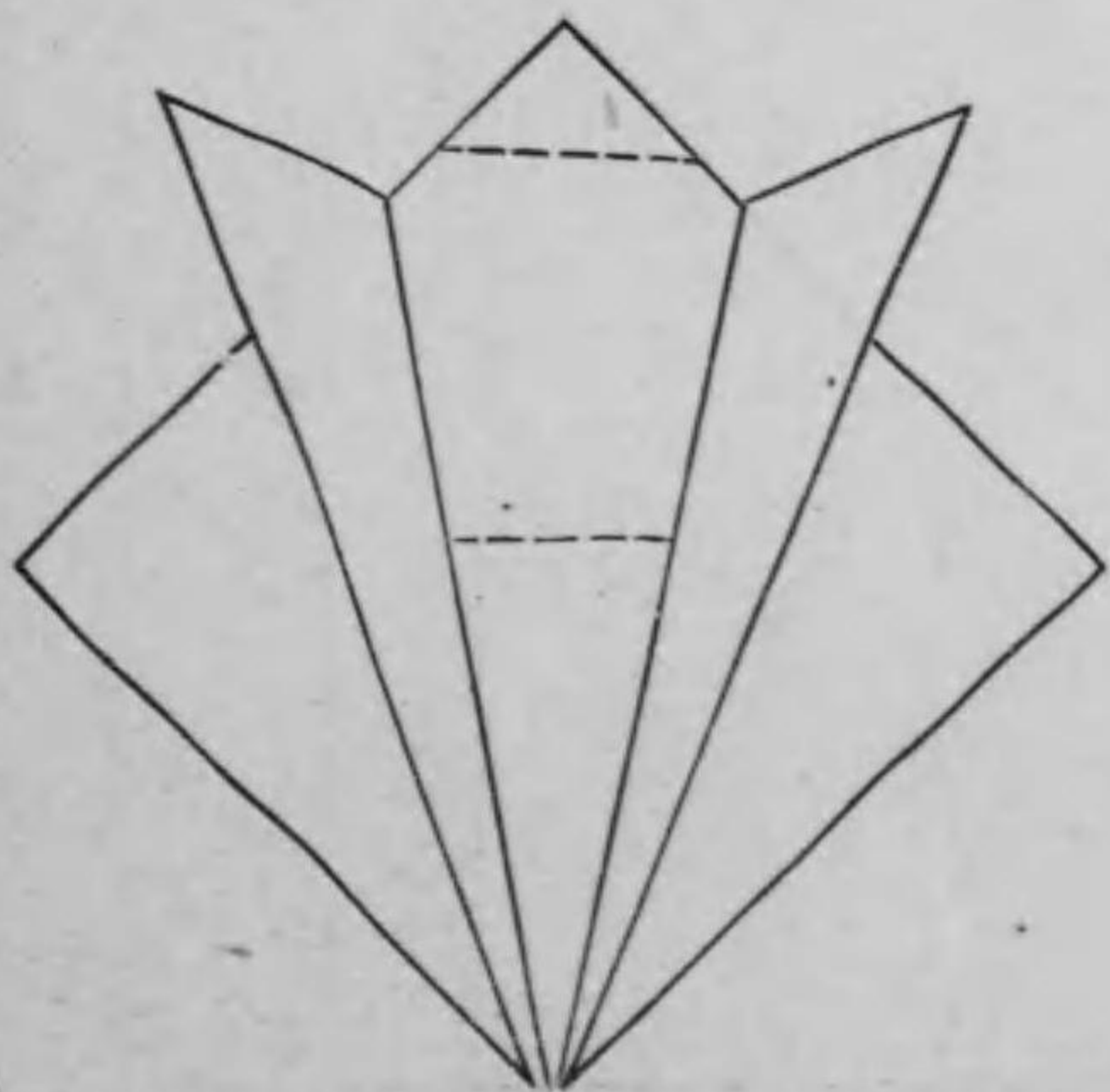




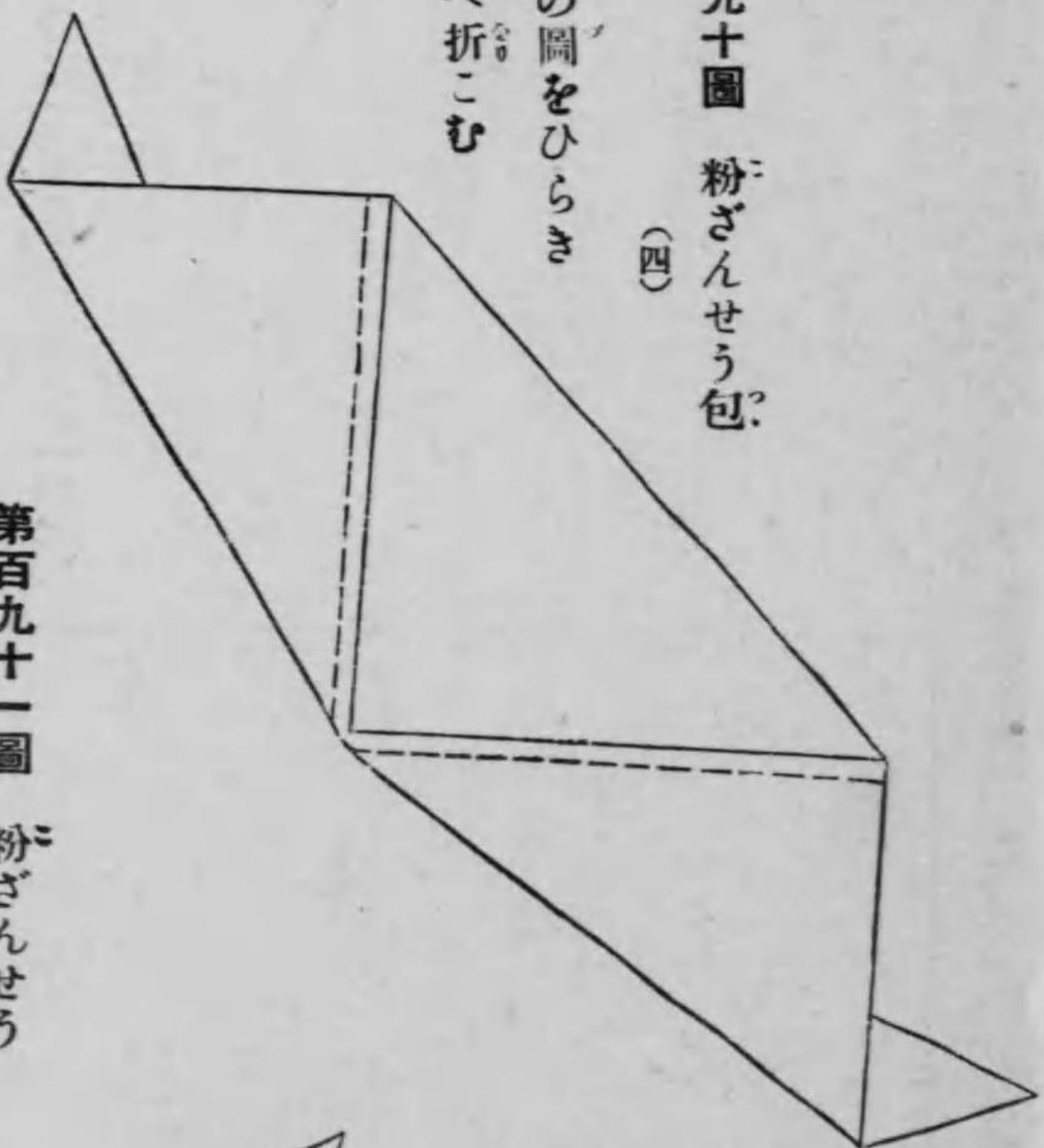
小笠原流折形
 第百八十八圖 粉山椒包 (二) △四角にをる



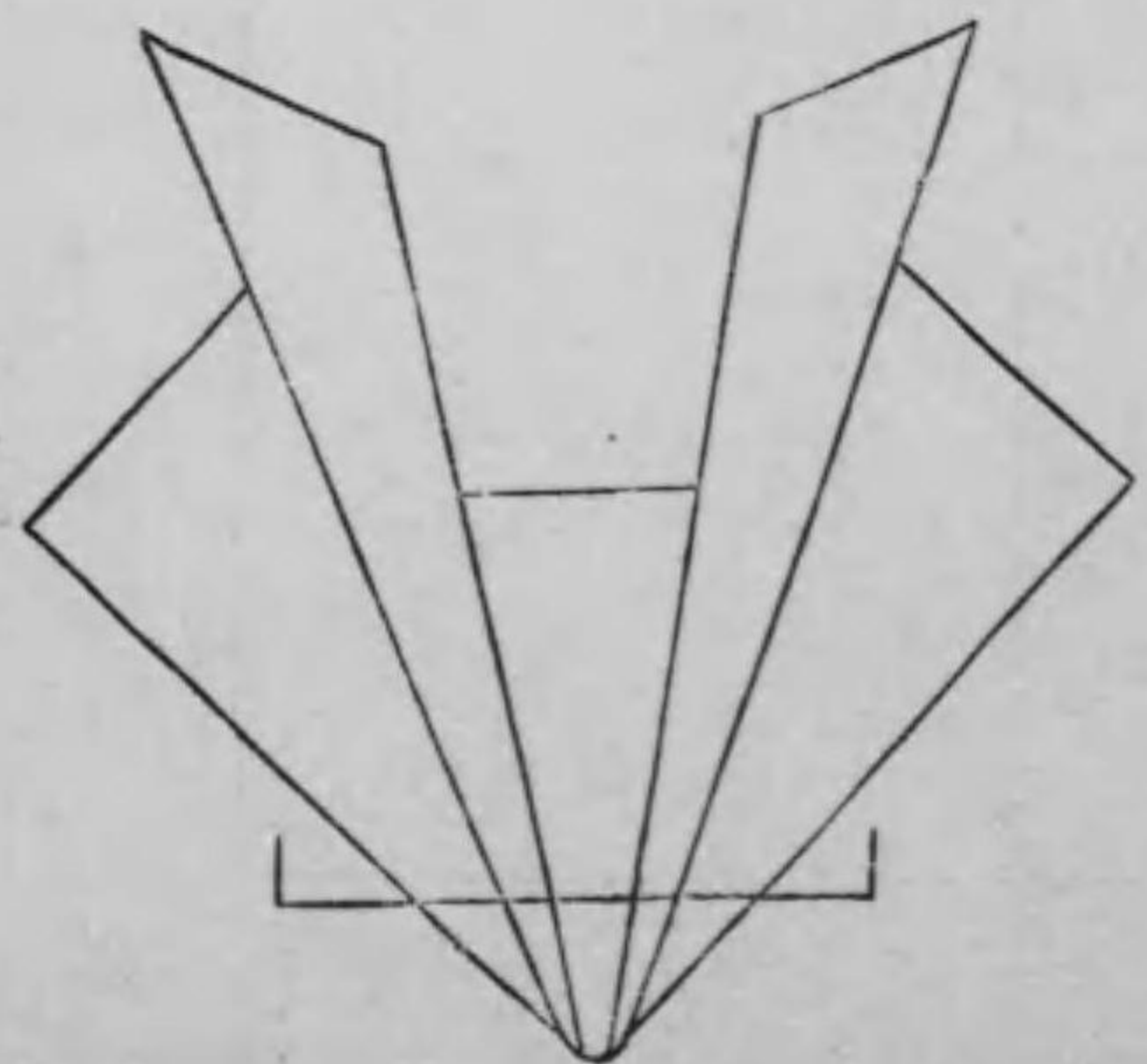
第百八十九圖 粉山椒づゝみ (三)
 ○次に……線の所ををるべし。



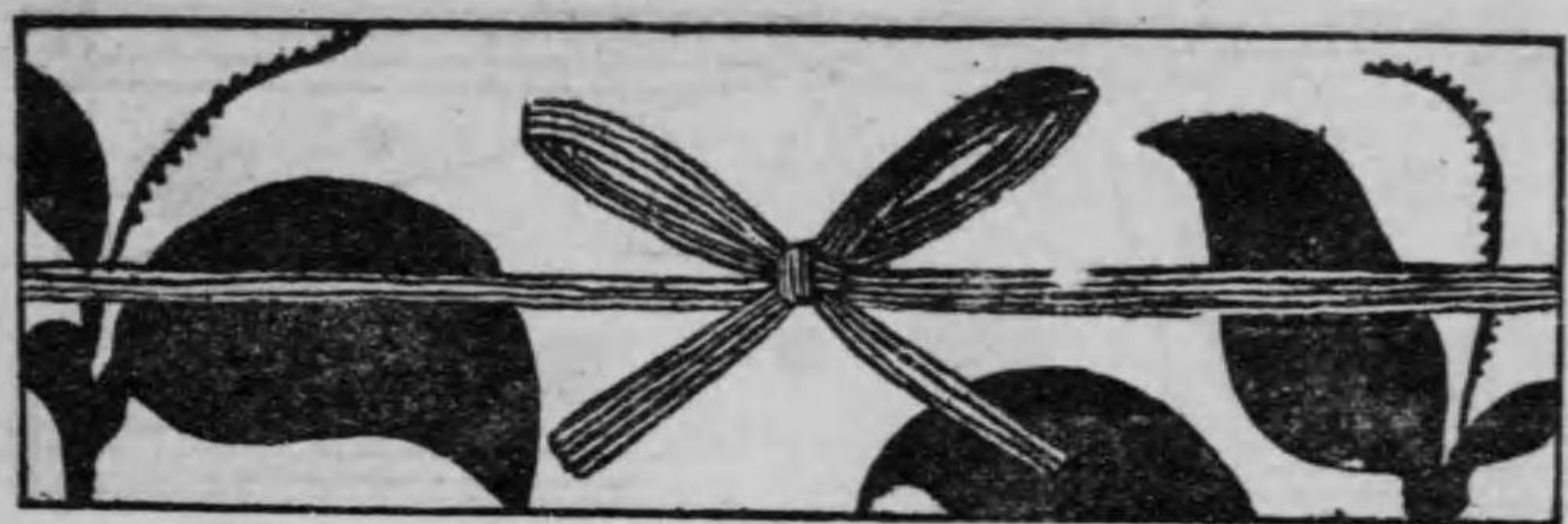
第百九十圖 粉ざんせう包 (四)
 △前の圖をひらき
 内へ折こむ



第百九十一圖 粉ざんせう包 (五)
 △をりあがり



「しるしの所を裏へをる。」



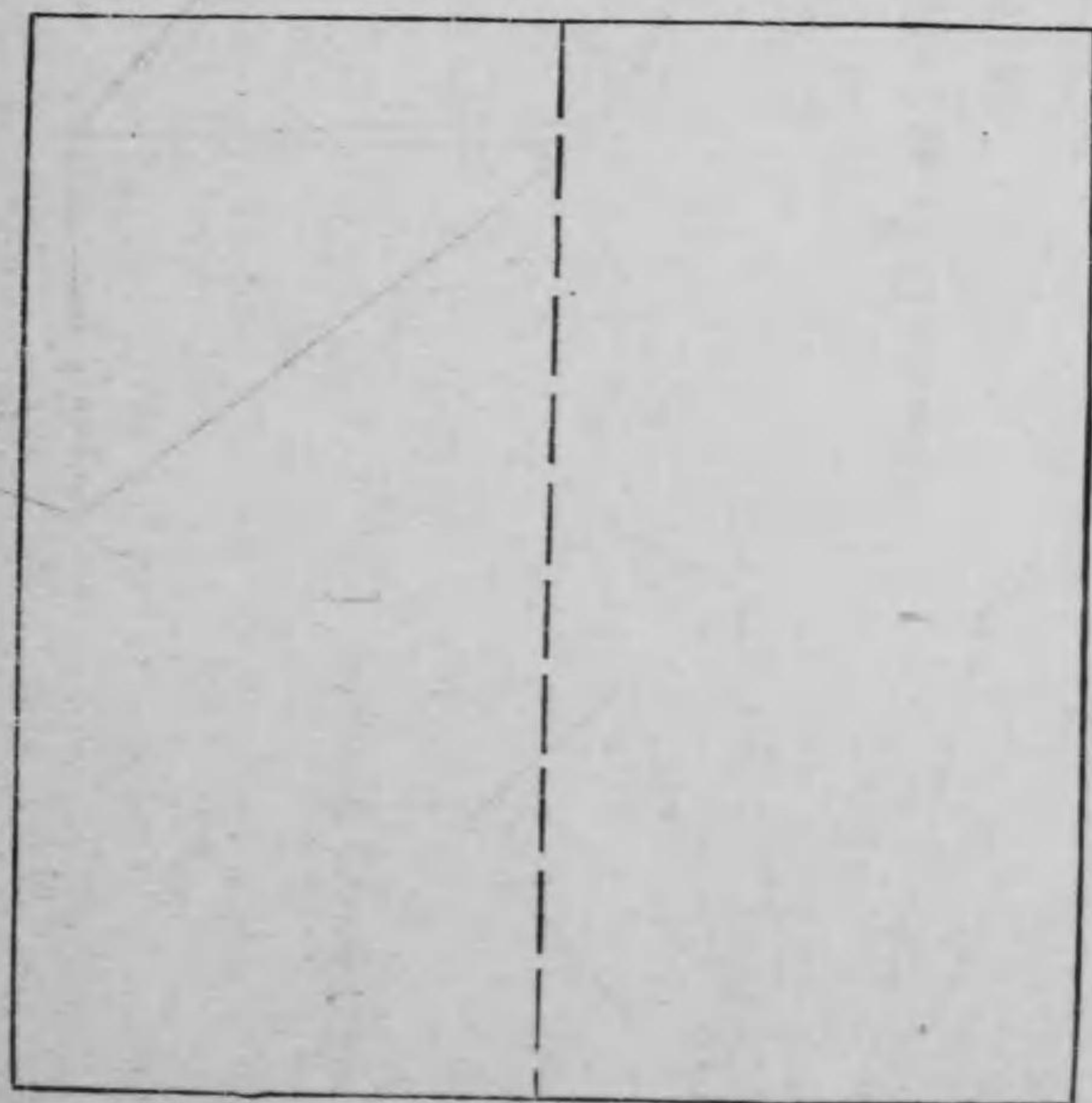
小笠原流折形

七、胡椒の粉包 右に同じ、古傳には書付なし。

第百九十二圖

胡椒の粉包 (二)

○はじめに表の方へ二つに
をる。



一七四



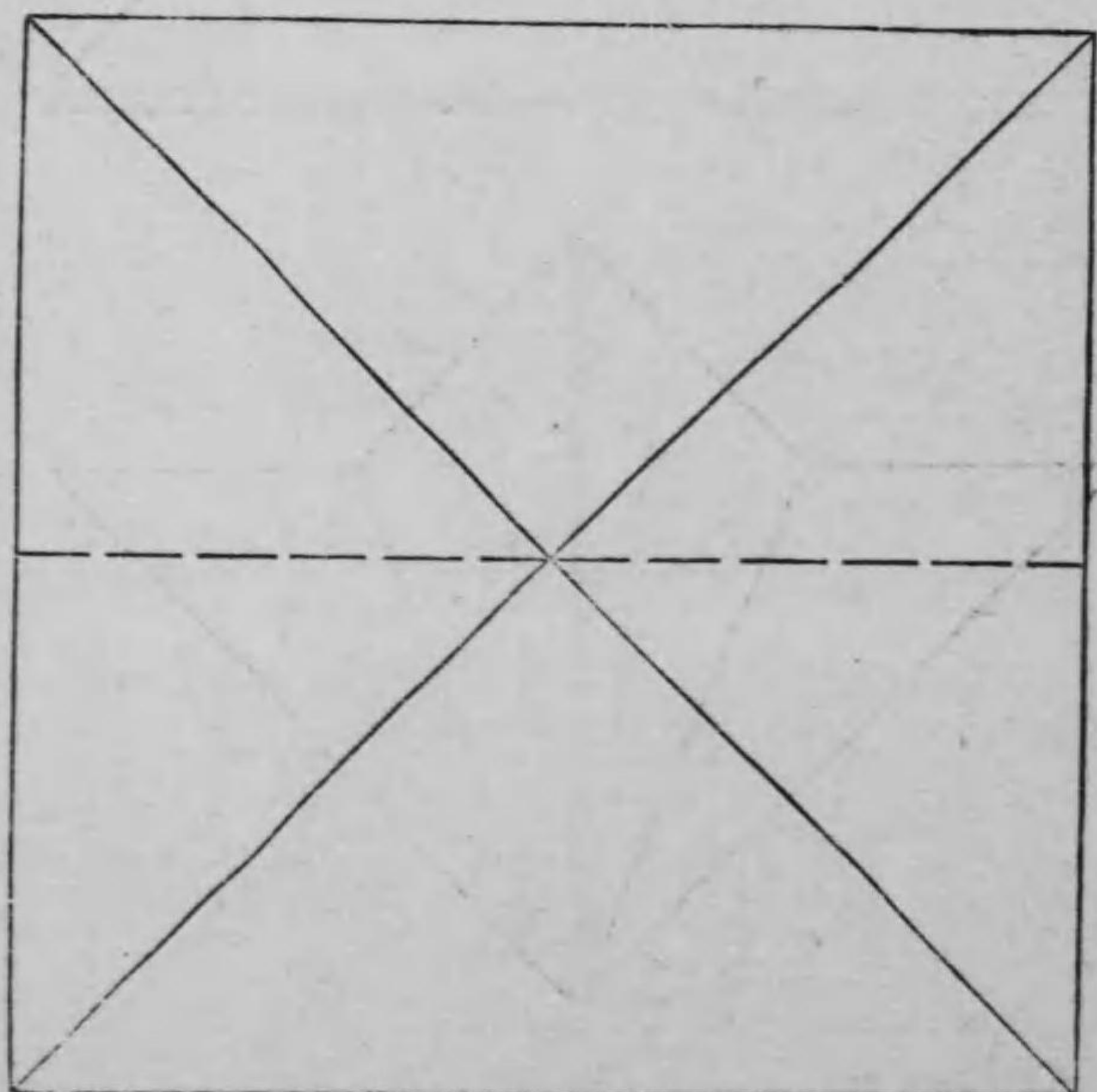
第百九十三圖

こせうの粉包

(三)

表の圖

○前の二つ折に折りたるを
ひらきて、裏の方へ十文
字に角と角とに折目つけ
て、裏の方へ折こむべし



一七五